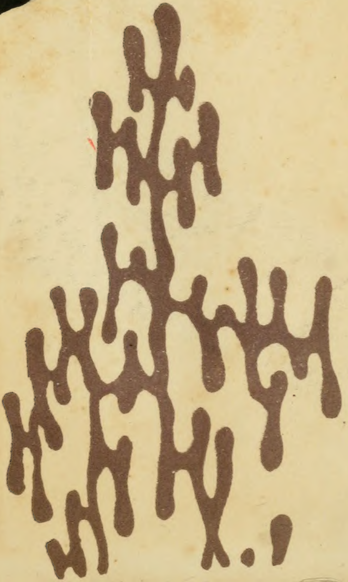
朽木形

鳥



蝶



上际

昭和六年二月一日印刷
昭和六年二月五日發行

枕草子集註
定價金三圓二拾錢

著者　關根正直

發行者　林平次郎
東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地

印刷所　高橋赤次郎
東京市京橋區新湊町五丁目一番地

發行所
東京日本橋區吳服橋
振替東京三二七一番
六合館

（印刷所高橋印刷所）

索引終

な

に

ぬ

つ

て

せ

し

す

さ

い　ゐ

て異なるものなればとなり。其の褒貶によりて、見る人の心術も推量せらる。とにもかくにも人に見られたるが嫉しと也。

この一節古本活本ともに前の文につゞけてかけり。存本は或本にとして註の中に書き入れたり。ものは活字本出でしかばとあり

左中將のまだ伊勢守ときこえし時、里におはしたりしに、端の方なりける疊さし出てしものは、此の草子ものりて出でにけり。まどひて取り入れしかど、やがてもておはして、いと久しくありてぞかへりにし。それよりありきそめたるなめりとぞ。

〔磐〕奥書云、源經房朝臣、西宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢卿の同母弟。伊勢守。長德元年の事也。此草紙長保元二年の事多シ。書加ル歟云々。此本ニ左中將といへるは此經房の事也。此人清少の里亭におはしたるに、さし出したる疊にのりて、此草紙の出たるを、とりいれかくさんとせしかど、終に經房の取ておはして、久しくとゞめてうつし給へるにや。それより此草紙世にひろまりありきたると也。さし出し物はといへる物はは助語也。此草紙にもあり。源氏物語にもある詞也。さて此奥書に、經房の伊勢守なりしは、長德の事なるに、其後の長保の比の事など、此草紙にあるは、後に書くはへたるかとの儀なるべし。后宮かくれさせ給ひてのち、清少おとろへての世に、昔戀しき心をのべて書加られし事ありと見えたり。此ゆゑに此草紙に詳略の異本樣々ありとしるべし。〔[illegible]〕この註の如く前の跋文とは別に、後に書き加へたる也。

枕草子集註下卷終

ありや疑ふべし。猶僻案をいはゞ、元義は姑く措き一轉して、秘藏にすること。人に容易く見せ聞かせぬ意に、枕といふ詞をつかひたるにはあらざるか。もし然らば清女の、此の册子を賜はらば、秘藏して輕々しくは取り扱ひ候はじ。と啓したりと見るべくや。猶委しくは卷首に出たせる題號の説とある條を覧よ。◎あやしきをこじや 〔春〕故事のことにや。〔補〕此の草子に故事をかける所いと少し。強ひて索めば「鳥のそらね」の函谷關の故事、蟻通の神話などにて、取り上げていふ迄もなし。岩崎氏は「あやしきをこごとや、何や」とありしにか。されど猶定め難しといはれたり。直按ずるに此の考然るべし。じはごとの筆誤ならむ。「をこゞと」といふ詞、源氏常夏の卷にあり。孟津抄ざれ言なりと註せり ◎物おぼえぬこと 〔春〕うつゝなき事の多きとなり。〔補〕思ひよらぬ事にも及びたるをいふにや。◎人のめでたしと云々 〔補〕人の喜ぶ事がら、歌物語等もよきを選びて書きたるならば、讀者より案外にわろしとの誹譏をも受くべけれど、是れは元よりさる心構へもなく、そゞろごとを書きたるまでなればとの意。◎心見えなり 〔補〕古本活本とも見つなりとありとて、武藤氏心の程も見えたりと也と釋けり。されど此の「なり」は語法上、終止の助動詞に續く詠歎の詞にて、俗言の「見タワイ」といふ意にならむ。按ずるに、若し見えなりを見えたりの誤りとせば、事もなく聞ゆべし。◎人なみ〳〵云々 〔春〕世の翫び物の中にいれられて、人並なる物といふ程の言《コト》（評）を聞くべきものかはと也。美隆云、耳《ミヽ》をといふ詞輕く見るべし。一つのいひさまなり。狹衣物語、源氏ノ宮中將のわりなきことのたまふを、あるまじき事と覺す所に、「いかでさる耳だに聞かじと用意し給へば、云々」とあるもさることは聞きだにせじと云ふ意なり。◎いとあやしくぞあるや 〔春〕かくおもひくたしたる草紙を、見る人は恥かしなどいへば、あやしく心得がたきと也。やは助字也。◎それもことわり云々 〔補〕好惡は人々により

上はもはや文字も書かれず、との意と解べし、おもしろし。㊀筆もつかひはてゝ〔拾〕いま一二枚残りたる紙なれば、筆をつかひ盡して、さた書き畢(ハテ)たしと也。㊀びんなきいひ過ぐしもつべき所々もあれば〔?〕此の一句古本になしとて、千蔭翁之を削りて「人の為にようなかゝしおきたりと思ふを」と續けたり。但しありても聞えぬ文句にあらず。又抄の本には、此の次に「左中将経房卿の見付けて、しひて取り上げ給へれば」の一句を入れて「心より外に洩り出でにけれ」とあり。㊀なみだせきあへずこそ〔春〕「枕より又しる人もなき戀をなみだせきあへずもらしつる哉」古今。〔?〕美隆云、涙せきあへずの、古歌の詞もていへるは、枕冊子といふ名につきて、世に洩らす、と云ふ意を、彼の歌を思ひかけるなりと餘材抄にいはれたり。㊀史記とふ文〔?〕前漢の司馬遷、三皇五帝より漢武帝までの事を書し也。㊀枕にこそは〔?〕抄に、身をはなたぬとの心を、枕にとは申さるゝなりと見え、村田春海の題詠考には、枕といふ詞は、古人のつかひたる二つあり。源氏物語に、常の長恨歌の心を、朝夕枕言にしたまふといひ、又能因法師が、歌に用ふべきことを書き集めたるものを、歌枕と名づけしも同じ心にて、枕は身に近く常になれ用ふる物なるより、常に口にいひ出づるを枕言といひ、常に歌に用ふべき事なれば、歌枕といへる也。漢字に物を枕籍にすなどいふに同じき也。と云々。藤井高尙の松の落葉に云、物かゝぬ冊子を作りて、常にかたへに置きて、見聞する事思ひ得たる事どもを、忘れぬうちに書きつくる料の冊子なれば、枕の冊子といひならへるにぞありける。里び言(サドゴト)に手控(テビカヘ)といふやうのこと也。枕冊子にこそはといふべきを、略きていへる詞にて、そのかみは枕とのみもいひたりけんかし。(以上兩說摘要) 此の外にも一二の說あれど、今略す。とにかくに藤井氏の說は、此の跋文より暗示を得て推考し、うまく言ひまはせるに過ぎず。手控やうの物を、枕冊子といへること他の書に

亦古本になしと也

心見えなり古本活本には見つなりとありと

けれ。宮の御まへに、内のおとゞの奉り給へりし御草子を、「これ（后宮の給ふ詞也）に何をかゝまし。上（ウヘ）（一條院也）のお前には、史記といふ文（フミ）をなむかゝせ給へる」などのたまはせしに、「枕にこそは（清少の詞也）し侍らめ」と申ししかば、「さばえよ」とて給はせたりしを、あやしきをこじやなにやと、つきせず多かる紙の數をかき盡さんとせしに、いと物おぼえぬ事ぞおほかるや。大かた是れは世の中にをかしき事、人のめでたしなど思ふべき事、猶えり出でて、歌などをも、木草鳥虫をもいひ出だしたらばこそ、思ふほどよりはわろし。心見えなりともそしられめ。只心ひとつに、おのづから思ふ事を、たはぶれに書きつけたれば、物にたちまじり、人なみなみなるべき耳をきくべきものかはと思ひしに、はづかしなども見る人はの給ふなれば、いとあやしくぞあるや。げにそれもことわり、人のにくむをもよしといひ、ほむるをもあしといふ人は、心のほどこそおしはからるれ。たゞ人に見えけんぞねたきや。

◎物くらうなりて云々　[春]是れより此の草子書きし事をいへり。[磐]即ち漢籍なとに謂はゆる跋文なり。くろうなりてな、春註は夕暮になりしさまなるべしといひ、諸本くろうをくらうに改めたり。暮（クレ）とは物の黒く見ゆるよりの詞なれば、黒うとありても聞ゆれど、抄には「料紙皆かきはてゝ、黒みたる義也とあり今この説について試にいはゞ、物とは此の草子をさすにて、ひたもの黒く書き來りて、餘白もなく、此の

通釋も男のとあり

物くろう以下かきはてばや」まで古本になしとて千蔭本削れりびんなく云々所々もあれば」是れ

記には、白紙を三角にして額にあつる、額烏帽子の事かといひ、筆の御玉も同意しつれど、額烏帽子に別ならむと思ふ由あり。言長ければ略しつ。◎かつら 〔補〕入れかもじ。◎やせ〳〵なる男と 〔補〕諸本男と書寝したるとあるを、寛翰本には男のとあり。されど、猶男ととある方やまさらむ。次の文句に、「何の見るかひにてふしたるならむ」とかけるに據れば、何の見る効ありて、さやうの男と共に、書寝したる事ぞの意にて、女を主として書ける文と聞ゆ。唯男の一人晝寝したらむには、「何の見るかひに」とは誰がいふ詞にかあらむ。又下の夜などは云々おしなべてさること以下の文にも渉りて察すべきなり。◎つやめき 〔補〕美隆云泣きつやめくなり。目のあたりをすり赤めたる也。◎ようせずはほゝゆがみも 〔春〕わるくしたらば、顔曲みもせんと也。◎のしひとへ云々 〔補〕異本に「たゞの單」とあり。但しこれより以下末まで古本になしとて、千蔭翁校本には削られたり。春本の解には、紅なれば色黒きがすきても、紛るゝ故なりとあり。◎ほそのとほりたれは 〔補〕抄に、ほそのとは染糸にて、筋を織りつけたる義なるべし。染色にまぎれて、肌の見えぬ心也とあれど猶この前後脱文なるべし。通じ難し。春註は強ひ言なり。

三〇五 （枕にこそは）

物くろうなりて文字もかゝれずなりたり。筆もつかひはてて、是れをかきはてばや。此のさうしは目に見え心におもふ事を、人やは見んとすると思ひて、つれ〴〵なるさとゐのほどにかきあつめたるを、あいなく人の爲に、びんなきいひすぐしもしつべき所々もあれば、ようかくしおきたりとおもふを、なみだせきあへずこそなりに

「のしひとへ」この以下古本になしとて千本削れり

たらんほどの、いけるかひなさよ」色黒き人のすゞしのひとへきたるいと見ぐるしかし。のしひとへもおなじくすきたれど、それはかたはにも見えず。ほぞのとほりたればにやあらん。

◎さぬのせぬひ 〔春〕衣服の背縫。〔三〕のけくびしたる人 〔春〕のけえりに着たる也。◎れいならぬ人のまへに 〔春〕煩ふ人を見まふものゝ、をさなき子をつれゆきし也。病人のほとりにも、幼童は遠慮なくさわがしき事あればなるべし。〔補〕清水氏は「尋常よりすぐれて貴き人のまへわたりに、小兒をつれ出るなるべし」といへれど、猶春註やまさらむ。病を例ならぬといへる事多く證あり。◎しろきあしだ 〔補〕しろきの三字、古本にあるを採る。あしだは屐なり。足下の義。黒塗りを上品とす。白木なるは下賤の物なれば、常に袴はきたる童には見苦しきなるべし。◎それはいまやう 〔補〕それが當世風にて、一般は白足駄はけるにや。◎つぼさうぞく 〔盤〕?折裝束なり前にもありき。上品なる女性の、急ぎ足に走りたるも見よからず。◎法師陰陽師 〔春〕法師ながら陰陽師にて祓などする者なり。道滿法師など共類なるべし。〔三〕紙かうぶり 〔春〕宇治拾遺六、内記上人寂心、播摩の國にて、法師陰陽師の紙冠を着て祓するを、何しに紙冠をきしぞと問はれければ、祓戸の神達は法師を忌給へば、祓の程暫く着て侍るといふに、上人紙冠を取て引破りて、佛弟子と成ながら、祓戸の神達にくみ給ふとても、如來の忌玉ふ事を破りて、しばしも無間地獄の業をはする事よしなし。と制したる事あり。〔自〕?紫式部集に、やよひの一日河原に出てたるに……法師の紙をかうぶりにて、博士だちをるをにくみて、「祓戸(ハラヘト)のかみの飾のみてぐらにうたてもまがふ耳はさみかな」とあり。御幣にまがふといひ、耳はさみとよめるを按するに、白紙を折り耳にはさみて、圓頂を蔽ひ隱す物と見ゆ。貞丈雜

たれど云々、白髪むくつけゞに云々」とあるにて察すべし。但し僧家の使人とあるはいかゞ、誰の家の童どもなるべし　◎むくつけゞ　(春)ムサクルシキ様子となり。◎いとなげ　(春)暇なきさま也。多くが忙しげに働く様子を書きて、其の家の繁昌することをいへる也。◎こゝかしこ云々　(春)験者にても學匠にても方々へ出頭なり。(春)祈禱やら説經の爲やらに、貴家に招請せらるゝ由をいふ。◯法師　(春)此の下「かく」の二字落ちたるか。出家の身も時めき滿足なるは、其親たちも嬉しからむと也。

しろきあしだ」諸本しろきの三字なし千本による

三〇四　（見ぐるしきもの）

見ぐるしきもの。きぬのせぬひかたよせてきたる人、又のけくびしたる人。下すだれきたなげなる上達部の御車。れいならぬ人のまへに子をゐていきたる。袴きたるわらはのしろきあしだはきたる。それはいまやうのもの也。つぼさうぞくしたる者のいそぎてあゆみたる。法師陰陽師（オンミヤウジ）の紙かうぶりしてはらへしたる。又色黒うにくげなる女のかつらしたる。ひげがちにやせ〳〵なる男とひるねしたる。何の見るかひにふしたるにかあらん。よるなどはかたちも見えず、又おしなべてさる事となりにたれば、われはにくげなりとて、おきゐるべきにもあらずかし。つとめてとくおき往ぬるめやすし。夏ひるねしておきたる。いとよき人こそ今すこしをかしけれ。えせがたちはつやめきねはれて、ようせずはほゝゆがみもしつべし。かたみに見かはし

法師も以下千本削れり

◎ひとへなど清げに 〔春〕靈にわづらふ女のさま也。◎さるの時 〔春〕申の刻。今の午後四時ごろ。◎ことわりいはせ 〔春〕物のけに、降伏して立去るべき由をいはする也。◎几帳のうちにとこそ 〔春〕帳内と思ひしに、かやうに、人々の中を淺ましく思ふと也。◎かみをふりかけて 〔春〕おもてをはぢて、ひたひ髮にておほひかくしたる也。◎時のほどにもなり 〔春〕例時のおこなひすべきほどになりしと也。〔補〕時（ジ）の字、音讀にすべし ◎まかり申 〔春〕いとまごひ也。◎はうちはうたう 〔補〕岩崎氏云、はうちはほそちの誤か。熟瓜ならむ谷川氏云、はふたうは小豆を以て、餛飩を煮るもの也。又按ばうぞうの誤にあらぬか。橘經亮云、ばうぞうとは今の雜煮餅のこと也。烹雜とかけり。又按、尺素往來に砂糖饅頭餅餡餛飩など見えたり。これか。

三〇三（清げなる童）

きよげなるわらはの髮ながき、またおほきなるが、髮はおひたれど、おもはずにかみうるはしき、又しらがみむくつけゞに多かるなど、いとなげにて、こゝかしこにやんごとなきおぼえあるこそ」。法師もあらまほしきわざなめれ。おやなどいかにうれしからんとこそおしはかられ。

◎清げなる童の 〔春〕僧家の使人小童子のさま也 ◎おほきなるが 〔春〕大童子にや 〔春〕中童などいふもあり。十八九歳より廿餘才までをいへるか。大童といふになれば廿五六歳より四十五十になるまで、元服もなし得ず、赤白髮なるを背後に垂れ下げて、童子の同じ姿にて雜役に使はるゝ者なり。次の同にも「髮は生ひ

ほうちはうたうまゐらせん千本にはこの一句なし

ぬれば、しばしと止めて、かおすこしして、「いかにさはやかに成り給へりや」とてうちゑみたるも恥かしげ也。（侍の詞）「しばしさぶらふべきを、時（ジ）のほどにもなり侍りぬべければ」とまかり申しゝて出づるを、（人々の詞也）「しばしほうちはうたうまゐらせん」などとゞむるを、いみじういそげば、所につけたる上﨟とおぼしき人、簾のもとにゐざり出でて「いとうれしくたちよらせ給へりつるしるしに、いとたへがたく思ひ給へられつるを、只いまおこたるやうに侍れば、返す〳〵よろこびきこえさする。あすも御いとまのひまには物せさせ給へ」などいひつぐ。（侍の言也）「いとしうねき御ものゝけに侍るめるを、たゆませ給はざらんなんよく侍るべき。よろしく物せさせ給ふなるをなん悦び申し侍る」と、詞ずくなにて出づるは、いとたふとく、佛のあらはれたまへるとこそおぼゆれ。

◎北おもて　〔標〕厠にもあり湯などの設けある所。◎ばんを引き下げ　〔新〕盤なり。おもゆの膳を引き下げながら也。〔標〕此の註誤れり。盤は皿（サラ）なり。膳、臺の類にはあらず。按ずるに元（モト）わん（椀）と書きたりしを、はんと寫し誤りたるより、更に盤（バン）と心得たるにはあらずや。和名抄に盌。烏管反、字作椀……末利（マリ）、俗云毛比（モヒ）、小盂也とあり。又江次第抄に、湯漬を註して、入レ湯於二茶椀瓶子一へレ之由と見ゆれば、湯を飲むにも椀を用ひたるなるべし。さて又湯を重湯（オモユ）、（淡き粥の如きもの）と解きたるもいかゞあらむ、猶白湯（サユ）なるべし。

此陀羅尼を誦じて、其千遍に滿たば惡事悉消滅せんとあり。◎うつすべき人 【圃】患者の物の氣を移すべき、所謂寄りましのこと。◎にほやかなる獨鈷 【圃】とこ。上に註せり。多くは赤銅にて造るにより、黑紫の光あるをいふ。◎けそうの女房 【圃】顯證。上に註せり。手輕く人前にも出づる下ざまの女達なり。◎ふるひ出て 【春】程なく靈のよりましにうつりあらはれしさまなり。◎行ふまゝにしたがひ給へる護法も 【春】彼の僧の加持しおこなふにしたがひて、佛驗を見せ給へる心也。護法は加持の驗をいふ也。前にも有り。イニおこなふにしたがひて、調ぜらるゝ佛の御心ばへを見るにも、いとたふとし云々。【圃】護法のこと上に細註せり。◎せうと 【春】よりましの兄なり。此の下春本は「の祐したる細冠者云々の數字あれど、つきなき文句なれば、今は古本に從ひて改めつ。◎例の心ならば云々 【春】よりましの童女現心ならば、人々あつまりし中にては、此ありさまはぢまどはんと也。◎みづからはくるしからぬ事と云々 【春】加持によりましの調ぜられ苦しむは、靈の苦むにて、其よりましの童女の、みづからの上ならずとは知りながらと也。◎らうたく 【圃】勞痛しの約語。靈つきたる童女を、痛々しく思ふ也。◎きぬひきつくろひ 【春】よりましの衣を也。

かゝるほどに、よろしとて御湯など北おもてにとりつぐほどをも、わかき人々は心もとなく、ばんを引きさげながらいそいでぞくるや。ひとへなどきよげに、うす色のもなど、なえかゝりてはあらず、いときよげなり。さるの時にぞいみじうことわりいはせなどしてゆるしつ「几帳（よりましの詞）のうちにとこそ思ひつれ。あさましうもいでにけるかな。いかなる事有りつらん」とはづかしがりて、かみをふりかけてすべり入り

せうとの下春本の數字を削りて古本により「いとこなど」の五字に改む

いとにくげならぬが、すみ染の衣うす物のけさなど、いとあざやかにうちさうぞきて、かうぞめの扇うちつかひ、千手陀羅尼よみゐたり。ものゝけにいたうなやめばにや、うつすべき人とて、おほきやかなるわらはの髪などうるはしき、すゞしのひとへあざやかなるはかま、ながくきなしてゐざり出でて、よこさまにたてたる三尺の几帳のまへにゐたれば、こなたざまにひねりむきて、いとほそうにほやかなる獨鈷をとらせて、すゞおしもみうちをがみて、よむだらにもいとたふとし。けそうの女房あまたそひゐて、つとまもらへたり。久しくもあらでふるひ出でぬれば、もとの心うしなひて、行ふまゝに從ひ給へる護法もげに尊し。せうといとこなども皆たふとがりてあつまりたるも、例の心ならばいかにはづかしとまどはん。みづからは苦しからぬ事としりながら、いみじうわびなきたるさまの、心ぐるしげなるを、（車に乗ふ人の事也）つき人のしり人などはらうたくおもひて、几帳のもと近くゐて、きぬひきつくろひなどす。

◎わらふだ　圓座。蒲を圓く編みて造る薄き敷物なれば、藁蓋の義。既に上にも註せり。◎せんじゆだらに　前に註す　こゝは靈氣の新によむと見ゆ。則千手陀羅尼經の中に、若家内に大惡病にあひ、百怪競ひ起り、鬼神邪魔其家を耗亂するにも、千眼大悲の像の前に其壇を設けて、至心に觀世音菩薩を念じ

他の方便品、安樂行品、普門品と共に、法華の四要品とて一經の肝要とすれば、專ら此品を暗誦したるならむ ㊂かき所云々 ㊎小舍人をやりし所近きにや、早くかへりて其氣色を見する也。㊂罪やうらむ ㊫この一句千蔭翁の古本によりて補へるに從ふ。尊き佛經を誦しさして、艶書に心をうつすをいふ也。

松春本に前とあるはまつの草假名をへと見誤りたるならむ

三〇一（淸げなるわかき人の）

きよげなるわかき人の、なほしもうへのきぬもかりぎぬもいとよくて、きぬがちに袖ぐちあつく見えたるが、馬にのりていくまゝに、ともなるをのこ、たて文を目をそらにてとりたるこそをかしけれ。

㊀なほしもうへのきぬかりきぬも ㊎直衣にても袍にても狩衣にてもの心也。かされて着るにはあらず。㊣此註の如く、何の服を着るにしても、それが淸げなるての意 ㊁きぬがちに ㊎內衣を多く重ね着たるをいふ。㊂たて文 ㊎本式の書狀を立文と名づく。上に委しく註せり ㊍馬上の人より渡さるゝを、下男の恭く馬上の主君を見守りて、受け取るさまなり。

三〇二（松の木立）

松の木だち高う庭ひろき家の、東南の格子どもあげわたしたれば、涼しげにすきて見ゆるに、もやに四尺の几帳立てて、前にわらふだをおきて、四十餘ばかりの僧の、

六の卷を春本に「ろく」とのみあるは落字ならん千本によりて補ふ

文をぞみる。おもしろかりける所々は、うちずんしたるもいとをかし。手あらひて直衣ばかりうちきて、六の卷をぞそらによむ。まことにいとたふときほどに、近き所なるべし、ありつる使うちけしきばめば、ふとよみさして、返事に心入るゝこそ罪やうらんとをかしけれ。

◎すゞり取りよせ (春)後朝の文かくさま也。◎ことなしび (補)事無風(ブリ)。事もなき風にすること。等閑(ナホザリ)にするをいふ。此所は下の「あらず」までかゝる副詞なり。◎まひろげ姿 (補)打ちとけたる姿なり。上(郭公尋ねに)の段にも註せり。◎しろきひとへの云々 (春)心に物をおもひつゝ、花などうちまもるさま也。(補)濱臣翁は女のもとより衣をかりて來たりしを、返すならむといへれど、愚按するに、「凋む」とある詞について考ふれば、猶花の方にやと思はる。庭なる梅、あるは櫻の花の白く一重なるが、凋みたるを見つめつゝの意にて、花のことをふと書きおとしたるか。◎ふづくゑ云々 (春)文机に凭りて、書物など讀む也。◎なほしばかりうちきて (春)直衣には下にきぬをかさぬる也。きぬをかさねざるを直衣ばかりといふにや。一説指貫を略して、直衣ばかりきたると也。源氏帚木にて初の説を用ふ。(補)前の説よろし。後の一説、指貫を略すといふはいと後世のことなり。白衣(ビャクエ)姿とて近古までも、直衣を着ず小袖に指貫ばかり穿きたるはあれど、直衣着る程の人の、袴を略する事あるべからず。◎六の卷 (補)前に經の所々口すさびにとかけるは、法華經のことにて、二十八品(品は章といふ程のこと)を八軸に分け收めたれば、其の第六卷目をいふ也。此の卷には如來壽量品、分別功德品、隨喜功德品、法師功德品の四品を收む。それが中に壽量品は、

◎例のうしよりも　〔春〕例の牛よりも、下ざまに牛をいたくいひくたし惡めるさま也。〔補〕例の牛より下樣に
いふとあるは聞えず。千蔭イ本に「しう」と有りといへるに從へば、例の主にて、この牛飼の常に仕ふる
主人にや、今日は借人（カリテ）の乘りたれば、物のいひやう詞つきも、下ざまに罵りつゝ、牛を走らするなるべし。
◎とみの事なりと云々　〔春〕急用にも、又と車かる事いはんとは思はずと也。◎なりとほのあそん　〔春〕氏
姓不レ知。但高階業遠にや。峯緒より七代の孫。敏忠の子也。◎我が從者してうたせ　〔春〕業遠の從者にいひ
つけて、彼の女車の牛を打追はせて引あげさせたると也。心よき人なるべし。

三〇〇（獨ずみする人の）

すき〴〵しくて獨ずみする人の、よるはいづらにありつらん。曉にかへりて、まだねぶたげなるけしきなれど、すゞりとりよせて墨こまやかにおしすりて、ことなしびに筆にまかせてなどはあらず、心とゞめてかく。まひろげすがたをかしう見ゆ。白ききぬどもの上に山吹くれなゐなどをぞきたる。しろきひとへのいたくしぼみたるをうちまもりつゝかきはてゝ、前なる人にもとらせず。わざとだちて小舍人わらはのつきづきしきを、身ちかくよびよせて、うちさゝめきて、いぬるのちも久しくながめて、經などのさるべき所々など、しのびやかに口すさびにしゐたり。おくのかたに御てうづかゆなどしてそゝのかせば、あゆみ入りて、ふづくゑにおしかゝりて

例のうし千蔭本しうう(主)とあり可考 とうやれ春本にはいかで」とあれと千本によれる

いはん序詞なり。ありつゝもとは、常永らへてなどいふ意 ㊁さしのぞきたるかしこより □古本一本にかくあれど、かしこはかしら(頭)の誤字。下のさかりてた春註か文字濁みてよみ、遂の字と記したれど、これもさがり(下り)と濁りて讀むべく、髮の下り端のことならむ。但し此の下に脫字あるにや。下文につかず。㊂月の光 □此の下に文字落ちたるらむ。文意は彼の霧りたる月の、俄に晴れて、餘りにあらはなるに驚かされて、遂に立ち出で來たりと、清女に語りし由ならむ。

二九九 (車かるをり)

女房のまゐりまかでするには、人の車をかるをりもあるに、心よういひてかしたるに、うしかひわらはの例のうしよりも、しもざまにうちいひて、いたうはしりうつも、あなうたてとおぼゆかし。をのこどもなどの物むづかしげなるけしきにて「とうやれ夜ふけぬさきにおひてかへりなん」といふは、なほ主の心おしはかられて、とみの事なりと、又いひふれんともおぼえず。なりとほのあそんの車のみや、夜なかあかつきわかず人の乗るに、いさゝかさる事なかりけり。よくこそをしへならはせたりしか。道にあひたりける女車の、ふかき所におとしいれて、えひきあげで、牛飼のはらだちければ、わが従者してうたせさへしければ、ましで心のまゝにいましめおきたるにこそ。

其のころ春本心とある非なり

きりて｜きりて春本てりてとあり皆千本によりて改む

◎物がたり　〔春〕たゞの雑談なり。◎さかしらに　〔磐〕心得がほに應答すること。◎いひまぎらはす人　〔春〕人の字衍文か。〔磐〕又の字の誤寫ならむ。

二九八（ある所に）

ある所に。何の君とかいひける人のもとに、公達にはあらねど、其の頃いたくすきたる者にいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりにいきて、有明の月のいみじうきりておもしろきに、なごりおもひ出でられんと、ことのはをつくしていへるに、今はいぬらんと、遠く見おくるほどもいとえんなり。出づるやうに見せてたちかへり、立蔀のあひだにかげのかたにそひ立ちて、猶ゆきやらぬさまもいひしらせんと思ふに、「有明の月のありつゝも」と、しのびやかにうちいひてさしのぞきたる、かしこより五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月のひかり、もよほされて、おどろかさるゝこゝちしければ、やをらたちいでにけりとこそかたりしか。

◎公達にはあらねど　〔春〕公達とは攝家などの御子息をいふ也。さやうの歴々の御子ならねどと也。◎そのころいたくすきたる　〔磐〕その當時にありて、甚く好事風流の者との評ありし人。其の心とある本は非なり。◎きりて　〔春〕霧のかゝりたる也。諸本照りてとあれど千蔭校本による。◎有明の月のありつゝも　〔春〕拾遺戀三「長月の有明の月の有りつゝも君しきまさば我戀めやも」〔磐〕こゝの有明の月のには、下の詞ありつゝもと

汁物とりてみなのみて、かはらけはついすゑつゝ、つぎにあはせを皆くひつれば、おものは不用なめりと見るほどに、やがてこそくひてしか。二三人ゐたりし者みなさせしかば、たくみのさるなめりと思ふなり。あなもたいなのことどもや。

◎たくみ [illegible]工匠。◎寢殿對だちたる [illegible]當時搢紳家の屋造りは、大かた一樣にて、中央に寢殿、その東西に建てる屋を、對ノ舍と稱したり。委しくは拙著宮殿圖解を見られよ。◎かはらけ [illegible]汁を盛りたる土器。今は大かた土製素燒の盃をいへど、盃には限らず。古代粗造の土器を言しか云へり。カハラケは瓦笥なり。瓦をカハラといふは、其の音より名づくとの說もあれど、狩谷氏は梵語雜名に見ゆといへば、印度語ならむ ◎あはせ [illegible]世に菜といふ物なり。[illegible]飯に取り合せて食ふ故の名。色々とり交せて煮たるを云ふ由の說にいかゞ。◎もたいな [illegible]物體無なり。[illegible]此の註よろし。古語物々しき體ならぬをいふ。今俗に體裁のよからぬことなり。宇治拾遺源平盛衰記等、皆此の意につかひたり。通釋あいなの事やとあるは、古本に泥み過ぎずや。千蔭本は改訂せず。本のまゝにてよく聞えたればならむ。物體の字。後世の俗語と思ひ捨つべからず。

二九七 (物がたりをも)

物がたりをもせよ。むかし物語もせよ。さかしらにいらへうちして、こと人どものいひまぎらす人いとにくし。

れば、清女のいへる所は、とのゐ姿も、束帶同樣なり。となるべし。

二九五　（しなこそ）

品こそ。男も女もあらまほしき事なめれ。家の君にてあるにも、誰れかはよしあしを定むる。それだに物見知りたる使ひ人ゆきて、おのづからいふべかめり。ましてまじらひする人はいとこよなし。ねこいつちにおりたるやうにて。

◎品こそ　(補)品格。(一)家のきみにてあるにも　(評)一家の主にても、其品々の衣服の吟味ありたきを、誰かはさまで吟味し定るぞと也　(評)この註は、本文を前の束帶にといふ文のつゞきと心得たるより、衣服の吟味と解し、品といふ詞をも、衣服の品質のことと思へるなめれど、恐らくは非ならむ。又抄の註に、家の君を「人の妻のこと」としたるはさもやあらむ。◎定むる　(一)評定。主人の品致を批評すること。(一)まじらひする人　(評)公の交らひ也。(評)これは男主人をいふなり　(へ)猶の主におりたる　(一)、上にも下にも文句の落ちたるなるべし。鈴木氏前よりの詞につゞけて、品格の下れるをいふ由註したるは、附會に近し。

二九六　（たくみの物くふ）

たくみの物くふこそいとあやしけれ。寢殿をたてて、東の對だちたる屋を造るとて、たくみどもゐなみて物くふを、東おもてに出でて見れば、まづもてくるや、おそきと

後通釋には「そくたいは」の五字を出だされたり

のまゝに、はじめよりおくまでいといひにくし。はづかしき人の物おこせたるかへりごと、おとなになりたる子の、思はずなる事などをきくに、まへにてはいといひにくし。

◎ついでのまゝに 〔春〕談話の順序通りには、言ひ難しと也。◎おとなになりたる子の云々 〔春〕成長の子の、よからぬ好事(スキゴト)するを聞きて也。◎まへにては 〔春〕直面にては、親の意見をもいひにくしと也。

二九四 (束帶は)

そくたいは。四位五位は冬。六位は夏。とのゐ姿なども。

◎そくたいはの五字、諸本になし。武藤氏考異にもなきを、後光嚴院宸翰本の中ほどの所、狩衣はさしぬきはの次に、

　そくたいは四位五位は冬。六位に夏。白重(シラガサネ)などもよし。すべて男はうちぎは何色も着たれ。きぬは白きはよし。紅のもきたれど、なほ白きはまさる。

とありて、次に女のうはぎは云々、ひとへは云々、綾の紋は云々とつゞけたり。◎四位五位は冬六位は夏 〔春〕四位は黒、五位は緋の袍、冬に相應なると也。六位は綠衫、夏に似合しきと也。◎とのゐすがたなども 〔春〕禁中に直宿する程の衣服も、男女につけて其品々こそ、吟味あらまほしけれと也。〔言〕この註は聊か違へり。とのゐ姿とは、衣冠(イクワン)とて、束帶の下襲(シタガサネ)を略し、袴も指貫(サシヌキ)に換ふれども、上衣は猶束帶と同じ袍な

白きゝぬきたる法師春本になし千蔭本による

などのおそろしきに、くれはしをのぼりこうじて、いつしか佛の御かほをとくをがみ奉らんと思ふに、白きゝぬ着たる法師、みの虫などのやうなるものども集りて、たちゐぬかつきたるは、押したふしつべきこゝちこそすれ。いとやんごとなき人の局などばかりをこそ、まへはらひをもすれ。よろしき人のは制しわづらひぬかし。たのもし人の師をよびていはすれば、「そこどもすこしされ」などいふほどこそあれ。あゆみ出でぬればおなじやうになりぬ。

これも前のつゞきにて、別の段ならじ。◎初瀬（春）上にしば〳〵出だたり。◎うしろさしまぜ（春）背中を我れに交へたるなり。◎いみじき心をおこし（春）折角信心を發して、遠方より來たるにと也　◎くれはし（春）呉橋。春註樽橋とあるは非なり。上の初瀬詣の段にときおけり。◎蓑蟲（春）賤しく見苦しき風體したるものゝ譬にいふ。上にもありき　◎前はらひ（春）局の前に立つ下衆を拂ふこと。◎よろしき（春）眞によろしきをいふにあらず。大ていのことにいふ。春註に云、淸少ほどの人は、役の下衆どもの前にありても制し難しと也。◎たのもし人の師（春）宿坊を萬事たのみなれば、かくいふ也。◎あゆみ出でぬれば　宿坊の歩みのきては、又元のやうにないがしろなると也。

二九三　（いひにくきもの）

いひにくきもの。人のせうそこの長き。よき人の仰せ事などのおほかるを。ついで

なほ諸本まづとあり千本による

腹あしくいふ也。◎おとなになりても云々 〔解〕其子成人の後も、心惡しき乳母の後見がらに、親子の中もなか〳〵心つきなくなる心也。◎わびしく心づきなしと思ふ人 〔解〕女にいひよるを、わびしく迷惑に思ふ男の意。◎心あし 〔解〕諸本かくあれど、元は假名にて「こゝちあし」とありしを、「こゝろ」と誤り、更に心と書きしならむ。心あしにては聞えぬをや。下の詞に常より近くよりふし、物食はせ云々とあるも、假病の床近くに寄り伏したる樣子ならずや。◎其の事となく 〔解〕女は何とも思はぬにと也。◎つゐしよう 〔解〕追從。今俗世辭をいふこと。

宮づかへ人のもとにきなどする男の、そこにて物くふこそいとわろけれ。くはする人もいとにくし。思はん人の「なほ」など心ざしありていはんを、いみたるやうに口をふたぎて、かほをもてのくべきにもあらねば、くひをるにこそあらめ。いみじう醉ひなどして、わりなく夜ふけてとまりたりとも、さらにゆづけだにくはせじ「心もなかりけり」とて、こずはさてありなん。里などにて北おもてよりし出だしてはいかゞせん。それだに猶ぞある。

この一節、別段としたる本もあれど、猶心つきなきもの〻續きなるべし。◎北おもて 〔解〕召仕下女などの居所。上（人にあなづらるゝものゝ段）に精しく考證しおけり。

初瀨にまうでてつぼねにゐたりしに、あやしきげすどもの、うしろさしませつゝ居なみたるけしきこそないがしろなれ。いみじき心をおこしてまうでたるに、川の音

心づきなきもの。物へもゆき寺へもまうづる日の雨。つかふ人の「我れをばおぼさず。何がしこそたゞ今の人」などいふをほのきゝたる。人よりは猶すこしにくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すゞろなる物うらみし、我れかしこげなる。心あしきめのとのやしなひたる子。さるはそれがつみにもあらねど、かゝる人にしもとおぼゆるゆゑにやあらん。「あまたあるが中に、此の君をば思ひおとし給ひてや、にくまれ給ふよ」などあらゝかにいふ。ちごは思ひもしらぬにやあらん。もとめてなきまどふ、心づきなきなめり。おとなになりても思ひうしろみ、もてさわぐほどに、なか〳〵なる事こそおほかめれ。わびしく心づきなしと思ふ人の、はしたなくいへど、そひつきてねんごろがる。いさゝか心あし（のがれ詞に女のいふ也）などいへば、つねよりも近く（をとこのさま也）ふして、物くはせいとほしがり、其の事となく思ひたるに、まつはれつゐしようし、とりもちてまどふ。

◎心つきなし　補心に落着かざる意、俗の「氣に入らぬ」に同じ。◎つかふ者の云々　春仕ふ者の陰言（カゲゴト）に、我れを主君の思ひ給はで、其人こそ出頭なれなど、いふを聞きつけし心なり。◎おし量りごとし　春女を二心ありなど、男の推量り恨むる也。◎我れかしこげ　春女にあらがはせぬやうに、賢（カシコ）げに物いふ也。◎あまたあるが中に　春乳母の詞なり。數多御子ある中に、此の御子を親たちの思ひおとしてにくみ給ふと、

とぶらひ以下旁線ひきたる文句千本によりて補ふ

几帳ひきよせて云々のもの一行これも千本古本によりて補へるなとれり

がはるきつゝ、とぶらひ、との方に若やかなる君達、あまた來て、「いといとほしきわざかな。例もかくやなやみ給ふ」など事なしびにいふ人もあり。心かけたる人は、まことにいみじとおもひなげき、人しれぬ中などは、まして人目思ひてよるにも、近くもえよらず、おもひなげきたるこそをかしけれ。

いとうるはしくながき髪を引きゆひて、物つくとておきあがりたるけしきも、いと心ぐるしくらうたげなり。うへにもきこしめして、御讀經の僧の聲よき給はせたれば、几帳ひきよせてすゑたり。程もなきせまさなれば、とぶらひ人どもあまたきて、經ききなどするもかくれなきに、めをくばりつゝよみゐたるこそ、つみやうらんとおぼゆれ。

◎しをん 〔岡〕紫苑。紫の薄きなり。◎事なしび 〔春〕例の事なげに問ふ也。〔岡〕事なき風に、手輕く尋ぬるをいふ。◎ものつく 〔岡〕靈のつくと也。ものゝけの事上に精說したれば略す。◎御讀經の僧 〔春〕祈禱の僧也。〔岡〕當時疾病に罹れば、醫師は呼ばで、先づ修驗僧を請して祈禱せしむる俗なりき。物の氣に限りたるにはあらず。◎經きゝなどするも云々 〔岡〕讀經の僧の座近くにて聽聞するを、僧の女房たちに目を配りつゝ、讀經に精進せざるは、罪を得べしと也。

二九二（心づきなきもの）

とにかくに文句の落ちたるならむ、強ひていはゞ風采よき公達の、彈正ノ弼(ヌケ)とてきら／＼しき役人、また皇族にて近衞中將なる人々の、流行服(ハヤリフク)などを著たるは、見苦しくもくちなしとの意と見るべくや。春註に、宮ノ中將を源賴定なりとして、父祖の官歷まで尋ねて詳記したれど、さまでに及ばじ。

二九一 （やまひは）

やまひは。むねのけ。もの〻け。あしのけ。たゞそこはかとなくて物くはぬ。

十八九ばかりの人のかみいとうるはしくて、たけばかりすそふさやかなるが、いとよくこえていみじう色しろう、かほあいぎやうづきよしと見ゆるが、齒をいみじくやみまどひて、ひたひがみもしとゝになきぬらし、髮のみだれかゝるもしらず、おもてあかくなりたるをおさへてゐたるこそをかしけれ。

○もの〻け　或本此の四字を削りたる本あり。鬼の氣(モノケ)、物の怪(ケ)など書きて、眞の疾病ならねばと、理窟はさもあるべけれど、此の時代にては、疾病と同じやうに取り扱ひたる上に、次の文句の氣にわづらふ女房のさまより、物のけつくとて、起き上るさまを書きつゞけたるに想ひ合すれば、「物のけ」とあるも捨てがたくや。

八月ばかりに、しろきひとへ、なよらかなるはかまよきほどにて、しをんのきぬのいとあてやかなるを引きかけて、むねをいみじうやめば、友だちの女房などかはる

し下本によりて皆補正したり

ひかれてきにくし。わたなどあつきはむねなどもきれていと見ぐるし。れいのやうなるは打ちませてきるべきものにあらず。猶むかしよりしおきける有樣こそよけれ。さうのゆだけなるはよし。それも猶女房のさうぞくにてはところせかめり。男のあまた重ぬるもかたつかたおもくぞあらんかし。きよらなるさうぞくのおり物、うすものなど、いまはみなさこそあめれ。いまやうに又さまよき人のきたまはん、いとびんなき物ぞかし。かたちよき君達の彈正ノ弼にておはするいと見ぐるし。宮の中將などのくちをしかりしかな。

◎片つ方のゆだけ　〔春〕中古此時代に、褻の衣服などに片方の行長（ユキタケ）、ゆたかに裁ち著る事ありしにや。〔岡〕此の考案いとよし。平常の服には、折々變れる物好（モノズキ）したる服裝、流行したるが如し。彼の三所がはりとか稱して、端袖や襴などに、異なる帛地（キレヂ）を縫ひつゞりて、風流の事としたるなども思ひ合すべし。◎れいのやうなるは云々　〔補〕從來の通例の服は、此のゆだけの服には、重ねきるべきやうなしと也。◎さうのゆだけ　〔補〕左右とも、同じく行長の袖をいふ。古本に「もろゆだけ」とあるにても察すべし。◎片つ方重くぞ　〔補〕春本旁註本とも「かたばかま」とありて。岡西氏の註に、行基歌「猛福太（マフクダ）が修行に出でしかた袴われぞ縫ひしか其片袴。」裝束には上下に、二重きる故に、片袴と云。岩崎氏云、舊本今昔物語上ノ卷、行基菩薩の事かける條に、云々、袴の片々をいふ事明けし。直按、片袴の訛さることなれど、此所は猶、古本イ本に「片つかた」とあるに從ふべし。さらでは文意通ぜざるなり。◎かたちよき云々　〔岡〕以下一本古本別段とせり。

此の段流布本は落字多

ⓒかたゝみ　㊂繧繝草　㊂葵とゝもに、葵の形を紋に作りしなり　ⓒあられぢ　㊂霰地。今俗にいふ碁盤じま也。

この次、千蔭翁校本には、イ本によるとして、

うすやう色紙に、白き、紫、赤き、かりやすぞめ、青きもよし。

すゞり箱は、かさねてのまき繪に、雲鳥のもん。

筆は、冬毛。つかふも見目もよし。兎の毛。

墨は、まろなる。

貝は、うつせ貝、蛤、いみじうちひさき梅の花貝、

櫛の箱は、ばんゑいとよし。㊂盤繪。丸形模様をいふ。

鏡は、八寸五ふん。まきゑはから草。

火桶は、赤色、あを色、白きにつくりゑもよし。㊂作り繪。本彩色の繪のこと。

たゝみは、かうらいはし。又黄なるぢのはし。

びらうげには、のどかにやりたる。綱代に、走らせたる。

以上の文あれど、後人の書き添へたるものならむ。

二九〇　（夏薄物のゆだけ）

夏うすものの片つかたのゆだけ、きたる人こそみにくけれ、あまたかさねきたれば

摺る也。仍て大海と稱するにて、女房以下の料なり。貴人は用ひず。㊀しびら　〔春〕褶の字をよむ。春註に源氏夕顔の文を引いて、裳の一樣と見ゆといへり。直按、夕顔の卷又浮舟の卷にも、里亭にて召仕ふ女の料と見ゆれば、大海よりも下品にて、繪模樣など摺りつけず。白地のまゝの短き裳ならむ。猶上古の褶や名義等にも、別勘あれど長ければ略す。

二八七（かざみは）

汗衫は。春はつゝじ。夏は青朽葉。朽葉。

㊀かざみ　〔春〕童女の裝束也。前註　㊀つゝじ　〔[illegible]〕女官飾抄に、表蘇芳裏青とあり。㊀青朽葉　〔通〕經青、緯黃糸にて織る　染色は藍の黑み深きをいふ。㊀朽葉　〔[illegible]〕經紅緯黃。

二八八（おりものは）

織物は。紫。白き。萌黃に柏おりたる。紅梅もよけれど猶みざめこよなし。

㊀織物　〔[illegible]〕廣義にいへば、綾も木綿も皆織物なれど、中古裝束にいふ所は、緯糸（スキ）もて、紋を織り出したる物をいひ、地紋を織り上げて後、何色にも染めたる絹を綾といふ也。

二八九（あやのもんは）

綾の紋は。葵。かたばみ。あられぢ。

旁線をひきたる一句古本一本になし本とて千本は削れり

あられぢ春本になし千本によりて補ふ

清少歌
あふさかはむねのみつねにはしりゐのみつくる人やあらんとおもへば

◎むねのいみじうはしり　〔春〕なとこの胸さわぎし也。古今「人にあはんつきのなきには思ひおきてむねはしり火に心やけをり」◎あふさかはむねのみ　〔春〕逢坂を逢にそへて、走井の水を見付るといひ懸たり。逢時は見付る人やあらんと常に胸さわくと也。

二八五（からぎぬは）

からぎぬは。赤色。えびぞめ。もえぎ。櫻。紅梅。すべて薄色の類。

◎からきぬ　〔春〕唐衣也。女官裝束の時、上に着るもの也。◎あかいろ　〔春〕胡曹抄に云、赤色、櫨と茜にて染る也。又赤色、たて紫、ぬき赤とあるは織物なるべし。◎うすいろ　〔春〕薄紫。薄紅等なり。又たて紫、ぬき白きをもうす色といへり。

二八六（裳　は）

裳は。おほうみ。しびら。

〔通〕裳のこともさま〴〵に註したり。◎おほうみ　〔通〕大海。春註に海賦の織物と見え、通釋に紫日記の海部を織りて云々とあるを引きたれども、日記の文は御產の時、白き當色を著する例なるにより、模樣を織物にしたることなれば、こゝに適はず。大海てふ裳は、白き精好などに、青海波、海藻、貝殼の模樣を青く

二八三　（ある女房に代りて）

ある女房の遠江守の子なる人をかたらひてあるが、おなじ宮人をしのびてかたらふときゝて恨みければ、「親などもかけてちかはせ給へ。いみじきそらごと也。夢にだに見ず」となんいふ。いかゞいふべき。といふをきゝて、

（清少）ちかへきみとほつあふみのかみかけてむげにはまなのはし見ざりきや

◎おなじ宮人なかたらふ　（春）彼女房とおなじ禁裡后宮などの宮仕への女房に、遠江守の子が二心なりし也。◎親などもかけて　（春）是よりかのある女房の友達にかたる詞也。彼男の二心な恨ければ、さる事なしとあらがひて、父の遠江守なも誓言にいれたりしと也。◎いかゞいふべきといふな　（春）かやうに男はあらがふな、いかがいはんと彼女房の云也。◎ちかへきみとほつあふみの　（春）清少かの女房にかはりてよめる歌也。上句は親なかけて誓ひける事なうけて、遠江守な神にそへてよめり。下句は夢にだに見ずといひしなうけて、無下に一向端つかたなも見ざりしが、神かけてちかへと也。濱名橋、遠江の名所なれば、端といひかけてよめり。神かけても橋の縁語か。（春）千蔭云、無下にといふ詞な歌によめるは拾遺物名にも見ゆ。

二八四　（むねはしりゐの）

びんなき所にて人に物をいひけるに、「（男の詞也）むねのいみじうはしりける、などかくはある」といひけるいらへに、

(窮)此詞前の詞に連續せず。義も通じがたし。落丁などあるにや。諸本かくの如し。追て可ㇾ勘。先前とは別段ならん。(補)諸本かくあり。夏蔭云、一本四段の「こと〲なるもの」と云ふ段の末に入りたるなよしとすと。弘恭云、なほ誤字もあるにやと思へば、今本のまゝにさしおきつと。直按「こと〲なるもの」の末に入るべしといへるは、定澄の風姿のことやうなるを評する詞と見たるにや。或は又彼のつゞきの末に、定澄のゆゝしく高き姿なるを笑ふ條あれば、それに引きつけて、定澄のたけ高くして、之に着すべき袿なしと解かんとにや。さるにても下の「すいせい君」の裾いかなる由あるにや。其の人も知られねば、所詮は牽强附會の解釋に陷らむ。知らざるは知らずとすべし。

二八二（下野に下る人に）

まことや下野にくだるといひける人に

おもひだにかゝらぬ山のさせも草たれかいぶきのさとはつげしぞ

◎おもひだにかゝらぬ　(窮)此の清少の歌、上句は下野へ下る事思ひもかけぬとの儀也。下句は誰れいひてさやうには告たるぞと也。里はな、左とはとそへたり。清少納言集に「こゝながらほどふるだにもある物ないとゞとほちのさとなきかせそ」とよめる詞とおなじ。さしも草は灸治に用ふる故、火にそへて、思ひだにかゝらぬといへり。伊吹は美濃近江の堺なるにはあらず。下野國なりと能因が坤元義に出たるよし袖中抄に見ゆ、此の歌も誰れかいふといひかけて、下野の伊吹の里、さしも草ある所なれば、よせてよめるにや。「かくとだにえやはいぶきのさしも草同じ秀句也。

めおやなくなりて　下野に下る人に

諸本さとにいきてとあれど、唯活本のみ「さときゝて」と書ける由にて、夏蔭の改訂せる、いとよろし。短冊を人に見せて、物給ふるしるしにもあらぬ歌の意を、さうときゝて、となり。

二八一（めおやなくなりて）

男はめおやなくなりて、おやのひとり有るいみじくおもへども、わづらはしき北の方の出で來てのちは、内にも入れられず。さうぞくなどの事は、めのと又こう（故宮）への人どもなどしてせさす。西東のたいのほどにまらうどゐもいとをかしう、屏風さうじのゑも見所ありてすまひたり。殿上のまじらひのほど、くちをしからず人々もおもひたり。うへにも御けしきよくて、常にめしつゝ、御あそびなどのかたきにはおぼしめしたるに、猶つねに物なげかしう、世の中心にあはぬこゝちして、すき（好色也）〳〵しき心ぞかたはなるまであるべき。上達部の又なきさまにもてかしづかれたるいもうとひとりあるばかりにぞ、思ふ事をもうちかたらひなぐさめ所なりける。

此の一章誤脱極めて多しと見ゆ。先づ最初の「男は」といふ上にも、詞落ちたらむ。「世の中心にあはぬこゝちして」の下には、長き文句ありつらむ　末の「語らひなぐさめ所なりける」も、結尾の句と思はれず。要するにいと片はなる文句を、強ひて解かんと推しあてごとせんよりはと解を略せり。

定澄僧都にうちきなし。すいせひ君に祖なしといひけん人もこそをかしけれ。

◎みくしげどの　〔補〕こゝは職名にて后宮の御妹を申す也。前にも在り。◎をのこのある　〔春〕ある男といふ
に同じ。〔補〕岩崎氏云、源氏早蕨の巻にも「若き人のある、先づ下りて簾だれうちあぐ」とある同じ語格な
りと。◎うれへ　〔補〕身の災厄を、誰れにか愁訴せんと也。◎きたなく侍る所　〔春〕彼男の家をいふ。◎がう
な　〔春〕寄居虫。ちひさき貝の中にやどりすむ虫也。長明方丈記に、がうなはちひさき貝をこのむ。とい
へる是也。此男家を燒失して、人の家をかり住事をいふ也。◎むまつかさ　〔補〕馬寮。官馬を飼養し、乘御
等に備ふる司（ツカサ）。◎みまくさ　〔補〕秣。御馬草の義。◎わらはべ　〔補〕春注に此男の子とあり。他の抄釋どもに、何
の批判もなし。直按ずるに、是れ我か妻の事をいへる謙稱也。其の證は大鏡に、世繼の翁の、已が老妻を
「ワラハベ」といへること三ケ所あるにて知るべし。是れ古く妾の字をワラハと訓じて、自謙の詞とした
ると同意なり。◎みまくさを　〔春〕此歌彼御秣つみたる所よりといふをうけて也。夜殿を淀野に添ていふ。
心は明也　〔補〕淀野は淀川のほとり。もやすは萌えさすに、燃（モヤ）すをかけたり。◎たんじやく　〔補〕短策。厚様（アツヤウ）
の紙を、巾一寸餘りに切りたるもの、今歌かく短冊も是れより出でたり。岩崎氏云、按江家次第賑給條、
當日大使於₂便所₁短冊加ㇾ封、或散（チラシ）短冊₂定₂便所₁分₂給之高年病者貧者等₁云々。人々に給ふべき米鹽の
數を書きたる物を、先づ其人々に分ちて、それに從ひて米鹽を賜ふことゝ聞ゆ。されば人に物給ふとては、
先づ短策に其物數を記して、其人に與へし事と見ゆ。さることある故、こゝも此男の、物給はる短冊ぞと
思へる也と。是れにてよく聞ゆ。◎このおはする人の云々　〔春〕こゝにおはする女房の、其方の家やきたり
と哀みて、是をとらせらるゝと也。◎片目もあきつかうまつらでは　〔春〕此男無筆なる事をいふ也。片目も
あかでは、いかでかよみ侍らんと也。◎さときゝて　〔補〕是れよりまゝの御前にて啓する詞なり。春本始め

わらはべも、ほと〳〵やけ侍りぬべくてなん、いさゝか物もとうで侍らず」などいひをるを、みくしげどのも聞き給ひていみじうわらひ給ふ。

（清少のうた也）みまくさをもやすばかりの春のひによどのさへなどのこらざるらん

とかきて「これをとらせ給へ」とてなげやれば、わらひのゝしりて、「此（まゝの詞）のおはする人の、家のやけたゝなりとて、いとほしがりて給ふなり」とてとらせたれば、「何（男の詞也）の御たんじやくにか侍らん。物いくらばかりにか」といへば、「まづ（まゝの詞也）よめかし」といふ。「いか（男の詞）でか。片目もあきつかうまつらでは」といへば、「人（まゝの詞也）にも見せよ只いま召せば、とみにてうへへまゐるぞ。さばかりめでたき物をえては、何をかおもふ」とてみな笑ひまどひてのぼりぬれば、人にや見せつらん「さときゝて、いかにはらだたん」など御前にまゐりてまゝの啓すれば、又わらひさわぐ。御前にも、「などかくものぐるほしからん」とわらはせ給ふ。

◎僧都の君の御めのとのまゝ　(春)僧都隆圓の乳母の名まゝといひし人と、清少と御匣殿の御局に在し也。其比乳母の名をまゝとよびしにや。源氏の蓬生の宮の乳母もまゝといひし也。(鐵)直云、なほ浮舟の卷にも見え、又吾妻鏡卷二、治承五年閏二月七日の條に、武衛御誕生之初、被レ召二于御乳付一之青女、摩々と號せし今は尼となれる御憐愍に預る由記せれば、「まゝ」は一般に乳母を稱する別名と見ゆ。固有名詞にあらず。

さときゝて　春本さとにゆきてとあり活本による

じ。召仕の童女なるべし。明日實家へもてゆかんとて、雞を隱しおきたる也。（◯）聲めい王のねぶり（春）朗詠云、鷄人曉唱聲驚二明王之眠一。これ漏剋策の文なれども、うたふ物なれば詩といへるにや。鷄人とは漏剋の官人也。前に丑四つと奏すると有り。是すなはち鷄人の曉唱ふ心也。庭鳥の帝の御眠をおどろかせし折に、よくかなへる朗詠なるべし。◎又の日はよるのおとゞに（春）其あくる日のよるは、后宮帝の御寢所にいらせ給故、淸少退出する也。（◯）人よべば（春）淸少退出せんとて從者をよぶ也。（◯）さしぬきのなから（春）指貫のすそ半分ほどふみくゝまれし也。（春）當時の指貫のはきやうなり。上に述べおけり。（◯）ゆうし猶のこりの月に（春）朗詠曉の部に、佳人盡飾二於晨粧一魏宮鐘動。遊子猶行二於殘月一函谷鷄鳴。これ賈島が曉の賦の句也。◎わらひ給へど（春）伊周笑ひ給ふ也。（◯）ものなには（春）にに感詞。

二八〇（みまくさを）

僧都の君の御めのとのまゝと、みくしげどののみつぼねにゐたれば、をのこのある、板敷のもと近くよりきて「からい目を見さふらひつる。誰れにかはうれへ申しさふらはん」とてなきぬばかりのけしきにていふ「何事ぞ」と問へば「あからさまに物へまかりたりし程に、きたなく侍る所のやけ侍りにしかば、日ごろはがうなのやうに、人の家にしりをさしいれてなんさふらふ。むまづかさのみまくさつみて侍りける家より、出でまうで來て侍るなり。只垣をへだてゝ侍れば、夜殿(ヨドノ)にねて侍りける

まして、「いかにありつるぞ」と尋ねさせ給ふに、大納言殿の、「聲(伊周の吟也)めい王のねぶりをおどろかす」といふ詩を、たかう打ち出だし給へる、めでたうをかしきに、ひとりねぶたかりつる目もおほきになりぬ。いみじき折の事かなと宮も興ぜさせ給ふ。なほかゝる事こそめでたけれ。

又の日は夜のおとゞにいらせ給ひぬ。夜中ばかりにらうに出でて人よべば、「おるゝ(伊周公の詞也)か。我れおくらん」との給へば、裳唐衣は屏風にうちかけていくに、月のいみじうあかくて、御直衣のいと白う見ゆるに、さしぬきのなからふみくゝまれて、袖をひかへて「たふるな」(伊周の詞)といひておはするまゝに、「ゆうしなほのこりの月にゆけば」(伊周の吟也)とずんじ給へる、又いみじうめでたし。かやうの事めでまどふとてわらひたまへど、いかでか。猶いとをかしきものをは。

◎ふみの事そうし　(春)御學文の物がたりにて、いつも夜ふくるがこよひもふけし也。◎れんじて　(春)こらへて也。◎丑四つと奏する　(補)丑の四刻と奏聞する也。今の夜の十二時を子の一刻とするにより、丑四つは明け方近き四時頃になる。されば清女の、不意(オモハデ)に夜明になれりと獨語せし也。◎今さらにおほとのごもり　(春)一條院ねぶらせ給ふを、伊周公とがめ被申詞也。すでに夜明るに、今迄おきはしまして、今更に御寢なるべき事かはと也　◎なさめ　(春)長女也。前にあり。それが子などの童なり。(補)子などの童にはあら

◎思ひおとされ　（補）其男な心劣りして覺ゆると也。◎ものなは　（補）濱臣云、ものなはのなは、よにかよふなにて物よの意也。ばは助辭にていとかろし。下文にもあり。

二七九（明王の眠を）

大納言殿（伊周公也）まゐり給ひて、ふみの事などそうし給ふに、例の夜いたうふけぬれば、御前なる人々一二人（ヒトリフタリ）づつうせて、御屏風きちやうのうしろなどに、皆かくれふしぬれば、たゞひとりになりて、ねぶたきを念じてさぶらふに、丑四つとそうする也「あけ侍りぬなり」と獨ごつを、大納言殿「今さらになおほとのごもりおはしましそよ」とて、ぬべきものともおぼしたらぬを、うたて何しにさ申しつらんと思へど、又人のあらばこそはまぎれもせめ。うへのおまへの、はしらによりかゝらせ給ひて、すこしねぶらせ給へるを、「かれ見奉り給へ。（伊周の中宮に入申詞也）今はあけぬるに、かくおほとのごもるべき事かは」と申させ給ふ。げになど宮のおまへにもわらひ申させ給ふもしらせ給はぬ（寝ねふらせ給ふゆゑ也）ほどに、をさめが童の庭鳥をとらへもてきて、あす里へもていかんといひてかくしおきたりけるが、いかゞしけん、犬の見付けておひければ、廊のさきににげいきて、おそろしうなきのゝしるに、皆人おきなどしぬなり。うへもうちおどろかせおはし

㊀小野殿の母上　〔春〕是右近大將道綱の母也。道綱をたのどのといひしにや。㊀普門寺　〔磐〕六波羅にや　◎たきぎこる　〔磐〕上句はきのふの八講の、提婆品拾レ薪設レ食の事也。釋尊昔國王にておはせし時、求法の御志深くて、阿私仙人につかへて薪をこり水をくみつゝ、終に法華經を得給へる事也。下句は王質か山中に薪こりて、仙人の碁をうつを見て斧の柄の朽たる事也。歌の心は、けふの遊びの面白きに、をのゝえ朽つるまでもありたき心也。このうた拾遺集には下句「いさをのゝえはこゝにくたさん」とあり。斧は小町を添て云也。◎こゝもとはうちきゝに　〔春〕此もとは人のうたども書たれば、聞書のやうになりたると也。うちききとは、其頃の歌を集めおくをいふ由、徹書記物語に見えたり。躬恒打聞といふ書物もあるにや。◎業平の母の宮の　〔春〕伊豆內親王の御事也。古今雜上云、なりひらの朝臣、母のみこ長岡に住侍ける時に、業平宮づかへすとて、時々もえまかりとぶらはず侍ければ、しはすばかりに、母のみこのもとより、とみの事とて文をもてまうできたり。あけて見れば、詞はなくてありける歌「老ぬればさらぬ別もありといへばいよよ見まくほしき君哉」伊勢物語には、さらぬわかれのとあり。㊀よみにもむかし　〔磐〕歌を只詞にうちよめば、事の外に歌のさまおとる物なるべし。㊀無作法にもよむ事かなとなるべし。

二七八　（げすにほめらるゝは）

よろしき男をげす女などのほめて、いみじうなつかしうおはしますなどいへば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるゝはなか〳〵よし。げすにほめらるゝは、女だにいとわろし。又ほむるまゝに、いひそこなひつるものをは。

れば、海水開きて溺れず。二日の後他船に救助せられ、讀經の功德を說けども、犂の惡事を語らず、願くは我れを奥に送れと請ふ。船主其言の隨にす。而るに彼の犂は亡男の爲に齋食を設け、三寶に供す。男僧展轉乞食して其供養を受く。犂の掌自から布施を捧げて之を施す。僧手をのべて施行を請く。掌之を見て青面赧然、罰を恐れて隱る。僧笑を含みて怒らず。後終に彼れの惡事を顯さず。云々と大乘の威驗を記せり。右の物語の轉々して、說教師が法談の材料となれるを、道命阿闍梨一首の詠歌に作爲せしに、清女の傳聞して斯くは記しつるならむ。

二七七　（うちきゝの歌）

又小野どのゝ母うへこそは、普門寺といふ所に八講しけるをきゝて、又の日小野殿に人々あつまりて、あそびし、ふみつくりけるに、

　たきゞこる事はきのふにつきにしをけふはをのゝえこゝにくたさん

とよみ給ひけんこそめでたけれ。こゝもとはうちきゝになりぬるなめり

又業平の中將のもとに、母の宮の「いよ／＼見まく」との給へる、いみじうあはれにをかし。引きあけて見たりけんこそ思ひやらるれ。

をかしと思ひし歌を、さうしにかきておきたるに、いふかひなきげすの打ちうたひたるこそいとこゝろうけれ。よみにもよむかし。

かけられたらんが如し。救器は此餓飢の苦をすくふうつは物也。佛弟子目蓮始て六通を得て、其母の在所を見るに、餓飢の中にありしかば、則釋尊にまうでて、此苦しみをすくはん事を求めしかば、七月十五日に、自恣の僧を供養せば、解脱を得んと説給ひしよし、盂蘭盆經に見えたり。◎道命あじやり 〔補〕作者部類云、右大將道綱男、天王寺の別當云々。後撰より詞花千載等すべて十代の集の作者なり。◎このぬしの 〔首〕このぬしとは、この人といふ詞を、子たる者のといふ心にそへられし也。此歌は五逆の惡人ながら、うら盆に惡念をひるがへして、善業をなす事、懺悔滅罪のことわりを哀める心にや。此うた續詞花集にいれり。〔獨〕戯れ歌に似たり。但し濱臣の此の歌、盆の字音を以て、人を水に落す音にいひよせて歌とせり。といへる、さまでもあらじ。直按ずるに、此の條道命師、不孝の子の盆供養を營むを見て、歌よまれたるやうにいへるは、満を傳聞の誤ならむ。師は實際を見たるに非ずして、古き傳説をおもひて詠ぜしなるべし。眞に右衞門尉なる男の、父を殺して罪科にも當らず、安穩なる事あるべしやは。俗右の親を海中に投げ入れて、後に齋食を備へ回向せし由傳説の基く所、日本靈異記に見えたり。概略を示さんに、同記下卷沙門誦二持方廣大乘一沈レ海不レ溺緣第四に、(摘要國文に譯す)奈良の僧常に方廣經を誦す。俗について錢を貸す。一女嫁して別に住す。孝謙天皇の時、女の聟陸奧國の掾に任ず。此の聟舅ノ僧の錢を借りて、歲餘僅に本錢を贖ひ、未だ利錢を贖はず。聟竊かに懷嫉して、便を求めて舅を殺さんとす。舅之を知らず。聟舅に語らひ、奧に伴はんと船に乘つて海を渡る。聟は船人と心を同じくし、舅僧を縛して海中に擲陷し、還つて妻を語るやう、汝の父汝の面を見んと欲するが故に、共に率て渡海し來るに、忽ち荒波に値ひ、船沈沒して溺流し、救助に便なく終に沈亡し、只我れのみ僅に活るのみと。(中略)舅僧海中に沈みつゝ、至心に方廣經を誦す

り、㊀たぐなは　(譯)手繰縄(タクリナハ)の約語ならむ、栲縄といふ物も古くあれど、中古以來歌などによむは、必しも栲にて綯ひたる繩ならじ　㊁のぼらむ　(譯)船に上らむとて也。◎取りまどひくりくり入るゝ　(新)舩の上らむ相圖に其の繩をひけば、男の急に手繰り入るゝさまなり。◎めもあやに　(新)目も驚かれて淺ましと也。(補)この註よろし。古き學者、目(メ)も文(アヤ)の意と唱へ出でしより、大かた美麗なる事にのみいふと心得たるは非なり。石川雅望翁は、眼も及ばぬなどの心也といへり。されば見る目もあやしくと譯すべし。美麗なるにも、亦奇怪なるにもいふ語なり。

二七六（道命阿闍梨の歌）

右衛門ノ尉なりけるものの、えせなる男親をもたりて、人の見るにおもてぶせなりと、見ぐるしう思ひけるが、いよのくにより のぼるとて、海におとしいれてけるを、人の心うがりあさましがりけるほどに、七月十五日、ぼんを奉るとていそぐを見給ひて、道命あじやり、

わたつうみにおやをおし入れてこのぬしのぼんする見るぞあはれなりける

とよみ給ひけるこそいとをかしけれ。

㊀七月十五日　ぼんを奉る　(新)盂蘭盆經云、以百味飲食安盂蘭盆中施十方自恣僧云々。公事根源云、盂蘭盆とは梵語也。倒懸と云ふを翻譯す。倒懸はさかさまにかくるなり。餓鬼の苦しみを思ふに、さかさまに

海はなほいとゆゝし」この一句春本におちたり例の千本によりて補ふ

舟とひとしう、重くはあらずと也。◎はし舟 〔頭〕和名抄に、艇。乎夫禰、游艇 波師不禰、小船也、とあり。◎あとの白波 〔春〕頭詠「世の中を何にたとへん朝ぼらけこぎ行く舟の跡の白波」拾遺集にも如此。

〔補〕もと萬葉に満誓沙彌の歌なり。拾遺の撰者いさゝか詞を改めて載せたり。

かち路(チ)も又いとおそろしかゝなれど、それはいかにも〳〵土につきたればいとたのもし、海は猶いとゆゝしと思ふに、ましてあまのかづきしたるはうきわざなり、腰につきたる物たえもしなばいかゞせんとならん。をのこだにせましかばさてもありぬべきを、女はおぼろげの心ならじ。男は舟にのりてうたなどうたひて、此のたぐなはを海にうけありく、いとあやふく、うしろべたくはあらぬにや。蜑(アマ)ものぼらんとては其の繩をなんひく。取りまどひくりいるゝさまぞことわりなるや。舟のはたをおさへて放ちたるいきなどこそ、まことにたゞ見る人だにしほたるゝに、おとし入れてたゞよひありくをのこは、めもあやにあさましかし。更に人の思ひかくべきわざにもあらぬことにこそあめれ。

◎あま 〔春〕和名抄に、日本紀私記曰、漁人。阿万云々とあり。〔補〕箋註に、按海訓二阿万一漁人常在二海上一故云二阿万一とあり。直按するに、アマビトの略か。而して男女を通じて蜑とかく。蜑は支那南方の蠻族にて、常に水中に沒し海産物を取りて業とすと云ふに據る。◎かづき〔補〕直淵翁、かづきは頭衝(カシラツキ)の義といふ。水中に頭を衝き入りて、魚貝を捕ること。延喜式に志摩國取二御贄一潜女とあり。古來婦女のする業と見えた

つくり春本
なし千本に
よる

どもこそめくるゝこゝちすれ。はやをとつけて櫓とかにすげたる物のよわけさよ。たとへなば何にかはならん。ふとおちいりなんを。それだにいみじうふとくなどもあらず。我がのりたるはきよげにつくり、すかけ、つまどあけ格子あげなどして、されどひとしうおもげになどもあらねば、たゞ家のちひさきにてあり。ことふね見やるこそいみじけれ。とほきはまことに笹の葉をつくりて、うちちらしたるやうにぞいとよく似たる。とまりたる所にて、舟ごとに火ともしたるをかしう見ゆ。はし舟とつけて、いみじうちひさきにのりてこぎありく。つとめて（早朝のさま也）などいとあはれなり。あとのしらなみは誠にこそきえもてゆけ。よろしき人はのりてありくまじき事とこそ猶おぼゆれ。

◎やかた 〔補〕篷屋。和名云、舟上屋也、布奈夜加太。とあり。屋形の義なり。昔のは船上艫（トモ）の方に屋を覆ひて、四周に格子を釣り、簾垂れ掛け、又は水引幕を張りたるなり。春註に、貴人は屋形におはすと也とあるにて、聞えぬにはあらねど、詞足らぬ様なり。或ひは前後に脱字なきか。◎はやを 〔解〕早緒、舟の櫓に付くる縄をいふ。◎とつけて 〔補〕春本との字なけれど、古本によりて補ふ。つけては名付けての意。下にも此の語法あり、◎櫓とかに 〔補〕春本のどかにとあるは、ろの假名の筆誤。◎すかけつまどあけ 〔補〕簾掛け妻戸開けなり。春本、もかうのすきかげとある非なり。帽額は宮中の簾などに掛くるものにて、斯くざまの船などにあるべき物ならず。◎ひとしう重げに 〔解〕我が船は、彼の水際一尺ばかりに、足（アシ）の入りたる

とあれど千本による

「かたとき」に。これも

いみじううたひたるいとをかしう、やんごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに、風いたうふき、海のおもてたゞ荒れあしうなるに、物もおぼえず。とまるべき所にこぎすぐるほどに、舟に波のかけたるさまなど、かたときにさばかりなごかりつる海とも見えずかし。おもへば舟にのりてありく人ばかり、ゆゝしきものこそなけれ。よろしき深さにてだに、さるはかなき物にのりて、こぎゆくべきにぞあらぬや。ましてそこひもしらず。千尋などもあらんに、物をいと多くつみいれたれば、水ぎはは只一尺ばかりだになきに、げすどもの、いさゝかおそろしとも思ひたらず。はしりありき、つゆあらくもせば、沈みやせんと思ふに、大きなる松の木などの、二三尺ばかりにてまろなる、五六(イツヽムツ)はう／＼となげ入れなどするこそいみじけれ。

諸抄なこの一章なも「うちとくまじきもの」のつゞきとせり。然れども、上に「船の路」といへるより、想ひ寄りてかけりと見ゆれば、別段とす。末まで讀了して悟るべし。◎淺綠のうちたる 〔評〕この下「さぬ」といふ詞を略せり。うちたるは光ある也。◎ゆゝしき 〔評〕いま／＼しく恐ろしき心なり。◎なごかりつる 〔評〕和の字也。なごやかにゆるやかなりし海上の、荒くなりしさま也。◎よろしき深さ 〔評〕大かたの深さにてもと也。

貴人は屋形におはすと也

やかたといふ物の方におはす。されど奥なるはいさゝかたのもし。はしにたてる者

ちごどもの下春本なまけしからぬえせものとあれど千本削りたるに従ふ。

はかま春本にははばかり

心にやとなるべし。

二七三 （見ならひするもの）

見ならひするもの。あくび。ちごども。

◎あくび 〔補〕谷川士清翁云、他ゝ風(ブリ)の義なるべしと。春註よくうつるもの也とあり。◎ちごども 〔春〕幼き者はよく物を見ならふ故なり。

二七四 （うちとくまじきもの）

うちとくまじきもの。あしと人にいはるゝえせもの。さるはよしといはるゝ人よりも、うらなくぞ見ゆる。船の路。

◎うちとくまじき 〔補〕心ゆるすまじき意。◎うらなく 〔補〕裏無にて、心底に悪意なきやうなるを云ふ。◎船の路 〔補〕海路も心ゆるびし難く安からぬものなるべし。

二七五 （海のおもて）

日のいとうらゝかなるに、海のおもてのいみじうのどかに、あさみどりのうちたるを引きわたしたるやうに見えて、いさゝかおそろしきけしきもなきに、わかき女の、あこめはかまきたる。侍(サフラヒ)のものの若やかなる、もろともに櫓といふ物おして、歌を

春曙抄巻十二

此の段春本誤脱多し皆千本によりて改む

宮仕へする人々の出であつまりて、おのが君々の御事めできこえ、宮の内、殿ばらの事ども、かたみに語り合せたるを、其の家のあるじにて聞くこそをかしけれ。家ひろくきよげにて、わが親族はさら也。たゞうちかたらひなどする人には、宮仕へ人かたつかたにすゑてこそあらまほしけれ。さるべきをりは、ひと所にあつまりゐて物がたりし、人のよみたる歌何くれとかたりあはせ、人の文などもてくるも、もろともに見かはして、返事かき、又むつましう來る人もあるは、きよげにうちしつらひていれ、雨などふりてえ歸らぬも、をかしうもてなし、まゐらん折は其の事見いれて、思はんさまにして出だしたてなどせばや。よき人のおはします御ありさまなどのいとゆかしきこそ。けしからぬ心にやあらん。

◎出であつまり 〔春〕里亭へ出集る也。◎おのが君々 〔春〕我が主君をほめて、互に語る也。◎親族は更なり 〔春〕一門の人と相住むはいふに及ばず。◎睦ぶ語らふ 〔春〕友なふ人にせんにはと也◎かたつ方にすゑ 〔春〕宮仕への女房と相住みたきと也。◎まゐらむ折は 〔春〕彼宮仕へ人の、主君へ參る時は、◎其の事見入れ 〔補〕いろ〳〵と注意し世話する由なり。◎いとゆかしきこそ 〔補〕かくして、高貴の方ざまの事をゆかしく聞き知りたきが、けしからぬ事となり。◎けしからぬ 〔補〕雅望云、或曰褻の字の心なりといへり。常並ならずといふこと也。本居翁は、わろくにあらずといふ心といへり。さては此の條、我れながらわろくはあらぬ

らに、えびぞめの固紋のさしぬき、白ききぬどもあまた、山吹くれなゐなど着こぼして、なほしのいと白き、ひもときたれば、ぬぎたれられていみじうこぼれいでたり。さしぬきの片つかたは、とじきみのとにふみ出だされたるなど、道に人のあひたらばをかしと見つべし。月影のはしたなさに、うしろざまへすべり入りたるを、ひきよせあらはになされてわらふもをかし。「りん／＼として氷しけり」といふ詩を、返す／＼ずんじておはするはいみじうをかしうて、夜一よもありかまほしきに、いく所のちかくなるもくちをし。

◎そやの御導師聞て　(釜)初夜のおこなひすみて、聴衆の退出は夜半も過る比ならんと也。◎あひのりたる　(釜)男女同車のさま也。◎たるひ　(釜)垂氷。軒のつら、のたれさがりし也。◎下すだれもかけぬ　(釜)車の簾の下に、すそごのきぬなどたかくるた、下すだれといふ也。◎うす色　(釜)桃花云、薄色。たて紫ぬき白云々。女の装束のさま也。(釜)ひもとき　(釜)直衣の領(エリ)の入紐(イレヒモ)た解きたるなり。春本ひきときとあるた、千蔭古本一本によりて改む。◎とじきみのと　(釜)車の前方の軾(ト)の外までさし出でたるないふ。◎りん／＼として　(釜)朗詠。八月十五夜。秦甸之一千餘里凜々氷鋪。凜々は寒貌也。月のあきらかなる影のうつれるに、秦甸の廣き田面に、さむく冷しき氷た敷たるやうなりと也。

二七二　(宮仕へする人)

◎入りあひ　〔講〕日沒。日の入る間をいふ、◎こよなの　〔余〕無越と書也。これにます事なき心也。◎忘れたるたび　〔余〕度の字旅の字にかけて也。〔講〕旅にかゝる迄にはあらじ。唯時といふ程の意に解すべくや　◎柴なるはちす　〔講〕散花てふ紙のはなびらなるべし。猶此の下に淸女の宮へ參らせし歌ありしを、寫しおとしたるならむ。

二七一　（十二月二十四日）

十二月二十四日、宮の御佛名のそやの御導師聞きて出づる人は、夜なかも過ぎぬらんかし。里へも出で、もしは忍びたる所へも夜のほど出づるにもあれ。あひのりたる道の程こそをかしけれ。日ごろ降りつる雪のけさはやみて、風などのいたう吹きつれば、たるひのいみじうしだり、つちなどこそむら〳〵白き所がちなれ。屋のうへはた、おしなべてしろきに、あやしきしづの屋も雪に皆おもがくしゝて、有明の月のくまなきにいみじうをかし。しろがねなどおしへぎたるやうなるに、水晶の莖などいはまほしきやうにて、ながくみじかく、ことさらにかけわたしたると見えて、いふにもあまりてめでたきに、下すだれもかけぬ車の、すだれをいとたかくあげたれば、おくまでさし入りたる月に、うす色紅梅しろきなど、七つ八つばかり着たるうへに、こききぬのいとあざやかなるつやなど、月にはえてをかしう見ゆるかたは

白き所がち
屋の上はたち
その外春本
になき詞は
皆千蔭本に
よりて補へ
るなり

まゐらす諸本まゐらするとあり千本による

そ畏こけれとなり。おぼえぬこそその下「畏こけれ」などの詞を略せり。◎雲のうへにくらし 〔春〕清少のさびしきに、住所がらと斗り思ひ侍りて、后宮の御つれ〴〵をしらで、里居し侍し事よとの心也。とく參るべき心をふくめたる歌也。此返歌も千載集に入る。◎こよひのほども少將にや 〔春〕百夜かよへといひし女のもとへ、九十九夜ゆきて、今一夜を待ちあへずしてうせたりし深草の少將の、世がたりにていへる詞にや。清少も早く參たき心いられに、今夜一夜を待かねてうせやし侍らんとなるべし。◎くらしかねける 〔春〕清少を待ちかねて、后宮のくらしかね給ふといへるやうなるを、あまりうけばりたる事と、たはぶれの給也。◎さること也 〔春〕雲の上もくらしかねつるとは、御戯れにても御告めの通り、申し過ぎたりとなり。

二七〇（清水に籠りたる頃）

清水にこもりたるころ、ひぐらしのいみじうなくを、あはれときくに、わざと御使して(の)給はせたりし。からのかみのあかみたるに、

山ちかき入りあひのかねの聲ごとにこふるこゝろのかずはしるらん（宮の御うた）

ものをこよなのながゐや」とかゝせ給へる、紙などのなめげならぬもとり忘れたるたびにて、むらさきなるはちすの花びらにかきてまゐらす。（歌よりことばによみつゞけて心得べし）

◎山近き 〔春〕此歌は清水なれば山近きと也。鐘の聲々に付ても、我が清少を戀る思ひの數は思ひしるらんを、つれなくも久しき長居哉と、歌にふくめ給へる餘意を、次の詞にあらはしてかきつゞけ給へるさま也。

くらしかねけるの下春本「こそ」の二字あり千本によりて削る

となん」わたくしには「けふしも千歳のこゝちするを、曉にはとく」とあり。此の君のい給はんだにをかしかるべきに、まして仰せごとのさまには、おろかならぬこゝちすれど、けいせん言（コト）はおぼえぬこそ

（清少の返歌也）雲のうへもくらしかねつる春の日をところがらともながめつるかな

（宰相への返事にはと也）わたくしには「こよひのほども少將にやなり侍らんとすらん」とて、曉にまゐりたれば、「（后宮の御詞也）きのふの返し、くらしかねける、いとにくし。いみじうそしりき」とおほせらるる、（清少心也）いとわびし。誠にさることなり。

◎物いみしにとて （春）深くつゝしむべき物忌には、常の居所を去て外にうつる事ある也。◎さかしらに柳の （春）さかしらには賢だてなる心也 風流なるべき柳の、なまじひに賢立て、此楊の葉廣ごりにくげなるは春の面伏と也。柳の眉といふより面と云は縁語也。◎只今も参りぬべき （春）后宮の御方へ歸りたきと也。◎いかにして過にし （春）此后宮の御歌。千載集の詞書云、一條院御時皇后宮に、清少納言始めて侍ける比、三月斗に、二三日まかり出侍けるに、彼の宮よりつかはされて侍ける」とあり。此始て侍けるといふに心を付くべし。二三日清少の侍らぬさへさびしきに、其の已前は何としてくらせしぞと也。◎わたくしには （春）宰相より私の消息なり。（春）后宮の御歌をさきて、別に宰相の私信にも、清少を待ちわぶるよし也。◎けふしもとせの （春）後拾遺ニ「くるゝまはちとせを過す心ちしてまつはまことに久しかりけり」◎おろかならぬこゝち云々 （春）御歌の趣には、疎略に思ひ奉らねど、何と謝し申すべきか、啓せん言葉も覺えぬこ

◎陰陽師祓　〔磐〕既註　◎人はなほこそきけ　〔春〕祭文などよむは、陰陽師の童なれば、猶尤もとこそきけ。それのみならず、利口なると也。〔園〕美隆云、直（ナホ）こそなり。陰陽師の子なれば元より然あるべき事と、人はたゞ大かたにこそ聞けと也。〔磐〕直按、祭文を他人は唯聞きゐるに、童は賢く立ち働くの意ならむ。◎しろき水いかけさせよ　〔春〕祓して物のけなどの絶入たる時、面に冷水をそゝけともいげぬに、彼童の物なれ心得て、立走りて其事しありく也。いかけは。沃懸なり。◎例知り　〔補〕例とは祓などの作法仕來りのこと。

二六九（物忌しに）

三月（ヤヨヒ）ばかり物忌しにとて、かりそめなる人の家にいきたれば、木どもなどはかばかしからぬ中に、柳といひて例のやうになまめかしくはあらで、葉ひろう見えてにくげなるを、あらぬ物なめりといへば、かゝるもありなどいふに、

さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてをふする宿かな

とこそ見えしか。其の比又おなじ物忌しにさやうの所に出でたるに、二日といふ日のひるつかた、いとどつれづれまさりて、たゞ今もまゐりぬべきこゝちするほどにしも、仰せごとのあれば、いとうれしくて見る。あさみどりの紙に、宰相のきみいとをかしげにかい給へり。

（宰相の御こた世）いかにして過ぎにしかたをすぐしけんくらしわづらふきのふけふかな

などして集まりさぶらふに、「少納言よ、かうろほうの雪はいかならん」と仰せらるれば、みかうしあげさせて、みすを高くまきあげたれば、わらはせ給ふ。人々も皆さる事はしり、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。猶此の宮の人にはさるべきなめりといふ。

(一)御格子參らせて　(語)こゝにては下しおく也　(譯)常には皆御覧ぜんとて御格子上げさせ給ふに、今日は例ならずとなり。(二)かうろほうの雪云々　(評)誰れも知り過ぎたる物語なれば註するに及ばじ。但し此の句は白氏文集十六に、香爐峯下新卜山居、草堂初成、偶題東壁として、その中の前聯に遺愛寺ノ鐘欹枕聽、香爐峯ノ雪撥簾看の句はあるなり。(三)此の宮の人には云々　(評)此の皆宮の御心ざしを御學才の優れおはしますこと、本書中あまた所に現はれ給へる、讀者熟知の如し。されに此の宮に奉仕する人として、清女の然るべく適當なる由を、人々のいひはやしたる也。

二六八　（陰陽師のもとなる童部）

陰陽師(オンミャウジ)のもとなるわらはべこそ、いみじく物はしりたれ。祓などしに出でたれば、さいもんなどよむを、人はなほこそきけ。そと立ち走りて、しろき水いかけさせよともいはぬに、しありくさまの、例しり、いさゝか主(シュウ)に物いはせぬこそうらやましけれ。さらん人もがな。つかはんとこそおぼゆれ。

帝六帖の御屛風一雙に、正月より十二月までの自然の景物をゑがかしめ、色紙形に右の歌どもかゝしめ給へりと見ゆ。といへり。それ傳はりて當御代の重寶たりしを、こゝに掲げたるなるべし。さては年中行事かゝれたる障子と註せるは當らず。

二六六（かたゝがへなどして）

かたたがへなどして夜ふかく歸る。さむきこといとわりなく、おとがひなども皆おちぬべきを、からうして來著(キツ)きて火をけ引きよせたるに、火のおほきにて、露くろみたる所なくめでたきを、こまかなる灰のなかよりおこし出でたるこそいみじううれしけれ。又物などいひて火の消ゆらんもしらずゐたるに、こと人の來て、炭入れておこすこそいとにくけれ。されど灰をめぐりにおきて、中に火をあらせたるはよし。みな火を外(ホカ)ざまにかきやりて、すみをかさねおきたる、いたゞきに火どもおきたるいとむつかし。

○かたゝがへ　卽方違。方忌のこと卷首に註せり。

二六七（香爐峯の雪）

雪いとたかく降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火おこして、物語

凡大雷時左右近衛陣ニ御在所一、又左右兵衛直參入、陣ニ紫宸殿前一云々。御在所とは清涼殿なり。◎御（ミ）かうしのつらに 〔[illegible]〕清涼殿の御格子の前、孫廂に候する由なり。◎はてぬる 〔[illegible]〕雷鳴の止むをいふ。◎のぼりおりとのたまふ 〔[illegible]〕上卿の指揮する詞なり。北山抄第六、解ニ雷鳴陣一事の條に、大將候ニ本座一解レ之云々。上卿仰云、陣解介。將監共稱レ唯ト畢左先召ス御殿（オホトノモリ）昇（二音）近衛稱レ唯。仰云下（オリ）（右又如レ之）將監取レ笠懸ニ太刀一、復ニ本列一相引退出。上卿退下。左右次將又退。とあるにて知るべし。

◎こんげんろくの御屏風 〔[illegible]〕按するに、是れきら〳〵しきものには非ざるべし。此の前に脱文あるか。必ずや「御屏風は」といふ題詞の、落ちたるに心づかで、前文に引きつゞけて書き寫したるならむ。さて坤元錄のこと、前田夏蔭曰、宋史藝文志地理類書云、魏王泰坤元錄十卷とありと。安齋叢書には、唐土の土地山海川澤の名を選び出し畫かしめて、其畫に詩を作らしめて書かせられし御屏風なりとあり。◎かんじよの御屏風 〔[illegible]〕江家次第八相撲召仰の條、同第十七立太子の儀にも、五尺漢書屏風を立つる由など見えたり。春註に、班固范曄が撰せし、前後漢書中の事を、ゑがける物といへど確ならず。抄には「かんなんきうの御屏風」とありて、其の註に、館娃宮也。吳王夫差の西施を置きし宮也。そこにて榮花ありし體をゑがける屏風なるべしと見ゆれど、若禁中にさる御屏風のありし事、何れの書にありとも聞かず。猶疑はし、◎月なみの御屏風 〔[illegible]〕年中行事をかゝれたるを云ふ。〔補〕此の註にては、清涼殿に立てる年中行事の御障子とまぎらはし。夏蔭云、拾遺集春の部に「延喜の御時月次の御屏風に素性法師」あら玉の年立ちかへる云云、同夏に「延喜の御時月次の御屏風に躬恒「神祭る卯月に咲ける云々。又「延喜の御時月次の御屏風に貫之「さつき山木の下やみにともす火は云々。秋の部にも同人の七夕の歌あり。かゝれば延喜の

名とす。◎御修法は五大尊〔吾〕源氏榊巻に、五壇の御すほうとある是也。河海云、五壇の御修法、降二三世一、軍荼利、大威徳、金剛夜叉、中央不動。稱名院御説云、禁中にておこなはるゝ也。不動を中尊にて五大明王の法を修せらる、㊀藏人の式部のぞう云々〔吾〕藏人の式部の丞は兼官なり。赤染衛門集云、たかちかの藏人、白馬の日式部の丞にて渡りしを見て、又の日まさむねがむすめのいひたりし。さりて後なれば「いづくにか日のとまりけん行過るおほよそ人とかつは見ながら」(下略)〔補〕此の註の趣によりても、式部丞の大路ねり行く状の、きら〳〵しさ思ひやるべし。◎御齋會右兵衛門佐すりぎぬやうする〔吾〕御齋會とは公事根源云、是は大極殿にて八日より十四日まで七ヶ日の間最勝王經を講ぜられて、朝家を祈り申侍る也。此經とり分け國家を護持する功能あるによりて、あら玉の年の始にはまづ講ぜらるゝにや云々。延喜式四十六。左右衛門式云、御齋會凡正月講二最勝王經一所進二衛士十五人并雜花一櫃一其種子稻五十束請二山城國便郡一簡備爲二十三荷一亦進二會所一。凡正月講二最勝經一所進二梅柳八株一云々。この時左右の衛門佐の摺衣着することあるにや。又御齋會に左右の撿非違使著二庭中座一糺二彈非違一と西宮記江次第にあり。左右衛門の權佐宣旨をかうふりて、撿非違使佐となる事なれば、此時すり衣やりてきら〳〵しき威儀あるをいふにや〔補〕えうすとは、服地を貝にて摺りて光澤を出すこと也。春本やりとあるはえうの誤。螢の字の音なり。螢すること上にいへり。◎季の御讀經〔吾〕前註公事根源に云、二月八月に大般若を百數にて講ぜらる、四ヶ日の事にて、第二日には引茶とて僧に茶をたまふ事あり云々。延喜太政官式云、凡春秋二季於二大極殿一修二讀經一、辨史専當二行事一、初後兩日親王以下參議以下就二殿上座一遣二近衛少將一勞問、㊀熾盛光の御修法〔吾〕妖星のたゝり、國王大臣などの居所の祈禱などにおこなふ云々。◎神鳴の陣〔吾〕前に註す、延喜式四十五云、

雨の云々とよめる古歌の句なるべし。未ㇾ考得ー ㊂へいのと 〔春〕古本に從へに塀の外と知らる。春本家の戸とあるは誤ならむ。㊂いきわたしける墨 〔春〕封じ目の墨なるべし。墨ひくうちに筆の氷りたるさま也。㊂こまぐ〳〵とくぼみ 〔春〕紙のたゝまれてくぼみし也。㊂くだりせばに 〔春〕行の間せばく細かに書さし也。㊂うらうへ 〔春〕裏表。㊂おもやう 〔春〕面樣。春註容貌よき女とあり。

二六五（きら〳〵しきもの）

きら〳〵しきもの。大將の御さきおひたる。孔雀經の御讀經。御修法は五大尊。藏人の式部のぞうの白馬の日大路ねりたる。御齋會。左右衞門の佐すりぎぬえうする。季の御讀經。熾盛光の御修法。神のいたくなる折に、神鳴の陣こそいみじうおそろしけれ。左右大將中少將などのみかうしのつらに侍ひ給ふいとをかしげ也。はてぬるをり大將のおほせて昇りおりとの給ふらん。こんげんろくの御屏風こそをかしうおぼゆる名なれ。かんじよの御屏風はをゝしくぞ聞えたる。月次の御屏風もをかし。

えうする春本やりたるとあるは非なり千本えうとあるに從ふ

◎きら〳〵し 〔春〕威儀正しく、見るかひある心なり。㊀元はきら〳〵と光り耀くことより、一轉して春註の如き義となれる也。㊁大將の御さきおひたる 〔春〕大將は近衞の隨身のつかさなれば、警蹕一しほきら〳〵しかるべし ㊀孔雀經の御讀經 〔春〕孔雀明王の法なり云々。此明王の形孔雀の翠羽の如し。よりて共

へいのと春本家の戸とあり千本によりて正す

だすほどもなく白くつもりて、猶いみじうふるに隨身だちてほそやかなるをのこの、からかささしたるが、そばのかたなるへいのとより入りて、文をさしいれたるこそをかしけれ。いと白きみちのくにがみ、しろき色紙のむすびたる、上にひきわたしける墨の、ふと氷りにければ、すそうすになりたるをあけたれは、いとほそくまきて、むすびたるまきめは、こまぐ\とくぼみたるに、すみのいとくろううすく、くだりせばに、うらうへかきみだりたるを、うちかへし久しう見るこそ、何事ならんと、よそにて見やりたるもをかしけれ。まいてうちほゝゑむ所はいとゆかしけれど、とほうゐたれば、くろき文字などばかりぞ、さなめりとおぼゆるかし。ひたひがみながやかに、おもやうよき人の、くらきほどに文をえて、火ともすほども心もとなきにや、火をけの火をはさみあげて、たどたどしげに見ゐたるこそをかしけれ。

◎いふにもおひなし ㊟つれなきを恨みたる男の詞なり。◎いまは ㊟文をもやらじと也。(一)又の日 (二)逢ひたる夜の翌日なり、後朝の便りのなきをいふ。(三)あけたてば (四)此の詞は唯、夜の明くればといふことにあらず　夜の明くる初發(ハジメ)の義なり　物の爲初(シ)めをいふ。俗にも著たて煮たてなどいへるに心を注(ツ)くべし。

◎さはぐし (一)際立ちて見ゆること。(二)水ます雨の ㊟古今「まこも刈る淀の川水雨ふれば常よりことにまさる我が戀」此歌を略せる詞にや、猶可考 (三)後撰集秋上源ノ仲忠「雨ふりて水まさりけり天の川こよひはよそに戀ひんとや見し」七夕の歌なり。是等「水まさる」といふ詞は多かれど、恐らくは猶水増す

さしいづる 春本なし古本による

混ずべからず。㊂あらずともとかきて 〔春〕別の儀もなけれど、御見舞になど書きたる也。抄云このいみじき月に、唯にはあらじとかける消息をおこせて、興を催す義なり。〔圖〕是等の註從ひ難し。外に明解せるも見えず。直按するに、拾遺集戀三に「月の明かりける夜、女のもとに遣しける」と詞書して、源さねあきら「戀しさは同じ心にあらずとも今宵の月を君見ざらめや」とあり。作者源ノ信明（サネアキラ）は、後拾遺より後の勅選集に、廿餘首も入りたる歌人にて、康保二年卒去の由なれば、それが秀歌に此の頃の人口に膾炙せしならむ。此の歌の三句、「あらずとも」と書きたる片紙を、簾中にさし入れたるならむ。折から月の明きに見むは逸興なるべし。

二六四　（常にふみおこする人の）

常に文おこする人の、「何かはいふにもかひなし。いまは」などいひて、又の日おともせねば、さすがにあけたてばさし出づる文の、見えぬこそさうざうしけれと思ひて、「さてもきはぐしかりける心かな」などいひてくらしつ。又の日雨のいたうふる、ひるまで音もせねば、「むげに思ひたえにけりな」といひて、はしのかたにゐたる夕ぐれに、笠さしたるわらはのもてきたる文を、つねよりもとくあけて見れば、「水ます雨の」とある、いとおほくよみ出だしつる歌どもよりもをかし。けさはさしも見えざりつるそらの、いとくらうかきくもりて、雪のかきくらしふるに、いと心ぼそく見出

事ないへる也。おちくぼの物語四册有り。中納言のむすめあまたあるなかに、王家統ばらの君、見め心ばへすぐれしな、繼母にくみてひきゝ所にすませて、おちくぼの君と名付たり。それな右近の少將といふ人、心ざしふかくて雨のふるよかよひそめたり。其比交野の少將といふ人も、此君に心かけたれど、早く右近少將の得給へるな、かたのゝ少將もどきたると、此草紙にはいふにや。ⓒそれもよべ云々あしあらひたるぞ 〔審〕彼少將雨のふる夜かよひそめて、又の日もおはしたり。さて三日の夜にあたりし夜、おちくぼの君に志有てつかふるあこぎといへる女、さま〴〵かくまへて、餅飯などな用意して待に、雨いたく降出したれば、少將今夜はえいくまじきよしいひやり給へば、女君「世にふるなうき身とおもふわが袖のぬれはじめける宵の雨哉」といひおこせしに、少將ねんじ佗びて、彼あこぎにかよふ帶刀と云男一人な具して、雨にぬれ〳〵かちにておはしたり。帶刀が曹子にて、まづ水もて御足すますと彼の物語にあり。これな此草紙によべなとゝひの夜も有しかばこそなかしけれとかけるにや。又足洗ひたるがきたなき故も、彼物がたりに委し。見て了簡あるべし。◎忘れめや 〔頭〕夏蔭翁云、萬葉十二「あはずして戀ひわたるとも忘れめやいや日にけには思ひますとも」此の歌にや。武藤翁云、萬葉四に「吾が命のまたけんかぎり忘れめやいやひにけには思ひますとも」此歌人口に膾炙せしにや。六帖四五兩卷に出てたり云々 ⓙ藏人の青色 〔頭〕上の所々に註しおけり。㊀ろうさう 〔春〕綠衫、六位の袍。〔頭〕裝束雜事抄に、平絹な紺に染めたる物なり。裏蘇芳。夏薄物。云々とあれど、紺とは縹色ないふか。西三條裝束抄には、四位以上一位まで黑。五位緋。六位は綠なり。此外の品なくなれりとも見えたるは、室町時代以後の制にや。當時猶六位は綠。七位は縹の別ありて、六位の袍な綠衫と稱せしなり。但し六位にても、藏人は麴塵の青色な聽されたり。是れ彼れ

あらずとも。と諸本下の。と文字を脱せり千本によりて補ふ

さらなり。いとさあらぬところも、直衣などは更にもいはず。狩衣うへのきぬ、藏人のあをいろなどのいとひやゝかにぬれたらんは、いみじうをかしかるべし。ろうさうなりとも雪にだにぬれなばにくかるまじ。むかしの藏人は、よるなど人のもとなどに、たゞあを色をきて、雨にぬれてもしぼりなどしけるとか。今はひるだにきざめり。只ろうさうをのみうちかづきためれ。衛府などのきたるはましていとをかしかりしものを。かく聞きて雨にありかぬ人やはあらんとすらん。月のいとあかき夜、紙のいみじうあかきに、たゞあらずともと書きたるを、ひさしにさしいれたるを、月にあてゝ見しこそをかしかりしか。雨ふらんをりはさはありなんや。

是れより前に雨を嫌ひ、月を好む由をいへる因みに、猶大かたの月夜と雨夜との優劣の評に及びしなり。㊀とほく物思ひやられ 〔書〕朗詠、三五夜中新月色、二千里外古人心。又 誰人隴外久征戍、何處庭前新別離。㊁こまの丶物がたり 〔書〕今の世に傳らぬ物がたりと見えたり、是も月夜のおもしろきことをいはんとて也。㊂もと見しこまにと 〔書〕大和物語に「夕されば道も見えねど古郷はもとこし駒にまかせてぞゆく」後撰集にもある也。此うたを詠吟せしさまにや。㊃たづねたるが 〔書〕春本「たてるかどあはれ也」とあり。安田躬弦は「がいとゝありけん、いの字落ちしならむといひ、千蔭本には「尋ねたるが、あはれなる也。」とあり。もし後撰に出てたる「夕されば」の歌ならば、尋ねたるがとある方、「駒にまかせてぞ行く」の詞にかなふやうに思はる。㊄かたの丶少將もどきたるおちくぼの少將 〔書〕是も雨の降につゞけて來たりし古

此の一節諸本前文のつゞきとすれと恐らくは別段ならむ

たづねたるが千本による春本にはたてるかどとあり

きにきたらん人はしも　㊀イ本「月のあかきにしも、過にしかた行末まで思ひのこさるゝ事なく、心もあくがれ、めでたくあはれなる事たぐひなくおぼゆ。それにきたらん人に十日二十日」とありと記せり。千蔭校本も同じ。

二六三　（月と雨との評）

月のあかき見るばかり、遠く物の思ひやられて、過ぎにし事のうかりしもうれしかりしも、をかしと覺えしも、只今のやうにおぼゆるをりやはある。こまのゝ物語は何ばかりをかしき事もなく、詞もふるめき、見所おほからねど、月にむかしを思ひ出でて、むしばみたる（しみのさしたる扇也）かはほりとり出で、もと見しこまにといひて、たづねたるがあはれなる也。雨は心もとなきものと思ひしみたればにや、かた時ふるもいとにくくぞある。やんごとなき事、おもしろかるべき事、たふとくめでたかるべき事も、雨だにふればいふがひなくくちをしきに、何か其のぬれてかこちたらんがめでたからん。げにかたのの少將もどきたる、おちくぼの少將などはをかし。それもよべをとゝひの夜も有りしかばこそをかしけれ。足あらひたるぞ、にくゝきたなかりけん。さらでは何か。風などの吹き、あら／＼しき夜きたるは、たのもしくてうれしうもありなん。雪こそいとめでたけれ。忘れめやなどひとりごちて、しのびたることは

なき所、人めつゝむべきやうありとも、かならず立ちながらも物いひてかへし、又とまるべからんをばとゞめなどしつべし。

◎例のひさし (註)前になかしき小廂といへる故、例のといふ也。◎雨のいみじう云々 (春)是れより兵部がいふ詞なり。(補)下の「皆忘れぬべし」まで也。◎などていふにか (春)兵部は、何とてかやうにいふ事ぞと、清女のあやしむ詞なり。(補)春本には「いふにかあらむを」とありて、註に此のをの字やすめ字也と見ゆれど、千蔭翁例の古本に校して「あらむ。さあらむをよべも云々」と訂したるいとよろし。扨「さあらむを」とは、兵部のいへる詞にあたりて、彼れはさいふを、自分の思ふ所は、毎夜頻りて見ゆる人の、今宵の雨にも來らむは、猶あはれなるべしとて、清女の意中を述べしなり。◎日ごろも見えず云々 (春)兵部が、日頃おぼつかなき事ありとも、といひしに答へ(反對)たる詞なり。◎こゝろざしあるにはえせじ。(補)日ごろは見えず、たま〳〵雨の一夜來たりとて、清女はさらに之を志深き人とはせまいとなり。◎人の心々 (補)兵部と清女との、心々のかはるをいふ也。春註に男の心々にてとあるは非なり。◎物見知り云々 (補)以下の文意を約めて解かば、物の分別もあり、情趣の心あるよろしき女と語らひ、其の外にも行きかよふ所あり、元來の本妻などもあれば、繁々も來ぬ人の、たま〳〵夜の雨をしのぎて來るは、情深き由を他人に語りつがせ、我が身を褒められむと、思ひてのわざにやとの意なり。◎作り事しても見えん (補)わざとかまえて逢はんとまでは、いかで男の思はんと也。◎されど雨のふる時 (補)これより清女の雨を好まざる事をいふ ◎いみじき細殿 (春)廊の局などの、面白き所にて逢ひても、雨には不興となり。(補)上に「にくゝて」とあるも雨がにくゝて也。それよりは月のあかきに來たらむはと、次の一節を呼びおこせり。◎月のあか

よりて補ふ

さあらむを千本による

傍線をひきたる文句諸本になし千蔭古本にありとて記入せり

いとあはれなる。日ごろおぼつかなうつらき事ありとも、さてぬれてきたらんは、うき事もみな忘れぬべし」とは、などていふにかあらん。さあらむを、よべも、それがあなたの夜も、すべて此のころは、うちしきり見ゆる人の、こよひもいみじからん雨に、さはらできたらんは、なほ一夜もへだてじと、思ふなめりとあはれなるべし。さらで日ごろも見えず。おぼつかなくてすぐさん人の、かゝるをりにも來んをば、さらに又こゝろざしあるにはえせじとこそおぼゆれ。人のこゝろぐ\なればにやあらん。物見しり思ひしりたる女の、心ありと見ゆるなどをかたらひて、あまたいく所もあり。もとよりのよすがなどもあれば、しげうしもえこぬを、猶さるいみじかりしをりに來たりしなど、人にも語りつがせ、身をほめられんと思ふ人のしわざにや。それもむげに心ざしなからんには、なにしにかは、作り事しても見えんともおもはん。されど雨のふる時に、たゞむづかしう、けさまではれぐ\しかりつるそらともおぼえず、にくゝて、いみじき細殿い、めでたき所ともおぼえず。ましていとさらぬ家などは、とくふりやみねかしとこそおぼゆれ。をかしき事あはれなる事もなきものを。さて月のあかきにきたらん人はしも、十日、廿日、一月、もしは一年にても、まして七八年になりても、思ひ出でたらんは、いみじうをかしとおぼえて、えあふまじうわり

千人物いふ
の蔭古木に

うへもつねに物御らんじに出でさせ給ふ　こよひはみなうちにねんとて、南のひさしにふたり（式部と清少也）ふしぬるのちに、いみじうたゝく人のあるに、うるさしなどいひあはせて、ねたるやうにてあれば、猶いみじうかしがましう呼ぶを、「あれ（后宮の御詞也）おこせ。空ねならん」と仰せられければ、此の兵部きておこせど、ねたるさまなれば、「更におき給はざりけり」といひにいきたるに、やがてゐつきて物いふなり。しばしかと思ふに夜いたうふけぬ。權中將（成信）にこそあなれ「こは何事をかうはいふぞ」とて、只みそかにわらふもいかでかしらん。曉までいひあかしてかへりぬ。「此の君いとゆゝしかりけり。さらに寄りおはせんに物いはじ。何事をさはいひあかすぞ」などわらふに、やり戸あけて女はいりぬ。

◎さしまじり心　〔春〕物にさし出る心なり。◎はらぎたなく　〔春〕意地わろき心なり。◎一條の院　〔春〕一條の南大宮の東二町と拾芥にあり。◎うへも　〔春〕こゝは后宮を申す也。◎南のひさし　〔春〕前の小廂とは別の所なり。此所は南側なれば、◎やがてゐつきて物いふ也　〔春〕彼の兵部、清少のおきぬ由を、戸たゝく男にいはんとて行きながら、やがて其男と語らふ也。◎權中將　〔春〕成信のこと。前に中將とかけるは、後の長德四年中將に昇進せしに因りてなり。◎曉まで云々歸りぬ　〔春〕成信の歸りし也。春の註に兵部とあるはたがへり。下に遣戸をあけて女は入りぬとあるが兵部なり。

つとめて例のひさしに人の物いふをきけば、「雨（兵部の詞也）のいみじうふる日に、きたる人なん

通釋には下に續けて「成信は口には斯くのたまひしに、次の兵部といふ女房など、わろき方の者をかたらひ給ひしと、非難せし也と解けり。◎物忌 〔頭〕上に註せり。◎くすしう 〔評〕實直くすむといはん程の語。◎名を姓にてもたる 〔評〕たとへば赤染衛門、藤式部などの類ひ、其の名を姓にてつきたる也。◎こと人の子に 〔評〕他家の平氏に養子に行きて、平兵部といふべきを、只もとの姓名を呼びて、若き女房などの笑ひし也。〔評〕按ずるに春註を始め、諸家皆名を姓にてもたる人といふを、次の兵部といふ下臈女房と同一人と見られたれど、頗る疑はし。必ずや別人ならむ。其の故は名を姓にてもたるとのみいへるは、憚りて其の稱を明かにせざる遠慮に出でたるならずや。且又「有樣も異なる事なし」と、其の容儀を評したる詞の直下に、「兵部とてをかしきかたもなきが」と、其の名を呼び其の風姿を評せしも、重複矛盾すれば、別人なる事著し。仍ておもふに、「有樣も異なる事なし」の下、紙一枚ばかり落ちたるならむ。此の間に、成信中將の、物忌して名を姓にもたる女房の、人がらよくもあらぬと語らひし物語ありしならむ。さて後更に「兵部とて」云々と書出し、中將のこの兵部のやうなる、「をかしき方もなき」女とも親しくせし由の物語にうつりしなるへし。斯く考へて、次下を別の物語と定めたるはいかに。なほ後賢の研究を竢つ。

兵部とてをかしきかたなどもかたきが、さすがに人などにさし交(マジ)りごころなどのあるは、御前わたりに見ぐるしなど仰せらるれど、腹ぎたなくしりつぐる人もなし。一條の院につくらせ給へる一間の所には、にくき人をば更によせず。東の御門(ミカド)につとむかひて、をかしき小びさしに、式部のおもととともによるもひるもあれば、

いみじうめでたし。

㊀うら／＼とある云々 ㊁長閑なる晝中また夜中に、清少后宮の御側に侍するに、殿上の藏人た、主上の呼び給ふ御聲、きゝ付けたる時の感想なり。

二六二（成信の中將）

成信の中將は、入道兵部卿の宮の御子にて、かたちいとをかしげに、心ばへもいとをかしうおはす。伊豫守かねすけがむすめの忘られて、伊豫へおやいゐてくだりしほど、いかにあはれなりけんとこそおぼえしか。あかつきにいくとて、こよひおはしまして、有明の月にかへり給ひけん、直衣姿などこそ。

その君つねにおはして世の物がたりし、人のうへなどわろきはわろしなどのたまひしに、物いみなどくすしうするもの丶、名をさうにてもたる人のあるが、こと人の子になりて平などいへど、たゞもとのさうをわかき人々ことぐさにてわらふ。ありさまもことなる事なし。

その君春本にはそのかみとあれど千本によりて改む

㊂成信 ㊄源成信、民部卿致平親王の男、長德二年左中將、前に人の聲をよく聞き知りたまひし人なり。⊙.

かねすけ ㊄誰れと知らず、㊃あかつきに云々 ㊄出發の前夜、緣絕えし女の許へ告別がてら訪らひし也。

㊄わろきはわろしとのたまひしに ㊄春註は、此の句にて切り、例の書きさしたる文法なりといへれど、

壺に水を入て箭をたてゝ、其箭に四十八剋をつけて、彼銅壺の水のしたゝりて、一つのきざをあらはせば是一剋也。二つあらはせば二剋也。かくて四つあらはせば一時也。其故に子一つ二三四、丑一二三四などいふ也。此漏剋の箭のきざの數、或は百剋にせし事もあれど、此草紙などの比は四十八剋にや。すべて何も〳〵四つのみぞくひはさしけるといへり。◎ごほ〳〵　(補)春註しはぶきの聲といひ、濱臣裝束のすれる音といへれどいかゞ。沓の音ならむ。◎つるうち　(補)鳴弦（メイゲン）といひて、瀧口夜警の士矢をば矧げず、唯弓弦（ユヅル）を鳴らすこと。是れ妖怪魔鬼を拂ふ厭勝にする也。◎なんけ　(春)何家の何と名のる也　(補)然らず。けは衍にて何の某なり。何とは官名を稱する事なり。禁中にて何家など唱ふる例なし。◎時の杭　(補)西宮記（臨時ノ四）に、「下侍ノ東廊ノ下御膳棚ノ東立ニ時ノ簡」とある、此の簡に、四刻毎に杭を差すなり。◎子九つ丑八つなどぞ　(春)是よりのつねの時をうつ數、子は九、丑は八時なれば、里人さやうにいへど、禁中に時を奏し、時の杭をさすは、漏剋にしたがひて、何時も四つゝばかり也と、清少まさしく、后宮にみやづかへして、見きゝたりし所をいへる詞也。里びたるとは里めきたる也。平人をさとびたる人といふ也。延喜式陰陽寮云、諸時ニ擊レ鼓子午ハ各九つ。丑未ハ八。寅申ハ七。卯酉ハ六。辰戌五。巳亥四云々。

旁線をひきたる句春本になし抄及ひ千の一本による

二六一　（日のうら〳〵と）

日のうら〳〵とあるひるつかた、又いたう夜ふけて、子の時などいふ程にも成りぬらむかし、おほ殿ごもり、おはしましてにや、など思ひまゐらする程に、「をのこども」とめしたるこそ、いみじうをかしけれ。夜中ばかりに、又御ふえのきこえたる

㊂あつま屋（呂榮閑御説、四阿は御所作りなどの、雨だりの四方に落つるをいふ也、倭名抄に四阿とかきて安津末夜（アヅマヤ）と訓ぜり。狩谷氏云、上古貴人之家、如レ今俗所レ謂切妻ノ民屋ハ皆爲ニ四注屋一云々とて、棟を置かず、今俗方桁造と呼ぶ構へをいふとし、アヅマヤといふは、邊鄙屋（イナカヤ）の義とせり。後世、庭園に四本の柱を立て草の屋ばかり葺きて、風流めかしたるを東屋といふは、古代の遺風なり。

ならして春本などしてとあれど抄本によりて改む。なんけ千陸翁古本一本によりてけの字を削れり

二六〇（時奏する）

時そうするいみじうをかし。いみじう寒きに、夜なかばかりなどに、ごほごほとごほめき、くつすりきて、つるうちならして、なんけの何がし、時うしみつ、ねよつなどあてはかなる聲にいひて、時の杭（クヒ）さす音などいみじうをかし。子九つ。丑八つなどこそ里びたる人はいへ。すべて何も何も四つのみぞ杭はさしける。

㊀時そうする（河海抄云、奏時事、上古隨ニ陰陽寮漏剋一奏レ之、近代指計藏人仰レ之、丑杭以後爲ニ當日分一、源氏奥入云、亥一剋左近衞夜行。官人初奏ニ時終ニ子四剋一下略。愚案、禁中に夜時を奏する事あり。昔は陰陽寮の漏官に漏剋博士有て、十二時の一時を四刻にわりて、漏剋を得て守辰丁とて、其漏剋を守る者有て、其時々に鐘鼓をうつ也。夜に入て亥の一剋より左近衞夜行するに、官人亥の一剋のよし時を奏せし也。丑の一剋より右近衞夜行す。桐壺卷に、右近のつかさのとのゐまうしの聲きこゆるは、丑になりぬるなるべしといへるも是也。然るに近代順德院の御時のころは、藏人さしはからひて時を奏せしと也。漏剋とは銅

平岡）第四箇大神（伊勢太神宮）若宮ハ保延ヨリ以後造ニ神殿ニ下略。◎さほどのなどいふ名さへ（春）佐保殿。奈良にあり。淡海公の家。冬嗣の大臣の家と拾芥に有り。◎平野（春）延喜式第一曰、平野神四座祭、今木。久度神。古開神。相殿比賣神。◎秋にはあへずと（春）古今「千早振神のいがきにはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり」貫之。◎みこもりの神（春）三代實錄二曰、大和國宇陀水分神。吉野水分神。葛木水分神云々。（春）夏蔭云、みこもりの神は御子守。また子守と聞ゆるからに、なかしとはいへるならむ。直按するに、みこもりの神はさてもあるべけれど、其れより上の神々は、同じく神と申す中にも、殊に朝廷の御崇敬あつく、行幸もあり、勅使奉幣などもある神社なれば、其の御名をつられて書けるなるべし。

二五八（崎　は）

さきは。からさき。いかゞさき。みほがさき。

㊁からさき（春）近江也　◎いかゞ崎（春）八雲河内云々、鈴木氏云、いかゞ崎は、かげろふの日記、石山まうでの所にも見えて、近江なることあきらけし　◎みほがさき（春）八雲云、近江。万葉まなかの浦云々、又曰みほの崎出雲云々兩所也。

二五九（屋　は）

屋は。まろ屋。あづまや。

㊀まろや（春）蘆の丸屋等ちひさき賤の屋を云、（春）屋の棟を立てず、葺きおろしに造りたる故丸屋といふか。

おはします
千本による

みゆきなどに、なぎの花の御輿に奉るなどいとめでたし。大原野、賀茂はさらなり。稻荷、春日。いとめでたくおはします。佐保殿など云ふ名さへをかし。平野はいたづらなる屋ありしを、こゝは何する所ぞととひしかば、みこしやどりといひしもめでたし。いがきに蔦などのおほくかゝりて、紅葉の色々ありし、秋にはあへずと貫之が歌思ひ出でられて、つく〲と久しうたゝれたりし。みこもりの神いとをかし。

○松の尾　[□]延喜式九、曰、山城國葛野郡松尾神社二座。○八幡この國の帝　[春]人王十六代應神天皇にておはします也。廿二社次第曰、八幡三所、應神天皇、神功皇后、玉依姫、貞觀元年九月十九日、行敎和尙於二男山峰一建立。○みゆきなどに　[春]八月放生會などに神幸あり　[□]行幸の誤なるべし。簾中抄圓融院の條に、此御時初めて八幡平野行幸あり」と記し、なほ公事根源によりても、天皇の行幸なること著し。◎なぎの花の御輿　[□]葱花輦のこと。神事また尋常の行幸に奉るなり。なぎの花の圓く尖りたる形に似たる珠を、屋上の飾りにつけたるにより、此の名あり。◎大原野　[□]玄旨法印云、嘉祥三年に閑院左大臣冬嗣、わが氏神春日を勸請申されたり。[□]乙訓郡に、◎賀茂　[□]公事根源云、下鴨は御祖。上賀茂は別雷。此御祖の神を玉依姫と申す。賀茂建角身命の女也。◎いなり　[□]公事根源云、かの社の禰宜祝の說には、和銅年中にはじめて伊奈利山にあらはれ給ひけるとかや。或は弘法大師東寺の門前にて、稻負たる老翁にあひ給ひけるを、東寺の鎭守に勸請申されたると申說も侍る也。扨いなりとは稻を荷ふと書たる事也。猶諸書にくはし。○春日　[春]廿二社次第曰、第一建甕槌命（常陸鹿島）第二齋主命（下總香取）第三天兒屋根命（河內

綢着レ之。◎しらがされ ㊍桃華云、白襲といふは、綾もしは平絹を、表裏白堂にして着す。或は表裏只張ル。四月十月更衣の外は暑月に着レ之。

二五五 （あふぎのほねは）

扇の骨は。あをいろはあかき。むらさきはみどり。

◎あをいろにあかき ㊍青色の地紙には赤骨。紫の地紙には緑の骨と也。

二五六 （ひあふぎは）

檜扇は。むもん。からゑ。

㊀ひあふぎ ㊍桃華云、檜扇は二十五枚、若年の時は白糸にてとぢて、糸のあまりを藤の花をおき物にして、かなめのうへより二三寸持所をのこすべし。束帯の時は夏も檜扇を持也。これは一條殿男の檜扇をしるさせ給へるおもむき也。女房の檜扇色々あり。とぢさまぐ也。糸のあまりをあはび結びにして、花をむすびつけても用ゆ。かなめに蝶鳥など金にてうちて用ゆ。㊀むもん ㊍無地の事なるべし。

二五七 （神は）

神は。松の尾。八幡（ヤハタ）。此の國のみかどにておはしましけんこそいとめでたけれ。

まゝ寫しおくとの注意がきなり。㊂ひで　春註秘點付くるまに書損じたりといふにやとあり。秘にはあらで批點かとも思ひたれど猶心ゆかず。然るに武藤翁は古本によりて「ひてつくるま」と改訂し、さて云く、古本には、くるまを車とかき、別本にはくるまの下に「のりてし」の四字あれば、「くるま」は車なること明らかなり。さてひとつ車といふべきを、ひてつ車と云ひ僻めたる也。上に「ひとつ車といふべきた」といはぬは、省筆なりと。㊀もとむといふ事を　㊁これも同じ翁は、もとむといふべきを「みとむ」などいふと也。といへり　げに古本及び異本の文字に從へば、然解すべきならむ。㊂わが詞にもてつけて　(春)卑しき言などを、我が常の詞にもてつけていふはわろしと也。

二五四　（下襲は）

下襲は。冬はつゝじ。かひねりがさね。すはうがさね。夏はふたあゐ。しらがさね。

㊀したがされ　(春)打下襲。張下襲。染下襲など品々あり。公卿及禁色の人は綾を用。非色の人は平絹也。胡曹抄に委し　㊁冬はつゝじ　(春)桃華蘂葉云、禁色をゆるされぬ殿上人の平絹の下襲を躑躅の打下襲といふ。それも裏はふしがねにて染る也。又云、染下襲。躑躅は表すはう、うら靑打つ。㊂かいねりがされ　(春)桃華云、掻練。うらおもて紅。打。或はうら張。又云ニ火色一自レ冬至レ春。㊃すはうがされ　(春)桃華云、すはうの打下襲。蘇芳の色をも、紫の如くふしがねにて染む。又云、夏の下襲を蘇芳の下襲と名付く。表白莹裏蘇芳濃打。㊄ふたあゐ　(春)胡曹抄云、以ニ赤花及ニ靑花一染レ之。無文穀或生平絹。非色人用レ之。或公

みとむなんどは皆春本見んとみなとあるを例の異本及び古本によりて改めたり

定本のまゝなどかき付けたるいとくちをし。ひてつくるまになどいふ人もありき。もとむといふ事をみとむなんどは皆いふめり。いとあやしきことを、男などはわざとつくろはで、ことさらにいふはあしからず。わがことばにもてつけていふが心おとりする事也

◎ことばの文字 〔釋〕此の草子の始め（四段ことと〳〵なるもの）に「下衆の詞には必ず文字あまりしたり」とあり。そこにも註したる如く、「ことば」とは當時の俗のつかひざま、人に語る談話のことにて、文字といふが詞のこと也。源氏物語などにも、詞といふべき所を文字といへる所多かり。されば此の條は、人に語る談話中に、詞つかひのあやしきはわろしとの意なり。◎文字一つにあやしくも云々 〔補〕唯一語にて、怪しくも上品にも卑陋にも聞ゆと也。◎かう思ふ人 〔春〕清少みづからをいへり。◎いづれをよきあしき云々 〔評〕我がすぐれてこそ、人の善惡もいはめ。我すぐれずして外の善惡はいかでか知らむと也。◎人を知らじ云々 〔通〕他人の何と思ふかは知らじの意にて、俗に人はともあれかくもあれかまはずといふとなり。◎なんきの事 〔□〕春本、疑義の事とあるは聞えず。武藤氏考異に「なにごとも」とあり。それにても聞ゆれども、活字本に「なんなき事」とあるを採らば、何となき事とありし、と文字を落したるならむ。◎物語こそ云々 〔補〕これより又書寫のあしき條々をいふにて、前の詞つかひとは別なり。◎なほす 〔□〕直す。改むる意。後日書き直す由を、本文の旁にかきおくなり。◎定本 〔□〕もとしやうほん（正本）とありしを「こじやうほん」と讀み違へ、愁に定本の漢字に改めしにや。正本は正しき原本の事なれば、原本の

白うてぞ直按こそとありしを誤り寫したるならむ

なんぎの事考異になにごとと有り又活本にはなんなき事とあり註に辯ずべし

れど、猶ひとへは白うてぞ。

ヨロヅ

単に文字の如く裏なきを衵（アコメ）に重ねて著る。白きは老年の料にて、大かたは紅なり。◎ひのさうぞく 補 晝の装束の事上に注せり。◎あこめ 補 衵。束帯の時下襲の下に重ね、其の下に単（ヒトヘ）を著る例なり。委しくは例の拙著に示しおけり。◎かりそめにきたる 補 此の文意心得難きを試みにいはゞ、夏の装束には、衵の裏を引きへぎて、一重の衣にして著る例もあれば、さる略装には、衵の裏なきを著るも宜しけれど、猶色の變りたるは見苦しとの意ならむか。◎ねり色 補 白き絹を練りたる也。色薄黄色なるを、重ね著る事も常あれど、練絹の黄ばみたるはよし。白また紅の黄ばみたるは古びたる色なればわろしと也。

二五三（わろき物は）

わろきものは。ことばの文字あやしくつかひたるこそあれ。たゞもじ一つにあやしくも、あてにも、いやしくもなるは、いかなるにかあらん。さるはかう思ふ人よろづの事にすぐれてもえあらじかし。いづれをよきあしきとはしるにかあらん。さりとも人をしらじ。たゞさうちおぼゆるもいふめり。なんぎの事をいひて、其の事をさせんとす。いはんとすといふを、と文字を失ひて、たゞいはんずる。里へ出でんずるなどいへば、やがていとわろし。まして文にかきてはいふべきにもあらず。物語こそあしうかきなどすればいひがひなく、つくり人さへいとほしけれ。なほす。

ⓒ夏むしのいろ　〔評〕栲華栞葉に、裏のなきすゞしの惣名を蟬の羽色といへり、其たぐひにや。〔評〕岩崎氏も、後撰集に蟬を夏虫とよめる歌ありといへるなどより、大かた蟬の羽と註すれど、夏虫とは青蛾のことをいへる所多し。壺井義知翁は瑠璃色のこと也といへり。さらば淺葱の濃きにて、五月以後着ㇾ之御抄に見ゆ。

二五一（かりきぬは）

狩衣は。かうぞ（香）のうすき。白き。ふくさ。あか色。松の葉色したる。青葉。さくら（表白裏赤花）。やなぎ（表青裏白）。又あをき。ふぢ。男はなにいろのきぬをもきたれ。

◎ふくさ　〔解〕糊をひかざる絹にて縫ひたるなり。何にても軽く柔らかき物をいふ。略儀の品なり。◎あか色　〔解〕打ちまかせては蘇枋色をいふ。春本ふくさの赤色とつゞけたるは誤なり。抄及び異本によりての字を削る。ⓒ松の葉色　〔解〕春の傍註に、表青裏紫とあるは、松重の事にてこゝにかなはずや。唯青緑色なるべし。ⓒ青葉　〔解〕青朽葉の落字ならむか。青葉色といふ稱いまだ見聞かず。ⓒきたれ　〔解〕着てあれなり。異本及び抄本に據る。他本になきは落ちたる也。

二五二（ひとへは）

單は。白き。ひのさうぞくの紅のひとへ。あこめなどかりそめにきたるはよし。されど猶色さばみたる（紅の色のかへりたる也）ひとへなどきたるは、いと心づきなし。ねり色のきぬもきた

づきたる。

〔語〕うたは 〔頭〕謡ふ歌のこと也。◎ふぞく 〔語〕風俗歌の略。もと諸國の民謠にて、其の地の風景人情等をうたへるもの。上品なるは神樂にも用ひられ、都人士間にも弄ばれたるなれど、今傳はるもの多からず。春註に風俗の詠物とてあり。拾芥風俗部云、鳴高又號二大宮一難波乃都布良江(ツブラエ) 玉垂。知々良々(チ・ラ・)。東路。筑波山。甲斐がね。伊勢人。常陸歌。荒田。大鳥。八乙女。我門。これら謠物の名なるべしと有。◎杉たてる門 〔補〕風俗歌の詞なるべし、古今集雜の部に、「我か庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」といふを載す、之を風俗の曲節に謠へるよりいふか。◎神樂歌 〔春〕内侍所の御神樂の詠物也。庭燎(ニハビ)、採物(トリモノ)の歌等あり。◎今やう 〔春〕今様歌とて、催馬樂朗詠などのやうに、酒宴等にうたふ物也。慈圓の御作の今様うた拾玉集にあり。〔補〕今様といふことに就いて、松の落葉に長き辯あり。大要ないはゞ、古き謠ひものなる催馬樂などに對して、その時々新しく作り出したるを、今様といへる由、又七五の句八句と、文字の數を定めて、一つの體(フリ)となりたるは、永久の頃よりなる由をもいへり。永久は鳥羽天皇の御世なり。さて次の詞に「長く曲づきたる」とあるに據れば、當時既に一體の曲節定まりありしが如し。さらば今様の稱は、もと歌の體を云ふにあらで、曲節の新様なるよりの名ならむか。

二五〇 （さしぬきは）

指貫は。むらさきのこき。萌木(もえぎ)。夏は二藍。いとあつき頃夏虫の色したるも涼しげ也。

〔釋〕舊版は、皆是れまでを積善寺一切經供養の全文とせり。然るに、千蔭校本、通釋本には、左の一節を引きつゞけて載せられ、鈴木氏增訂本には、イ本にありとて、上欄に記せれど、上よりの文勢を按ふに、「御心おごりも理り也。」にて完結せり。左の文は、後に追記したるなるべし。詞ゆるみて聞ゆ。

「されどそのなりめでたしと見奉りし御ことゞもゝ、今の世の御ことゞもに、見奉りくらぶるに、すべてひとつに申べきにもあらねば、ものうくて、おほかりしことゞもみなとゞめつ。

二四八（たふときもの）

たふときもの。九條錫杖。念物の忝かう。

〔釋〕九條錫杖は經文の名なり　抄に云、眞言八祖の内、不空三藏の作に、九條錫杖といふもの有り。それに曲節をつけ、聲明にする也とて、經の文をも出したれど長ければ略す。直云、錫杖の功德を述べたる經にて、此の經を讀誦する曲節每に、錫杖を振るが、其の音を聞けば、一切衆生菩薩提心を起し、諸佛も之を持て成佛したまふとあれば、尊きなるべし。さて錫杖は杖の先頭に金環あり。環中に塔婆形を立て、環には小輪九個を貫いて、之を振れば小輪の音錫々たるを以て、錫杖と名づくといふ。（一）念佛の廻向　〔吞〕光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、觀經の廻向の文也。惡心の釋に云、廻ニ所作衆ニ趣ニ向於菩提ニ謂ニ之廻向一

二四九（歌　は）

うたは。ふぞくの中にも杉たてる門。神樂歌もをかし。今やうはながくて、くせ

其の傍に大行道を經營したるが、遂に本文に入りたるならん。◎導師 〔評〕法會に勤仕する衆僧中の首座なり。◎廻向 〔評〕佛教の語。己が修したる諸善萬行の功德を他へ廻轉し向けて、一切の衆生のために、佛果を成就するの謂なりと。此處に一切經供養の善行を、廻向する意の願文を唱することなり。◎まひ 〔評〕舞樂。〔評〕大法會の時、必ず演ずる法樂。◎あぐら 〔評〕胡床。上座(アグラ)の義といふ。當時のは床几の横廣くして、座には網を千鳥掛にして、折りたゝめる樣に作りたるもの。◎いらせ給ふべし云々 〔評〕后宮禁中へ也。則理其のまゝ后宮の御供申せとの宣旨となり。◎殿にも御消息 〔評〕道隆公へも、后宮を參らせ給へとの勅なりと也。◎ちかのしほかまなどやう 〔評〕女院后宮と近〻おはしながら、御對面なかりし心にや、「みちのくの千賀のしほがまちかながらからきに人にあはぬなりけり」續後撰の歌ながら古歌也。◎かたへぞ仕うまつる 〔評〕女院を御迎へに參りし人々も、此の度は送り奉らず。院司などばかり、御供仕う奉れりとなり。かたへは片方(カタヘ)にて、片一方のことなるが、當時の俗半分の意にいへり。◎二條の宮に 〔評〕はじめ二條の宮に還御ならむとて也。◎内にはとのゐ物もて來なんと 〔評〕后宮の御供にて、參内せし女房は、從者の寢具持てこんと也。◎きよく 〔評〕俗言のサツパリに同じ ◎あざやかなる云々 〔評〕晴の衣裳の、鮮麗にして身に著(キ)なれざるをいふ。◎のぶること 〔評〕考異にのぶるは延引なり。源氏若菜に「さりとてさのみのぶべきことにやは」又早蕨に云々、などあるに同じと記せり。◎すぐせ 〔評〕宿世。我が前世の果報見ゆると、御よろこび也。◎御心おごり 〔評〕御果報を御自讃なり。流布本、心おちゐるとあるに從へば、御安心と譯すべく、それにても聞ゆれど、上に宮に對し奉りて、いかゞ御覽ずると、得意の詞より見れば、御安心といはんよりは、御自讃とする方よからずや。仍てイ本「御心おごり」とある方を採りたり。

の訂したるに從ふ

のぶること千蔭一本による考異も同じ

めでたき。夜さりつかた式部のぞう則理(ノリマサ)參りたり。「やがて夜さり(禁中へ也)いらせ給ふべし。御供にさぶらへ。」と宣旨侍りつ」とて還りも參らず。宮は猶「かへりてのちに」とのたまはすれども、又藏人の辨まゐりて、殿にも御消息あれば、只仰せのまゝとて、いらせ給ひなんとす。院の御さじきより、「ちかのしほがま」などやうの御せうそこ、をかしき物などもて參り通ひたるなどもめでたし。事はてて院かへらせ給ふ。院司上達部など、此の度はかたへぞつかうまつり給ひける。宮は内に參らせ給ひぬるも知らず。女房の從者(ズサ)どもは、二條の宮にぞおはしますらんとて、そこに皆いきゐて、まてども〳〵見えぬほどに、夜いたう更けぬ。内にはとのゐものもてこなんとまつにきよく見えず。あざやかなるきぬの身にもつかぬを著て、寒きまゝに、にくみはらたてどかひなし。つとめて來たるを、「いかでかく心なきぞ」などいへば、のぶることもいはれたり。又の日雨のふりたるを、殿は「これになんわがすぐせは見え侍りぬる。いかゞ御らんずる」と聞えさせ給へる御心おごりもことわりなり。

◎蓮の花の赤きに一花づゝ　圖赤き蓮の造花に、經卷をのせて捧げ歩くなり。◎大行道　圖法會の作法。梵唄(ボンバイ)とて、經の文を諷誦しつゝ、佛壇を周り歩くこと。按ずるに、千蔭校本、大行道の三字、古本イ本になしとて削れる從ふべし。上の僧俗たち、經卷を捧持してつゞき歩くが、卽ち行道の作法なれば、後人の、

いへるにや
〔但し給その
その文字誤な
るべし

まゐりて諸
本まちてと
ある非なり
今古本一本
により千蔭

事はじまりて一切經を、蓮の花のあかきに一はなづゝにいれて、僧俗上達部殿上人地下六位何くれまで、もてつゞきたるいみじうたふとし。大行道、導師まゐり、廻(ヱ)向(カウ)しばしまゐりて、まひなど日ぐらし見るに、目もたゆくくるし。內の御つかひに五位の藏人まゐりたり。御さじきのまへに、あぐらたてゝゐたるなど、げにぞなほ

と也。〔春〕仍て御裳唐衣の禮服を、匠がせ奉り給へと也。◎御棧敷の御前に陣をすゑさせ〔春〕かゝる例は、天皇、皇后、皇太子の外なければ也。㊀赤色に櫻の五重の唐衣〔春〕清少の服色なり。赤色は表著の色、櫻は表白裏赤にて、中重(ナカヘ)を附けて五重(イツヘ)にしたるならむ。新參の清女なれば、未だ織物禁色を許さるべくもあらねに、櫻の紋にはあらざるべし。且短き唐衣、櫻の紋いかで僧衣に相應せむ。㊀法服〔春〕僧の正服。法體裝束抄に、赤色袍裳とありて、上下別なり。裝束圖解に就いて見よ。赤色の袿を、法服にからむとなり。㊀さやうの物を切りしゝめ〔春〕僧服樣の物を切り縮めて表著にしたるかとの戯言なり。㊀清僧都のにや〔春〕法服にからんとのたまふきぬは、清僧都の衣の事かと也。清少納言なれば、姓をよびて清僧都との給ふ也。法ぶくにつきてのたはふれ也。〔春〕清僧都の衣を借りたるかとならむ。按ずるに、當時說經師清範といふ僧、搢紳家に出で入り、世に知られて高名なりしかば、清範の清にかけての戯言ならずや。㊀僧都の君〔春〕隆圓、關白の末子。㊀ばさう〔春〕菩薩。㊀僧綱の中に〔春〕僧正、僧都、律師を僧綱といふ也。僧都にてましませば、僧綱のなかに、威儀を正してこそおはせめと、隆圓に女房の申すたはふれ也。此時隆圓なさなかるべし。㊀威儀具足〔春〕法華經などに多き詞にて評せし也。㊀松君〔春〕伊周の子道雅、二三才にや。

◎今いらへ云々　前田本に「いまうへけふは人人しかめるはと申給そ」とあり。うへとは闕白の室をいふにて今日は新奥様も人々しと小袿姿の盛装を見て戯れ

をかし「僧綱の中に、威儀具足してもおはしまさで、見ぐるしう女房の中に」などわらふ。大納言殿御さじきより松君ゐて奉る　えび染のおりものゝなほし、こきあやのうちたる、紅梅のおり物などき給へり。御供に例の四位五位いとおほかり。御さじきに女房の中にいれ奉る。何事のあやまりにか泣きのゝしり給ふさへいとはえばえし。

◎所々の御さじき　〔通〕此の日は女院の外にも、彈正尹爲尊親王、四品敦道親王、右大臣道兼以下諸卿參入。と紀略にあれば、此の御方々の棧敷なるべし。◎大納言二所　〔春〕伊周と道賴と也〔通〕道賴は異腹の兄なる事、上にあり。◎陣　〔通〕皇后のおはしませば、御棧敷の前に近衞の警護に侍するをいふ。◎てうど　〔春〕調度。武官の弓箭など也。〔通〕おひてとあるは胡籙のこと。◎裳の上に小袿など　〔通〕唐衣なるべき所を、小袿著たる例、源氏などにもあり。唐衣よりは聊略式とおぼし。◎今いらへけふはと申給ひそ　〔春〕いらいは以來也。今より以來にも、けふにかく窮屈なる目見しと、申給ひそと也。各裳唐衣にて行儀正しき故也。〔通〕この說いかゞあらむ。千蔭本に「今以來は人にしかめるは」とあれど、是も誤脫もやあらむ聞えず。通釋にも「異本さま〴〵にていづれも解しかたし」と見ゆ。◎三四の君宮の御裳　〔通〕三四の君は前にありし中宮の御妹なり　此の二人に、后宮の御裳を取がせ奉り、安らはせ奉れと仰するなり。考異には、古本に三位の君とありて、藤三位などの類、女官なるべしといへど、關白より女官を呼ぶに、君とはいふべくもあらず。君ゐるは假名の體回に似たれば誤寫なるべし。◎此の中の主君にには　〔春〕此中には、后宮こそ主君にておはせ

「三四の君」の下舊本は「宮の」の二字を脱せり千本によりて補ふ又考異には三四を三位に改めたれと千蔭校本は改めず。

女院の御さじき所々の御さじきども見わたしたるめでたし。殿はまづ院の御さじきにまゐりたまひて、しばし有りてこゝにまゐり給へり。大納言二所、三位の中將は陣に仕へまつりけるまゝにて、てうどをおひて、いとつき〴〵しうをかしうておはす。殿上人四位五位こちたううちつれて、御供に侍ひなみゐたり。入らせ給ひて見奉らせ給ふに、みな御裳唐衣、みくしげ殿まできたまへり。殿の上は、裳のうへに小袿をぞき給へる。「（関白どのゝ詞也）繪にかきたるやうなる御さまどもかな。今いらへけふはと申し給ひそ。三四の君宮の御裳ぬがせ給へ。此の中の主君（スクン）には、おまへこそおはしませ。御さじきのまへに陣をすゑさせ給へるは、おぼろけの事か」とてうちなかせ給ふげにと見えてみな人もなみだぐましきに、あかいろにさくらの五重のからきぬを着たるを御らんじて、「法服のひとくだりたらざりつるを、にはかにまどひしつるに、これをこそかり申すべかりけれ。さはもし、さやうの物を、きりしめたるにか」との給はするに又わらひぬ。大納言殿すこししぞきゐ給へるが、きゝ給ひて、「（伊周の言也）清僧都のにやあらん」との給ふ。ひと言としてをかしからぬ事ぞなきや。僧都の君（隆圓の事也）あか色のうす物の御ころも紫のけさ、いとうすき色の御ぞども、さしぬきなどき給ひて、かしらつき青う美しげに、地藏ぼさちの御やうにて、女房にまじりありき給ふもいと

見ゆ。◎富小路右大臣 〔釋〕時平二男顯忠。◎さばとて 〔釋〕然らばとて也。◎下にゐたる人々 〔釋〕長押の下に居たる女房等。◎殿上ゆるさるゝうどねり 〔釋〕考異には古本によるとてことねり（小舍人）と改めたれど中々に誤れり。千蔭翁の校本には、猶流布本と同じく、うとあり。是れ極めてよろし。小舍人にはあらで、内舍人の方なり。然いふ故は、内舍人は中務省侍從の次位にありて、良家の子の、禁中殿上の事に習はんがため、之に補すといふ。百寮訓要抄にも、是れは童殿上などのなる官也。未だ元服せずして、殿上の簡に付くは、皆内舍人なり」と記されたるにて知るべし。小舍人は、藏人所出納の次席にて、固より殿上などすべき任ならず。然るを通釋に、禁秘御抄を引いて、云々せられしは、御抄の文を誤解せるなり。御抄の文「清涼殿御裝束之時、類好ニ昇殿一予以ニ藏人一度々追下ス」と書かせ給へるは、下りたる世の弊風を、叱し給ひしなり。卽ち元來昇殿などすべからざる小舍人が、事に託して昇殿を望むを其の都度追下し給うて、許し給はずとあるならずや。これを昇殿聽さるゝ例に引かれしは、千慮の一失といふべし。◎わらにせんと云々 〔釋〕是れも女房一人がいふ詞なれど、脫字もやあらむ明瞭ならず。笑はせんと解きても、猶聞えず。強ひていはゞ、殿上童の勤仕をせんとかと冷笑したるにや。◎むまさへのはどこそ 〔釋〕此の詞も女房の他の一人が、いへるとして、通釋に「宰相の君の父重輔は、右馬頭なればかくいへるなるべし」とあるは考へ過ぎたらずや。按ずるに、是れは清少の詞にて、女房たちの冷笑に答へしなり。上よりの文義は、最初の一人が、殿上許さるゝ内舍人ならむと笑へば、第二が云々せんと思ひ給へるかといへば、清少答へて、否、殿上の内舍人童にはあらず。やう〳〵馬副童の程度にこそと、口にはいへど、御帳に入りゐて見るは、面目ありといふ意ならむ。◎ふきがたり 〔釋〕濱臣云、今俗、吹聽の吹の意かと、然るべし。

◎まゐりたれば 〔補〕后宮の御前になり。㊀まだ唐(カラ)の御衣裳(ミソモ)云々 〔補〕御桟敷の御張の中に入らせ給ひても、未だ禮裝を改め給はぬを、恐れ多しと思へる也。㊁よろしからむや 〔補〕此の詞、上にもありき。一通りならむやの意。㊂ざうかん 〔補〕象眼。唐のきぬの名也。桃華御說也。ほそき泥繪などしたる也。（師說）〔補〕絹の名といふは信じ難し。伊勢安齋翁は、古代の絹のすゝけたるを見たる中に、細く黑く小葵といふ紋の如くなるありて、其の縁(ヘリ)を金泥にて細く色どりたる、今日なれぬ物なり。是れや象眼ならむ。象は形大にして眼は細きゆゑ、細き文を象眼といへるなるべしと云々。田沼善一ぬしには、紋樣の縁(ヘリ)を色糸にても金泥にても、細くまとひとりて、其の紋樣の際(キハ)をあざやかに見する爲方(シカタ)ありて、そを然いへりけむ。象の字は物の形をいへるにて明かなり。眼は隈の字なるを、いつか眼とかく事になれるならむ。然らば音を借りたる也。義は隈の字と見るべし。隈の字は下簡ノ切、音闇、とあればカンと唱ふべし。とて、伊勢氏の、象の目の事と見たるは、字に泥みたるにてわろし」といへる、此の說然るべし。序に此の御服裝を、次第のまゝにいはゞ、象眼重ねたる御裳の上部は、赤色の唐衣、表衣は葡萄染の五重織物、その下は柳重ねとて、表靑裏白きなり。紅の御衣とあるは內衣のこと、後世の小袖にあたる。㊁大夫 〔補〕中宮大夫道長。後の御堂關白なり。◎院の御供にきて 〔補〕女院の供奉にて、人に見られし同じ下襲をきて、又后宮の御供にもまゐらんは、人目わろしとて、別に下襲を、御堂の縫はせ給へるゆゑ、それを待つて、行啓もおそかりしと也。◎御ひたひ 〔補〕和名抄に、蔽髪。比太飛とあり。髮は髻の誤ならむと、狩谷氏のいへるが如し。是れは假髻(スヱ)の前につくる飾具にて、金屬製の玉をちりはめたる美々しき品なり。㊁さいし 〔補〕釵子。蔽髪(ヒタヒ)を假髻(スヱ)の前に立つるため、左右より挿し込みに用ふる簪なり。前にも註せり。◎忠君 〔補〕兼家同母の弟と系圖に

ることゝ著ければ也こと下襲論本ことにとあるには衍なり

いさゝかよりて前田本にいさゝかかよひてとあるを思へはかゝよひての落字にて御髪の耀ひて見え給ふ意か

て、こと下襲ぬはせ給ひけるほどに、おそきなりけり。いとすき給へりな」とて、うちわらはせ給へる、いとあきらかにはれたる所は、今すこしけざやかにめでたう、御ひたひあげさせ給へる御さいしに、わけめの御ぐしのいさゝかよりて、しるく見えさせ給ふなどさへぞきこえんかたなき。三尺の御几帳ひとよろひをさしちがへて、こなたのへだてにはして、そのうしろにはたゝみ一ひらを、ながさまにへりをして、なげしの上にしきて、中納言の君といふは、殿の御をぢの右兵衛のかみ忠君ときこえけるが御むすめ、宰相の君とは富小路の右の大臣の御孫。それ二人ぞ上にゐて見給ふ。御覧じわたして、「宰相はあなたにいきて、人どものゐたる所にて見よ」と仰せらるゝに心得て、「こゝに三人いとよく見侍りぬべし」と申せば、さばとてめしあげさせ給へば、しもにゐたる人々、殿上ゆるさるゝうどねりなめりと笑へど、こはわらはせんとおもひ給へるかといへば、むまさへのほどこそ。などいへど、そこに入りゐて見るはいとおもだゝし。かゝる事などをみづからいふは、ふきがたりにもあり。又君の御ためにもかろ〲しう、かばかりの人をさへおぼしけんなど、おのづから物しり世の中もどきなどする人は、あいなくかしこき御事にかゝりて、かたじけなけれど、ある事は又いかゞは。誠に身の程に過ぎたる事もありぬべし。

大夫の上諸本殿の二字あれど千蔭本によりて削る衍文な

かへりて我を恥るは、かひなき事と也。〔補〕むねたか、誰れとも知られず。或は致孝か、此の人ならば、時平公の曾孫にて、時代は清少と同じ。從五位下內藏頭と尊卑分脈の系圖に見ゆ。されど何故に、清少をこの人に見せでと、仰せられしにか。諸家の考說もなし。直按ずるに、此の人亦、かねて清少に懸想する聞えあり、清少と相見ば、引き留めなどすべき內情を、知ろしめされての事ならむか。◎思ひぐまなく　〔補〕思ヒヤリナシと譯して、聞ゆべけれど、猶精しくいはゞ、思ひやり行き屆かぬ所あるをいふ詞也。◎引きおろして　〔補〕唯引きつれて行く事を、車よりなれば、強くいはんとての詞なり。今更に車より引き下すことにはあらず。

まゐりたれば、はじめおりける人、物見えぬべきはしに、八人ばかりゐにけり。一尺よ二尺ばかりの高さのなげしの上に、おはします（中宮也）「こゝに（伊周公詞）たちかくして、ゐて參りたり」と申し給へば、いづらとて御几帳のこなたに出でさせ給へり。まだ唐の御衣裳奉りながらおはしますぞいみじき。紅の御衣よろしからんや。中にからあやの柳のみそ、えびそめの五重の御衣に、あかいろのからの御衣、地ずりのからのうす物に、ざうがんかさねたる御裳など奉りたり。おり物の色、更になべてのに似るべきやうなし。「我れをばいかゞみる」（后宮御詞也）と仰せらる「いみじうなん（清少）候ひつるなども、ことに出でてはよのつねにのみこそ」「久しうや（后宮の御詞也）有りつる。それは大夫の、院の御供に著て人に見えぬる、おなじ下がさねながら、宮の御供にあらん、わろしと人思ひなんと

えさせ給ひつらんと思ふもかたじけなし。

◎大門 〔釋〕積善寺の總門。◎こまもろこしのがく 〔釋〕高麗、唐の樂、聖徳皇太子佛法興隆の爲にとて、三韓樂の傳習を獎め給ひしに始り、孝徳天智兩帝の頃より、唐樂をも御採用ありしが、文武天皇の大寶令にに、雅樂寮を設置して、是等の樂人を養成したり。最初は神樂を神事に用ひ、雅樂に佛會供養等に張行したるを、後遂に朝儀宴遊にも、演奏せしめらるゝに至れり。◎らんじやう 〔釋〕亂聲 諸本にらんの二字なし。元は必ずありけむを、落せるならむ。さて亂聲の音とは、左方の唐樂、右方の高麗樂相並んで、同時に太鼓鉦鼓を打ちはやし、笛ども吹き合することにて、集合亂聲、小亂聲、林邑亂聲等種々あり。近衛家基公の殘夜抄に、音樂によりて品々のうち、一大法會……行幸御幸、もしは長吏など入らせ給へば、左右の樂屋亂聲して、後舞人桴を振る。之を猛舞とも云ふ。又三切の亂聲とも云ふ。其後獅子狛犬舞ふ事ありと云々。本文の亂聲即ちこれにあたる。然るに、諸註、箏、また笙の音と解きたるは誤なり。古本は勿論、別本にも「らんざう」とあるに、考異通釋ともに、其の沙汰なきは解しかねたるにや。不審(イブカシ) ◎あげばり 〔釋〕和名抄に、幄をアゲバリと訓めり。平地に柱を立て、棟を上げて、其の上に幕を張り日覆としたるをいふ。上ゲ張の義。◎屏幔 〔釋〕幄とならびて日覆なく、横に幕を引きて、障屏としたるをいふ。◎御さじきにさしよせ 〔釋〕后宮の御棧敷に、女房の車を寄せし也。◎殿はら 〔釋〕伊周公隆家卿なり。◎あかうけさう 〔釋〕明るくて、顯證(あらは)なること。◎唐衣の中にてふくだみ 〔釋〕乘車中は、垂髪を唐衣の下に著(キ)こむる故にたゝまり曲(クセ)づくをいふ。◎しぞかせ 〔釋〕退かせ給へと、伊周公に謝し申す也。◎むれかたなどに見せて 〔釋〕是后宮の御詞を、伊周の申給ふ也。清少をむれたかに見せずして、下車させよとの仰せ故に來りしを、

らんじやう　諸本らんの二字なし千陸古本一本によりて補へり後前田家古寫本を見ればそれにも亦らんざうとあり

立ちかへり　の下諸舊本「給」の字を脫せしならむ今之を補はゞ前後の文脈明かに通ずべし

翁たち例の古本に泥みたるに似たり。余は寧ろ古本の方「ひとたまひ」のまな、書き落したるにやと思ふはいかに。◎かきおろし　副車（ヒトダマヒ）の下におろし置きたる榻な、又牛に替への意也。

おはしましつきたれば、大門（ダイモン）のもとに、こまもろこしの樂して、獅子こま犬をどりまひ、らんじやうの音つゞみの聲に物もおぼえず。こはいづくの佛の御國などに、きにけるにかあらんと、空にひゞきのぼるやうにおぼゆ。內に入りぬれば、色々の錦のあげはりに、みすいと青くてかけわたし、屛幔などひきたるほど、なべてたゞに此の世とおぼえず　御さじきにさしよせたれば、又此の殿ばら立ち給ひて、とくおりよとのたまふ。乘りつる所だにありつるを、今すこしあかうけさうなるに、大納言殿いとものしくきよげにて、御下襲のしりいとながく所せげにて、すだれうちあげて、はやとの給ふ。つくろひそへたる髮も、唐衣の中にてふくだみあやしうなりたらん。色のくろさあかささへ、見えわかれぬべきほどなるがいとわびしければ、ふともえおりず「まづしりなるこそは」などいふほどに、それもおなじ心にや、「しぞかせ給へ。かたじけなし」などいふ。「はぢ給ふか」（大納言の事也）など笑ひて立ちかへり給ふ。辛うじておりぬれば、よりおはして、「むねたかなどに見せで、かくしておろせと、宮の仰せらるれば來たるに、思ひくまなく」とて、ひきおろしてゐて參り給ふ。さきこ

そ少し濃き 〔補〕下すだれの絹の薄紫色なるを、末濃に染めたるをいふ ㊀かとり 〔補〕繧繝 〔補〕堅織の義。生糸にて細密に織る。紋なし。絹よりは勝りたる品。㊀又なかしと見るらむ 〔新〕女院の御方の人々、なかしと見んと也。㊀うねめ 〔補〕采女。御厨子所の女官なり。是れより后宮出御の行列なり。◎ゝたいひれ 〔補〕裙帯、領巾。くたいは、裳の腰帯の餘りを長く垂るゝ也。領巾は領より掛くる帛にて、正装の具。共に上に註せり。㊀くすしのかみ 〔補〕典薬頭。従五位下相当の官。㊀しげまさ 〔補〕重政か茂正か未詳。◎えびそめのおり物のさしぬき 〔新〕葡萄染織物の指貫。采女豊前が出たちなるべし。むかしは女房も馬にのる時は、さしぬきを着たる也。御禊の行幸の時、上﨟平絹の指貫着たる事、西宮記にあり。㊀色ゆるされにけり 〔補〕葡萄染は、紫に類する上に、織物なりしかば、上達部の、禁色の指貫に似たる故の戯にて、豊前はしげまさの内緣の妻にてあめれば、わざと男の名にしての戯なり。㊀めでたしと云々 〔新〕始め女院の御有様の、めでたく見えしに比ぶべくもあらでと也。◎なぎのはな 〔補〕葱の花。皇后の御輿の葱花をいふ。金色の擬寶珠の形したる物。蓋の頂上にあり。委しくは車輿圖解に。◎御つなはり 〔新〕后宮の御輿の綱を張りたる也。〔補〕上の御綱のすけの所に委し。㊀かみあしからん人 〔新〕髮のたちて、なでつけし毛もそゝけたれば、悪さ髮あらはに見えて、かみあしき人もかこたんと也。㊀車のしおともひとだまひに 〔新〕人給。女房の車どもに牛を休めて、榻にならべおろしおきたりつるを、又牛にかけて、御供につらならむとするさま也。〔補〕「人だまひ」とは主君より御供の人給はりて乗る車なれば然いふ。さて此の人たまひた、千蔭翁古本に據る由にて「ひとたびに」と訂したるは、中々に舊本より劣れり。武藤氏も亦翁と同じく改めて、偕云く、榻にかけたる車など、今又牛にかけてといふ文脈なり。「ひとたび」は「牛ども」の上に移して見るべし。」とは

本による

なきのはな 千本による

とまちきこえさするに、いと久し。いかならんと心もとなくおもふに、からうしてうねめ八人馬にのせてひき出づ。青すそごの裳、くたいひれなどの風に吹きやられたるいとをかし。豐前といふうねめは、くすしのかみしげまさが知る人なり。えびぞめの織物のさしぬきをきたれば、いと心ことなり。「しげまさは色ゆるされにけり」と、山の井（道頼卿也）の大納言はわらひ給ふ。皆のりつゞきて立てるに、今ぞ御輿出でさせ給ふ。めでたしと見え奉りつる御有樣に是れは比ぶべからざりけり。朝日はなばなとさしあがるほどに、なぎのはなのいときはやかにかゞやきて、御輿のかたびらの色つやなどさへぞいみじき。御つなはりて出でさせ給ふ。御輿の帷子（カタビラ）のうちゆるぎたるほど、まことにかしらの毛など人のいふは、さらにそらごとならず。さてのちは髮あしからん人かこちつべし。あさましういつくしう、猶いかでかゝる御前になれ仕うまつるらんと、我が身もかしこうぞおぼゆる。御輿過ぎさせ給ふほど、車の榻どもひとだまひにかきおろしたりつる、又うしどもかけて、御こしのしりにつゞきたるこゝちの、めでたう興ある有樣いふかたなし。

(一)院 (頭)女院也。東三條院詮子。一條院の御母なり (二)日さしあかりておはします (頭)女院の出御なり。

(一)唐庇の車 (頭)車蓋の唐破風造りなるより、此の名あり、院、東宮を始め、攝關まで乗用を許さる (二)す

丘人にても猶きこえずいかゞ

出でさせ給はなむと千

ゆべし、（ゝ）かきたて〔補〕書立。乘車人の配當、順序を書きしもの。◎顯證なりとも云々〔補〕あらは（俗語ムキダシ）たりといふ詞は、通常のこと、中々形容の詞もなしの意。◎過ぎいきたれは〔補〕宮の御覽ずる前を也、◎いきつぬるこそ〔補〕恥かしさに、ころびぬべかりしを、たふれもせで行きつきしぞと也 ◎明順〔補〕上（郭公の歎の段）にあり、空を仰ぎ云々は、得意のさま也。當日法會の總奉行たりしなるべし。

まづ院の御むかへに、殿をはじめ奉りて、殿上びと地下なども皆まゐりぬ。それわたらせ給ひてのちに、宮は出でさせ給ふべしとあれば、いと心もとなしと思ふほどに、日さしあがりてぞおはします。御車ごめに十五、よつは尼の車、一の御車は唐庇の車なり。それにつゞきて尼の車、しり口よりすゐさうのずゞ、薄墨のけさころもなどいみじくて、すだれはあけず。下すだれもうすいろのすそすこしこき、つぎにたゞの女房の十、櫻のからぎぬ、うすいろ紅をおしわたし、かとりの表著どもいみじうなまめかし。日はいとうらゝかなれど、そらは淺緑にかすみわたれるに、女房のさうぞくの匂ひあひて、いみじきおり物の色々のから衣などよりも、なまめかしうをかしき事かぎりなし。關白殿其の御つぎ〳〵の殿ばらおはするかぎり、もてかしづき奉らせ給ふさま、いみじうめでたし。これを見奉りめでさわぐ。此の車どもの二十立ちならびたるも、又をかしと見るらんかし。いつしか出でさせ給はなん

前田本には宮しげいしや三四の君殿のうへその御おとうとにいつところと見ゆ

物いひなどすの下一行の文は千蔭古本一本にありとて補ひたるによる

過ぎいきたれば、車のもとに、いみじうはづかしげに、きよげなる御さまども（伊周隆家也）して、うちゑみて見給ふもうつゝならず。されどたふれずそこまではいきつきぬるこそ、かしこき顔もなきかとおもひたどらるれ。皆のりはてぬれば、引き出でて、二條のおほぢに榻にかけて、物見ぐるまのやうにて、立てならべたるいとをかし。人もさ見るらんかしと心ときめきせらる。四位五位六位などいみじう多う出でいり、車のもとに來て、つくろひ物いひなどする中に、明順の朝臣のこゝち、空を仰ぎ胸をそらいたり。

御經の事に　〔解〕一切經供養を修する毎に。(一)みなみの院　〔解〕中關白殿の家也。前にも南の院におはします比、西の對に殿のおはしますと有り。(二)裳の腰さし　〔解〕腰とは、裳に付きたる帶。裾帶是れなり。曳腰（ヒキゴシ）ともいふ。これに平組の緒を刺すこと。(三)髮などいふもの云々　〔解〕明日を第一の晴と、髮をけづりつくろふさまなり。(四)寅の時　〔解〕午後零時を子の時として、大方曉の四時ごろ。(五)扇もたせて　〔解〕清少のかねて誂へおきし扇なるべし。(六)かたびさし　〔解〕片廂　片一方にのみ、傾斜を造りし廂をいふ。上にもありき。から廂とかける本は誤り也。(七)しげいしや　〔解〕中宮の次の御妹にて、上に中の君とありし人。明年東宮の女御となり、淑景舍と稱しき。こゝは後の稱を書ける也。(八)三四の君　〔解〕その御妹の姬君達なり。(九)其のおとうと　〔解〕こは關白殿の室高內侍の妹なり。(十)三所　〔解〕中宮、淑景舍、三四の君、殿の室（ウヘ）、その御妹をこむれば、六所の誤りかとの考も出づる也。されど殿の上の御おとうと三所とつゞけて見ば、それにても聞

きどち屏風ひきへだてたるもあり。几帳なかにへだてたるもあり。又さらでもあつまりゐて、きぬどもとゞかさね、裳の腰さし假粧（ケサウ）するさまは更にもいはず。髮などこいふもの、あすより後は有りがたげに見ゆ「寅の時になんわたらせ給ふべかなる。などか今までまゐり給はざりつる」扇もたせて尋ねきこゆる人ありつ」など告ぐさてまことに寅の時かと、さうぞきたちてあるに、あけ過ぎ日もさし出でぬ。西の對（タイ）のかたびさしになんさしよせてのるべきとて、あるかぎりわたどのへゆくほどに、まだうひ〳〵しきほどなる今參りどもは、いとつゝましげなるに、西の對に殿すませ給へば、宮にもそこにおはしまして、まづ女房ども車にのせさせ給ふを御覽ずとて、みすのうちに宮、淑景舎（シゲイシャ）、三四のきみ、殿のうへ、其の御をとうと三ところ立ちなみておはします。車の左右（ヒダリミギ）に大納言どの三位の中將二所して、すだれうちあげ、下すだれひきあげてのせ給ふ。皆うちむれてだにあらば、かくれ所やあらん。四人（ヨタリ）づつ、かきたてに從ひて、それ〳〵と呼びたて〳〵のせ給ふに、あゆみ出づるこゝち、いみじう誠に淺ましう、顯證なりともよのつねなり。みすの内にそこらの御目どもの中に、宮の御まへの見ぐるしと御覽ぜんは、更にわびしきことかぎりなし。汗のあゆれば、つくろひたてたる髮なども皆あがりやすらんとおぼゆ。からうじて

ここよからめ」と、物しげに思しめしたり「おり侍るほどの、待ちとほにくるしきによりてにや」とぞ申しなほす。

◎出でさせ給ひし夜　〔春〕二月朔日のころ、内裏を出でて二條の宮へ入らせ給ひし夜をいふ。立ちかへりて、最初の夜の事を記せるなり。◎車の次第もなく　〔春〕人々の品によりて、乘車の前後次第あるべきを、女房の急さて我さきにとのるさま也。◎たゞさばれ　〔春〕只任他なり。人々の急かばいそげと也　〔磐〕「さばれ」は「さもあらばあれ」に同じ。◎おしこりて　〔春〕おしは接頭語、こりは凝りなり。固まる意。◎かうかといふ　〔春〕車の奉行などの、早是ばかりかといふに、まだこゝにのらで有りと、清少などの答たる也。◎宮司　〔一〕皇后宮職の役員。〔一〕得選　〔磐〕御厨子所の女官の中にて、特に選はれたる者にて三人あり。仍て得選といふ也。委しくは拙著禁秘抄講義に記す　〔三〕みづし　〔磐〕御厨子所の女官を略していへり。上の得選のこと　〔一〕まゐる人ことにみれど　〔春〕只今まゐる人々を、左京小左近などが立ちて見れども、清少はまゐらざると也　◎いかなればかうなきか　〔磐〕何如して、斯く乘りたる人の中に無きかとなり。諸本、なにかとあるは聞えず。◎さいはて　〔春〕最終（サイハテ）　◎ゑもん　〔春〕右衛門、女房の名也。〔磐〕右衛門とかきて、右の字を讀まず、エモンといふ習ひなり。◎定めたらむさまのやごとなからむ云々　〔磐〕定められたる乘車の樣式を、等閑にせぬがよきにとなり。やごとなしとは、前に註せる如く、止めておかれぬ意より、等閑（ナホザリ）にならぬ意なり。

御經のことに、あすわたらせおはしまさんとて、こよひまゐりたり。南の院の北おもてにさしのぞきたれば、高つきどもに火をともして、ふたり三人よたり、さるべ

「かうなきか」諸本なにかとあるは非也千本による

くおはしましけり」などいへば、のりぬ。其の次には、誠にみづしが車にてあれば、火もいとくらきをわびて、「二條の宮に參りつきたり。御輿とくいらせ給ひて、しつらひゐさせ給ひけり。「こゝによべ」と仰せられければ、右京小左近などいふ若き人々、參る人ごとに見れどなかりけり。おるゝにしたがひ、四人づゝ御前に參り集ひて候ふに、「あやし、いかなるぞ」と仰せられけるもしらず、ある限りおりはてゝぞ辛うじて見付けられて、「かばかり仰せらるゝに、などかく遲くは」とて、引きゐて參るに見れば、（后宮の詞也）いつのまにかうは年ごろの住ひのさまに、おはしましつきたるにかとをかし「いかなれば、かうなきかと尋ぬばかりは見えざりつるぞ」と仰せらるゝに、とかくも申さねば、諸共に乘りたる人、「いとわりなしや。さいはての車に侍らん人は、いかでかとくは參り侍らん。是れもほと〳〵えのるまじく侍りつるを、みづしがいとほしがりて、ゆづりて侍りつるなり。くらう侍りつる事こそわびしう侍りつれ」。とわらふ〳〵啓するに、「（后宮の詞也）行事する者のいとあやしきなり。又などか、心しらざらん人こそはつゝまめ。ゑもんなどはいへかし」など仰せらる。「（右衞門詞）されどいかでか、走りさきだち侍らん」などいふも、かたへの人、にくしと聞くらんかし「（后宮御詞）さまあしうて、かくのりたらんもかしこかるべき事かは。定めたらんさまの、やんごとなからん

尊稱に限らざるを悟るべし。されば、此の小若君も、宰相の君左京の君などと共に、淸少の同僚たりし女房の名と、斷定して誤らざるべし。㊁近うなして（直）積善寺行啓に、近付いて用意せよと也。㊂花の心開けたりや云々（釋）夏陰云、白氏文集卷十二、感傷長想思、九月西風興、月冷霜華凝、思ㇾ君秋夜長、一夜魂九升、二月東風來、草拆花心開、思ㇾ君春日遲、一夜腸九廻、妾住洛橋北、君住洛橋南、（下略）直按ずるに、折しも二月の事なれば、右の詩の詞をかりて、花の心開けたりやと仰せ越され、思ㇾ君春日遲の意を、含ませ給へる也。淸少もさる者なれば、直に文集の詩のことを思ひ浮かべて、其の上の句思ㇾ君秋夜長の意により、「秋はまだ來らざれど、君を思へば一夜に魂ここのたび升る樣に侍り。」と答へ奉りしなり。

出でさせ給ひし夜、車の次第もなく、まづ／＼とのりさわぐがにくければ、さるべき人三人と、猶此の車にのるさまのいとさわがしく、祭のかへさなどのやうに、倒（タフ）れぬべくまどふがいと見ぐるしきに、「たゞさばれ。のるべき車なくてえまゐらずば、おのづからきこしめしつけて、たまはせてん」など笑ひあひて立てるまへより、おしこりてまどひ出でてのりはてゝ、「かうか」（宮司）といふに、「まだこゝに」といらふれば、宮司（ミヤヅカサ）よりきて、「たれ／＼かおはする」と問ひ聞きて、「いとあやしかりける事かな。今は皆のりぬらんとこそ思ひつれ。こはなどて、かくはおくれさせ給へる。今は得（トク）選（セン）をのせんとしつるに、めづらかなりや」などおどろきて寄せさすれば、「さばまづ其の御志あらんをのせ給ひて、つぎにこそ」といふ聲聞きて、「（宮司の詞也）けしからず腹ぎたな

殿には御存知ならんと思ひしと也。「鶯のなくねなきけば山ふかみ我れよりさきに春はしりけり」詞ばかりをとれり。此の歌新拾遺ニハ忠見。風雅ニハ源信明。⊙よにこと人云々　〔補〕よには近俗の語ヨモヤにあたる。世とかくは非なり。ヨモ他人は見付けじとの意。◎そらごとをおほせ　〔春〕殿の仰にて、櫻のなくなりしを、清少知りながら、春風のせしならんといひしは、そらごとを風に負せしと也。〔補〕前の中宮の御詞「春風におほせける―虚言を負せ侍る也」と引きつゞけて見ば解し易からむ。盤齋云、實に春風の所爲とは思はねども、興を催さんとて、そらごとを課せたると也と、此の說亦精し。◎今は山田もつくるらん。〔春〕春風におほせし事の詠吟也。貫之集ニ「山田さへ今はつくるをちる花のかごとは風におほせざらなん」。⊙しれものゝあるこそ　〔春〕あるにかひなしと也。⊙春風はそらに云々　〔補〕春風の歌は、偶然にも面白くいひ出でしかなと也。そらは書を見ず、考究もせざること。今もいふ詞に同じ。◎たゞごと　〔補〕唯常の詞としての意　◎うるせく　〔補〕前にもありし、巧みに。◎小若君　〔春〕伊周公の御子、道雅公の幼名也。〔補〕此の註非なり。後の學者誰れも注意せず、皆道雅の幼名と思へれど然らず。道雅は松君とあるに非ずや。濱臣云、こわか君は幼稚の時の尊稱なり。誰れが上にもいふ也。空穗俊蔭の卷にも、かれまさの事を、始は小若君といへりと。直按するに、此の說はよろしげなれど、本文の小若君を、道雅の事とするは猶誤れり。是れは道雅の事ならで、中宮側近の女房の名なり。然いふ由は、先つ尊卑分脈によれば、道雅天喜二年七月六十三歲薨ずとあれば、今年正曆五年は、纔に三歲なり。祖父の膝に抱かれ、又供養の日、宮の御棧敷に參りても、泣きさけびたる程の稚見にして、いかで此の問題に立ち入り得べき。且又後撰集春下の作者に、小若君といふあり。歌の詞書に、女友達の語あれば、女子の呼び名なること論なかるべく、必しも幼稚の

思ひて侍りつれ」としのびやかにいふを、いととくきゝつけ給ひて、「さおもひつる事ぞ。よにこと人出でて見付けじ。宰相とそことのほどならんとおしはかりつ」。とていみじう笑はせ給ふ「（后宮の御言葉）さりげなるものを、少納言は春風に負（すま）せける」と宮の御前のうちずませ給へるいとめでたし「（后宮の關白にのたまふ也）そらごとおほせ侍るなり。今は山田もつくるらん」とうちずんせさせ給へるもいとなまめきをかし「（宮の御言也）さてもねたく見付けられにけるかな。さばかりいましめつるものを、人の所にかゝるしれものゝあるこそ」などのたまはず「（后宮の御詞）春風はそらにいとをかしうもいふかな」と又うちずんせさせ給ふ「たゞごとにはうるせく思ひよりて侍りつかし。けさのさまいかに侍らまし」とて笑はせ給ふを、小若君、「されどそれはいととく見て、雨にぬれたる、おもてぶせなりといひ侍りつ」と申し給へば、いみじうねたがらせ給ふもをかし。さて八日九日のほどにまかづるを、今すこし近うなしてなど仰せらるれど出でぬ。いみじう常よりものどかに照りたるひるつかた、「（后宮より清少への御せうそこ也）花の心開けたりや。いかゞいふ」とのたまはせたれば、「（清少）秋はまだしく侍れど、（清少の御こたへ也）よにこゝのたびのぼるこゝちなむし侍る」など聞えさせつ。

㈠ねゝたれ　㈡寝宿　㈢ときならず　㈣時刻外れに也、朝の御粧のおくれしをいふ　㈤いぎたなかりける　㈥寝たる事なり、㈦我よりさきにとこそ　㈧殿下しらざるよと、仰せらるれども、清少見付ぬ已前より、

此の歌の心をおもひて、人はとがむるとも、ならんとて引きたをりゆくかとの儀なり。◎かねすみ〔磐〕源兼澄にや　信明の息。寛和比の人なり。〔補〕勅撰作者部類には兼澄といふ歌人見えざれど、尊卑分脈卷十二に、兼澄イニ隆とあり。源信孝の子にて、加賀守從五位上歌人。拾遺以下作者と記せり。後拾遺卷上の歌主に源兼隆イ澄とあるは、前の源兼澄と同人ならむ。さて此の人の歌に、「いはゞいはなん云々」と同じ意をよめるがありて、清少の記憶に殘りしなるべし。全歌傳はらざるは遺憾なり。◎よき人ならば云々〔春〕此の歌の心を思ひわくほどの者ならばと也。◎ぬれまろがれ〔補〕千蔭翁の古本によりて「まつはれ」と訂したるは、中々に非なり。まろがれにてよく聞ゆ。源氏夕霧の卷に、御ひたひ髮のぬれまろがれたる、ひきつくろひ」などありて、一つに附きあふことをいふ也。◎かもりづかさ〔補〕後宮職員令に、掃司女孺十人。とありて女官なり。掃部寮にはあらず。◎御きよめまゐり〔補〕清拭を致し終つて。◎しろみたるもの〔補〕雜色の白張を著たる者　◎殿のかくさせ〔春〕關白殿の隱させ給へるかと也。◎かくいはんとて云々〔春〕春風のせしといはんとて、殿のせさせ給ふ事を隱すかと也。◎ふりにこそふれ〔春〕拾遺二人丸「我がごとや雲の中にもおもふらん雨もなみだもふりにこそふれ」詞ばかりをとれり。〔補〕「ふり」とは古(フル)すにて、見所なくなりたることを、雨の降るにかけていへるなり。

殿おはしませば、ねくたれのあさがほも、時ならずや御覽ぜんと引きいらる　おはしますまゝに、「(殿の詞也)かの花うせにけるは。いかにかくはぬすませしぞ。いぎたなかりける女房達かな　しらざりけるよ」とおどろかせ給へば、「(清少言也)されど我れより先にとこそ

侍るならむ｜春本侍りなむとあり｜いたうふり是れら皆千本よれり

◎むとく無徳。見ぐるしきこと既出

事を思ひたるにやとも、よき人ならばいはまほしけれど、(清少の詞也)「かの花ぬすむはたれぞ。あしかめり」といへば、わらひて、いとゞ逃げてひきもていぬ。猶殿のみこゝろはをかしうおはすかし。枝どもにぬれまろがれつきて、いかに見るかひなからましと見て入りぬ。かもんづかさまゐりて御格子參り、とのもりの女官御きよめまゐりはてて、おきさせ給へるに、花のなければ、(后宮の詞也)「あなあさまし。かの花はいづちいにける」と仰せらる。(又后宮の御詞也)「あかつきに花ぬすむ人ありといふなりつるは、猶枝など少しをるにやとこそきゝつれ。たがしつるぞ。見つや」と仰せらる。(清少詞也)「さも侍らず。まだくらくて、よくも見侍らざりつるを、白みたる物の侍れば、花を折るにやとうしろめたさに申し侍りつる」と申す「さりともかくはいかでかとらん。殿のかくさせ給へるなめり」とて笑はせ給へば、(清少詞)「いで。よも侍らじ。春風のして侍るならん」と啓するを、(御后宮詞)「かくいはんとて、かくすなりけり。ぬすみにはあらで、いたうふりにこそふれ」と仰せらるるも、めづらしき事ならねど、いみじうぞめでたき。

◎御前の櫻　㊁彼の造花也。㊂なきてわかれんかほに　㊁拾遺集「さくらばな露にぬれたる色見ればなきてわかれし人ぞこひしき」◎いかならむ　㊁櫻のいかになりしとの心なり。◎いはゞいはなんと　㊁後撰「山守はいはゞいはなん高砂のをのへの櫻をりてかざさん」是は素性の歌也。兼澄の集にもあるか可ㇾ勘也。

宮（敦道親王）を罪にとり給ひ、四の君さしつぎて、其の後の御匣殿となり給ひしにあらずや。三の君の御匣殿たりし間は短く、四の君は長かりしによりて、他書に四の君の事のみ、御匣殿として傳はりけむ。もし然らば、此處に「三の御前は御匣殿なり」といへるも、更に疑ふに及ばざるべし。猶尊卑分脈には、道隆公の御女は、皇后と淑景舍君との、二人の外記載なきを思へば、三四の君は別腹にて、淑景舍と三君とは殆と同年齡ほどにはあらざりしか。さてこそ「中姫君よりは大きに云々」とも書けるならめ。◎中の姫君　〔補〕翌長德元年正月、東宮（後三條帝）女御、淑景舍に入り給ふ。◎うへもわたらせ　〔補〕此のうへは、關白の室、中宮の御母なり。南降りに住み給へば、日夕渡り給へる由下に見ゆ。◎あらむにまかせてな。　〔補〕有りあひの服裝に任せて、新調もせずと也。なは強くいふ助辭、よに通へり。◎よさりまかづる云々　〔補〕夜に入つて退出する者あれど、當日の服裝の用意なれば、止め給はずと也。

御前の櫻の色はまさらで日などにあたりて、しぼみわるうなるだにくちをしきに、雨のよるふりたるつとめていみじうむとくなり。いと〔清少也〕とくおきて、「なきて〔清少〕わかれけん顏に心おとりこそすれ」といふをきかせ給ひて、「げに雨のふるけはひしつるぞかし。いかならん」とておどろかせ給ふほどに、殿の御方より、さぶらひの者ども、げすなどあまた來て花のもとに唯よりによりて、引きたふしとりて「みそかにいきて、まだくらからんに取れとこそおほせられつれ。明け過ぎにけり。ふびんなるわざかな。とく〳〵」とたふしとるに、いとをかし。いはゞいはなんと、かねずみが

事をいひあはするも有り 又いどみかはして「まろは何か 只あらんにまかせてを」。などいひて「例の君の」などにくまる よさりまかづる人もおほかり。かゝるをりの事なれば、えとゞめさせ給はず。うへ日々に渡りたまひよるもおはします。君だちなどおはすれば、御前、人すくなく候はねばいとよし。内の御使日々にまゐる。

◎君達 〔通〕姫君たち也。中宮の御妹たちの上をいふ。◎三の御前は御匣殿 〔通〕三の御前とは、關白殿の第三の姫君なり。御匣殿のこと上に委し。併此の三の御前を、御匣殿とかけるに就いて疑ひあり。先づ大鏡道隆の傳中、中宮の御妹たちの事を叙する文に、「御さし次の君は、三條院の東宮と申しゝをりの淑景舍とて、…… 御年廿二三ばかりにてうせ給ひにき。三の御方は、冷泉院の四の皇子帥宮(敦道)と申しゝをこそは、父殿聟とり奉らせ、…… さて其の宮の上のさし次の四の御方は、御匣殿と申し云々とあり。又榮花物語(耀く藤壺)に定子皇后の崩御前の事を記して、「后の宮(定子)には、あさましきまで物のみおぼえ給ひければ、御弟の四の御方を、今宮の御後見、よう仕うまつらせ給ふべきさまに、打ち泣きてぞのたまはせける 御匣殿も、ゆゝしきことゝ聞えて、うち泣きつゝぞ過ごさせ給ひける。」なども見えて、他の書には、四の君を御匣殿といひたれば也 かゝれば、本文の三の御前は、四の御前の誤記ならずやと疑はし。然れども猶よく考ふるに、清少の親しく接して「中の姫君(公の二女後に淑景舍の君)よりも、大きに見えて、うへ(見方)など聞えむに云々といへるほど、目のあたり姉妹三所を見くらべての言なれば、いかで取りたがふる事あるべき。因りて按ふに、三の君の御匣殿たりしは、纔に一二年の間にて、今年の内既(ハヤ)くも師ノ

ての詞也。◎いかに知り奉りて　〔補〕宮たいかなる御心情の人と、知り奉りて、仕へまつるぞと也。次に物惜みせさせ云々と戯れ給ふ伏線　◎おふし　〔補〕俗におさがりなどいふ。古き物など、下し賜はること。◎しりうごと　〔補〕後言（シリヘゴト）の音便。春註に、何か陰ごとには云はん。御前にてこそいはめと也と有り。◎式部丞　〔春〕御物云、源則理。正暦二正月十三日式部丞、前大納言重光四男。◎ひきときて　〔補〕御文の結ばれたるを也　◎あやしとおぼいためり　〔春〕中宮の御氣色。あけて見給はんは、いかゞとなり。〔補〕おぼい（オホ）は思しの音便　◎みすのうちより　〔補〕御簾の内より簀子（スノコ）にゐる勅使に、茵ばかりを差出すなり。隅の間よりとある本は非。◎祿の事　〔補〕勅使に賜はるべき物。關白の取りまかなふ也。春註云、帝の御文を、父君の前にて、后宮開きかね給へば、使の祿事いひ付んとて、殿下たち給ふ心遣ひ面白し。◎さかななどあれば云々　〔補〕此の條諸抄の解分明ならず。按ずるに、當時さかなといふは、大方果物なるが、先つ勅使の事なれば、居あはせたる伊周大納言、挨拶に出て、丁度さかなもあれば一獻勸めて醉はせんとせしに、勅使は、今日大切の行事侍り。吾が君免し給へと申して、辭退して立ちぬとならむ。若しは本文「ゑはさまほしうすゝめけれど」などありしが落字せしならずや。

君達（閑白どのゝ息女也）などいみじうけさうじ給ひて、紅梅の御衣ども劣らじと著給へるに、三（サン）の御まへはみくしげ殿なり。中のひめぎみよりもおほきに見え給ひて、うへなどきこえんにぞよかめる。うへもわたらせ給へり。御几帳引きよせて、新しく參りたる人々には見え給はねば、いぶせきこゝちす。さし（女房）つどひて、かの日のさうぞく、扇などの

の給はすれば、あやしうとおぼいためり。「かたじけなくもあり」とて奉らせ給へば、とらせ給ひても、ひろげさせ給ふやうにもあらずもてなさせ給ふ。（宮也）御用意などぞありがたき。みすの内より女房しとねさし出でて、三四人御几帳のもとにゐたり。「（關白との、詞也）あなたにまかりて祿の事物し侍らん」とてたゝせ給ひぬる後に御文御覽ず。御返しはこうばいのうすやうにかゝせ給ふが、御衣のおなじ色ににほひたる、猶かうしも推し量りまゐらする人は、なくやあらんとぞくちをしき。けふはことさらにとて、殿の御方より祿は出ださせ給ふ。女のさうぞくに紅梅のほそながそへたり。さかななどあれば、ゑはさまほしけれど、けふはいみじき事の行事に侍り、あが君ゆるさせ給へ」と大納言どのに申してたちぬ。

殿渡らせ　〔釋〕道隆公の居所は、此の二條の宮の南に隣りてありしかば、往來便利なる樣、本文にて窺ひ知らる。◎只御直衣に重ね　〔釋〕紅の内衣三つが上に、出衣もせず、直に直衣を著給ひたるをいふ。褻（ケ）の服裝なり。◎御まへより始め　〔釋〕中宮を始め「女房たち」といふべきを略せり。◎おりもの　〔釋〕狹義にいふ織物。地文と異なりたる糸をうかせて、紋樣を織り出したる物。◎りうもん　〔釋〕綾文。同じ色にて地紋を出したるなり。◎物など聞え　〔釋〕宮の御前にて、關白の物申さる也。◎あらまほしき　〔釋〕斯くもありたしと、思ふ通りになるをいふ詞。御親子間の應對の樣、親しみの中に皇后の品格を失はぬをいふ。◎何事なか　〔釋〕是れより殿の申さるゝ詞なり。◎こゝら　〔釋〕多く　◎さても此の宮の云々　〔釋〕更に女房達にむかひ

行事に侍り｜春本には行幸にとあるを例の千本によりて改むこのりの外に補正することも多けれどこれら一所々ことわらず

れたればと也　〇けおかく　〔釋〕なつかしげなる意。現今流行の語に譯していはゞ、感じの好(コ)いこと。

殿〔道隆公也〕わたらせ給へり。青鈍(アヲニビ)の固紋の御指貫、櫻の直衣に、紅(クレナヰ)の御衣三つばかり、只御直衣に重ねてぞ奉りたる。御まへよりはじめて、紅梅のこきうすき、おりもの、固紋りうもんなどを、あるかぎりきたれば、たゞ光りみちて見ゆ。からぎぬはもえぎやなぎ、紅梅などもあり。御前にゐさせ給ひて、物など聞えさせ給ふ。御いらへのあらまほしさを、里人にわづかにのぞかせばやと見奉る。女房〔關白〕どもを御覽じわたして、宮に「何事〔關白詞〕をおぼしめすらん。こゝらめでたき人々をすゑなべて、御覽ずるこそいとうらやましけれ。一人(ヒトリ)わろき人なしや。これ家々のむすめぞかしあはれなり。よくかへり見てこそさぶらはせ給はめ。さても此の宮の御心をば、いかに知り奉りて集り參り給へるぞ。いかにいやしく物惜みせさせ給ふ宮とて、我れは生れさせ給ひしより、いみじうつかうまつれど、まだおろしの御衣一つ給はらぬぞ。何か、しりうごとにはきこえん」などの給ふがをかしきに、みな人々わらひぬ。「〔關白の詞也〕まことぞ。をこなりとて、かくわらひいまするか。はづかし」などの給はするほどに、内より御使にて、式部ノ丞なにがしまゐれり。御文は大納言殿〔伊周公〕とり給ひて、殿に奉らせ給へば、ひきときて、「いとゆかしき御文かな。ゆるされ侍らば、あけて見はべらん」と

◎積善寺　〔補〕榮花物語（見はてぬ夢）に、攝政殿（道隆）法興院のうちに、別に御堂建てさせ給ひて、積善寺と名づけ給ひ云々とあり。始め兼家公の洛東吉田に、積善寺を創立せしが未だ落成せざるうちに、二條の第を佛閣にして法興院と號し、公の薨後この院に佛事の經營盛りなりし事、榮花物語に見ゆ。かくて積善寺の方は、等閑に成りなりしを、正暦五年に、道隆公法興院境内に移し建てゝ、竣功したりし也。◎一切經　〔補〕釋迦佛の說かれたる一切の經文と、後の名僧の註疏とを合せて、凡一千部に及ぶ、之を新に筆寫させて、寺に納むる式。供養の語釋は上に出せり。◎女院宮の御前云々　〔補〕日本紀略正暦五年二月廿日の條に、關白（道隆）供二養積善寺一中宮（定子）東三條院（詮子）同以御幸云々。とあり。東三條女院は、道隆公の妹、一條天皇の御母なり。◎二條の宮　〔補〕紀略、正暦三年十一月廿七日、今日中宮自二內裏一遷二御新造二條院一とあれば、前々年の新造なり。父の關白我が第の北隣に設けて、中宮の御休所にあてられたるにて、中宮には時々行啓ありしが、御兄伊周等左遷の後は、ひたすら此の二條院におはせし事上に見えたり。

◎しつらひ　〔補〕飾り付け。爲繕ふ意か。室禮とかくは借字。◎獅子狛犬　〔通〕天皇皇后の御帳に限りて、居ゑらるゝ事上にいへり。◎うるさかりけむ　〔補〕雅言集覧に、源氏物語の中なる、うるせくとある詞を引きて、此處の詞も、うるせかりけむの誤寫なるべしといへり。古くは皆うるせしといへり。うるさしとは近俗の語と思はるればならむ。偖うるせしとは、功勞の多きことより、宇治拾遺などにうるせきやつといへるは、巧者といふこと。物に巧みなる人をいへり。こゝのうるせかりけむも、定めて手巧を要しけむの意と思はる。◎今つくらせ　〔補〕一昨年の新造なる事、首(ハジメ)に註せり。今とは新の意。年ごろを經過せざれば、猶白く新しとはいへる也。◎小家などいふもの　〔春〕小家どもをこぼちて、そこに二條の宮を、俄につくら

二四七（積善寺の一切經供養）

關白殿二月廿日のほどに、法興院の積善寺といふ御堂にて一切經供養せさせ給ふ。女院、宮の御まへもおはしますべければ、二月朔日の程に二條の宮へいらせ給ふ。夜ふけてねふたくなりにしかば、何事も見いれず。つとめて日のうらゝかにさし出でたるほどにおきたれば、いと白うあたらしう、をかしげに造りたるに、みすよりはじめて、きのふかけたるなめり。御しつらひ獅子狛犬など、いつのほどにか入りゐけんとぞをかしき。櫻の一丈ばかりにていみじう咲きたるやうにて、御階のもとにあれば、いととうさきたるかな。梅こそたゞ今さかりなめれと見ゆるは、造りたるなめり。すべて花のにほひなど誠にさきたるにおとらず。いかにうるさかりけん。雨ふらばしぼみなんかしと思ふぞくちをしき。小家などいふものの多かりける所を、今つくらせ給へれば、木だちなどの見所あるはいまだなし。たゞ宮のさまぞけちかくをかしげなる。

◎二月（裏）勘物云、正暦五年。（一）法興院（拾）二條の北、京極の東、兼家公（道隆關白の父）の家也。（略）一代要記に、攝政右大臣兼家、正暦元年五月八日辭退出家依病也……去十日以二條京極ノ家地、永爲ニ佛寺、號ニ法興院ニと見え、大鏡（兼家傳）榮花物語（さまざまの喜）ともに、兼家の私第を寺としたる由記せり。

諸本になし千蔭古本によりて補ひおけるによる

すゞろにさるわざはせん　仰せごとなめりといみじうをかし。二日ばかり音もせねば疑ひもなく、左京の君のもとに、「かゝる事なんある　さる事やけしき見給ひし」しのびてありさまの給へ。さる事見えずば、かく申したりとなもらし給ひそ」といひやりたるに、「いみじうかくさせ給ひし事なり（左京のことば也）　ゆめ〳〵まろがきこえたるとな。後にも」とあれば、さればよと思ふもしるくをかしくて、文かきて又みそかに御前のこうらんにおかせしものは、まどひしほどに、やがてかきおとして、御階の下におちにけり。

◯あかさぬ　〔補〕退紅の布衫きたる者。上に註せり。健兒（コンデイ）風情の者なり　春註に五位にやとあるは大に誤れり　◯これといふ　〔補〕美隆云、これなりむと云ふ意にて、文にまれ物にまれ、人の許にもて來て、さし入れんとする時の詞なり。榮花物語鶴の林、なかしげなる僧の、いとあてやかにさうぞきたるが、たて文をもて參りて、これと申せば云々とあるも、同じいひざま也。◎まかでにけり　〔春〕使はいにしと也。◎御座　〔補〕上等の疊（ク、）薦（ミウシロ）。貴人の御座の料なればいふ。後世呉座などあらぬ字をあてたる、わろし。◎人ども出だして　〔春〕かの使を尋ねさせし也　㊁すゞろに　〔補〕思ひもよらぬにの意。◎きこえたるとな　〔補〕この下「漏らしそ。」の語を略せる也。のちにもまろが告げたるなど申し給ふなと也。◎御前のこうらん　〔補〕御殿の簀子の勾欄。◎かきおとし　〔春〕其の文を勾欄より取り落したる也。

傍線をひきたる一句に

あたれり、思ひよらず、何の覺悟もなき意、他人の讒にあひたる事を心配してと也。◎紙二十 〔補〕濱臣云、二帖は字を假名がきにしたるより誤るか。○是れはきこしめしおきたる云々 〔春〕これより、中宮よりの御消息の詞なり。勿論御側女房の代筆。○わろかめれば壽命經も云々 〔春〕前に清少に、白く清らなる紙に慰む事をいひし故、此紙さはあらねば、命のぶるなぐさめにもなるまじきとの心也。壽命經は、延命の祈禱の經なれば也。○なほたゞ人にてだに云々 〔春〕たゞの人の、かく心にかけられしさへ嬉しきに、主君の御事なれば也。◎かけまくもかしこき 〔補〕和訓栞に、掛けまくも畏き。祝詞(ノリト)ことば也。よて歌にも神祇に多くよめり言葉に掛けむも、畏れ多きといふ義なりと有り。〔春〕歌の心は、紙を神にそへて、此かみのしるしに、千年も生きんとや。主君の給へる紙なれば、かけまくもかたじけなしとはいふ也。◎啓させさせ給へ 〔補〕御側の女房へ、あてゝの返書なれば也 ○たいばん所云々 〔春〕皇后の臺盤所の雜仕。

二日ばかり有りて、赤衣きたる男の、たゝみをもてきて、「これ」といふ。「あれは誰ぞ。（清少のとがむる也）あらはなり」など物はしたなういへば、さしおきていぬ。「いづこよりぞ」と問はすれば、まかりにけりとて、とりいれたれば、殊更に御座(ゴザ)といふたゝみのさまにて、かうらいなどいときよら也。心のうちには、さにやあらんと思へど、猶おぼつかなさに、人ども出だしもとめさすれどうせにけり。あやしがりいへど使のなければいふかひなし。所たがへなどならば、おのづから又いひに來なん。宮のほとりにあないしに參らせまほしけれど、さもあらずば、うたてあるべしと思へど、なほ誰れか

「あやの」千蔭一本により補へり

かな」といふ　さてのちほどへて、すゞろなる事を思ひて里にある比、めでたき紙二十をつゝみて給はせたり。仰せごとには、「とくまゐれなどのたまはせて、「是れはきこしめしおきたる事ありしかばなん。わろかめれば、壽命經もえかくまじげにこそ」と仰せられたる、いとをかし。むげに思ひ忘れたりつる事を、おぼしおかせ給へりけるは、なほたゞ人にてだにをかし。ましておろかなるべき事にぞあらぬや。心もみだれて啓すべきかたもなければ、たゞ

かけまくもかしこきかみのしるしにはつるのよはひになりぬべきかな

あまりにやと啓せさせ給へ」とて參らせつ。だいはん所の雜仕ぞ御使には來たる。青きあやのひとへなどとらせて。まことに此のかみをさうしにつくりてもてさわぐに、むづかしき事もまぎるゝこゝちしてをかしう、心のうちもおぼゆ。

◎かうらいべり　(春)高麗縁。(補)綾織の疊のへりをいふ。白地に黒く小紋を織り出したるもの。◎おばすて山の月は　(春)清少の心は、紙疊にこそ慰むに、何人かおば捨の月になぐさむぞとの御戯言也。「わが心なぐさめかねつさらしなやおばすて山にてる月をみて」(補)古今集雜上、讀人しらずの古歌なり。姥捨の傳説、大和今昔の兩物語にあれど、古歌より暗示を得て、漢籍列子や佛典雜寶藏經棄老國の談等を取りまじへ、後に案出せしものなり。其の事委しくは帝國百科大辭典に記しおけり。◎そくさい　(補)息災延命とて、佛典より出でたる祈願の語。息は止むる義。◎すゞろなる事　(補)漫　また不覺ともかけり。此所は不覺の字

こよなうなぐさて千本により補ふ

註これなも猶刺櫛の事としたるはいかゞあらむ。心得難し。一本朱筆の文につゞけて見れば、思ふ人の病惱の癒えたるに、我か身のよりも、まさりてうれしと成りて、よく聞えたり。そもそも古本の、比較的流布本に優る事は、勿論なれども、絶對にとは言ひがたかるべし。然るに古本にありといへば、一も二もなく皆それに從ひて改めつゝ、他を顧みざるは、用意あるべき事ならずや。此の「刺櫛むすばせ」の如きも、古本の方却つて誤脱(むチ脱シばチら卜誤り)ならむも知るべからず。◎道あけて 圖並み居し人々の中なあけて、清少なとほし召しよせし也。

二四六（白き紙と新しきたゝみ）

御前にて人々あまた物仰せらるゝついでなどにも、「世の中（清少の申上らる、詞也）のはらだたしうむづかしう、かた時あるべきこゝちもせで、いづちもいづちもいきうせなばやと思ふに、たゞの紙のいと白うきよらなる、よき筆、白き色紙、みちのくに紙などえつれば、こよなう慰みてさばれかくてもしばしありぬべかりけりとなん覺え侍る。又かうらいべりのたゝみのむしろ、あをうこまかに、緣(へり)の紋あざやかに、くろうしろう見えたる、引きひろげて見れば、何か猶さらに、此の世はえ思ひはなつまじと、命さへをしくなんなる」と申せば、「いみじくはかなき事にも慰むなるかな。をばすて山の月は、いかなる人の見るにかと笑はせ給ふ。さぶらふ人も「いみじくやすきそくさいの祈り

事ならむか。蒔繪する事をも摺るといへど、釵子は金屬製の細き釘なれば、蒔繪は成らじ。さて釘を磨くとして「なかしげなる」とは何如なる義にか。明らかならず、或は作り磨く事をいふかとも考へらるれど、當時の釵子は一定の制ありて、後世の如く人々の好みに任せて、誂へ作るべき物ならねば、特に其の事をいふべきやうもあらじ。倩又、流布本の「むすばせ」に從へば、往古の釵子には、紫の紐長くつきたれば、之を假髻(スヱ)に結ぶことをいふならむ。今その證をいはゞ、雅亮裝束抄上卷、釵子さす事とある條に、「さいし……むら濃の三繰(ミクリ)の緒をつけたり。……右の方の髮を、少し釵子にてすくひ、……釵子の先出でたるに、此の村濃の糸の、かたしを、……さいしの先に絡む。其の絡むやう習ふべし。秘すべし。されば糸は裏表の耳の上に下りたるを、肩の前に、髮に具して下ぐべし。いたく額によせてさしつれば、うつ伏しなどすれば落つれば、鬘(カツラ)(假髻(スヱ))のわたりの程にさすべし。云々とあるに考へ合せて悟るべし。「其の絡みやう習ふべし秘すべし」とあれば、むづかしき作法にて、之を人して結ばせたるに、程よくしたるは嬉しかるべし。されば春本に、「むすばせ」とある、中々によろしからずや。やゝ後のものながら、信實の筆と傳ふる紫式部日記繪卷、御產養(オンウブヤシナヒ)の所の女房たち、釵子むすびたる紐の餘りを、長く垂れたり。(其の一圖を裝束圖解に載せおけり)恐らくは清少なども、晴の日はかくしたるならむ。此の釵子の右左にも片よらず、上り下り程よく、結び、假粧のとゝのひたるを、「なかしげなる」とて、嬉しとはいへるなるべし。

さて此の次に、千蔭翁朱筆を以て、一本による左の一句を書き添へたり。

又もおほかる物を、日ごろ月ころ(虫バミ)き事ありて、なやみわたるが、おこたりぬるもうれし。

かくあれど、上の方前文につゞかず、恐らくは此の間にも亦脫文あるべし。◎おもふ人の上は云々 (補春)

でか嬉しからざらん。又いみじう我れはと思ひて、したりがほなる人謀りえたる女どちよりも男はまさりてうれし。是れがたふは必ずせんずらんと、常に心づかひせらるゝもをかしきに、いとつれなく何とも思ひたらぬやうにて、たゆめ過ごすもをかし。にくきものゝあしきめ見るも、罪はうらんと思ひながらうれし。さしぐしむすばせたるに、をかしげなるも又うれし。思ふ人の上は我が身よりもまさりてうれし。御前に人々所もなくゐたるに、今のぼりたれば、すこしとほき柱のもとなどにゐたるを、御覽じつけて「こちこ」と仰せられたれば、道あけて近くめし入れたるこそうれしけれ。

◎はづかしき人　（補）こゝろ恥かしく奥ゆかしく思ふ人。◎物合せ何くれと　（春）歌合繪合等何やかやといどむ也。戰イドムあらそふ心也。◎いみじう我れはと思ひて　（春）我は人にたばかられじと、賢がほなる人をたばかり得たるが、うれしきと也　たはふれのたばかり事也。◎これがたふは　（補）此れが答(タフ)になり。諸本たうとありて、季吟には黨、濱臣は當と解きたれど、共に非なり。石川雅望雅言集覽に、「たふ、答、俗に意趣チカヘス返報ノ意也とて、此所の文、落窪、宇治拾遺等の例證をあげたり。◎罪や得らん　（春）人の惡を悦ぶは、罪得んとは思ひながらと也。◎さしぐし云々　[illegible]刺櫛は簪。卽ち釵子なる事上にいへり。さて次の詞は、春本抄本等、皆「むすばせ」とあるを、千蔭翁古本に校べて、「すらせ」と旁書し、武藤氏も同じ樣に改めたれど、「すらせ」の語釋を闕きたり。今先づ改訂の詞に就いて考ふるに、「すらせ」に擦り磨く

夢解きのことと拙著隨筆からすかごに委しく記しおけり

◎一つを見て　〔　〕卷一を見て程經て後に、又卷二を發見したるをいふ。されば一つ二つとは讀まず、イチ、ニと讀むべしといふ說あれど、當時の詞にては、猶一つ二つといへるが如し。外にも例あり　（　）心おとりするやう　〔　〕第二は、第一に劣ると、心中に思ふをいふ　◎いかならむと思ふ夢　〔　〕吉凶いかにと疑はしく思ふ夢　◎ことにもあらず合せたる　〔　〕何事にもあらずと、夢解(ユメトキ)の判斷して合致さすること。當時一般に夢想を信じ、曖昧なる夢は、夢解といふ者に問ひて、彼れの判斷と合はする風俗行はれき。◎我れに御覽じあはせて　〔　〕人々あまたの中に、我に貴人の御目を見合せて、かたりきかせ給ふ也　◎おもふ人の云々　〔　〕我が思ふ人の才德など貴人のほめ給ふ也　◎やんごとなき　〔　〕捨て難き者におぼすこと。語釋上に委し。◎うちぎき　〔　〕打聞　聞き書き。覺え帳　（　）みづからの云々　〔　〕淸少わざと自謙したる詞なり。◎うちとけたらぬ人の云々　〔　〕打ち解けがたく心安からぬ人のいひたる故事の、知られぬを、强ひても問ひ聞ふめ難かりしが、他より聞き出で、又書物の中より見付たるは嬉しと也。◎かのいひたりし人でたかしき　〔　〕此書を見てこそいはれけめと思ふに、心にくゝおもしろきと也。

みちのくにがみ。白きしきし。たゞのも、よき得たるもうれし。はづかしき人の、歌のもとすゑとひたるに、ふとおぼえたる、われながらうれし。常にはおぼゆることも、又人の問ふには、きよく忘れてやみぬる折ぞ多かる。とみにものもとむるに見出でたる。只今見るべき書(フミ)などを、もとめうしなひて、萬(ヨロヅ)の物をかへすがへす見たるに、さがし出でたるいとうれし。物あはせ、何くれといどむ事に勝ちたる。いか

つぎての三字古本抄本による
見つゞけこれも同前

へだたりて春本になし
千本による

故事諸本古き事とよめるは非なり

二四五　（うれしきもの）

うれしきもの。まだ見ぬ物語のおほかる。又一つを見て、いみじうゆかしうおぼゆる物語の、二つ見つけたる。心おとりするやうもありかし。人のやりすてたる文をつぎて見るに、おなじつゞきあまた見つづけたる。いかならんと思ふ夢を見て、おそろしとむねつぶるゝに、ことにもあらずあはせなどしたる、いとうれし。よき人の御前に人々あまたさぶらふ折に、昔ありける事にもあれ、今きこしめし、世にいひけることにもあれ。語らせ給ふを、我れに御覽じあはせてのたまはせ、いひきかせ給へる、いとうれし。遠き所はさらなり。同じ都のうちながらも、へだたりて、身にやんごとなく思ふ人の、なやむをきゝて、いかに〳〵とおぼつかなく歎くに、おこたりたるよし消息えたるもうれし。思ふ人の人にもほめられ、やんごとなき人などの、くちをしからぬ者におぼしの給ふ。物のをり、もしは人といひかはしたる歌の聞えてほめられ、うちぎきなどにかきいれらるゝ、みづからの上にはまだしらぬ事なれど、なほおもひやらるゝよ。いたううちとけたらぬ人の、いひたる故事（コジ）のしらぬを、聞き出でたるもうれし。後に物のなかなどにて見つけたるはをかしう、たゞこれにこそありけれと、かのいひたりし人ぞをかしき。

事ある物を、それをさしおきて、さやうに人の上をもどかしくいひたき物にはあらじと也。畢竟座興にて、いふ物を、一向にきゝ腹立つはわりなきことゝいふこゝろ也。◎されどけしからぬやうにも〔釋〕然ども、人の噂をいふは、けしからぬやうにも有りと也。此段に、坐興ながらも、人の噂はよろしからぬとの事を、たちかへりいふ也。◎又思ひはなつまじきあたり〔釋〕又たとひ、悪きふるまひ有ても、え思ひ捨て見はなつまじき人の事は、いとほしや。人としては、さやうの事もなどかなからん。など了解し、思ひとけば、噂にそしりたき事も、念じこらへて、いはぬ物をと也。やは助字也。

二四四（人の顔）

人の顔に、とりわきてよしと見ゆる所は、たびごとに見れども、あなをかしめづらしとこそ覺ゆれ。繪などあまたたび見れば、目もたゝずかし。近うたてる屏風のゑなどは、いとめでたけれども見もやられず。人のかたちはをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも、一つよき所のまもらるゝよ。見にくきもさこそはあらめと思ふこそわびしけれ。

◎繪など云々　〔釋〕此の繪は人の容姿をかける繪ならむ。源氏の桐壺の巻に、繪にかける楊貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども、筆限りありければいとにほひ少し。とあるも同し意同なり。◎まもらるゝ　〔釋〕見つめらるゝ也。◎見にくき云々　〔釋〕形のあしき人も、亦一所は人の好む所のあらむと、自から思ふ心なり。

補なげは無氣の意。萩原氏源氏の語釋に、有りげにもなきとの意なりとあり。◎いかで此人に思ひしりけりとも　春彼陰ごとに、なさけしくいひたる嬉しさを、思ひ知たりといふほどの心ざしを、見せたきと思ふと也。◎必思ふべき人云々　補我が上を、いかにと常に思ふべき人や、安否をも訪ふべき、緣故ある人々は、當然の事なれば取り分きても思はずとなり。分かれしものしは助字。◎さもあるまじき人云々　春さやうに問ひおもふべき故もなき人の、我れにうしろ安きいらへしたるは也。◎いとやすき　春さしいらへすることは、易き事なれども也。◎心かど　補眞實の心と、才あると二つなるべし。

二四三（人のうはさ）

人のうへいふを腹だつ人こそいとわりなけれ。いかでかはあらん。我が身をさしおきて、さばかりもどかしく、いはまほしきものやはある。されどけしからぬやうにもあり　又おのづから聞きつけて、怨みもぞする、あいなし。又思ひはなつまじきあたりは、いとほしなど思ひ解きて、ねんじていはぬをや。さだになくば、うちいでわらひもしつべし。

◎人のうへいふを云々　春此段は、座興には人の噂いふ事もあるを、人の上いふは一向によからぬ事と、聞き腹立つ人はわりなく由なき事をいふ也。◎いかでかはあらん　春我身を置て、人の上をいひたき物は、いかでかはあらんと、次の詞をいはんとて、先いふことば也。◎我が身をさしおきて　春我身にも惡き

也。◎おほやけ所〔張〕公儀。◎及ぶまじからんきはゝ〔春〕身に相應せぬよき人ゝも、美人と思はんゝば、しひても思ひかけよと也。◎おほやけばらだちて〔春〕外の見きく人までも、腹立つ心也。〔補〕本居翁玉ノ小櫛に云、おのれあづからぬ人のうへのことゝ、かたはらより見きゝて、はらたゞしう思ふこと也。俗にいふ法界りんきの法界、此の大やけにあたれり。◎いきなどする〔春〕男の外へゆくなり。◎けんぞく〔春〕眷屬。女の親類などまで、心うく思ふべしと也。

二四二（なさけあること）

萬（ヨロヅ）の事よりも情（ナサケ）ある事は、男はさらなり。女もこそめでたくおぼゆれ。なげの詞なれど、せちに心に深くいらねど、いとほしき事をいとほしとも、あはれなるをば、げにいかに思ふらんなどいひけるを、つたへて聞きたるは、さしむかひていふよりもうれし。いかで此の人に思ひしりけりとも見えにしがなと、常にこそおぼゆれ。必ず思ふべき人、とふべき人は、さるべき事なれば、とりわかれしもせず。さもあるまじき人のさしいらへをも、うしろやすくしたるはうれしきわざ也。いとやすき事なれど、更にえあらぬ事なめり。大かた心よき人の、また心かどあること、男も女もありがたき事なめり。

◎なげの詞なれど云々〔春〕さして思ひいれたる事ならねども、情しき詞ゝ、陰（カゲ）ごとにもいふべき事との心也。

来にても、其の愛子は、他人も見聞き注意して、之を労はりかしづくと也。◎見るかひあるは云々　〔春〕容貌行跡もよきは、親として之を思ふは理りと也。〔通〕いかゞ愛らしと思はざらんと也。◎ことなる事なき云云　〔通〕特に長所もなき子を、愛しく思ふは、眞の親なればこそとなり。

二四一（男こそあやしきものはあれ）

男こそ猶いとありがたくあやしきこゝろしたるものはあれ。いと清げなる人をすてて、にくげなる人をもたるもあやしかし　おほやけ所にいりたちするをのこ、家の子などは、あるが中によからんをこそは、えりて思ひ給はめ。及ぶまじからんきはをだに、めでたしと思はんを、死ぬばかりもおもひかゝれかし。人のむすめ、まだ見ぬ人などをも、よしときくをこそは、いかでともおもふなれ。かつ女の目にもわろしと思ふを思ふは、いかなる事にかあらん。かたちいとよく、心もをかしき人の、手もようかき歌をもあはれによみて、おこせなどするを、返りごとはさかしらにうちするものから、よりつかず。らうたげに打ちなきてゐたるを、見捨てていきなどするは、あさましう、おほやけばらだちて、けんぞくのこゝちも心うく見ゆべけれど、身のうへにては、つゆ心ぐるしさを思ひしらぬよ。

◎ありがたく　〔通〕珍らしく　◎いときよげなる人を　〔春〕美人を見捨て、悪女をもつ男もあるがあやしきと

此の説いかゞあらむ。按ずるに、れい（例）のを書き誤りたるにて、例のは袴のみにかゝる非ず。下の黒半臂などあざやかに」までかゝる詞ならずや。◎すはうがされ 【春】夏の下襲を、蘇芳の下がされと名付、すはうにて、黒むほどこれを染む。禁色を聴りたる人等著レ之と桃華蘂葉にあり。◎黒半臂 【春】桃華云。夏は生の穀、文三重たすきにて染レ之。【欄】忘緒はうすき物也。たゝみて付レ之。云々 ◎とみのを 【補】鴟ノ尾。車の左右の轅の、後にさし出でたる所。◎いかに見るらむ 【春】此の搨の近くゐるを、女の何と見るらむと也。◎こと人々も云々 【補】他人等は、知らぬ顔にてゐたるかなと也。

目たち耳たてられ千本による

二四〇 （人に思はれむばかり）

世の中に猶いと心うきものは、人ににくまれん事こそあるべけれ。たれてふ物ぐるひか。われ人にさ思はれんとは思はん。されど自然（ジネン）に、宮づかへ所にも、親はらからの中にても、思はるゝ思はれぬがあるぞいとわびしきや。よき人の御事は更なり。げすなどのほども、親などのかなしうする子は、目だち耳たてられて、いたはしうこそおぼゆれ。見るかひあるはことわり いかゞ思はざらんとおぼゆ。ことなる事なきは、又これをかなしと思ふらんは、親なればぞかしとあはれなり。おやにも君にも、すべてうちかたらふ人にも、人に思はれんばかりめでたき事はあらじ。

◎たれてふ 【補】誰れといふ。◎かなしうする子 【補】愛する子なり。上よりの文意は、上流の人にても、下

しうとにあひたる、いとほしとや思ふらん。ある人のいみじう時にあひたる、人のむこになりて、たゞ一月もはかぐ\しうもこでやみにしかば、すべていみじういひさわぎ、めのとなどやうのものは、まが／＼しきことなどいふもあるに、其のかへる年の正月に、藏人になりぬ。「あさましうかゝるなからひには、いかでとこそ人は思ひたれ」などいひあつかふは聞くらんかし。六月(ミナヅキ)に人の八講(ハカウ)し給ひし所に、人々集まりてきくに、この藏人になれるむこの、れうのうへの袴蘇芳重ね、黑半臂などいみじうあざやかにて、忘れにし人の車の、とみのをに半臂の緒をひきかけつばかりにてゐたりしを、いかに見るらんと、車の人々も、しりたるかぎりはいとほしがりしを、こと人々も、「つれなくゐたりしものかな」など後にもいひき。猶男は物のいとほしさ、人の思はん事はしらぬなめり。

◎すまぬむこ 〔磐〕女の家に來通はぬ壻。◎時にあひたる 〔磐〕句を切るべし。いみじう時にあひたる人が、或人の壻になりて也。諸本句を切らず、引きつゞけ書きたれば、最(イト)まぎらはし ◎いひさわぎ 〔春〕あだし心を怨むなり。◎めのと 〔春〕女のめのと也。◎まが／＼しきこと 〔磐〕呪咀の言などをも發するをいふ。◎かゝるなからひにいかでとこそ 〔春〕かやうにうらめしき中には、いかで壻のため、惡き事もあれかし。などこそ思へなど、かののろひしめのとなどの、ねたがりていふ也。◎れうの上の袴 〔春〕綾(レウ)の表袴なり。〔磐〕

いみじくきたなきもの。なめくぢ。えせ板敷の帚（ハヽキ）。殿上のがうし。

◎殿上のがうし　〔春〕合子にや、引入合子など云、〔補〕合子は椀なり。諸人にて共用すればきたなしといふ也。

二三七（せめておそろしきもの）

せめて恐ろしきもの。よるなる神　近きとなりにぬす人の入りたる。我がすむ所に入りたるは、たゞ物もおぼえねば何ともしらず。近き火またおそろし。

二三八（たのもしきもの）

たのもしきもの。こゝちあしき比、伴僧あまたしてずほうしたる。思ふ人のこゝちむづかしき比、まこと〳〵しき人の、いひなぐさめたのめたる。物おそろしき親どものかたはら。

◎伴僧　〔補〕加持修法の導師に伴はるゝ衆僧。◎たのめたる　〔補〕令レ頼。タノマセの約。

二三九（すまぬ婿にあひたる）

いみじうしたててむことりたるに、程もなくすまぬむこの、さるべき所などにて、

うちしきて　諸本うへにしてとあれと千本によれる

人こそにくけれとなり。美隆ぬしも既に同じ趣の事をいひ試みたり。

二三五（稲かる）

八月(ハヅキ)つごもりがたに、うづまさにまうづとて見れば、ほに出でたる田に、人おほくてさわぐは、稲かるなりけり「さなへとりしかいつのまに」とはまこと。げにさいつごろ賀茂にまうづとて見しが、あはれにもなりにけるかな。是れは女もまじらず、男どものかた手に、いとあかきいねの、もとは青きをかりもちて、かたなか何にかあらん、もとをきるさまのやすげに、めでたき事に、いとせまほしく見ゆるや。いかでさすらん。ほをうちしきて並みをる、いとをかしう見ゆ。いほりのさまなどもことなり。

㊀うづまさに　〔釈〕太秦也。拾芥云、廣隆寺。又號二蜂岡寺一。秦川勝建立藥師云々。㊁さなへとりしか　〔釈〕「きのふこそ早苗とりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹」古今集　㊂あかき稲　〔釈〕熟したる也。㊃かたなか　〔釈〕鎌を知らぬにや　㊄めでたきことに　〔釈〕めでたきものといふ題下に、入れたしと也。㊅ほをうちしきて　〔釈〕稲の穗を敷きて田夫の並び居る也

二三六（いみじくきたなきもの）

春本なかたかわらはとあるはたの一字を落したる也

賀茂へまうづる道に、田植うとて女どもの新しきをしきのやうなる物を笠にきて、いと多くたちて、歌をうたひ、おきふすやうに見えて、只何すともなくうしろざまに行くは、いかなるにかあらん。をかしと見るほどに、郭公をいとなめくうたふ聲ぞ心うき「ほとゝぎすよ、おれよ、かやつよ。おれなきてぞ、われは田にたつ」とうたふを聞くも、いかなる人か、「いたくな鳴きそ」といひけん。仲忠がわらはおいひおとす人と、郭公は鶯におとるといふ人こそいとつらうにくけれ。

◎なしき 〔補〕折敷。檜の薄板にて作れる隅切角の盆なり 上文にもありき。◎うしろざまに 〔補〕早苗の植ゑつけするを、宮女等は何すとも知らねばなり ◎郭公をいとなめく 〔春〕郭公といふ里謡を、なめげにうたふ也。なめくとは、輕の字無禮などの心なり。◎おれよかやつよ 〔補〕己れよ、彼奴よなり 郭公をさす。俚謡の意は、郭公よ。汝のなく頃は、我れ斯く、田植に立ちて、辛き業をなす。と怨みたる也、郭公の聲を賞美せず、罵るを心うきといふなり。◎うたふを聞くも 〔補〕聞くにもの意。◎いかなりし人か 〔補〕いかなる無情の人か、昔も下のやうなる歌よみけむと也 ◎いたくな鳴きそ 〔補〕千蔭云、萬葉八、大伴坂上郎女「郭公いたくな鳴きそ獨居ていのねられぬに聞けば苦しき」直按ずるに、拾遺集にも出づ。此の歌の意は、戀の切なるをいひて、獨寢の枕に、郭公の鳴く音をきけば、いとゞ胸中の苦しき由なるが、本文は唯、郭公の聲を聞けば苦しと、厭ひがほなる詞のみに就いていへるなるべし。◎仲忠か童おひ 〔補〕宇津保物語中の主人公、仲忠の幼（チサ）な生の奇特なりし事、上にもありき 之を誹し貶（オト）す人と、郭公は鶯に劣ると斷言する

しきた、見せじとの戯なり。此の風姿、承安五節繪卷に見ゆ。

二三一　（たゞすぎにすぐるもの）

唯過ぎにすぐるもの。ほあげたる舟。人のよはひ。春夏秋冬。

二三二　（ことに人にしられぬもの）

ことに人に知られぬもの。人のめおやのおいたる。くゑにち。

◎くゑにち　(春)拾芥云、凶會日。正月庚寅、辛卯、甲寅、二月巳卯、乙卯、辛酉、下略。猶月ごとに有り。凶會日は、暦に沙汰ししるすといへど、血忌日、天火地火などやうに、世人さして忌憚られば、ことに人にしられぬ物といふなるべし。

二三三　（五月四日の夕つかた）

五月四日流布本五六月とあり非也

五月四日の夕つかた、あをき草をほそううるはしくきりて、赤ぎぬきたるをのこの、ちひさき笠をきて、左右（ヒダリミギ）にいとおほくもちて行くこそ、すゞろにをかしけれ。

◎赤ぎぬ　(補)退紅のこと。薄赤き布衫にて下部の服也。上にありき。

二三四　（田うゑ）

細殿のやり戸をいととうおしあけたれば、御湯殿のめだうより、おりてくる殿上人の、萎えたる直衣さしぬきの、いたくほころびたれば、色々のきぬどものこぼれ出でたるを、おしいれなどして、北の陣のかたざまにあゆみ行くに、あきたるやり戸のまへをすぐとて、纓をひきこして、かほにふたぎてすぎいぬるもをかし。

◎細殿　補弘徽殿の西廂を細殿といふ。遣戸（ヤリド）は南北にあり。南の方をあけたるならむ。◎御湯殿　補清涼殿にあり。東西に切馬道あり。東の方ならむ。土廂を傳はりて、細殿の南の遣戸口に出づる道あり。◎めだう　補馬道。簡短に説きさとし難けれど、要するに、雙方両室の間の、細き廊の如くなる通路をいふ。床を切り通しにして、上には厚板をわたしあれど、之を取り除けば、下は土廂と同じやうに、石敷にて、馬をも引き出つべく構へなしたる所なり。仍て馬道の名はあるならむ。萩原廣道源氏物語の餘釋に引ける、長澤伴雄の考説あれど、未だしき所まじりて、初學には猶解し難かるべし。橘守部鐘のひゞき卷二にも、いと長き辯あり。其の一節を抄出せんに、「一事とある時、宮中奥の間所まで、馬を引き入れて、乘り出でん爲の通路なるを、常には横に厚板を敷渡しおきて、廊と同じくかよひ道には爲しおくにぞ有りける。大鏡（伊尹傳中）云、帝（花山帝のこと）馬をいみじう興ぜさせ給ひければ、舞人の馬を、後涼殿の北の馬道より通させ給ひて、朝餉の壺にひきおろさせ給ひて、殿上人を乘せて御覽ず云々と、此の末にも證文を擧げられたり。馬道の構へ大やうこれにて察すべし。◎北の陣　補朔平門。内裏の北の御門。◎纓をひきこし　補纓は冠の後に垂れたるを、わざと前の方に引き越して、顔をふたぎたる也。女房たちに、朝寢顔の見苦

はくきは諸本はくの二字なし千本による

二二九　（雪中のとのゐ姿）

雪たかう降りて、今も猶ふるに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが、うへの衣の色いときよらにて、革の帯のかたつきたるを、殿居すがたにて、ひきはこえて、むらさきのさしぬきも、雪にはえて、こきまさりたるを着て、あこめの紅ならずは、おどろ〳〵しき山ぶきを出だして、からかさをさしたるに、風のいたく吹きて、よこさまに雪を吹きかくれば、少しかたふけてあゆみくるに、深沓、はうくわ、などのはくきはまで、雪のいと白くかゝりたるこそをかしけれ。

◎うへの衣　㊟袍。上に註せり。◎革の帯　㊟石帯といふに同じ物なり。前にあり。◎かたつきたる　㊟帯のあとの、袍の背後につきて見ゆるをいふ。元来革の帯は、正装の束帯にのみ用ふる具にて、衣冠以下の装には用ひず。但し束帯も衣冠も同じ袍なれば、束帯を衣冠に改むる時、元の束帯の袍を、そのまゝに著る故に、うしろに革の帯のあたる痕跡の殘りて見ゆる也。◎とのゐ姿　㊟衣冠の装をいふ。束帯を日の装束といひ、衣冠を殿居姿といへり。束帯の下襲を脱ぎ、表袴を指貫の袴に替へたる略装なり。◎ひきはこえ　㊟袍を引き上げて着たるをいふ。猶委しくは満着装束図解を見よ。◎あこめ　㊟衵也。袍の下に着レ之。紅の衵ならずは、山吹色などを出してと也。◎はうくわ　㊟半靴。

二三〇　（細殿のやり戸の前）

身をかへてん人などは、かくやあらむと見ゆるものゝ、たゞの女房にてさぶらふ人の、御めのとになりたる、唐衣もきず、裳をだに用意なく、はくぎぬにて御まへにそひふして、御帳のうちをゐどころにして、女房どもを呼びつかひ、つぼねに物いひやり、文とりつがせなどしてあるさま、いひつくすべくだにあらず。雑色の藏人に成りたるめでたし。こぞの霜月臨時の祭に、御琴もたりし人とも見えず。公達につれたちてありくは、いづくなりし人ぞとこそおぼゆれ。外よりなりたるなどは、おなじ事なれどさしもおぼえず。

◎身なかへてん人 〔補〕身分の進化したる意 ◎かくやあらむ 〔補〕此の様に變るものなるかとなり。◎はくぎぬ 〔補〕薄衣なるべし。山田錦所翁は後愚昧記永和三年の條に、薄衣とかけるもの。薄(ハク)(金銀の箔)なすりたる衣なりといへり。後世の書ながら、女房裝束抄に、ハツキと稱する衣。掛の代りに、小袖の上に著るものあり。是れか。或説薄衣はウスギヌと訓むべきを誤りたる由いへれど、うす衣は被衣(カツキ)とて外出の時の料にて、室内には著ざるが如し。◎局に物ないひやり 〔杜〕我が局に用事ないひやる也。◎雑色の藏人になり 〔春〕藏人所の雑色也。必藏人になる者なり。禁秘抄云、雑色は本員八人、代々皆轉ニ藏人一。◎御琴もたりし 〔春〕賀茂臨時祭に、所の雑色、或は所衆など、御琴なかく事あり。江次第十云、於ニ竹臺邊一發ニ歌曲一所雑色若衆昇ニ御琴一云々。◎外よりなりたるなどは 〔春〕雑色ならで外の人の藏人に成たる也。

◎内侍のすけ　(春)尙侍につける女官也。職原追加云、典侍四人相當從四位、掌同二尙侍一。唯不レ得二奏請宣傳一。若無二尙侍一者得二奏請宣傳一。(補)是れは上代の制なり。平安朝時代の尙侍（ナイシノカミ）は、天子の御侍妾にて、大臣の女などならでは成り難かりき。◎ないし　(春)掌侍といふなり。職原追加云、掌侍相當從五位。掌同二典侍一。唯不レ得二奏請宣傳一云々。禁秘抄云、掌侍六人、正四人權二人、權自二上古一有レ之。此内以二一内侍一爲二勾當一。隨二補日一爲二一二一也。(補)單に内侍といふはナイシノゼウの略なり。いづれも唯の女房に非す。女子の官吏なればなり。

二二七（みやづかへ所は）

宮仕へ所は。内（ウチ）。きさいの宮。其の御はらの姫宮。一品（ホン）の宮。齋院は罪ふかけれどをかし。ましてこの比はめでたし。東宮の御母女御。

◎一品の宮　(春)親王は叙品の後、一品二品三品四品など申也。一位二位とは不レ申也。こゝは内親王の御事なるべし。◎齋院はつみふかけれど　(春)經、佛をもいみて、中子（ナカゴ）、染紙（ソメガミ）といへば也。選子内親王賀茂の齋院におはせし時「思へどもいむとていはぬ事なればそなたにむきてねをのみぞなく」◎まして此の頃は　(春)淸少の頃は、大齋院とて、選子内親王きこえ高くおはすれば也。(補)選子内親王風雅の才おはしまし、其の方の女房はたすき〴〵しきも多かりし事。此の草子及び紫式部の日記にも見えたり。

二二八（身をかへてん人などは）

公達は。頭ノ辨。頭ノ中將。權中將。四位ノ少將。藏人ノ辨。藏人ノ少納言。春宮のすけ。藏人ノ兵衛ノ佐。

◎公達は (春)執柄大臣などの子息。◎頭辨 (春)藏人の頭にて、辨官たかねたるなり。百寮訓要云、藏人頭は殿上を管領す。惣じて殿上の貫首也。重代の人々、公達も名家も殊に器量を撰びて任ぜらるゝ也。辨は左右の大辨中辨小辨。權辨一人ありて七辨也。百寮訓要云、陣の右筆諸事奉行する器也。◎藏人の兵衛佐 (春)五位藏人兵衛佐を兼ねし也。兵衛は、百寮云、これも禁中警固の官也。門外をかたむ。衛門府のごとし。又行幸行列の事をつかさどる。又宮中を巡檢する官也。(磐)是等も亦、顯要の職、若公達に、規模とする所なればなるべし。

二二五 (法師は)

法師は。律師（リシ）。内供（ナイグ）。

◎律師 (春)弘安禮節ニ律師、准二五位一。◎内供 (春)内供奉とおなじ。官職便覽云、寶龜三年三月始置二内供奉十禪師一云々。猶續日本紀に委し。當時は山門三口、園城寺に七口、各相傳の職とする歟。

二二六 (女は)

女は。内侍のすけ。ないし。

ひがごと也。翁はみとせごちごと續けよみたる誤りか。春本この間に句點なきに、落したるにて、ちごの祈りする女の事は又別の物語なり。◎祓などする女〔春〕巫女なり。◎物の具〔春〕祓の具にすべき紙麻などの類を、請ひ出たす也。〔磐〕此の外散米人形などもあり。◎めおほかる〔磐〕幣束の紙の切りめなるべし。◎してかけ〔磐〕垂掛け ◎かつは〔磐〕其の上又の意 ◎女なん〔磐〕巫女の自稱 ◎げすの家云々〔磐〕是れより前と又別の事なり。下衆の家にては、夫より妻の方さかしき習ひ、今もかはらず。◎さかしき人〔磐〕夫をさす。さかしかるべき夫を、却つて指圖するとなり。

二二三（上達部は）

上達部は。春宮ノ大夫。左右の大將。權大納言。權中納言。宰相ノ中將。三位ノ中將。春宮ノ權大夫。侍從ノ宰相。

◎上達部〔磐〕三位以上を上階と稱す。上階に達する人を上達部と稱する由、（既出）。但し大臣以上を除外して稱する事、當時の慣例なり。◎春宮大夫〔磐〕職原抄に、東宮春宮是一也とあり。東宮は皇太子の宮にて、天皇の御在所の東にある故の名なり。東に住かるゝは、東を震とす。易に震は長男の卦なればなり。其の官廳を春宮坊と名づく。されば大夫以下春宮坊の官員には、皆東宮とかゝず、必ず春宮とかきて、猶トウグウと讀むが故實なり。◎左右大將云々〔磐〕是等の官人、みな三位以上の貴顯の人々なれば、列擧せし也

二二四（公達は）

なり。◎すまひ　㊟七月相撲の節とて、禁中にあり。其の相撲人どもを云ふ也。皆勇力の者なれば、我が力を頼みて人を輕んじ無禮なるにや。

二二二（さかしきもの）

さかしきもの。いまやうのみとせご。ちごの祈りし祓へなどする女。物のぐどもこひ出でて、いのりの物ども作るに、紙あまたおしかさねて、いとにぶきかたなしてきるさま、ひとへだにたつべくも見えぬに、さる物の具と成りにければ、おのが口をさへひきゆがめて、おしきり、めおほかる物どもしでかけ、竹うちわりなどして、いとかう〴〵しうしたてて、うちふるひ祈る事どもいとさかし。かつは何の宮其の殿の若君いみじうおはせしを、かいのごひたるやうにやめ奉りしかば、祿おほく給はりし事、「其の人かの人めしたりけれど、しるしなかりければ、今に女をなんめす。御徳をなん見る」などかたりをるもをかし。げすの家の女あるじ。しれたるものぞひしもをかし。まことにさかしき人を敎へなどすかし。

◎いまやうの三とせご　㊟現代の三歲兒は、昔のそれよりもさかしげに見ゆる由なり。然るに、美隆翁云、「此の頃のならはしとて、子生れて三つに成りける年、必ず其の生（オ）ひさきよからむ樣に、巫（カンナギ）を呼びて、祓へせさせしなるべし云々。この三歲兒を、さかしといふには非ず。巫のさまをいふ也。」といへるは、中々に

祝する祭なるが、宮咩祭は、中古陰陽師などの仕始めたる俗祭にして、搢紳家に於て、官位の榮進一門の繁昌などを祈る祭なれば、全然別なる事、彼の拾芥抄所載の祭文を見れば明かに知らるべし。さて中古の宮咩祭は、政治要略卷廿九、十二月の條に「午日宮賣祭事」と見え、又執政所抄正月の條にも「上ノ午日宮咩奠事」とありて、其の作法供物等の次第を記せり。猶爰に拾芥抄所載の祭文をも示すべし。

維永承某年歲次某其月壬午年が中ニ月ヲ擇ビ月ノ中ニ日チ擇ビ日ガ中ニ時チ擇ビ掛マクモ畏キ宮咩五柱笠間ノ廣前ニ從四位上行官姓名恐ミ恐ミモ申給ハク絹ハ作レ編(アミ)綿ハ作レ結(ユヒタテマツ)進リ物ハ高坏ガ彌高々ニ飯ノオモリカニ清酒(ヌミサケ)ノ早(スミヤ)カニ堅酒(カタキサケ)ノ堅ラカニ橘ノ忽チニ餅ノ持(モ)テ榮ニ鯛ノ平カニ鱒ノ益々ニ鯔(ナヨシ)ノ好々ニ鮑ノ片思鰯ノ搔(カキ)寄(カキヨセ)テ薺(ナツナ)ノ庭サラス嚴(イツクシ)ク聞食シ受納シ給テ壽(イノチ)ノ長ク身全クシテ天地ノ不祥内外ノ惡事未レ萌以前ニ兼テ遠ク拂ヒ退ケ給テ官爵如レ意ニ叶シメ給テ萬世ニ子孫繁昌ノ門ト有ラシメ夜ノ守リ日ノ守リニ常磐堅磐ニ守リ幸ヘ給ヘト恐ミ恐ミモ申ス

右は從四位上某に代りて、陰陽師の讀み上ぐる祭詞なり。文中五柱の神とは、高產靈神大宮津彥大宮津媛大御膳津姬宮咩五神をいひ、笠間は笠間大刀自と申す神なり。かゝれば大殿祭の宮之賣神とは全く別なるを悟るべし。然れども、この祭文よむ人が、何故詞なめげなるにや。其の理由知り難きを遺憾とす。强ひていはゞ、この陰陽師下賤の男にて、其の用語の、神に仕ふる人にも似ず鄙陋なるにや。

◎かんなりのぢん　〔参〕公事根源云。雷鳴陣とは昔雷聲三度高く鳴侍れば、大將以下近衛の次將まで、弓箭を帶して、御殿の孫廂に候じて、帝を守護し奉りし也。將監以下は、皆蓑笠をきて南殿に侍ふ。是を雷鳴陣とは申也。此時近衛の隨身威勢によりて、詞無禮なる事あるにや。舍人とは將監以下府生近衛等をいふ

ひじりのふるまひ。

◎ないがしろ　〔補〕無ガ代（ナイシロ）の意と黒川翁いへり。傍に人もなきが如くに、振舞ふことより、打ちとけたる風をも、亦再轉して、人を輕蔑する意にもいふ。◎かみあげ　〔補〕是れは前にいへる、貴婦人たちの寶髻の事にもあらず、陪膳女房の髮上にもあらで、下仕の女官や、下衆女など、内々雜用にはたらく者の假りそめに、髮を結（ユ）ひ上げたる姿をいへるなり。◎からゑの云々　〔春〕凡革帶は惣名にて、其の付きたる金玉石角にて名をなす物也。或は白玉の帶、隱文帶、馬瑙帶、紀伊石帶、出雲石帶、斑犀帶、烏犀帶のたぐひ、順が和名に委しくあり。桃花蘂葉にもあり。〔補〕唐繪は、彼の玉石に彫刻したる文樣をいふ　此の玉石を糸にて絡みて、綴ぢつけたる物なれど、表面の美麗なるに似ず、帶の裏は裝飾もせざればなり。但し後世は錦を貼る事となれり。◎ひじりの云々　〔補〕聖僧は、俗人の譏譽など顧みればなり。

二二一（ことばなめげなるもの）

ことばなめげなるもの。宮のめのさいもんよむ人。舟こぐ者ども。かんなりのちんの舍人（トネリ）。すまひ。

◎宮のめの祭文　〔補〕本居翁の大祓詞後釋に、「枕草子に、大殿祭の祝詞を、宮ノ女ノ祭文といへり。彼の祭を宮之賣祭といふ故也。拾芥抄に、宮ノ咩（メ）ノ祭文とて載せたるは、後世のいと拙きもの也」といへるは、千慮の一失といふべからむ。大殿祭は神祇官の中臣忌部等、禁中に參りて、仁壽殿紫宸殿等にて、宮殿の安泰を

近きほどに火出で來ぬといふ。されど、もえはつかざりける。物見はてゝ車のかへりさわぐほど。

◎はしり火　〔春〕おく炭など、飛火するをいふにや。むれ走り火など、歌によめり。〔補〕千蔭云、古今俳諧小野小町「人にあはむつきのなきにには思ひおきて胸走り火に心やけをり」走り火は火の粉の、外へ飛ぶをいふ。◎ときのさば　〔春〕齋（トキ）の産飯（サバ）を、屋根へ打ちあげしを、爭ひ食ふをいふにや。〔補〕上代僧侶の食事は、毎朝一度に限り、（一般の人は朝夕二度）之を齋（トキ）と名づく。トキは時を定めて食ふによるといふ。されば是れ以外に施主より供與する食を、非時といへり。さばは、生散とも散飯とも書けるが、食前少々の飯を取り分け置きて、餓鬼に施す義とす。衆生飯の略なりといへば、生飯の字を正しとせん。産飯とかけるはわろし。散飯は食後之を散棄して、鳥獸の食ふに任すよりの名なりともいふ。宮中に行はるゝ作法は、拙著禁秘抄講義に述べたり。◎十八日清水に　〔春〕世に十八日を觀音の日とする事、勝尾寺の觀音を、妙觀といふ人、寶龜十一年七月十八日より、僧俗童など十八人して、千手の像、四天王等、卅日に刻み終りて、八月十八日に妙觀うせたり。彼の十八人も見えずなりし。これより、國俗十八日を觀音の日とする也。（元亨釋書）◎火もともさぬ程に　〔春〕夕暮點燈ごろに、來客の多衆ありたるをいふ。◎人の國　〔春〕他國。◎家のあるじの云々　〔春〕受領などのあきたる家を、借りて住ひたるに、其の家主の、俄に歸り上りたるをいふ。

二二〇（ないがしろなるもの）

ないがしろなるもの。女官どもの、かみあげたるすがた。からゑのかはの帶のうら。

霧は川きり是れ春本になし抄及び一本による

たはむれし詞也。

二一七（雲　は）

雲は。しろき。むらさき。くろきもをかし。風吹く折のあま雲。明けはなるゝほどのくろき雲の、やう〳〵消えて白うなりゆくもいとをかし。朝にさる色とかや。ふみにもつくりけり。月のいとあかき面に、薄き雲いとあはれなり。

◎朝に去る色　(春)古詩の詞なるべし。未勘。(磐)千蔭夏陰二翁は、文選宋玉が高唐賦に據るとし、通釋には賦の文を引き載せたれど、なほ確にそれとも思はれず。

二一八（霧　は）

きりは。川霧。

二一九（さわがしきもの）

さわがしきもの。はしり火。板屋の上にて、からすのときのさばくふ。十八日に清水に籠り合ひたる。くらう成りてまだ火もともさぬほどに、ほか〳〵より人の來あつまりたる。ましてとほき所人の國などより、家のあるじの上りたるいとさわがし。

◎雪はひはだ (春)檜皮ぶきにふりたるが、おもしろしと也。次にあられは板屋といふも同じ。(補)板屋の霰は其の音を賞美するならむ。海人藻芥に、清涼殿の孫廂は板庇させる也。時雨の音を聞し召さん爲なり。とある類にや。

二一四 (日 は)

日は。入日。いりはてぬる山のはに、光のなほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄ばみたる雲の、たなびきわたりたるいとあはれなり。

二一五 (月 は)

月は。有明。東の山ぎはに、ほそうて出づる程いとあはれなり。

二一六 (星 は)

星は。すばる。ひこぼし。みやうじやう。夕づゝ。よばひぼしだになからましかば、まして。

◎すばる (春)昴星。和名六星の火神云々 ◎ひこほし (春)牽牛 ◎みやうじやう (春)明星。和名に阿加保之とよめり。神樂歌吉々利々に。あかほしやみやうじやう云々 ◎夕つゝ (春)長庚。和名。太白星の一名也。暮に西にあらはるゝ星也。◎よばひほし (春)流星。和名。天津星にしも、かゝる名をさへつかすはと

の義といふ。◎ずはえ　（補）楚。小技の類、笞の類をもいふ。◎尾はたらかさん云々　（補）尾を働かす方の蛇な雌とは知れと也。◎さしければ　（補）さやうに偽ければ。◎七わだ　（春）七曲。（補）千蔭本七わたりとあり。◎今すこしふときをつけて　（春）蟻の腰には、ほそきをつけて、又玉を貫くべき緒に今少しふときをつけてと也。◎みちをぬり　（補）みちは蜂蜜なり。（春）蜜の香につきて、蟻のよくゆくべきがためなるべし。源氏鈴虫に、みちをかくしほろゝけてとあり。是も蜜なり。◎只老たる父母の　（春）是、中將、我父母の事をいふにあらず。すべて、世人の父母をゆるされん事を、いへるなるべし。其の中に我父母の事はこもれば也。◎其の人の神になりたる　（補）春抄、旁註を始め、諸註みな中將の老父をいふとあり。事柄より見れば、さもあらめど、上よりの文勢「中將は大臣までなさせ給ひてなん有りける。さて其の人」とあるを見れば、中將の事ならずやと思はるゝはいかに。◎なゝわたに　（春）七曲也。歌の心明也。袋双紙にも、此歌蟻通明神の御歌としるして、是昔彼社の邊に、旅客の宿れるに、夢に示し給ふ歌云々。これも枕双紙に付ていへるにや。

二一三（ふるものは）

ふるものは。雪。　あられ。　みぞれはにくけれど、雪のまじりてふるをかし。雪はひはだぶきいとめでたし。すこし消えがたになりたるほど、又いと多うはふらぬが、瓦のめごとに入りて、くろうましろに見えたるいとをかし。しぐれ。　あられはいたや。霜も板屋。

れに今すこしふときをつけて、あなたの口にみちをぬりて見よ」といひければ、さ（中將）申して（其由を帝へ申也）、蟻をいれたりけるに、みちの香をかぎて、まことにいととう穴のあなたの口に出でにけり。さて其の糸のつらぬかれたるを、つかはしたりける後になん、猶日本（ヒノモト）の國はかしこかりけりとて、のち〳〵はさる事もせざりけり。此の中將（帝のこゝろ也）をいみじき人におぼしめして、何わざをし、「いかなるつかさ位をか給はるべき」とおほせられければ、「さら（中將ノ也）に官位（ツカサ）をも給はらじ。只老いたる父母のかくれうせて侍るをたづねて、都に住まする事をゆるさせ給へ」と申しければ、いみじうやすき事とて免されにければ、よろづの人のおやこれをきゝて、よろこぶ事いみじかりけり。中將は大臣になさせ給ひてなんありける。さて其の人の神になりたるにやあらん。此の明神の御もとへまうでたりける人に、よるあらはれてのたまひける。

なゝわだにまがれる玉の緒をぬきてありとほしとはしらずやあるらん

との給ひけると人のかたりし。

◎あらがひ事して　譯挑み爭ふこと。◎まろに　譯圓くといふに同じ。◎早からむ川にたちながら　譯美隆云、今の人ならば、たてながらと云ふ格なり。源語などにも、たゝせながら歸すことを、立ちながらかへすといへり。此の頃の文詞を見るには、かゝる細かなる所にも心をつくべし。◎くちなは　譯蛇。口繩

わだかまり活本にはたたなはりと有り

にけづりたる木の、二尺ばかりあるを、「これがもと末いづかたぞ」ととひ奉りたるに、すべてしるべきやうなければ、帝おぼしわづらひたるに、いとほしくて、おやのもとにゆきて、「かう〳〵の事なんある」といへば、「（老父の詞也）只はやからん川に、たちながらよこさまになげ入れ見んに、かへりてながれむかたを、末としるしてつかはせ」と教ふ。まゐりて我れしりがほに、「さて、試み侍らん」とて、人々具して、投げいれたるに、さきにして行く方に、しるしをつけてつかはしたれば、まことにさなりけり。又二尺ばかりなるくちなはの、おなじやうなるを、「是れはいづれか男女」とて奉れり。又さらに人えしらず。れいの中将ゆきてとへば、「（親の教る詞也）二つならべて、尾のかたに細きずはえをしてさしよせんに、尾はたらかさんを、めとしれ」といひければ、やがてそれを内裏のうちにてさしければ、まことに一つはうごかさず。一つはうごかしけるに、又しるしつけてつかはしけり。程久しうて、七わだにわだかまりたる玉の中とほりて、左右に口あきたるが、ちひさきを奉りて、「これに緒とほしてたまはらん。此の國にみなし侍る事なり」とて奉りたるに、いみじからん物の上手ふようなり。そこらの上達部よりはじめて、ありとある人しらずといふに、又いきて「かくなむ」といへば、「（老父の詞也）おほきなる蟻を二つとらへて、二つがこしに細き糸をつけ、又そ

けれぱ、此の中將も若けれどざえあり。いたり賢くして、時の人におぼすなりけり。

◎ありとほし 〔春〕和泉國和泉郡 〔補〕濱臣云、蟻通の神は式外なり。延喜式を引いて和泉郡とせしは無稽なり。蟻通は今現に日根郡にあり。◎貫之が馬の云々 〔補〕夏蔭云、貫之集卷九に、「紀の國に下りて歸りのぼる道にて、俄に馬の死ぬべくわづらふ所に、道行く人立ちとまりて云ふやう、これはこゝにいますがる神の、し給ふならむ。年ごろ社もなく、しるしも見えねど、うたてある神なり。さき〴〵もかゝるには、命をなむ申すといふに、何わざもせで、手洗ひて、神おはしましげもなしや。抑々何の神とか聞えんと問へば、蟻通の神といふを聞きて、よみて奉りけるに、馬のこゝちやみにけり。「かきくもりあやめもわかぬ大空にありとほしとは思ふべしやは」濱臣云、この蟻通の物語の出據は、雜寶藏經第一にある由、河社に全文を引いていへり。事長ければ略す。年山紀聞隣女晤言可二見合一。又瑯琊代醉篇、小說曰、孔子得二九曲ノ珠一、欲レ穿不レ得、遇二女敎以下塗二脂於レ線使上二蟻通一焉云々。夏蔭本、雜寶藏經の文を載せたり。猶契沖師著河社卷二を見よ。◎若き人をおぼして 〔補〕愛し思ふ也。◎さる者 〔春〕老いたる者なり。◎時の人 〔補〕時にあひて、得意なる人。◎かう四十をだに 〔春〕親の心なり。◎けうある人 〔補〕孝ある人。當時の語、孝をケウといへる也。◎などてか 〔補〕下に、さる怪しき事はすらむの意を含めり。◎知らでもおはせ云々 〔補〕出仕もせず、家の内に籠りゐたらむをば、知らぬ顏して默許せよかしと也。好ましからぬ世の掟(オキテ)かなと、是れまで清少の、評を挿みたるなり。◎中將など子にもたりけむは 〔補〕美隆云、上へ返して見るべし。

もろこしの帝、この國のみかどを、いかではかりて、此の國うちとらんとて、常に心見事をし、あらがひ事をしておくり給ひけるに、つや〳〵と、まろにうつくしげ

見えでは千本による

郡鼻節神社。延喜式にあり。ジとチと通ス　◎みくまり　補千蔭云、大和國宇陀郡水分神社。◎すさの御社　補同翁云、三輪の社の事也。古今集に「我庵はみわの山もとこひしくばとぶらひきませ杉たてる門」貫之集に、大神のまつりに詣てゝ「いにしへの事ならずして三わの山みゆるしるしは杉にぞ有ける」◎ことのまゝ　春文德實錄二曰、嘉祥三年七月遠江國任事社云々　補願ぎ言のまゝ聞き給ふ神とたのもしき也。◎さのみきゝけんとや　春古今俳諧歌「ねぎ事をさのみきゝけん社こそ果は歎きの森となりなめ」

此のありどほしとつけたる心は、誠にやあらん。昔おはしましける帝の、只若き人をのみおぼしめして、四十に成りぬるをば、うしなはせ給ひければ、人の國の遠きに、いきかくれなどして、更に都のうちに、さる者なかりけるに、中將なりける人のいみじうときの人にて、心などもかしこかりけるが、七そぢ近き親ふたりをもたりけるが、かう四十をだに制あるに、ましていとおそろしとおぢさわぐを、いみじうけうある人にて、遠き所には更にすませじ。一日に一度見えではえあるまじとて、みそかに家の内の土をほりて、其のうちに屋をたてゝ、それにこめするゐて、いきつつ見る。おほやけにも人にも、うせかくれたる由を知らせてあり。などてか。家に入りゐたらんをば、しらでもおはせかし。うたてありける世にこそ。おやは上達部などにや有りけん。中將など子にてもたりけんは。いと心かしこく萬の事知りたり

ひのをか。　人見のをか。

◎ふなをか　㊕山城紫野邊葬所也。古は淸淨の地也　◎かたをか　㊕片岡大和名、山城乙訓郡鞆岡。梁塵秘抄神樂採物歌「このさゝはいづこのさゝぞとねりらがこしにさがれるともをかの篠」◎かたらひのをか　㊕抄云「さ夜ふけてかたらひの岡の郭公ひとりねざめの床にきくかな」濱臣云、この歌何に出たるにかおぼつかなし。もしはかたらひはかたこひの訛か。六帖、をか「みちのくにありといふなるかたこひのをかを我身にそふるころかな」と見えたり。◎人見のをか　㊕住吉物語に、嵯峨野へ子日に出て「手もふれでけふはよそにて歸りなん人見の岡の松のつらさよ」

二一二（やしろは）

社は。ふるのやしろ。いくたの社。龍田のやしろ。はなふちのやしろ。みくまりのやしろ。すぎの御社。しるしあらんとをかし。ことのまゝの明神いとたのもし。さのみきゝけんとやいはれ給はんと、おもふぞいとをかしき。ありどほしの明神。貫之が馬のわづらひけるに、此の明神のやませ給ふとて、歌よみて奉りけんに、やめ給ひけんいとをかし。

◎ふるのやしろ　㊕延喜式、大和國山邊郡石上坐布留御魂神社。◎いくたのやしろ　㊕津の國八部郡と延喜式に　◎たつたの　㊕延喜式に大和國平郡々立田坐天御柱國御柱二座云々。◎はなぶちの　㊕陸奥宮城

二一〇（むまやは）

むまやは。なしはら。ひぐれのむまや。もち月のむまや。のぐちのむまや。山のむまや。あはれなる事を聞き置きたりしに、又あはれなる事の有りしかば、なほとりあつめてあはれなり。

○むまや〔春〕今の馬つぎ、宿々也。和名云、驛ムマヤ。唐令云毎二三十里一一驛。若地勢險阻及無二水艸一處隨レ緣置レ之。延喜式、凡諸國驛路邊植二菓樹一令三往來人得二休息一。○なしはら〔北〕梨原。和名云、近江栗本郡梨原、〔金〕夏陰云、六帖「君ばかりおぼゆるものはなし原のうまや出でこんたぐひなきかな」◎ひぐれ〔春〕未勘 ◎もち月〔春〕信濃にや。〔金〕信州の望月は、牧にこそあれ。驛にはあらじ。弘恭云、活本には月のうまやと有り。◎のぐち〔北〕野口 和名云、丹波船井郡。又周防玖珂郡、抄に云、河内也。信實の歌に「しらざりし野口の里に宿かりて道の芝生に今ぞ朝たつ」◎山のうまや〔春〕和名云、伊勢員辨郡、野摩ニヤ。同云、越後古志郡夜麻（ヤマ）。◎あはれなる事の云々〔金〕山の驛といふ所につきて、感興ある傳説などのありしなるべし。いかなる事とも今辨へがたし。總じて次の岡、社等の名を出だしたるは、前にも述へたる如く、詩人の耳目に、趣味を感じたる限をつられしまでなり。

二一一（をかは）

岡は。ふなをか。かたをか。ともをかは、さゝのおひたるがをかしき也。かたら

傍に居る人のけはひ心づかひをいふ也。といへり。◎おうよりたまへ　㊟奥へより給へと也。◎おどろきいはれたるも　㊟我がさしのぞきたるに氣づきて、告められたるもわびしと、上に返るなり。◎おもふ人の　㊟思ふ人に告めらるゝは、わびしからずと也。「されど」の語を、上に入れて心得べし。

二〇九（ふみ）

めづらしといふべき事にはあらねど、文こそなほめでたきものなれ。はるかなる世界にある人の、いみじくおぼつかなく、いかならんとおもふに、文を見れば、只今さしむかひたるやうにおぼゆる、いみじき事なりかし。我が思ふことを書きやりつれば、あしこまでも行きつかざらめど、心ゆくこゝちこそすれ。文といふ事なからましかば、いかにいぶせく世の中くれふたがるこゝちせまし。よろづの事思ひおもひて、其の人のもとへとて、こまぐとかきておきつれば、おぼつかなさをも慰むこゝちするに、まして返事見つれば、命をのぶべかめる、げにことわりなりや。

◎世界　㊟もと佛經の語にて、古往今來、天地の間をいふ由なれど、轉じては世の中。また地方、土地などいふ意に用ふ。遙なる世界は、遠き地方なり。㊀いぶせく　㊟氣の晴れぬこと。㊁げにことわりなりや　㊟この上、字句の落ちたるにもあらむ。ことゆかぬこゝちす。

◎かけこ　懸子。筥の縁に又小筥をかけて入れこにしたるもの。

筆のかさ也と。直按ずるに、古代の筆のかさ、誠に開かぬ傘の形したれば、筆のかさといふもさることながら、上來のつゞき、猶墨さしといふ物のやうに聞ゆ。◎おきくち　〔湖〕筥や、蓋などの縁に、錫鑞などにて、覆輪とりたるをいふ。◎はさめ　〔湖〕筥の縁にて、蓋の挾まる所。挾マセの約。◎重ね　〔春〕重硯筥。◎とあれどかゝれど　〔春〕よくもてなしても、あしくても、物かけばおなじ事とての心也。是より物にかまはぬ硯のさまをいふ也。◎黒塗の筥のふたもかたしおち　〔春〕蒔繪せぬ黒漆の硯箱の、蓋のふちのかた〳〵かけたる也。◎塵の此の世には云々　〔補〕此の世にはいつ迄も、塵拂ふ事もし難き樣子なるにと也。塵つもりて、きたなげなるをいふ。◎あをじのかめ　〔春〕青磁龜也。燒物の水入の龜の形なる也。◎首の限り　〔補〕龜の首ばかりかけ落ちたるをいふ。◎あやにく　〔湖〕意地わる。◎さおぼゆる事も知りたれば　〔補〕其の經驗もあればの意。◎水がちに　〔湖〕濱臣云、墨汁を多くふくませたるをいふか。◎こはものや云々　〔湖〕抄云、これには、物や。遣戸か。何か。ほそびつなど云々の意にて、いろ〳〵の物へかく也。夏陰云、万歲抄も猶しひて解かんとせしにて、從ひ難し。こは文字の脫ちたるにて、解くべからず。直按ずるに、何といふことなく、唯こは、ものや、あり、などと、假名にて細櫃の蓋に、むだ書をしたるなるべし。

二〇八（おうよりたまへ）

人の前にゐたるに、「あなくら、あうよりたまへ」といひたるこそ又わびしけれ。さしのぞきたるを見付けては、驚きいはれたるも。おもふ人の事にはあらずかし。

この一節前段の中に入れたる本あれど、別段なるべし。盤齋の抄にも、硯のついでに、物書きなどする時、

「鏡硯に」こそとあるべき文勢ならずや、に文字落ちたるか

「黒塗の」、硯すゑて春本になきを千本補へり

女は鏡硯こそ心のほど見ゆるなめれ。おきぐちのはざめに塵ゐなど、打ち捨てたるさまこよなしかし。男はまして文机清げにおしのごひて、重ねならずは、二つかけごの硯の、いとつきづきしう、まきゑのさまもわざとならねどをかしうして、墨筆のさまなども、人のめとむばかりしたてたるこそをかしけれ。とあれどかゝれど同じ事とて、黒塗の筥のふたもかたしおちたるに、硯すゑてわづかに墨のゐたる、塵の此の世には拂ひがたげなるに、水うちながして、あをじのかめの口おちて、首のかぎりあなのほど見えて、人わろきなども、つれなく人の前にさし出づかし。人の硯を引きよせて、手習ひをも文をもかくに、其の筆「なつかひ給ひそ」といはれたらんこそ、いとわびしかるべけれ。うちおかんも人わろし。猶つかふもあやにくなり。さおぼゆる事も知りたれば、人のさするもいはで見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物かゝまほしうするが、いとよくつかひかためたる筆を、あやしのやうに、水がちにさしぬらして、こは、ものや、ありと、かなに細櫃のふたなどにかきちらして、横さまに投げおきたれば、水にかしらはさしいれてふせるも、にくき事ぞかし。されどさいはんやは。

◎らう多き 〔春〕勞の字なり。墨の久しくつかはれしなり。◎かさゝし 〔春〕墨指といふ物なり。〔磐〕惟中云。

いふに、そばにある人の「此の中將に扇のゑの事いへ」とさゝめけば、「今彼の君たち給ひなんにを」と、みそかにいひいるゝを、其の人だにえきゝつけで、何とか〳〵と、みゝをかたぶくるに、遠くゐて、手をうちて、「にくし。さのたまはゞ、けふはたゝじ」との給ひしこそ、いかで聞き給ひつらんとあさましかりしか。

◎成信の中將　〔春〕勘物云、源成信兵部卿致平親王男。母左大臣雅信女、長德四年左中將元民部大輔、◎手をも見わき　〔圖〕手は文字のこと。⊙大藏卿　〔春〕勘物云、正光。長保二年藏人頭、左中將。四年十月大藏卿。愚案參議正光。關白兼通公六男、母左馬頭有年女、⊙蚊のまつげの落つる音　〔春〕例の淸少獨擅の警句なり。之を列子湯問篇の文より、思ひつきたる詞として、春抄を始め、夏蔭翁等、列子の文を長々と、引き出でたるに徒勞ならずや。且列子には、蚊の睫落つとは見えざるをや。⊙大殿の新中將　〔圖〕抄に大殿は左の大いどの道長とあれど、新中將は大殿の家司なみの人とおぼし。之を成信の中將と同人とする註はいかゞ。別人なるべし。◎そばにある人　〔圖〕淸少の女同僚ならむ。⊙彼の君云々　〔春〕大藏卿立ち給ひて後にと也。⊙其の人　〔春〕そばにある人、扇の事いひし(女房)が事也。◎にくし云々　〔春〕正光(大藏卿)の詞なり。

二〇七（硯）

硯きたなげに塵ばみ、墨の片つ方にしどけなくすりひらめかし、らうおほきに成りたる、かささしなどしたるこそ、心もとなしと覺ゆれ。萬の調度はさるものにて、

ずかし。

◎引きかへし　㊟諸本、「かくし」とあるわろし。引き返すとは、女服の長き表著を、外出などするには、假りに裾の方を返し著て、其の中に垂髪を入るゝ也。されば返すは裏返すことになる也。◎くびより髮を云々　㊟然るに中納言といふ女房は、紅の強く張りたるを引返しもせず。隨つて髮を著籠めず。頸より前にかい越したれば、後より見ては、緋袍を著たる男のやうに見ゆるを、笑ひし也。◎あたらしきぞとてよくも　㊟鈴木氏の本に、春本「あたらしきそとはに、いとよくもにたりし哉」とありて、註に不審他本をかんかふべし、とあり。今活本。古鈔本、イ本によりて改めつ。といひ、濱臣翁も既く、ぞとてとある本に從ひ、是れにてよく聞えたり。さてよくも似たりしは、下のゆげひのすけといふへかゝれり。上文似げなきもの、ゆげひのすけのやかうとあり。

二〇六（耳さとき人々）

成信の中將こそ、人の聲はいみじうよう聞きしり給ひしか。おなじ所の人の聲などは、常にきかぬ人は、更にきゝわかず。ことに男は、人のこゑをも見わき聞き分かぬものを、いみじうみそかなるも、かしこうきゝわき給ひしこそ。

大藏卿ばかりみゝとき人なし。誠に蚊の睫のおつるほども、聞き付け給ひつべくこそ有りしか。職の御ざうしの西おもてに住みし比、大殿の新中將とのゐにて物など

ぞとて千本
による

にて、褻といふ事を、戯れてかくいへるかと。此の説穏かなるべし。猶強ひて愚按をいひ試みば、麁野なる物。宮の御叱り罵らるゝ品といふ意にてもあるか。◎皆人の云々　國美隆云、この御歌上東門院（一條帝ノ中宮道長女彰子）の時めき給うて、定子皇后はすさましくおはします事を、詠み給へるなるべき由、加納諸平ぬし委しき説あり。さること也。上の句は、上東門院の御方ざまの、世にきらめき給ふ事を、下にはのめかしてのたまへる也。取り替へばや物語に、左大臣殿の權中納言殿、出家せんとおぼしなりて、吉野山に籠り給ふ入道の宮に、人して消息を傳へ給ふ時の宮の詞に、「さばかり榮耀に事晴れて、めでたき蝶花のごとのみこそ、心に入るらめ。いかに聞き給ひて、深き山までおぼし入るらむ。」と有るをも思ふべしと。直按するに、加納若時雨翁の考案、尤も然るべし。去年十一月、中宮の皇子御產に先立つ事五日、上東門院入内して女御となり給ひしが、今年二月には、早くも中宮に昇り給ひて、それが爲に定子中宮には、自然皇后となり給へども、是れより中宮には、勢ひ皇后にも優樣(マサザマ)にかゞやきおはしましたれば、人々彰子中宮の御方へ、蝶よ花よといひそぎしなるべし。

二〇五　（よくも似たまひしゆげひのすけ）

かんな月とをか餘りの月いとあかきに、ありきて物見んとて、女房十五六人ばかり、皆こきゝぬをうへにきて、引きかへしつゝ有りしに、中納言の君の紅の張りたるをきて、くびより髮をかいこし給へりしかば、あたらしきぞとて、「よくもにたまひしかな。ゆげひのすけ」とぞわかき人々つけたりし。しりにたちて笑ふもしら

年八月九日の條に、中宮有レ身出レ宮、就二前但馬守生昌宅一、とあるにて知らる。是れ職におはしましては、御産の作法に御不便の事多ければなるべし。さて紀略同年十一月五日の條に、寅刻中宮御産、皇子敦康親王也とあり。◎五日 〔補〕翌二年五月端午の節なり。◎さうぶのこし 〔補〕菖蒲輿。禁中へ奉るを、后宮へもまゐらせしなるべし。公事根源端午の所に云、六府あやめのこしを、南殿の階の東西に立つ。又時の花を折そへて同じくおく、四日は朝餉の庭にこれを立云々、〔補〕是れは殿舎の軒に菖蒲を葺き、又藥玉をも作らむ爲なり。延喜左近衛式に、凡五月五日ノ藥玉料、菖蒲艾(コモギ)(總盛二一輿一)雜花十捧、(盛レ瑜居レ臺)三日平旦云々、列二設南殿前一と見ゆ。輿とは板にて造れる小屋形に長き四脚あり。轅はなけれども、其の狀腰輿(サマタゴン)に似たればいふ。◎みくしげどの 〔補〕藥玉は糸所より奉れど、姫宮などには、女中何も手づからしてまゐらせらるゝなるべし。拾芥云、御櫛笥殿在二貞觀殿中一、以二上﨟女房一爲二別當一云々 〔補〕按ずるに、此處は御妹の君の御匣殿よりも、獻上ありし由を云ふなるべし。中宮の御妹三ノ君と申すが、御匣殿別當たりし事、本書の奧積善寺經供養の段に見え、四の君をも御匣殿と聞えさせし事、大鏡榮花物語に見えたり。委しくは奧に辯ずべし。(姫宮 〔補〕修子內親王。長德二年御誕生の皇女。御年五歲。◎若宮 〔補〕敦康親王。去年御誕生。◎つけさせ 〔補〕藥玉を袂に付くる事上に註せり。◎あをざし 〔補〕菓子の名なり。夏蔭云、青刺の製法、麥の未熟なるをとり、煎て後皮を去りて、其のまゝ臼にて靜にひくなり。或云、臼にてすりて、糸の如く、よりよりにしたる菓子也。◎ませごしに候ふ 〔補〕万葉十二「ませごしに麥はむ駒の罵(ノラ)るれど猶し戀しく思ひかてぬを」 〔補〕ませは、ませ垣のこと。馬塞(マセキ)の意。盤齋の抄に云、籬越(マセコシ)に御覽ずる迄に、捧げ奉ると也。今の世も貴人に物奉るは、御目にふるゝなどこそいへるなれ。美隆云、麥食む駒といふ歌の詞もてかける

簑ナキの説拙著「からすかご」に載せおけり

知る所なり。伊勢物語、古今、後撰等の歌にも、大和物語の文にもあれば、平安朝時代流行の隠語とおぼゆ。就いて後撰集正義、及び爲家の抄等にも、解說あれど、附會にして甘服しがたし。是は簑(ミノ)なき（實(ミ)ノナキ）に通り、濡衣なりと解く隠語なる由、本居大人の説と岡本保孝翁いへり。珍らしき説ならずや。

二〇四（あをざし）

三條ノ宮におはしますころ、五日のさうぶのこしなどもてまゐり、くす玉まゐらせなどす。わかき人々、みくしげどのなど藥玉して、姫みやわか宮につけさせ奉らせ給ふ。いとをかしき藥玉どもほかよりもまゐらせたるに、あをざしといふものを人のもてきたるを、靑きうすやうを、艶なるすゞりのふたにしきて、「これませごしにさぶらふ」とて參らせたれば、

皆人の花やてふやといそぐ日もわがこゝろをば君ぞしりける

と紙のはしを引きやりて、かゝせ給へるもいとめでたし。

◎三條宮　（頭）もと皇后宮大進平生昌の家。長保元年八月より、翌二年八月まで壹年の間、中宮の御所と成りし故に、之を三條宮と申しゝ也。卽ち日本紀略長保元年八月九日の條に、中宮（定子）自二職曹司一移二御前ノ但馬守平生昌宅一、また同二年八月八日の條に、皇后宮（定子）自二生昌朝臣ノ宅一入二御内裏一とある此の間の事に屬す。是より先、中宮は職御曹司に住ませ給ひしが、御懷妊の爲の遷御ならむ。小右記長保元

あらざんなるを、あやしの事やと思ふほどに、うへより御文もてきて、返事只今とおほせられたり。何事にかと思ひて見れば、大がさのかたをかきて人はみえず、只手のかぎり傘をささせて下に、

　みかさ山やまのはあけしあしたより

とかゝせ給へり。なほはかなき事にても、たゞめでたくのみおぼえさせ給ふに、はづかしく心づきなき事は、いかで御覧ぜられじとおもふに、さるそらごとの出でくる、くるしけれどをかしうて、こと紙に雨をいみじうふらせて、しもに、

　雨ならぬ名のふりにけるかな

さてやぬれぎぬには侍らん」と啓したれば、右近ノ内侍などにかたらせ給ひて、わらはせたまひけり。

◎ほそどのに　㊟清少の廊の局に、忍びてとまりし人。雨ふる暁歸りし事を、沙汰せしなるべし。◎便なき　㊟俗に不都合などいふに同じ　◎地下などいひても　㊟夜のとまりし人の事をいふ也。地下とは昇殿せざる人をいふ也。地下の人ながら、めやすき人と、世にもゆるされしを、便なくとめまじき人といふがあやしきと也。◎めやすく　㊟見苦しからぬこと。爰には非難すべき點なきをいふ。◎おぼえさせ給ふ　㊟めでたく思はれ給ふ御方に也。おぼえは思はれにて、覺ゆるにあらず。◎おほがさ　㊟雨傘のこと。和名抄、簦とあり。◎苦しけれどをかしう　㊟つらけれど面白く。◎ぬれぎぬ　㊟無實の名をおはすること。誰れも

有り。車の轅をおろし牛をはなちたるさま也。是も禮儀なるべし。〔諸〕イ本になたえとあるに從つて、牛を放ちたるといへるは、中々にひがこと也　簾垂取りおろすといふこと、前の祭のかへさの段にも見ゆ。轅を取り下しなば、車内の人、前にすべり落ちぬべし　物見車の簾を取りおろすは、空車の體をよそほふ形式をなすにて、當時女に行幸なすら乘車ながら拜觀する事、默許せられてありし也。さて又物見車を立つるには、必ず牛を取りはづして、車の後また物のかげに繫ぎおき、車の轅を榻の上に立ておく法なり。さるは次の本文、追ひのけられたるえせ車の、牛かけてゆるがし行く。とあるも、牛はづしたる車の、俄に牛かけて行くさまなるにて知るべし。◎其の前に云々　〔春〕我が車の前に、今來たる車のたつ也。㊀消息(セウソコ)　〔春〕下人を制しかねて、主人へことわる也　〔?〕消息には、もと信書のことなれど、轉じて傳言のこと。㊀よき所の　〔春〕歴々の物見車　◎人だまひ　〔春〕河海云、人給。俊國朝記　權記有二此名一出車ト云々。花鳥云、出車は、公方より點ぜられて、其の人に給ふゆゑに、人給と名付る也。〔?〕副車ともかく。御供の人の乘りたる車なり。㊀所ある方　〔?〕空所。㊀きらきらしき　〔春〕歴々と見ゆる車なり。◎いと淸げなれど亦ひなび　〔補〕立派なる車と見ゆれども、亦田舍臭く鄙びて。◎けすなど云々　〔春〕下衆の男を、車近く呼び付けて、見馴れぬ事を聞き、又兒童を簾外などに出しすゑ、物珍らしげなる風なるをいふ。

二〇三　（ぬれぎぬ）

細殿に、びんなき人なん、曉に傘(カサ)さゝせて出でけるといひ出でたるを、よくきけば我がうへなりけり。地下(ヂゲ)などいひても、めやすく、人にゆるされぬばかりの人にも

き人も食ふ事あり。下衆には限らず。◎さじき 圖棧敷 よき家にては、築垣のつらに假にしつらひて、物見の所とするなり。◎おぼえある人の子 圖世のおぼえあり、時めく人の公達などならばと也。◎雜色。棧敷の家に仕はるゝ下衆男なり。◎馬の口 圖覺えある人の子の、馬の口とりて介措し世話するさま也。

御輿のわたらせ給へば、すだれもある限りとりおろし、過ぎさせ給ひぬるに、まどひあぐるもをかし。其のまへにたてる車は、いみじうせいするを、「などてたつまじきぞ」と強ひてたつれば、いひわづらひて、消息などするこそをかしけれ。所もなくたちかさなりたるに、よき所の御車に、人だまひ引きつゞきて多く來るを、いづこにたゝんとすらむと見るほどに、御前どもたゞおりにおりて、たてる車どもを、只のけにのけさせて、人だまひまで立てつゞけさせつるこそいとめでたけれ。おひのけられたるえせ車ども、牛かけて、所あるかたにゆるがしもてゆくなど、いとわびしげなり。きらきらしくよきなどをば、えさしもおしひしがずかし。いときよげなれど亦ひなび、あやしきげすもたえずよびよせ、ちご出だしすゑなどするもあるぞかし。

御輿のわたらせ 圖立ち返りて又、祭の日齋王の御行列を見る事をいへる也。殿上人たちの垣下に參りたる日の事にあらず。◎すだれもあるかぎりとりおろし 圖齋院へおそるゝさま也。イ本ニ、ながえどもと

辨、少納言などゝ、七つやつ引きつゞけて、院のかたより走らせてくるこそ、ことなりにけりとおどろかれてうれしけれ。殿上人の物いひおこせ、ところどころの御前(ゴゼン)どもに、水飯(スヰバン)くはすとて、さじきのもとに馬ひきよするに、おぼえある人の子どもなどは、雜色(ザフシキ)などおりて、馬のくちなどしてをかし。さらぬものゝ、見もいれられぬなどぞいとほしげなる。

㊀よろづの事よりも　(春)是より行幸に上達部の車のなきが、さうざうしきといひしに付て、車の見ぐるしげなるが、わろき事どもをいふ也　㊀說經などはいとよし　(春)說經聽聞の車などには、罪うしなふ後世のためなれば、さまで風流に花美ならでもよしとなり。㊀見でありぬべし　(春)賀茂祭などに、我が乘る車の見苦しくに、むしろ見ずしてあれと也。㊀下すだれ　(春)車の前後の簾の、内がはに垂れたる帷にて、綾織物や紫蘇芳の裾濃に染めたるもあり、刺繡したるもあり。さるが中に下すだれも掛けぬ車の、唯乘りたる人の白き單の袖口など、簾の外に垂れたるなどは見苦しとなり。㊀さて見るらむ　(春)下すだれもなき車などにて、何しに見るらむと也。㊀おしわけて　(春)他の車を押し分けて、清少の近所に立つ事なり。◎心ときめき　(春)我が車の見苦しが、恥かしければ也。㊀よき所にたてんと　(春)物見のたよりに、よき所を、人よりさきにとおもひて、車をいそがせ催したる心也。㊀ゐばり　(春)居張りにて、延び上り見ること也。前にもありき。◎垣下に參りたる云々　(春)垣下の事上に註せり。以下祭りの名殘なり。◎御前どもにすゐばん　(春)前驅の人々に、水飯とて湯づけなどやうの物をくはする也　(春)糒を水に漬したる物。冬は湯漬にする也。よ

二〇一（行幸はめでたきもの）

行幸はめでたきもの。上達部きんだち、車などのなきぞすこしさうぐしき。

㊀めでたきもの　按ずるに、もののとありし「の」字一つ落せるならむ。行幸にめでたきものなれどの意にて、上達部公達の、美々しき車にも乗らず、徒歩にて供奉するが、物足らぬとならん。

二〇二（わびしげなる車）

よろづの事よりも、わびしげなる車に装束わろくて物見る人、いともどかし。説經などはいとよし。罪うしなふかたの事なれば。それだに猶あながちなるさまにては、見ぐるしかるべきに、まして祭などは見でありぬべし。下すだれもなくて、白き單の袖などうち垂れてあめりかし。たゞ其の日のれうにとて、車も下すだれもしたてて、いとくちをしうはあらじと出でたるだに、まさる車など見つけては、何しになど覺ゆるものを、ましていかばかりなることちにて、さて見るらん。おりのぼりありく公だちの車の、おしわけて近うたつ時などこそ、心ときめきはすれ。よき所にたてんと急がせば、とく出でてまつほどいと久しきに、ゐはり立ちあがりなど、あつくるしく、まち困ずるほどに、齋院の垣下にまゐりたる殿上人、所の衆

ある是なり。◎なしき、紺のたれぬの 〔補〕この二つ諸本になし。武藤氏の考異にもなきを、千蔭翁のもてる古本にはかくありといへり。折敷は前にもあり。垂れ布は、厨房薬所などより、奥に入る所にかゝれる、後世の暖簾(ノウレリ)なり。古き繪卷に見えたり。今昔物語廿八藤原清廉怖レ猫語に、宿直壺屋に呼び入れ給へば、喜をなして、垂布を引きあけて、ゆくりなくはいりぬ云々とあり。

二〇〇（使のわらは）

物へいく道に、きよげなるをのこの、たて文のほそやかなるもちて、いそぎゆくこそ、いづちならんと見ゆれ。又きよげなるわらはべなどの、あこめいとあざやかなるにはあらでなえばみたるに、けいしのつやゝかなるが、かはに土のおほくついたるをはきて、白き紙につゝみたる物、もしは箱のふたに、草紙どもなどいれてもてゆくこそ、いみじうよびよせて見まほしけれ。門ちかなるところをわたるを、呼びいるゝに、あいぎやうなく、いらへもせでいくものは、つかふらん人こそおしはかられ。

◎あこめ 〔補〕衵。上に註せり 〔補〕けいし 〔補〕これも上にあり。和名抄に屐屧。久都々計乃阿之太(クツ、ケノアシタ)。一云屐子、屐之屬(タグヒ)也。とあり。足駄に靴の如く、革を覆ひたる物と見ゆ。◎かはに土多くつき 〔補〕革は屐子の革なるべし。考異、古本にかの字なしとて、埴土(ハニ)と讀みたる、是れ亦一説なれども、予は革を主張せん。

誤れり又なしき以下諸本になし

れぬの。

◎くりや 〔春〕厨、字彙云、厨、烹飪之所。ものを烹調るところ。臺所なるべし。◎侍のざうし 〔春〕曹司は局と同し。今の世の部屋也。◎かけばん 〔春〕懸盤。貴人の膳に用ふ。◎はしたもの 〔春〕世俗のおはした也。〔補〕近古の世、半者また端者などかけり。上臈に仕はるゝ下女(シモヲンナ)をいふ。◎さうぞく 〔補〕裝束とかけども本字は裝飾なり。◎かき板 〔補〕和訓栞に「書板の義。今の塗り板をいふにや。裁縫の具にいふは、抓板の義也」と見ゆ。松屋筆記に、書板といふ物、古くは所見なし。裁縫の具にいふは、かき落す義かと記せり。直按するに、江家次第四、除目の條に、第一硯筥云々、硯、筆臺、墨一廷、筆二管、續飯(ソクヒ)、搔板(カキイタ)、水瓶、小刀等とある、此の搔板も、裁縫の裁板(タチイタ)と大小の差こそあれ。紙をかき切る板にて、共の用同じければ、共にカキ板といふなるべし。本文のかき板も、共の類ならむか。◎棚厨子 〔補〕厨房にすゑて、調理したる食物をのせおく棚。◎てうし 〔補〕今の長柄の銚子のこと。◎中のばん 〔春〕懸盤の次なるをいふ。河海云、延長御記曰采女調ニ若菜羹一盛ニ中垸一置ニ中盤一、◎ひぢをりたるらう 〔春〕肱折りたる廊にて、廊の折れ曲り行くなり。◎ちくわろ 〔補〕諸本ちくわう」とあるより、下に續けて、竹鶯綸又竹王など推しあての註も出でたれど、武藤元信云、別本に、ろとあり。うろ假名の體よく似たるより、傳寫の誤にやといへり。但し解說を缺きたり。予も夙くより、うはろの誤寫にて、地火爐(チクワロ)ならむと憶測したるに、別本にろとありと知りて、誤らざりしを喜びぬ。さて地火爐は食料を煮炙(ニヤキ)する用に、床板を切り下げて、すゑたる爐なり。續古事談一に「一條院御時、臺盤所にて地火爐ついでと云ふ事有けり。云々大納言は銀にて大鍋を造りて、芋がゆを入れられけり。宇治拾遺二、鯛のあら卷の事に、地火爐に火おこして、物くはんとするに」など

なかしきさましていれたり。今一つ大きやかなるには、さま〴〵の果物、いろ〳〵のもちひ等さこき入れて、紙へだて、焼米入れ云々。宇治拾遺八に、餌袋に干飯など入れて詰たり」と見ゆれば、鷹の餌袋といふ註は、ひがごとなるを知る。さうぞくなかしうしたる餌袋といふこともあり云々。直接するに、元は鷹の餌袋に始まりたるか。或は形のそれに似たるよりいふか。然らずば何故、唯袋といはずして、餌袋といふかを考ふべし。さて此の袋は、用に從ひて、その製大小さま〴〵ありしならむ。錢入れて持たる事も見ゆ。

一九八 （みじかくてありぬべきもの）

短くてありぬべきもの。とみの物ぬふ糸。燈臺。げす女の髮、うるはしくみじかくてありぬべし。人のむすめのこゑ。

㊀燈臺　〔閾〕高さはもとひくゝらければ。㊁むすめのこゑ　〔齒〕舌つきにてあいだれたるを、きらへなるべし。

一九九 （人のいへにつき〴〵しきもの）

人の家につき〴〵しきもの。くりや。侍（サムラヒ）のざうし。帚（ハヽキ）のあたらしき。かけばん。大きやかなる童女（ワラハメ）。よきはしたもの。衝立障子。三尺の几帳。さうぞくよくしたるゑぶくろ。からかさ。かきいた。棚厨子（タナヅシ）。ひさげ。てうし。中のばん。わらふだ　ひぢをりたるらう。ちくわろ。ゑかきたる火をけ。をしき。紺のた

けれぱ、氷水に手をひたしなどあつかひて、只今何ばかりなる事あらんに、此の暑さを忘れて、心うつす事ありなんやといふほどに、あたり匂ふばかりなる薄やうを、なでしこのいみじう色こきに、むすびつけたる文を、とりいれたるこそ、書つらんほどのあせおもひやるも、心ざしあさくはあらじと思ふに、かくつかふ風だにあかずぬるくおぼえつる扇もうちおきて、まづひきあけつべけれ云々。

一九六（月に川をわたれば）

月のいとあかきに川をわたれば、牛のあゆむまゝに、水晶などのわれたるやうに、水のちりたるこそをかしけれ。

㊟イ此次に「下すだれを高やかにおしはさみたれば、車のながえはいとつやゝかに見えて、月の影のうつりたるなどいとをかし。行き付くまでかくてあれかしとおぼゆ。」とあり。

一九七（おほきにてよきもの）

大きにてよきもの。法師。くだ物。家。ゑぶくろ。すゞりの墨。をのこの目。あまりほそきは女めきたり。又かなまりのやうならんはおそろし。火桶。ほゝづき。松の木。山ぶきの花。櫻の花びら。馬もうしもよきはおほきにこそあれ。

○ゑぶくろ　㊟夏陸云、落窪物語巻一に、くだ物ひと餌袋しておき給へれど云々、御ゑぶくろ二つして、

なるに、さきにともしたる松の煙の香の、車のうちにかゝへたるもいとをかし。

◎おぼめかしきに 補明瞭ならぬに。◎男車の先おふ 春公達などのさま也。先をおはする程の人の車なれば、優なる心なり。◎しりがい 補和名抄、鞦 所三以制二牛後一也と見ゆ。牛の後にかくる物なれば、尻掛の義なり。◎かざしらぬものなれど 補鞦の臭氣の嗅さなれぬを、珍らしきやうに思ふも物狂ほしと也 流布本この下に、うちかをれたるがの一句あり。素本活本等にはなし。後人の賢しらに加へたるなるべし。◎さきに燈したる松 補車の前にともしたる續松（ツイマツ）なり。◎車のうち 補我が乘れる車なり。

一九五（のこる香をり）

五日のさうぶの秋冬過ぐるまであるが、いみじう白みかれてあやしきを、とりあげたるに、其の折の香の殘りてかゝへたるいみじうをかし。

よくたきしめたるたき物の、きのふ、をととひ、けふなどはうち忘れたるに、きぬを引きかづきたる中に、煙ののこりたるは、今のよりもめでたし。

◎たきしめたる 補衣服の薫香なる事いふ迄もなし。◎煙の殘り 春香の殘り也。補春曙本「或本に此あとに」として、左の文を載す。千蔭校本にも亦、古本にありといへり。

「六月廿日ばかりに、いみじう暑きに、蟬の聲のみ絶えず鳴出して、風の氣色もなきに、いと高き木どものおほかるが、木ぐらく靑き中より、黄なる葉のやう〳〵ひるがへりおちたるこそすゞろに哀なれ。秋の露おもひやられて。おなじ心にいみじう暑きひる中に、いかなるわざをせんと、扇の風もぬるくわびし

におしひしがれたるが、輪のまひたりけるに、おきあがりて、ふとかゝへたる香ち
いとをかし。

◎うへはつれなく云々 [通]千蔭翁「あしねはふうきはうへこそつれなけれ下はえならず思ふこゝろを」拾遺と朱書を入れたり。美隆も亦、此の歌を引きて「上はつれなき、下はえならず」など、此の歌の詞をとれる也といへり。うきとは泥土のことをいひ、下はえならずとは清きをいふ也。◎たゝざま [通]直樣。一直線なり。立狀にはあらず。◎輪のまひたりける [通]車の廻るをいふ。◎おきあがり [通]蓬のおしひしがれたるが、輪を外れておきあがりたる也。◎かゝへたる香 [通]かゝへは、香なりの臭がるゝをいふ也。流布の諸本には、此の所「輪のまひたちたるに、近うかゝへたる香」とあり。かゝへは「え」の假名にて、かゞるゝ事ならむ。舊說、抱へ保つ義いかゞ。此のこと前にも註しおけり。

一九四 （夕涼みのほど）

いみじうあつき比、夕涼みといふほどの、物のさまなどもおぼめかしきに、男車のさきおふはいふべき事にもあらず。たゞの人もしりのすだれあげて、ふたりもひとりも、のりてはしらせいくこそいとすゞしげなれ。まして琵琶ひきならし笛のねなどのきこえたるは、過ぎていぬるもくちをし。さやうなるほどに、牛のしりがいのかの、あやしうかぎしらぬものなれど、をかしきこそ物狂ほしけれ。いとくらやみ

しりにひきつゞきて來るも、たゞなるよりはをかしきに、ひきわかるゝところにて「峯にわかるゝ」といひたるもをかし。

◎渡りはてぬる後　〔磐〕齋王の行列通過後。◎などさしも云々　〔春〕物見の人。歸路をいそぐさま也。◎扇をさし出し　〔磐〕車の前みすより扇を出して、車副の從者を制する也。◎心もとなく云々　〔春〕車副などの心也。◎きほひかゝる車　〔磐〕千蔭本、次にひかへたる車とあり。意義はかはらず。◎やりすごして　〔春〕我が車を也。〔補〕按ずるに此の次一句落ちたるか。下文のつゞき穩かならず猶能く讀み味ふべし。◎かつらなどのしぼみ　〔下〕きのふのあふひにそへし桂の、しぼみしに、今さしたる卯花の、あたらしさが見事なる也。◎ひきわかるゝ　〔春〕車のわかるゝ所にて、男の詠吟する也。◎みねにわかるゝ　〔春〕「風ふけば峰に別るゝ白雲の絶てつれなき君が心か」古今戀二

草葉も水も
千本による

一九三　（五月ばかり山里に）

五月ばかり山里にありくいみじうをかし。草葉も水もたゞいとあをく見えわたりたるに、うへはつれなく草おひしげりたるを、なが〳〵とたゞざまにゆけば、したはえならざりける水の、ふかうはあらねど、人などのあゆむにつけて、とばしりあげたるいとをかし。ひだり右に、垣にあるものの枝などの、車の屋かたにさしいるを、いそぎてとらへてをらんと思ふに、ふとはづれて過ぎぬるもくちをし。よもぎの車

きほひかゝる千本「つぎにひかへたる」とあり

侍可レ然ム罷補レ之とあり　◎あをいろ　◎麴塵闕腋袍のこと。白がされは下襲なり。所ノ衆舞人など奉仕する間の服裝なれば、其のけしきを見せてと也。◎おぼえて　圖似て。◎郭公も陰にかくれ　圖なく聲なえやに忍ばぬ郭公初卯の花の陰にかくれて」人丸　◎簾だれとりおろし　圖しのびて見物に出でたるにより打ちとけたるてい也　◎えんが　圖垣下。又「かいもとあるじ」とも稱す。齋院に限らず、大饗の時、主賓以外の人、相伴に預ることを、垣下の饗。略して垣下といふ也。◎ひのさうぞく　圖日の裝束。正裝。束帶のこと也。◎なが〳〵しく　圖長々。◎殿上童　圖上に註せり。

渡りはてぬる後には、などかさしも惑ふらん。我れも〳〵と、あやふくおそろしきまで、さきにたゝんといそぐを、「かうないそぎそ。のどやかにやれ」と、扇をさし出でて制すれど、きゝもいれねば、わりなくて少しひろき所に、しひてとゞめさせてたちたるを、心もとなくにくしとぞ思ひためる。きほひかゝる車どもを、見やりてあるこそをかしけれ。すこしよろしきほどにやり過ごして、道の山里めきてあはれなるに、うつ木垣ねといふ物の、いとあら〳〵しうおどろ〳〵しげに、さし出でたる枝どもなどおほかるに、花はまだよくもひらけはてす、つぼみがちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたなどにさしたるも、かつらなどのしぼみたるが、くちをしきにをかしうおぼゆ。ほどせばう、えもとほるまじう見ゆる行くさきを、近うゆきもてゆけば、さしもあらざりつるこそをかしけれ。男の車の誰れともしらぬが

にに御輿等不用の樣に聞えてまぎらはし。按ふに、是は春抄に、江家次第の文を略抄したる、それのみを見て、大かにいへるならむか。いさゝか徹底を闕くに似たり。仍て更めて齋院の御參りのさたを、大略左に述ぶべし。

齋王の御所を齋院と稱して、紫野にあり。本祭の日、御所より下鴨の社へ參り給ふ御道には、御輿にめす也。(供奉男女の事略す)行列の中に、空(カラ)の腰輿を舁きて參る 其の後に御調度や、衣服、祿の唐櫃なども參る也 さて、齋王下ノ社に詣り、暫く社頭の幄舍に留り、衣裝を脱し、更に淸服を着て、此の度は彼の腰輿にめして、社内に入り、本社に到らざる事、十丈ほどの所にて、腰輿を下り、歩行して御社内に入り、左方の座に就き給ふ。奉幣宣命等了つて、前の如く幄舍に還り入り給ひて後、上ノ社に向ひ給ふ由なり。按ずるに上古は前の如く、御輿にて上ノ社へ參り給ひけむを、路程も遠ければ、この間便宜上、御車に乘り給ふ略儀も生じたるにて、江家次第には、漸く略儀になり來れる儀を記しゝならむ。さて「上ノ社ノ行事如レ前」と、儀式にも記せる如く、社頭に入る前より又御輿にめし、社頭の小舍にて淸服に著かへ給ひ、更に腰輿にて社内に入り、祭典了りて神館(カウダチ)に入り給ふ。翌日の御歸路齋院までは乘車なり。此の還御に先立ち、もはや御用すみの御輿腰輿を、上ノ社よりもてかへる也。前後混同すべからず。◎これに奉りて云々 圖下ノ社も上ノ社もこれらの御輿に乘り給ふならむと推量る也。◎さるげす云々 圖輿丁などの下衆をいふ。おそろしは恐縮の意。◎はるかげに 圖まだ無期などいひしこと也。◎扇より始めて云々 圖御供の女房たちのさまをいふ。青朽葉は表青丹の黑みあり。裏青の祚。さて御供の女房は、内侍、女別當、宣旨。その他出し車六輛に乘りたる侍女童女などなれば、少からぬ人數なり。◎所の衆 圖藏人所の衆。職原抄に、六位ノ

いとをかしく見ゆるに、所の衆のあをいろ、しらがさねを、けしきばかり引きかけたるは、卯の花垣根ちかうおぼえて、郭公も陰にかくれぬべうおぼゆかし。きのふは車一つにあまたのりて、ふたあゐの直衣、あるは狩衣など亂れ著て、簾だれ取りおろし、物ぐるほしきまで見えし君達の、齋院のえんがにて、ひのさうぞくうるはしくて、けふは一人づゝ、をさ〳〵しく乘りたるしりに、殿上童のせたるもをかし。

◎祭のかへさ 〔[illegible]〕賀茂祭は、中祀とて前後三日に渉る。かへさに最終の日、齋王の上ノ社より還り給ふをいふ。◎きのふ 〔[illegible]〕本祭の日、齋王まづ下鴨へ發駕の日なり。◎雲林院云々 〔[illegible]〕紫野上賀茂への通路にあり。知足院も同じ。上に註せり。◎葵かつら 〔[illegible]〕車の簾に挿みたる葵桂なり。髮の鬘の事にあらず。◎目をさましおきゐて 〔[illegible]〕家にある時は、斯くして聞かんと待ちし郭公の、此處にては珍らしからぬをいふ。◎御社 〔[illegible]〕上ノ御社。◎あかぎぬ 〔[illegible]〕退紅とて、布を薄赤色に染めたる狩衣。荒染（アラゾメ）ともいふ。粗く（薄ク）染めたる義。細纓（ホソエイ）の冠に[illegible]脛巾（ハヾキ）藁履をはく 輿丁等下衆の服裝。◎むご 〔[illegible]〕無期。〔[illegible]〕時刻の定めかねるにいふ詞。◎御輿たごし 〔[illegible]〕この事指若圖解に精しくいへれど、爰に大略を擧げば、御輿は肩輿とて、肩に舁くもの。葱花輦のこと。たごしは手輿の義。腰輿ともかく。輿の轅（ナガエ）を輿丁等の腰のあたりにあてて、手して舁き上げ行けば、手ごしともいひ、腰輿とも書く也。◎もてかへる 〔[illegible]〕武藤氏通釋に、齋院の御輿にめさるゝには、御社の前にみ、社内に入らせ給ふ程の事也。是れより上ノ社へは、御車にのらせ給へば、御輿腰輿不用となれるにより、もてかへるなるべしと註せるは、大體よろしけれども、斯くては上ノ社

に奉る也。◎かう〳〵しういつくしう 【補】神々しく崇嚴なるをいふ。◎何となきつかさ 【補】下﨟の司たち。
◎ひめまうちぎみ 【舎】東豎子。【補】上に委し。◎みつなのすけ 【舎】鳳輦の御綱を奉行する大舍人ノ助をいふにや。【補】御輿の蓋上より、緋の綱を四方に張りて、大舍人ノ助之を執り供奉する也。

祭のかへさいみじうをかし。きのふはよろづの事うるはしうて、一條のおほぢの廣う淸らなるに、日のかげもあつく、車にさしいりたるもまばゆければ、扇にてかくし、ゐなほりなどして、久しうまちつるも見ぐるしう、あせなどもあえしを、けふはいととくいでて、雲林院(ウリンヰン)知足院などのかどにたてる車ども、葵かつらもうちなえて見ゆ。日は出でたれど、空は猶うちくもりたるに、いかできかんと目をさましおきゐて、またるゝ郭公の、あまたさへあるにやと、きこゆるまでなきひゞかす、いみじうめでたしとおもふほどに、鶯の老いたる聲にて、かれに似せんとおぼしく、うちそへたるこそ、にくけれどまたをかしけれ。いつしかとまつに、御社のかたよりあかぎぬなど著たる者ども、つれだちてくるを、「いかにぞ。ことなりぬや」などいへば、「まだむご」などいらへて、御輿たごしなどもてかへる。これに奉りておはしますらんもめでたく、けぢかく、いかでさるげすなどの、さぶらふにかとおそろし。はるかげにいふほどもなくかへらせ給ふ。あふぎよりはじめて、青くちばどもの

あふぎ作本
あふひとあ
ろわろし

語にて、磨(ミカ)く意の詞　帛(キヌ)を貝(カヒ)にて磨(ス)り瑩(ミガ)きて、光澤(ツヤ)を出すをいふ。◎地摺の袴　〔補〕儀服の表袴は、貴賤ともに白き例なるが、舞人歌人に限りて、これに藍もて紋樣を摺れること、靑摺の袍に同じ。◎うちめ　〔補〕打目はつやをいふ。盤齋の抄に、褂とあるによれば內著(ウチキ)の義にて、氷かとおどろくとあれば、內衣(ウチキ)の光の袴の合引の間より見ゆるをいふか。◎受領など　〔補〕元信云、使の受領なる例は、山槐記永曆元年十一月廿三日の條に、使前讃岐守俊盛朝臣とあるも、其の一例也。◎にくげなるもある度　〔補〕顏の見にくげなるもある時は、使に目も留らずと也。◎柳の下襲　〔補〕表白裏靑。◎かものやしろのゆふ襷　〔補〕愚案此歌、かもの社の姬小松といふべきを、ゆふだすきと書たがへしにや。古今集に冬の賀茂の祭のうた。藤原のとしゆきの朝臣「千早ふる賀茂の社の姬小松万代ふとも色はかはらじ」此歌なるべし。〔補〕古今集戀の一に、「千早振賀茂の社のゆふたすき、ひと日も君をかけぬ日はなし」といふ歌あり。聊のたがひなれば、淸女のふと誤りて、書きたがへたるならむ。

行幸になずらふるもの何かあらん。御輿にたてまつり(めさせ申す心也)たるを見まゐらせたるは、あけくれ御前にさぶらひ、仕うまつる事もおぼえず。かう〴〵しういつくしう、つねは何ともなきつかさ、ひめまうちぎみさへぞ、やんごとなうめづらしうおぼゆる。みつなのすけ、中少將などいとをかし。

◎行幸になずらふ云々　〔補〕是れより前にいひし事をくはしくいふ也。◎御輿　〔補〕往古御輿に奉り給ふは天皇を始め、皇后と伊勢賀茂の齋王とのみなり。中にも鳳輦は、天皇に限れり。たとひ上皇と申せども御車

てしろくひろうとあり「よき人ならず受領など」千本にて補ふ

地摺の袴のなかより、氷かとおどろくばかりなるうち目など、すべていとめでたし。今すこし多くわたらせまほしきに、使は必ずよき人ならず、受領などにくげなるもあるたびは目もとまらず。されど藤の花にかくされたるほどはをかし。なほ過ぎぬるかたを見おくらるゝに、陪從のしなおくれたる、柳のしたがさねに、かざしの山吹もおもなく見ゆれども、扇いとたかくうちならして、「賀茂の社のゆふだすき」とうたひたるはいとをかし。

◎行幸 〔春〕朝覲行幸、野ノ行幸、諸社ノ行幸の類なり。◎御かもまうで 〔春〕關白賀茂詣 卯月中の日。公事根源云、此事は必賀茂祭の前日ある事也。主人は案車にて、地下殿上の前駈あり、白妙の御幣、神寶の唐櫃杯やうの物をかたげもたしむ。琴持菅笠深沓といふ物を召供す。上達部車たつらぬ。社頭にて神拜あり。◎祭のかへさ 〔春〕賀茂祭の翌日、きのふの使の中少將舞人等の歸さ也。禁中にも還立の儀あり。◎かざしの花 〔春〕臨時の祭に、藁を結びて臺として、挿頭の花を指て、長橋馬道の西のつまに立て、重土器を舞人歌人に給ひて、後かざしの花を給ふ。江次第に委し 〔春〕挿頭(カサン)は造花にて品々あり。使は藤花、舞人等は山吹と定まれり。之を冠の上緒(アゲヲ)に挿むを例とす。餘事ながら、實方中將の、舞人に任(サ)れて、遲く出仕したれば、挿頭の花既に人に取られて、一つも殘らざりけり。中將竹の臺に立寄りて、竹枝を折りて冠に挿されたりといふ雅談も、この挿頭のことなり。◎青摺 〔春〕舞人、竹の紋の青摺の袍を着ると花鳥にあり。〔春〕白布に藍もて摺れる也。◎半臂の緒 〔圖〕上(はるかなるもの)に註せり。◎えうしたる 〔圓〕えうは瑩の字音

さうのふえ　(春)笙。釋名云笙生也。象ニ物貫レ地生一以レ匏爲レ之、其中空以受レ簧也。說文曰笙正月之音。物生故謂ニ之笙一。三簧象ニ鳳之聲一。◎所せくもてあつかひにくゝ　(春)笙は橫笛のやうならで、かさ高ければ也。◎吹く顏やにかに　(補)笙を吹く人は、特に頰のふくろゝに因りて、醜ければいふ。◎それは橫笛も云々　(補)笙には限らず、橫笛も吹きやうに因りては、頰のふくれて見にくしとなり　◎ひちりき　(春)說文云、篳篥。笳管也。卷ニ蘆葉一爲レ頭截レ竹爲レ管、出ニ胡地一。◎なからばかりより　(春)橫笛の調の半分ほどより、ひちりきを吹きたるなり。◎うるはしき髮もたらん人も　(春)物のそゞろに面白き時は、毛髮立ちてぞつとする也。堀河後百首ニ俊頼「琴のねのことぢにむせぶ夕ぐれは毛もいよ立ちぬそゞろさむさに」(補)千蔭も此の說に同意せり。濱臣の、橫笛を面白く聞く程に、ひちりきを吹き出でたれば、興さめて身の毛の立つ也。」といへるは。甚じき（イミ）ひがごとにて、此の人橫笛と篳篥との調和を、聞き知らぬなるべし。本文の意は、篳篥を下手に吹くを聞く時は、うたて（イヤニ）近くにては聞かまほしからずと、厭はしくも思はるれど、物のうしろなど、遠くより且は橫笛に合せて、吹きのぼせたるを聞けば、音色の澄みのほりて、そゞろに寒きまで面白しとなり。

黒うの下春本まだらに

一九二（見るものは）

見るものは。行幸。御賀茂まうで。祭のかへさ。そらくもりて寒げなるに、雪すこしうちちりて、かざしの花、あをずりなどにかゝりたる、えもいはずをかし。たちのさやの、きはやかに黑う見えたるに、半臂のをの、やうしたるやうにてかゝりたる、

吹きものは流布本笛はとあり

たて文春本たゞ文とあり

ふきものは。横笛。いみじうをかし。遠うよりきこゆるが、やう〳〵近うなりゆくもをかし。近かりつるが、はるかになりて、いとほのかにきこゆるもいとをかし。車にてもかちにても馬にても、すべて、ふところにさし入れてもたるも、何とも見えず。さばかりをかしき物はなし。まして聞き知りたる調子などいみじうめでたし。曉などにわすれて、枕のもとにありたるを見つけたるもなほをかし。人のもとより取りにおこせたるを、おしつゝみてやるも、たて文のやうに見えたり。さうの笛は、月のあかきに、車などにて聞えたる、いみじうをかし。所せく、もてあつかひにくくぞ見ゆる。吹く顔やいかにぞ。それは横笛も、吹きなしにあめりかし。ひちりきは、いとかしがましう、秋の虫をいはゞ、くつわむしなどのこゝちして、うたてけぢかくきかまほしからず。ましてわろうふきたるは、いとにくきに、りんじのまつりの日、いまだおまへには出ではてゞ、物のうしろにて、よこぶえをいみじう吹きたてたる、あなおもしろと聞きまどふほどに、なからばかりより、打ち添へて吹きのぼせたるほどこそ、たゞいみじううるはしきかみもたらん人も、皆たちあがりぬべきこゝちぞする。やう〳〵琴笛あはせてあゆみ出でたるいみじうをかし。

◎曉などに云々　[春]忍びて來たる男の、忘れおきたる也。◎たて文　[團]書狀の仕樣なり。上に註せり。◎

一八九（ひきものは）

琵琶。さうのこと。

◎琵琶 〔春〕和名云、撥、琵琶撥名也。今按、琵琶頸有二四柱一胡國にて馬上にて引く物也。又魏武帝造れり云々、◎さうのこと 和名云箏形似レ瑟、而短、有二十三絃一云々、神農造又蒙恬所レ造秦聲也云々。

一九〇（しらべは）

調べは。ふかうでう。わうしきでう。そかうのきう。うぐひすのさへづりといふしらべ。さうふれん。

◎ふかうでうわうしきでう 〔春〕琵琶の風香調、黄鐘歟。河海云、凡琵琶は風香調反風香調秘曲にあり。楊眞操流泉曲也。仍以二此兩調子一爲レ先。琵琶の黄鐘調は、笛の平調に合する也。◎そかうのきう 〔春〕蘇香急和名云、盤渉調蘇合香大曲。俗只云二蘇香一云々、其樂の急譜別にあり。二反めの時口傳ありとぞ。◎うぐひすのさへづり 〔春〕春鶯囀 和名に、一越調云々、源氏花宴に、春の鶯さへづるといふまひ、いと面白くとあり。此樂の事なるべし。◎さうふれん 〔補〕想夫憐。また想夫戀ともかけり。實は晉の王儉蓮を愛して池に生す。之を樂曲に作つて、相府蓮といひたるを誤りたる由、徒然草にも說あり。此の樂ならむ。

一九一（吹きものは）

舞は、するがまひ、求子(モトメコ)。いとをかし。太平樂は太刀などうたてくあれど、いとおもしろし。もろこしに、かたきに倶して舞ひけんなどきくに。鳥のまひ。ばとうは頭のかみふりかけたる、まみなどはおそろしけれど、がくもいとおもしろし。らくそんは、二人してひざふみてまひたる。狛桙(コマホコ)。

◎するがまひ求子　(春)東遊之也。花鳥餘情云、東遊譜云、先一二歌、次駿河舞、次求子。(補)神樂に奏する曲名。上に出でたり。◎太平樂　(春)順和名の道曲調の所に云、太平樂出時曲謂二之胡少子武昌樂一、合歡臨亞夫、太平樂之急也云々、◎もろこしにかたきにぐして　(春)漢高祖之項羽と鴻門の會に、酒宴の半に項羽の臣項亞夫、高祖をうたんとて、項莊に劍をぬいてまはしめて、ひまあらばと高祖をうかゞふに、項伯といふ者、高祖をいたはりて、劍をぬいて共にまひて、高祖をへだておほひて、終にうたせざりし。この項莊が舞を太平の曲をまひしと、太平記にもしるせり。是を敵にぐしてといふなるべし。(補)太平樂の下諸本「さまあしけれどいとをかし」とあれど前文のまぎれて入りし也。千本刪れり。◎鳥のまひ　(補)河海云、鳥樂迦陵頻也。一越調也云々、順和名に、沙陀調の曲迦陵頻。妙音天淨南笠國に此の舞を傳ふ。婆羅門僧正之を見て、受傳へて唐地にとゞめず本朝に傳之。◎ばとう　(春)拾芥云、拔頭。乞食調云々、(補)胡人猛獸の爲に父を喰はる。其の子怒つて獸を殺すに象ると云ふ。◎らくそん　(春)落蹲。高麗一越調の樂也。納蘇利ともいへり。五月六日の競馬の日、雅樂寮これを奏するよし花鳥餘情にあり。◎狛桙　(補)高麗(コマ)よりの渡船に象る。仍て舟遊びなどの時、童部五彩の桙を持つて舞ふ。韓國の棹は桙に似たれば、棹を操る風をなす也といふ。

一八六　（どきやうは）

どきやうは。夕ぐれ。

盤齋の抄に云、陀羅尼は祈念祈禱の爲に、となふるものなれば、一日の中あしたに唱ふるものぞ。といふ意なり。讀經は夕ぐれとは、後生菩提のための、經卷を讀むものなれば、一日の中につくれる罪科を、今日の暮に懺悔滅罪して、菩提を求むる也。補按するに、陀羅尼は朝のうちに聞くが、前途晴れぐしく、有望らしきやうにて快く。看經の聲は、夕暮に聞くがあはれに、殊勝なりとの意ならずや。

一八六　（あそびは）

あそびは。よる人の顔の見えぬほど。

補音樂のねいろは、夜に入りて澄みまさればにや。

一八七　（あそびわざは）

あそびわざは。小弓。ゐんふたぎ。棊。さまあしけれど鞠もをかし。

◎あそびわざ　補遊技。◎ゐんふたぎ補前註。◎鞠　補蹴鞠。足を揚げて蹴るを、さまあしといへるか。

一八八　（まひは）

野は。嵯峨野さら也。いなみ野。かた野。こま野。あはづ野。飛ぶ火野。しめじ野。そうけのこそ、すゞろにをかしけれ。などさつけたるにかあらん。あべの。宮城野。かすが野。むらさき野。

◎嵯峨野さら也 (春)昔は秋萩の時など野遊し、虫撰など、遊興の所なれば、更也といへるなるべし。◎こま野 (春)山城の駒のわたりにや。猶可尋之。◎飛火野 (春)八雲大和春日野也。袖中抄云、國史云、和銅五年正月廢二高安烽一始置二高見及大和國春日烽一以通二平城一也云々。(春)内亂外寇のある時、京師へ急報の爲に、便宜の地方に烽所を定められ、之を飛火野と稱せし也。後内外無事なるを以て、之を廢せられたれば、唯その舊跡の名をのこすのみ。◎そうけ野 (春)未詳。◎しめぢ野 (春)八雲云、しめじ野。山城、是在二清輔初學抄一云々。おなじ所なるべし。◎あべの (春)攝州住吉と、天王寺とのあはひに安陪野あり。是にや。◎むらさき野 (春)八雲云、近江。愚案後拾遺に長能。紫の野にとよみしは山城今宮也。

一八四 (陀羅尼は)

陀羅尼は。あかつき。

◎陀羅尼 (春)此双紙の心は、だらにはあかつきよみてよしと也。前にいへる、ずゐぐたらに尊勝だらに千手だらにの類にや。一切經藏劫戈の二箱に、陀羅尼集十二卷あり。啓の箱にも陀羅尼經十卷あり。其外諸經のだらにあげていひがたし。

道心すゝむると松が枝とは古物語類聚抄に別とすつゞけ書きて一つ本としたるには非なり

入滅よりみろくの出生までは五十六俱胝六十百千歳をへだつといへり。◎普賢　[春]尺尊法華經を說きをはり給ひてのち、普賢ぼさち東方の寶威德佛國より佛前に來りて、請法して四法成就の法門を得て、末代惡世に法華經の行者を守護し惡鬼夜叉等の難をまぬかれしめ、未來は成佛せしめんとて二十句の陀羅尼をとけり。◎地藏　[春]六道の衆生濟度のぼさち也。

一八二（物がたりは）

物がたりは。住吉。うつぼ。殿うつり。月まつ女。かたのゝ少將。梅壺の少將。人め。國ゆづり。むもれ木。道心すゝむる。松が枝。こまのゝ物語は、ふるきかはほりさがし出でて、もていにしがをかしき也。

◎住吉　[春]住吉物語二卷あり。異本十卷あり。源氏物語に用ひられしは二卷の住吉物がたりと見ゆ。◎うつほ　[春]廿卷あり　◎殿うつり　[春]是より以下の物語、今の世所見なし。八雲御抄、學書の中にも、住吉物がたりの外はしるさせ給はず。其の代にもすべてに絶々なりしなるべし。◎かたのゝ少將　[春]源氏帚木野分卷等に、其の名出たり。又おちくぼの物語にも、辨の少將を、世の人は「かたのゝ少將」と申めりとあり。◎國ゆづり　[春]宇津保物語の卷の名にもある事人の知る所なり。黒川春村は別にさる物語もありけんと云へり。◎こまのゝ物語　[春]此の奧にも亦源氏螢の卷にもこの名見ゆ。

一八三（野　は）

本は　物がたりに　野は

太子の、周秦漢より梁の世までの文をあつめて三十巻あり。唐の李善が註に、五臣の註をくはへて六十巻とす。◎はかせの申文　〔春〕官を望みて除目などに上る文也。其の躰延喜式にあり。其の品は江次第に委し。中にも博士のは小野篁の申文。三善道統の申文等世に傳れり。

一八一（佛は）

佛は。如意輪は、人の心をおぼしわづらひて、つらづゑをつきておはする、世にしらずあはれにはづかし。千手。すべて六觀音。不動尊。藥師佛。しやか佛。みろく。普賢。地藏。文珠。

◎如意輪　〔春〕是此大士の相好を云也。觀自在如意輪菩薩瑜伽法要曰、金剛智三藏譯、六臂身金色、住二説法相一、右第一思惟、第二持二寶珠一、第三持二念珠一、左第一按二光明山一、第二持二蓮花一、第三持レ輪云々、この右第一思惟の手は、愍二念有情一故といへり。此かたちを此の双紙にはかくいへるにや。◎すべて六觀音　〔春〕拾芥云、六觀音配二六道一、大悲觀音。千手變破二地獄道三障一、大慈觀音。正觀音變破二餓鬼道三障一、師子無畏觀音。馬頭變破二畜生道三障一、大光普照觀音。十一面變破二修羅道三障一、天人丈夫觀音。准胝變破二人道三障一、大梵深遠觀音。如意輪變破二天道三障一、今案眞言宗幷法相宗除二准胝觀音一。奉レ加二不空羂索觀音一。◎藥師佛　〔春〕藥師瑠璃光如來云々。◎しやか　〔春〕釋迦牟尼　◎みろく　〔春〕名義集云、彌勒。みろくは。釋迦の付屬をうけて一生補處の菩薩とす。第一減劫のはじめに下生し給ふ。成佛して三會に說法すべき故に當來導師と申也。釋尊

千蔭翁別本に「書(フミ)は」とある由を註せり

せり。猶元亨釋書に委し。◎粉川 (春)紀州那賀郡風市村粉河寺は、寶龜元年に建つ。◎滋賀 (春)崇福寺と號す。近江滋賀郡にあり。ながらの寺とも、此滋賀寺を詠ずるよし八雲御抄にあり。

一七九 （經 は）

經は。法華經はさら也。千手經。ふげん十願。ずゐぐ經。尊勝だらに。あみだの大咒。せんずだらに。

◎千手經 (春)千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經なるべし。世に千手陀羅尼經といふ也。◎ふげん十願 これ花嚴經の普賢行願品をいふなるべし。◎ずゐぐ經 (春)隨求陀羅尼經一卷あり。不空三藏の飜譯也。◎尊勝だらに (春)佛頂尊勝陀羅尼經一卷。大唐罽賓佛陀波利奉勑譯云々。佛在世に、善住太子、七日のうちに死て地獄におつべきしるしありしに、帝釋あはれみて、佛に此よし申給へば、佛此だらにをときさづけ給ひて、其難をまぬかれたり。其靈驗無量云々 ◎あみだの大ず (春)阿彌陀の眞言也。眞言家には大咒(タイス)とすみてよめり。◎せんずだらに (春)すなはち彼千手陀羅尼經の中にあり。

一八〇 （文(フミ) は）

文は。文集(モンジフ)。文選。はかせの申文。新賦 史記 願文 表（千蔭本ニアリ）

◎文集 (春)白樂天が文集也。七十卷あり。白氏長慶集は編やうかはりて七十一卷也。◎文選 (春)梁の昭明

うら。 わかのうら。

◎おふのうら 〔春〕生浦也。八雲伊勢、古今大歌所の歌いせ歌によめり。◎なだかのうら 〔春〕八雲遠江云々、万葉には、きの國のなたかのうらとよめり。◎こりすま 攝津也。八雲に云く須磨。こりすまの浦とは同所也。但別なるやうにいふ人もあり云々 〔頭〕千蔭云、すまのうらとあるべき也。古歌こりぬ事に多くいひかけてかくよめるをもて、ふと書きたるならむ。須磨の浦を、こりすまの浦ともいふにはあらず。

一七八 （寺 は）

てらは。つぼさか。かさぎ。 ほうりん。 高野は、弘法大師の御すみかなるが、あはれなる也。石山。 こがは。 滋賀。

◎つぼさか 〔春〕和泉の法華寺也。又壺坂寺といへり。本尊は千手観音也。道基上人建立と拾芥に有り。◎かさぎ 〔春〕笠置寺。大和にあり。本尊は彌勒、解脱上人の寺也。◎ほうりん 〔春〕嵯峨の法輪寺也。一説ニ小栗栖野法淋寺常曉律師の太元堂云々 ◎高野は 〔春〕金剛峯寺と號す。元亨釋書曰、弘仁七年遊ニ紀州一相ニ勝攸一上ニ高野山一創ニ金剛峯寺ニ云々。◎弘法大師 〔春〕元亨釋書云、釋空海。世姓佐伯氏、讃州多度郡人。承和二年三月廿一日入定、延喜廿一年十月謚ニ弘法大師一、◎石山 〔春〕聖武御宇、東大寺の佛にみがきぬべき金を得んための祈願に、朗辨上人江州瀬多に菴して、如意輪を安置して後、奥州より始て黄金を奉りければ、此寺をたてゝ丈六の觀音をきざみて、はじめの像を中にこめ、又金剛藏王と執金剛神とを左右に安置

篁の八十島かけてとよみ給へるは、只おほくのしまといふ義也。©たはれしま (春)八雲云、肥後也。清輔抄ニハ相撲云々、©みづしま (春)八雲筑前、万葉或三島とも「葦北の野坂の浦に舟出して水島にゆかん波たつなゆめ」©とよらの島 (春)豐浦島。八雲ニ長門 (補)濱臣云、六帖に忠岑「よそにみしとよらのしまのふた心ありとしきけばさらにたのまず」◎たとしま (補)活本にはたくしまとあり。万葉抄には、たのしまの誤りか。然らば出雲也と有り。

一七六（濱は）

はまは。そとのはま。ふきあげのはま。ながはま。うちでの濱。もろよせのはま。千里のはまこそ、ひろうおもひやらるれ。

◎そとのはま (春)奥州。©ふきあげのはま (春)紀伊。古今秋に菅原朝臣「秋風のふきあげにたてる白菊は花かあらぬか波のよするか」◎ながはま (春)八雲伊勢云々、©うちでのはま (春)打出濱。八雲近江。◎もろよせの濱 (補)実隆云、抄に但馬のよし記す。余の友人蓮池氏但馬もろよせの人なり。打寄する波の同じくよるとて、然名つくる由語られき。©千里の濱 (春)伊勢物語に、紀の國の千里の濱にありけるいと面白き石奉れり云々。

一七七（浦は）

うらは。おふのうら。しほがまのうら。滋賀のうら。なたかの浦。こりずまの

「兒(チゴ)の十ばかりなるが、髮をかしげなる、さばきて垂る云々」とあり　近世の書ながら、近松の丹波與作といふ淨るりに、馬方の丁稚が「片肌脫いでさばき髮」小町踊といふ俳書に「梅が香やとめん柳のさばき髮」といふ句も見えたり。捌くとは、もと解き分くることなるを、分け散らすことにもいふは、語意の移れるなり。髮にさばくといふは、古よりいひ來れることにて、此處も猶「さばかしう」にて、分け散らす風の意なるべきか。姑く記して後の敎を待つ。◎しつらひ　(補)室内の裝飾。室禮とかくはあて字。◎上卷　(補)上卷(アゲマキ)に結びたる總(フサ)。◎このきはやかなる　(補)鈎。(補)簾を卷き上げたる時、掛けおく曲り金具(カナグ)を鈎(コ)といふ。金色に燒付をしたれば、「きはやか」といへり。上卷(アゲマキ)はこの鈎に附きたる緒（上卷といふに結びたる）をいふ也。◎内にかきたる繪　(補)火桶の内部の、オトシといふ物に、金にて繪を燒きつけにしたるをいふ。◎はし　(補)火箸と千蔭翁の書けるよろし　火箸の斜にたてるをいふ。◎簀子に火ともしたる　(補)御簾の内の、明らかに見え透かぬが、心にくきなるべし。簀子は簾外なり。

一七五（島　は）

しまは。うきしま。やそしま。たはれ島。みつしま。松(八雲陸奥)がうらしま。まがき(陸奥)の島。とよらの島。たとしま。

例の詩人の思ひ浮べたる島の名どもなり。一々地理學的穿鑿に及ばじ。◎うきしま　(補)奥州しほがまの邊也。新古今に「しほがまの前にうきたるうきしまのうきて思ひのある世なりけり」◎やそしま　(補)八雲云、清輔云出羽にあり云々、普通には只八十島也。愚案、業平の小町が髑髏を見しは、出羽の八十島也　小野

上巻などに諸本あけたるにとあり千本による

つにいと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいとつやゝかに見えたるいとめでたし。みすの帽額、上巻（アゲマキ）などに、このきはやかなるも、けさやかに見ゆ。よく調じたる火をけの、灰きよげにておこしたる火に、うちにかきたる繪の見えたるをかし。はしのいときはやかに、すぢかひたるもをかし。夜いたう更けて人の皆ねぬる後に、外（ト）のかたにて殿上人など物いふに、おくに碁石を筒（ケ）にいるる音のあまた度聞えたるいと心にくし。簀子（スノコ）に火ともしたる　物へだててきくに、人の忍ぶるが、夜中などうちおどろきて、いふ事は聞えず。男も忍びやかにうちわらひたるこそ、何事ならんとをかしけれ。

㊀心にくき　(補)眞に憎むにあらず。心底に輕く憎しと思ひ、且は羨む程の意。今俗に奥ゆかしといふ詞にあたる。㊁女房とはおぼえぬ　(春)主とおぼしき貴女なり。㊂こたへ若やか　(春)是れ女房なるべし。㊃御物まゐる　(補)物喰ふ。㊄にしかひ　(春)箸、匙。和名抄、匕、所ニ以取レ飯也云々。㊅ひさげのえ　(春)提の柄。(補)鍋の鉉（ツル）の如きもの。金屬製なれば鳴るなり。提子（ヒサゲ）のこと、調度圖解に委し。㊆ようちたる衣　(補)濱臣說に、紅の板引にして、打ちたるなるべし。とあれど、誤なり。板引は、糊をひきて光を出し、打ちは、唯打ちて光澤を出すにて別なり。㊇さうがしうはあらで　(春)さわがしからぬ也。(補)通釋には、衣の上にかゝれる髮の亂れぬを云ふとあれど、髮の亂るゝを、騷がしといふことありや覺束なし。千蔭校本は、一本により「さばがしう」と書きたり。直按ずるに、此の草子のうち（始の方、人の家の前をわたるにとある段）にも、

物のうしろ以下點うちたる文字千本によりて補へる也

たる狀をいふ也。㊂かうしのつぼなどに (春)格子のひと間〳〵を坪といふにや。こま〴〵と、吹き入ると次の詞にあり。◎きのはを殊更にしたる (春)格子の組入れの間毎に、特別に、木の葉を吹き入れたる如きをいふ。流布本「きは」とあれど、さては何を入れたるにか明ならず。上に「木ども倒れ枝など吹折られ」とあれば、次に木の葉とあるべき文勢なり。㊂いとこきゝぬのうはぐもり (春)こき紅のうへのくろみたる也。㊂むべ山風を (春)嵐といふらむ。吹くからにの歌、文屋康秀、この一くだり千蔭本のみにあり。武藏本にもなし ㊂花もかへりなどしたる (春)かの生絹の單の、花田いろなるが、色さめて、野分のしぶきに、ぬれたるさまなり。㊂薄色のとのゐ物 (春)薄紅のよるの物也。㊂衣のすそにかくれて (春)諸本皆にはづれとあるは解し難し。千蔭本「かくれ」と訂せるにて能く聞ゆ。身の長(タケ)ほどの髮なれば、末はとのゐ衣の裾にかくれて、唯袴のみあざやかに見ゆと也。㊂そば〳〵 (春)端々といふに同じ。そばは傍(ワキ)なり。◎うらやましげに (春)かの童女の若き人と諸共にせまほしげなる也。

一七四（心にくきもの）

心にくきもの。物へだてゝきくに、女房とはおぼえぬ聲の、忍びやかにきこえたるに、こたへ若やかにして、うちそよめきてまゐるけはひ、物のうしろ障子などへだてゝきくに、御物まゐる程にや、はしかひなど、とりまぜて鳴りたる。ひさげのえの、たふれふすも耳こそとまれ。よううちたるきぬの上に、さうがしうはあらで髮のふりやられたる。いみじうしつらひたる所の、おほとなぶらはまゐらで、長すび

きのは流布本きはとあり古本による

物あれなるけしきにの下一行ほどは諸本になし千蔭本のみにかくあるなよろしければ補ひつけ

髪の筋云々かくれて」まで千本による

簾にそひたる同上

などに、さと、きのはを殊更にしたらんやうに、こま〴〵と吹き入れたるこそ、荒かりつる風のしわざともおぼえね　いと濃き衣のうはぐもりたるに、くちばのおりもの、うす物などの小袿きて、まことしく清げなる人の、よるは風のさわぎに寝られざりつれば、久しうねおきたるまゝに、鏡うち見て、母屋よりすこしゐざり出でたる、髪は風に吹きまよはされて、少しうちふくだみたるが、肩にかゝりたるほど、まことにめでたし。ものあはれなるけしきに見出だして、「むべ山風を」などいひたるも、心あらむと見ゆるほどに、十七八ばかりにやあらん、ちひさくはあらねど、わざとおとなとは見えぬが、すゞしのひとへのいみじうほころびたえ、花もかへり、ぬれなどしたる、うすいろのとのゐ物をきて、髪の筋こま〴〵とうるはしう、すゑも、たけばかりなれば、きぬのすそにかくれて、はかまのみあざやかにて、そば〳〵より見ゆるに、わらべの、若き人のねごめに吹きをられたる前栽などを、とりあつめおこしたてなどするを、うらやましげにおしはかりて、簾にそひたるうしろもをかし。

◎立蔀透垣　上に註せり。◎ふしなみ　◎伏し並びなり。◎いとおもはずなり　◎頗る意外となり。究竟なる大樹の、もろ〳〵吹き折られ、又は倒されて、萩女郎花の如き、かよわき草の上によろぼひ、這ひ伏し

かゝりたる春本は「汗の香なとかわき」とあり

おしあけたれば、嵐のさと吹きわたりて、かほにしみたるこそいみじうをかしけれ。

九月（ナカツキ）つごもり、十月（カンナヅキ）ついたちの程の空うちくもりたるに、風のいたう吹きて、黄なる木の葉どものほろ〳〵とこぼれおつる、いとあはれなり　さくらの葉椋の葉などこそいととくはおつれ。十月（カナンヅキ）ばかりに、木立（コダチ）おほかる所の庭はいとめでたし

◎あまがせ　〔補〕雨氣を含みたる風。春抄本文には花風とあるにより、はな風は、はる風の誤寫ならむといふ說も見ゆれど、なほ雨風然るべし。證は源氏藤のうら葉に、心あわたゞしきあま風に、皆ちり〳〵にかへり給ひぬ。元眞集に、「初雁を送る也けりあま風の雲ゐはるかに吹きて過ぐるは」◎夏とほしたる綿衣のかゝりたる　〔補〕綿衣は、晝寢などの折々、一夏とほして著たる薄綿入なるべし。かゝりたるは、衣架に掛けありたる也。さて此の條、春本には汗の香など（抄本活本、せしが）かはきとあり。今は古本に從ひたれど、必ずや元は「汗の香などせしが、かわきてかゝりたるを」とありしに、古本流布本互に、その上下の句を寫し落したるならむ。◎すゞし　〔補〕生絹。上に註せり。◎嵐のさと　〔春〕風の音サツと。

一七三（野分のまたの日）

野分（ノワキ）の又の日こそいみじうあはれに覺ゆれ。立蔀透垣（スイガイ）などのふしなみたるに、前栽ども心ぐるしげなり。おほきなる木どもたふれ、枝など吹きをられたるだにをしきに、萩女郎花などのうへに、よろぼひはひふせる、いとおもはず也　かうしのつぼ

たまく天皇の御乳母などは、勤勞の賞に內侍のすけ（典侍）三位に昇進するもあれど、男子の納言宰相中少將など、若く華やかなるに比ぶれば、旣に老境に入り、壯年の程を過ぐとなり。源氏物語中の、源內侍のすけが、古りがたう色めきたる物語など、當時實際にありしなるべし。◎又多くやは 〇それも、稀有の事にて、多くはなし。◎打ちあふぎ 〇仰ぐ。上を向く。屈むの反對にて、俗に身を反り返り、威張ること也。〇何某供奉 〇供奉は僧の職名 內供奉十禪師を略して、內供とも供奉ともいふ也。◎なりかゝり 〇形懸りばかりこそつくろへ 何のかひなしと也。〇按するに、服裝つくろふことを、形懸ると いふ言、見聞したることなし。抄には供奉の僧が、侮らるゝを腹立てる心なりと有り。惟中は「女にあなづられて也。かゝりこそすれと、句切りて、旁註に、かく侮られこそすれ也」と記せれど、いづれもく甘服し難し。必ずや「女にあなづられて」の下に、文句の落ちたるならむと思へど、千蔭校本も、武藤の考異にも何の補正せる所なし。

いとあはれなりの一句下にもあり重なりて拙し必ずや下の句のまきれて入りしならむ删るべきかひやゝかに宸筆本による

一七二（風 は）

風は。あらし。こがらし。三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹きたるあまかせ。（いとあはれなり）。八九月ばかりに、雨にまじりてひやゝかにふきたる風。いとあはれ也。雨のあし横さまに、さわがしう吹きたるに、夏とほしたるわたぎぬのかゝりたるを、すゞしの單にひき重ねてきたるもをかし。此のすゞしだにいとあつかはしう、すてまほしかりしに、いつのまにかう成りぬらんと思ふもをかし。曉に格子つま戸など

息女(ムスメ)にて、后(キサキ)になり給ふこそはめでたけれ。されど猶男は我が身のなり出づるこそめでたく、うちあふぎたるけしきよ。法師などの何がし供奉などいひてありくなどは、何とかは見ゆる。經たふとくよみ、見めきよげなるにつけても、女房にあなづられて、なりかゝりこそすれ。僧都僧正に成りぬれば、佛のあらはれ給へるにこそとおぼしまどひて、かしこまるさまは、何にかは似たる。

○位こそ　〔春〕是れより位のめでたき事な次第にいふ也。〔補〕美隆云、こゝの位は官職な云ふ。直按、この說よし。源氏物語などにも、官のことな多く位といへり。○大夫の君　〔補〕五位の受爵せし人　謂ゆる無官の大夫なり。○侍從の君　〔補〕侍從は、至尊の御側近に仕ふる官名なれど、猶從五位相當にて高からねば也。◎やんごとなく　〔補〕止事(ヤミゴト)ナクなり。もと捨ておかれぬ義にて、高貴の人は、等閑(ナホザリ)に成り難きより、尊敬する意になれり。上にもいへり。◎ほど〳〵につけては　〔補〕家柄素姓の程に就いては、納言以上ならでも、受領にてもさぞあらむと也。◎あまた國にゆきて　〔春〕一任四ヶ年の國守な經て、あまた他國に行きて、合格の人ないふ也。◎大貳　〔春〕太宰府のおほい介也。相當四位也。太宰のかみは帥也。帥は大かた親王の任官にて、筑紫に下り給はず、府務なおこなはざれば、大貳、帥にかはりて筑紫に下りて、太宰府の務なおこなふ故に、規摸とする官也。◎四位　〔春〕受領は大かた五位なれば也。○女こそ　〔補〕是れより女子の官職のさたに移る、流布本脫文ありて、聞えざる所ありしな、古本によりて、通すべくなりたるは幸なり。◎なほわろけれ　〔補〕此の一語面白し。女子の任官は、男子に比しては損なる由ないふ。◎ほどすぎ云々　〔補〕

おほゆる流布本におぼえ給ふとあるは非なり四位などの字の下諸本多し千蔭古本によりて補へり例の圏點附けたる所即ちこれ也

欲がましき心也。遊手館、貪生フクツムビトとよめり。◎ありくして 〔補〕歳月ありてなり。多年閑散にて居たるが、久々にて又受領になりし者。◎ずんざのなめげに 〔一〕從者也 〔二〕無頼なかりし程には、無禮しあなづりし從者の、ねたかりしもせんかたなくて、過しつるに、受領に成りて後は、從者も誰も追從する心也。つゐしようは諂ふこと。〔一〕ありし人 〔二〕受領に成る前の人といふこと。ありし、又ありつるなどいふ詞は、大かた「前の」と譯して通ずべし。◎受領などしたる人 〔一〕本隆云、諸大夫などの家がら也。直云、もと地下の者の、國司となり、内官に入りて、殿上人に成りし人なり。〔三〕もときんだちの云々 〔吾〕元來の公達也。公達とは、攝家大臣の懸ならでも、近衞の少將中將を經て、納言以上にのぼる人々をいふ也。清華、英雄とも申す也。さやうの人々より、受領の中將になりしには、したりがほなると也。

位こそ猶めでたき物にはあれ。同じ人ながら、大夫のきみや侍從の君などきこゆるをりは、いとあなづりやすきものを、中納言大納言大臣などになり給ふは、むげにせんかたなく、やんごとなくおぼゆる事のこよなさよ。ほど〳〵につけては、受領なども皆さこそはあめれ。あまた國に行きて、大貳（ダイニ）や四位三位などになりぬれば、上達部などもやんごとながり給ふめり。女こそなほわろけれ。内わたりに、御めのとは、内侍のすけ三位などに成りぬれば重々しけれど、さりとてほどすぎ、なにばかりの事かはある。又おほくやはある。受領の北のかたにて國へくだるをこそは、よろしき人のさいはひとは思ひて羨むめれ。只人（タダウド）の上達部の北の方になり、上達部の

元旦にはなひろ事を吉祥とするは、當時の風なりけむ。◎きしろふ 〔補〕競爭。軋るといふ語より出づ。六位藏人の定員四人にて、一人つゝ上より順次退職するなれば、一人の闕を、數人して競望する也 ◎第一の國 〔春〕其の年闕ある中に、第一の國を受領したる也 ◎かしこう 〔補〕此の語は、元畏また賢の意をあらはす語なれど、當時の俗には「チヨウドヨイ」といふ義につかへり。この草子また源氏物語等にも、例證あれど長ければ省く。◎なにか 〔春〕句を切るべし 何かよき事のあらんと、自謙の詞なり。◎ほろびて 〔補〕美隆云、ほろぶとは、國中豐饒ならず、田畑荒廢したるをいふなるべし。然思ふ由は、舊本今昔物語廿八、尾張守□□節所の語に、今は昔□□天皇の御代に、□□といふ者有けり。年來舊(フル)受領にて、官も不レ成て、沈居たりける程に、辛くして尾張守に被レ成たりければ、喜びながら任國へ急ぎ下りたるに、國皆亡びて、田畑作ることもつゆなかりけり。云々。二年のほどに、よき國に成にけり。然れば天皇もこれを聞し召して、尾張國は前司に亡ぼされて、無下に弊(ツヒユ)ときこしめすに、此任二年に成ぬるに、吉く福しけると仰せられ云々」と見ゆ。是れ國の荒廢を、亡ぶといへれば也。されば此處の文義は、人のほむるを、自からも實はいみじと誇りながら、わざと何か云々と、わろき樣(サマ)に云へる也。かゝる事常あること也と云々。此の說いはれたり。凡て言葉は、時代によりて聊かづゝ本義の變化して、使用せらるる事多し。注意して博く書を見ざれば、此の味ひ知られぬ事なり。◎いどみたる 〔春〕よき人の娘を、これかれ競ひ望みし也。◎もののけてうじ 〔補〕物の氣の事上に出づ。てうじは調伏也。◎韻ふたぎの明とうしたる 〔春〕掩韻。孟津抄云、古集の詩の韻字をふたぎて、何の字と推して勝負をする也。其の何の字と推しあてたるを明(アケ)と云也。◎ねんじて 〔春〕まぎらはされず、よくこらへたもちたる心也 ◎ふくつけきは 〔春〕細流云、貪る也、愚案、

中に、えられて鉏にとられたるも、我れはと思ひぬべし。こはきもののけてうじたる驗者。韻ふたぎのあけとうしたる。小弓いるに、かたつかたの人しはぶきをし、まぎらはしてさわぐに、ねんじて音たかう射てあてたるこそ、したりがほなるけしきなれ。碁をうつに、さばかりとしらで、ふくつけきは、又こと所にかゝぐりありくに、ことかたより、目もなくして、多く拾ひとりたるもうれしからじや。ほこりかにうちわらひたる、たゞの勝よりはほこりかなり。ありく〳〵て受領に成りたる人のけしきこそうれしげなれ。わづかにあるずんざの、なめげにあなづるも、ねたしとおもひながら、いかゞせんとて、ねんじ過ぐしつるに、我れにもまさる者どものかしこまり、只仰せうけたまはらんとつゐしようするさまは、ありし人とやは見えたる。女房うちつかひ、見えざりし調度裝束のわき出づる。受領したる人の、中將になりたるこそ、もと公達のなりあがりたるよりも、けだかうしたりがほに、いみじうは思ひためれ。

◎したりがほ 圖得意の顔色。弘恭云、爲て有り顔といふこと也。◎正月一日のつとめて 圖世俗に元日嚔ルハ長命の相といへば也 袖中抄云、四分律云、時世尊嚔、諸比丘呪願言二長壽一。今案今俗正月元日若早旦嚔、卽稱曰二千秋万歳急々如律令一是緣也。何只在二元日一哉。尋常禱レ之。圖かくあれば、本義はともあれ。

博士安倍ノ晴明の家の前を過ぎさせ給へば、目に見えぬ職神夜中に戸を開きて、天皇の御後影を見奉り、高聲にかくと晴明に告げたる由を記し、又宇治拾遺卷二に、車より下りて參内する藏人ノ少將某の上に、烏の飛びて尿(シ)をしかけたるを、晴明の見て式神にこそありけれと、少將に忠告して身固めの法を修し、終夜加持して助けたるに、少將を咒咀したる陰陽師は、却つて其の伏せたる式神にうてゝ、死にける物語を載せたり。更に源平盛衰記卷十には、一條戻橋といふは、安倍晴明が天文の淵源を極めて、十二神將を仕ひけるが、其の妻職神の顏に恐れければ、彼の十二神將を橋の下に咒しおきて、用事の時に召し使ひけり」とあり。陰陽師に仕はるゝ鬼童のやうにも思はるれど、藥師の十二神將なりとの說も見ゆるは、時代によりて、式神の信仰も替りたりと覺ゆ。さて清少の「しきの神も畏し」といへるは更に咒咀を畏るゝ意にあらず、唯正邪を識別する神の、畏くましませば、我が僞ならぬ事、自然明らかにならむといふまでの事なり。㊁などてさはた　譯何如にして、其の折からさやうにも、亦ありけむと也。偶然にも、余所にてはなひたる者のありしを云ふ也。

一七一　（したりがほなるもの）

したりがほなるもの。正月一日のつとめて最初(サイソ)にはなひたる人。きじろふ度(タビ)の藏人に、かなしうする子なしたる人のけしき。除目(チモク)にその年の一(イチ)の國えたる人。よろこびなどいひて、「いとかしこう成り給へり」など人のいふいらへに、「何かは。いとことやうに、ほろびて侍るなれば」などいふもしたりがほなり。又人おほくいどみたる

ぬと也。〔補〕よろしうは、眞に善きにあらず。俗にヨイカゲンといふに同じ。◎はなこそは空ごと 〔補〕弘恭云、僞りてはなひたるならむと、思はると也。此の說よろし。下に「誰れか斯くにくきわざしつらむ」とあるにて思ふべし。◎大かた心づきなし 〔春〕はなひる事を忌めばなり。〔補〕大かたとは、總じて又は一體などいふに同じ。◎わがさる折も云々 〔春〕尋常(ヨノツネ)にも、人の噓つれば、其はなひ返してある物をと也。人のはなひたる時、又はなひ返されば、わろき事有りと世俗にいひならはす事のゆゑなり。〔補〕わがとは、自分たち仲間の意、同輩ならば、互にはなひ返しつゝあるを、宮の御前なればそれも成らず。まして憎しと思へどの意。◎おりたるすなはち 〔補〕下局へおりると卽刻。◎いかにして 〔春〕清少の思ふといふを、僞ならずと、いかにしてしらん。若し僞を糺の神あらばこそ知るべけれとの心也。〔補〕そらとは、證なき事を、天上(ソラ)の事にも兼ね、又糺(タダス)の神は、山城愛宕郡下鴨に糺の森あり。其處の神にて、神名の糺に、糺明の意をもかけたり。◎みけしきは 〔春〕右筆のもとより、后宮の御氣色は知レ此といへる詞なり。◎うすきこそ 〔補〕次の句「それにもよらぬ花ゆゑに」とあるを、「それにもよらめ」と改めて、こその結詞とする說多し。然るに、美隆說に「うすきこそ」にてつよく句を切りて、意をふくみて見るべし。といへるに從ひ、敷衍していはゞ、薄き志こそ、はなの爲に、僞も顯はるれ。それならぬはなの爲に、我が身の憂さを知るが、わびしくつらしとなるべし。猶按ふに、淺綠の薄樣紙にかゝれたる故に、うすきこそといひ、淺綠は花田色に近ければ縹の花にもかけたるならむ。◎しきの神 〔補〕職神。また式神とも書くは略字か。シキジンとも稱しき。此の神、人間の目には見えねど、何處(イヅク)にもありて、人の善惡を監視する由一般に信仰せられたりし也。猶按ふに、職神もと識の字にて、善惡を鑒識する神の義にあらずや。大鏡に、花山天皇御出家の際、陰陽

なげかし 春本「たかし」とあり乎本によりて改むる

の人ぞたづねきかまほしき。

清少進歌 うすきこそそれにもよらぬ花ゆゑにうき身のほどをしるぞわびしき

猶これはかりは啓しなほさせ給へ。しきの神もおのづからいとかしこし」とて參らせてのちも、うたてをりしも、などてさはたありけんといとなげかし。

(一)直衣の人 〔春〕隆家卿、伊周公の弟。(二)われも 〔春〕笑ひ興じたる女房たちのことなり。殿上人のうへなど申すへかゝる。(三)何がしがとあること云々 〔春〕何某は云々。彼がしは斯々ありと、殿上人が批評する也。(四)へんげのもの 〔春〕變化、妖怪の類ひかと也。伊周隆家と、女房たちと、若き男女のとりどり美しく、華やかに談笑するを見れば、此の世とも思はれず、天人の降り來りしか。さらずば天狗狐狸の變化ならむかの意。(五)かく見る人々 〔春〕女房たち。(六)とかくしもて行くに 〔春〕かれ是れしてゐるうちに、自然と町馴れて、恥かしとも思はぬならむと也。千蔭本には、左右猥じもて行くとあり。(七)物など仰せられて 〔春〕是れより皇后の清少へ仰せられし也 (八)臺盤所 〔春〕皇后の臺はん所の女房也。(九)そらことするなりけり 〔春〕清少思ふとは僞ならん。隣にはなひつればとの御たはむれ也。清輔奥義抄云、人の事を思ひくはだつるに、はなひつれば成らずと云々。さやうの心にて、后宮もかくの給へるにや。〔春〕盤齋云、袖中抄云、出でて行かん人をとゞめむよしなきにとなりの方にはなもひぬかな」顯昭云、はなひるは、何事にもよからぬ事なり。年始にもはなひつれば、いはひごとをいひて祝ふなり。されば人の物へいかむずる始に、隣の人のはなひんを聞きても、若しからむ人には立歸るべき也。(以上抄)(十)よろしうだに 〔春〕大かたにも思ひ奉ら

今少し花やぎ、さるがふことなどしたまふを笑ひ興じ、われも「何がしが、とある事、かゝる事」など、殿上人のうへなど申すをきけば、猶いとへんげの物、天人などのおりきたるにやと覺えしを、さぶらひなれ、日ごろすぐれば、いとさしもあらぬわざにこそ有りけれ、かく見る人々も、家の內出でそめけんほどは、さこそは覺えめ。とかくしもてゆくに、おのづからおもなれぬべし。物など仰せられて「我れをば思ふや」と問はせたまふ。御いらへに「いかにかは」と啓するにあはせて、臺盤所のかたに、はなを高くひたれば、「（后宮の御詞）あな心う、そらごとするなりけり。よし／＼」とて奥へいらせ給ひぬ。（清少心也）いかでかそらごとにはあらん。よろしうだに思ひきこえさすべき事かは。あさましうはなこそはそらごとしけれとおぼゆ。さても誰れか斯くにくきわざしつらんと、大かた心づきなしとおぼゆれば、わがさる折も、おしひしぎかへしつゝあるものを、ましてにくしとおもへど、まだうひ／＼しければ、ともかくも、啓しなほさで、明けぬれば、おりたるすなはち、あさみどりなるうすやうに、えんなる文をもてきたり。見れば、

（后宮の御うた）いかにしていかにしらましいつはりをそらにたゞすの神なかりせば

となん、御けしきは」とあるに、めでたくもくちをしくも思ひ亂るゝに、なほよべ

◎御うしろなる云々 ■清少を見附けて、伊周の問ひ給ひし也。◎さぞと申すにこそ ■是は元輔の女、新参の由を申なるべし。◎うつゝとも云々 ■正氣とも覺えず、夢のやうにて。◎見おこせ給へば ■年來行幸など見し折に、伊周公供奉にて、清少の物見る車を見おこせ給ひしさへ、顔かくしなどせしとの心也。◎下すだれ ■車の前後の、簾の内にかゝれる帷をいふ。委しくは車輿圖解を見よ。◎すきかげ ■清少の透影なり。◎おほけなくいかで立出にし ■かゝはづかしき所へ、おほけなくも、宮仕へに出でしよと、恥かしさに思ふ也。■おほけなしは、負氣なしにて、負荷に堪へず、其の事の身に應ぜぬ由の語なり。◎汗あえて ■あゆといふ詞前にも註せり。乳また血などにのみいへり。俗にニジミ出つる義なり。◎ふりかくべき髮 ■下り端（上のうらやましきものゝ段にあり）のこと。額髮を程よくきりて、兩頰の下まで垂れて顔のあらはに見えぬやうにせしなり。◎さるけしきも ■清少の恥ぢたる心の、顔色にも見ゆらむにと也。◎白いものうつりて ■清少の汗に、白粉ながれて、唐衣にうつる也。◎こゝろなう ■千蔭古本による。諸本ろんなうとあり。春註には勿論と解けり。それにても聞ゆれど、古本の、心なうに據れば、伊周の久しく清少に附き居るを、心なくおぼしめし、清少の苦しく思ふらむと、宮の推量し給へるにやの意にとらる。◎身のほど年にあはず ■身分の高下もちがひ、年配も相應せずと也。伊周は當時十九歳なりしかど、清少は廿三四歳ほどならむ。◎草がな ■平假名。◎彼れに見せさせ ■清少に見せ給へとなり。下のそれでも、清少をさす。◎世にある人の手は見知りて ■清少は、多くの男と文書き交すべければ、世上の人の字は、能く知り居らむと戲れ言なり。

ひとところだにあるに、又さきうちおはせて、同じ直衣の人參らせ給ひて、これは

ひきふたぎ｜諸本ひきつくろひとあれど千本によりて改むこの外流布本とことなる所みな彼の校本によ る

奉りつるだに、はづかしかりつるを、いとあさましう、さし向ひきこえたるこゝち、うつゝともおぼえず。行幸など見るをりに、車のかたにいさゝか見おこせ給へば、下すだれひきふたぎ、すきかげもやと、扇をさしかくすに、猶いと我が心ながらもおほけなく、いかで立ち出でにしぞと、汗あえていみじきに、何事をかきこえん。かしこきかげとささげたる扇をさへ取り給へるに、ふりかくべき髪のあやしからんと思ふに、すべてさるけしきもこそ見ゆらめ。とく立ち給はなんと思へど、扇を手まさぐりにして、「ゑはたがかきたるぞ」などの給ひて、とみにも立ち給はねば、袖をおしあてゝ、うつふしゐたるも、からぎぬに白いものうつりて、まだらにならんかし。久しうゐ給ひたりつるをこゝろなう、苦しとおもふらんと、心得させ給へるにや、「これ見給へ。(宰相)これはたがかきたるぞ」ときこえさせ給ふを、うれしと思ふに、(宰相の詞)「給はりて見侍らん」と申し給へば、(后宮の詞也)「猶こゝへ」とのたまはすれば、「人をとらへてたて侍らぬなり」との給ふを、いといまめかしう、身のほど、年にあはずかたはらいたし。人の草假名かきたる草紙とり出でて御覽ず。(宰相の詞)「誰がにかあらん。彼れに見せさせ給へ。それぞ世にある人の手は見しりて侍らん」と、只いらへさせんと、あやしき事どもをの給ふ。

いさゝか恥かしとも思ひたらず。聞えかはし、そらごとなどの給ひかくるを、あらがひ論（ロウ）じなどきこゆるは、めもあやに浅ましきまで、あいなくおもてぞあかむや。

◎さき高う云々　〔頭〕高輩に先拂する也、◯殿　中宮の御父道隆。◎えふとも　〔頭〕えには、俗にヨウといふ副詞。得と思へるは誤なり。ふとは言海に、輕クタヤスキ意にいふとあるよろし。◎さすがにゆかしきなめりと　〔春〕清少引入ながら、又見まゐらせまほしきには、我心ながら、さすがに殿の御ありさまの、ゆかしきにやとて、御几帳よりのぞきしとなり。めづらしき文躰なり。◎大納言殿云々　〔頭〕道隆公の來りしにはあらで、御子の伊周公なりし、伊周公は當年九月、權中納言に成りたるにて、いまだ大納言にはあらざれども此の文物する頃の官名を、前に及ぼしたる也。此の例他の所にも多し。◎道もなしとおもひけるに　〔春〕拾遺「山里は雪ふりつみて道もなしけふこん人をあはれとは見ん」〔頭〕此の歌の詞にて御挨拶なり。◎めもあやに　〔春〕目も綾也、〔頭〕非なり。或説にあやは文彩（アヤ）にて、美しきこととといへれど從ひ難し。弘恭云、あやに異しの「あや」に同意にて、イヨイヨニの義なり。雅望云、眼も及ばぬなどの心なり云々、直按、見るも奇（アヤ）しくと譯すべきにや。

御くだ物まゐりなどして、御まへにもまゐらせ給ふ。御几帳のうしろなるは誰（タ）そと問ひ給ふなるべし。さぞと申すにこそあらめ。たちておはするを、外（ト）へにやあらんと思ふに、いと近うゐ給ひて、物などの給ふ。まだまゐらざりし時、聞きおき給ひける事など、「まことにさ有りし」などのたまふに、御几帳へだてて、よそに見やり

いかで―今すこし」までの一句千蔭本により補ふ

安らかなりと也。ぬぎたれとは、當時の風、常に著なれたる婦人は、唐衣の領（エリ）を背後におとして、（表着の見ゆる程に）俗に拔衣紋（ヌキエモン）といふ體に著たるが如し。其の樣繪卷物（紫式部日記春日驗記等）の中に多く見ゆ。◎ゑわらふ 〔春〕笑咲ふ也。〔補〕ゑはゑみなり笑を含みて聲を出さゞるをいふ。◎まじらひならむ 〔補〕交り合ひ馴れむ也。當時は馴れといふ語、四段に活用せり。◎あうよりて 〔春〕奥へよりて也。あうは奥の音。

しばしありてさき高うおふこゑすれば、殿まゐらせ給ふなりとて、ちりたる物ども取りやりなどするに、いかでおりなむと思へど、更にえ、ふともみじろかねば、今すこし奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめり。御几帳のほころびより、わづかに見いれたり。大納言殿（伊周公）のまゐらせ給ふなりけり。御直衣指貫の紫の色、雪にはえてをかし。はしらのもとにゐ給ひて、「きのふけふ（伊周詞）物忌にて侍れど、雪のいたくふり侍りつれば、おぼつかなさになむ」と申し給ふ。「道もなしと（后宮の御詞）思ひけるに、いかで」とぞ御いらへあなる。うちわらひ給ひて、「あはれともや御らんずるとて」などの給ふ御ありさまども、これよりは何事かまさらん。物がたりに、いみじう口にまかせていひたる、たがはざめりとおぼゆ。宮は白き御ぞどもに、紅（クレナヰ）のからあやをぞ上に奉りたる。御ぐしのかゝらせ給へるなど、ゑにかきたるをこそかゝる事は見しに、現（ウツ）にはまだしらぬを、夢のこゝちぞする。女房と（伊周のさま也）物いひたはぶれなどしたまふを、いらへ

こゝちには、中々里住よりもをかしき事を見聞きて、慰みやせん」などあり。㊁いかゞには 圖句を切るべし。
下にめでたしと見ざらむの意を略せる詞なり。㊁かつらきの神もしばし 春清少をしばしまてと、とめさ
せ給ふ詞也 葛城の神は形見ぐるしとて、晝の役をせで、よるのみ橋をかけられし也。清少のよる〳〵の
みまゐりて、晝は退出するゆゑ、かゝたはぶれての給ふ也 ㊁すぢかひても云々 通すぢかひは筋違ひに
て、斜になる事なり。正面より御覧ぜらるゝが恥かしきは勿論、たとひ横筋からにても、堪へられずとの意。
㊁女官參りて 通主殿の女官 トノモリ 御格子を上げむとて、格子の外に參れる也。㊁これはなたせ給へ 通格子
あげよと外より申す也。通此の註いひ足らず。殿守の女官、格子の外より格子の差木を外し給へと、内方
の女房にいへるなり すべて格子は、内の方に、差木 サシキ（栓、俗にサルと云）あり。之を拔き放ちて後、外
の方へ釣り上ぐるものなれば、先づこれ（内の差木を）放たせ給へといへるを、内の女房聞きて、常の事
なれば放つを、宮の「待て」と制し給へるなり。㊁問せらるれば 通美隆云、俗に仰せ付るといふ意也。唯
のたまふといふ意にあらず。重く見るべし ㊁ゐざり 通居退り也。貴人の前を退下するには、立ちて歩
まず、居避るより出でたる詞なり ㊁局あるじ 通初宮仕 ウヒミヤヅカヘ のほどには、古參 コサン の女房の局に寄寓して、其の
指圖を受けて、奉仕する例にて、その局の主長 アンジ の女房なり。㊁あへなきまで 通寵遇の忝さに堪へぬまで。
㊁火たきや 通天皇、皇后、東宮、齋王の御所に限り、夜も篝火を燒きて、衞士の警護に候する小屋なり。
㊁ぢんの御ひをけの 通沈御火桶 和名抄は熱地のたぐひなるべし、通沈は熱地の產、舶來の香木なり。薫
集類抄下に、證類曰、沈ハ置ニ水中一則沈、故云ニ沈香一と有り。これにて造れる火桶也。㊁唐衣ぬきたれ 通
唐衣は晴の装束なれば、一般の婦女は着にくゝて、身につかぬを、さすがに宮中の女房たちは、著馴れて

とあるを千蔭古本によりて下の如く訂せり

しげならず、物いひゑわらふ。いつの世にか、さやうにまじらひならんと思ふさへぞつゝましき。あうよりて三四人(ミタリヨタリ)つどひて、繪など見るもあり。

◎宮に始めて參りたる 【補】初めて奉仕したる頃。按ずるに是れ一條天皇の正暦二年冬十二月の事ならむ。是れより先、元年十月五日以二女御從四位下藤原定子一册爲二中宮一と日本紀略に見ゆ。御年十六、其の翌年清女は初宮仕(ウヒミヤヅカヘ)したるにて、廿三四歳にもや成りぬらむ。◎よる〳〵參り 【補】當時女房の宮仕へするは、禁秘御抄にも見えたる如く、大臣納言などの女ならば、直ちに上臈の格に至れども、其以下は大かた下臈のなみにて、次第に昇進して、中臈にまでは成り得る也。斯くて此の下臈の際(キハ)は、最初夜間のみ御前にも參り、上臈に代りて殿居したる様なり。紫式部日記に、式部の初めて宮仕へしたる時も、「耀やかしきこゝちすれば、晝はなさ〳〵差出でず云々。」更科日記にも、孝標の女の宮仕を勧められて、「まづ一夜參る。…曉にはまかでぬ。…しはすに成りて又參る。上(ウヘ)には時々夜々のぼりて、知らぬ人の中に打ち臥してつゆまどろまれず云々。とあるにても知るべし。此の世の風、女流は特に華美を競へば、一つには服装の及ばぬを、憚り恥づる習ひにて、まづ夜々出勤する例となりけむ。◎これはとあり云々 【春】繪のいはれを仰せきかさるゝ也。◎たかつきに云々 【春】高坏にともしゝ灯也。よの常の灯臺ならで、ひきゝゆゑ髪などもよく見ゆる心也。【補】高坏は、食盤をのする臺なり。之を打返して、廣き盆の方を下にし、臺尻に灯油皿をのせて、便宜の燈臺にしたるにて、女房の局などにては、常するわざ也。病草子の繪卷等に其の樣見ゆ。◎れんじて 【補】堪へ忍びて。◎にほひたる 【補】色映ゆる由なり。◎薄紅梅 【補】中宮の御手の色。◎見しらぬさとびごゝち 【春】内わたりを見習はぬ里心にはとなり。清少の身の事をいふ也。【補】更科日記にも「里びたる

あけちらしたるにの下古本に「雪ふりにけり登花殿の御前は立蔀近くてせばし」とある由千蔭校本に見ゆ

唐衣ぬきたれ春本ぬきたれと有りなれ春本なり

おはしましけれど、驚かるゝまでぞまもり参らする。暁にはとくおりなんとぞいそがるゝ。（中宮の御詞）「かつらきの神もしばし」などおほせらるゝを、いかですぢかひても御らんぜられむとてふしたれば、御格子もまゐらず。女官どもまゐりて、「これはなたせ給へ」といふを、女房のきゝてはなつを、「まて」などおほせらるれば、わらひてかへりぬ。物など問はせのたまはするに、久しうなりぬれば、（中宮の御詞也）「おりまほしうなりぬらん。さははやよさりはとく」と仰せらる。ゐざりかへるやおそきと、あけちらしたるに、雪いとをかし。（后宮の清少をめす詞也）「ひるつかたけふはまゐれ。雪にくもりてあらはにもあるまじ」。などたびたびめせば、この局あるじも「さのみやはこもりゐたらんとする。あへなきまで御まへにゆるされたるは、おぼしめすやうこそあらめ。思ふにたがふはにくきものぞ」と、只いそがしに急がせば、我れにもあらぬこゝちすれど、参るもいとぞ苦しき。火たき屋のうへに降りつみたるもめづらしうをかし。御まへ近くは例のすびつの火こちたくおこして、それにはわざと人もゐず。宮はぢんの御火桶の、なしゑしたるにむかひておはします。上臈御まかなひにさぶらひけるまゝに、ちかくゐたまふ。つぎの間にながすびつにひまなくゐたる人々、唐衣ぬぎたれたるほど、なれやすらかなるを見るもうらやましく、御ふみとりつぎ、たちゐふるまふさまなどのつゝま

取り傳へし侍女なるべし。之を春抄に、拾遺集の作者大和宣旨、三條帝皇后の女房と、同じ人なるべき由いへれど然らず、宣旨と呼ぶ女房、一所に限らざる事を知らざるよりの誤なり。◎うへに ■天皇になり。諸本この三字を脱せり。◎殿上わらは ■殿上童の姿に造りたる人形なり。殿上童のこと上にいへり。◎みづら ■鬢面（ビンヅラ）のことなり。長き髪をわけて、左右の鬢の所にて、綰ねて垂るゝ故なり。是れ童の正装する時の髪のさまなり ◎名かきてたてまつり ■春書に「ともあきらの王」とかきて、うへ（主上）に獻じたるを、喜ばせ給へる也。諸抄皆皇后の事とすれど、さては宮にとかくへし。此の條は村上先帝の御逸話の序に、今の帝の御事思ひ出でてかけるなるべし。

一七〇 （宮に始めて參りたる頃）

宮にはじめてまゐりたるころ、物の恥かしき事かずしらず、涙もおちぬべければ、よるよる參りて三尺の御几帳のうしろにさぶらふに、繪など取り出でて見せさせ給ふを、手もえさし出づまじうわりなし「これはとあり、かれはかゝり」。などのたまはするに、たかつきにまゐらせたるおほとなぶらなれば、髮のすぢなども、なかなか晝よりは顯證に見えてまばゆけれど、ねんじて見などす。いとつめたきころなれば、さし出ださせ給へる御手のわづかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは、かぎりなくめでたしと、見しらぬさとびごこちには、いかゞは。かゝる人こそ世に

のうへにの四字諸本落ちたり千本による

炭櫃、圍爐のこと　禁秘抄下侍の條に、三間、有二炭櫃一四面敷レ疊とあり。下侍は清涼殿の殿上の間より、中庭を隔て、南にあれば、帝殿上に彳み給ひて、下侍の炭櫃より、煙の立つを御覽ぜしならむ。或人云、炭櫃は火桶の角なるをいふならんと、さては蛙の高く飛び上がらねば、容易に入り難かるべし。◎おきにこがるる　闘螢火のもゆる螇を沖にかけ、濤がるに蛙の燒け焦がるゝを聞かせたる也。

一六九（ともあきらの王）

みあれのせんじの、うへに、五寸ばかりなる殿上わらはの、いとをかしげなるをつくりて、みづらゆひ、裝束などうるはしくして、名かきてたてまつらせたりけるに、「ともあきらのおほきみ」とかきたりけるをこそ、いみじうせさせ給ひけれ。

◎みあれ　闘御形。御生と書ける方よろしきにや。山田以文云、賀茂祭に、御阿禮といふこと…考ふるに、美阿禮は祭日に限りての稱なるべし。大神のあれます日は、山城國中の人、國魂の神天降ります日とて御社に參り、皆人葵草をかざせしなり。其の葵を阿禮といふは、神のあれまし地より生ひ出でし故、名づけしなるべし云々。此の說の如く、本祭日の稱なりしが、後に齋院の事にもいへるなり。◎宣旨　闘女房の呼名なり。抄に源氏朝がほの卷なる、齋院の宣旨なるべしと見ゆ。有職問答に、中宮の宣旨、春宮の宣旨、又關白家宣旨の局とて候。それは其關白になられ候時の、宣旨を取り入れたる女房を喚び候　此宣旨を取り傳へたるにあられども、然るべき女房など、自然號し候」とあり。初めて齋院の宣下ありし時、宣旨を

るは、釉薬を施せばにや。美隆云、様器の事未だ確に考へ得ざれども、古書に見えたる様(サマ)を以て考ふるに、土器に錫・銀などをなましかけ、或は薄(ハク)などを押したる物のやうに覚ゆと云々。直按ずるに、空穂物語藏開上の巻に、十ノ宮右大將の所におはして、「これに御酒(ミキ)入れてまゐれとこそ、うち上（帝及母上）はのたまびつれとて、懐中を探し給へば、傍より兼雅が、土器(カハラケ)に歌かけるを見て、「かく墨つきてきたなげなるは。これこそ白けれとて、御机（食卓）なる様器をとりかへて、……若宮様器に人々御注(オンツ)ぎ入れさせ、……こぼさでまゐり給ふ」とあるを見れば、様器を、土器(カハラケ)の盃に代へて、酒盛りたる事と知らる。されば是れ折敷(盆)にても、盤（皿）にてもあらざる事明らかなり。又江家次第十七、東宮御元服の條に、坊司弁ニ備饗饌一…用ニ様器一其色白シとあれば、白き釉薬を加へたる陶器なるべく、赤黒き土器に對して「是れこそ白けれ」とも「其色白」ともかけるなるべし。さて又銀(シロガネ)の様器といへるが、源語その外の書にも見ゆるは、陶(スヱ)ものゝ様器を、後には金屬にても作りたるならむ。後世の品にはあれど、舊攝家に所藏する様器といふ物。予の親しく見しは、壷深き物にて蓋あり。下に皿のやうなる承盤もありて、何れも金屬にて製し、銀の焼付をなしたり。是れ彼の様器を、金屬製にもしかへたる品の、遺りしものと覺えたり。從來一定の説を見ざれば、言長けれども記せり。◎兵衛の藏人　(同)上にもありし女藏人なり。有職問答に、女藏人事、禁中にて下臈女房の所役を勤むる也とあり。名目抄の註に、中臈下臈之命婦抔兼レ之四人也。昔侍名(サムラヒナ)、女藏人左近抔稱せし也。とも見ゆ。兵衛は父の官名をかけて呼べる名なる事、官職知要にて知らる。◎雪月花の時と　(金)問詠。琴詩酒伴皆抛レ我。雪月花時最憶レ君。これ文集にては、樂天の殷協律をおもひて、憶レ君とつくれりしに、今の兵衛藏人は、かやうの折も、我君を思ひ奉るとの心にていへるなるべし。◎すびつ　(補)

一六八　（兵衞藏人の秀句）

村上の先帝（センダイ）の御時、雪のいみじう降りたりけるを、やうきにもらせ給ひて、梅の花をさして、月いとあかきに、「是れに歌よめ。いかゞいふべき」と、兵衞の藏人に給はせたりければ、「雪月花のとき」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。（村上の勅定也）「うたなどよまんはよのつね也。かくをりにあひたる事なんいひがたき」とこそおはせられけれ。

（兵衞藏人也）おなじ人を御供にて、殿上に人さぶらはざりけるほど、たゞずませおはしますに、すびつのけふりのたちければ、「かれは何のけぶりぞ。見てこ」とおほせられければ、見て歸りまゐりて、

（兵衞藏人歌也）わたつうみのおきにこがるゝ物見ればあまのつりしてかへるなりけり。

と奏しけるこそをかしけれ。蛙のとび入りてこがるゝなりけり。

◎やうき　陽様器。湖月抄（源氏宿木の註）に、塗りたるを朱器といひ、白木を楊木といふ。引き入れなりとあり。貞丈雜記に、楊（ヤナギ）の木にて作りたる折敷なるべし。といへるは共に非なり。古書皆様とかけり。眞淵翁、源氏の新釋包宮の註に、公より物の本物を出して、それが樣に作らせらるゝを、樣器といふとあれども、共の質共の製を明らかにせず。細流抄には、盤（サラ）の事なり。陶（スヱモノ）物とあり。河海抄或說に、藥器ともあ

思ひやり諸本やりの二字なし

折に、おぼえなく見ゆる人なりけり「けふの雪をいかにと思ひやりきこえながら、（来たる人の詞也）なでふことにさはりて、其所にくらしつる」などいふ「けふこん人を」（女の答へ也）などやうのすぢをぞいふらんかし。ひるよりありつる事どもをうちはじめ、よろづの事をいひわらひ、わらふださし出でたれど、かたつかたの足はしもながらあるに、かねの音のきこゆるまでになりぬれど、内にもとにも、いふ事どもはあかずぞおぼゆる。あけぐれのほどにかへるとて「雪何の山にみてり」とうちずんじたるは、いとをかしきもの也。女のかぎりしては、さもえ居明かさざらましを、只なるよりはいとをかしう、すきたるありさまなどいひ合せたる。

◎同し心なる 〔補〕同志の女友だち也 ◎おぼえなく 〔補〕覺悟もなく、思ひよらず。◎なでふ事に 〔補〕何といふ事もなきにといふを、略しいへる當時の俗語なり。おほろげといひて、ならぬを略する類ひ、例多し。何といふ要事にもあらぬに防げられてと也。◎けふこん人を 〔參〕拾遺集「山里は雪ふりつみて道もなしけふこむ人を哀とはみん」兼盛のうた也 ◎わらふだ 〔補〕藁や菅など編みて、造れる圓き敷物。之を簾中より簀ノ子に差し出したれど、上りもせず、片足をあげて腰かけゐたり ◎あけぐれ 〔參〕夜明け近つきて、なほ薄ぐらき頃。◎雪何の山にみてり 〔參〕曉入₂梁王之苑₁雪滿₂群山₁。謝觀か白賦の詞、朗詠にあり。梁孝王は漢文帝の御子也 竹苑をひらきて、雪の朝は鄒生枚叟などを召してあそび給ひし事、文選の註にあり。◎只なるよりは 〔補〕雪の夜はまして、風流なる樣の物語し合ふがをかしと也。

也。◎はやなど云々　〔春〕はやく歸り給へと、女に逐ひ拂はるれど也。◎たび〳〵見ありく　〔春〕門守などの、夜行する也。◎らいさう　〔春〕春註に、古語未レ勘とあり。此の外の諸本いづれも註解を闕く。按ずるに、俗言レイ〳〵シクなどいふに當る詞なるべし。鈴木弘恭云、らいさうは、古鈔本にらいさぞに作る、而していはハの筆誤にはあらざるか。さてはこよひらはさぞとよむべし。卽ち今宵等は、然ヤウニゾといふ義也。云々。今宵等といふ詞古くいへりや、覺束なし。◎おやそひぬるは　〔春〕親の守る人は、門守のむつかしきより、猶つゝましくこそあれと也。◎せうとの云々　〔春〕兄人の家にても、兄の心の憎さはさぞあらむ。是も前の誠の親ならぬと、同じからむとなり　◎夜中あかつき云々　〔春〕下の何の宮、内わたりといふへ續けて讀むべし。夜中門の締りを嚴重にも取扱はぬ宮方や、宮中などならば、殿ばらも出で遇ふと也。

一六七　（雪の夕の語らひ）

雪のいとたかくはあらで、うすらかにふりたるなどは、いとこそをかしけれ。又雪のいとたかく降りつみたる夕ぐれより、はしちかうおなじ心なる人二三人(フタリミタリ)ばかり、火桶をなかにするゑて、物がたりなどするほどに、くらうなりぬれど、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いとしろう見えたるに、火ばしして灰などかきすさびて、あはれなるもおかしきも、いひあはするこそをかしけれ。宵も過ぎぬらんとおもふほどに、靴の音の近うきこゆれば、あやしと見出だしたるに、時々かやうなる

一句は、宮仕へ人の兩親のあるはよしといふことの説明なり。父母揃ひゐて、人の出入り繁く、家の裏には家族眷族の談話も聞え、馬の出入る足音騒かしき程ながら、それは咎とはならずとの意なり。春抄に、末の句「とがなし」を「かなし」と落字のある本によりて「賑はしきやうなれど、父母なきは便りなし」と悲しき意に註したれど取らず。◎されど 〔通〕この一語にて、反對の兩親なき宮仕へ人の事に移りいふ也。◎しのびてもあらはれても 〔通〕宮仕へ人を尋ね來る男たちなり。◎おのづから 〔通〕按ずるに、元は「自からとありて「みづから」と讀むべきなるを、かく讀みそこねたるならずや「みづから」とは、消息文ならず、自身に尋ね來て、宮中御退出の事を知らでとも、又此回は何時頃(イツゴロ)宮中へは歸參し給ふぞなど、訪らひたる由なり。◎心かけたる人 〔通〕宮仕女の、心に懸けたる男にはの意。◎いかゞはと門あけ 〔通〕いかゞ聞き知らぬやうにはあらむと、女の方より門をあくる也。◎うたてさわがしう 〔春〕夜中までさわがしと家主などの、心もとなくおもふさま也。是も親なき人の里亭なれば、家守などの心に任せて、つよく守るが佗しき事をいふ也。◎なまふせがしげに思ひ 〔春〕防の字也。彼のとひ來てある人を、防ざいとはしげに、門守のいふ也 ◎今や出ると 〔春〕人出給ひなば、とくさせ、といひつけられし門守などの、客は出で給へるやとのぞきうかゞふを、客の供人のわらひてまねなどする也。◎色に出でていはぬも 〔通〕來訪者の顏色なり。此の家の主從の、客を防がしげに扱ふ冷遇不禮を、顏に出しては難じいはねど、是れに憤りて、以後は必ず來ずならむと也。◎心なき人 〔通〕深く女を思ふ心なき人。◎すくよかなる 〔通〕直よかなる人なり。俗に眞正直といふに同じ。心には思ひながら、顏色にあらはしていはぬ人の反對なり。家主等の門のこと嘆しくいふを聞きて、げにも夜ふけて御門無用心なり。はや〳〵閉ち給へと、挨拶して歸るもありと

此（此客人の供也）の人のともたる者ども、この（門守の也）かく今ぞ出づると、たえずさしのぞきて、けしき見る者どもを笑ふべかめり。まねうちするをきかば、いかにいとどきびしういひとがめん。いと色に出でていはぬも、おもふ心なき人は、必ずきなどやはする。されどすくよかなるは、「夜ふけぬ。御門もあやふかゝなり」などいひていぬるもあり。まことに心ざしことなる人は、「はや」などあまたたびやらはるれど、猶居あかせば、たび〳〵見ありくに、明け（門守が心也）ぬべきけしきをめづらかに思ひて、「いみじき御門を、こよひらいさうとあけひろげて」と聞えごちて、あぢきなく曉にぞさすなる。いかゞにくきを。親そひぬるは、なほこそあれ。ましてまことならぬは、いかに思ふらんとさへつゝましう、せうとのいへなども、けにくきはさぞあらん。夜中あかつきともなく、門いと心がしこくもてなさず、何の宮、内（ウチ）わたり、殿ばらなる人々の、出であひなどして、かうしなどもあげながら、冬の夜をゐあかして、人のいでぬるのちも、見いだしたるこそをかしけれ。有明などは、ましていとをかし。笛などふきて出でぬるを、我れいそぎてもねられず。人のうへなどもいひ、歌などかたりきくまゝに、ねいりぬるこそをかしけれ。

◎宮仕へ人の云々　◎是れより親なき宮仕へ人の、里亭の事をいふ也。◎人しげく出で入り云々　◎この

ゑもみくさゐ、庭などもいとよもぎしげりなどこそせねども、所々すなごの中より、あをき草見え、さびしげなることこそあはれなれ。物かしこげになだらかに修理して、門いたうかため、きはぐしきはいとうたてこそおぼゆれ。

あはれ（釋）例の感歎の詞也。（○）ついぢ（釋）築泥垣の略。塗りたる土塀。（○）みくさゐ（釋）水草のある也（○）なだらかに（釋）見よきなり（○）きはぐしき（釋）際立ちて見ゆるをいふ。

この段流布本とたがふ辭句所々に多し皆千蔭本によりたる也

一六六（宮つかへ人の里なども）

宮づかへ人の里なども、親どもふたりあるはよし。人しげく出でいり、奥のかたにあまたさまぐのこゑぐおほくきこえ、馬のおとして、さわがしきまであれど、とがもなし　されどしのびてもあらはれても、おのづから、「出で給ひにけるを知らで」とも、又「いつかまゐり給ふ」などもいひて、さしのぞきたるもあり。心かけたる人は、いかゞはと門あけなどするを、うたてさわがしうあやふげに、（家主のさま也）夜なかまでなど思ひたるけしきいとにくし。「おほ御門はさしつや」など問ふめれば、「まだ人のおはすれば」など、なまふせがしげに思ひていらふるに、「人出で給ひなばとくさせ（家主のいひつける詞也）」（門守の答也）　このごろはぬす人いと多かり」などいひたる、いとむつかしう、うちきく人だにあり。

おやの家、舅はさらなり、をぢ兄などのすまぬ家、其のさるべき人のなからんは、おのづからむつましう、うちしりたらん受領、又國へ行きていたづらならん、さらずは女院宮ばらなどの屋あまたあるに住みなどして、つかさまち出て後、いつしかよき所尋ね出でて住みたるこそよけれ。

是れより。六位の藏人の思ひよらざるに、五位の叙爵して位田賜はる身分となり、又權ノ守などになりて俄に得意なるさまを書ける也。職原抄に、殿上ノ六位ノ藏人叙位之時、預ㇾ爵者即任ニ權ノ守ニ又例也とあるにても知るべし。㊀板屋せばき家云々 ㊟自分と家屋を營み繕ひ、乘用車など用意する由なり。されど未だ五位のほどなれば、檜皮(ヒハダ)屋にはえ入らず、板屋とかけるもをかし。㊁小檜垣 ㊟檜の薄板を斜に編みたるして、張りたる低き屏をいふ。これも築垣(ツイヂ)とまではゆかぬなり。㊂伊豫簾 ㊟豫州より出づる葦の簾垂なり。帽額の簾といへば、竹の細く削りたるにて、綾絹の縁に、糸總(イトフサ)かくるを、伊豫簾なれば、紫革の細きにて掛けおくなり。㊃事行ひたる ㊟取り繕りを嚴命するをいふ。㊄おやの家云々 ㊟住むべき家假初にて、少し荒れたるやうなるがよき事をいふとて、其のしなじなを、さまざま書きつゞけたり。◎つかさ待ち出てのち ㊟其の家の住べき程の官に至り、身の威勢付きて後に、すむこそよけれと也。

一六五 (女のひとり住む所は)

女のひとりすむ所などは、たゞいたうあれて、ついぢなどもまたからず。池などあ

春本この段な大夫はの段に入れてかけり千蔭校本によりて別の段に改む

の時は、だいぶと濁りて云ふ也。たいうと清みていふ時は、五位の事なり。弘安禮節などにも、五位の事な大夫とかゝれたり。とあり ◎式部太夫 〔箋〕式部丞は相當六位なるな、五位に叙して叙爵したるな式部大夫といふなり。◎左衛門大夫 〔箋〕左衛門大尉は六位也。叙爵して左衛門大夫といふ也。◎史大夫 左右大史は正六位上也。五位になりて史大夫といふべし 〔補〕史は「シ」と音讀にすべし。史は太政官の屬官にて、左右大小史八人あり。さて清女の意にては、同じ大夫といふ中にも、以上の大夫は、殊に榮(ハエ)ありて、好ましき由なるべし。按ずるに、流布本此の次に、六位の藏人云々と續けたるは、寫し誤れるなり。千蔭校本には、この次に、

法師は　　律師　　內供

女は　　內侍のすけ　　內侍

の二項あり。

一六四　（六位藏人の受領になりたる）

六位の藏人などは、おもひかくべき事にもあらずかうぶりえて、何のたいふ、權の守などいふ人の、板屋などせばき家もたりて、また小檜垣(コヒガキ)などあたらしくし、車やどりにくるま引きたて、まぢかく木多くして牛つなぎ、草などかはするこそいとにくけれ。庭いときよげにはき、紫革して伊豫簾かけわたし、布障子はりて住ひたる。よるは「門つよくさせ」など事おこなひたる、いみじうおひさきなく心づきなし。

殊更に紀伊和泉をえりていへるなるべし。直按、今昔物語三十一大藏史生高助が女の壻を選む語に、いみじからむ近江播磨の守の子なりとも、前追(サキ)はざらむ人を、御前達の御當りにはいかで寄せんと云ひて、壻取もせざりける云々と見ゆ。源氏に明石ノ入道良清等も播磨守なりし、紀伊和泉に限らじものを。

一六二（やどりのつかさの）

やどりのつかさのごんのかみは。下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

㊀やどりのつかさの權守　㊎環翠軒、舟橋從三位の職原抄の私抄に云、宿ノ官とは、官ノ外記などの五位したるが、頓て顯職に任じがたきを、外國等にしばし任ず。これは官を宿す義也。云々　㊔夏蔭云、私抄の說よし。猶官職秘抄下卷、諸國權守、近江越前丹波播摩美作備前周防伊豫讃岐爲二參議兼國一此外或爲二宿官一と見ゆ。此の宿官。やどりのつかさなり。

一六三（大夫は）

大夫は。式部大夫。左衞門大夫。史ノ大夫。

㊀大夫　㊎侍の叙爵せしを大夫といふ也。環翠云、八省の丞、左右衞門尉など、五位に成たる時、中務大夫、式部大夫など云也。侍の面目也云々。㊔こゝなる大夫(タイフ)は、淸みてタイウとやうに唱ふべし。貞丈雜記に、大夫を淸みていふと、濁りて云ふに差別あり。左京ノ大夫、修理ノ大夫、大膳ノ大夫、皇后宮ノ大夫、など

等にあり。或說、武藏國には大かた土質わろく、井を堀らむとすれば、土砂壞れて能はぬによる。一ヶ所の名どころにあらずともいふ。◯はしり井は逢坂なるが〔頭〕走りて逢ふと、聞ゆるがをかしき也 ◎山の井さしも淺き〔新〕万葉「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心は我おもはなくに」大和物語には、淺くは人をおもふものかはと有り。陸奥也。◎あすかゐみもひも寒し〔新〕催馬樂「飛鳥井に宿りはすべし陰もよしみもひも寒しみま草もよし」花鳥餘情云、あすかゐのうたの、陰もよしは木陰也。みもひは寒水也。みまくさは馬草也。◯玉の井〔新〕山城の國相樂郡にあり。◎せうしやうのゐ〔新〕少將井と書く、烏丸の東、大炊御門の南と拾芥にあり。◯櫻井〔新〕山城水無瀨の近邊也。待宵の小侍從の舊跡ある所也。◎きさきまちの井〔新〕后町は、常寧殿にありと拾芥に見ゆ。井も有しにや ◎千貫の井〔頭〕諸本註なし。

一六一（受領は）

受領は。紀伊守。和泉。

受領とは、國司卽ち地方官の首席の者を稱す。◯紀伊守〔頭〕抄に云、紀ノ國は南海の上國にして、五畿内に隣る國なれば、此國の受領は規模なる由なり。和泉は五畿内の受領なれば、他の大國の如く、規模なる義なり。但し他の四國は大上國にて、納言參議兼レ之。六位受領の分にあらず。美隆云、源氏物語を按ずるに、はゝき木に、源氏の家禮(ケライ)に紀ノ守あり。夕霧の卷に、夕ぎりの家らいに和泉ノ守あり。夢の浮橋に、薫の家禮に紀ノ守あり。是等唯何となく、心にまかせて書けるにはあらで、此頃紀伊和泉ノ守は、德分も多く、人の望みし國なれば、この源氏ノ君、夕霧、薫などの顧みによりて、良き國の守に成れる由を、知らせんとて、

誤れり。且試樂は神の祭にあらず。◎おもはぬ　圖相思はぬ也。仲よからぬ同胞親族。◎較馬のつゞら折　圖源氏物語、若紫の卷に「唯このつゞら折の下云々とあり。急傾斜の山にて、屈曲したる道。一直線に見ればいと近きを、曲折して行くは遠ければなり。つゞら折とは、此の道、葛蔓の曲りくねりたる樣なるによりて也。◎しはすの云々　圖除夜と元旦とは至つて近けれど、正月十二月の間は遠ければ也。

一五九（遠くて近きもの）

遠くて近きもの。極樂。舟のみち。をとこ女のなか。

◎ごくらく　圖阿彌陀經に、四方過二十万億佛土一有二世界一名曰二極樂一と說き。又阿彌陀佛去レ此不レ遠ともとける心なるべし。◎舟のみち　圖三四十里の道も、風よき時は一日一夜にて行く心にや。

一六〇（井　は）

井は。ほりかねの井。はしりゐは、逢坂なるがをかしきなり。山の井。さしも淺きためしになりはじめけん　あすか井。みもひもさむしとほめたるこそをかしけれ。玉の井。せうしやうの井。櫻井。きさきまちの井。千貫（チヌキ）の井。

名高き井の名を擧げたり。昔古歌によみたる謂ゆる歌枕。又は詞をかしく聞ゆるなどにて、唯詩人の感を書きあらはしたる迄なり。◎堀兼の井　圖武藏國入間郡、堀兼村その地なりとぞ。歌には千載集、貫之集

婚の風は先づ男より女の許へ文を遣はす。女は父母の内諾を得て、返事するを正式とし、數月にわたり、男の方より女の許に往き通ひつゝ、曉に歸りては、文を贈る。後朝の文といふは是れなり。然るに男女相會うて後、意に副はぬ事、また失望する事などあれば、例の行き通ふ事の絕ゆる、これを夜離（ヨカレ）といふ也。それの度重なる時、自然と離緣ともなるにより、常に夜離がちなる聟を、賴もしげなしとはいふ也。◎六位のかしらしろき 㫪若きは末の昇進の賴もあれど、老いたるはたのもしげなき也。㘸この六位は、藏人の六位ならむ。

一五七（經　は）

經は。不斷經。

流布本、この一段を、前文の末につゞけ書けるは誤なり。◎經は云々 㘸不斷經とて、僧して絕えず我が身の爲に、讀經し祈らしむる、是れ功德の最第一なればなり。

一五八（近くてとほきもの）

近くて遠きもの。宮のほとりのまつり。おもはぬはらから親族の中。鞍馬のつゞらをりといふ道。しはすの晦日、む月のついたちのほど。

◎宮のほとり 㘸千蔭本、宮の前とあり。いづれにても聞ゆ。祭典は宮祠の邊にて修すれども、之を受け給ふ神明の御姿は、眼（メ）の前に拜み難ければ也。春日八幡など、宮中にて祭すればとやうに解ける說は、大に

くらきに限るべからず。是萎などをこそいふべけれ。予は繪師の方に從はんとす。繪師は古く畫工司に屬する技術士の職名にて、源氏物語桐壺の卷にも繪師の名見えたり。これが視力を失ひたらば何の用をかせん。㊁ふりぬる 〔註〕古りぬる也。㊂もかうのすの云々 〔註〕諸本落字あり。今千蔭本による。もかうは帽額とて、上品の簾には、上の方に、横長き帛(キレ)を付けたり。是は既に上に註せり、上品の御簾にても、緣(ヘリ)や帽額のきれてなくなりたるは不用の物ぞと也。㊃七尺のかつら 〔註〕長き義髮。㊄ゑびそめのはひかへり 〔註〕蒲萄染。薄紫也 紫は椎の灰をさす物なれば、其の色のさめたるを、灰かへるといふ也。㊅老いくづれ 〔註〕老朽。くつたれは朽折なり。㊆みゝくさ 〔註〕水草 〔註〕しげりて 〔註〕以下を略せるを、書きさしの法といひ來れり。荒廢したる園池の、昔もおもはれてとなり。

但し當時の俗、禁裏守護の士は、兵衛衛門の別なく、すべて皆衛士と稱しけんとの辯もあらむか。然らば日

一五六（たのもしげなきもの）

たのもしげなきもの。心みじかく人忘れがちなる。むこの常によがれがちなる。六位のかしらしろき。そらごとする人の、さすがに人の事なしがほに、大事(ダイジ)うけたる。一番にかつすぐ六。六七八十なる人の、こゝちあしうて日ごろになりぬる。風はやきにほあげたるふね。

㊀心みじかく 〔註〕心ながくの反對。疎忽なる也 ㊁人忘れがちなる 〔註〕これにて一句なり。諸本下に續けてよむは非なり。薄情なる男をいふ。㊂よがれ 〔註〕夜離の字を書く。聟の來ぬ夜のことをいふ。抑當時結

なくなりぬる。七尺のかづらのあかくなりたる。ゑびぞめのおり物の、はひかへりたる。色好みの老いくづをれたる。面白き家の、木だちやけたる。池などはさながらあれど、うき草みくさなどしげりて。

◎昔おぼえて 〔解〕昔は優なりけむと思はれて也。おぼえとは、思はれといふに同じ。◎ふよう 〔補〕千蔭翁古本によりて、ふやうと改訂し、不益と傍書せり。但しふようにて聞ゆ。源氏物語帚木、うつぼ藏開、宇治拾遺などに不用の語見えて、今俗ムダ(空)といふに當れり。◎うげん 〔解〕貞丈雜記に、繧繝の本字は暈綱にて、錦の名なり。暈は日月のかさといふ字なり。錦の文のまはり、同じ色にて、濃き色中色と、薄色とを重ねて三重に織るが、月日の暈の如くなれば」とあり。正しく正倉院御物の暈繝錦は、伊勢氏の説の如くなれど、後には唯、赤地に色々の花形、菱形を綾筋の間に織りたる物なり 今も雛人形の厚疊の縁にのこれり。◎ふし 〔解〕經糸(タテ)の細きが、すり切れて、緯糸(ヌキ)の太きが、顯はれたるをいふ。竹の節に見なしてかくいへり ◎屏風の表 〔解〕唐繪かきたる方をいふ。◎おずりの裳 〔解〕裳には織物染物また重ねたるなど種々あり。裝束圖解にいへり。中に地摺(デズリ)といふは、白地に藍もて、物の模樣を摺りなしたるをいふ。一般には、海浦(カイフ)とて、青海波、磯馴松、貝(カヒ)、海藻(ミモ)などの模樣を摺る也。◎はなかへりたる 〔解〕はなはハナダ(縹)の略。この色、藍に似たればいふ。かへりたるとは、白きに返る心にて、薄くなりたること。◎ゑじ 〔参〕衛士か綺師か。〔補〕千蔭云、衛士なるべし。衛士は内裏の非常を守る者なれば、目くらくては不用なり。直按ずるに、衛士は衛門府に屬する下士にて、能宣の歌にも「御垣守衛士のたく火の」とよめる如く、宮城諸門に篝火を焚きて、警候する者なれど、禁中守護には、外に近衛兵衛の士もありて、衛士には限らじ

はれに、物うくて疎遠になりたると也　◎うちふしやすむ所の　〔〕我のうちふしがむすめ、左京の事た
秀句にいへる也。〔〕秀句のみにもあらず、打臥といふ名の女（ムスメ）なるを譏嘲して嘲弄したるなれば、宣方も
怒りしならむ。◎人のいひふるしたるさまに　〔〕世の人も、此事いひふるすに、それとおなじさまに、清
少の取りなしいひなさるゝと也　〔〕按するに、いひふるしたるさま、諸本かくあり。千蔭本も同様なれど、
こはもと樣とかきて、やうと讀むべきを、誤りてさまと假名がきにしたるならむ。世間にて云ひふるすと、
同じやうに取り扱ふとて怒りたる也　〔〕さるべき事もなきを　〔〕清少の詞には、更に聞とむる事もなきに、
うらみ給ふは、樣子こそあるらめと也　恨み腹立をほとほりと云。〔〕千蔭云、ほとほり（熱）はを濁る也
◎やうこそは　〔〕流布本さまとあり　千蔭本、やうと訓したるはよし。是れも、元は樣とかきたるを、訓
みたがへし也。やうは樣子の意なり。俗言、何か仔細樣子のある事ならむとなり。◎是もかのいはせ給ふ
〔〕清少のなしへていはすると、のぶかたのうらみ給ふ也　◎ものしと思へり　〔〕物憂しより轉じたる語と
いふ　俗言氣ニサハル　癪ニ障ルといふにあたる　◎さてはひとりな云々　〔〕殿上人も笑ふとならば、清
少一人此のうらみおふべきにもあらぬを、あやしくかこち給ふと也。

一五五（むかしおぼえてふようなるもの）

昔おぼえてふようなるもの。うげんべりのたゝみのふりて、ふし出できたる。からゑの屏風の、おもてそこなはれたる　藤のかゝりたる松のかれたる　ぢすりの裳のはなかへりたる　ゑしのめくらき。几帳のかたびらのふりぬる。もかうのすの、へり

ゑし｜寛輔本ゑ師とあり

やうこそは千本による諸本これもさまとあり

もなきを、ほとほり出で給ふ、やうこそはあらめ」とて花やかに笑ふに、「是れもかのいはせ給ふならん」。とて、いとものしとおもへり「更に（清少のことはせ）さやうの事をなんいひ侍らぬ。人のいふだににくきものを」といひて、ひきいりにしかば、後にも猶「人に（宣方のうらみ）はぢ（給ふことはせ）がましき事云ひつげたりと恨みて、殿上人のわらふとていひ出でたるなめり」との給へば、「（清少の詞）さてはひとりをうらみ給ふべくもあらざめるに、あやし」などいへば、その後はたえてやみ給ひにけり。

◎左大将の女御　(春)公季公の御女、一條院の女御なり　(通)左大将の御女の女御といふべきを略せり。元信云、「左大将の女御」といふは例あり。醍醐天皇の女御善子には、三條右大臣定方公の御女なるを、大和物語に、故式部卿の宮、三條の御息所云々。又先帝の御時に、右大臣の女御、うへの御局にまうのぼり云々」とある其の一例なり。◎うちふし　[illegible]直按するに、大鏡兼家の傳に其の頃よきかんなぎ侍りき。賀茂の若宮のつかせ給ふとて、臥してのみ物を申しゝかば、「うちふしの巫（ミコ）」とぞ、世の人つけて侍りし……近く召しよするに、いふがひなき程の者にもあらで、御許（オモト）ほどの際（キハ）にてぞ有りける」と見え、今昔物語巻卅一にも同じ趣を記せり。此の「打臥」の渾號（アダナ）、世に知られたるからに、「打臥といふ者の女」とは、殊更にかけるならむ。◎左京　[illegible]父を左京大夫何某といへるより、其の官名を稱しけむ。打臥といはれし婦は、若き時左京を生み、後男に別れて賀茂の巫女には成りしなるべし。かゝる例、當時は珍らしき事ならず。◎御とのゐ　宿直也。職へしばしば殿居に參るべきをと也。◎さるべきさまに云々　(春)清少などのあへしらひ給

ふるしたる|さまに|元は樣にとかきてやうにとよむへきを誤れるならん

とがめ千本による

あらんとの心也。前漢の朱買臣が妻、買臣か貧しきを疎みて、去らん事を求めしに、買臣笑曰、我年五十當ニ富貴ー、今已四十餘矣、女苦日久、待ニ我富貴ー、報ニ女功ーと教へいさめし事也、前漢書六十四に、朱買臣が傳あり。其の事を云ふなり（◎四十九（頭）岡本氏存疑に、九はよの誤りか。四十九と書きたる事、いかゞといへり。

一五四（うちふし）

弘徽殿とは閑院の左大將の女御をぞきこゆる、其の御かたに、うちふしといふもののむすめ、左京といひてさぶらひけるを、源中將かたらひてなんと人々わらふころ、宮の職におはしまいしにまゐりて、「時々（宮方の詞）は御とのゐなどつかまつるべけれど、さるべきさまに女房などもてなし給はねば、いと宮づかへおろかにさぶらふ。とのゐ所をだに給はりたらば、いみじうまめにさぶらひなん」などいひゐ給ひつれば、人々（女房達の）げに（あへしらひ也）などいらふるほどに、「まことに、人はうちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるあたりにはしげく參りたまふなるものを」とさしいらへたりとて、「すべて（宮方の詞也）ものきこえじ。方人（カタウド）とたのみきこゆれば、人のいひふるしたるさまに取りなし給ふ」など、いみじうまめだちてうらみ給ふ、「あな（清少のことば也）あやし。いかなる事をかきこえつる。更に聞きとがめ給ふ事なし」などいふ。かたはらなる人をひきゆるがせば、「さるべきこと

古廟を過ぎしにと讀むべし｜諸本過ぎにしとよめるは非也

かたはいみじういはれにたりといふめるは」とわらはせ給ひしこそ、ものぐるほしかりける君かなと覺えしか。

◎宰相になり給ひし頃　〔補〕齊信卿參議に任ぜられて、是れ迄の如く、中宮の御方へしば〳〵參仕する事、なくなりし頃をいふ。◎蕭會稽の云々　〔春〕朗詠云、蕭會稽之過二古廟一、託二締異代之交一、是朝綱卿の交友の序の文也。會稽の太守蕭氏喚の季札が賢をしたひて其廟に行あそびし事也。〔補〕梁の會稽の長吏蕭允、字は叔佐、少くして名を知らる。會稽郡の長となり、延陵なる季札の古廟に遊び、其の賢なるを憶ひ、供物を薦めて異代の交を結びたりといふ。此の事を大江朝綱の作りし句なり。齊信の外に、誰れかこの句をうまく吟ずる者あらむと、天皇の御前にて清少の噂せし也。◎しばし成らでも　〔補〕今暫くは、參議に成らで、元の職にて伺候せよとなり。◎さなんいふ　〔補〕清少の、さやうに申す故とて、參議に昇進の沙汰、止むべきかと御戲れなり。◎ゆゑだち　〔春〕故々しく由めきありく也。◎いまだ三十のごに云々　〔補〕惟中の旁註に、本朝文粹、見二毛源英明。吾年三十五、未レ覺二形體衰一、（中略）顏回周賢者、未レ逮二三十期一、潘岳晉名士、早著二秋興詞一、彼皆少ン於レ吾、（後略）と見えたり。之を誦するに、三十ノ期といふ所の節調、餘人に似ずと賞翫せし也　◎陣につき　〔補〕近衞の將官、禁中に勤番する所を陣ノ座とて、左近は日華門、右近は月華門の内にありこの陣ノ座に著くことなり。◎かうなむいふ　〔補〕清少が、斯くいふとて、宣方の齊信に敎を乞ふ也。◎そこ　〔補〕春抄に「足下」と註したるは非ず。其處なり。三十ノ期といふ所をいふなり。◎右近のさうくわん　〔補〕佐官の音便。近衞府にては、將曹をサウクワンといふ。◎たゝう紙　〔補〕帖みて、懷中する紙　◎其の期は過ぎぬらん朱買臣がめを　〔春〕是れ宣方の年齡をたはふれていふ詞也。三十歲は過て四十餘、五十歲にも

いそぎたる七夕かな

わきに」諸本わきてとあるを千本よりて訂す

「三十のごといふ所なん、すべていみじうあいぎやうづきたりし」などいへば、ねたがりて、わらひありくに、陣につきたまへりけるを、わきに呼び出でて、「かうなんいふ。猶そこをしへ給へ」といひければ、わらひてをしへけるもしらぬに、つぼねのもとにきて、いみじくよく似せてよむに、あやしくて、「こはたそ」と問へば、ゑみごゑになりて、「いみじき事きこえん。かう〳〵、きのふ陣につきたりしに、とひきゝたるに、まづ似たるななり。誰れぞとにくからぬけしきにて問ひ給へれば」といふも、わざとさならひ給ひけんがをかしければ、これだにきけば出でて物などいふを、「宰相の中將の德見る事、その方にむかひてをかむべし」などいふ。しもにありながら、上になどいはするに、これをうちいづれは、「誠はあり」などいふ。おまへにかくなど申せば、わらはせ給ふ。内の御物忌なる日、右近のさうくわんみつなにとかやいふものして、たゝうがみにかきておこせたるを見れば、きんせんとするを、けふは御ものいみにてなん、三十のごにおよばずはいかゞ」といひたれば、返りごとに、其の期は過ぎぬらん。朱買臣がめををしへけん年にはしも」と書いてやりたりしを、又ねたがりて、うへの御前にも奏しければ、宮の御かたにわたらせたまひて、いかでかゝる事はしりしぞ。四十九なりける年にこそ、さはいましめけれ」とて、のぶ

又云おしこぼちのほどとは終局に近つくを云ふ

似るへく諸本わろくとあり千本による

しに、中村秋香翁「これら碁にいふ語をかりて、隱語とする也。圖碁式に「こぼつにも、ささの石をこぼちて、おしやると云々」是れらにて謂ふべしといはれき。さて勝敗先づ定り、局を終へずして止むるなり。「あへなく近うなりぬる」とあれば、けちさすよりも切迫なり。◎さだめなくや　(圖)又云、翁は、碁にいふ語にて、定目也といはれき。直云、以上の解說によりて、久しく釋然たらざりし事の、明瞭になりたるは悅ばし。是れ全く千蔭美隆秋香元信諸翁の勞きと謝し思ふべきなり。◎此の君と心得て　(春)齊信と清少ばかり心得てなり。◎我れも知りにけり　(春)宣方の心なり。清少に知られんと也。◎ひとしご　(圖)等し碁。同じ強さのほどをいふ。なおぼしわきそは、齊信と我れとを、差別し給ふなとなり。◎定めなくや　(春)清少の答なり。女のさやうに人になびかば、不定の者にならむと也。(圖)心の定まらぬを定目にかけていふ也。

宰相になり給ひしころ、うへ(一條院)のおまへにて、「詩(清少ことば也)をいとをかしうずんじ侍りしものを、蕭會稽の古廟を過ぎしになども、誰れかいひ侍らんとする。しばしは成らでもさぶらへかし。くちをしきに」など申ししかば、いみじうわらはせ給ひて、「さなんいふとてなさじかし」など仰せられしもをかし。されどなり給ひにしかば、誠にさうざうしかりしに、源中將おとらずと思ひて、ゆゑだちありくに、宰相中將の御うへをいひ出でて、「いま(清少詞也)だ三十の期におよばずといふ詩を、こと人には似ずをかしう誦し給ふ」などいへば、「など(宣方の詞)かそれにおとらん　まさりてこそせめ」とてよむに、「さらに、似るべくもあらず」といへば、「わび(宣方の詞)しの事や。いかであれがやうにすんぜん」などの給ふ。

いそぎたる七夕かな

直云本文に男はてうけんとあるは男には警戒すべしの意なり

給ひし、猶過ぎたる事忘れぬ人はいとをかし。

(補)前の文の末節より右文の始へかけて、流布の諸本は皆數行にわたる脱文ありしを、先哲誰れも心付かざりき。まして我等後學は唯解し難き事を歎きゐたる也　然るに千蔭翁はやく古本に校べて、本文の如く補正せられたるいと忝し。其の中に「人と物いふを碁になして云々、手ゆるし、けちさしつ」の語も見えたり。之に因りて此の條は、圍碁の術語を假りて互に諧戲する事と悟り、其の方面を突かんと心掛けたるは、偏に翁の恩といふべし。なほ「手をゆるす」といふ詞に就いて、春註に源氏竹川の卷「あはれとて手をゆなせかしいき死を君に任する我が身とならば。是れ碁に寄せしなり」と記し、又岩崎氏も「碁に手ゆるしといふは、我れよりはよき際（キハ）の者、定先より以下に石をおかするをいふ由、圍碁口傳に見えたりといへり。是等の註解にも促されて早速群書類聚第十二輯遊戲の部を引き出で、圍碁口傳圍碁式なども披き見て益を請くる所ありき。然れども千蔭翁の校補岩崎氏の注意は、可惜（アタラ）世上に廣く知られざりしに、武藤氏は明治三十九年考異を著し、後又四十四年更に通釋を發行して、一々解説せられたり。次々に掲げて示さむ。

◎手ゆるし　(補)武藤氏云、源氏竹川に云々、圍碁口傳云々、此の手ゆるしは、心やすく敵に手をゆるす事なれば、近う語らふに當れり。◎けちさしつ　(補)又云、源氏空蟬に、「碁うちはてゝ、けちさすわたり」とあり。湖月抄に、(孟)闕碁の結（ケチ）なり。又(箋)闕はだめさす也。結は圍むるなり」とあり。だめさせば、勝負直に知らるゝ故、近う語らふにあたれり。◎てうけん　(補)又云、圍碁口傳、手受、相打法といふ條に、「手受けては、手勢を便りとして、いよ〳〵おうせを取れば、早小物をすてゝ、危きを固めよ云々」とあれば、警戒するをいふ。◎おしこぼち　(補)又云、前のは圍碁の事と考へつれど、おしこぼちは、考へえざり

圏點を附したる數文字は流布本になきを千蔭翁古本に校べて補へり武藤氏考異にも亦下の如くあり

給へば、殿上人のやうに、中宮の御かたへもおはせぬを、いかで其の七夕の比にも、見付て此事をいはんと也。◎其の夜の事など云々 〔春〕三月卅日の夜の事をいひ出したらば、露は別れのと、七夕の詩を吟じて笑はれたる事を思ひ出でん。不意に「今曉こそ、露は別れのと吟じ給へ」と告げたらば、ハテ不思議ナと、頭を傾けて不審に思はん。其の時こそ、當夜の時節外れの吟詠の事を、打出でんとせしに、聊も不覺の事なく、應對せられたりと也。◎いつしか 〔春〕早くの意。いつか申出でんとなり。◎我心ながらすき〴〵しと 〔春〕斉信の覺給はぬ事など、いひ出んも、我が心ながら物ずきなるわざと、思案せしにとなり。◎もろともにねたがり 〔春〕宣方の事也。斉信卿と共に、清少にとがめられ、ねたがりし事也。◎げに〳〵と笑ふめるわろし 〔春〕此の一句、諸本に落ちたり。千蔭校本による。

人と物いふことを碁になして、近う語らひなどしつるをば、「手ゆるしてけり」「けちさしつ」などいひ、「をとこはてうけん」などいふことを、人にはしらせず、此の君と心えていふを、「なにぞ〳〵」と、源中將はそひつきてとへどいはねば、かの君に「猶是れのたまへ」とうらみられて、よき中なればきかせてけり。あへなく、近うなりぬるをば、「おしこぼちのほどぞ」などいふに、我れもしりにけりと、いつしかしれんとて、わざとよび出でて「碁盤侍りや、まろもうたんと思ふはいかゞ。手はゆるし給はんや。頭ノ中將とひとしごなり。なおぼしわきそ」といふに、「さいみあらば、さだめなくや」といらへしを かの君に語り聞えければ、うれしくいひたると悦び

げに〳〵以下の一句干陸本による

いはんとてあるに、つゆおぼめかで、いらへ給へりしかば、まことにいみじうをかしかりき。月ごろいつしかとおもひ侍りしだに、わが心ながらすき〴〵しとおぼえしに、いかでさはた思ひまうけたるやうにの給ひけん。もろともにねたがりいひし中將は、思ひもよらでゐたるに、「有りし曉の詞いましめらるゝは、知らぬか」との給ふにぞ、げに〳〵と笑ふめる。わろしかし。

◎此の三月三十日　(春)彼の人間ノ四月なといへる日の事なるべし。◎一の日　(春)弄花抄云。弘徽殿の東にわたり廊あり。それな細殿といふ。ほそどのへ出る所に戸三有り。南の第三にあたるくるるさしたる戸也。◎すべりうせ　(春)殿上人の退出せし也。◎頭ノ中將源中將　(春)前にいへる齊信と宣方となるべし。◎露は別のなみだ　(春)菅家文草五云、七月七日代ニ牛女ニ惜ㇾ曉　露應ニ別淚ニ珠空落、雲是殘粧髻未ㇾ成、此句朗詠にもあり、◎いそぎたる七夕　(春)三月三十日に、七夕の詩なとなへ給へばなり。◎曉の別れの云々　(補)七夕には關心もなく、唯別れの事ばかり吟じたるにと也。◎葛城の神　(春)拾遺「岩橋のよるの契も絕ぬべしあくる詫しき葛城の神」(補)この故事、上(鳥のそら音の條)に註しつ。◎ずちなき　(補)術なきなり。せん方なしの意。諸本すぢ(筋)なしとあるはたがへり。◎にげておはしにしな　(補)諸本、わけてとあるについて、春註に前に露は別のと吟じ給ひし其の露な分て齊信のかへり給ふ也といへる、考へ過ぎたり。干陸本逃げてにてよく聞ゆるなや。◎此のことないひ出でばや　(春)露は別れの吟の事な也。◎宰相になり給ひ　(春)齊信長德二年四月廿四日任ニ參議ニ、(補)宰相に參議の唐名なり。◎いかでかは其ほどに　(春)上達部に齊信の成

[illegible]と清少と二人の間にのみ了解したることにて、他人に[illegible]ことゝも心得ざりし也。

にげて諸本わけてとあれど千本による

一五三（いそぎたる七夕かな）

此の三月（ヤヨヒ）三十日（ツゴモリ）、ほそどのの一（イチ）の口（クチ）に、殿上人あまた立てりしを、やう〳〵すべりうせなどして、たゞ頭ノ中將源中將六位ひとりのこりて、よろづの事いひ、經よみ歌うたひなどするに、「明けはてぬなり、歸りなん」とて、「露は別（ワカレ）のなみだなるべし」といふことを、頭ノ中將うち出だし給へれば、源中將もろともに、いとをかしうずんじたるに、「いそぎたる七夕かな」（清少のことば也）といふを、いみじうねたがりて、「曉（宰相ノ詞也）のわかれのすぢをふとおぼえつるまゝにいひて、わびしうもあるかな。すべて此のわたりにては、かゝる事思ひまはさずいふはくちをしきぞかし」などいひて、「あまりあかくなりにしかば、葛城の神今ぞずちなき」とて、にげておはしにしを、七夕のをり、此の事をいひいでばやと思ひしかど、宰相になり給ひにしかば、必しもいかでかは其のほどに見付けなどもせん。文かきて、とのもづかさしてやらむなど思ひしほどに、七日にまゐり給へりしかば、うれしくて、其の夜の事など云ひ出でば心もぞ得給ふ、すゞろにふと云ひたらば、あやしなどやうちかたぶき給はん、さらばそれには有りし事

たゞのぶの四字は後人の傍に書きおきたるが本文に入りしならむ

事な〔と〕こ、詩句めかして誦せしならずや。(一)かたへ涼しからぬ風の　〔春〕六月より初秋まで、こゝに皇宮のおはせしにや。古今ニ「夏と秋と行かふ空の通路はかたへ涼しきかぜやふくらん。」此のうたなうけて、殘暑な云ふなり。◎七夕まつり　〔春〕八日に還御の前の七夕也。◎こゝにては　〔磐〕朝所にては也。

一五二（人間の四月）

宰相ノ中將たゞのぶ、宣方の中將とまゐり給へるに、人々出でて物などいふに、ついでもなく、(一)「あすはいかなる詩をか」といふに、いさゝかおもひめぐらしとゞこほりもなく、(二)「人間の四月をこそは」といらへ給へる、いみじうをかしくこそ。過ぎたる事なれど、心えていふはをかしき中にも、女房などこそさやうの物わすれはせね。男はさしもあらず。よみたるうたをだに、なまおぼえなるを、誠にをかし。内なる人も外なる人も、心えずとおもひたるぞことわりなるや。

(一)宰相中將　〔春〕齋信。長德二年四月廿四日參議、恒德公の三男。(二)宣方　〔春〕六條左大臣重信公息。◎あすはいかなる詩なか　〔補〕吟誦し給ふぞと、不意に清少の問へる也。(三)人間の四月な　〔春〕白氏文集十六云、大林寺挑花、人間四月芳菲盡、山寺桃花始盛開、長恨春歸無二覓處一、不レ知轉入二此中一來、云々。此の詩こそはと也。三月廿日に、あすはいかなる詩なかといへばなるべし。◎過ぎたることな　〔補〕過去の事な、思ひ出でて言ふだに面白きにとなり。(四)内なる人も外なる人も　〔補〕内は簾の内の女房。外は簾外の宣方等なり。齊

に虫の聲などはきこえたり。八日にぞかへらせ給へれば、七夕まつりこゝにては、れいよりもちかう見ゆるは、ほどのせばければなめり。

◎過ぐしたる人々 補年たけたる上臈なり。◎左衛門の陣 補千蔭本かくあるに從ふ。流布本右近の陣とあれど、それは月華門とて、皇宮の內門。女房の遊行すべき所にならず。さて左衛門の陣とは、其の役所をいふに非ずして、守衛する陣をいへるなり。內藤廣前の撰なる內裏圖にも、建春門の所に、左衛門ノ陣と註せり。建春門は、朝所の北方、一筋の道つゞきにて、程遠からねば、夜にまぎれて往き見たる也。但し「いきて」にて句を切るべし。いきてみたりなどしての意。按ずるに、此の句の下、脫字あるにあらずや。◎たはぶれさわぎ 補荒れたる朝所の、人も居らぬ所へ、宿りたる珍らしさに、若き女房たち、何とはなく笑ひ騷ぎたちし也。◎かうはせぬ事云々 補以下大人しき上臈の、心苦しく思ふ由也。◎上官 補政官の略。前にあり。◎しやうじ 補床子。腰掛のこと。諸本、障子とあるわろし。◎つき集り 補巣に蜂の付きゐたる也。◎日每に參り 補中宮の御假寓へも、殿上人の每日立ち寄り、伺候する也。春註の御宿直といふ迄はあらじ。◎あきばかりにや 補千蔭校本には、古本によりて「あにはかりきや」に改む從ふべし。猶次にいふを見て心得られよ。◎やかうのには 補傍註万抄に野郊ノ場と註したるに從ひ難し。濱臣翁の按に、やかうは野干（狐の一名）の音便かといへる面白し。直按ずるに、太平御覽に百歲ノ狐爲ニ美女ニと見え、其の外、狐能爲ニ妖怪ニ化爲レ女などあるより、本邦の書にも、靈異記水鏡に野干の人妻に成りし事、又今昔物語にも、狐の女形に化けたる談を載す。されば當時美女を狐の化身など戲れて言ひけむからに、今女房等の群れゐるを、上達部の戲れて、「豈量りきや。太政官の地の斯くも野干の棲所とならむ

左衛門の陣 諸本右近とあれと千本による

〔あきばかりにや千本改訂せる所あり註を見よ〕

職也云々。(頭)漏刻博士の事にあらず、朝所の北隣に陰陽寮あり其の内に漏刻博士居て一時毎に鼓を打ち、四十八刻に鐘を打たしむ。其の司の事をいふ也。◎かねの音 (遺)漏刻博士の命をうけて守辰丁（役名）の打つ鐘の音なり。◎はしより (釋)千蔭校本による。はしは階なり。廿餘人の女房たちが、梯子(ハシゴ)により、高き屋（樓）に昇りたる也。諸本、はしり寄りとあるは非なり。走り行くべき事にもあらざるをや。◎これより。(解)朝所より ◎薄鈍(ウスニビ) (頭)長炊の墨染色。(一)單重 (頭)冬には五衣などにてあるべき襲袿(カサネウチギ)を、夏は單重(ヒトヘカサネ)といふにする也 單を二枚重ねて、端をひねりたる服。裝束圖解に精説しおけり。◎おしあげられたる人 (解)若くても、上﨟は輕々しく樓へものぼらぬなり。

日暮れて、くらまぎれにぞ、過ぐしたる人々皆たちまじりて、左衛門の陣へ物見にいきて、たはぶれさわぎ笑ふもあめりしを、かうはせぬ事なり。上達部のつき給ひしなどに、女房どものぼり、上官などのゐるしやうじを、皆うちたふしそこなひたりなど、くるしがる者もあれど、きゝもいれず。屋のいとふるくて瓦葺なればにやあらん。暑さのよにしらねば、みすの外によるも臥したるに、ふるき所なれば蜈蚣(ムカデ)といふもの、日ひと日おちかゝり、蜂のすのおほきにて、つきあつまりたるなどぞいとおそろしき。殿上人日ごとにまゐり、夜もゐあかして、物いふをきゝて、「あきばかりにや、太政官の地の今やかうのにはとならん事を」と、ずッじ出でたりしこそをかしかりしか。秋になりたれど、かたへ涼しからぬ風の、所がらなめり。さすが

諸本この一語を脱す

のぼりたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、そらよりおりたるにやとぞ見ゆる。同じわかさなれど、おしあげられたる人はえまじらで、うらやましげに見おげたるもをかし。

◎故殿の御服の頃　(補)中宮の御父故關白道隆公、薨後一周年に滿たざる頃。服は墨染の凶衣を著たる間をいふ。服はブクと濁りてよむべし。◎おほはらへ(補)神祇令に、凡六月十二月晦日大祓云々。百官男女聚二祓所一、中臣宣二祓詞一卜部爲二解除一とあり、諸人の知らず識らずの間に穢に觸れたるを、祓ひ淸むる儀なり。◎宮の出でさせ給ふ　(補)晦日大祓の場所へ、向はせ給ふに、職の御曹子よりは、此の方角あしとて、前以て御方たがへの爲に、職を出て給ひて、一時太政官廳へ移り給へる也。方違への事は上に委しく註せり。◎官のつかさ　(補)太政官ノ廳。◎あいたん所　(補)太政官中の朝所。玉かつまに、アシタを音便に、アイタンとはいふなるべしと記せり。按ずるに、太政官式に、參議以上著二朝食一處とあるによりて、一般に食事所と說けるはさることながら、元は朝政所にて、早く參朝せし者、此處にて食事をもしたるなり。續古事談に云、昔平城天皇の御時までは、此の國にも朝まつりごとし給ひけり。其の儀式未だほの〴〵の程に、主上出でて南面におはします。群臣百寮各座に揖す。……中文多くして、殊の外に日たけぬれば、やがて其の座にて供御を參らす。諸卿御膳をおろして各これを食ふ云々。かゝれば本(モト)は朝政所の朝なり。朝食の場所といへるは末なり。◎萱草　(補)和名抄、和須禮久佐とあり。◎時つかさ　(春)禁中の漏剋博士の事也。百寮訓要云、漏剋博士は、漏をつかさどる。晝夜の時を伺ふ也。漏水のうつるを守りて、時を正しく知る

入れられたるにや云々。是れいとよき心付なり。但し二按のうち、後の方猶まさらむ、加茂季鷹は、すゑの二字衍か。上の行の、明くるまつとある、まつの誤つて、こゝに入れるなるべしといへるは、暗合ならむ、蒲臣のまつは、またたかきひがめたる也と説けるは徒労のみ。

一五一 (官のつかさのあいたところ)

故殿の御服(ブク)のころ、六月のつごもりの日、おほはらへといふ事にて宮の出でさせ給ふべきを、職の御曹子は方あしとて、官のつかさのあいたん所にわたらせ給へり。其の夜はさばかりあつくわりなき闇(ヤミ)にて、何ともおぼえず。せばくおぼつかなくて明(アカ)しつ。つとめて見れば、屋のさまも瓦葺にて、唐めきさまことなり。例のやうに格子などもなく、只めぐりにみすばかりをぞかけたる、なか／＼めづらしうをかし。女房庭におりなどしてあそぶ。前栽には萱草といふ草を、ませゆひていとおほく栽ゑたりける、花のきはやかにかさなりて咲きたる、うべ／＼しき所のせんざいにはよし。時づかさなどは、唯かたはらにて、かねの音も例には似ずきこゆるをゆかしがりて、わかき人々二十餘人ばかり、そなたにゆきて、はしより、高きやにのぼりたるを、これより見あぐれば、あるかぎり薄鈍の裳唐衣同じ色の單重(ヒトヘガサネ)、紅の袴どもをきて

おほはらへ　春本御おはらへとあり

何ともおぼえず　からめき　千本による

はしより　諸本はしりよりとあり千本による

あるかぎり

や又とあれどこれも同上

しよせたてるに、とみにも乘らで、待たするもいと心もとなく、うちすてゝもいぬべきこゝちぞする　とみにいりずみおこすもいと心もとなし。人の歌の返しとくすべきを、えよみえぬほどいと心もとなし。けさう人などはさしもいそぐまじけれど、おのづから又さるべき折もあり。又まして女も男も、たゞにいひかはすほどは、ときのみこそはと思ふほどに、あいなくひがごとも出でくるぞかし。又こゝちあしく物おそろしきほど、夜の明くるまつこそいみじう心もとなけれ。まつはぐろめのひるほども心もとなし。

◎まづわがさるべき所へ　〔補〕家の主人、夫などの、先づ其の車に乘りて往くとて也。◎さなんなり　〔補〕それなる也の意。大路を行く車の音なきゝて、我が車の還りしよと思ふこと。◎事はなりぬらむ　〔補〕行幸にても、祭の神輿などにても、今渡御ならむとするをいふ。○後（ノチ）のこと　〔春〕胞衣のとゞこほる也。〔補〕後產ともいへば、後とはその略語か。○もろともに云々　〔春〕同車すべき人を誘ひにゆきし也。○いりすみ　〔春〕煎炭也。急に炭おこすに、おこりかぬる程の心もとなき也。〔補〕和訓栞に、濕（シメ）りたる炒り取りし炭にやとあり。◎けさう人云々　〔春〕懸想人への返歌は、わざと物おもはせて、遲くすべければ、さもいそぐまじけれど、又自然急くべき折もありと也。○たゞにいひ交す　〔補〕懸想文ならで、唯の交際なり。○まつはぐろめの云云　〔補〕千蔭云、「齒黑めの干る、待つほども」と有りしを、寫し誤れるか。又は「ひるほどもと、ものの字にて聞ゆれば、まつの詞はなかりしを、わきの「夜の明くるまつ」といへるが、誤りて次の行（クダリ）にも、書き

さなんなり春本さなりけるとあれと千本によりて改む

物見がてら春本物見に

しもと 〔季〕警固の白杖を持て來る也 〔補〕濱臣云、たゞけいごの笞(シモト)にはあらで、祭はてたるあとより、使の罪などへ引きゆく罪人を、ひき來れるけいごのしもと也 祭のけいごにはあらず。されば、やりよするといひたるも、罪人をいふなるべし云々。直按するに、此の說面白けれど、猶愚考には、物見におくれて、出でたるに、折から祭のわたる先拂ひすとて、撿非違使の役人の出で來たるが、其のもてる白杖を見付けて我が乘る車を、物見るに好(コ)き所へ近く遣り寄するも、心もとなく思ひ、早く車より降りても走り往きたく思ふ由ならむ、されば「近くやりよする」といふ本文に、春抄の「物見の棧敷近く、車をよする也」とある註は取らず。又濱臣の、罪人をやり寄するといふも、鑿說ならずや。◎知られじとおもふ人あるに 〔全〕我ある事を、かくさんとおもふ人の來たる時、我は隱れ居て、前なる人に我こゝにあらぬ由を敎へていはせたる也 ◎いつしかと云々 〔全〕早く誕生あれと待ちし嬰兒の、やう〳〵五十(イカ)日百日(モヽカ)に成りたる後の事。ⓒそれはさるもの 〔補〕春本われはとあれど、古本素本抄本、「それ」とあるによる。聞き所にては勿論の意。◎などてかは 〔補〕この下、すげ得ざるべきの略。ⓒにくささへ 〔補〕心もとなきのみならずと也。

何事にもあれ、いそぎて物へゆくをり、まづわがさるべき所へゆくとて、只今おこせんとて、往ぬる車まつほどこそ心もとなけれ。おほぢいきけるを、さなんなりとよろこびたれば、外(ホカ)ざまにいぬるいとくちをし。まして物見に出でんとてあるに、(是も車まつほどの事也)事はなりぬらんなどいふを、きくこそわびしけれ。子うみける人の後のこと久しき。物見がてら御寺まうでなどに、もろともにあるべき人を、のせにいきたるを、車さ

物見におそく出でて諸本いそぎとあれど千蔭本によりて訂正せり

。それはさるもの千本抄本等による

ほど過ぐるまでさるけしきのなき。遠き所より思ふ人の文をえて、かたくふんじたる續飯(ソクヒ)など、はなちあくる心もとなし。もの見におそく出でて、事なりにけりとて白きしもとなど見付けたるに、近くやりよするほど、わびしう、おりてもいぬべきこゝちこそすれ。知られじと思ふ人のあるに、まへなる人に敎へて物いはせたる。いつしかとまち出でたるちごの、いかもゝかなどのほどになりたる行く末、いと心もとなし。とみの物ぬふに、くらき折、針に糸すぐる。されどそれはさるものにて、ありぬべき所をとらへて、人にすげさするに、それもいそけばにやあらん。とみにもえさしいれぬを「いで只なすげそ」といへど、さすがになどてかはと思ひがほにえさらぬは、にくささへそひぬ。

◎心もとなき [illegible]雅言譯解にマチドホナとあり 按ずるに、不安心なる意もあるにや。眞頼云、心に默(モダ)しなきより出でたる語にて、俗にジツトシテヰラレヌこと也。◎とみの物 [illegible]急きの品。とみは頓の字音語。◎ふんじ [illegible]封じの音便。續飯は飯糊。◎物見に 〔[illegible]〕祭、行幸等也。[illegible]物、見にとよむべし。◎ゐいり [illegible]諸本居入りの意にて、棧敷の内に入り居ることゝすれど、美隆にゐはりか。九の巻(春本の也)にゐはり立ち上りと見ゆることと云へり。從ふべし。居張りにて、棧敷や車などの內より、居張り延び上りて、見るべき物の來る方を見守るなり。居入りにては待つ心切ならぬなり。◎事なりにけりとて 〔[illegible]〕祭などのわたる時節に成たるとて也 源氏葵卷に、物も見で歸らんとし給へど、事なりぬといへば云々おなじ心也。◎白き

なく其の事のみうけおこなふをいふ。其の堂を三昧堂といふ也、〔通〕惟中の旁註に云、遠法師云、稱三昧一者何、專思寂想之謂也、思專則志一不レ分、想寂則氣虛神朗也、云々 ㊀さいきゝたる 〔通〕宴の日の、有利に現るゝをいふ。きくといふ詞、古來利の字をかけり。言海に働く効ありと說きたり。

一四九 （とくゆかしきもの）

とくゆかしきもの。まきぞめ、むらご、くゝり物など染めたる。人の、子うみたるに、男をんなとくきかまほし。よき人はさらなり、えせ者げすのきはだにきかまほし。ぢもくのまだつとめて、必ずしる人のなるべき折もきかまほし。おもふ人のおこせたる文。

◎とくゆかしき 〔春〕早く見まほしくきかまほしき心也 ◎まきぞめ 〔通〕卷染とくゝり物との別、上（春本卷一）に註せり。㊀ぢもくのまだつとめて 〔春〕縣召の除目の翌日、早天をいふ。◎必ず知る人の云々 〔春〕知人の必ず受領すべき年には、何れの國守と、疾く聞きたき也。

一五〇 （こゝろもとなきもの）

心もとなきもの。人のもとにとみの物縫ひにやりて待つほど。物見に急ぎ出でて、今やいまやとくるしうゐいりて、あなたをまもらへたるこゝち。子うむべき人の、

あかつきに祈られたる人。雙六うつに、かたきのさいきゝたる　まことに世を思ひ捨てたるひじり。

◎男も女も　〔評〕男の子にても、女の子にても。◎法師　〔評〕出家させたる子にても也。◎髪長く　〔評〕當時の風、髪の長きを美人の相としたり。◎さかりば　〔評〕下端　前髪のふさ〳〵と垂れたるをいふ。荻原廣道源氏物語の語釋に云、額髪の下りたる端の事なり。端をばとのみいふは、軒端、山の端などのはに同じ◎やごとなき人の云々　〔評〕貴人の、從者に大切に侍かれたるを云ふ。◎心にくき　〔評〕心に憎しと思ふ程、先方の優なるをいふ。俗言に奥ユカシと譯す　◎おほせがき　〔評〕主人の命のまゝに、代書すること。◎馬の跡　〔評〕文字の拙きを譬へていふ也。主人に代つて、筆執る程の人ならば、誰れも拙くはあらじと也　◎下(シモ)　〔評〕下局(シモツボネ)の略語◎所のおとな　〔評〕其所に長く恪勤する老女などをいふ。或は其所とありし、其の字落ちたるか。◎なにはわたり遠からぬ　〔評〕手跡の未熟なるを云也。世俗に、机ばなれせぬといふたぐひ也　古今集序に、なにはづのことのはを、手習ふ人のはじめにもしけるとあるに付て、若紫巻に、まだ難波津をだに、はか〴〵しうつゞけ侍らざめれば、といへるたぐひなるべし。◎始めて参らむなど云々　〔評〕初めて宮仕に参らむなど、人を介して申入れさする娘の文にありては、手跡のみならず、特に用紙までもえらみ取りつくろひ代書せしめて遣ひ給ふと也。◎かみより　〔評〕かみは紙なり。諸本上よりとあれど、千蔭校本「かみ」と假名に改めたり。最初かみを「上」と書き誤り、更に「うへ」と訓み誤りたるならむ。◎うち　〔評〕内裏(ウチ)の義より、天皇の御事に申す。◎うへの女房の云々　〔評〕うへの女房とは、天皇專屬の女房を云ふ。御方々とは、皇后女御等の御方々へも、出仕を許されたるもの。◎三昧堂　〔評〕法華三昧、念佛三昧などして他事

つぼなる也。前に註す。◎ひきはこえ 〔盤〕上にもありき。賤しき市女などの、上衣を引き上げ着たるさま也。◎七度まうで 〔金〕一日に七度まうづる也。稻荷へは七度參る事信心にや。拾遺集に「瀧の水かへりてすまばいなり山七日のぼりししるしとおもはん」とよめり。◎三度は詣でぬ 〔補〕七度詣を志して、今は既に三度まで往き還り詣て了れり。◎四度は事にもあらず 〔補〕四度までは草臥(クタビレ)もせず。未の刻今の午後二三時の間には、七度を終(ハタ)して還るべしとなり。◎下向 〔補〕正しくは還向とかく。下は略字。

をのこも女も法師も、よき子ども持ちたる人いみじう羨まし。髮ながくうるはしう、さがりばなどめでたき人。やんごとなき人の、人にかしづかれ給ふもいとうらやまし。手よくかき歌よくよみて、物の折にも、まづとり出でらるゝ人。よき人の御前に、女房いとあまたさぶらふに、心にくき所へつかはすべきおほせがきなどを、誰れも鳥の跡などのやうにはなどかはあらん。されど下(シモ)などにあるをわざとめして、御硯とりおろして、かゝせさせ給ふもうらやまし。さやうの事は所のおとななどに成りぬれば、誠になにはわたり遠からぬも、事にしたがひてかくを、これはさはあらで、上達部のもと、またはじめて參らんなど、申さする人のむすめなどには、心ことにかみよりはじめて、つくろはせ給へるを、集まりて、たはぶれにねたがりいふめり。琴ふえ習ふに、さこそは、まだしきほどは、かれがやうにいつしかとおぼゆらめ。うち東宮の御めのと。うへの女房の御かたがたゆるされたる。三昧堂たてゝ、よひ

かみより諸本上よりとあるを千蔭本かみと假名がきにしたるいとよろし

きに先に立ちてまうづるいとうらやまし。二月午の日の曉に急ぎしかど、坂のなかばばかりあゆみしかば、己の時ばかりになりにけり　やう〳〵あつくさへなりて、誠にわびしう、かゝらぬ人も世にあらんものを、何しに詣でつらんとまで、涙おちてやすむに、三十あまりばかりなる女の、つぼさうぞくなどにはあらで、たゞひきはこえたるが、「まろ（我女の詞也）は七度まうでし侍るぞ。三度はまうでぬ。四度はことにもあらず。ひつじには下向しぬべし」と、道にあひたる人にうちいひて下だりゆきしこそ、只なる所にては目にもとまるまじき事の、かれが身にたゞ今ならばやとおぼえしか。

◎いなり　㊟延喜式神名帳云、稲荷神社三座。下社大山祇、中社倉稲魂、上社土祖神。この神は百穀を播し給ふ故、稲荷と申す由卜部の記にあり。㊟夏蔭云、下社は大山祇神の女、大市祇姫神なり。北村氏の見たるは、脱字の本なるべし。上社を土祖神といふも僻説也。須佐之男命といふ説ぞ正しき。稲荷の名義も、祭神の諸説まち〳〵なるも、委しくはおのれ稲荷神社考に考へおけり云々。又伴信友の「しるしの杉」には、此の主神の御名は知られざるを、後世より定め稱せんはいと畏く、あるまじき事といへり。◎ねんじて　㊟堪へて也。祈念の意にあらず　◎おくれてく　㊟おくれて來る者となり。◎二月午の日　㊟貫之集第一云、延喜六年月次の屏風の歌の中に、二月初午いなりまうでしたる所「獨のみ我がこえなくにいなり山春の霞のたちかくすらん」◎坂のなかばかり　㊟いなりの上の社は、今の社の奥十六町ばかり山中也
◯かゝらぬ人も　㊟かやうに自分のやうに困しまぬ人も、世にあらむをと也。◎つぼさうぞく　㊟上衣を

いと苦しげなり　わりなく物うたがひする男に、いみじう思はれたる女　一（イチ）の所に時めく人も、えやすくはあらねどそれはよかめり。こゝろいられしたる人。

(一)ふすべられ　(通)燻（フス）べられ。烟たくせらるゝ意。今俗に嫉妬することを、ヤクといふは、元胸を焦す意より出でたる由、喜多村翁考證あれど、燻（フス）ぶとは別の語なるべし。◎驗だにはやくは　(通)祈禱のしるしの、早く見えなばと也　(二)人わらはれにあらじ　(春)人に笑はれぬやうにとの心なり。(三)ねんずる　(通)念願祈念の念なり。(四)わりなく　(通)ことわり(理)なくの略といふ。俗語のムシヤウニ、ムチヤニ。(五)一の所に　(春)職原抄云、執柄者必蒙二一座之宣旨一故稱二一ノ人一又云二一ノ所一(六)時めく人　(春)攝家などに近習にて召つかはるゝ也　(七)心いられ　(春)短氣に、せは〳〵しき人也。(通)心の苛立たるゝなり。

一四八（うらやましきもの）

うらやましきもの。經などならひて、いみじくたど〳〵しく忘れがちにて、かへすがへす同じ所をよむに、法師はことわり、男も女もくる〳〵とやすらかによみたるこそあれがやうにいつの世にあらんとおぼゆれ。こゝちなどわづらひてふしたるに、うち笑ひものいひ、思ふ事なげにてあゆみありく人こそ、いみじくうらやましけれ。いなりに思ひおこして參りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを、ねんじてのぼるほどに、いさゝかくるしげもなく、おくれてくと見えたる者どもの、たゞい

の試あり。寅日御前の試あり。いづれも五節の舞妓を天子の御覽ずる事也。みぐしあげとに、五節舞妓につく女房也。江次第には理髮とあり。他の者はまゐらぬ所へ、かの髮上の女房は入る事をゆるさるゝゆゑ、えせ物のところうると也。◎せちゑの御はいぜんのうねめ（春）御陪膳とは、天子の御給仕つかふまつる事也。禁秘抄云、陪膳采女尤可レ然事也。采女は、いとしもなき女官なれども、せちゑの御はいぜんの折は、所をうるとの儀也。◎大饗の日の史生（春）大臣大饗に太政官の史生を召して、勸レ盃居レ飯の儀有りて、祿を給ふ事あり。江次第に委し。史生は太政官の細事を書註す官人。此時所をうる也。（補）千蔭云、史生の二字にてシヤウとよむ故實なり。和名抄に、史生、俗二言如レ賞とあるにて知るべし。◎七月のすまひ（春）年中行事歌合註云、相撲といへるは、諸國の供御人をめしあつめて、七月に相撲節といふ事をおこなひて、天子御覽ずる也。始めをは召合せといふ。後にすぐりてめされんずるをぬきてと申す。是もいやしき物の此折に所をうる心なり。◎市女笠（補）この笠は、賤しき市井の女の所用なれども、雨ふる日は珍重からるる也　◎かんどり（春）楫取の音便。船渡りする時、彼れの意に任すればなり。後世の諺に、威張りて愛敬なき者のことを、「船頭馬かたお乳の人」といへる思ふべし。

一四七（くるしげなるもの）

くるしげなるもの。夜なきといふわざするちごのめのと。思ふ人ふたりもちて、こなたかなたに恨みふすべられたるをとこ。こはき物のけあづかりたるげんざ。驗だにはやくはよかるべきを、さしもあらず、さすがに人わらはれにあらじとねんずる、

（供芻花香）金銅花盤二口、火爐一口、此外三千佛の像二鋪十六佛名經一部などあり。〔補〕所の衆は、未だ昇殿を許されざる身分なれど、當日に限り、藏人の手傳にて、清涼殿上の御裝飾を奉仕するなり。禁秘抄に、諸司裝束奉仕之時、昇殿ノ佛名ノ名謂ニ上ニ簀子ニと見ゆ。◎とねりども 〔春〕年中行事歌合注云、春日の祭は二月上の申の日也。まづ未の日勅使たつ 近衛の中將少將これをつとむ。この勅使の近衛の舍人ども、けふ所をうるにや。近衛の隨身、番長府生等をこのみのとねりとはいふ也。◎大饗のところのあゆみ 〔春〕二宮大饗、大臣大饗等也。あゆみとは或說云、大臣などの御慶賀に、學生ども列參して、嘉辰令月歡無レ極といふ詩を朗詠して、腰折の綿を給ふ事云々。大臣大饗は前に委註。あゆみとは步の字也。江次第に勸學院步といふ事もあり。常にはことなる事なき學生などの、此折に所をうるを云にや 〔補〕按ずるに、此れは新任大臣の大饗をいふ也。又勸學院は、藤原冬嗣、一族子弟の敎育を勸めん爲に建てたる學校にて、藤氏宗家に大慶事ある時、學生、炬火を擧げ、行列して宗家の慶賀に參り、酒盃の饗を受け、朗詠を獻じ祿を賜はり退出する事、江家次第卷二十に見ゆ。◎元三 〔補〕正月元日のこと。年の元（ハジメ）、月の元、日の元なれば然いふなり。◎くすりこ 〔補〕公事根源供ニ御藥一とある條に、「藥子とて、少女の未だ嫁せざるを索めて、之を用ふる事あり。屠蘇は小兒より飮むといふ本文あれば、其の爲に少女を選びて、先づ飮ましむるなるべし」とあり。淸涼殿にて行はるゝ儀なり。官位もなき少女が、主上の御屠蘇を先立（サキダ）ちて飮むを所得るとはいへる也。◎卯杖の法師 〔補〕卯杖の事は上に註せり。抄に云、卯杖の法師は、正月上の卯の、日にある事なり。此の杖にて邪氣を逐ふ心なり。天子へ絲所より奉る法は、前に詳なり。本文に法師とあるは、眞言天台の驗者より奉るをいふなるべし。◎ごせちのこゝろみのみぐしあげ 〔春〕五節の事前に註す。十一月丑日帳臺

◎えせ者の所うる折　(春)常はあなづらはしき者の、折にふれては時にあふ事也。◎正月のおほね　(春)菌囲などに用る大根也。花鳥云、菌固元三に、よはひなかたむる心也。菌はよはひとよむ也。高土坏(タカツキ)六本に折敷なすゑ、一の臺に餅大根橘なもる也。◎ひめまうち君　(春)東豎子也。公事根源に、ひめまつともいへり。正月の女叙位に叙爵する故、姫大夫といふにや。公事根源云、あづまわらはといふは、内侍司の被官にて、行幸の時、ひめ松とて、なかしき馬に乗て、供奉するこれが事也。これはみつ子な用らるゝにや。三子は天子の守りになる由、由緒も侍る故とかや。年ごとに申文な出して、必五位の位な給ふ也。是は昔より同し名乗な相傳して、紀朝臣季明と名のる云々、◎よなりの藏人　(春)節折(ヨヲリ)の命婦とも云也。六月十二月晦日の夜、節折の命婦、竹な持てまゐりて、主上の御長(タケ)より始めて、所々の寸法な取り果て、宮主にきりあてがはせて、御祓なつとむる也。あらたへ、にごたへとて二度あり。二度果て祿な給ふ。節折な、よなりといふ。竹にて御たけの寸法なとりて、其のほどに切りあてがへば也と公事根源にあり。云々、常はひきゝ女官の、此時座なかまへなど所なうる也。◎季の御讀經の威儀師　(春)季の御どきやうとは、二月と八月に百敷にて大般若經な四ヶ日講ぜらる事也。威儀師は此みどきやうに、清涼殿にて仁王經なよむところの、御前の僧な引て入る奉行の僧也。◎僧の名どもよみあげたる　(春)僧の名ども書し例文なるべし。江次第五季御讀經事云、近例去年僧ノ名上押レ紙書ニ付今年可レ請定之僧名ニ◎御どきやう佛名などの御さうぞくの所の衆　(春)季の御讀經などに、行事の藏人、清涼殿なかざり、弊南殿なかざる事あり。佛名にもかざるな、装束といふ也。藏人所の衆、此時所なうるにや。延喜式圖書寮云、御佛名装束、御持佛一龕蹲踞案一脚、

所うるをり」の下諸本の事とあり千本の删れるに從ふ

を、すのうちよりあまた、まろばし出でたる。うらまだつかぬかはぎぬのぬひめ。殊に淸げならぬ所のくちき。ことなる事なき人の、ちひさき子どもなど、あまたもちてあつかひたる。いとふかうしも心ざしなき女の、こゝちあしうして久しくなやみたるも、男の心の中にはむづかしげなるべし。

◎むつかしき 今俗ムサクルシキこと。轉じて氣味ワルキ意あり。◎ぬひ物のうら 刺繡の裏。絲の上下左右絡(カラ)みあひたるをいふ。◎裏まだつかぬ 毛皮の衣の裏なきも、皮の縫ひ目の、むさ〳〵しき也。◎殊に淸げならぬ所 便所。◎ことなる事なき人云々 下衆のこと。前にもありき。卑しき諺に、貧乏人の子澤山といへる類なり。◎ふかうしも云々 深くも心ざしなき、慕ひ思はぬ女の、久しく病に臥して、假粧もせぬを見ては 男の心に、むさくきたなげに思はんと也。

一四六 （えせものの所うるをり）

えせものの所うるをり。正月のおほね。行幸の折のひめまうちぎみ。六月(ミナヅキ)、十二月(シハス)のつごもりのよをりの藏人。季(キ)の御讀經(ミドキヤウ)の威儀師(イギシ) 赤袈裟(アカゲサ)きて僧の名どもよみあげたるいときら〳〵し。御(ミ)どぎやう御佛名(ゴブツミヤウ)などの、御さうぞくの所の衆。かすが祭の近衞舍人(とねり)ども。大饗(ダイキヤウ)のところのあゆみ。元三のくすりこ。うづゑのほうし。ごせちのこゝろみのみぐしあげ。節會(セチヱ)御はいせんのうねめ。大饗の日の史生(シシヤウ)。七月(フヅキ)のすまひ。

しめりたる煎り取りし炭にや。奥にいりすみおこすとあり。◎ぼうたん (春)牡丹なり。(補)何故に恐ろしく聞ゆるにや。諸註その理由なければ知り難けれど、必ずや誤字ならむ。◎牛鬼 (補)地獄閻魔の廳に、牛頭(ゴヅ)馬頭(メヅ)といふ鬼なりといふ。それならむ。

一四四 (見るにことなる事なきもの)

見るにことなることなきものの、文字にかきてことごとしきもの。いちご。露草。水ぶき。くるみ(胡桃)。文章博士。皇后宮の權大夫。やまもゝ。いたどりはまして、虎の杖とかきたるとか。杖なくともありぬべきかほつきを。

◎いちご (春)覆盆子。まことに文字はことごとしきにや。◎つゆくさ (春)鴨頭草と書也。◎水ふき (春)黄實とかけり。本草云、黄實黄莖、三月生レ葉、貼レ水大二于荷葉一、面靑背紫、莖葉皆有レ刺(下略)◎くるみ (春)胡桃。◎文章博士皇后宮權大夫 (補)たゞ文字のむづかしきなり。◎やまもゝ (補)楊梅。これも同じ。胡桃のやうに。◎いたどり (春)虎杖。和名抄に伊太止里云々。其の莖のまだらにて、虎の名あるよし、本草疏にあり。◎ありぬべき (補)これにても聞ゆれど、或は「ありきぬべき」の落字か。

一四五 (むつかしげなるもの)

むづかしげなるもの。ぬひもののうら。猫の耳のうち。鼠の子の毛もまだおひぬ

◎青淵、谷の洞　〔補〕鰐魚、大蛇など住むべく聯想せられ、鰭板（ハタイタ）も魚の鰭の、尖端などの恩にるゝより、恐ろしきなるべし。さて端板（ハタイタ）には、門の左右の袖の、板にて造られたるをいひしが元にて、すべて板塀の名となれり。鐵土塊（クロガネツチクレ）　名稱の恐ろしく聞ゆる也。◎はやち　〔補〕暴風。◎ふさう雲　〔補〕傍註にも抄にも不祥雲とあり。美隆云、この頃中俗常いひたる詞にて、歩障雲ともいへり、其の由別に記しおけり。直按ずるに、別記未だ見ざれども、禁中名目抄喪服篇の末に、歩障。天子大行之時用ㇾ之。とあり、御山送りの時、御棺の左右を障蔽しつゝ、持ち行く白き幕やうの物をいへり。それに似たりとて、恐ろしといふにや。◎ほこぼし　〔補〕抄も傍註も、矛星破軍星とす。春抄はイニひこぼし。牽牛なりとせり。◎かさめ　〔補〕傍註本に、和名抄、擁劔似ㇾ蟹色黄。とあるよろし。◎らう　〔春〕蠟にや　〔補〕然らじ。牢ならむ　◎らうのたさ　〔春〕囚獄正ないふにや。〔補〕然るべし。牢の長ならむ。按ずるに、傍註本には「ろうさう緑衫の名さへにくしとあれど、緑衫は六位の袍の名にて、憎き由も、恐ろしき想ひもなければ、猶牢の方に従ふ。◎いにすし　〔春〕未勘。但土佐日記に、穂屋のつまの蝙蠣鮨（イズシ）とあり。蝙蠣は貝也。和名ニ爲ニ其貌似ㇾ蝸而大者也ニ云々。是にや。にには助字なるべし。〔補〕按ずるに、にには誤りて入りたる字にや。形小蛇に似たるを見れば、恐ろしきにや。◎ひぢかさ雨　〔春〕深窓秘抄云、俄にふる雨の、笠もとりあへずして、袖をかづく雨也。〔補〕千蔭云、萬葉「久方の雨にはふりきぬ」といふを、催馬樂に「ひぢかさの」と歌ひしより、誤れり。袖笠はあれど、肱笠といふはなき事ぞ。守部云。袖を笠にきるには、肱を張るわざなりければ、肱笠といふ詞も出來しにや。◎くちなほいちご　〔補〕蛇苺　◎いきすたま　〔春〕河花云、生靈也。〔補〕生きゐる人の怨靈の由、源氏物語などに見ゆ。◎おにところ　〔春〕鬼薢。◎おにわらび　〔補〕千蔭云、おにしだのこと也。◎いりすみ　〔春〕煎炭。

がら鍾愛に馴れたる兒のこと。賤しき家の兒の、慾ひ親の愛に任せて、教訓する事もなく生育せし者は、往々人中にて、我が儘に振舞ふものなれはなり。◎しはぶき 補咳嗽（セキ）のこと。◎はづかしき人に云々 補元信云、是は畏敬する程なれば、咳などせざるべきに、ふと出で來るがあやしと也。◎あなたこなたに住む人 補彼方此方に住むこと。東西相隣りて住むをいふ。◎あやにくだち 補あな憎（ニク）やと思ふことをする也、俗言に意地惡くとも譯すべし。◎常は引きいられ 補取り散らしなどする物品を、引き取り上げらるゝこと。◎親の來たるに云々、補親の隣家へ來たりしに、連れたる兒の、得意なるさまなり。◎おとなどもの物いふ 補隣家の大人と、我が親の相語りて、兒のいふ言を聞き入れればなり。◎まさな 春正無 補俗言のイケナイ。◎われはた 補我れも亦親と同じく、叱らで見るほと也。

かさめ旁註本による

千蔭本最後に「いかり、名よりも見るはおそろし」とあり

一四三（名おそろしきもの）

名おそろしきもの。あをぶち。谷のほら。はたいた。くろがね。つちくれ。いかづちは、名のみならず、いみじうおそろし。はやち。ふさうぐも。ほこぼし。おほかみ。うし。かさめ。らう。らうのをさ。ゐにすし。それも名のみならず見るもおそろし。繩莚。強盗亦よろづにおそろし。ひぢかさ雨。くちなはいちご。いきすだま。おにところ。おにわらび。うばら。からたち。いりずみ。ばうたん。うしおに。

て上は頭の下、下は腰の上にてゆへる有るもたすきと云ひし物に似かよひてきこゆ云々 さすかに流布本になし千本による

おとなども」の千本に「見さわぐこれも

一四二（人ばへするもの）

人ばへするもの。ことなる事なき人の子の、さすがに、かなしうしならはされたる。しはぶき。はづかしき人に物いはんとするにも、まづさきにたつ。あなたこなたにすむ人の子の、四つ五つなるが、あやにくだちて、物など取りちらしてそこなふを、つねはひきいられなど制せられて、心のまゝにもえあらぬが、親の来たるに所えて、ゆかしかりける物を、「あれ見せよやはゝ」など引きゆるがすに、おとなどもの物いふとて、ふともきゝいれねば、手づから引きさがしいでて見さわぐこそいとにくけれ。それを、「まさな」とばかりうちいひて、とりかくさで、「さなせそ。そこなふな」とばかりゑみていふ親もにくし。われはたえはしたなくもいはで見るこそ心もとなけれ。

◎人ばへ [illegible]千蔭云、人そばえとありし、その字脱けたるか。此の草子に、「そばえたる小舎人わらはともあり。」と云々。直按ずるに此の考いとよろし。人ばへといふ詞、本條の外に見たる事なし「そばへ」は雅言集覧に、ザレホコル心云々。山家集、初花のひらけ始むる梢より、そばへて風のわたるなるかな。」義經記、尋常の人などは、血際（チエヒ）などするぞかし。辨慶は血の出づれば、いとゞ血そばへして、人な人とも思はず。云々。俗言の、アマエル、ヨイキニナル、ヅニノルなどいふに同じからむ。◎ことなる事なき人 [illegible]格別なる事なき人。卑しき身分の人なり。◎さすがにかなしう云々 [illegible]よからぬ身分の子なれど、甚しな

たすきの事　後田沼氏の佳のみたまを見れは其の中に「萬葉十六たすきかくはふ兒が身には」とよめるたすきは衣に閉ける物なり脩ふ時に袖の妨げにならぬ爲に附けおきてそを結べば袖のしまりて便なる狀にしたる也　鹿持雅澄も右歌の解に「今の世に小兒の夏の頃腹服（ハラカケ）とて腹より左右臉かけたる物を紐さし

波字類抄に、繳をよみ、「繒繳、所ニ以飛レ鳥也、今案俗以ニ長絲一結ニ著ト鷹一也とかけり。こゝは子雀の足などを繳（ヘ）につけて、其處にすゑたる也」と記せり。最早く發表せし新説なり、おのれも曾て新撰字鏡を見しに、聯、太加乃足乎（アシヲ）、今呼ニ閉乎（ヘヲ）一トとあり。又和名抄鷹犬具に、繳。閉麻岐（ヘマキ）弋射收レ繳具。と見ゆ。これ彼の閉乎（ヘヲ）を卷き收むる具をいへり。さて閉乎（ヘヲ）の名義を按するに、綜緒（ヘヲ）なるべく、鷹をそらさじの用意に、足に付くる緒にて、略して唯「へ」ともいへる也。蛇足に似たれど已が見たる處を擧げおく也。◎および 〔補〕唯指のこと也。和名抄に指、於與比、手指也。とあるにて知るべし。◎あまにそぎたる 〔補〕美隆云、小兒の髮の短きを、源氏などに「あまそぎ」といへり。取替へばや三の卷、右大將宇治に籠りて、寶の女の尼になり給ふ所に、「かしら洗はせなどして、髮もかきたれなどして見れば、あまのほどにふさ〳〵とかゝりたり云々。◎目に髮のおほひたる 〔補〕前髮の、目の上に垂れかゝりたるを、搔き遣りはせずてとなり。◎たすきがけに云々 〔補〕美隆翁の説に、空穗物語藏開、國讓り、又源氏薄雲等の文を以て考ふるに、たすきといふもの、袴に付きたるものにて、それを背より胸へかけて、ゆひたるものとおぼしといへり。◎腰 〔補〕袴の帶をいふ。◎殿上わらは 〔補〕童殿上とて、良家の子息の元服以前、昇殿を許されて、雜役に使はるゝ者。◎ひひなの調度 〔補〕前に註せり◎衣みじかなる 〔補〕尾や羽の、未だ短きほどのさま。◎かりのこ 〔春〕鴨の子なり。〔補〕かげろふ日記、康保四年の條に、三月つごもり方、かりのこの見ゆるを云々。◎さりのつぼ 〔春〕註は玻璃のつほにやと、盤抄は、佛舍利を瑠璃の壺などに容るゝ事なりと云々。躬弦云、瑠璃の壺の誤ならむと、自寬云舍利をいれたる壺。今もすること也と。かく諸説あれども、佛骨の壺を、いかで愛（ウツ）くしき物とはいはん。唯光玉（玻璃）の壺の、小さきをいふにあらじか。

しりさき千本による

なるが、二藍のうすものなど、きぬながくて、たすきあげたるが、はひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこ子(ゴ)の、聲をさなげにて文よみたるいとうつくし。鶏(ニハトリ)のひなの、足高に白うをかしげに、きぬみじかなるさまして、ひよ／＼とかしがましくなきて、人のしりさきにたちてありくも、又おやのもとにつれだちありく見るもうつくし。かりのこ。さりのつぼ。なでしこのはな。

◎うつくしき 補美麗なる事にあらず。愛らしき意、いつくしむ意なり。◎ふりにかきたるちごの顔 補ふりは瓜なり。和名抄にも宇利とあれば「うり」に改めたる本もあれど、中古の俗語には、フリとも稱せしにや。大鏡に、伊周の若年にして、關白を望みし事を評して「ふりを乞はゞ器物(ウツハモノ)を設けよ」といふ語を記し、後世のものながら、近松作の戯曲、國姓爺合戰にも、二月中旬にふりを獻ずる榮花なり」の文句あり。是は三體詩卷一に、王建の華清宮を詠ぜし絕句に、二月中旬既進レ瓜とある句によりたるなるが、其の頃までも、瓜をフリと讀む古語の訛りの殘りたるにやと思へば、今妄りに改めず。さて瓜にかきたる顔とは、後世の書ながら岩瀬醒の骨董集に云ふ、今伊勢桑名あたりの俗に、八月朔日を姫瓜の節供と唱へ、姫瓜に紅(ベニ)おしろいを彩りて頭とし、木また竹の筒などを身とし、紙また絹などの衣服をきせて、雛人形に作る云々　斯くあれば、此の瓜に稚兒の顔かきて玩ぶ事、中古よりのすさびにて、姫瓜雛は、その遺風なるべく、姫瓜の名もかゝる事より云ひ出でしならむ。◎ねずなき 補鼠啼。十訓抄にもねずなき、運歩色葉抄にねずはしり(鼠走)など「ねず」とばかりいふ例多し。◎へにつけて 補武藤氏の考異に、「へは伊呂

づかひせらるゝ也。◎殊に又云々 [補]其の上に又、誰れとは知らぬ人の聲きゝ付けたる時は、驚きも尤もとなり ◎こと人云々 [補]別人が、知らぬ人の噂など始めたる時はとなり。◎けさの文 [補]後朝の文なり。上文鳥のそらねの所にもありき。其處に註せり。

一四一 (うつくしきもの)

うつくしきもの。ふりにかきたるちごの顏。雀の子のねずなきするにをどりくる。またへにつけてすゑたれば、おやすゞめの虫などもてきて、くゝむるもいとらうたし。二つみつばかりなるちごの、いそぎてはひくる道に、いとちひさき塵(チリ)などの有りけるを、めざと(見の目敏也)に見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、おとななどに見せたるいとうつくし。あまにそぎたるちごの、目に髮(カミ)のおほひたるを、かきはやらで、うちかたぶきて、物など見るいとうつくし。たすきがけにゆひたる腰の、かみのしろうをかしげなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなる兒(チゴ)の、あからさまにいだきてうつくしむほどに、かいつきてね入りたるもらうたし。ひひなのてうど、はちすのうき葉のいとちひさきを、池よりとりあげて見る。あふひのちひさきもいとうつくし。なにも〳〵ちひさき物はいとうつくし。いみじう白う肥えたる兒の二つばかり

れいの所の下「本「ならぬ所」とあるをとる

者みな赤き狩衣に白き布袴を着る也。白杖を持て、雜人等を追拂也云々。此出立をいやしげなるとにや。◎ほうし子 〔補〕頭髪を剃り落したる兒。◎いづも莚のたゝみ 〔春〕出雲莚とて、かの國產なる由延喜民部式にあり。

一四〇（むねつぶるゝもの）

むねつぶるゝもの　くらべ馬見る。もとゆひよる。おやなどのこゝちあしとて、例ならぬけしきなる。ましで世の中などさわがしき比、よろづの事おぼえず。又物いはぬちごのなき入りて、乳ものまず、めのとのいだくにもやまで、ひさしうなきたる。れいの所ならぬ所などにて、こと人などの其のうへなどいふにも、殊にまたいちじるからぬ人のこゑきゝつけたるはことわり、こと人などの其のうへなどいふにも、まづこそつぶるれ。いみじくにくき人の來たるもいみじくこそあれ。よべきたる人の、けさの文のおそき、聞く人さへつぶる。おもひ人のふみとりて、さし出でたるも又つぶる。

◎むねつぶるゝもの 〔補〕氣がかりなること。俗にいふハラ〳〵スルことなり。◎もとゆひよる 〔春〕きれんことを氣つかふにや。〔補〕紙を細くよる故なるべし。◎例ならぬ 〔補〕不例。病氣。◎世の中 〔補〕世の中ごこちといふべき詞を、略してかくもいふ也。世上に流行の傳遞する病。疫癘。◎れいの所ならぬ所 〔補〕千蔭本に、かくあるぞよろしき。例の所なれば、氣遣ふ事もあらじなれど、例ぃ所にあらぬ所なれば、萬事心

れど何もゐなかものの云々人の子に」といふまで千蔭校本は刪れり

らしくしたてて、櫻の花おほくさかせて、胡粉朱砂などいろどり、ゑどもかきたる。やり戸厨子。何もゐなかものはいやしきなり。むしろばりの車のおそひ。けびゐしの袴。伊豫簾の筋ふとき。人の子にほうし子のふとりたる。まことの出雲莚のたゝみ。

◎しきぶのぞうのしやく 〔春〕式部丞爵。百寮訓要云、地下の六位可レ然もの任レ之云々。式部丞必叙爵すといへど、猶地下にて昇殿もかなはねば賤きにや。〔補〕濱臣云、しやくは笏なるべし。此の段凡て器物の類をいへれば、叙爵の義いかゞ。前にも「などてつかさ得初めたる六位、しやくに職の御曹司の巽の隅の板をせしぞ」云々。この說に從ふべし。◎布屛風 〔補〕綾にて貼りたるに對して、布なるを賤しといふ也。◎ふりくろみ 〔補〕古くなりて黑みたるは、却つて目立たざる由なり。◎やり戸厨子 〔補〕一つ物なり。二つに放ちて、別物と見たるは然らず。上品なる厨子は、皆開き戸にこそ造れ。之を遣戸に造りたるを、賤しとはいふ也。御厨子は、男女高貴の御側にも居ゑおかるゝ具なり。いがて之を賤しとはいはむ。◎むしろばりの車のおそひ 〔補〕春抄西宮記を引きたれど、喪中の例なれば此處には適はず。政治要略によれば、長保年中風俗の奢侈を制して、五位の車を莚張と定められたれど、此處の莚張車はそれにもあらず。そも〳〵上品の車には雨天の時、雨皮(アマガハ)とて油單(ユタン)を張る例なれど、下官の網代車は莚(ムシロ)（疊表）を張りて、雨の浸入を防ぐなり。されば此の條も、莚の襲(オソヒ)したる車の意なり。莚張車の上に、又莚の襲したるにはあらず。抄本活本に「おすひ」とあるは轉訛なるべし。然るに又、宸翰本には「莚張の車のおそひしげくうちたる」と見ゆ。之によれば「おそひ」は「おさへ」の訛語にて、押緣(オシブチ)を重く打ち付けたるをいふかとも思はる。◎けびゐしのはかま 〔春〕是は撿非違使の下の看督長(カドノヲサ)の事にや。其故は環翠軒云、看督長とて、別當の召具する

すぢわろき千本による流布本にはふときとあ

にいるゝすきかげ。あたらしきほそびつ。

◎かなまり 金椀、前註。◎ほそびつ 細櫃。長櫃の類なり。春曙抄いたく誤れり。

一三八 （きたなげなるもの）

きたなげなるもの。ねずみのすみか。つとめて手おそくあらふ人。しろきつきばな。すゝばなしありくちご。あぶらいるゝもの。すゞめのこ。あつきほどに、ひさしくゆあみぬ。きぬのなえたるは、いづれも〳〵きたなげなる中に、ねりいろのきぬこそきたなげなれ。

◎つとめて 早朝。寝おきて、遅く手洗ひ、口そゝぎなどする人。◎つきばな 春吐鼻。唾吐くことならむ ◎すゝばな 和名抄、洟。須々波奈とあり。スヽリバナ。◎あぶらいるゝ物 燈油いるゝ器。◎ゆあみぬ 湯浴みせぬ也。◎ねりいろ 白絹の練りたるまゝなるは、染めたるものよりも、汚れやすければ也。盤齋の抄に練貫の衣とあるは非。練貫は、緯糸（ヌキイト）のみ練りて織りたる物。練色絹とは別なり。

一三九 （いやしげなるもの）

いやしげなるもの。しきぶのざうのしやく。黒き髪のすぢわろき。布屏風（ヌノ）のあたらしき。ふりくろみたるは、さるいふがひなき物にて、なか〳〵何とも見えず。あた

ひかへなどして千本による

碁をやんごとなき人のうつとて、ひもうちとき、ないがしろなるけしきに、ひろひおくに、おとりたる人の、ゐすまひもかしこまりたるけしきに、ごばんよりは少しとほくて、およびつゝ、袖の下いまかた手にて、ひかへなどしてうちたるもをかし。

◎ひもうちとき [illegible]ひもは入れ紐とて、直衣の領(エリ)にくけ込みたる打紐なり。之を解くは、くつろぎたる體。◎ないがしろなるけしき 【春】しどけなきさま也。空蟬卷に、ふたあひのこうちきだつ物、ないがしろにきなして云々 ◎ひろひおく [illegible]碁石を、碁笥より拾ひ出して置くなり。◎おとりたる人 【春】位ひくき人、やごとなき人の相手なり。◎およびつゝ 【春】及びかゝれる也。[illegible]上體を前にさし出したる姿勢。

一三六 （おそろしきもの）

おそろしきもの。つるばみのかさ。やけたる所。みづぶき。ひし。(菱也) かみおほかるをのこの、かしらあらひてほすほど。くりのいが。

◎つるばみのかさ 【春】橡。和名橡實也云々。どんぐりの笠のたぐひなるべし ◎やけたる所 [illegible]火災にあひたる跡をいふ。◎みづぶき [illegible]芡。一名鬼荷(オニハス)。葉に刺(トゲ)あれば恐ろしき也。

一三七 （きよしと見ゆるもの）

清しと見ゆるもの。かはらけ。あたらしきかなまり。たゝみにさすこも。水を物

註したれどいかゞ。男の童の、桃の枝切るをきゝて、色よき袿著たる女の童も三四人來たる也。◎卯槌　補上に註せり。◎はしりかひ　補走り交ひ、行きかひ、などのかひ也。ちがひの略か。◎とりわき　補取り分ち◎黒き袴　補汚れたる袴のこと。黒染にはあらず。

一三四（をのこの雙六うつ）

きよげなるをのこの雙六を日ひとひうちて、猶あかぬにや。みじかき燈臺に火をいとあかくかゝげて、かたきの、さいをせめこひて、とみにもいれねば、どうを盤の上にたてゝまつに、狩衣のくびのかほにかゝれば、かた手しておしいれて、こはからぬえぼうしをふりやりて、「さはいみじうのろふとも、うちはづしてんや」と、心もとなげにうちまもりたるこそ、ほこりかに見ゆれ。

◎短き燈臺　補通例四尺の燈臺なれば、三尺のを、特に短きといへる也。◎かたきの　春敵。相手なり。この「の」は「が」に通ふのなり。句を切るべし。◎さい　補和名抄に、頭子。双六乃佐以とあれど、普通には釆また賽とかけり。◎とみ　補頓の字音語。急に。◎どう　補筒。二つの賽を、此の筒に入れてふり出だす也。◎ばん　補雙六盤。◎狩衣の云々　補相手のさま也　◎こはからぬ烏帽子　春なよらかなるなり。◎のろふ　春呪咀なり。補我れを負けよと咀ふとも云々と、氣を張りたる狀をかける也。

一三五（碁をやごとなき人のうつ）

わらはめ。千蔭本うちきゝたる、これも

しげなるわらはめの、あこめどもほころびがちにて、袴はなえたれど、色などよきうちききたる三四人(ミタリヨタリ)きて「卯槌の木のよからんきりておろせ。御前にもめすぞ」。などいひて、おろしたれば、走りがひ、とりわき、「われにおほく」などいふこそをかしけれ。くろき袴きたるをのこ走りきてこふに、「まて」などいへば、木のもとによりてひきゆるがすに、あやふがりて、猿のやうにかいつきてをるもをかし。梅などのなりたる折もさやうにぞするかし。

年の始めの長閑なる日、童兒らの外に出て遊び居るが、無邪氣な狀を見て、淸女の感じをかける也。◎えせもの 補身分の高からぬ者。今いふ中流以下。◎土もうるはしう直からぬ 補畦(ウネ)の正しく眞直に通らぬをいふ。仍て上に荒畠とかけり。◎桃の木 補荒畠の中に立てる也。◎しもとがちに 補楉。小枝の多く出でたるをいふ。◎いま片つ方は云々 補日に照らさるゝ方は、蘇芳色のやうに赤く、日かけの方は青きなり。◎かけやり 補童のきたる狩衣は、物にかけて破りなど。◎ひきはこえ 補千蔭云、この奥にも見ゆ。束帶の時、うしろに角袋たてる所をいふ。こゝは引きふくらしたるをいふなり。濱臣說同じ。長き衣を、腰のあたりに引き上げたる也。猶委しくは拙著圖解に就いて知られよ。◎はうくわ 補半靴。筒の短き靴。後世は木製のをもいへど、昔のは皆革製なり。◎よき木切りていで 補いでは、物を乞ふに發する語なる由、契沖師萬葉代匠記に、例證をひいて精しくいへり。◎わらはめ 補童女。わらはべとあるも、めの童便なり。◎あこめ 補童女の褻(ケ)の服。◎うちききたる 補諸本うちきたるとあり。春抄打著たると

の歌合には、金銀の藤の枝を洲濱にすゑて、かずさしの所におく。花の枝にて數をとれる也云々。◎いみじく人の知りたる事なれど云々。㊟右組の人々、「やゝさらに知らず」と云ひし人を、責むる也。いみじく人の知りたる謎詞にても、覺えぬ時は知らずともいへ。「是れ知らぬ者たれかあらむ」といはるゝ程に、知りたる謎を、何しに「えしらず」とはいひしぞ。と恨まれて也。◎罪さりける事 ㊟罪去。つみをいひのがるゝ心也。右方の人に、彼しらずといひし人、さまぐ\いひわけして、罪をのがれたると也。◎これはわすれたる事かは ㊟此のなぞは、清少のごとく、忘れたるにはあらで、皆しりて、能くしらずといひしに、われはかく、わらはも知たるうたを、忘れたる事と也。

一三三（童の木のぼり）

正月(ムツキ)十よ日のほど、そらいとくらう、雲もあつく見えながら、さすがに日はいとけさやかに照りたるに、えせものゝ家のうしろ、荒畠などいふものゝ、土もうるはしうは直からぬに、桃の木のわかだちて、いとしもとがちにさしいでたる、かたつ方はいと青く、いまかた枝はこくつやゝかにて、蘇枋の色なるが、日かけに見えたるを、ほそやかなるわらはの、かりぎぬは、かけやりなどして、かみうるはしきが、のぼりたれば、又こうばいのきぬ、白きなどひきはこえたるをのこゞ、はうくわはきたる、木のもとにたちて、「われによき木きりて、いで」などこふに、また髮をか

折句、沓冠なとの體も、謎といはゞいはるべきか。それより轉じて、唯簡單なる隱語を解くすさびともなりしにや。◎かたうどにはあらで　(補)謎合の左方、または右方の方人にはあずして、別人なれどの意なり。諸本かたくなとあるは非なり。千蔭本の如くならでは、聞えぬをや　◎らう〳〵し　(春)勞々なり。なぞ〳〵などの巧者なり。左の一番は云々　(補)方人にはあらざりしが、左方となりて、一番は我れいはんと、同じ組の人々に頼ませしなり。◎たのむる　(補)自己を、同獵方人より頼みに思はすること。◎人々作り出だし云々　(補)謎の詞を、人々自作して協議し、其の中を選び定むる也。この條も、流布本文字多く落ちたり。千蔭本にかくあり。◎其の詞をきかん　(補)先づ勞々しき人の作り出でたる謎を、豫め聞かんと、他の方人等の心もとながりて問ふ也。◎日いと近う　(春)なぞ合せの日限也　◎ひざうに　(補)非常に　◎いさしらず云々　(補)方人等の心もとながりて問ふを、さらば我れを頼み給ふなと怒りてなり。◎方人の男女云々　(補)左右に分れ座して、◎もてなしたる　(補)振舞ひたる樣といふに同じ。勞功者の動止の嚴然たる也。◎うちまもり　(補)目守。見ツメル。◎右方の人はいと興あり　(春)此のなぞ童部もしりたるにて、ときやすければ勝つべきにて、逸興とおもへる也。(補)三日月と解くこと、兒童も知ればなり。◎こなたの人　(春)左なり。まけぬべければ也。◎あなたによりてことさらに　(春)彼の勞功の人、右方に心よせて、わざと左にまけさせんとて、したるわざをしらで、ねたしと片時のほどに、さま〴〵思ひくだきし也。◎さらにえしらず　(春)わざとあざけりていふ也。◎口ひきたれて　(補)口わきひきたれともいふ。人を甘く見て、戲れかゝる態にいへる詞なり。◎さるがうしかくる　(春)ざれる事なり。猿樂の字より出でたる語にて前にも出づ。◎數させ〳〵　(春)勞功の人かちに定めて、勝の數をとらせたる也。花鳥餘情云。歌合に員指(カズサシ)とてある也。天德

覺えぬ時｜春本事とあるは非なり千本による

「（左方の詞）數させ〳〵」とてさゝせつ。（右方の詞）いとあやしきこと。是れ知らぬ者たれかあらん。さらにかずさすまじ」と論ずれど、（左の人の詞）「しらずといひいでんは、などてかまくるにならざらん」とて、つぎ〳〵のも、此の人になん論じかたせける。（右方の人の詞）「いみじう人の知りたる事なれど、覺えぬ時はさこそはあれ。何しかは、えしらずといひし」と、後に恨みられて、罪さりける事を語り出でさせ給へば、おまへなるかぎりは、さはおもふべし。くちをしういらへけん。（左方）こなたの人のこゝち、うちきゝはじめけん。いかゞにくかりけんなど笑ふ。これはわす（清少のことわり也）れたることかは。みな人しりたることにや。

◎いかゞと例よりは云々　〔補〕后宮の御機嫌いかならむと、いつもより愼まれて、俗にいふ自然と遠慮せらるる由なり。◎はたかくれて　〔補〕千蔭云、遊仙窟に、半面、ハタカクレと傍訓せり。春抄に端隱。少し面がくしにゐる也とあり。按ずるに、身體の半（ナカラ）分几帳に、隱れゐたるならむ。◎あれは今參りか　〔春〕清少の初々（ウヒ〳〵）しげなるを、戲れのたまふ詞也　◎にくき歌なれど　〔補〕當時の、にくしといへる語は、深く憎惡するほどの意ならず。俗にイヤナ歌といふに當る。◎おほかた見つけでは　〔補〕おほかたの四字、千蔭校本によ る。見つけは見著きてゐる意。總じて、汝を見馴れずしては、暫時も慰むまじと也。◎仰せらるゝついでに　〔補〕例の千蔭本、かくあるに從ふ。舊本「仰せられて」とあるはわろし。◎なぞ〳〵あはせ　〔補〕謎々合。言海に、言葉に物事の實を隱して、何ぞと問ひて、解き答へしむる遊戲と說明せり。なぞはなにぞの略なり。拾遺集雜下なる、曾根好忠の歌の序には、なぞ〳〵物語しけるにとあり。按ずるに、歌の隱題、また

かた人 春本かたくなとあり千蔭本による

りあなづるふることは、さもありぬべし」など仰せらるゝついでに、「人のなぞ〳〵あはせしけるに、かたうどにはあらで、さやうの事にらう〳〵しかりけるが、「左の一番はおのれいはん。さ思ひ給へ」などたのむるに、さりともわろきことはいひ出でじとたのもしく嬉しうて、皆人々作り出だし、えり定むるに、「其の詞をきかん。いかに」など問ふ。「たゞまかせて物し給へ。さ申していとくちをしうはあらじ」といふを、げにとおしはかる。日いと近う成りぬれば、「猶この事の給へ。ひざうにをかしきこともこそあれ」といふを、「いさしらず。さらばなたのまれそ」などむつかれば、おぼつかなしと思ひながら、其の日になりて、みな方人のをのこ女ゐわけて、殿上人などよき人々、おほく居なみてあはするに、左の一ばんにいみじう用意し、もてなしたるさまの、いかなる言をかいひ出でんと見えたれば、あなたの人もこなたの人も、心もとなく打ちまもりて、「なぞ〳〵」といふほど、いと心もとなし。「天にはりゆみ」といひ出でたり。右の方の人は、いと興ありと思ひたるに、こなたのかたの人は、物もおぼえずあさましうなりて、いとにくゝあいぎやうなくて、あなたによりて、ことさらにまけさせんとしけるをなど、片時の程におもふに、右の人、をこに思ひて、うちわらひて、「やゝさらにえしらず」と、口ひきたれて、さるがうしかくるに、

長女に御文を渡されたるを、忠實なる長女は、淸少の許に來ても、猶しのびて物言ひたるをいふ。◎へづての云々　〔講〕人に傳へての御沙汰ならで、御直の御文ならむと也。◎山吹の花びら　〔春〕山吹は口なし色なれば、いはで思ふといふ心なるべし。◎いはでおもふぞ　〔春〕「心には下ゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」前におほせ事もなくて、日ごろになればとある首尾なり。〔講〕この歌六帖に見ゆ。◎まづしるさま　〔春〕古今雜下よみ人しらず「世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは淚なりけり」〔講〕淸女の、先づ淚ぐみたる樣を見て。◎誰れもあやしき御長居を　〔講〕淸女の不思議に、長く里邸に籠居して出仕せぬことを、同僚の誰れもが、是れのみ噂し合へりの意。◎こゝなる所に　〔講〕この近き所に、私用あれば往(イ)てこんとなり。◎あからさま　〔講〕かりそめの意。雅語譯解に、ツヒチヨイトとあり。◎おなじふることといひながら　〔春〕同じ古歌の中にも、此の歌はことに誰れもよく覺えたるをと也。◎こゝもとに覺えながら　〔補〕口もとに覺えながら。◎下ゆく水のとこそ　〔補〕歌の本は「心には下ゆく水の」と申しますといひたる也。

御かへりまゐらせて、すこしほどへてまゐりたり。いかゞと例よりはつゝましうて、御几帳(ミキチヤウ)にはたがくれてさぶらふを、「あれは今まゐりか」（后宮の御詞）などわらはせ給ひて、「にくき歌なれど、此のをりはさもいひつべかりけりとなん思ふを、おほかた見つけではしばしもえこそ慰むまじけれ」などのたまはせて、かはりたる御けしきもなし。わらはに敎へられし事などを啓すれば、いみじくわらはせ（后宮也）給ひて、「さることぞ。（后の御詞）あま

いひながら、知らぬ人やはある、たゞこゝもとにおぼえながら、いひ出でられぬはいかにぞや」。などいふを聞きて、ちひさき童のまへにゐたるが、「下ゆく水のとこそ申せ」といひたる、などてかく忘れつるならん。これに教へらるゝもをかし。

◎げにいかならんと　(春)彼の中將の語られしをうけて、げに后宮の御氣色はいかならむと、心もとなく憚るべき事もなしと清少の心なり。◎左の大殿がたの　(春)道長公。長德二年七月廿日轉二左大臣一と公卿補任にあり　◎しるすぢ　(補)道長公の方の人と知り合ひの筋。俗に縁引(エンヒキ)などいふに同じ。◎さゝめき　(補)私語。◎さし集ひ云々　(補)女房達集まりて、話し合ひゐる中へ、清女が下局より參るを見ては、急に其の談話を中止してとなり。◎放ち出でたるさまに見ならはす云々　(補)出でたるは、出したるといふ詞の、古きいひかたなり。俗に放(ハツ)り出し、突き出して、仲間に入れぬやうに、仕向けて見するが憎くければの意。諸本見ならはずと、す文字を濁りて、否定の助辭と解したるは精しからず。女房達の見馴れずにはあらで、清少をして、斯樣に見馴らはす也、見馴れしむることにて、使役相の助詞なれば、混(マガ)ふべからず。◎宮の邊　(補)宮のほとりとよむべし。慶安本抄本に邊とかきて、ホトリと傍訓せり。活本に邊の字をあて、俗へンとよみ、遂に假名にへんとも書きしなるべし。◎あなたがたにいひなし　(補)彼方がた、即ち道長方の方人と讒して也。考異に「あなたこなたに」と改めたれど、千蔭校本には、本文の如くあり。此の方よく聞ゆ。◎例ならず云々　(補)常はかく御消息の絶えたる事もなきに、此の日ごろ、例ならず打絶えたれば。◎打ちながむる　(補)思物ひすることを、ながむといへり。唯遠望することにはあらず。◎をさめ　(補)長女。下仕の女官の取締り。上にも註せり。◎こゝにてさへひきしのぶる　(補)后宮より、宰相の君の手を經て、內々

放ち出で諸本放ち立てとあり千本による

宰相千本による春本は左京とあれども

げにいかならんと思ひまゐらする御氣色（ミケシキ）にはあらで、さぶらふ人たちの、左の大殿（ヒダンノオホイドノ）がたの人しるすぢにてありなど、さゝめき、さしつどひてものなどいふに、下（シモ）より參るを見てはいひやみ、放ち出でたるさまに見ならはす、にくければ、「まゐれ」などある仰せごとをも過ごして、げに久しうなりにけるを、宮の邊には、たゞあなたがたにいひなして、そらごとなども出でくべし。例ならずおほせごとなどもなくて、日ごろになれば、心ぼそくてうちながむるほどに、をさめ文をもてきたり。（長女が詞）「おまへより、宰相の君して、しのびて給はせたりつる」といひて、こゝにてさへひきしのぶるもあまりなり。（中宮の仰せ）人づての仰せごとにはあらぬなめりと胸つぶれて、とくあけたれば、紙にはものもかゝせ給はず。山吹の花びらを只一つ包（ツヽ）ませ給へり。それに「いはでおもふぞ」とかゝせ給へるを見るも、いみじう日ごろのたえま、思ひなげかれつる心も慰みてうれしきに、まづしるさまを、長女もうちまもりて、「御前にはいかに物のをりごとに、おぼし出で聞えさせ給ふなるものを」とて、「たれもあやしき御ながゐとこそ侍るめれ。などか參らせたまはぬ」などいひて、「こゝなる所に、あからさまにまかりてまゐらん」といひていぬるのちに、御返りごとかきてまゐらせんとするに、このうたのもと、さらに忘れたり。いとあやし。「おなじふるごとと

二條の南、東洞院の東と拾芥にあり。【補】日本紀略 正暦二年十一月廿七日の條に、今日中宮自二内裏一遷二御新造二條院一とある是れなるべし。爾來中宮の御料と定まり、時々遷御ありし事見ゆ。晩年ひたすら此の御所に御籠居の趣なり。◎右中將 〔解〕齊信卿にや。【補】按ずるに、古本の右中將とあるによれば、長德二年七月二十七日、例の源中將經房、任二右近權中將一と公卿補任に見ゆる此の人なるべし。◎物こそあはれなりつれ 【補】榮枯の狀の、忽ちに變れるを見て、感慨無量なる意。◎たゆますてなかしう ◎落ちぶれの折にも、左法懈怠なき也。【補】たゆまずは、心に弛びなきこと。なかしは風雅の意。◎黃朽葉 【補】經（タテ）紅、緯（ヌキ）黃の織物也。◎薄色のも 【補】紫の薄色の唐衣も、紫苑色、萩（經靑緯蘇芳）などもの意。もは助辭なり。諸註裳と解したるはたがへり。當時女房の裳に、萩などいふはなし。◎御里居心うし 【補】清少の我が里邸に籠居して、出仕せぬをいふ。以下宰相の君等、女房たちの右中將に云ひ聞かする詞。◎かゝる所に云々 【補】皇后のかゝる假御所に御籠居の折柄などには、清女にいかなる事情ありとも、必ず側近に常侍してあるべき者と、豫て宮にも思召したるに、其のかひなくとなり。◎かたり聞かせ 【補】右中將をとほして、清少に語れとなり。中將は清女に懇意の事なれば、それとなく言ひ聞かせつる也。◎露臺 【補】廊の如くにて、屋の覆ひなき所 ◎ぼうたん 〔解〕牡丹也。花の比ならねど、枝葉も唐めきしとにや。唐朝に盛にもてあそびし事、白氏文集、愛蓮說などに見えたれば、からめきなかしといふにや、◎いさ人のにくしと云々 【補】いさは、俗言イヤサなり。さ文字清む。或人が清少を惡み居れば、其の人のにくさにと也。◎おいらか 【補】詞の本は「老らか」にて、老成の人の、勘辨ありて寬容なるより、大人（オトナ）しきことにいへる詞なり。中將の大やうなりと、裏の詞をいひて笑へる也。

の唐衣、薄色のも、しをん（唐衣のいろ也）萩なども、をかしうゐなみたるかな。御前の草のいと高きを、「などかこれは茂りて侍る。はらはせてこそ」といひつれば、「露おかせて御覧ぜんとて、ことさらに」と、宰相の君のこゑにていらへつるなり。をかしくもおぼえつるかな。「御里居（オンサトヰ）いと心うし。かゝる所にすまひせさせ給はんほどは、いみじき事ありとも、必ずさぶらふべき者におぼしめされたるに、かひもなく」と、あまたいひつる。かたりきかせ奉れとなめりしかし。まゐりて見給へ。あはれげなる所のさまかな。露臺（ロタイ）の前にうゑられたりけるぼうたんの、からめきをかしき事」などの給ふ。（清少の詞）「いさ、人のにくしと思ひたりしかば、又にくゝ侍りしかば」といらへきこゆ。（右中將の詞也）「おいらかにもとてわらひ給ふ。

◎故殿などおはしまさで云々　〔春〕關白道隆公薨し給ひて、御堂殿關白し給ひしに、道長公道隆公と兄弟の御中よからざるにそへて、伊周公も下心いどみがちにありしに、伊周公其の時太上天皇花山院を、由なき恨にて射奉らんとし給ひしつみ、又禁中ならで行はせ給はぬ大元帥ノ法を、伊周公年ごろおこなひ給へるつみ、又其比の女院東三條院をのろひ給へりと云ふ罪などにて、長德二年四月太宰權帥に左遷し給へり。御弟の隆家卿も、花山院をゐ給はんとせしつみありとて、出雲へ配流せり。后宮定子は此御恨にて御ぐしおろして籠りおはす由、榮花物語三四の卷大鏡にも見ゆ。◎何ともなくうたて　〔春〕其のころ清少を妬む者有りて、御堂殿がたへ淸少の心ざしありと、讒したるゆゑ、久しく后宮へ出仕せざりし也。◎小二條　〔春〕

分断せられしなるべし。◎八幡の云々　〔補〕以下は女房のいへる詞なり。◎などてかへりて　〔補〕何として、御前へ還り參りて、例の遊びなせざるかとなり。公事根源に、次の日還立の儀あり、南祭は御前に召さず。云々。前註の如く弓場殿にて勸盃。祿賜ふばかりにて、御前へ召さゞる例なりき。㊀うしろより　〔補〕後列の者より、先づ退出する作法をいふ。㊀さらばいかにめでたく　〔補〕御前へ召して、舞はせられむには、いか斗り結構ならむと也　㊀さしもや云々　〔補〕御前へ召さるゝ事、毎年の例ならねば、さやうの事もあらじと、油断しゐたること。◎下にある　〔補〕下局(シモツボネ)になりし女房たち。◎惑ひのぼる　〔補〕うへ（清涼殿）へ參るをいふ。さまこその下、見苦しけれの意。從者(ズサ)などの見るも知らず。裳を頭にかぶる狀卽ちそれなり。◎裳を頭に　〔補〕長き裳を引きあるきては、急の間に合はざる故に、頭上に被るやうにして行くを、かくいへり。

右中将　春本左とあり千本による

一三二（久しき里居）

故殿などおはしまさで、世の中に事出でき、物さわがしく成りて、宮又うちにも入らせ給はず。小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里にゐたり。御まへわたりおぼつかなさにぞ、猶えかくてはあるまじかりける。右中将おはしまして物語し給ふ「けふは宮に參りたれば、いみじく物こそあはれなりつれ。女房のさうぞく、裳唐衣などこのをりにあひたゆまずて、をかしうもさぶらふかな。みすのそばのあきたりつるより見入れつれば、八九人ばかりゐて、黄朽葉(キクチバ)

傳へしからに、清少も臨時祭の神樂の事より聯想して、ふと實方生前の事にも及びしならむか。果して然りとすれば、この一文は實方の歿せし長德四年以後の、追記なるべくや。

一三一 （八幡の臨時祭のなごり）

「やはたの臨時の祭の日のなごりこそいとつれ〴〵なれ。などて、かへりて又舞ふわざをせざりけん。さらばをかしからまし。祿を得て、うしろよりまかづるこそくちをしけれ。」などいふを、うへ（一條院）の御まへにきこしめして、あすかへりたらん、召してまはせん」などおほせらる。「まことに（清少）やさぶらふらん。さらばいかにめでたからん」など申す。うれしがりて、宮の（后宮へも申しし也）御まへにも、「猶それまはせさせ給へと申させたまへ」など集まりて申しまどひしかば、其のたび還りてまひしは、うれしかりしものかな。さしもやあらざらんと、うちたゆみつるに、まひ人御前にめすをきゝつけたるこゝち、物にあたるばかりさわぐもいと物ぐるほし。下にある人々のまどひのぼるさまこそ、人のずさ、殿上人などの見るらんもしらず。裳をかしらにうちかづきてのぼるを、わらふもことわり也。

此の段は、前の賀茂の臨時祭の記事につゞきたる文なりけむを、故中將に關する追記の文の挿入によりて、

で行て見ると也。◎松のけぶり [illegible]松明の烟。◎橋の板を云々 (春)賀茂の橋なり。みたらしにあり。◎神もうれしと [illegible]夏陰云、拾遺集神樂。藤原忠房「めづらしきけふの春日のやをとめを神もうれしとしのばざらめや」此の詞をとれり。

中將といひける人の、年每にまひ人にて、めでたきものに思ひしみけるに、なくなりて、上の御やしろの一の橋のもとにあなるをきけば、ゆゝしう、せちに物おもひいれじとおもへど、なほこのめでたき事をこそ、更にえおもひすつまじけれ。

この一段、前の賀茂祉の、神樂のこと書ける序に、過ぎにし事思ひ出でて、後に其の傍に書き添へたるが、遂に本文の間に入りたるならむ。◎中將 [illegible]流布本少將とあれど、古本に中將とあるに從へば、春註に實方の事にやといへるも或は然らむ。◎上の社の云々 (春)是れ橋本の社の事にや。賀茂の橋本のやしろは、藤原實方をいはひし由つれ／＼草に見ゆ。此事にや、◎ゆゝしう (春)忌々しきこと也。深く物に執著すまじき事と也。直按するに、實方は歌人としてのみ名高けれど、舞樂の方にも亦優れたるにや。古事談等に、此の人臨時の祭の試樂に遲參して、挿頭(カザシ)の花を賜はらず。吳竹の臺に近つき、竹枝を折りて冠にさして、めでたく舞ひければ、後の例となりし由の物語あり。又此の人短氣の過失ありて、陸奧守に左遷せられて、長德四年うせけるが、都にありし時、藏人ノ頭にならでやみし執著のこりて、雀となりて殿上の臺盤の食を啄みたる由の傳説もあり。實方の左遷は、歌の評にて行成を怨み、其の冠を打ち落したるにあり。さしたる罪科にもあらねば、當時の人々、實方の心事に同情する餘り、雀になりて歸來せし由の、執著談も起りしならむ。それは後の一笑話に過ぎざれども、實方の靈の、橋本の社に止まる由は、早う其の世にもいひ

還立は、還遊(カヘリアソビ)とも稱す。其の度には、先づ前日清涼殿の前庭にて試樂あり。かくて當日社頭に於て舞樂を奏し、終つて使舞人皆々宮中に歸り參り、更に清涼殿の前庭に於て、重ねて奏樂するを例とす。公事根源に、社頭の儀果て、使舞人歸り參りて、還立の儀あり。孫廂に御床子をたつ。御引直衣に御草鞋をめす。額の間より出御あり、階の間のとほりの庭、南北二行に座を敷きて、使舞人つく。うしろに本末(モトスヱ)の神樂の所作人、陪從、近衛の召人つく、出御ありて公卿召あれば、簀子長橋に候ず。壁の下に頭以下着きて、使舞人を召す。勸盃ありて神樂あり。云々と見ゆ。是れ還立の御神樂の式なり。◎庭火 (補)庭上に焚く燈火なり。地上に金輪を立て、輪の中に薪を積みて焚くなり。主殿寮の官人、膝突とて、小さき疊に著座して之を勤む。◎ざえのをのこ (補)才の男。和訓栞に、神樂の歌人なりと見ゆ。歌人の中にて、才藝ある男の意か。春抄に雲圖抄を引いて、人長立舞。次勸盃。次人長進召二才男一とのみ記し、後の諸註亦皆これを取りながら、何の爲に才男を召すにか。又才男も、何の爲に飛び來るにかを明かにせず。直按ずるに、雲圖抄右文の次に、人長申下請可レ勤二仕先張(サイハリ)一由上とあれば、才の男は先張(サイハリ)の曲を歌はむ爲に、急ぎ來る也。さて前張は、大小の別あり。神樂の別曲ともいふべく、歌詞十五六首あり。◎人長 (補)神樂人の長なり。長の字濁りてヂヤウと唱ふ。◎こゝちよげさ (補)古本神樂次第によれば先づ人長庭燎の前に出來て云く、「ナリ高シ〳〵、フルマフ〳〵、今宵ノ夜ノ御神(ミカミ)ワザの長(ヲサ)、左の近イ衞(マモリ)ノ府(ツカサ)ノ將監(マツリ)ゴト人正(オホ)イ六ノ位ノシナ某云々。」左右に本末(モトスヱ)の拍子、伶官數人、笏拍子を執り、和琴、神樂笛、篳篥一管にて、閑韓神(シヅカラカン)を歌ふに、合せて舞ふなり。かゝれは、其の得意然たる狀こゝちよげさ想ふべし。◎里なる時 (補)里邸に住居の時 ◎わたるを見るに ◎里人は御前の儀などは見れば、使舞人などの、大路をわたるを見て、猶あかで、賀茂ま

此のたびは又もあるまじければにや、いみじくこそ、はてなん事はくちをしけれ。上達部なども皆つゞきて出で給ひぬれば、いとさう〴〵しうくちをしきに、賀茂の臨時のまつりは、かへりだちの御かぐらなどにこそなぐさめらるれ。庭火（ニハビ）のけふりのほそうのぼりたるに、かぐらの笛のおもしろうわななき、ほそう吹きすまされたるに、歌の聲もいとあはれにいみじくおもしろく、さむくさえこほりて、うちたるきぬもいとつめたう、扇もたる手のひゆるもおぼえず。ざえのをのこども召して飛びきたる、人長（ニンヂヤウ）のこゝちよげさなどこそいみじけれ。里なるときはたゞわたるを見るにあかねば、御やしろまで行きて見る折もあり。おほきなる木のもとに車たてたれば、松のけぶりのたなびきて、火のかけに半臂のを、きぬのつやも、ひるよりはこよなくまさりてぞ見ゆる。はしの板をふみならしつゝ、こゑあはせてまふほどもいとをかしきに、水のながるゝおと、ふえのこゑなどあひたるは、まことに神もうれしとおぼしめすらんかし。

◎此のたびは云々 [補]石清水臨時祭の度をいふ。按ずるに此の祭にも還立はあれど、御前に召さず。弓場殿にて勸盃。祿賜ふのみにて、賀茂の臨時祭の如く、又更に、御前にて舞ふことなければ也。◎かへり立の御神樂 [補]石清水の祭に反して、賀茂の臨時祭には、還立の遊びある例なれば、それに慰めらるとなり。

有度濱に打ちよする波は、なゝくさの妹、言(コト)こそ好(ヨ)し、あへる時いざされなんや。」◎竹のませ ▢御庭の竹のもとを結へる籬(マガキ)。◎御琴うちたる ▢神樂の和琴の彈法。◎二人ばかり出でて ▢舞人二人ほど先づいづる也。江次第に、一ノ舞二人先進、上﨟者出レ自ニ露臺南四間一、下﨟出レ自ニ第二間一とあり。はしり出でとある本わろし。舞人御前にて走る事更になし。◎半臂の緒云々 ▢上文「はるかなるもの」の條に、註せり。◎あやもなきこまつ ▢濱臣翁、あやもなきは歌詞也、といへれど其の詞を示さず、直按するに「こまつ」は諸本「こま山」とあれど、論なく「こまつ」の誤寫なり。東遊歌圖に「知止利(千鳥)故に濱に出て遊ぶ 千鳥ゆゑに、あやもなき、小松がうれに、綱な張りそ。」とある、此の歌詞にて知られたり。◎大比禮 ▢是れも同じく駿河舞の曲名なり。千蔭校本は、一本により「おほわ」としたれど、猶大ひれなるべし。其の歌詞は、「大ひれや小ひれの山は寄りてこそ云々と同書に見ゆ。江次第に、次ニ右ノ祖進(イデンテ)舞ニ求子一畢、舞人白レ下退返、大比禮ノ後、使舞人退出とあるにて、最終に舞ふ曲なる事知るべし。◎はてぬる ▢大比禮にて、今日の舞曲は終るをいふ。◎まだあるべし ▢まだのた濁るべきにや。また此の次にも舞曲あるべしと思ふ時は、賴もしけれど、今日の番組は、大比禮を最終として、御琴を舁き返し、皆々退出するが殘り惜しとならむ。◎ぬぎたれつるさま ▢江次第曰、袒ノ右、只袒ニ[illegible]袖許一、不レ袒ニ半臂下重一、◎かいねり ▢掻練。張りたる絹帛に對して、練りて糊をおとし、打ちて光澤を出したる物。禁中名目抄に、皆練(カイネリ)とかきて、表紅ノ打、裏紅ノ[illegible]紗張也、今是チ皆練ト云とあり。昔は紅に限らず、白も黒もあり 舞人の下襲は白練なり。◎下襲のみだれあひ ▢當時の風、下襲の裾を長く曳きたる事、誰れか知らざらむ。四位五位の人のも、五六尺ありけんからに、返り入る後手(ウシロデ)、人々の裾の折れ亂れなどもせしなるべし。

の夜久島に產出するを以て、夜久の斑貝とも呼ぶ也。今、夜光貝と稱して酒盃に造るは、夜久貝の轉なりといへり。(箋注)◎とりばみ　(補)後世は乞食の事をいへれど、もと饗膳の餘り物を、おろし賜はるを、下衆の者どもの取り得て食ふ事なり。宇治拾遺物語一、利仁將軍の家の事をいひて、「そのかみは、大饗はてて、取食(トリバミ)といふ者を、拂ひて入れずして、大饗のおろし米とて、給仕したる恪勤(カクゴ)の者共の食ひける也。とあるにて知るべし。◎ひたき屋　(補)この火焼屋は、宮門の障屋などに、衞士の火たきて、警衞し居る所とは異なりて、臨時に庭前に設けて、供饌などの用意する所なり。延喜式花鳥餘情にも其の證あり、年中行事繪卷大饗の所に、小幄舍の中にて、酒などあたゝむる圖見ゆる是れなり。諸註貞丈雜記の說を引きたるは、あたらず。◎かしこき納殿　(參)也足軒御說云、何にてもをさめおかる所也。(補)大切なる物納れ場所といふが如し。下(オロ)しの物を、手早く取りて隱しおくを、戲れてかくいへる也。◎たゝみ云々　(補)薦(ムシロ)のこと。昔は今の疊の如く、厚きものにあらず。帖み得る薦なるからにタヽミといへり。舞人等酒饌を賜はる間、座してゐたるを、饗(キヤウハ)終てゝ立つや否や、庭上を取りかたつくるさまなり。◎承香殿　(補)清涼殿の東北、仁壽殿のうしろ。◎はうし　(補)拍子うちて、管絃を合奏するを遊ぶといふ。(參)江次第六、臨時祭舞ノ略云、主上出御有て、王卿着堂して殿上人壁下の座に着、さて使舞人などを召て、陪從音樂をなす。藏人所の雜色二人、御琴を舁て、吳竹の臺のものに至る。主上藏人頭をめして、一の舞を仰せ定らる。舞人すゝみて、駿河舞をまふ也。先一の舞二人進出てまへり。其後次々の舞あり。舞人上より退いて、竹臺の東に至る。次に右の袒いて、進みて求子(モトメコ)をまへり。舞をはりて舞人下より退く。大比禮をかなでし後。使舞人退出云云。◎有度濱　(補)東遊(アツマアソビ)の曲名。群書類聚第三百五十、東遊歌圖に、歌詞を載す。「ヤ有度濱に、駿河なる

むかひて立ちぬ。つぎ〳〵出づるに、あしぶみをはうしにあはせては、半臂の緒つくろひ、かうぶり、きぬのくびなどつくろひて、あやもなき、こまつなどうたひて舞ひたるは、すべていみじうめでたし。大比禮などまふは、日ひとひ見るともあくまじきを、はてぬるこそいとくちをしけれど、またあるべしと思ふはたのもしきに、みことかきかへして、此のたびはやがて竹のうしろよりまひ出でて、ぬぎたれつるさまどものなまめかしさは、いみじくこそあれ。かいねりのつや、下襲などのみだれあひて、こなたかなたにわたりなどしたる、いで更にいへばよのつね也。

とあれど非。こまつ　諸本こま山とあれど東遊歌圖の歌詞に據りて改む

かいねりのつや　諸本つやの字なし千陸本による

◎所の衆　圖藏人所の衆の略。事務見習のため同所に勤務する若き下役。◎ついがされ　圖衝重。食物を盛りたる盤をのする臺。檜の薄板にて箱樣の物を造り、側面に眼象とて穴をあけ、臺の上には折敷やうの角盆を重ぬる故に、衝重といふ。春註に石清水の臨時祭の御前の座に、內藏寮衝重をすうる事江次第六に見ゆ。所の衆は舞人陪從の瓶子を執る。衝重をすうる事おぼつかなし云々といひ、他の註にも、江次第の文を引いて云々すれど、此の段は、清女自から「ひがおぼえもあらむ」と、ことわりいへる如く、儀式故實を傳ふる記事ならず、唯大かたの樣をいへるなれば、深き穿鑿に及ばざるべし。◎前　圖出仕の舞人等の前毎になり。◎陪從　圖もと地下の樂人にて、御神樂の時、舞人に從つて、琴笛を奏する者をいふ。◎夜久貝　圖大隅の屋久島より出づる貝。濱臣云、和名抄龜貝類云、錦貝、辨色立成云、錦貝。夜久乃斑貝。今按、西海有二夜久島一彼島所レ出也、狩谷氏の說に、貝の質紫黑にして光彩斑文あり。故に錦貝と名づけ、其

夜久貝といふ物の下諸本文字多く脱せりす今千本により補ふ

二人ばかり諸本はしり

實職員令修成時分、掃部の字を充てゝ、猶カニモリと稱へ、又カモリとも、カンモリとも稱ふるに至りし也。なほ酒掃のみならず、簾床席等の敷設をも役とす。◎つかひは北向に（春）賀茂の臨時祭の使の座は北面。南祭の時は又南面なるよし雲圖抄にあり。此の草紙のさまは、南祭のよしなれば不審也。よりて是らはひが事にもやあらんといへるにや。大やうに書きたるなるべし。

所の衆ども、ついがさねどもとりて、まへごとにすゑわたし、陪從も、其の日は御前に出でいるぞかし。公卿殿上人は、かはる〴〵盃とりて、はてには夜久貝といふ物して飲みてたつ。すなはちとりばみといふもの、をのこなどのせんだにうたてあるを、御前に女ぞ出でてとりける。思ひかけず人やあらんともしらぬ、ひたき屋より、にはかにさし出でて、多く取らんとさわく者は、なか〳〵うちこぼしてあつかふ程に、かろらかにふと取りていぬるものにはおくれぬ。かしこき納殿に火燒屋をして、とりいるゝこそをかしけれ。かんもりづかさの者ども、たゝみとるやおそきと、とのもりの官人ども、手ごとにはゝきとり、すなごならす。承香殿（ジヤウキヤウデン）のまへのほどに、笛ふきたて、はうし（拍子）うちてあそぶを、とく出でこなんとまつに、有度濱（ウドハマ）うたひて、竹のませのもとにあゆみ出でて、みことうちたるほど、たゞいかにせんとぞおぼゆるや。一の舞のいとうるはしく、袖をあはせて二人ばかり出できて、西に

思ふ限りなし、書かむとて物せし迄なり。と辯解を記したるにぞあるべき。

一三〇（なほよにめでたきもの）

なほよにめでたきもの。臨時のまつりの、おまへばかりの事は何ごとにかあらん。試樂もいとをかし。春は空のけしきのどかにてうら〳〵とあるに、淸凉殿の御まへの庭に、かもりづかさの、たゝみどもをしきて、つかひは北むきに、舞人は御前のかたに向きて。これらはひがおぼえもあらん。

> 北むき流布本北面とありひがおぼえこれもひが事とあり

◎臨時のまつり　【圖】石淸水八幡宮の祭は三月中の午の日。賀茂のは十一月下の酉の日なるが、次の詞に、春は空の景色云々とあれば、八幡宮の臨時祭の事と聞ゆ。◎御前ばかりの事は　【補】石淸水の祭には、社頭に於て神樂あり。其の以前に行はるゝ淸凉殿の御前の樣をいへる也。千蔭云、ばかりはあたりなどいふに同じ。御前わたりの作法のいみじきは何事にか。又かばかりの事やあらむといへる心なり。◎試樂　【春】臨時の祭の音樂を、先こゝろむる心也。石淸水の臨時祭の試樂は、祭の前一兩日に行レ之。賀茂同レ之と雲圖抄にあり。御殿の孫庇に倚子たてゝ出御ありて、四位藏人、舞人をめせば、舞人竹臺のもとにて竹の枝を折かざして、仁壽殿の廊の下より御前につらなり、陪從近衞の召人、求子うたひ、琴笛ひちりきのねをあはせ、舞人舞終りて、大比禮かへしうたひてまかり出る由。公事根源にあり。◎かもりつかさ　【圖】掃部司、神代に海濱の御產所へ、蟹の這ひ來るを掃ひたる故事により、御殿の洒掃などする役を、蟹守（カニモリ）といひ、大

かゝんとて有りしなり。

◎みそひめ　〔補〕御衣糊様、或説に、非米(ヒメ)。非レ粥之義也と和名抄にあり。衣にひめ糊(ノリ)して張るは、固(コハ)くせんためなるに、ぬれては取り所なかるべし　◎これいみじうわろきこと云々　〔補〕按ずるに、この段は、最初「取り所なきもの」の題下に、(一)容(カタチニク)憎さげに心惡しき人(二)御衣ひめの濡れたる」此の二項のみ記しおかれたるが、後日に讀み見て、(一)容憎さけに云々の傍に、自づから「これいみじうわろきこと云々」と、辯解の語を追記したるならむ。抑この草子は、夙(ハヤ)う左中將經房の、まだ伊勢守といひたりし時、もて行きて、久しき後に返り來しむれ、跋文に見えたり。然りし後に、また舊稿を改刪もし、或は其のかたはらなどに、書き加へたる文もありし體なるは、此の條のみならず外にも見ゆ。されば次下の文は、あとより書き加へし、辯疏の詞と心得べし。さて容(ガタチ)憎く心あしきと、惡口の限りを記したれば、見む人記者の清少を憎むべけれど、既に人にも讀まれたるものを、今更削り止むべきにもあらずとて、次の例を記せる也。◎あとびの火筋　〔補〕葬送に門燎(カドビ)をたくを、跡火ともいへり。其の時、竹の箸を用ふるを、門火の燃ゆる中に投げ入れて焼き失ふ法にて、それが焼けず殘るを忌む事とするは、近世までの習俗なりき。されば跡火の火筋といふこと、禍々(マガマガ)しく忌むべきものなれど、何とて云ひ出づまじきぞ。世上に一般する事にて、皆人も知りたらむと也。かたぐ\〳〵按ずるに、諸註これをも、取り所なきものとして說けるは當らず。◎げにかき出で　〔補〕此の下「人の見るべき」といふ詞重なりていと拙し。按ずるに、もとは「かき出(イツ)べき事にあらねど」とありしを、出の下に「て」文字を加へ、倘「人の見るべき」と下なる一句をも誤りて書き入れたるならむ。◎人の見るべき云々　〔補〕元より人に見すべきものとも思はざりし故に、何事をも憚らず、唯心中に

其の上雪百面の霏々として降りたらむにいかにっ「まして」とある詞に心を付くべし。

一二八（つれ〴〵なぐさむるもの）

つれ〴〵慰むるもの。物語。碁。雙六。三つ四つばかりなるちごの、物をかしういふ。又いとちひさきちごの、ものがたりしたる。くだ物。をとこのうちさるがひ、物よくいふが來たるには、物忌なれどいれつかし。

◎物語 [illegible]作り物語にて、今いふ小說のこと。◎ちご [illegible]乳兒の意なり。◎物をかしういふ [illegible]片言交りに物いふが愛らしければ也 ◎ものがたりしたる [illegible]今も小兒の、物いふ如くなるを、カタルといへる是れなり。◎さるがひ [illegible]さるがふこと上に註せり。面白く滑稽する事なり。

一二九（とりどころなきもの）

とり所なきもの。かたちにくさげに心あしき人。みそひめのぬれたる。これいみじうわろき事いひたると、よろづの人のにくむなる事とて、今とゞむべきにもあらず。またあとびの火ばしといふ事。などてか、世になき事ならねば、皆人しもたらん。げにかき出で、人の見るべき事にはあらねど、此のさうしを人の見るべきものと思はざりしかば、あやしき事をも、にくき事をも、只思ふことの限りを

人の見るべきといふ詞上下重複せり上の方は衍文ならむ

秋になればちゝよ／＼と鳴くといふ傳說、此草子上文にも見えたり。されば賤きてあるく下衆(ゲス)を、鬼童(オニワラハ)など呼びならへるなるべし。◎臺盤所　圖清涼殿の西庇の室名。天皇專屬の女房の詰所。◎刀自　圖女官の職名。◎もとなりける　圖もとは許にて、刀自の許に仕はるゝ童なり。諸本ともとあり。顚倒して寫し誤りたるに心つかず、供の字をあてたるもあれど、千翁は正に古本によりて「もと」に改めたり。◎小兵衞　圖女房の名　◎ひきゆるがし奉り　圖主上の御袖を引き、御膝をゆるがし奉るなど、せめ聞えて遂に眞相を承はりし也。御乳母なれば、馴れ奉り怨み奉りなどして、誇りかなるさまを、書きあらはしたる也。◎しれ／″＼しう　圖愚痴なる樣なり。わざとおろかしき童を使ひたるなるべし。

一二七（つれ／″＼なるもの）

つれ／″＼なるもの。ところさりたる物忌。むまおりぬすぐろく。除目につかさえぬ人の家。雨うちふりたるはましてつれ／″＼なり。

◎つれ／＼　圖心さびしく、さりとて手の下しやうなきにいへる詞なり。◎所さりたる　圖物忌のために常住の家を、遠く離れてゐること。◎むまおりぬ雙六　圖むまは馬なり。近俗に駒といふ物。抄本にめとあるは、さもいひたるらむ。猶馬の吳音なり。然るに濱臣は、めを釆のことと思へるはたがへり。昔の雙六は、黑白の駒十五づゝあり。之を雙六盤の上に相對してつみおき、二つの釆の目次第に、駒二つ宛を進めて、勝負を決するにて、「馬おりぬ」は積みたる駒の、下りて進まぬことをいへる也。然るを、釆の目の出ぬ事と誤解せるならむ。◎除目　圖上に出でたり。今年も亦任官し得ずと思へる家族は、心淋しからむ。

ほこりかにあいぎやうづきてをかし。さてうへの臺盤所にても、わらひのゝしりて、（藤三位のつぼね也）つぼねにおりて、此のわらはたづね出でて、文とりいれし人に見すれば、「それにこそ侍るめれ」といふ。「たれが文を誰れがとらせしぞ」といへば、しれ〴〵しうゑみて、ともかくもいはで走りにけり。藤大納言後に聞きて笑ひ興じ給ひけり。

此の一段、世間流布の本は脱字いと多し。武藤氏の考異、勉められたれど、猶いまだしき所あり。千蔭翁、御側の古本及び家藏の別本に比校し、改めも補ひもせられたるいと精しければ、さながら爰にうつしつ。他本と比べ見て、千蔭校本のいと優れる點を悟るべし。◎二つながら 〔評〕椎柴の袖のうたと、藤大納言の返歌と、二つをもて、藤三位參內する也。◎宮はいとつれなく 〔評〕后宮は、帝の御しわざを知りながら、知らぬさま也。猶つれなしとは、常に變りたる樣子のなきこと。同情せぬことにもいへり。◎昔の鬼の 〔評〕この一句千蔭翁の校本と、武藤氏の考異のみに見えたり。中宮の御戲言いとをかし。◎すき〴〵しき心ある 〔評〕すき〴〵しきに、物好をなする意。心あるの一句に、武藤氏の考異にも見えず。◎僧綱 〔釋〕僧官の名。僧正、僧都、律師を總稱す。◎おぼめき 〔評〕疑ひたる心なり。◎しきし 〔釋〕胡桃色の文をさす。色紙のこと上に註せり。〔釋〕厨子 〔釋〕書櫃。文書を容れて、座側に居ゑおく具。◎いかでとく開き侍らむ 〔評〕眞實の事を仰せられよ。いかで一刻も早く、其の眞相を開き侍らむとなり。とくの語、一句中の眼目なり。武藤氏の本にもとくの二字落ちたり。◎おほせられ 〔評〕帝の御しわざと也。◎鬼童 〔釋〕簑蟲のやうなるとありし首尾なり。〔釋〕簑蟲は鬼の生みける子にて、親に似て見苦しからむと、あしき衣きせて捨ておきけるより、

昔の鬼の云云いとまめやかに――この一句千蔭本によるしきし春本になし千本による

もとなりける――諸本ともとあるに顧例なり

のみことききこえける御子におはす云々。寛朝僧正也。式部卿敦實親王の三男、雅實公の御弟也 ○藤大納言 ○圓融院の別當ときこゆ、いまだ誰とも勘へ侍らず ○すなはち ○俗に卽刻といふことなり。

それをふたつながらとりて、いそぎまゐりて、「（雅三位の申上る事也）かゝる事なん侍りし」と、うへもおはします御まへにて、かたり申し給ふを、宮はいとつれなく御覽じて、「藤大納言の手のさまにはあらざめり。法師のにこそあめれ。昔の鬼のしわざとこそおぼゆれ」。といとまめやかにのたまはすれば、「さはこは誰れがしわざにか。すき〴〵しき心あるかんだちめ、僧綱などは誰れかはある。それにやかれにや」などおぼめきゆかしがり給ふに、うへ、「此のわたりに見えししきしにこそは、いとよく似ためれ」とうちほゝゑませ給ひて、今ひとつ御厨子のもとなりけるを、とり出でてさし出ださせ給へれば、「いであな心う。これおほせられよ。あなかしらいたや。いかでとくきゝ侍らん」と、たゞせめにせめ申し、うらみきこえて笑ひ給ふに、やう〳〵おほせられ出でて、「御使にいきたりける鬼童は、臺盤所の刀自といふものゝもとなりけるを、小兵衞がかたらひ出だしてしたるにやありけん」などおほせらるれば、宮も笑はせ給ふを、ひきゆるがし奉りて、「などかく、はからせおはします。猶うたがひもなく、手をうち洗ひて、伏しをがみ侍りしことよ」とわらひねたがりゐ給へるさまも、いと

まゝ也。委しきことは拙著宮殿圖解に。◎さなんとは聞かせ奉れど 〔補〕諸本「聞かせ奉らず」とありて、春抄、女房の詞と註したるは非なり。「奉れど」とある古本に據るべし。其れにていはゞ、使の童が來りし事を告げたれども、藤三位は、物忌なれば見ずとて、其の儘に蔀の上部に挿しおきたりとなり。◎卷數 〔補〕御供養のため、寺僧に託して讀誦せしめし經卷の數を記しゝ文なり。天野信景云、大般若一部、仁王經百卷など、卷數を目錄にしたる也。貞丈云たとへば「奉轉讀大般若經六百卷」または「奉誦千卷陀羅尼」云々、其の讀みたる經文の數をかく故、卷數といふ。直云、之に年號月日、施主及び僧の名をも書き添ふるにて、紙のみならず細き板にも書くことあり。之を經數木（クリンスキ）といへること、今昔物語に見ゆ。◎こひいでて 〔補〕思ひ出でてを寫し誤りたるならずや。思の字草體は、こひの假名によく似れば也。さて昨日は物忌なれば外來のものには、愼みて手も觸れざりしを、今日は早朝（貴き卷數の目錄と思ひて）急ぎ拜みて開きたる意なるべし。◎くるみいろ 〔補〕源氏にも、こまの胡桃色の紙とあり。表は香色に裏は白き帋也。〔補〕喪中女房の袴の色に似ればなるべし。◎これをだに 〔補〕一條天皇御戲れの御製なり。按ずるに、これをとは椎柴をいふ。喪服の染料にすればなり。榮花物語、村上帝の諒闇の條に、上下墨染を着る事を形容して「一天下の人烏（カラス）のやうなり。四方山の椎柴（シヒシバ）殘らじと見ゆ。」とあるにて知るべし。千蔭云、椎は葉がへせぬ例にいへるを、此處に葉がへやしつるとよみ給へるは、服ぬぎたるに比興していひなし給へる御詞なるべしと又按ふに、歌の意は、作者を山奧の僧のやうに思はせ給ひて、都の上﨟は、今や內服を脫ぎて、花やぎ給ふか。我れは此の椎葉にて染めたる服を、せめては故院の御形見と、しのび奉るにとなり。◎仁和寺の僧正 〔補〕榮花物語三云。仁和寺の僧正ときこゆるは、土御門の源氏のおとゞの御はらからにおはす。にわじ

ないふ。⊙花のころもに 〔[illegible]〕仁明天皇の御果過ぎて、人々叙爵などせし時、遍昭「皆人は花の衣に成ぬ也苔の袂よかはきだにせよ。」又榮花物語四に、かくて月日も過ぎもゆきて正暦三年に成ぬ、哀にはかなき世になん。二月には御果あるべきなれば天の下急ぎたり。御はてなどせさせ給ひつ。世の中のうすにびなどはてゝ花の袂に成ぬるも、いと物のはえあるさま也云々。〔[illegible]〕古今集にもあるなり。此の歌よめる事情は、十訓抄に記す所、要を得たれば抄出せん。

良峯ノ宗貞は、深草〔仁明〕天皇の近臣なり。藏人頭に成りにける時、帝におくれ奉りければ、やがて頭おろしてけり。何處ともなく行ひありきけり……次の年帝の御終(オンハテ)の日にあたりて、殿上人ども御服ぬがんとて、河原に出でたりけるに、

みな人は花の衣になりぬなり云々

とよみて、柏の葉に書きて、あやしき童してさしおかせたりけり。取りて見るに、良少將の手に見なして、いづらとて使を尋ぬるに、見えざりけり。さる程に後には、僧正と成りて、花山僧正遍昭とぞいひける。

花の衣とは、色ある常の服の花やかなるをいふ。苔の袂は僧衣のこと。⊙藤三位 〔[illegible]〕一條天皇の御乳母。⊙簑蟲のやうなる 〔[illegible]〕雨ふりて、笠簑きたるさま也。誰方よりとも、しらすまじきとて、かやうにせし也。⊙木の白き 〔[illegible]〕椎の葉の白きにや 〔[illegible]〕之を白橡といふ。喪服の墨染は、當時この木の葉にて染めし也。⊙たてぶみ 〔[illegible]〕上に註せり ⊙御しとみ 〔[illegible]〕蔀。格子(カウシ)の裏に板を貼りて、上より釣り下げたる戸。上に註せり。「まゐらぬ」とは、蔀を開け放たざること、⊙しもにたてたる 〔[illegible]〕蔀の下の方は大かた常に閉(メテ)置きたる

「きかせたてまつれど」いで其のきのふの云々こひいでて千蔭に從ふ

「したまへる事なめり」の下との一字落ちたるか

れば、御しとみもまゐらぬぞ」とて、しもはたてたるしとみの、かみよりとりいれて、「さなん」とはきかせたてまつれど、「物忌なればえ見ず」とて、かみについさしておきたるを、つとめて手あらひて、いで、其のきのふの卷數こそとこひいでてふしをがみてあけたれば、くるみ色といふしきしのあつごえたるを、あやしと見てあけもてゆけば、老法師のいみじげなるが手にて、

これをだにかたみとおもふに都には葉がへやしつるしひしばの袖

とかきたり。（藤三位の心也）あさましくねたかりけるわざかな。たれがしたるにかあらん。仁和寺の僧正にやと思へど、よにかゝることのたまはじ。猶たれならん。藤大納言ぞ、かの院の別當におはせしかば、其のしたまへる事なめり。これをうへの御まへ宮などに、とうきこしめさせばやとおもふに、いと心もとなけれど、猶おそろしういひたる物忌を、しはてむとねんじくらして、まだつとめて藤大納言の御もとに、此の御返しをしてさしおかせたれば、すなはち又返事しておかせ給へりけり。

◎圓融院　〔參〕一條院の御父帝也。正暦二年二月十三日に崩卅三。御はてとは御一周忌の事也。正暦三年二月の事也。◎御服　〔補〕喪服のこと。ブクと稱ふるも故實とす。主君父母夫の喪には一年間、墨染の粗服を著るなり。◎おほやけ　〔補〕公家。朝廷のことより、天皇の御事をもいへり。此處は天皇の御側近の人々

稱ニ此君一。これ本朝文粹十一に、修竹冬青といふ事を賦したる詩序の詞也 ◎又あつまり 〔補〕殿上の方へ往ぬる源中將新中將等なり ◎いひきしつる 〔補〕きしは期し也約束の心なり。と春註にあり。當時の言葉としては「どし」と言はざりしかと思へど、諸本皆「きし」とあり。◎さることには 〔補〕中將たちの返辭なり。清少の竹を見て、忽ち「この君」といらへし機智の詞には、何の返答をかせん。中々に返答の詞も出でずと也。◎人々出でて見る 〔補〕あまり朗詠すれば也。〔補〕清少以外の女房たちも、おのが局々より立ち出でて也。とりぐ\に云々とは、この女房たちと、殿上人等どちの會談をいふ。◎左衞門の陣 〔補〕建春門 〔補〕職より道を隔てゝ西南にあたる內裏の御門。◎少納言の命婦 〔補〕こには上(ウヘ)の女房とて、天皇專屬の女官なり。御文の使として參りたるが、天皇も興ぜさせ給ひし事を、中宮に啓したる也。◎とりなすとても 〔補〕中宮の御詞にて、行成がいかに取りなしていふとても、清少が此の君の語を發せずば、修飾しては言ひ得ざることゝの意なり。

一二六 （椎柴の袖）

圓融院の御はての年、みな人御服(オンブク)ぬぎなどして、あはれなる事を、おほやけよりはじめて、院の人も「花の衣に」などいひけむ世の御事など思ひ出づるに、雨のいたうふる日、藤三位のつぼねに、みのむしのやうなるわらはの、おほきなる木の白きに、たて文をつけて「これ奉らん」といひければ、「いづこよりぞ、（藤三位のかたの女房の、也）けふあすは御物忌な

頭ノ辨 諸本頭の字を脱す

「めかし」と註したる方よし。優雅なる事。奥ゆかしく思ひよりつらむの意。千蔭本及び考異に「なめし」とあるに從へば無禮の意となる。されど、イ本のなまめかしに從ふ。

まめごとなどいひあはせてゐ給へるに、「此の君とせうす」と誦じて、又あつまりきたれば、「殿上にていひきしつるほいもなくては、などかへり給ひぬるぞ。いとあやしくこそありつれ。」との給へば、「さることには何のいらへをかせん。いとなかなかならん。殿上にてもいひのゝしりつれば、うへもきこしめして興せさせ給ひつる」。と語る。頭ノ辨もろともに、かへすがへす同じことをずんじていとをかしがれば、人々いでて見る。とりどりに物などいひかはしてかへるとても、猶同じことをもろごゑにずんじて、左衛門のぢんに入るまできこゆ。つとめて、いととく少納言の命婦といふが、御文まゐらせたるに、此の事を啓したれば、しもなるをめして、「さる事やありし」と問はせ給へば、「しらず。何ともおもはでいひ出で侍りしを、ゆきなりのあそんの、とりなしたるにや侍らん」と申せば、「とりなすとても」とうちゑませ給へり。たれがことをも、殿上人ほめけりときかせ給ふをば、さいはるゝ人を、よろこばせ給ふもをかし。

㊀晉時實體なる事を談じ合ひてゐ給へるに ㊁此君とせうすと ㊂朗詠。藤篤茂。晉騎兵參軍王子猷、種而

源中將諸本源の字を脱す千本による

「いさやこれ殿上にゆきて語らん」とて、源中將新中將六位どもなど有りけるはいぬ。頭ノ辨はとまり給ひて、（行成の詞）「あやしくいぬる者どもかな。おまへの竹を折りて歌よまんとしつるを、しきにまゐりて、同じくは女房などよび出でてを。といひて來つるを、くれ竹の名をいととくいはれて、いぬるこそをかしけれ。たれがをしへをしりて、人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ」などのたまへば、（清少の詞）「竹の名ともしらぬものを、なまめかしとやおぼしつらん」といへば、「まことぞ。えしらじな」との給ふ。

◎いでて見よ 〔補〕中宮の御前より、廊の入口へ出でて也。◎おどろ〳〵し 〔補〕驚くといふ語より來たる。俗に仰山ラシといふに同じ。◎きはことに 〔補〕殊更に際立ちいふこと。◎くれ竹 〔補〕和名抄に篁竹。吳竹也と見え、徒然草に吳竹は葉細しとあり。清涼殿の東庭、仁壽殿に近き所に、吳竹の臺ある由禁秘抄に見ゆ。其の小枝を折りて持て來たる也。◎おい 〔補〕美隆云、俚言にオヽといふ意なり。されど俗言にては、なめしく聞ゆれど、雅言には無禮しき言葉にあらず。源氏玉かつらの卷に、おいさりおいさり。などいふに同じと。◎この君 〔春〕此君は竹の名也。晉の王子猷、空宅の中に寄居して、竹を植て嘯詠して曰く、何可ニ一日無ニ此君ー この古事にていふ也。〔補〕源中將は經房。新中將は公信か。◎同じくは 〔補〕俗言の同じことなら◎よび出でてを 〔補〕千蔭云、この「を」は「よ」といふに同じ。萬葉、舟わたせをと呼ぶ聲のとある「を」なり。◎たれか教へをしりて 〔補〕此の句の上に、「さるにても」などいふ語を入れて心得べし。清少は誰れの敎を受け、この故事を知りていふぞと也。◎なまめかし 〔補〕春の本文に「なまれたし」どあれど、傍に

おい此の君にこそ

意。俗に禮を申すといふに同じ。◎まろが文を　〔補〕御文はいみじう隱してと、淸女のいへるに對する、行成の詞。◎いかに心うく　〔補〕もし他人に披露あらば、いかほどが憂く辛からむ。今後もなほ賴み申さんと也。「などの給ひて」は「のたまひてき」とありしが落ちたるか。◎頭ノ辨はいみじう云々　〔補〕是れ後日に、經房の來りて、前日の事をいへる也。千蔭本、經房の中將の下「おはして」の一句あるにて、前後の事明瞭せり。◎一日の文について　〔補〕千蔭本かくあるいとよろし。先日の、夜をこめての文に就いて、前の事を經房の語り出で給ふと也。◎思ふ人の人にほめらるゝ〔補〕是れも千蔭本に從ふ。思ふ人は淸少をさすこと云ふに及ばず。文意いと明ならずや。諸本「思ふ人々にほめらるゝ」とありて「の」の一字を脫せしから に、註解もおぼつかなく成りたる也。◎まめやかに　〔補〕眞面目に也。◎かのほめ給ふらむに云々　〔補〕行成卿の淸女をほめ給ふらんその上に、又、經房中將の、思ふ人のうちに、我が身の侍りけるを、嬉しく思ふとなり。下の詞を略せりと知るべし。◎それは今のやうに〔補〕今更らしく喜び給ふかなと也。

一二五（おい此の君にこそ）

五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、「女房やさぶらひ給ふ」とこゑ〴〵していへば、「出でて見よ。（后宮の御ことは）れいならずいふは誰（タ）ぞ」とおほせらるれば、（淸少）いでて「こはたそ。おどろ〳〵しうきはやかなるは」といふに、物もいはで、（殿上人たちのさま也）御簾（ミス）をもたげて、そよろとさしいるゝは、くれ竹の枝なりけり。「おい、（淸少言の詞）この君にこそ」といひたるをきゝて、

文について諸本文のついでにとあるを例の改めつ

など語り給ふ。思ふ人の人にほめらるゝはいみじく嬉しく」など、まめやかにのたまふもをかし「嬉しき事もふたつにてこそ。かのほめ給ふらんに、又思ふ人のうちに侍りけるをなん」といへば、「それはめづらしう、いまの事のやうにもよろこび給ふかな」とのたまふ。

（清少の詞）（つねふさの詞）

さて其の文は云々 （補）是れより行成卿の、後に清女にあひ、其の文の事につきて語る詞にて、清少より夜深く侍りける云々、又夜をこめての歌かきて送りし二つの文は、殿上人に披露したれば、皆見てしはと也。此の「は」は感歎詞なり。◎おぼしけりとは （春）行成の我を眞實におぼすとは、此の文を人々に見せ給ひしにて知りたると也。是我見ぐるしき手跡を、人にみせられしを、耻ち恨むる心をわざと裏をいふ也。◎めでたきことなど （春）名言秀句など、人に聞かせぬはかひなしと也 ◎見苦しきこと散るがわびしければ （補）この一句諸本に「見苦しければ」とのみあり。千蔭翁の、古本に據り補はれたるいとよろし。◎いみじう隱して （春）我文を人に見せ給へるが、滿足ならぬ事をいはんとて、かへりて行成の文、みぐるしければ、人には見せぬと、是もうらをいふ詞也。◎心ざしの程をくらぶるに （春）行成の人に見せ給ふも、我れをおぼす故也。我が人に見せぬも、行成の御ためなれば、心ざしはひとつぞと也。是もたはふれ也。◎かう物思ひしりて云々 （補）斯く諒解して言はるゝこそ、一般の常人には似ずと思へど（清女の文を殿上人に見せたるを）我が思慮を缺きて、わろくしたりと、他の女のやうに怨みいふらむと思ひしにとなり。思ひ隈なしとは深く考へ到らぬといふ意の詞。例の裏をいひて戯れあへるなり。◎こはなぞ云々 （補）清女の返詞。何とてさやうに陳辯し給ふぞ。此方より禮を申すべきにとなり。よろこびなきこゆとは、喜ぶ心を述ぶる

あふ坂は人越えやすき 圏此返歌の心に、清少の僞の鳥には、逢坂の關をゆるさじといへるをうけて、鳥のそらねをはかるまでもなし。只此關は、あけてまつぞといふ事にやとなり。清少に、詞しりたとられて、いひやらんかたなさに、まげていひなしたる歌也。㊀ぬかたなさへつきて ㊀額つきて懇望せし也。㊁のちのちは御前に ㊁逢坂はの歌は、中宮の御前に「取り給ひてき」となり。詞重なれば略したるにこそ。㊂よみへされて ㊂詠み潰されて也。へすとは押しあひへしあひなど、軍記類に見えたる詞の例に同じ。行成に壓伏されて、返歌もえせぬはわろしと、后宮の笑ひ給ひし也。

見ぐるしきこと云々千本による春本等は脫文あり

中將おはして諸本おはしての四字なきを千本

（行成一）「さて其の文は、殿上人みな見てしは」とのたまへば、「まことにおぼしけりとはこれにてこそ知られぬれ。めでたきことなど人のいひつたへぬは、かひなきわざぞかし。又見ぐるしきこと散るがわびしければ、御文はいみじくかくして、人につゆ見せ侍らぬ、心ざしのほどをくらぶるに、ひとしうこそは」といへば、（行成二）「かう物を思ひしりていふこそ、なほ人には似ずおぼゆれ。思ひくまなくあしうしたりなど、例の女のやうにいはんとこそ思ひつれ」。といひて、いみじう笑ひ給ふ。（清少の一）「こはなぞ、よろこびをこそ聞こえめ」。などいふ。（行成の三）「まろが文をかくし給ひける又猶うれしき事なり。いかに心うくつらからまし。今よりも猶頼みきこえん」などの給ひて（き脫カ）後に經房の中將おはして「頭ノ辨はいみじうほめ給ふとは知りたりや。一日の文について、ありし事

は、今の午前二時の頃　◎藏人所　（補）殿上ノ間より、中庭を隔て丶、南なる校書殿内にあり。◎かうやがみ　（春）藏人所にある紙屋紙也。行成今藏人頭なれば、此所の紙を清少への後朝の文に用ゐられしにや。（補）上古禁中の用紙を製する公司を、紙屋といへり。平安京にては、西洞院川の邊に紙屋ありしかば、此の川を紙屋川と稱しき。近世神屋川とかけるは誤なり。後には宿紙とて、反古を漉き返したる薄墨色の紙をば、専ら紙屋紙と呼べり。◎後のあした　（補）男女相會うたる翌朝を、後朝とて必ず男より女の許へ文おくるを、當時の習俗とせり。按ずるに、千蔭校本には、例の古本によりて「けふは」と改めたれど、素本活本春本抄本等、皆後の朝と記したる上、行成卿戯れがてら、特に斯く書かれけむと思はれて、此の方面白ければ、多かる方に從ひつ。◎とりの聲に云々　（補）鷄鳴の深夜を告くるに促されて、早く歸りし由をいふ也。◎孟嘗君　（春）孟嘗君か函谷關をこえし事也。玄旨百人一首抄云、孟嘗君といひし人、秦王にとられしが、夜にまぎれてのがれし時、函谷の關、鷄の鳴かぬ限りは人を通さず。孟嘗君が三千の客の中に鷄明とて、庭鳥のまねをよくする物まねをしければ、誠の鳥も鳴きて、夜深に關を明けて通しけり云々。猶史記列傳十五に委し。◎夜をこめて鳥の歌　（春）玄旨云、はかるとは、たばかる也。相坂の關はゆるさじとは、逢ふ事をゆるさじと也。惣ての心は明也。扨函谷の關と、相坂とをやすらかに、一首によみ出ける事、上手のしわざ也。又よに逢坂の、よにといふ詞は助字也。逍遥軒云、夜深きに僞の鳥をたばかり給ふとも、此逢坂は函谷のごとくに、ゆるすまじきと也。彼行成の、夜深く歸りて心淺きやうなるを、まぎらはさんとて、鳥のこゑに催されてと僞りの給へるを、さやうの僞に、たばかられては逢侍らじとの心をいへる也。◎心かしこき關守の　（補）逢坂の關には、心賢こき番人がをるべければ、函谷關のやうには、見ゆるすまじと也　◎

とりのそら音は

なるにこもるべければ、うしになりなばあしかりなん」とて參り給ひぬ。つとめて藏人所(クラウドドコロ)のかうやがみひき重ねて「後のあしたは、のこりおほかるこゝちなんする。夜をとほして昔物語もきこえあかさんとせしを、とりのこゑにもよほされて」と、いといみじうきよげに、うらうへにことおほくかき給へる、いとめでたし。御かへりごとに「いと夜(清少の返事也)ふかく侍りける鳥のこゑは、まうさうくんのにや」ときこえたれば、たちかへり「孟甞君のにはとりは、函谷關をひらきて、三千のかくわづかにされりとあれども、これはあふさかのせきの事なり」とあれば、

夜をこめて鳥のそらねははかるともよにあふさかの關はゆるさじ

心かしこき關守の侍るめりときこゆ。たちかへり、

あふさかは人こえやすき關なれば鳥もなかねどあけてまつとか

とありし文どもを、はじめのは僧都のきみの、ぬかをさへつきて取り給ひてき。のちのは御まへに(后宮也)。さて「あふさかの歌(后宮の[illegible])はよみへされて、返しもえせず成りにたる、いとわろし」とわらはせ給ふ。

◎頭ノ辨 [illegible]行成 ◎職 [illegible]中宮職、この時中宮の御居所、◎御物いみに云々 ◎禁中の御物忌に籠らむとなり。◎うしになりなば [illegible]丑の時より前に、禁中へ參らむと也。[illegible]夜の十二時を子の刻として、丑の刻

り。濱臣云、此かたひきの詞、後に音便にてひいきといふはたゞひきをのべいふのみ。別の詞にあらず。堀河百首にも「梓弓ひき／＼たれもいのるらん」とよめり。黑川眞賴云、榮花物語歌合の卷に「うれしきはもろやのみかは梓弓君もかたひく心ありけり」◎たのもしげなのことや [illegible]齊信の、淸女を賴もしからずと、思ひ切りたる詞なり。按ずるに、この末段淸少の返答に、前年齊信の誤解から、淸女を「何しに人と思ひけん」と罵り、黑戶にて淸女の聲をきゝては「袖をふたぎてつゆ見おこせざりし程に、憎惡したるが、草の庵の返書にまけて、遂に袖几帳を取りのけ、思ひ直りし事ありき。淸女之を忘れず「け近き男を贔負に思ふ女が、餘所から譽むるは、聞きにくきにより、聊あしき言をもいへば、腹立たるゝが迷惑なればとて、齊信の求婚を謝絕し、交友にてあらむと、言よく逃れたるなり。齊信も前の事情あれば、此の上强ひては責めざりし事と、思はるゝはいかに。又按ずるに淸女のかく齊信を言よく避けたるには、別の事情もありげなり。當時同じ樣に藏人頭權左中辨たりし行成卿こそ、淸女が眞の意中の人にてはありしか。其の由は上文、淸女の朝寢をかいまみしたる條、次の條前後所々に、二人の語らふ詞などにて知らる。抑々一條天皇には、朕が人を得たる事は、延喜天曆の聖代にも越ゆべしと、自讃し給ひしほど、側近の臣には、公任、齊信、俊賢、行成、實方など、皆是れ才學秀長、風采優雅なる人ばかりにて、いづれをいづれともなき中に、淸少は行成と意氣投合したる交なりしかば、齊信には從はざりしならむ。

一二四（とりのそら音は）

頭ノ辨の職にまゐり給ひて、物がたりなどし給ふに、夜いとふけぬ。「あす御ものいみ

此のついでに、齊信と清少との中の事をいへり。◎わざとよびも出で 〔評〕齊信の清少を態とよびいでても、又自然あふ所などにて、うらみ給ふ事を云也。◎とくい 〔評〕得意。當時の用例は、今俗に馴染(ナジミ)、懇意などいふに當る。◎殿上などにあけくれなき折 〔評〕今齊信の殿上人にて、清少もかく度々見ゆる時、逢かたらはで、昇進の後など、殿上にもあらざらん時に、何を思ひ出にせんと也。齊信當官頭中將也。◎さらなり 〔評〕申すも更なりの略言。自分も勿論さやうなりの意。◎かたかるべき事にも 〔評〕内緣を結ばんは、難事なられど。◎さもあらん後は云々 〔評〕夫婦の語らひをせん後には、齊信をほめ參らすまじければ、くちをしと也。◎うへの御前 〔評〕天皇の御前。◎やくと集りてほめきこゆ 〔評〕考異に、やくとを傍註本により、やゝと改めたるは原本連り書きの字を、見誤りたるにて中々に非なり。倩この句は、集りて役と譽めきこゆるにと、詞を入れ替へて心得べし。譽むるを役とする意也◎いかでか 〔評〕何を切るべし。いかでか譽め參らせんの意。◎たゞおぼせかし 〔評〕心中を御推量あれかしとなり。◎心の鬼出できて 〔評〕ほめたき折も心に遠慮出來て、いひにくからんと也。心の鬼とは、心のあやまりを、我と恥ぢおもふやうの心也。◎などさる人しも 〔評〕などにて句をきるべし。などかさる事あらむの意也。さる人とは、内緣關係のある男女をいふ◎よそめより外に云々 〔評〕よそめは餘所目にて、元は他所に見ることなれど、唯外部といはん程の詞につかへり。此の文句の大意は、例へば、内緣の女が、我が身を外にして、他所から其の男を譽むるも多かりとなり。◎それがにくからず云々 〔評〕夫婦なる人をほむるがにくきゆゑ、我は遠慮ありと也。◎けぢかき人をかたひき思ふ人の云々 〔評〕け近きのけは、接頭語なれど、元は氣疎しなどの氣の意もあるべく、至つて親密なる人をいひ、暗に齊信を指せり。方ひき思ふ人は、彼れを最頁にする人にて、清少自身な

まことに 流布本まほにとあれど千蔭本によりて改む

也。◎いかでさは 【通】如何にして、此の句をば思ひ出で給ひけんと也。◎おはします所 【通】中宮の御座。◎けふの料 【通】今日のためといふに同じ。去年の月は秋と期して巡り來たれども、之を賞せし人は今何處にぞ。といふこゝろ、今日の場合のために、作られし樣ぞとなり。斎宥また興と解するは非。◎まして云々 【通】之を誦し出でし人の齊信なれば、好意をもてる清少は、況してめでたく思ふらんとなり。

わざとよびもいで、おのづからあふ所にては、「など（齊信の詞）かまろをまことに近くはかたらひ給はぬ。さすがににくしなど思ひたるさまには、あらずとしりたるを、いとあやしくなん。かばかり年ごろに成りぬるとくいの、うとくてやむはなし。殿上などに、あけくれなきをりもあらば、何事をか思ひ出にせん」との給へば、「さらなり。（清少の詞也）かたかるべき事にもあらぬを、さもあらん後には、えほめ奉らざらんがくちをしきなり。うへの御前などにて、やくとあつまりて、ほめきこゆるに、いかでか。たゞおほせかし。かたはらいたく、心のおに出で來ていひにくゝ侍りなんものを」といへば、わらひて「など（齊信の詞）さる人しも、よそめよりほかに、ほむるたぐひ多かり」との給ふ。「それ（清少の詞）がにくからずおぼえばこそあらめ、男も女も、けぢかき人を、かたひき思ふ人の、いさゝかあしき事をいへば、はらだちなどするが、わびしうおぼゆるなり」といへば、「（齊信の詞）たのもしげなのことや」との給ふもをかし。

出たし給へりしはた　春本かばとあるを千本によりて改む

清範の説經あはれなる上に詩も亦めでたしの意なり

一二三（月秋と期して）

故殿の御爲に、月ごとの十日、御經・佛(キヤウホトケ)などの供養せさせ給ひしを、九月(ナカツキ)十日職の御曹司にてせさせ給ふ。上達部殿上人いとおほかり。清範、講師にて、說く事どもいとかなしければ、殊に物のあはれふかゝるまじき若き人々も皆なくめり。はてて酒のみ詩ずんじなどするに、頭ノ中將齊信(タダノブ)の君の「月と秋ときして身いづくにか」といふことを、うち出だし給へりしはた、いみじうめでたし。いかでさはおもひいで給ひけん。おはします所にわけまゐるほどに、立ち出でさせ給ひて(后宮出御)、「めでたしな。(后宮の御詞)いみじうけふの料にいひたる事にこそあれ」との給はすれば、「それを啓しにとて、物も見さしてまゐり侍りつる也。猶いとめでたくこそ思ひ侍れ」ときこえさすれば、ましてさおぼゆらん」(后宮の御詞也)とおほせらる。

◎故殿の御爲　㊄入道關白道隆公薨して後の事也　長德元年四月十日に薨の由、榮花物語にあり。◎御經佛云々　㊔寫經及び佛像などをかゝせて、亡者のために供養すること。◎物のあはれ深かるまじき若き人々　㊔說經などに感傷する事少き、元氣なる若き人々。◎月と秋ときして　㊄則詠菅三品の句也。南樓翫ㇾ月之人、月與ㇾ秋期而身何去。文粹十四、願文の句。㊔菅三品は菅原文時なり。此の句の次に、況龍深者ハ思又深ゝとあり。唯に月の事のみにあらず、齊信卿故關白に對する心情の厚さも見ゆれば、めでたしともいへる

しならむ。𥫩のこと上にいへり。又按するに、考異には、ついちを古本によりて「ついたち」と改めたれども、衝立障子を切ることいかゞあらむ。千蔭校本には、さる事も見えればかた〳〵改めず。◎細長 圖婦人の上衣と、童の上衣とに同名の品あり。委しき事は裝束圖解に、服飾漫語を引いて辯じおけり。此處は婦女の上衣をいふにて、裄(ゆき)なければ、袖細く見ゆるよりいふ也 ◎かざみ 圖汗衫。童女の上衣にて、後を長く曳けばなり。◎しりなが 圖尻長 圖美隆云、男童の裝束に、尻長といふ物ある也。臺記久安六年正月十四日の條に、今日御讀書之間、今日侍者ニ尻長指貫、侍ニ御前所束帶」と見えたり。こゝの文義、男の童のきるやうに、汗衫は尻長といへかしと、詞を打ち返して聞くべし。」と云々。この說よろし。童男の著る服に半尻といふあり。其の尻を長く仕立てたるを、尻長といへるなり。◎からぎぬ云々 圖唐衣。袍。表袴。下襲。大口等、これらの事上文所々に註したる上、圖解に委しく記したれば略す。◎はかまいとあぢきなし 圖袴をハカマといふは、佩裳(ハクモ)の意なり。されど其の語義を知られば、面白からぬ名ぞといへるならむ。◎足のきぬ 圖足の衣 ◯足の袋 圖指貫を斯くやうにいへるは、當時公卿の指貫はくく風を見るに、足を全く出ださず、長き袴のやうに、曳きてあるさし也。されば足の袋といへと笑ひたるも宜なり。圖解に、古書を寫しのせて、委しく示しおけり。◎いで 圖濱云、此の詞に、原何(モト)の義にて、いづれ、いづら、いづちなどのいづをいでとも通していふにて今譯していはゞナンデモハヤ。ドウシテ。などいふに近く、疑の意をふくみながら物をいひさだむる詞也 物語にいと多し合考すべし。◎よゐの僧 圖夜居の僧也 貴人の御殿には、護持僧といふ者、終夜一室に候して、加持を修し居る也 隣室にゐて、喧しきを聞きつゝ、夜中雜談をつづけられよとにくみいへる也。

うへの袴春本うへの三字落つ千本により補ふ

いとあやし。きぬの中に、細長をばさもいひつべし。なぞ、かざみは。しりながといへかし、をのわらはのきるやうに。なぞ、からぎぬは。みじかききぬとこそいはめ。されどそれは、もろこしの人のきるものなれば。うへのきぬうへの袴、さもいふべし。下がさねもよし。又大口、ながさよりは口ひろければ。はかまいとあぢきなし。指貫もなぞ。足のきぬ、もしはさやうの物は、足の袋などもいへかし」など、よろづの事をいひのゝしるを「いであなかしがまし。今はいはじ、ね給ひね」といふいらへに、よゐの僧の「いとわろからん。夜ひとよこそ猶のたまはめ」と、にくしとおもひたるこわざまにて、いひ出でたりしこそ、をかしかりしにそへて、おどろかれにしか。

此の段は、女房たち集りて雑談のついでに、理由なき慣例や、物の名稱の、適當せぬ事などをも云ひ出でたる也。㊀つかさ 〔釋〕官職をいふがもとなれど、官あれば必位に叙せらるゝ故に、當時は位官を通じてつかさとも、くらゐとも云ひ慣へり。㊁六位 〔釋〕藏人の傍に此築地の板をせし事清少の在世の比有しにや。つかさえしはじめとは任官の初めをいふ也。六位は藏人なるべし。㊂たつみの隅のついぢの板 〔釋〕たつみは巽、辰巳の方、東南の間をいふ。ついぢは築墻、泥土を築きたる垣、所々に柱立てり。其の板を倒りて、笏に作るなり。何故かゝるわざをせしぞ。當本其の解なし。按ずるに、タツミは立身（タツミ）の字になれば、六位の新藏人になりける者の、立身榮達の前途を祝する意より、かゝるわざ爲（シ）出でしが、遂に慣例となり

せさりし事、この草子所々見え、ひいては歌道に無知識なりし由、大鏡に誤り傳へたるなど想ひ合すべし。◎笑ひてやみにし云々　【評】自から持て參らぬ下部はいと冷淡と、行成のおとし言にれたる事を、則光なりやすなどいふ心知りの友どちに、笑はれて仕舞ひしことを、うへの御前にて人々に語りたる也。春抄に、則光等の歌に不堪能なるが、清少に歌よみかけられて、恥ぢ笑ひて止みしに云々、とあるにひかれて、後の註にも、歌嫌ひの人の、清少に笑はれたる、別の物語を、云ひ出でたる樣に解けるは非なり。◎うへの御前　【補】流布本「殿の」とありて、諸註道隆公とするは非なり。千蔭校本、別本によりて「うへの御前」と訂したる、事實にかなひていと〳〵よろし。眞にかくあるべき也。其の故は、公の薨ぜしは長德元年四月にして、行成の藏人頭になりしは八月なり。又權左中辨に任ぜしは翌二年四月なれば、公の存生中には、未だ辨官たらず。辨官たらされば、列見の儀に勤仕すべきやうなし。されば本文の記事は、必ず長德二年以後、卽ち道隆薨後一年餘を經たる事とせざるべからず。此の事實より推して、千蔭別本の「うへの御前」卽ち一條天皇の御前とあるを、最(イチ)よろしとはいへる也。◎よくいひたると云々　【評】清少の返書を主上の賞し給ひし由を、或る人の淸女に語りきとなり。

一二二（すゞろなる名ども）

などてか、つかさ得はじめたる六位のしやくに、職の御曹司のたつみのすみの、ついぢの板をせしぞ。さらに西東のをもせよかし、又五位もせよかしなどいふことをいひ出でて、「あぢきなきことどもを、きぬなどに、すゞろなる名どもをつけけん、

に少納言殿と、男官めかして記したれば、例の我が得たるを隱して、辨官や（惟仲左大辨なればゝ）他の少納言などの許に、列見定考の行事官より、餅を贈る事あらば、貴官等は其使者に祿を遣す作法なるか」と、知らぬ顏して問ひたるにぞあるべき。されば惟仲の應へに、「さる事侍らず。我等は唯受け取りて喰ひ侍る」と、我が事にして答へしが、ふと心付きて「若し上官中にて貴女達に得させ給へるにか」と返問したるにあらずや。さらずば、唯「女房どもの許に云々」とおほらかに云ひてあるべく、辨少納言と、殊更に取り出していふべき筋なければなり。◎上官　〔補〕太政官の外記史などをいふ也　〔補〕美隆云、正しくは政官とかくべきなれど、古き記錄などにも、上官と略してかゝれたり。◎れいだう　〔春〕戾道にや。〔補〕美隆按ずるに、戾道の字をあてられたる、げに能くかなへるやうなれども、戾道といふこと、此の頃の記錄になさ見えず。故考ふるに、小右記明衡往來等に、冷淡也といへることあり。すさまじく興なき意にいへり。此處も、すさましく怠々しといふ意に、この字をつかひたるか。淡（タン）の音を、タウといふは、龍膽をリンダウといふが如し云々。前人未發の言なり。なほ考異にも、春記長曆四年十一月十五日の條に有二兩三巡一而不レ及二酬醉一氣色太冷淡也。とあるを索し出でて引證せり。とにかく岩崎氏發明の考說、動かすべからず。◎下部さぶらふ　〔春〕彼清少の、みづからもてこぬ下部は、といへるに付て、行成の、下部侍ふとの給ふ也。◎いでたるに　〔補〕清少の出會へる也。◎びゞしくも　〔補〕和訓栞に、美々しの字をあてたり。されど此の草子（下文にあり）や、宇治拾遺等の用例を考ふれば、美麗なる意は少くて、近俗の立派ニといふ詞にあたれるが如し。◎さやうの物ぞ　〔春〕赤き薄様に書て紅梅に付たる物は歌によみてぞおこせたると思ひしにと也　◎さらぬこそ云々　〔春〕歌よみがましからぬが、語らひよきと也。〔補〕行成卿の歌よむ事を妄りに

せて、任那と賜へる事、日本紀垂仁天皇二年の條に見え、新撰姓氏錄には、山城國諸蕃に、三間名ノ公(キミ)〔補〕麻奈國主牟留知王之後者とあり。栗田翁の考證に、この他、人姓(ヒト)と宿禰姓(スクネ)とあり。人は廢帝紀(續紀)に、正六位上御間名ノ人黑女。宿禰は類聚符宣抄に、博士正六位上美[illegible]那宿禰直節などありと記せり。斯く三間名氏の人々は、もと異國より歸化せし者の後とて、同族も少く、六位以下の淺官にて、世に顯はれたる人も聞えねば、わざと卑下して之を假りたるならむ。是れは唯試みに言ふのみ。猶後考を竢つ。◎奥に 〔補〕解文にかきたる紙の末に、假名がきの一文を記したる也。◎ひるはかたちわろしとて云々 〔補〕葛城の神の傳說による。當時一般に知られたる事にて、歌にも多く讀み入れられたり。奥儀抄に委しけれど、文長ければ撮要していはむに、昔役ノ行者小角といへる修驗の祖、葛城吉野兩山の間に橋を渡さば、行通便ならむと、神々を使ひて石橋を架し始めしに、葛城の神は我か容の醜きを恥ぢて、夜のみ造り營み、晝は出づる事なきため、いづまでも造り果てず。行者の呵責にあひ、その橋遂にならずして止みぬとぞ。行成の書に此の故事をいへる也。◎めでたくも云々 〔補〕眞字と假名との筆致を、めでたしと賞め給ひ、次に解文のやうに仕立てゝ、送りたる意匠を「をかしうしたり」と稱し給へるにて、卽ち其の文は、御みづからの許に取り納め給ひたる也。◎惟仲 〔春〕當時の官左大辨。◎うるはしう 〔春〕中宮の御用ぞと心得て、行動を端正にして來たり。◎あらず 〔春〕宮の御用にはあらず、私の用事ぞと也。◎少納言などのもとに 〔春〕行成より我が得たるをまぎらはし隱して、問ふ詞也。列見定考に、辨や少納言などに、粉熟餠餤等をすゆる事あれば、辨少納言のもとにと云也。〔補〕此の春註まぎらはし。この爲にや松平氏の詳解に后宮に仕へゐる女房の事とし、あるは辨のおもと、又少納言の君など、女房の呼名といへるはいかゞあらむ。直按するに、彼の解文

にも、上卿以下の公卿諸臣等に、三獻或は四獻のゝちすうる物なり。江次第列見の所に四獻餅餤云々。◎けもん ◎春註花文とよみて、綾の如くうるはしく書かれし也とあるは、大に誤れり。濱臣云、花文の説いかゞ。解文なるべし。解文は今いふ願書の如く、諸司より諸省へかきあげなする下書也。其書法、朝野群載などに多くありて目録の書法の如し。こゝもへいたんを奉るに、ことぐゝしく目録に書て、作名などして奉るも一の風流也。かの源順、大江匡房などが目録歌も思ひ合すべし。直按するに、濱臣翁の解文の如く、かける由の考いとよし。然れども。末段源順等が目録歌といへるは、源順集の首(ハジメ)に「五日菖蒲につけてある所にたてまつらせける、

進上　こゝろざし

深　ふかき

右葉之菖蒲草　みぎはのあやめぐさ

千年五月五日可刈　ちとせのさつきいつかかるべき

とあるなどを指すならめど、是れは彼れと其の趣き同じからず。唯女子への消息文を、官府の文書の如くに、戯れ書きたる迄なり。◎みまなのなりゆき ◎加藤磐斎の抄に、頭ノ弁行成卿戯の興にし給ふ故、自からの名行成を「なりゆき」と戯れ書き給ふにやとあり。是は誰れもさ思ふべき事なれど、卿は藤原氏なるに、三間名(ミマナ)の姓を書かれたる謂はれはいかに。他の諸註にも亦其の辯あるを見ず。直按するに、三間名氏の祖は、もと大加羅(オホカラ)の國王の子にて、額に角ある人、一船に乘りて我が越前國笥飯(ケヒノ)浦、今の敦賀に來泊し、我が國に聖皇ある由を傳聞して歸化したり。仍て崇神天皇の御諱、御間城入彦天皇の號を、彼の生國に負

うへの御前
諸本とのの前とあるを千蔭別本によりてかく改めたり

よびて問ふ」とのたまはすれば、はしに出でて「左大辨にものきこえん」と、さぶらひしていはすれば、いとうるはしうてきたり。「あらずわたくし事なり。もし此の辨少納言などのもとに、かゝる物もてきたる下部などには、する事やある」と問へば、「さる事も侍らず。只とゞめてくひ侍る。何しにとはせ給ふ。もし上官のうちにてえさせ給へるか」といへば、「いかゞは」といらへて、返言をいみじうあかきうすやうに、「みづからもてまうでこぬ下部は、いとれいだうなりとなん見ゆる」とて、めでたき紅梅につけて奉るを、すなはちおはしまして、「下部さぶらふ」とのたまへば、出でたるに、「さやうのものぞ歌よみしておこせ給へるとおもひつるに、びゞしくもいひたりつるかな。女のすこし我れはと思ひたるは、歌よみがましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ。まろなどにさる事いはん人は、かへりてむじんならんかし」との給ふ。則光なりやすなど笑ひてやみにし事を、うへの御前に人々いとおほかりけるに、語り申し給ひければ、「いとよくいひたるとなん」の給はせし」と、又人の語りし。是れこそ見ぐるしき我れぼめどもなりかし。

◎頭ノ辨　圖行成卿、この時藏人ノ頭にて、左中辨たりしかば、其の官名を呼べる也　◎餠餤　「一裹餠の中に鵝鴨などの子雜菜等をいれ、裹合せて四方にきりたる物也。と和名にあり。是二月の列見にも八月の定考

明る日釋奠の胙たまゐらす云々。◎そうめい　(春)イ本そうめう、聰明。これかの公事根源に、明る日、釋奠の胙たまゐらす、とある事也。江次第五、釋奠の所に云く、祭官居二聰明一以二折數高坏等一羞二公卿一。註聰明胙也、餅(白黑)梁飯栗黃乾棗也。胙ハ字彙云音祚、祭ノ福肉也。◎あやしき物たどかはらけに　(春)かの餅梁飯などなれば也。

一二一（餅　餤）

頭ノ辨の御もとよりとて、主殿司（トノモツサカ）繪などやうなる物を、白き色紙につゝみて、梅の花のいみじく咲きたるにつけてもてきたり。繪にやあらんと急ぎ取りいれて見れば、餅餤といふ物を、二つならべてつゝみたるなりけり。そへたるたて文に、げもんのやうにかきて「進上（シンジャウ）餅餤一つゝみ、例によりて進上如」件。少納言殿」とて、月日かきて、「みまなの成行」とて奥に、「此のをのこはみづからまゐらんとするを、ひるはかたちわろしとてまゐらぬ也」と、いみじくをかしげにかき給ひたり。御前にまゐりて御覽ぜさすれば、「めでたくもかゝれたるかな、をかしうしたり」など、ほめさせ給ひて、御文はとらせたまひつ。かへり言はいかゞすべからん、「此のへいだんもてくるには、物などやとらすらん、知りたる人もがな」といふをきこしめして、「惟仲が聲のしつる。

逆さまにカウチヤウと假名付けたり。上皇と稱呼の同じきを避けて、かく稱ふるを故實とす。さて北村季吟翁の按に、是れ二月列見い事なるべし。列見定考始終の公事なれば、かやうにいへるにやといへり。或は然らむ。武藤元信翁云、定考は八月なるを、こゝに二月とあるは、釋奠の脇書などの、本文に攙入したるにやと、是れ亦一說なり。然れども二月の列見八月の定考は、首尾の關係ある式にて、其の作法もほゞ同樣なるに、釋奠も亦二月と八月と、兩度に行はるゝ儀なれば、淸女ふと誤りて、八月の定考を、二月の列見と書けるならむ。是れ此の草子には、又此の作者には、かゝる事もあり得べきにあらずや。さてまた列見と定考との關係は、公事根源二月十一日列見の條に、上卿辨少納言、外記史など參りて、太政官にて行へる公事なり。六位以下の藝能ある者を選びて、式部兵部の二省より率して參れるを、上卿のそれを召し寄せて、器量容儀を見る心なり。委しき事は定考の所に記し侍るべしとて、筆をとゞめ、八月十一日定考の方には、六位以上の加階をする人は、彼の藝能行跡恪勤を選びて、榮爵を給ひける也。大かたは二月の列見に同じ。式兵二省より、諸司の輩の上日を選成する事を、列見といふ。それをかき集めて奏するを、擬階の奏といふ。此の人々をえらび出して定め侍るを、定考とは申す也。とあるにて、兩公事のほゞ相似たるを知るべし。斯かゝれば細謹に拘らぬ淸女の性質として、ふと書きちがへざるべきにもあらじかし。

◎釋奠。(補)禮記王制に云く、釋ㇾ菜奠ㇾ幣禮ニ先師ニ云々　(補)先師とは孔子の事なり。◎くじなどはかけ奉り

(補)くじは孔子を吳音に唱ふる也。(補)釋奠に孔子の像を掛てまつるにやと也。釋奠は二月上の丁の日なれば、おなじ二月の中の公事をとりあはせていふなるべし。公事根源云、是は二月と八月とにあり。上の丁の日必おこなはる。大學寮にて孔子幷に十哲の影を祭らる。上卿辨少納言などまゐりて廟拜にたち、(中略)

きかぬかほなるはなど笑ふに、又をかしげなる菊の生ひたるをもてきたれば、

つめどなほみゝな草こそつれなけれあまたしあればきくもまじれり

といはまほしけれど、聞きいるべくもあらず。

◎七日のわかな 【補】正月七日に若菜を食すれば、萬病を除くとて、上下賞翫せし事、上にも見えたり。◎とみにもいはず 【補】とみは頓の字音語。急には言ひも出でずとなり。◎いふものゝあれば 【補】子どもの中に、一人しかじかと言ふ者のあればとなり。◎いさ 【補】美隆云、いさのさ文字澄むべし。俗にイヤサーコレハ何トカ」とおぼめく意なり。◎みゝな草 【補】濱臣云、耳無草の意か。毛詩にいふ卷耳にや。耳なしといふ草の名より、「うべなりけり聞かぬ顏なるは」といへり。◎つめど猶云々 【春】此五文字草を摘むに、人をつみおどろかす心をそへたり。つめどもきかぬかほに答へぬはつれなし。あまたある中には聞くといふ草もあるものをと也。菊を添へて也。

一二〇 （かうぢやう）

二月くわんのつかさに、かうぢやうといふことするは、何事にかあらん。釋奠(シヤクテン)もいかならん。くじ(孔子)などは掛け奉りてする事なるべし。そうめいとて、うへにもみやにもあやしきものなど、かはらけにもりてまゐらする。

◎くわんのつかさ 【補】太政官廳の略稱。◎かうぢやう 【補】禁中名目抄に、定考。逆讀之例として、わざと

をかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などの、いとおもげなりつる露のおつるに、枝のうちうごきて、人も手ふれぬに、ふとかみざまへあがりたる、いみじういとをかしといひたる、こと人のこゝちには、つゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ。

◎せんざい 〔書〕前栽。上に註せり。◎すいがい 〔書〕透垣、これも。◎らもん 〔書〕羅文。ランモンともいへるは音便なり。前田夏蔭翁の羅文考(拙著宮殿図解に載す)に委しきを摘要していはゞ╳の如く、細き木を組みちがへたるものをいふ。羅綺(ラキ)の文(モン)には、多く菱形(ヒシガタ)あれば、うちまかせて菱形を羅文といひならへるなるべし。凡て立蔀(タテシトミ)板垣などの上に、菱形に組みて造るが見ゆる也。和名抄杵頭の條に、「刻レ木為二羅文一」といへり。散木集連歌に、承源法師「大風に立蔀こそ伏しにけれ」といへるに、「庭はらんもんひしがきにして」とつけたるも羅文なり云々。◎かいたる蜘のす 〔釋〕蜘のかい(俗掛ケ)たる巣 ◎糸もたえざまに 〔釋〕蜘の糸のきれぬべく雨のかゝりたる也。◎いとおもげなりつる 〔釋〕いとおもげなりつる露のおつるにとつゞけて見るべし。露の風情まさりて面白きにや。

一一九(みゝな草)

七日のわかなを、人の六日(ムユカ)にもてさわぎとりちらしなどするに、見もしらぬ草を、子どものもてきたるを、「何とかこれをばいふ」といへど、とみにもいはず。「いさ」など、これかれ見あはせて、「みゝな草となんいふ」といふものゝあれば、うべなりけり。

給ふかと也。◎なほいとこそ云々 (春)なほは俗にヤハリといはんが如し。(春)のやうに戯れ言にはいへど、ヤハリ関白殿の御果報は、結構なる事ぞといふ意。◎又めでたく (春)中宮の御身分を、また関白よりは更にめでたく覺えて。◎大夫どのゝゐさせ給へる 「(春)道長公までも蹲居せしを、清少の感じいへること。◎おもひ人 (春)諸本思ふ人とあるを、千蔭翁の古本に據り改めたるに從ふ。古き寫本は、後世の如く送り假名を付けず、思人とかけるより、之を思ふ人とよみて、ふの字を入れたるなめれど、思ひ人とは、思ひ慕ふ人、寵愛の人などをいふ詞にて、他にも例あり。僖こゝの中宮の御詞には、清女が豫て道長の方に交際あり、好意をもてるを知り給へば、わざと戯れて、揶揄し給ひたるなり。武藤氏考異に云、道長公の方に交を結びしは、清少納言集なる清水にこもりしに、大殿の上(倫子)のおこせたる歌にても知るべし。云々 ◎此の後の御有樣 (春)道長公の後々御榮花を、后宮御存命にて見給はゞと也。此草紙は清少の老後、后宮崩去ののちかけるにや ◎ことわりとおぼしめされ (春)かく威勢ある御堂殿も道隆公にはつくばひ給へる事を、后宮おぼしめしあはせば、我かく感じおもひし事はことわりと思召れんと也。

一一八 (雨後の秋草)

九月(ナガツキ)ばかり、夜一よふりあかしたる雨の、けさはやみて、あさ日の花やかにさしたるに、せんざいの菊の露、こぼるばかりぬれかゝりたるもいとをかし。すいがい、らもん、すゝきなどの上に、かいたるくものすの、こぼれのこりて、所々に糸もたえざまに雨のかゝりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれに

と物々しう　(補)春註關白殿のさまとあるはたがへり。伊周權大納言の風姿の、重厚なるをいへるなり。◎下襲のしり　(補)上にあれば略す　◎黑きものをひきちらし　(補)當時公卿の服色、四位以上は皆一樣に黑袍なりし事、既に言へるが如し、されば大納言以下の人々、關白に對し蹲居の禮を致しゝさま、此處彼處（コヽカシコ）に黑き帛（キヌ）を散らしたる樣なりと也。◎藤壺　(補)飛香舍の事。黑戸の口より西にあり。塀は其の東側の築墻（ツイヂ）。◎登華殿　(補)反對側にて北にあり。◎細やかに云々　(春)關白どのゝ樣。◎みはかし　(補)太刀。御佩（ミハカシ）と敬語にいへり。◎宮の大夫　(補)道長。道隆の弟。後に御堂關白といはれし、當時中宮大夫たり。大夫はダイブと讀むべし。中宮職の長官。◎それはゐさせ給ふまじ　(春)道長は、つくばはせ給ふまじきかと思へばと也。◎いかはかりの昔の御行　(春)前世の善業にて、かく人々に尊敬せられ給ふにやと也。(補)御行とは佛道の修行の事。◎中納言の君　(補)清少同僚の女房なり。◎忌の日　(春)齋日の事なり。六齋日には殺生を斷つ事拾芥に見ゆ。(補)六齋十齋などいふ日の外にも、自己一人の持齋、物忌すべき日あり。これもそれなるべし。◎くすしがり　(春)くすみ行ふ也。(補)くすしといふ詞に兩樣の義あり。一つは奇（クス）しにて、奇怪なる意。源氏物語箒木の卷に、「法氣づきくすしからむ」とある是なり。今一つは、紫式部日記に「我れはとくすしく、口もちけしきことゞくしくなりぬる人々。」宇治拾遺物語の二に、下野厚行が、隣人の棺を我が門より出たして、妻子を諭したる詞に「物いみじう、くすしく忌む奴（ヤツ）は、命も短く捗々（ハカバカ）しき事なし」といへると、此處（コヽ）の「くすしがり」とは、背前の言意の少しく轉じて、近俗の語、窮屈なる意、屈託スル、クスムといふと同じかるべし。◎たべ、其のすゞしばし　(補)たべは賜への口語。彼女の持てる數球を、しばし我れに與へよと戯れいへるなり。◎行ひしてめでたき身に云々　(春)此の關白殿のやうに、果報を得んとて、行ひ

かた|に千蔭別本

ほど|にかこれも

思ひ人諸本思ふ人とあるを千本にかく改めたり

笑はせ給ひしこれも千蔭校本に從ふ

に、藤つぼの塀のもとより、登華殿のまへまでゐなみたるに、いとほそやかにいみじうなまめかしうて、御はかしなどひきつくろひやすらはせ給ふに、宮の大夫殿は清涼殿のかたにたゝせ給へれば、それはゐさせ給ふまじきなめりと見る程に、少しあゆみ出でさせ給へば、ふとゐさせ給ひしこそ、猶いかばかりの昔の御おこなひのほどにかと、見奉りしこそいみじかりしか。中納言の君の、忌の日とてくすしがりおこなひ給ひしを「たべ其のずゞしばし。行ひしてめでたき身にならんとか」とて、あつまりてわらへど、猶いとこそめでたけれ。御まへにきこしめして「佛になりたらんこそ、是れよりはまさらめ」とて、うちゑませ給へるに、又めでたくなりてぞ見まゐらする。大夫殿のゐさせ給へるを、かへすがへすきこゆれば、例の思ひ人とわらはせ給ひし。まして此の後の御ありさま見奉らせ給はましかば、ことわりとおぼしめされなまし。

◎關白殿の云々　(頭)是れより道隆公のめでたかりし事なり。◎黒戸　(補)既出(清涼殿圖參照)　◎廊　(補)清涼殿の北廊、即ち黒戸の廊。◎おもとたち　(補)御許人たちの略。中宮の御許に奉仕する女房を稱する也　◎わけ出で　(補)女房等の並み居る間を分けて也　◎戸口に人々の色々の袖口　(補)戸口は黒戸の口。人々は上中臈の女房。それが袖口の色さまざまなる著て、簾を卷きあげ、關白を戸口より出だし參らする也。◎い

常の御有様にて、女院の御消息を奏せさせ給ふ也、御供奉のめでたき云々といへるは過ぎたり。唯天皇とおはする御身の、尊き御有様にての意也。㈠髮結したる頭も皆あらはれて ㈡洗はれ顯れ兩說なるべし。泪に白粉のおちたる也。㈢洗はれの方にや。㈣院の別當 ㈤女院に關する庶務を總理する長官。院の御さじきの前に居たるに申し也。㈥うちのわたらせ ㈦天皇の還御をいふ。「の」の字落ちたるに心つかず、打ち渡らせと解きたる註は精しからず。按ずるに、一條天皇石清水行幸は、日本紀略に前後兩回見えたるが、初度のは永延元年十一月八日丁卯、天皇幸二石清水八幡宮一、皇太后同輿とあり、天皇未だ幼くましませば、御母后御同輿なりしならん。此の條は後の長德元年十一月廿一日甲午、行幸の時の事なるべし。

一一七（關白殿の威勢）

關白どのの黑戸より出でさせ給ふとて、女房の廊に隙なくさぶらふを、「あないみじ（關白どの、詞也）のおもとたちや。翁をばいかにをこなりとわらひ給ふらん」と分けいでさせ給へば、戸口に人々の色々の袖ぐちして、みすをひきあげたるに、權大納言殿御くつとりてはかせ奉らせたまふ。いと物々しうきよげによそほしげに、下襲のしりながく、所せくさぶらひ給ふ。まづあなめでた。大納言ばかりの人に、沓をとらせ給ふよと見ゆ。山のゐの大納言、そのつぎ〳〵、さらぬ人々黑きものをひきちらしたるやう

はやめ　春本はやしとあれど干蔭本によりて改む

うちの　諸本のゝ字なし干蔭本によりて補ひつうちは帝をさし奉る也

接頭語とまがふ勿れ

にまゐり給ひしこそいとをかしう見えしか。たゞ隨身四人(ズヰジンヨタリ)いみじうさうぞきたる、馬ぞひのほそうしたてたるばかりして、二條の大路の廣う、きよらかにめでたきに、馬をうちはやめていそぎまゐりて、すこし遠くよりおりて、そばのみすのまへにさぶらひ給ひし院の別當(ベトウ)にぞ申し給ひし。御返うけ給りて、またはしらせかへりまゐり給ひて、御こしのもとにて奏し給ひしほど、いふもおろかなりや。さてうちのわたらせ給ふを、見奉らせ給ふらん女院の御心、思ひやりまゐらするは、とびたちぬべくこそおぼえしか。それにはながなきをして笑はるゝぞかし。よろしき際(キハ)のひとだに、猶此の世には、めでたきものを、かうだに思ひまゐらするもかしこしや。

◎はしたなきもの　[illegible]干蔭云、竹取物語に、親王(ミコ)は立つもはした、ゐるもはしたにて云々、されば、なきは無の意にあらず。直按ずるに、なきは甚(イタキ)のタキと略され、更にナキに轉じたるならむか。雅語譯解には「不都合ナ」とあり。◎八幡の行幸の云々　[illegible]めでたき事を見きくには、涙の出で來る由いへる、一つの例に書きたるなり。八幡は男山八幡宮、應神天皇を鎭齋し奉る。◎女院　[illegible]天皇の御母、また御准母を上皇に准じて、院號を奉れるを申す。さて此の女院は、一條天皇の御母后、東三條院。是れ女院の御始なり。御子の帝の行幸の御行列を、御假床(オンサジキ)にて御覽ぜしに、みかど御さじきの前を、唯には通御し給はず、御輦を停めて御拶拶ありし也。◎御輿　[illegible]春註に風輦と傍書せしはたがへり。神事には葱花輦(サウクワレン)とて、屋形の頂上に葱帽子(ギバウシ)といふ葱花の形したるを付けたる御輿也。◎さばかりの御有樣　〔新〕還幸の諸官、供奉のめでたき

さし出でたるもの｜千本ものゝ二字なきよろし

○見きく諸本見の字を脱す千蔭本によりて補ふ

る上、寶輪本にも別段とすれば之に從へり。◎佛眼（佛眼尊は曼陀羅圖の中央にあり。一切の諸佛菩薩に圍繞せられ、諸の佛菩薩の功德を具足せり。亦佛母尊とも號せり、佛教辭典には、佛眼尊また佛母尊ともいふ。大日如來の變化身なりとて、女菩薩の像を出し、又佛眼眞言とは、此の本尊特有の咒文にして、息災延命を祈る修法なる由を說けり。其の咒文、優雅に聞えて尊しとなり。

一一六（はしたなきもの）

はしたなきもの。こと人を呼ぶに、我れかとてさし出でたるもの。まして物などとらするをりはいとゞ。おのづから人のうへなどうちいひ、そしりなどもしたるを、をさなき人のきゝとりて、其の人のある前にいひ出でたる。あはれなる事など人のいひてうちなくに、げにいとあはれなりとはきゝながら、涙のふといでこぬ。いとはしたなし。なきがほつくり、けしきことになせど、いとかひなし。めでたき事を見きくには、又すゞろにたゞいできにこそ出でくれ。八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院の御さじきのあなたに御輿をとゞめて、御せうそこ申させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御ありさまにて、かしこまり申させ給ふが、よにしらずいみじきに、まことにこぼるれば、假粧したる顏も皆あらはれて、いかに見苦しかるらん。宣旨の御使にて、齊信の宰相ノ中將の御さじき

總して昔は冠や烏帽子被らぬを、髻(モトドリ)放つといひたり。此處(コヽ)は老人の冠帽かぶらぬ時、髪薄く、また禿けたるなどの見苦しきをいふ也。◎物怨じしてかくれたる　圏嫉妬して家出したる也。◎さしも思ひたらず　圏男はそれ程にも思ひてあらずと也。◎ねたげにもてなし　圏妻自身の振舞なり。◎旅立ち　圏他の家に宿りゐるを昔は皆旅居旅寢(タビヰタビネ)などいへり。遠く旅行するに限らず。◎心と出で來たる　圏夫の呼ばぬに妻の心として返り來たる也。

按ずるに、無徳なるものといへる條は、此の句までなるべし。以下「狛犬、獅子舞ふ者の云々」は、千蔭翁のもてりし古本にはなき由にて刪れり。げにも、獅子舞などする者の足音を、いかで無徳なるものとはいふべき。是は他の「おもしろきもの」「をかしきもの」などやうの題下に入るべき文句の、錯亂して此處に入りたるか。若しはこの句の前に題の名のありしを、夙(ハヤ)くより書き落したるにや。

序に云ふ、「こまいぬしゝ」は、春本抄本とも「こまいぬしく」とあれど、「しゝ」なる事著し。この草子の下文、積善寺經供養の段に、「大門のもとに、高麗(コマ)もゐこしの樂して、獅子狛犬をどり舞ひ」とあれば、狛犬獅子連舞の曲なる事知るべし。

一一五　(修法(ズホウ)は)

修法は。佛眼眞言(ブツゲンシンゴン)などよみたてまつりたる。なまめかしうたふとし。

圏この一段、春本には「是は無徳なるものにあらず、筆すさびなるべし。とあれど、濱臣は筆すさびにあらず。修法はといへる一段なり。かくいへるは、下文「陀羅尼は」などの例なりといへる、げにと思はる

こまいぬ：をどる足音　右の一句千陸本になし

をもとりあへずしてやみはてしと也。

一一四（むとくなるもの）

むとくなるもの。汐干(シホヒ)の潟(カタ)なる大きなる船。かみ短き人の、かづらとりおろして髪けづる程。大きなる木の風に吹きたふされて、根をさゝげてよこたはれふせる。すまひのまけて入るうしろで　えせもの〻ずさかんがふる。翁のもとゞりはなちたる。人のめなどの、すゞろなる物ゑんじしてかくれたるを、必ず尋ねさわがんものぞと思ひたるに、さしも思ひたらず、ねたげにもてなしたるに、さてもえ旅だちゐたらねば心と出で來たる。「こまいぬしゝまふ者のおもしろがりにやり出でてをどるあし音」。

むとく　◎無徳　【頭】上にも出でたり。【春】海に、首尾なきことゝあるよろし。有徳とは老成名望あるをいへるより、轉じては上品にして威儀の整へるを云ふ。無徳とは近俗不恰好といふ語にあたる。◎かづら　【頭】義髪。女のかもじを除きては、髪はそりて見苦しき也。◎すまひ　㊀相撲の節とて、禁中にある也。年中行事歌合註に云、相撲といへる事は諸國の供御人を召集めて、七月に相撲の節といふ事を行ひて、天子、御覧ずる也云々　【頭】負けたる相撲の、幕の内に入る後姿も見よからぬ也。㊀えせもの〻ずさかんがふる　【頭】威勢もなき主の、従者(ズサ)を勘當する也　【頭】勘當とは、元その罪を勘考して、罰を當つる事より出でたる語にて、叱責すること。◎もとゞりはなちたる　【頭】老人の少き白髪さばきたる也　【頭】髪をさばくには限らず

人」とあれと抄本千かげた等によりて改む。◎男はうたて云々　〔解〕是れより、始に男の心のうちとかきしを解釋して、淫蕩なる男の、女子を欺き、心にもあらぬ言いひて巧にかすに、女のさる心と知らで、欺かるゝを恥かしく思ふ由をかけり、◎思ふさまならず　〔解〕此の詞に、下のもどかしう云々に續けて心得べし。男の心中には、女を思ふやうならずと、もどかしく思ひ、且つ氣に入らぬ人にても、さし向ひては賺(スカ)し欺き、女に賴もしく思はするが恥かしとなり。たのむるは男を賴みに思はする也。◎情ありこのましう人にしられたる　〔解〕常の男だに恥かしきに、まして情あり、好色の人にてありと、世にもしられたる男はの意。◎おろかなりと云々　〔解〕病よく女をすかしたのませて、淺からず思ふ人と、女に思はするが恥かしと也。◎心のうちのみにもあらす　〔解〕男の心中の恥かしきのみに非ず、仕業にもうちとけ難き所ありと也。◎これが事は彼れに　〔解〕甲の女の缺點を乙の女に語るたぐひをいふなり。◎我か事をばしらで　〔解〕男の心中を察していへる詞也。女の我が事をも、かく人にかたらるゝをしらで、只かく外の女の事をかたるを、我をこよなく思ふ故かたるなりとのみ、女の思はんかと、男の思ふが恥かしきと也。◎いであはれ云々　〔解〕是れより末は、男の賴もしげなく、薄情なる事を難じいへるにて、さやうならむ男に、今は逢はじと斷念すれば、何も恥かしと思ふ事もなきものぞと也。◎心もなきものなめりと　〔解〕心もなき女ぞと見えても、恥かしからぬと也。◎いみじうあはれに云々　〔解〕いみじくあはれに見捨てがたき女をも、薄情なる男は聊か何とも思はぬは、いかに冷酷なる心ぞと淺ましく思ふ由也。◎さすがに人のうへをば　〔解〕さやうに情なき男の、かへりて人の事はうらみもどきて、我が非をいひつくろふと也。◎たのもしき人もなき　〔解〕親兄弟などもなき宮仕へ人なり。◎たゞにもあらず成たる　〔解〕彼宮仕へ人の懷姙せしをも、情なく見捨て、其事

本なきに従ふ

此の外春本誤脱あり皆千本によりて補ひ訂しつ

春曙本巻六をはり

てねぬる後も恥づかし。男はうたて思ふさまならず、もどかしう心づきなき事ありと見れど、さしむかひたる程は人をすかし、思はぬ事をもたのむるこそはづかしけれ。ましてなさけ有りこのましう人に知られなどしたるひとは、おろかなりと思ふべくもてなさずかし。心のうちのみにもあらず、又皆これが事はかれにかたり、彼れが事はこれにいひきかすべかめるを、我がことをばしらで、かく語るをば、猶人よりは、こよなきなめりとやおもふらんと、思ふこそはづかしけれ。いであはれ。又あはじと思ふ人にあへば、心もなきものなめりと見ゆとも、はづかしくもあらぬものぞかし。いみじくあはれに心ぐるしげに、見捨てがたき事などを、いささか何とも思はぬも、いかなる心ぞとこそはあさましけれ。さすがに人の上をばもどき、物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき、宮づかへ人などをかたらひて、たゞにもあらず成りたるありさまなどをも、しらでやみぬるよ。

◎男の心の中　[春]イ本ニいろこのむ男の心の中とあり。女はおろかにて、色好む男のすかし、安く思はんが恥かしきこゝろ也　猶あとに委し、◎いざときよゐの僧　[春]夜なも寝ぬこゝろなり。河海云、夜居僧、内裏の二間に候ひて、夜もすがら加持まゐる僧なり云々。其恥かしきこゝろ後にあり。◎くらきまぎれにふところに　[春]盗人の隠れゐて見るをもしらで、家人の物盗む也。◎おとなびたる人　[補]春本「御前近き

厚地にして熱氣（アツゲ）に見なさるゝ也。◎でゐの少將 ㊟出居次將は、賭弓などに帶劔し弓箭をとりて、主上の出御に警蹕を稱す。江次第に、五月の最勝講、七月の相撲節などにも、出居次將着座の事あり。是らの折あつげなるにや。㊀きんの袋 ㊟きんは琴のこと也。琴の袋は、金襴・錦の類の厚地の織物にて、製する例なればにや。㊁すほうのあざり ㊟阿闍梨は僧位の名、天台眞言律宗の間に用ひらる。修法祈禱をする阿闍梨、護摩など焚けば熱げに見ゆる也。㊂日中の時 ㊟時はジと讀むべし。トキの假名わろし。僧家に勤行すべき一定の時間を、時と稱する也。㊃銅のかぢ ㊟鐵（クロガネ）を打つも、六七月には暑かるべけれど、銅の名にちなみて、あつき義をいはん爲なりと抄にいへり。猶かぢは金打の約まりたる詞なり。鍛冶とかきて、かぢとよむは義訓なり。鍛冶の音ぞと心得るは誤なり。

もののくま 抄本による 見るらむの上春本いかにの三字あり抄によりて削る おとなび春本御前近き人々とあり けしきばみの上春本物の字あり抄

一一三（はづかしきもの）

恥づかしきもの。男の心のうち。いさときよゐの僧。みそかぬす人のさるべきもののくまにかくれゐて（物のかくれ也）見るらんを、たれかは知らん。くらきまぎれに、懐（フトコロ）に物引きいるゝ人も有らんかし。それはおなじ心にをかしとや思ふらん。よゐの僧はいとはづかしきもの也。わかき人の集まりゐて、人のうへをいひ笑ひ、そしりにくみもするを、つく〴〵ときゝあつむらん心のうちもはづかし。「あなうたてかしがまし」など、おとなびたる人の、けしきばみいふを聞きいれず、いひ〳〵てのはてには、うちとけ

ひとつになりたる、いかにわびしからんと見えたり。夏はされどよし。

◎わびしげ 【補】濱臣云、わびは歎息の意なり。げは樣子也。俗にイヤニ見ユル。イヤニ思フなどの意也。直云、わびは困却の意といふ方よろし。此處は、俗に迷惑ラシク、又ツラサウニ見ユルなど譯すべきなり。◎午未の時 【補】正午より三時過ぐる頃までの、暑き日盛りの間。◎えせ牛 【春】よくもなき牛也。◎はりむしろ 【春】雨覆ひ、服車などにむしろをはる事、西宮記に有り。其たぐひなり。【補】服車は喪車を云ふ。◎ぜんく 【春】前駈。馬に乘りて供奉したる也。【補】主人の車の先に立ちて供する也。◎なつはされどよし 【春】雨にぬれても、冬のやうに寒からねばなるべし。

一一二（あつげなるもの）

あつげなるもの。隨身のをさの狩衣。のふのけさ。でゐの少將。いみじくこえたる人の髮おほかる。きんのふくろ。六七月の修法（ズホウ）のあざり。日中の時（ジ）などおこなふ。又おなじころの銅（アカヾネ）のかぢ。

◎すゐじんのをさ 【春】近衞の番長也。璞翠軒云、近衞隨身の上﨟を番長といふ。秦氏下毛氏等、今に隨身たる也。裝束は、褐、表袴、又は狩衣に花をつけたり。時に依て出立樣々也 ◎のふのけさ 【補】和名抄に衲、俗云能布、と見ゆ。衲は補綴の義。世人の棄てたる布片を取り、之を補綴して作るが故に、衲ノ袈裟といふとぞ。袈裟は梵語、俗衣なり。常の法服や、直綴などと異り、多くの布片を綴り集めて製したれば、

すきかげにたゞ一人かゞよひて、心ひとつにまもりゐたらんよ。いかばかり心せばく、けにくきならんとぞおぼゆる。物へもいき、寺へもまうづる日の雨。つかふ人などの、我れをばおぼさず、何がしこそ、只今時の人、などいふをほのきゝたる。人よりはすこしにくしとおもふ人の、おし量りごとうちし、すゞろなる物うらみしわれさかしがる。

〔春〕此段衍文也。たゞ一人のりてといふ以下は、前のにくき物に有り。其外は、おくにくにしくあれば、こゝには註せず　〔[illegible]〕濱臣云、末に心づきなきものとある、いとくはしければ、こゝはまぎれていりたるなるべし。萬歳抄には、こゝにのみ此段をあげて、末のくはしき段を脱せしは、なかなかに誤なるべし。いづれにも、同じ題二所にあるべきやうなしと。直云、末とは春曙抄卷十二、にあるを云ふ。なほ旁註本にも、此の段を載せず。

一一一（わびしげに見ゆるもの）

わびしげに見ゆるもの。六七月の、午未の時ばかりに、きたなげなる車に、えせ牛かけてゆるがしゆくもの。雨ふらぬ日、はりむしろしたる車。ふる日、はりむしろせぬも。年老いたるかたゐ、いとさむき折も暑きにも。げす女のなりあしきが、子をおひたる。ちひさき板屋のくろうきたなげなるが、雨にぬれたる。雨のいたくふる日、ちひさき馬にのりて、ぜんくしたる人の、かうぶりもひしげ、袍（ウヘノキヌ）も下襲（シタカサネ）も、

干飯・餅・果物など入るゝに、便利なる籠（カゴ）やうの器具をも、なほ餌袋と呼びならしたる也。◎花など折らせて　補服装を美々しく飾ることを、「花を折る」といへる詞、物語などに多かり。こゝも従者の服装まで、美々しく着せての意なり。◎侍めきて細やかなる　補従者の姿の細やかにて、振舞の敏捷げなるをいふ。◎ごんぐ　春金鼓、和名云、最勝經云、妙童菩薩於二夢中一見二大金鼓一云々。ことなる佛事に樂人物の音を發せんとて、圖書金鼓をうつ。又唄師音聲を發せんとても、金鼓を打つ事江次第十三にみゆ。補金属製にて圓く平たき太鼓の樣なれば、金鼓と名づく。佛堂の軒の正面に高く釣り、長き紐を垂れて、此の紐にて打ち鳴らすやうにしたり。この金鼓を、伏せ鐘なりといふ説はよろしからず。俗にいふ鰐口の事なり。屋代翁「道の幸」に證をあげて辯じたり。◎さぞかし　春其の人ぞかしと也。◎いかでかはしらん　春此方には見付たれども、あなたには見付ねば、我とはいかでしらんと也。◎けしきを見せまし　春我がこゝに籠りゐる事を、知らせたきとなり。◎すべて例ならぬ所に　春寺籠にかぎらず。惣て常ならぬ所に旅居などせんに、我一人斗籠るはかひなし。同じ心の女友達など、ぐしてありたきと也。◎其のある人の中にも　春仕ふ人の中にも、いひ合せてよき者もあれど、朝夕見なれて珍らしからずと也。◎男などもさ思ふにこそ　春清少のみならず、男もかやうにおもふやらんと也。さればとて、わざ〳〵友を尋ね呼びありくはいかゞとなり。補この次に春本、左の一段あり。

こゝろづきなきもの

まつりみそぎなど、すべてをのこの見る物見車に、只ひとりのりて見る人こそあれ。いかなる人にかあらん。やんごとなからずとも、わかきをとこども、物ゆかしと思ひたるなど、ひきのせて見よかし。

うちすぎていぬるこそ、さすがにさう〴〵しけれ。氣色を見せましものをなどいふもをかし。かやうにて、寺ごもり、すべて例ならぬ所に、つかふ人のかぎりしてあるは、かひなくこそおぼゆれ。猶おなじほどにて、一つ心にをかしき事もさま〴〵いひあはせつべき人、かならずひとりふたりあまたもさそはまほし。其のある人の中にも、くちをしからぬもあれども、めなれたるなるべし。男などもさ思ふにこそあめれ。わざとたづねよびもてありくめるはいみじ。

是れまた忍びて參詣する、若き男の風體を書けるなり。◎しのぶと見ゆる 〔解〕服裝などやつして、微行と見ゆる也 ◎櫻のあを 〔解〕櫻は表白裏赤花 〔解〕あをは例の襖にて狩衣なり。春抄下につゞけて、靑柳とよみたるは非なり ◎柳など 〔解〕柳は表白裏靑 〔解〕柳の襖といふべきを、上にもあれば略せるなり。◎くゝりあげたる指貫 〔解〕此の頃の人、指貫はくゝ樣は、足をつゝみて出ださず。指貫のすそを曳きてありきしなり。今鏡第八花の主の段に、大かた昔は指貫も中ふみ云々とありて、貴人の指貫はくは、足をつゝみたり。外出の時は、上ぐくりとて、足の踝(クルブシ)の所に引きあげて、革紐を結ぶに、袴の口より、内衣の褄の先少し出でしを、あてやかに見なさるとは書けるなり。あては上品なる意 ◎さうぞくをかしうしたるゑぶくろ 〔解〕鷹の餌袋に見事にかざりしたる也。〔解〕貞丈雜記に云く、餌袋といへばとて、絹又は革などにて縫ひたるものにあらず。竹にて組みたる籠(カゴ)なり。彩畫の如しと。直按するに、此の草子の奥なる「人の家につき〴〵しきものの條に、「三尺の几帳・裝飾よくしたるゑぶくろ・傘云々」とあり。もとは鷹の具なれど、後には

櫻のあを柳など春本櫻青柳とあれと千蔭本櫻のあをとあるに從ふ

ぼつかなしとて、北愼言翁は、瑜伽論に、言二初夜一者謂三夜四分中過二初一分一是初夜也。言二後夜一者謂三夜四分中過二後一分一是夜後ノ分。とあるを證し、此の說によれば、初夜は、酉の初より戌の五刻まで、後夜は、丑の五刻より寅の終までなりといへり。されど典據は姑く措き、雲圖抄は當時の現行の事を記したる書なれば、我が國にては、後の抄に書ける所の時刻を、後夜といひしなるべし。◎其の寺の佛の御經　【春】春本たゞ佛經とあれど、千蔭古本によりて、佛の御經と訂したり。【春】たとへば初瀨にては觀音經、うづまさにては藥師經のたぐひなり。◎あをにび　【春】青鈍とかく。青色に黑み色を加へたるなり。◎はたばり　【春】ひろがりし心なり。◎ゐれうしたる　【春】閑遠也。かの青鈍の指貫きたるを、侍どものたちめぐり渇仰したるさま也　◎とかくつぼねどもの　【春】女中の局のわたりに立さまよひのぞくさま也　◎別當などよびて　【春】其寺の別當に其局の事をさゝやき問ふ也　◎えせものとは見えずかし　【春】心あさき若人とは見えず。いかさま心ふかき故ありげなると也。【春】あやしき種姓の者ならじとなるべし。

二月（キサラギ）つごもり三月（ヤヨヒ）ついたちごろ、花ざかりにこもりたるもをかし。淸げなるをのこどもの、しのぶとみゆる二三人（フタリミタリ）、櫻のあを柳などをかしうて、くゝりあげたる指貫のすそもあてやかにぞ見なさるゝ、つき〴〵しきをのこにさうぞく（裝飾）をかしうしたるゑぶくろいだかせて、小舍人わらはども、紅梅萌葱（モエギ）の狩衣に、色々のきぬ、摺りもどろかしたる袴などきせたり。花などをらせて、侍（サフラヒ）めきてほそやかなるものなど召し具して、ごんぐ打つこそをかしけれ。さぞかしと見ゆる人あれど、いかでかは知らん。

れど抄になきか宜しければ削りつ

たれ春本これとあるわろし千蔭本による

佛の°御°經千蔭本による

わらはなどぐして春本ぐの字なし夏蔭校本による

目も見やり春本もの字なし千蔭校本による

ばかりなるをのこゞの、愛敬(アイギヤウ)づきおごりたる聲にて、侍(サブラヒ)の人よびつけ、物などいひたるけはひもいとをかし。又三つばかりなるちごのねおびれて、うちしはぶきたるけはひもうつくし。めのとの名、母などうち出でたらんも、たれならんと知らまほし。夜ひとよのゝしり行ひあかすに、寢もいらざりつるを、後夜などはてゝ、少しうちやすみねぬる耳に、其の寺の佛の御經を、いとあら／＼しう高くうち出でよみたるに、わざと尊しともあらず。修行者だちたる法師のよむなめりと、ふとうち驚かれてあはれにきこゆ。又よるなどは顏しらで、人々しき人の、あをにびの指貫のはたばりたる、白き衣どもあまたきて、子どもなめりと見ゆる若きをのこのをかしげなる、さうぞきたるわらはなど具(グ)して、侍(サブラヒ)の者どもあまた、かしこまりゐねうしたるもをかし。かりそめに屛風たてゝ、ぬかなどすこしつくめり。顏しらぬは誰れならんといとゆかし。しりたるはさなゝめりと見るもをかし。わかき者どもは、とかく局どものわたりに立ちさまよひて、佛の御かたに目も見やり奉らず、別當(ベタウ)など呼び出でてうちさゝめき、物がたりして出でぬる、えせものとは見えずかし。

◎その內あやふし　(春)火の用心のこと。◎愛敬づきおごりたるこゝろ　(磐)愛敷めき驕りたるなり。愛敬有りながらほこらしき童のさま也。◎後夜　(磐)雲圖抄裏書に、後夜自二子之刻一至二丑二刻半一。とあれど、典據お

歸るの下春
本人の字あ

やすげなり。

◎ひるは少しのどやかに云々 〔春〕前々はかやうに、晝夜さわがしくはなかりしとなり。〔磐〕通夜のために、殊更夜中の詣人多かりし故なるべし。◎かひた高く ◎昔は十二時に貝を吹し也。千載集に「けふも亦午の貝こそ吹つなれひつじのあゆみ近付ぬらし」赤染衛門のうた也 ◎たて文 〔磐〕願文を包みたる也。◎ずきやうの物 ◎誦經の布施物なり。浮舟のまきに、御ずきやうせさせ給へとて、其れうの物、文など書そへてもてきたり云々 ◎堂童子 〔春〕堂童子は、法會の時花筥(ケコ)をおこなひをさめなどする者なり。◎きら〳〵しう 〔磐〕もと光りのきら〳〵と目に見ゆるよりいふ詞にて、花やかなる事にも移りいへり。◎かれの聲 〔春〕誦經の鐘なり ◎いづこならむ 〔磐〕いづ方よりの、御誦經ぞとなり ◎やんごとなき所 〔磐〕上にたびたび出でたり。こゝも格段尊き事にいへり。◎教化 〔磐〕佛經辭典によれば、教訓化導の義。法を說きて惡を去り善に化せしむる由の語といふ。◎是れは唯なる折 〔磐〕餘所の立願。御產の祈禱など、聞き分くるほどは、此寺のさまで繁閙ならぬ、唯の時の事ぞとなり。◎屛風などの高さ 〔春〕夜通夜の人々の局をかこはんためなるべし。◎いとよく進退し 〔磐〕屛風の甚大なるをよくもてあつかひたるさま也 ◎たゝみなどほうど 〔磐〕古代の疊は、今の編席(アミムシロ)なり。貯(タヽ)みておくからに、疊といふ。人の立ち歸りたる後、其の坐したる疊を卷きたゝみにて、壁に立て寄せておくなり。ほうどは今の詞にポンといふに同じ、上に、車宿りに入れて、轅ほうどうちおろす云々。とあると同じく、ど文字にごる讀法なり。

そよ〳〵とあまたおりて、おとなだちたる人の、賤しからずしのびやかなる御けはひにて、歸るにやあらん。「その内あやふし。火の事せいせよ」などいふもあり。七つ八つ

祈禱の鐘の音成けりと也 ◎うちやすむ程は 圖夜更けて打寢（ウチヤス）むころになれば、隣室の男も僵りて、聲高くは讀經せずと也。高く打ち出させまほしとは淸少の彼れに同情して、あたりに遠慮せず聲高く出して、讀めかしと思ふなり。◎何事を思ふらむ 圖忍びてはなかむには、心中に哀しむ事あるなれば、何事を歎くか。彼れの心願を叶へて、思ふ心を飽かせばやと覺ゆとなり。

日ごろ籠りたるに、晝は少しのどやかにぞ早うは有りし。法師の坊にこども女（メ）のわらはなどゆきてつれ〴〵なるに、かたはらに、かひ（貝）をいと高くにはかにふき出だしたるこそおどろかるれ。淸げなるたて文など持たせたる男の、ずきやうの物うち置きて、堂童子（ダウドウジ）などよぶこゑは、山びこひゞきあひて、きら〴〵しうきこゆ。かねの聲ひゞきまさりて、いづこならんときくほどに、やんごとなき所の名うちいひて、「御產たひらかに」など敎化などしたる、すゞろにいかならんとおぼつかなくねんぜらる。これはたゞなるをりの事なめり。正月（ムツキ）などには、只いと物さわがしく、もの望みなどする人の、ひまなくまうづる見るほどに、行ひもしやられず。日のうちくるゝに詣づるは、こもる人なめり。小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屛風などのたかき、いとよくしんたい（進退）し、たゝみなどほうど立ておくと見れば、たゞつぼねに出でて、犬ふせぎにすだれを、さら〴〵とかくるさまなどぞ、いみじくしつけたるは

こども女のわらは千蔭本による

山びこ春本ひこの二字なし千蔭本によりて補ふ

讀經の聲々滿堂に反響して、今は誰が爲の願文讀むにか。取り別きて聞くべくもあらねど、さすがに又まぎれず、何某の名も耳にひゞき入るとなり。◎せめてしぼり出したる 〔補〕此のせめては、調子を高くすること、上のせめごゑといふ詞の下に、說きおけり。◎千燈の御志 〔補〕千燈ともす事なるべし。イ本千壇とあり用ふべからず。◎おび打ちかけて 〔補〕掛ヶ帶のさまにや。旅姿のやつせる裝束なるべし。〔補〕掛帶は、後世裳の掛帶といふ物とは別なり。女子の物詣する時、上衣のうへに前より打ちかけ、後に結びてあまりを長く垂れおくなり。古き繪卷に見ゆ。旅裝といふはよろしからず。當時の風、社參佛詣には、必ず皆かけ帶といふ事したり。源氏浮船の卷にも、「君(浮舟)はいよ〳〵思ひみだるゝ事多くて云々、ものはかなげに帶うち掛けなどして經よむ。親に先立ちなん罪失ひ給へとのみおもふ」とあるにて知るべし。◎こゝに近う候ふ 〔補〕春註清少の居る所へ、法師などのしきみを遣す也。とあるはさることならめど、かう候ふとあるは聞えず。千蔭本によればちかう候ふとあり。但し考異には別本「べたう(別當歟)候ふといひて、樒の枝を折りてもて來たるも、いと尊くをかし」とある由記せり。◎しか〴〵の人籠らせ 〔補〕是れも清少の宿坊の法師、我がもとに又籠りおはする人の事など、語り聞かせて歸る也。◎はんざう 〔補〕匜ハンゾウ和名抄云。柄中有レ道可ニ以注レ水之器也。俗用ニ楾字一所レ出未レ詳。或說云。有レ柄半挿ニ其內一故呼爲ニ半挿一。〔補〕手洗ふに注ぐ水をいるゝ器也。◎たらひの手もなき 〔補〕古代の盥、左右に二本づゝの柄をすげたり。角盥(ツノタラヒ)と稱す。此の角を手といふ也。柄の拔けてなきは、幾人にも貸して、古び破損したる也。女子の觀察の微細にわたれる想ひ見るべし。◎御とものの人はかの坊に 〔補〕堂にての清少の局狹ければ、供の人々は宿坊へとさそふ也 ◎かはり〴〵ぞゆく 〔補〕かたへは殘りて替るなり ◎よがなりときけば 〔補〕我がよましむる

是れよりは佛殿の內陣、僧の讀經所禱の事、又我が局に入りての後、隣室に參詣する人のさまなどを、書けるなり。◎人の居なみたる前云々 [illegible]さき〴〵より參詣せる人々の、居並びたる前を通り行けば、衆目我か一身にあつまりて、恥かしく厭はしきなり。うたてといふ詞は、もと我が思ふに反することより、又いよ〳〵嫌惡する意にもいふ。考異には別本に「うたてけぞうに覺ゆるに」とある由也。さらば我が身の露顯(アラハ)に見らるゝを、嫌惡(イヤ)に思ふよしなり。顯證は露骨(アラハ)なる事前にも出でたり。◎犬ふせぎ [illegible]佛殿の內陣と外陣(參拜者の席)とを隔つる、埓やうのもの。本名は結界といふなれど、寢殿の前階などにある、犬防の柵に似たるからに、此の俗稱を用ひたる也。格子を立てたる佛殿もあれど、猶之をも打まかせて犬防と稱せり。此の事宮殿圖解に委しく述べおきぬ。◎心もおこさる [illegible]其の尊きさまを見るより、先づ信仰の心發起すと也。◎常燈にはあらで [illegible]佛前の燈明(ミアカシ)は、何人かの寄進にて、此の寺にて奉る常燈の外なる由也。◎うちに人の奉りたる [illegible]犬防の內の獻燈のこと。◎佛のきら〳〵と 補十一面觀音金色の尊像。◎手ごとに文をさゝげて [illegible]御燈文(ミアカシブミ)なるべし。源氏玉葛の卷にも、初瀨にてみあかし文の事あり。[illegible]獻燈供養の願文に限らじ。人々さま〴〵の所願を、僧に誂へ書かしめて、讀み上げしむるならむ。◎禮盤 補導師の著席して讀經する高座 ◎むかひてゐぎちかふ [illegible]論義誓ふにや 補千蔭本むかひの三字を削り、てひろぎ、手據ぎ。闇也と記し、濱臣は一本向ひの下、てひろぎとあり。手廣ぎ歟といへり。考異、堺本といふには「禮盤にゐかはり〳〵ちかふ」とある由なり。此の堺本の文に從へば、何の難きこゝろもなく聞ゆれど、古來學者の校考、かくさま〴〵なるを記しおく。誓ふは誓願にて、參籠者の請ひのまに〳〵、僧の交る〳〵高座に上りて、讀經し立願する由なり。◎さばかりゆすりみちて云々 補此處にもかしこにも。

千蔭校本にはむかひの三字なし

ちかうさふらふ千蔭本による春本ちの字を落せり

かの坊にの下千本などいふずきやうのかねの音とつゞけたり

ふみをさゝげて禮盤(ライバン)にむかひてろぎちかふも、さばかりゆすりみちて、これはと、とりはなちて聞きわくべくもあらぬに、せめてしぼり出だしたるこゑ〲の、さすがにまたまぎれず、「千燈の御心ざしはなにがしの御ため」とわづかに聞こゆ。おびうちかけてをがみ奉るに、こゝにちかうさぶらふといひて、樒(シキミ)のえだを折りてもてきたるなどのたふときもをかし。犬ふせぎのかたより法師よりきて、「いとよく申し侍りぬ。いくかばかりこもらせ給ふべき」などとふ。「しか〲の人こもらせ給へり」などいひきかせていぬる、すなはち火桶果物などもてきつゝかす。はんざうに手水などいれて、盥の手もなきなどあり「御供の人はかの坊に」などいひて、呼びもてゆけば、かはり〲ぞゆく。ずきやうのかねの音、我がなゝなりときけばたのもしくきこゆ。かたはらによろしき男の、いと忍びやかにぬかなどつく。たちゐのほども、心あらんと聞こえたるが、いたく思ひ入りたるけしきにて、いもねず(不寐也)行ふこそいとあはれなれ。うちやすむほどは、經高(キヤウタカ)くはきこえぬほどに、よみたるもたふとげなり。たかくうち出ださせまほしきに、ましてはななどをけざやかにきゝにくゝはあらで、すこし忍びてかみたるは、何事をおもふらん。かれをかなへばやとこそおぼゆれ。

◎御局して侍り　〔補〕局のしつらひしたりとて、案内に來りし也。Ⓒ衣さへさまに引きかへし　〔補〕車より下るゝ他の女性たちのさまをいふ也。袿の裾の長きを、表の方に折返し著て出づるもあり。又は唐衣・裳の禮裝のまゝなるもありと也。◎深履はうくわ　〔補〕かゝる所にては、女性も袴の口を括りて、履をはけり。はうくわは半靴の音便也。◎內わたり　〔春〕大內(宮中)のやうなりと也。◎內外などゆるされたる　〔補〕春本「うちとなど」と假名書にしたり。考異には、古本によりてないげとよみ、狹衣に「ないげもゆるし給へ」とある文を證とせり從ふべし。さて內外ゆるすとは、主人の方の外樣(トザマ)と、奥方の內證(ナイシャウ)と、雙方ともに立ち入る事を許されたる者なり。◎そこもとはおちたる所に云々　〔補〕先に立ちて案内する男の詞也。そこは一段卑くして下る所。こゝよりは又上る所など、薄暗き寺院の廊なれば、注意するなり。◎さいだつ者などを　〔補〕參詣の人々、佛殿さして行く雜踏のさま也。貴人の前に、先立ちて歩み行く者を制して、暫し此の御一行の通り過ぎ給ふまで待たれよ。さやうに御一行の中に、立ち交りて歩(アリ)かぬものぞ。など叱る事もあるを、淳直なる田舍翁などの、始めて心付きて、暫し立止りて遠慮するもあり。腹黑き男ばらは、聞かぬ顏して、我先にと行くもありと也。以上は、長谷寺に到着したるより、假りに我か局と定まりたる所に、案內されて行くまでの事を書きたる也。

局にゆくほども、人の居(キ)なみたる前をとほりゆけば、いとうたてあるに、犬ふせぎのうちを見いれたるこゝちいみじく尊く、などて月ごろもまうでず過ぐしつらんよて、まづ心もおこさる。みあかし常燈(ジャウトウ)にはあらで、うちに又人の奉りたる、おそろしきまでもえたるに、佛のきら〳〵と見え給へる、いみじくたふとげに、手ごとに

いへば三井寺の事を指すならひなりしが、此處は唯何處となく、佛寺といふ意につかひたるなり。◎つぼねなどするほど　〔補〕都人の、石山、初瀨なとに詣づるには、參籠すとて、數日間寺院の一室を借り、そこに起臥しつゝ、時を定めて佛殿に參拜するを例とせり。されば先づ寺に著きては、滯留すべき日數をいひ、室の貸與を申し入るゝ、これを局(ツボネ)するといふ也。◎くれ橋　〔補〕春曙抄、榑橋にやとあるより、後の諸家みな之に隨從して、榑材木(クレザイモク)にて造れる橋と、解したるは誤れり。是れは呉橋(クレハシ)のこと也。さるは同抄引く所の宇都保物語の文にも、「樓に登り給ふべき程のくれ橋は、いろ〳〵の木をまぜ〳〵に造りて、下より流るゝ水は涼しく見ゆ」とありて、榑材(クレザイ)に限らず、種々の木材を交ぜて作りだるにて知られたり。さて呉橋は、推古天皇紀二十年五月、百濟の歸化人して、南庭に呉橋を構(ツク)らしむとあるものにて、橋の上に屋根あり、欄干を附けたるをいふ。要するに構造上の稱なり。長谷寺には山上の堂へ登るに上屋(ウハヤ)ある階段の長廊あり。之を呉階といへるなり。◎おびばかりしたる　〔補〕帶したるなり。笈といふ說はわろし。又濱臣說に、源氏浮舟の文を引きて、かけ帶の事としたれど、此處はそれとも別にて、小法師の裳(腰衣ともいふ)ばかりに帶して、上の法衣を着ざるをいへる也。後世の僧衣は直綴(チキトツ)とて、上下一續きに長く縫はれたれども、古のは多く上下を別にして、腰部以下に裳をまとひ、上に半身の法服して、帶を締めたり。常は上衣を略して着ず、仍て帶ばかりとはいへる也。◎いさゝかのつゝみもなく　〔補〕少しも憚る所なく、恐れぬ心なり。◎俱舍の頌　〔春〕大藏經綱目指要錄七云。俱舍頌一卷。天親菩薩造也。(以下略)〔補〕頌(ズ)とは、字句を一定して諷誦するに便ならしめし詞體の一也。◎かうらん押へて　〔春〕廊の高欄に取り付くさまなり。〔補〕廊といへるは例の呉階の事なり。高欄は、勾欄とかく方正しきにや。元は緣の四隅に折れ勾(マガ)りたる欄をいへるに始る。

はやなどいへば千本による

なき經のはしうちよみ、倶舍(グシャ)の頌(ズ)を少しいひつゞけありくこそ、所につけてをかしけれ。わがのぼるはいとあやふく、かたはらによりて、かうらん押へてゆくものを、只板敷などのやうに思ひたるもをかし「御つぼねして侍りはや」などいへば、沓どももてきておろす。衣(キヌ)かへさまにひきかへしなどしたるもあり。裳からぎぬなど、こはごはしくさうぞきたるもあり。深履(フカグツ)はうくわ、などはきて、廊のほどなどくつすり入るは、内わたりめきて又をかし。内外などゆるされたる若き男ども家の子など、又立ちつゞきて「そこもとはおちたる所に侍るめり。あがりたる」などをしへゆく。何者にかあらん。いとちかくさしあゆみ、さいだつ者などを「しばし。人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり」などいふを、げにとてすこし立ちおくるゝもあり。又きゝもいれず我れまづとく佛の御前にとゆくもあり。

此の段は正月佛寺に參詣する事より、延いて長谷寺にての事どもを記せるなり。正月五月九月を佛家に三齋月と稱して、持齋すべき月とす。其の事上にも略說したれど、猶拾芥抄に據りて稍精しくいへば、此の月月には帝釋天この現世界に對して、衆生の善惡を勘へ記すと云ふ。仍て五味を斷ち持戒精進し、佛菩薩の名を唱ふる時は、一切の罪業も消滅し災難起らず。命終る後も十方淨土に往生すと云ふ。此の功德に因つて此の月々諸人佛寺に參詣するもの多きなり。◎寺に籠りたる 〔當時都にて、山といへば比叡山、寺と

かれたる日さましてきゝたるとあり此本と心こと也と註せり秋の野の上千本には古本によりて「また荒れたる宿の板間よりもりくる月影」の一句を補へり

雪。男も女もきよげなるが黒き衣きたる。はつかあまり六七日(ムユカナヌカ)ばかりのあかつきに、物がたりしてゐあかして見れば、あるかなきかに心ぼそげなる月の、山のは近く見えたるこそいとあはれなれ。秋の野。年うち過ぐしたる僧たちの行ひしたる。あれたる家にむぐらはひかゝり、よもぎなど高くおひたる。庭に月のくまなくあかき。いとあらうはあらぬ風の吹きたる。

又立ちかへりて、あはれなる條々をかけり。◎川竹 補徒然草に河竹は葉ひろし。御溝に近きは河竹とあり。禁中にての事なり。◎夜などもすべて 補濱臣云、夕ぐれと、曉と、夜と三つながら、川竹の音あはれなるを云ふ也。◎せく方ありて 春親のいさめなどに也。補せくは間を隔て塞くこと。◎黒き衣 補親また夫の喪にて、墨染の麻衣きたる人に、同情して也。◎あれたる家に 補葎・蓬など茂りたると、月の隈なきと、風の吹きたると、荒たる家のあはれなる三條をあげしなりと、濱臣翁いへり。

一一〇（初瀬まうで）

正月に、寺にこもりたるはいみじく寒く、雪がちにこほりたるこそをかしけれ。雨などのふりぬべきけしきなるは、いとわろし。はつせなどにまうでて、局などするほどは、くれはしのもとに、車引きよせてたてるに、おびばかりしたるわかき法師ばらの、あしだといふ物をはきて、いさゝかつゝみもなくおりのぼるとて、何とも

川竹の云々　春抄にイ本夕暮暁に川竹の風に吹

甚(イタ)く省略し、衣の色も目たゝぬやう、質素の風にて參るにとなり　◎のぶたか　㊟宣孝。右衛門權佐。尊卑分脈による。◎たゞきよき衣を　㊟謹もやつれて參るにのぶかたは淨衣にてまうでんとていへる詞也　㊟淨衣とは白き布狩衣なり。昔神佛參拜に着用せしなり。◎かならずよもあしくてよと　㊟金峯山の藏王も必惡くやつれてまゐれよとはよもの給はじと也　◎白きあを　㊟あをは襖なり。後世の狩衣は、襖を製(ツク)り替へたるものにて、襖は狩衣の本名ともいひつべく、白き襖すなはち淨衣なり。春抄に、しろきを直衣歟と註し、あをやまぶきとつゞけ讀みて、襖の色目と心得たるはたがへり。◎山吹のいみじうおどろ〳〵しき　㊟内衣の山吹色なる甚(イタ)く人の目を驚かすやうなるにてと也。◎たかみつ　㊟隆光。主殿助。三條右大臣定方より五代。右衛門佐宣孝ノ息。◎紅の衣　㊟例の内衣なり。◎すりもどろかしたる　㊟白き絹に紫青などにて、草木の花や葉などの模樣を摺り付けたるものなれば、形模樣の全からず、戾(モヂ)り亂れたる樣なるを、もどろかすとはいふなり「春日野の若紫の摺り衣しのぶのみだれかぎりしられず」とよみたるも、忍草を摺り亂したるを歌へるにて知るべし。◎水干袴　㊟水干は絹の名　糊を用ひず、水張にして干したればいふ。それにて縫ひたる袴なり。後世一種の服名に、水干といふ出來たれど、それにはあらず。◎いひけんにたかはずもと　㊟よき衣きてまうでんに、なでう事かあらんといひしに、たがはずも有ける哉との心也。

九月(ナガツキ)三十日(ツゴモリ)、十月一日(カンナヅキツイタチ)のほどに、只あるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの聲。にはとりの子いだきてふしたる。秋ふかき庭の淺茅(アサヂ)に、露のいろいろ玉のやうにて光りたる。川竹の風にふかれたる夕ぐれ。あかつきにめさましたる。夜などもすべて。おもひかはしたるわかき人の中に、せくかたありて心にしもまかせぬ。山里の

青色のあを春本をあをによりの二字落せり千本によりて補ふ

すこし人わろき。なほいみじき人ときこゆれど、こよなくやつれてまうづとこそは知りたるに、右衞門のすけのぶたかといひける人は、「あぢきなき事なり。たゞ淸き衣(キヌ)をきてまうでんに、なでふことかあらん。かならず「よもあしくてよ」と、みたけのたまはじ。」とて、三月(ヤヨヒ)つごもりに、紫のいとこき指貫、白きあを、山吹のいみじくおどろ〳〵しきなどにて、たかみつがとのもりのすけなるは、靑色のあをを紅のきぬ、すりもどろかしたる水干はかまにて、うちつゞき(のぶかたにうちつゞきて也)まうでたりけるに、歸る人もまうづる人も、めづらしくあやしき事に、すべて此の山道に、かゝるすがたの人見えざりつと、あさましがりしを、四月晦日(ウツキツゴモリ)にかへりて、六月十餘日(ミナヅキトホカアマリ)のほどに、筑前ノ守うせにし代りになりにしこそ、げにいひけんにたがはずもと聞こえしか。是れはあはれなる事にはあらねども、みたけのついで也。

此の段心に深く感じたる事どもを記せり。あはれとは諸所に度々出でたるが、もと噫(ア)と心に感ずる時の詞にて、悲哀の意のみにあらず。◎孝ある人の子　補孝心深き子也　◎みたけ　補御嶽。吉野の奥。金御嶽(カネノミタケ)の略。金峯山(キンプセン)。◎さうじ補精進。◎へだてゐてうちおこなひたる曉のぬか　春ぬかは額突とて、禮拜する事也。御嶽精進に、別所にはなれてゐて、彌勒を禮拜するさま也。金峯山の金剛藏王は、過去釋迦、現在觀音。當來彌勒と也　◎えぼうしのさまぞ人わろき　補久しき山路の旅に、烏帽子も萎え曲(ユガ)みなどして、人目見苦しくなりたるをいふ。◎こよなくやつれて　補身分高き人にても、御嶽參詣にとては、旅裝など

べくもあらずとて。果はやみにきとあるたぐひ也。

一〇八（かきまさりするもの）

かきまさりするもの。松の木。秋の野。山ざと。山路。鶴。鹿。冬はいみじくさむき。夏はよにしらず暑き。

◎かきまさりする物　〔春〕ゑにも書まさり　詞書にも書まさりする也　〔□〕一本繪にかきまさりするものとあり。◎松の木　〔春〕是より鹿まではゑに書まさりする也。㊀冬はいみしく　〔□〕是以下は詞に書まさる也　〔□〕此の下、春註韓愈の詩を引きたれど、さまではあらじ。愚按、冬は云々夏は云々といふ二つは、前段のつゞきにあらずして、是は前に「何々するもの」といふ詞書を、落したるならむ。思ひていはゞ「繪にもえかゝぬもの」などやうの詞なるべし。

一〇九（あはれなるもの）

あはれなるもの。孝ある人の子。鹿のね。よき男のわかきが、みたけさうじしたる。へだてゐてうち行ひたる曉のぬかなど、いみじうあはれなり。むつまじき人などの、めさましてきくらんおもひやり。詣づる程のありさま、いかならんとつゝしみたるに、たひらかに詣でつきたるこそいとめでたけれ。えぼうしのさまなどぞ、

引歌 濱臣翁も同じ

此の湯は温泉の事なり　㊀七久里湯　[illegible]千蔭云、堀河百首、いかなれば七くりの湯のわくがごとくいづる泉のすゞしかるらむ」堀河後度百首に常陸の歌「よの人の戀のやまひのくすりとや七くりの湯のわきかへるらん」㊁有馬の湯　[illegible]千蔭云六帖「あひ思はぬ人をおもふぞ病なる何かありまのゆやもゆくべき」

一〇六（常よりもことにきこゆるもの）

常よりも殊に聞ゆるもの。元三の車のおと。鳥の聲（是も元三の事也）。曉のしはぶき。物のねはさらなり。

常の時より特別かはりて聞ゆる音をいふ也。㊀元三の車のおと　(春)正月元日二日三日參内する車のといふ説は誤れり、唯元日の事をいふが本義なり。年の元（ハジメ）、月の元、日の元にて、元三とはいへる也。◎物のねはさら也。(春)是も曉の管絃也。常よりことなるといふも事新しと也。

一〇七（ゑにかきておとるもの）

ゑにかきておとるもの。なでしこ。さくら。山吹。物語にめでたしといひたるをとこ女のかたち。

㊀なでしこ　(春)イ本此下にさうぶとあり。菖蒲也　◎物がたりにめでたしと　(春)桐壺卷云、ゑに書たる楊貴妃の形は、いみじき繪師といへども。筆限あればいと匂ひなし云々。狹衣に、大將の御ありさまぞ筆及ぶ

卯月の晦日(ツゴモリ)に、はせ寺にまうづとて、淀のわたりといふものをせしかば、船に車をかきすゑてゆくに、しやうぶ、菰(コモ)などの末みじかく見えしを、とらせたれば、いと長かりけり。菰つみたる舟のありきしこそ、いみじうをかしかりしか。たかせ(河内國也)のよどには、これをよみけるなめりと見えし。三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲かるとて、笠のいとちひさきを著て、はぎいと高きをのこ、わらはなどのあるも、屏風のゑにいとよくにたり。

此の段、淀川を船渡りして、見もし感じもしたる所をかける筆すさみなり。拾遺集二に、天暦の御時、御屏風に淀の渡りする人かける所に、壬生忠見「いづかたに鳴きて行くらむほとゝぎす、淀のわたりのまだ夜深きに」名高き所なればなり。◎長谷寺 [國]大和國初瀬の長谷寺なり。金色二丈六尺の觀音を安す。長谷寺を世人初瀬でらくと呼びしより、遂に長谷の二字をも、ハセとよむやうになれるなり。◎淀のわたり [谷]古は橋なくて、舟渡りせしなり。◎たかせの淀には [古]六帖歌「こも枕高瀬の淀にかるこものかるとも我れはしらでたのまん」其外あまたよめり。◎はぎいと高きをのこ [國]袴のすそを脛高くかゝげて、水中に下りゐたるをいふ。

一〇五 (湯 は)

湯は。なゝくりのゆ。有馬(攝津也)のゆ。玉つくり(未詳)の湯。

ときの森ともくるべきの森抄及活本くゐつきのもりとありうゑ木抄活本にうへつきとあり

濱翁のひける歌ども千蔭翁もみな既に書き入れおかれたり

り。ときは（山城也）のもり。くるべきのもり。神なびの森。うたゝね（未知）のもり。うきた（浮田山城也）のもり。うゑ木のもり。いはた（石田山しろ也）の森。かうだて（未知）の森といふが、みゝとゞまるこそあやしけれ。もりなどいふべくもあらず。たゞひと木あるを、何につけたるぞ。こひのもり。こはだのもり。

◎おほあらきのもり　[illegible]大荒木　八雲山城云々　◎しのびのもり　[illegible]未知、但八雲しのぶの森陸奥云々。是な書たがへしにや忍びの岡は河内也　◎こゝひの森　[illegible]濱臣云、拾遺哀傷右大臣顕光「こゝにだにつれづれとなく郭公ましてこゝひの森はいかにぞ」こゞひは子戀なるべし◎こがらしの森　[illegible]濱臣云、古今六帖「人しれぬ思ひするがの國にこそみをこがらしのもりは有けれ」するがなる證なり　◎いはせのもり　[illegible]盤瀬森。八雲云、大和又攝津、信濃にもあり云々　[illegible]濱臣云、新勅撰夏に田原天皇「神なびのいはせのもりの時鳥ならしの岡にいつかきなかん」攝津國にや　◎くるべきの森　[illegible]八雲にもしれす　◎神なひの森　[illegible]神南備森也。津國今かうなびといふ所也　◎うきたの森　[illegible]濱臣云、万葉集十一に「かくしてや猶ややみなむ大荒木のうき田の森のしめならなくに　◎いはたの森　[illegible]濱臣云、一本いはたの森の次にたれその森あり。伊勢とあり。然して名寄には伊賀とありて知家朝臣の歌「さよふけてたれそのもりの時鳥名のりかけてもすぎぬなるかな」◎かうたての森　[illegible]濱臣云、加茂に神館の杜ありもしくはそこか　◎こひのもり[illegible]未考　◎こはだの森　[illegible]山城の木幡にや可尋之。

一〇四（淀のわたり）

立きゝのもりイ本にた

せきは。逢坂の關。須磨の關(津の國也)。すゞかのせき(伊勢也)。くきたの關。白川の關(奥州也)。衣(コロモ)のせき(奥州)。たゞごえの關。はゞかり(八雲 陸奥)のせきとたとしへなくこそおぼゆれ。よこばしりの關。清見(するが也)が關。見るめの關(八雲 近江云々)。よしなよしなのせき(陸奥の奈古曾の關の一名ときこえたり)こそ、いかにおもひ返したるならんと、いとしらまほしけれ。それをなこその關とはいふにやあらん。逢坂などをまで、思ひ返したらば、わびしからんかし。あしがら(八雲 相模)のせき。

◎あふさかのせき (春)近江也、忍熊王武内宿禰と戰まけて退しに、武内宿禰追て、こゝにて行逢て、終に忍熊王を亡したる故、逢坂と云と日本紀九にあり。◎きくたの關 (春)細流云、奥州の菊田(キクタシ)剌關也。俗にくきたのせきといふ也 ◯たとしへなくこそ (春)たとへがたき心也。只こゆるといふ名と、憚るといふとはたとへくらべがたき心也 ◎よこばしりの關 (春)濱臣云、兼盛集に、「横はしり清見が關のかよひ路に、いつといふ事はながくとゞめつ」これにて見れば、伊豆國にや。◎いかに思ひ返したるならん (春)思ひ立たる事を又由なしと思ひ返したるやうなれば也 ◯逢坂などをまで (春)逢べしと契りし人の、由なしな來そ、など思ひ返したらば、侘しからんと也。逢坂を逢にそへて、うたにもあまたよみたれば也。

一〇三 (森は)

森は。おほあらきの森。しのびのもり。こゞひのもり(八雲 二 伊豆國云々)。こがらし(木枯 駿河也)の森。しのだ(信太 和泉也)のもり。いくた(生田 攝津也)の森。うつぎ(未知 八雲 同前)のもり。きくだ(未知)のもり。いはせの森。立聞(未知)のも

物はえもつまじと也。瓶は方量かぎりあり。人の力は限りなき事をもしらでいへる、誠に笑はるべし。〔補〕此の諺沙石集にも見ゆ。今もいへどいと古きを見るべし。◎なでふこと 〔補〕何といふこと也。人の聞きて、其の義を辨ふるまでもなく、唯方弘の詞をかしきに笑ふと也。◎かまどに豆やくべたる 〔補〕抄云釜所に萩や煎ながら來たりつるかとなり。是れはせはしき故なり云々。是れ亦譬喩の奇妙なるを笑ふなり。◎飯酒ならばこそ 〔補〕飲食物の外は、人の欲しがらぬものと、定めいふがをかしき也。◎さては往ぬる人どもも 〔春〕其の外には、退出の人々ありしとなり。〔補〕此の外には、誰れも居侍らずと答ふべきを、既に退出せし人々もありと答へたるは、云はでもの事なれば也 ◎人まによりきて 〔春〕人のなき間に、方弘清少のもとに來て也。◎わか君こそ 〔補〕此の「こそ」は、人を呼ぶ時に用ふる詞なり。源氏物語夕顏に、右近の君こそ。北殿こそ。などあり。◎むくろごめに 〔春〕軀籠。全身みな此方へより給へと也。〔補〕さいふべきを、五體ごめにといへる也。むくろを五體といひつるが、聞きなれぬ詞なれば、又笑はれたるなり。◎除目 〔春〕三ケ夜行はるゝ中の夜也。◎燈臺の打敷 〔春〕燈臺の下に敷く打敷にて、油單也。〔補〕菊燈臺、三尺四尺の高さ種々あり。◎つようとらへられ 〔春〕油單に、方弘の足を、つけまつはされし也。◎したうづ 〔春〕足衣なり。桃華蘂葉云、襪。練貫の小袖を着する時は、練貫を用ふ。宿老は白き平絹の練はりたる也云々。◎頭つき給はぬ 〔春〕藏人頭は貫首とて、殿上の管領なれば、臺盤につきて食する時も、頭の着かざる間は、殿上人も着席せぬを、方弘は頭より先に直を食ひし也。◎やなら 〔補〕俗語ソツト又ソロソロなどいふに同じ。

一〇二（闕は）

いひつると云ひてまたわらふ。「ぢもくの中の夜、さしあぶらするに、燈臺の打敷をふみ(方弘也)てたてるに、あたらしき油單(ユタン)なれば、つようとらへられにけり。さしあゆみてかへれば、やがて燈臺はたふれぬ。したうづはうちしきにつきて行くに、まことに道こそ震動したりしか。頭(トウ)つき給はぬほどは、殿上の臺盤に人もつかず。それに方弘は豆ひともりをとりて、小障子のうしろにてやをらくひければ、ひきあらはして、笑ふ事ぞかぎりなきや。

此の段正弘が常の詞、振舞のなこがましきを、人に笑はるゝ事をかけり。◎親 〔補〕方弘の親たち、我が子の笑はるゝを、いかに聞くらんと也。◎ともにありく 〔補〕方弘の供してありく從者なり。◎ものいとよくするあたり 〔補〕加藤氏の抄には、呉服所などなるべしといひ、岡西氏の旁註にも、呉服の裁縫する所とあり。按ずるに、染めもの裁縫など、巧みにする所に誂へての意なるべし。◎人よりはよくて着たるを 〔補〕この下旁註本にも抄本にも「紙燭さしつけて焼き、あるは云々」とありて、抄に卒忽の事を云へりと註せり。◎こと人に著せばやなどいふに 〔官〕このには、よの誤りか。にとよと走り書(カキ)しては、往々(マヽ)似る事あり。にのまゝに読かば、人の云々いふに就いて思へば、げに詞づかひな始め、なこかましくて、人に嘲笑せらるゝ事多しと、清少も親しく見聞せしことを、書きたるにや。又こと人に云々とは美服の正弘に似合はねば、他の風采よき人に著せたしなどいふ也。◎里にとのゐもの 〔春〕方弘殿上に宿直して、里亭へ夜の物取りにやるなるべし。◎一升瓶に二升は入るや 〔春〕一升入るべき瓶に、二升に入らじと也。一人して二人の

方弘は、いみじく人に笑はるゝものかな。親などいかにきくらん。ともにありくものども、いと人々しきを呼びよせて、「なにしにかゝる者には仕はるゝぞ。いかゞおぼゆる」などわらふ。ものいとよくするあたりにて、下襲の色、上のきぬなども、人よりはよくて著たるを、「是れはこと人にきせばや。」などいふに、げにぞ詞づかひなどのあやしさ。里にとのゐ物とりにやるに、「男二人まかれ」といふに、「ひとりして取りにまかりなんものを」といふに、「あやしの男や。一人してふたりの物をばいかで持つべきぞ。ひとますがめに、二升は入るや」といふを、なでふ事とする人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使のきて御返事とくといふを、「あなにくの男や。かまどにまめやくべたる」。此の殿上のすみ筆は、何者の盗みかくしたるぞ。いひ酒ならばこそ、ほしうして人のぬすまめ」。といふを又わらふ。女院なやませ給ふとて、御使にまゐりてかへりたるに、「院の殿上にはたれ〳〵かありつる」。と人のとへば、「それかれ」など四五人ばかりいふに、「又は」ととへば、「さてはいぬる人どもぞありつる」といふを、又わらふも亦あやしき事にこそはあらめ。「人まによりきて、わが君こそ。まづ物きこえん。まづ〳〵人のの給へる事ぞ」。といへば、「何事にか」。とて几帳のもとによりたれば、「むくろごめにより給へ」。といふを、「五體ごめに」となん

督　〔補〕考異に、藤原實成なるべし。公季の一男なりとて、公卿補任を引き、長德四年右近衞中將、寛弘六年左兵衞督に任ぜられし由いへり。時代相應せり。

一〇〇（はるかなるもの）

はるかなるもの。千日のさうじはじむる日。半臂の緒ひねりはじむる日。みちの國へゆく人の、あふ坂の關こゆるほど。生れたるちごのおとなになるほど。大般若の御どぎやうひとりしてよみはじむる。十二年の山ごもりのはじめてのぼる日。

◎はるかなるもの　〔口〕行く末遠く思ひやらるゝ事なり　◎千日のさうじ　〔補〕壹千日の間精進して、魚肉の類をも口にせず、修行に精進して過ごすほど。◎半臂の緒　〔口〕裝束圖解中に詳述したるが、先づ半臂は上衣（袍）と下襲との間に着る袖なき衣なり。之を中結（ナカユヒ）する緒を、後世「わすれを」と稱して別に幅二寸五分、長さ一丈二尺の單（ヒトヘ）の裂（キレ）を折りて用ふ。四方を程よくひねる定めなれば、日數を要すべし。委しくは圖解に就いて見られよ。◎大般若可讀經　〔口〕六百卷を、獨してよむは遙かなるべし。◎十二年の山ごもり　〔補〕夏蔭翁云、弘仁十三年六月、最澄（傳教大師也）奏言して、十二年の山ごもりを始む。後拾集戀二「男の久しうありて、まで來て、御心のいとつらきに、十二年の山ごもりしてなむ云々。上文おぼつかなきものの條にも、十二年の山ごもりの女親などあり。此の頃盛に行はれし事か。山は叡山をいふなるべし。

一〇一（方弘）

事ありて、参り候ふとなり」◎よりたる 〔春〕清少の（使に近）よりたる也。◎公任の君宰相中將殿の 〔春〕公任と宰相中將殿と、兩人のおこせ給ふと也。公任は堀河相國賴忠公の男、和漢の才人なり。宰相中將は齊信卿にや。〔補〕かくあるを、岩崎氏は辯じて云、是れは則ち公任一人なるべし。此の草子大納言ほどの人を、公任の君などとはかゝぬ例なり。中古歌仙卅六人傳に、永觀元年十二月十三日任二左近權中將一、永延三年二月廿日、補二藏人頭一正暦三年八月十八日任二參議一年廿七。と見えて、此の君大納言になり給へるは、寛弘六年にて、遙に後なれば、清少納言の中宮に仕へて、花やぎし頃は、公任卿宰相中將なるべしと云々。千蔭本には、古本により「是れ公任の宰相殿の」と改めて、の君中將の四字を删りたり。げにも宰相は公任卿の事にて、一人と知るべし。◎ことなしび 〔補〕事無風(コトナシブリ)の意にて、何事も障る事なき樣にと也。俗語無難にといふに同じ。美隆云、此の詞所々にて少しづゝ意たがへり。俚言にヨラズサハラズといふが如し。おいらかにて、さしたる事なき意にもいひ、又上(ウハ)べをつれなしづくりて、事なきふりをする意にも、又此處の如く、無難にといふ意にもいふ也。されど云ひもて行けば、同じ意におつめり。◎心一つに苦しき 〔補〕自分一人の心になやむ由なり。◎げにおそくさへあらむは 〔補〕巧遲は拙速にしかずの心になり。◎わななく 〔補〕戰栗する事にて、餘寒に手のふるはるゝと、一つには公任の學才に臆する所もありてにや。◎これが言 〔補〕この句の評言。◎そしられたらば云々 〔補〕清女の附けたる句の評よからずは、聞きたからずとなり。然るに上達部の見聞き感じて、清女の如き才人は、上に申請して、内侍の官にも進めたしと、意外の好評を博せし也。内侍は内侍のすけの略稱。掌侍の事を、たゞ内侍とのみいひならへり。◎俊賢 〔春〕源ノ俊賢卿、西宮左大臣高明公の男也。〔補〕これも賢才の聞え高くて、四納言の一人といはれたり。◎左兵衞の

公任の君千蔭本の君と中將との四字を删れり

督の下本による春本には佐とあれど

にとのもづかさきて、「かうしてさぶらふ」といへば、よりたるに、「公任の君宰相中將どの丶」とあるを見れば、ふところ紙にたゞ、

すこし春あるこゝちこそすれ

とあるは、げにけふのけしきにいとよくあひたるを、これがもとは、いかゞ附くべからんと思ひわづらひぬ。「たれ〳〵か」と問へば、「それ〳〵」といふに、みなはづかしき中に、宰相中將の御いらへをば、いかゞことなしびにいひ出でんと、心ひとつにくるしきを、御前に御らんぜさせんとすれども、うへのおはしましおほとのごもりたり。とのもづかさは、「とく〳〵」といふ。げにおそくさへあらんは、とり所なければ、さばれとて、

そらさむみ花にまがへて散る雪に

とわなゝくわなゝくかきてとらせて、いかゞ見給ふらんと思ふもわびし。これが言をきかばやとおもふに、そしられたらばきかじとおぼゆるを、俊賢の中將など、猶內侍に申してなさんと、さだめ給ひしとばかりぞ、左兵衛の督の中將にておはせしが語り給ひし。

此の段も清少みづからが頓才を、人々に賞美せられし事を書けるなり。◎かうして候ふ　圖かくかくの用

かりそめの橋にて、此處かしこへうつす橋といふ意なり。」とあり。

九八　（早く落ちにけり）

殿上より梅の花の皆ちりたる枝を、「これはいかに」といひたるに、たゞ「早く落ちにけり」（清少の答也）といらへたれば、其の詩をずゞじて黒戸に殿上人いと多くゐたるを、うへの御前（一條帝）きかせおはしまして、「よろしき歌などよみたらんよりも、かゝる事はまさりたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

殿上人たちの、梅のちり枝を、清女の目前にさし出して、唯これを何と見る。と問ひたるに、清少の頓智に、古き詩序の句にて答へたるが、人を驚かしたる也。◎早く落ちにけり　（補）紀納言（長谷雄）の停「盃看二柳色一」といふ詩の序に、「大庾嶺之梅早落、誰問二粉粧一」とあり。大庾嶺は一名梅嶺とて、梅花の多き支那の名所なりといふ。この句、後に公任卿の朗詠集に入れられたり。◎よろしき歌云々　（補）千蔭云、よき歌といふにはあらず。すべて常の事をよろしと云ふ心に、通例の歌よみたるよりはといふ意なるべし。◎其の詩を誦して　（春）彼の序を大やうに詩を誦しといへる也。

九九　（花にまがへて散る雪に）

二月（キサラギ）つごもり風いたくふきて、空いみじく黒きに、雪少しうちゝりたるほど、黒戸

侍臣之間、撰レ堪レ事之人一供、無二定例一皆著二當色袍一謂二之闕腋一。今案髪もとどり御びんに參る人には、紫のきぬの直衣を着て伺候するを御うちきの人といふ也云々　◎入りたゝぬ　〔春〕入立（イリタチ）とは、女御達の御中に男子の入るを許さるゝ事。禁秘抄臺盤所條に以二殿上人一臺盤所參入之人上稱二入立一、或稱二臺盤所入立一也、とあり。かく女房席へ憚りなく入る事を許されぬをいりたゝぬとはいへり。道頼は本妻腹の子にあらざれば、入立を許されざる由なり。春註、別腹の兄弟なれば親しからぬ也。とあるにても解き得れど、元來「入立」といふ名目ありて、一つの制度なる事に注意すべし。◎世の人はせちにいひおとし　〔春〕世人本妻の高内侍に諂ひて、伊周のみを揚げ、道頼を貶すとなり。せちは切也。甚しき事なり。さて世人は權勢に靡くならひ、伊周をのみ褒むる中に、清女一人は公平の評をなして、憚らず。かゝる所にも、此の人の氣象はの見えたり。◎殿・大納言云々皆さぶらひ給ふ　〔春〕天皇の御送りに侯ふ由なり。◎内藏頭　〔春〕是も道隆公の御子也。賴親の內藏頭と藤原系圖にあり　◎うまの內侍のすけ　〔春〕左馬權頭時明の女。一條院源氏物語を御覽じて、紫式部は日本紀をこそよく見たりけれとのたまひしを妬みて、式部を日本紀の局といひし人なるべし歌人也　◎こよひはえなむ　〔春〕春本「なむ」の二字なし。美隆翁に、えなむとあるべき語勢なり。落したるか。今宵はえなむ參るましきといふを略せる也。含めて心得べし。といへり。此の注意の如く、千蔭本には既に、えなんと補正したり。◎さりともいかでか　〔春〕淑景舍の君御辭退なり。姉宮の上らせ給はぬ前にはいかでかとなり。◎遠きをさきに　〔春〕淑景舍の君をとなり。遠き方にあたれば也。◎うちはし　〔春〕假初に打ちわたしたる板をいふ。本居翁玉の小櫛に、「うちはしは移橋をつゞめたる名なり。よの常の橋は、いつも同じ所にかゝりて、ところをかふる事なきを、これは時にのぞみて、いづこへも用ある所へもて行きて、渡す

御むかへにの下春本女房とあり旁註本により補訂せり

のすけまゐり給へり。「こよひはえなん。」としぶらせ給ふを、殿きかせ給ひて。「いとあるまじき事、はやのぼらせ給へ」と申させ給ふに、又春宮の御つかひ頻りにある程いとさわがし。御むかへに春宮の侍從などもまゐりて、とくとそゝのかしきこゆ。（后宮の御詞）「まづさば、かの君わたしきこえ給ひて」とのたまはすれば、「さりともいかでか」とあるを、「（后宮の御）猶見おくりきこえん」などのたまはするほど、いとをかしうめでたし。「さらば遠きをさきに」とて、まづ淑景舍わたり給ひて、殿などかへらせ給ひてぞのぼらせ給ふ。道のほども殿の御（原子也）さるがふことに、いみじく笑ひて、ほど〳〵うちはしよりもおちぬべし。

◎ひつじの時　〔補〕今の午後二時ごろ　◎えんだうまゐる　〔春〕莚道しく事なり。一條帝の、后宮の御方へ入御のさまなり。〔補〕莚道とは、薄縁の疊を長く續き合せたるをいふ。之を渡殿簀子にのべて、其の上に布單を敷き、通御の御道とす。◎宮もこなたに　〔春〕殿うへなどの御前を立去て、帝のおはしますかたへ參り給ふ也。◎殿上人　〔補〕御供の人々なり。◎殿の御まへに宮づかさ召て　〔春〕中宮大夫以下の宮司に、菓子肴などの事仰付て、殿上人をもてなせと申給ふ也　◎山井大納言　〔春〕道賴卿也。后宮伊周公などの別腹の兄君也。山井殿は三條坊門の北。京極の西。惡所なるよし拾芥に見えたり。永賴の三位の家也。榮花物語云、此大千世君は國々あまた知たる人の山の井といふ所にすむがむすめおほかる婿に成給ひぬ云々。大千世君とは師道賴卿なり。◎みうちきまゐらせて　〔春〕河海云、御ぐしとる人の事也。花鳥云、藏人私記云、御髻御鬢事

めさせよ抄本千本によ る春本には めさすとあ れど

見ゆる也。◎宮の御方より云々 〔譯〕東宮より淑景舍への御使なれど、かゝる折柄なれば、姉宮より祿賜はりたるを、御使心苦しげに、恐縮して立ち歸れりと也。◎宮の御子たちとてひき出たらんに云々 〔譯〕后宮の皇子うませ給はばとの心也。松君をかやうにもてあそぶやうに、皇子をさし出したらばと也。これ一品宮敦康親王なども、いまだ生れさせ給はぬほど也。◎などか今まできることの 〔譯〕何として今まで、皇子御誕生なきかと也。下になきといふ詞を含めて心得べし。

ひつじの時ばかりに、えんだうまゐるといふ程もなく、うちそよめきいらせ給へば、宮もこなたによらせ給ひぬ。やがて御帳（ミチヤウ）にいらせ給ひぬれば、女房南おもてにそよめき出でぬめり。廊に殿上人いとおほかり。殿（關白殿）の御前に宮づかさめして、「果物肴めさせよ。人々醉はせ」などおほせらる。まことに皆醉ひて、女房と物いひかはすほど、かたみにをかしとおもひたり。日の入るほどにおきさせ給ひて、山井（ヤマノヰ）の大納言めしいれて、みうちきまゐらせ給ひてかへらせ給ふ。櫻の御なほしに、紅（クレナヰ）の御ぞの夕ばえなども、かしこければとゞめつ。山井の大納言は、いりたゝぬ御せうとにても、いとよくおはすかし。匂ひやかなるかたは、此の大納言にもまさり給へるものを、世の人はせちにいひおとしきこゆるこそいとほしけれ。殿、大納言、山井の大納言、三位の中將、内藏頭など皆さぶらひ給ふ。宮のぼらせ給ふべき御使にて、馬の内侍

おもひて抄本にはもちてとあり

り。もえぎ（ちかよりへの禄也）のおり物の小袿（コウチキ）はかまおし出だされたれば、三位ノ中將かづけ給ふ。くるしげにおもひてたちぬ。松君の（一歳ばかり也）をかしう物のたまふを、たれも〳〵もうつくしがりきこえ給ふ。「宮の（関白の）御子（ミコ）たちとて引き出でたらんにわろくは侍らじかし。」などの給はするを、げになどか。今まで（いかでか御産なきかとの心也）さる事のとぞ心もとなき。

◎式部ノ丞何某 【頭】天皇の御文もて后宮の方へ參りし也。勘物に信經といへるは非なり。春の傍註、別人にやとある通り、信經の式部丞たりしは、道隆公薨後なればなり。◎おものやどり 【頭】御膳宿。殿內の一室を配膳所とし、御厨子棚をすゑて其の所とす。紫宸殿にても、西庇を御膳宿と稱したり。◎しとねさし出だし 【頭】勅使なるを敬ひて、茵を（簾の下より）出す也。◎ちかより 【頭】周頼。道隆公六男と系圖に見ゆ。異腹の子なれば、伊周隆家等とに一つにならず、離れて春宮に奉仕と見えたり。◎渡殿 【頭】貞觀殿より、登華殿の庇にわたる廊なり。圖を見よ。◎とみにも聞え給はぬ 【頭】淑景舍の君恥ぢらひて、急には御返事書き給はぬ也。◎何がし 【頭】道隆公實名を名のりしを、此の草子に清少の憚りて、名のりを書かず、何某とかける也。當時の例皆かくの如し。何某また「それがし」を自稱代名詞につかひしは、後世よりの事なり。美隆も自から何某といふことはなき由、鈴屋大人の說（源語の註を云ふか）なり。此の說によれば、道隆と宣給へるを、清少が何某と書きて、記しゝ也と云へり。◎さらぬ折は云々 【頭】關白殿などおはせぬ折は、隙もなく淑景舍の御方より御文參らせ給ふ物をと、道隆公の戲れ詞なり。◎奥 【頭】身舍のかた。◎うへ近くより給ひて 【頭】母君助言などして、御返事かゝせ給へば、淑景舍のいよ〳〵つゝみて、恥かしげに

る也。散樂は漢土にて、朝廷の雅樂に對し、民間野俗の樂をいへり。其の樂滑稽戲技を交ふれば、よろづ諧謔の言行を、さるがふこととも稱せしなり。散をサルと唱ふるは、駿河をスルガ敦賀をツルガといふと同例にて、サルガヒ、キルガフなどいふ例は、裝束をサウゾキテ、料理をリヤウルなどいふに同じ。◎日(ヒ)の裝束　〔補〕束帶のこと。前に註せり。◎せばきえん　〔補〕簀子のこと。後世緣側といふ。◎らう〳〵し　〔補〕勞勞。勞巧づきたる事、現代語の才子肌。雅語譯解、巧者ナと譯したり。◎わらふだ　〔補〕藁蓋の音便。圓座。前にも註せり。◎うへの御すぐせ　〔補〕關白の榮花は勿論、北の方の幸運なるをいふ。すぐせは宿世。前世の果報　◎陣　〔補〕陣の座のこと。校書殿の東庇に在り。公卿の集りて公事など議する所。

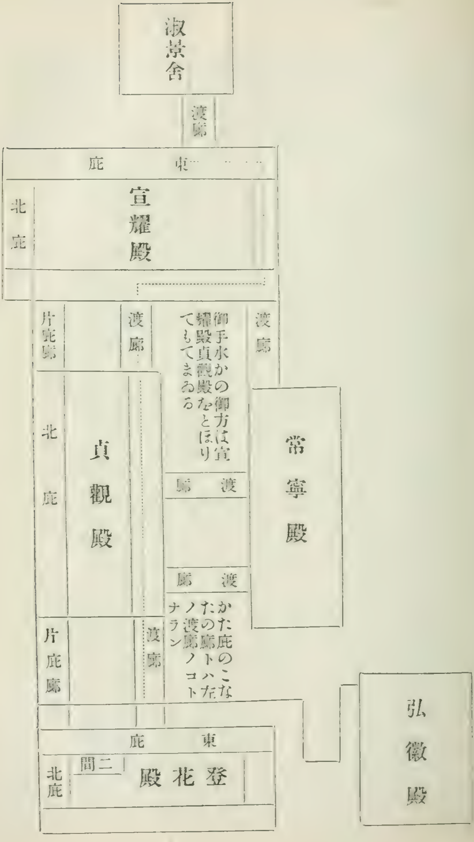
早う　春本にはうの字なきを抄によりて補ふ

しばし有りて式部の丞なにがしとかや。御使にまゐりたれば、おものやどりの北によりたる間(マ)にしとねさし出でてすゑたり。御返(カヘリ)はけふはとく出ださせ給ひつ。まだ茵もとり入れぬ程に、東宮の御使に、ちかよりの少將まゐりたり。御文とりいれて、渡殿はほそきえんなれば、こなたのえんに、しとねさし出でたり。御文とりいれて、殿うへ宮(關白北の方后宮)など御らんじわたす。「御かへり早う」などあれど、とみにもきこえ給はぬを、「なにがし(關白殿)が見侍れば書き給はぬなめり。さらぬ折は、まもなく是れよりぞ聞え給ふなる」など申し給へば、御おもて(淑景舍のありさま也)はすこし赤みながら、すこしうちほゝゑみ給へるいとめでたし。とくなどうへ(母上也)もきこえ給へば、奧ざまに向きてかゝせ給ふ。うへ近くより給ひて、もろともにかゝせ奉り給へば、いとゞつゝましげなり。宮の御方よ

女房達の髪上ぐるものなり。◎藏人　〔補〕此の藏人は、女藏人と稱して女官なり。禁中名目抄校註に、中﨟下﨟之命婦など之を兼ぬ云々。有職問答には、禁中にて朝夕下﨟女房の所役を勤むる也と見ゆ。◎御まかなひ　〔補〕御陪膳卽ち、御給仕に候ふ上﨟女房をいふ。此の條は、女藏人先づ御膳宿（オモノヤドリ）より御膳を取り運ぶ爲に參るにて、之を役送（ヤクソウ）といふ。さて御まかなひの女房、受けつぎて御前に參らする也。仍て最初に髪上げ（理髪）の女官來つて、女藏人や御まかなひ陪膳を勤むる女房の、髪あげをなすなり。春註、后宮の御髪を女藏人など役するさま也。とあるは大に誤れり。抑々髪あげといふ事するに二樣ありしが如し。高貴の婦人の、晴の儀式にするは、寶髻（ホウケイ）平額（ビラヒタヒ）・釵子（サイシ）を具（グ）する也。此の草子の末に見ゆれば、そこに委しくいはん。今一つは朝夕陪膳の女房たちのする事にて、御盤や御高坏などに、垂髪のふりかゝり汚（ケガ）さゞるため、假初に結び上ぐるまでなり。此の所も陪膳の髪上なり。◎かくれ蓑　〔補〕鬼の寶の中に、かくれ笠かくれ蓑とて、身を隱す具ありと、いひ傳へたるよりの戯れなり。拾遺集雜に「かくれみのかくれ笠をも得てしがなきたりと人に知られざるべく」夫木集に「かくれ蓑うき名をかくす方もなし心に鬼をつくる身なれば」など見えたり。◎はしの方　〔補〕關白殿は、二間の端の方（簀子に近き方）におはして、奥の方を向きたればなり。◎かすみのまより　〔春〕清少のほのかに見ゆるをの給ふ也。古今「山櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ」詞ばかりを用ゐて也。◎かれはふるきとくいを　〔春〕古得意也。清少はもとよりの得意にてよく知給ひし物をとの心也　〔補〕今の懇意又知音などいふに同じ。◎かたぐ　〔春〕后宮と淑景舍の君◎おきなおむな　〔補〕道隆公と其の北の方。おむなは、春本女とある非なり。美隆云、おむなと書くべし。（嫗）老女のこと也。◎さるがふこと　〔春〕猿樂言なり。〔補〕猿は借字、散樂の漢語を、國語四段言に活用した

〔補〕これより淑景舎に朝餉の供を出ださるゝ也。◎御てうづ　〔春〕十一日の朝の御手水進る也。◎彼の御かた

〔補〕淑景舎の君の御手水は、其の方にて用意してもて參るなり。◎かた廂のこなたの廊　〔春〕諸本から庇とあるはかた庇の誤りにて、貞觀殿の北廂につゞける、片庇廊のことなり。片庇とは屋根の片流（カタナガレ）なるをいふ。内裏圖に唐庇廊といふは見えず。諸註亦誤れり。◎せばしとてかたへは　〔補〕淑景舎を送り、供して來りし彼方の女房達は、侍坐すべき所の狹ければ、半（ナカバ）は、彼方へ歸り、殘りし女房たちにて、御手水を參らする由なり。かたへは片方、半分といふに同じ。◎櫻のかざみ云々　〔補〕御手水の具をもて來たる童女の服裝なり。春註に、女房の裝束といへるはたがへり。汗衫は童女の服に限れば也。櫻とは表白裏赤花の襲れをいふ。◎萠葱紅梅　〔補〕汗衫の下に著たる內衣の色をいふ。◎織物の唐衣云々　〔補〕后宮附の女房の裝なり。御簾の內より袖口などの押出だされたる樣也。◎すけまさの右馬の頭　〔補〕上に后宮の出ださせ給ひし五節の父菅輔正同人にや。◎北野の三位　〔補〕春註、菅原輔正云々、北野殿是也、正暦三年叙正三位（補任大系圖）とあり。直按するに、大系圖に、圓融花山ノ侍讀、正三東宮學士云々、北野宰相殿是也とあれば、其の女を宰相の君と呼べるも聞えたり。さらば前の右馬頭すけまさは、同名異人か。猶可ㇾ尋。◎番の釆女　〔春〕百寮訓要云、釆女と申すは、國々より可ㇾ然美女を選びて、天子へ參らする也。御陪膳などをゆるさるゝ女房なり。御手水の役をもつとむべし。〔補〕精しくは上に說きおけり。番とは此の日の當番をいふ。◎裳・唐衣・裙帶・領巾　〔補〕女子の禮裝にして、貴人の御前へ出づる公然の儀には、必ず右の服裝をせしなり。其の由前にもいへり。◎おほやけしうからめいて　〔補〕釆女の姿をいふ。西宮記に、纐纈ノ唐衣、比禮、同裳簪如ㇾ常、とある如く、公式だち、且は唐婦人の畫に似たればかくいへるなり。◎みぐしあげ　〔補〕女官の役名なり。


淑景舎
渡廊
東庇
宣耀殿
北庇
渡廊
渡廊
片庇廊
御手水かの御方は宣耀殿貞観殿などとほりてもてまゐる
渡廊
渡廊
貞観殿
北庇
常寧殿
かた庇のこなたの廊トハ左ノ渡廊ノコトナラン
渡廊
片庇廊
弘徽殿
東庇
二間
登花殿
北庇

藏人も御まかなひも春本には藏人どもまかなひの云々とあり武藤氏考異の別本に據りて訂されたるに從へり　裳などの下春本からぎぬの四字あり千本の刪りたるに從ふ

まゐらするほどに、へだてたりつる御屏風もおしあけつれば、かいまみの人、かくれ簑とられたるこゝちして、あかずわびしければ、みすと几帳との中にて、柱のもとよりぞ見奉る。きぬのすそ裳などは、みな御簾(ミス)のそとにおし出だされたれば、殿のはしのかたより御らんじ出だして、(關白の詞也)「たそや。霞のまより見ゆるは」と、とがめさせ給ふに、(后宮の御詞)「少納言が物ゆかしがりて侍るならん」と申させ給へば(關白の詞也)「あなはづかし。かれはふるきとくいを。いとにくげなるむすめども持(モ)たりともこそ見侍れ」などのたまふ御けしき、いとしたりがほなり(關白の詞)「あなたにもおものまゐる　うらやましくかた〴〵のは皆まゐりぬめり。とくきこしめして、翁おむなにおろしをだに給へ」など、たゞ日ひとひ、さるがふことをし給ふほどに、大納言殿(伊周)三位ノ中將(隆家)松君(伊周の子也)もゐてまゐり給へり。殿いつしかといだきとり給ひて、ひざにすゑ給へるいとうつくし。せばきえんに、所せき日(ヒ)の御さうぞくの、下がさねなどひきちらされたり。大納言殿はもの〳〵しうきよげに、中將殿はらう〳〵しう、いづれもめでたきを見奉るに、殿をばさるものにて、うへの御すぐせこそめでたけれ。「御わらふだ」など聞え給へど、「陣につき侍らん」とていそぎたち給ひぬ。

衣なり 例の小袖にあたる。◎御紐さして 〔湖〕直衣の入紐（イレヒモ）をさし通して結ぶこと（後世はトンボウ掛ケと稱して、紐の端を蜻蛉の頭の形に、固く組みたるを輪紐にかくるなれど。）かくする事は慇懃なる行爲。紐解くとて、之を結ばざるは打解けたる振舞とせしなり。關白殿、吾が子ながらさすがに后宮の御前なれば、御紐も解き給はず、愼しみ給ふ事をかける也。春註に御手ずさみなるべしとあるは誤れり。◎めでたき御有樣どもを 〔湖〕姉宮妹の君の御有樣を也。◎れいのたばふれごと 〔湖〕關白殿、質性洒落におはしませば、常の物語にも諧謔がちにおはします也。◎今少し 〔湖〕俗語、モチツトといふ程の意。おとなびは、后宮のやゝ老成に、おもしくしくおはしますを云ふ。◎猶たぐひはいかでか 〔湖〕矢張后宮の御容姿には、類ふべきものいかでかあらむと也。

かたびさし。諸本から。とある非なり

まゐらする 春本ゐの字を落せり

御手水は。春本にの字なし抄によつて補ふ

御てうづまゐる。かの御かたは、宣耀殿貞觀殿をとほりて、わらは二人（フタリ）、下仕四人（シモヅカヘヨタリ）してもてまゐるめり。かたびさしのこなたの廊にぞ、女房六人ばかり候ふ。せばしとて、かたへは御送して皆かへりにけり。櫻のかざみ、萌葱（モエギ）こうばいなどいみじくかざみ長くしりひきて、取り次ぎ（童下仕などの）まゐらするいとなまめかし 織物の唐衣どもこぼれ出でて、すけまさのうまのかみのむすめ少將のきみ、北野の三位のむすめ宰相の君などぞ近くはある。あなをかしと見るほどに、この御かた（后宮の御方也）の御手水は番のうねめ、青すそごの裳、からぎぬ、裙帶（クンタイ）ひれなどして、おもてなどいとしろくて、下づかへなどとりつぎてまゐるほど、これはたおほやけしう、からめいてをかし。おものの（朝餉膳也）

の抄本による

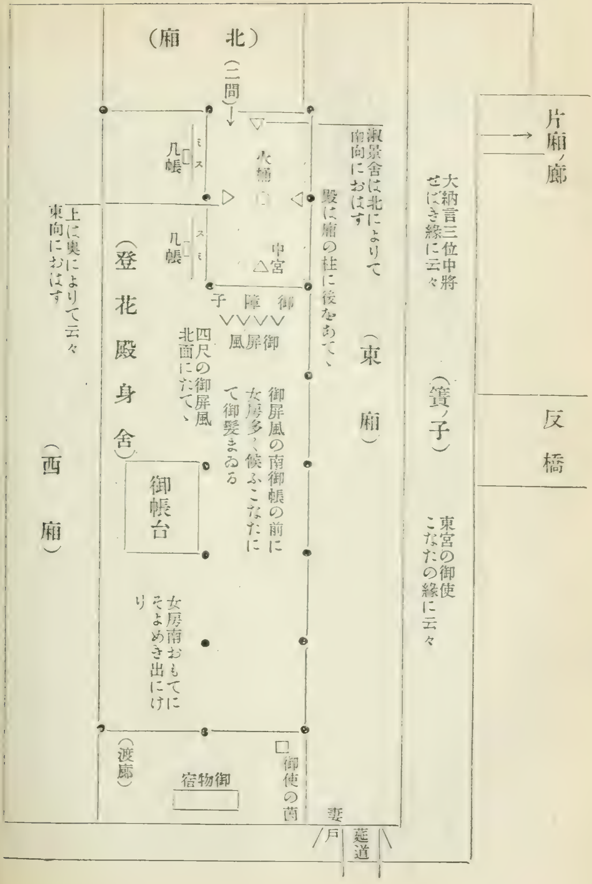
御衣奉りて、扇をつとさしかくし給へり。いといみじく、げにめでたくうつくしと見え給ふ。殿(關白殿也)はうすいろの直衣、もえぎの織物の御さしぬき、紅の御衣ども、御紐さして、ひさしの柱にうしろをあてゝ、こなたざまにむきておはします。めでたき御ありさまどもをうちゑみつゝ例のたはぶれごとをせさせ給ふ。淑景舍の繪にかきたるやうに、うつくしげにてゐさせ給へるに、宮(后宮也)いとやすらかに、今少しおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣に匂ひあはせ給ひて、猶たぐひはいかでかと見えさせ給ふ。

◎うしろめたし云々　(補)垣間見は、後の御咎めもいかゞ。氣がゝりなりと、聞え言(ゴト)する人もありて、なかしとなり、◎しろき御衣ども　(補)白き内衣に、紅の張衣二重、此の上に織物の袿なりけむ。◎女房の裳　(春)后宮への禮儀に、高内侍の(母ながら)かりそめに裳をかけ給へり。(補)女房の裳とは、大海の摺裳(スリモ)ともいひて、白き絹に藍色もて、青海波などのかたを摺りたるもの。通例の裳といふ程の意。◎淑景舍は北に少しよりて南向に　(補)二間のうち、北の方によりて、南向に后宮と相對ひておはする也。此のあたり座席のやう、指圖に記したり。參照すべし。◎紅梅どもこく薄くて云々　(補)紅梅色の濃き薄きを、數枚(下を濃く上を次第に薄紅梅にしたる)重ねたる內衣の上に、赤き綾の單、赤味の勝ちたる蘇枋色の織物の重袿に、萠葱の固紋の派手なる表衣着て、檜扇にて、御顏を隱すやうにして坐し玉へりと也。◎薄色の直衣云々　(補)薄紫なる事、春註の如し。織物とは紋樣を織り出したるをいふ。これは浮線綾(フセンレウ)ならむ。又紅の御衣は內

人もあり　春本には人々もいとなかしとあり　抄本によりて訂す。東向　春本東面とあり　抄本による　上にの二字　春本なし例

◎紅梅には濃き衣こそをかしけれ　（補）御衣の色の配合に就いて、嗜好を語り給ふ也。紅梅の上着には、濃き紫の下重こそ配色よろしけれと也。凡此の時代に、唯色の濃き薄きといふは、紫と紅との二色に限ることにて、其の物柄と、場合とによりて、紅か紫かを辨へ知るべきなり。此の條春註は取りがたし。◎紅梅はきでもありぬべし云々　（春）紅梅は、十一月より二月まで着用の衣也。もはや珍らしからねば、着ずしてもあらむと也。（補）萠葱色も好ましからねば、ふと紅梅を着たり。然れど紅色には似付かしからぬ配色なりと也。斯く宣給ひしかど、御容姿うるはしければ、御着衣の色合などは露も障らず。なか／＼に紅梅の御地色の玉顔に映（テ）りあひて、めでたくのみ見えさせ給へりとなり。◎ことよき人も　（補）容儀風采の事を、古語にことがらといへり。ことよきとは、ことがら即ち容姿のよきをいふ。餘所の美容ならむ人といふとも此の宮の樣にはおはせじとなり。此のことよき人は、淑景舍の君を指す。上にいと美しき君ぞかしと、后宮の仰せられしにより、さりとも后宮の御樣には、いかでかあらむ。早く比べ見奉りてむと思ふ由也。

さてゐさりいでさせ給ひぬれば、やがて御屛風にそひつきてのぞくを、「あしかめり（女房達の清少を制する也）。うしろめたきわざ」ときこえごつ人もあり。いとをかし。御障子のひろうあきたれば、いとよく見ゆ。うへ（高内侍也）は白き御ぞども紅（クレナヰ）のはりたる二つばかり、女房の裳なめりひきかけて、奥によりて東向きにおはすれば、たゞ御ぞなどぞ見ゆる。淑景舍は北にすこしよりて、南むきにおはす。紅梅どももあまた、こくうすくて上にこきあやの御ぞ、すこしあかきすはうのおり物のうちき、もえぎのかたもんのわかやかなる


片廂ノ廊
反橋
大納言三位中将せばき縁に云々
（簀ノ子）
東宮の御使こなたの縁に云々
淑景舎は北によりて南向におはす
殿は廂の柱に後をあてゝ
（東廂）
（北廂）
（二間）
火桶
中宮
御障子
御屏風
几帳
ミス
几帳
スミ
御屏風の南御帳の前に女房多く候ふこなたにて御髪まゐる
四尺の御屏風北面にたてゝ
（登花殿身舎）
御帳台
女房南おもてにそよめき出にけり
上には奥によりて東向におはす云々
（西廂）
（渡廊）
御物宿
御使の茵
妻戸
莚道

元は十九日とありしを、落したるか。◎しげう〔補〕繁く〳〵度々なり。◎二月十日云々〔補〕此の日御姉中宮へ御對面のためわたり給ふ由、御案内ありし也。◎登花殿〔春〕后宮の淑景舍に、御對面の御しつらひの御殿なり。登花殿は弘徽殿の北にあり。◎東の二間〔補〕東面の二間といふ所を、御對面の室として、裝飾敷設したりと也。二間の事前に委し。◎殿うへ一つ御車にて〔春〕殿は關白道隆公也。うへは關白殿の北の方高内侍也。貴子と號す。儀同三司母といふ是也。后宮淑景舍などの御親也。◎御さうじの南に〔補〕春註職の御曹司の事としたるは誤なり。登花殿の二間の南の方の障子を隔てゝ、又南の方に屛風を北を面として、東西に曳き立てたる也。以下敷設の樣、圖して示したり。參照すべし。◎御帳〔補〕身舍（モヤ）の御帳臺のこと。◎まだいかでか〔春〕いまだ見奉り侍らず。いかでか見侍らんとの心也　◎積善寺供養〔春〕榮花物語四見はてぬ夢に云。かくて攝政殿の法興院のうちに別に御堂たてさせ給て、積善寺と名付させ給て、其御堂供養いみじくぞいそがせ給ふ云々。正曆三年の事也。中關白の父兼家公のために建立也。〔補〕積善寺供養之事、日本紀略正曆五年二月廿日の條に見ゆ。◎いつしか〔補〕早速にも見たしと也。◎紅梅の固紋浮紋の御衣〔補〕春註に、紅梅は表紅、裏紫二月の衣なりとあるは、重ねの色目と解せるが如し。愚按、織物の地合の色と覺ゆ。謂はゆる紅梅織なるべし。固紋は地色も紋も同じくして、糸をしづめて地紋ともに固く織りたるもの。浮紋とは紋樣の所は、糸を浮かせて織りたるをいふ。此の條は浮紋地の上著、固紋織を重ねたる袿なるべし。◎紅の打ちたる〔補〕こゝにて句を切りて、御衣三へが上に引き重ねて、と讀むべし。紅の打ちたるは、打衣とて、袿に重ねて著する例なり。下の御衣といふは、内衣とて後世の小袖にあたる。是は白無垢なるべし。内衣三枚の上に、紅の打衣を紅梅色の固紋と浮紋との袿にかされ給へるをいふ也。

御うしろななむ抄本による

みそかに春本なし抄本一本による

かくやは。春本は文字なし抄本による

とはせ給へば、「まだ（青少の詞也）いかでか、積善寺供養の日、御うしろをなんわづかに」ときこゆれば、「其の（后宮の御詞也）はしらと屏風とのもとによりて、我がうしろよりみそかに見よ。いとうつくしき君ぞ」とのたまはすれば、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。紅梅（后宮の御裝束也）のかたもん浮紋の御ぞどもに、紅のうちたる、御衣三重がうへに、只ひきかさねて奉りたるに、「紅梅には（后宮のの給ふ也）濃ききぬこそをかしけれ、今は紅梅はきでもありぬべし。されど、もえぎなどのにくければ 紅にはあはぬなり」とのたまはすれど、只いとめでたく見えさせ給ふ。奉りたる御衣に、やがて御かたちのにほひあはせ給ふぞ、猶ことよき人も、かくやはおはしますらんとぞゆかしき。

此の段は、中宮、御妹の淑景舍の君に、御對面ありし時の事をかける也。兩親（フタオヤ）の君同胞（ハラカラ）の君たちの御團（マド）欒（ヰ）の中に、天皇東宮の御寵招の御使あるなど、御榮花の盛を記せり。(一)淑景舍　[春]中關白道隆公の御むすめ、三條院の東宮にておはせしころまゐり給て、淑景舍におはする事也。榮花物語見はてぬ夢の巻に、「かくて攝政殿をば帝おとなびさせ給ぬれば、關白殿と聞えさす。中姫君十四五ばかりにならせ給ぬ。東宮にまゐらせ奉給ふありさま花々とめでたし。さてまゐらせ給ひぬれば、宣耀殿はまかで給ひぬ。淑景舍にぞすませ給　何事もかゞやくやうなれば、いはむかたなくめでたし云々。(二)いかゞは　[補]濱臣云、いかゞめでたからざらん。めでたからぬことなしとの意也。上に疑て次句に云定むる文法也。かゝる例多し。尤もいかゞはの下、句をきるべし。◎正月十日に參り給ひ　[補]日本紀略によれば、長徳元年正月十九日なり。

枕草紙集註　下巻

關根正直著

北面春本には北西とあれと非也活本に従つて改む

九七（登華殿の御まどゐ）

淑景舎春宮にまゐり給ふほどの事など、いかゞは。めでたからぬことなし。正月十日にまゐり給ひて、宮の御かたに御文などはしげうかよへど、御對面などはなきを、二月十日宮の御方に、わたり給ふべき御せうそこあれば、つねよりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ、女房なども皆用意したり。夜なかばかりにわたらせ給ひしかば、いくばくもなくて明けぬ。登花殿のひんがしの二間に御しつらひはしたり。つとめていととく御かうしまゐりわたして、曉に殿・うへ一つ御車にてまゐり給ひにけり。宮は御さうじの南に、四尺の屏風西東に北面にたてゝ、御たゝみのうへに、しとねうちおきて、御火桶ばかりまゐりたり。御屏風の南、御帳のまへに女房いと多くさぶらふ。まだこなたにて御ぐしなどまゐるほど、「しげいしやは見奉りしや」と

追記

上文、郭公の聲尋ねに行く段（三〇四頁）に、「北の陣より五月雨は咎めなきものぞとて、（車を）入れさせて四人ばかり乘りて行く。」といふ條(クダリ)に、春曙抄、延喜式の文を揭げて云々せるは、全然的中せざる解なれば引かず。職の御曹司は內裏の構外なれば、朔平門より出づるやうに說けるを誤として、聊か愚考を（三〇六頁）記しおきつるが、今思へば快からず。幸ひこゝに餘白出で來たれば、訂正し置くべし。

そも〳〵北の陣とは、朔平門に限りていふ名ぞと、誰れも思ふことなれど然らず。內裏以外の御門をも、北の陣とはいへる事あり。其の證は紫式部日記中、後一條天皇の御產養(オンウブヤシナヒ)五日の條に、「北の陣に車あまたありといふは上人(ウヘビト)ども也けり。」とあるは左大臣道長公の土御門殿の門なり。當時中宮おはしませば、衞士の警固する北の御門を、北の陣と稱したるにて、是れ朔平門をいふに限らぬ事を知るべし。職の御曹司も亦、皇后のおはしますなれば、諸門には衞士の陣を張り居けむ。されば其の北御門を北の陣といひ、五月雨の間はこの陣屋の前を、乘車ながら出で入らむに、咎めなきものぞとは書けるならむかし。

（補）此の一節なも春本は別段として、而も六の卷の初めにおきたるはいかゞなり。倚前文のつゞきなるべく、時柄の物語にあらで、信經の手の拙き事をいふ笑話なり。◎つくも所　（春）作物所、細流云、金銀細工の所なるべし。拾芥云、作物所在㆓進物所西㆒有㆓別當預熟食㆒。時がら此別當に補せられし比の事也。勘物前註（補）この別當は信經なり。諸抄の時柄の事としたるは、勘物に誤られたるならむ。そも〳〵この勘物は、加藤氏の抄に「補任などにも見えずに、此勘物に記されし事、此道の大幸なるものか。と賞讃したる通り、人物の履歴を知るに、いと重寶にはあれど、此の條に限りては、いたく誤れるやうなり。さおもふ由は、此の勘物に、時柄。康保五年正月廿八日美濃守。長保二年五月三日藏人兵部丞。被㆑補㆓作物所別當㆒と見えたる、康保は村上天皇の御代。長保は一條天皇の御世にて、此の間三十二年隔たれり。且又この草子の本文には、美濃守にて亡せにける藤原時柄云々とある人の、いかで三十年後の、長保二年に又藏人兵部丞となり、作物所の別當に補することあるべき。本文は美濃守にて既に亡せたる時柄の、前に藏人たりし時、狗たきと問答したる事をかけるならずや。されば此の勘物、時柄康保五年に美濃守とある下、長保の二年藏人兵部丞、被㆑補㆓作物所別當㆒と記せるは、信經の補任を、混同して誤記したるを、誰れも心つかざりしにやあらむ。◎物のふやうやる　（春）細工人のかたへ、時柄繪やうなどして仰付る也　◎まんなのやう　（春）眞名の樣なり　（補）眞名とは楷書を云ふ。◎これがまゝにつかうまつらば　（春）如此見苦しき手跡のまゝに、細工せば異風に惡からんと也。時柄が手跡をわらはんといへる也。

枕草子集註　上卷終

つくも所以下の文春本別段とせり千蔭翁古本に據りて前文のつゞきとせり

蟲名女(ムシナメ)てふ名の見えたる事、好古小錄に記せり。されば例なきにあられど、下衆女の名に犬抱(イヌダキ)といふを當時珍らしとて、高名になりしなるべし。◎時がら 【春】勘物云、時柄、康保五年正月美濃守云々。【補】時柄の齋辛(トキカラ)と聞ゆるにより、嘲り笑ふならむ。齋(トキ)は僧家の食事の稱(ナ)なり。始め時柄より、ゑぬたきは犬の樣にも見えぬといひたる返報に、齋辛も、辛(カラ)げに見ゆる名なりと、秀句にしたるが、をかしきにて、己が名の奇(アヤ)しきには氣付かで、人を咎めたるが、返報にいひ中てられたるを、よき對敵なりと、聞く人々の云ひ囃したりしなり。◎かたきにえりても 【春】わざと相手に選び出しても、いかでさやうに珍名の出合ふべきぞと也。◎それ又時がらが云々 【補】信經の清少に應答する詞なり。すべて、春本に時柄の詞と傍註したる所は、信經の詞と改めて心得べし。◎御返 【春】諸本御題とありしを、考異も古本によりて御返と訂したるいとよし。元信云、此御かへりは、信經がもて來たりし御文の御返事なり。信經は歌よめといはれて、閉口したる折なれば、此の御返事の出でたるを幸にして、其の場を遁けしなりと。◎かくしてなんある 【補】手跡拙く見苦しければ、常に隱して見せじとする由なり。まなは眞名にて楷書のこと。かんなは假名なり。

つくも所の別當する頃、誰れがもとにやりけるにかあらん、物の繪やうやるとて、「これがやうに仕るべし」とてかきたるまんなのやう、もじの世にしらずあやしきを見つけて、それがかたはらに「これ(清少の書し詞也)がまゝにつかうまつらば、ことやうにこそあるべけれ」とて、殿上にやりたれば、人々とりて見て、いみじう笑ひけるに、おほきにはらだちてこそうらみしか。

御返春本「御題」とあれど千蔭翁古本によりて御返と改めたるに従ふ

出だしがらなん、ふみも歌もかしこき」といへば、「げに（清少の詞）さもあることなり。さらば題出ださん。歌よみ給へ」といふに、「いと（信經が詞）よき事、一つはなにせん。同じうはあまたをつかうまつらん」などいふほどに、御返（オンカヘリ）出でぬれば、「あなおそろし。まかりいでぬ」とてたちぬ。手もいみじう、まなもかんなもあしうかくを、人のわらひなどすれば、かくしてなんあるといふもをかし。

〔補〕はやうとある以下を、春本抄本皆別段としたれど、本居豐穎翁、嘗て大八洲學會雜誌に『此段は前の信經の物語につゞきて一條なり。はやうといふより、云ひ傳ふるはまで、すべて清少の信經に對していへる詞にて、きこえたりとは、信經に向ひていへりの意なり。依て「それまた時柄がいはせたる也云々は、信經の詞にて、時がらと名をさしたるも、信經の詞なれば也云々』との考説を出されたり。此の説いはれたり。余も亦既に斯く心付き居たる事なれど、本居翁いち早く發表せられたれば、余は六日の菖蒲をひきにけり。すべて舊本どもは勘物にあやまられたる也。其の由は此の段の末に辯するを見よ。◎はやう 〔春〕昔といふに同じ。〔補〕是れより清女の、昔ありし秀句の物語をし出づる也。◎大きさいの宮 〔春〕村上の皇后、御名安子、九條右大臣師輔公の女。◎ゐぬたき 〔補〕犬抱ならむか。和名抄に、犬。爾雅集註云、狗音句、惡奴（エヌ）。とあり。抱（ダキ）はイを略きていへること、宇津保物語嵯峨院の卷に、「いづれの宮をか先づ、だきたまふと挑みかはして云々など、當時の詞に例證少からず。又上古より人名に、馬養、牛養、蟲麿、猿取（類聚國史六六に）など、動物の名を取りて付けたる風あり。中んづく奇しきは仁明帝嘉祥二年の劵書に、辛國（カラクニ）ノ

かたはらいたし春本いたくとあれと抄本によりて「し」に改めつ

あらむと|と文字抄によりて補ふ

今|日まで春本日の字を落せり千蔭校本による

は御まへにかしこうおほせらるゝにはあらず。信經があしがたの事を申さゞらましかば、えのたまはざらまし」とて、かへすぐ\いひしこそをかしかりしか。あまりなる御身ぼめかなとかたはらいたし。

㊂うちはへ 〔磐〕打延へにて引きつゞきの意。㊂のぶつね 〔春〕藤原信經は、中納言兼輔の曾孫雅正の孫、陸奥守爲長の子也。勘物云、信經。長德元年正月十一日藏人。三年正月式部丞云々。㊂たがれうぞ 〔春〕あの舄は、誰れが居ゑん爲ぞとなり。〔磐〕わざと信經にあたりて、告めいへる也。㊂あしがた 〔磐〕濡れたる足跡の。茵につきて汚さんを憚りてと也。㊂せんぞくれう 〔春〕氈舄料にや。順和名云、舄。氈舄也。今案毛席也、俗猿の皮にて作ると云々。足のよごれし事をいふに付て、洗足料にこそならめと秀句に云。〔磐〕氈舄と洗足、同音なれば也。㊂御身ぼめ 〔磐〕御自慢。

「（清少詞）はやうおほきさいの宮に、ゐぬたきといひて名だかき下仕なんありける。美濃守にてうせにける藤原の時から、藏人なりける時、下仕どもある所に立ちよりて「（時柄が詞）これや此の高名のゐぬたき。などさも見えぬ」といひける返事に「（ゐぬたきが詞）それはときからも、さも見ゆる名なり」といひたりけるなん、かたきにえりても、いかでかさる事はあらんと、殿上人上達部までも興ある事にの給ひける。又さりけるなめりと、今日までかくいひ傳ふるは」ときこえたり「（信經詞）それ又ときからがいはせたるなり。すべて題

に入れつべけど、ひとことなおとしそ（言落しそ也）と侍ればいかゞはせん。

此の段は、隆家中納言の、扇の骨の事をいひしにつきて、清少の秀句いひたる事をかけり。◎おぼろげの紙は貼るまじければ　補珍重なる扇の骨なれば、おほかた通常の紙をば貼るまじと思へばと也。◎言高く申し給へは　補高聲に、斯程の骨はなしと明言したれば、直に其の詞について、清少の戯れいひし也。◎さてば　補は文字春本等になし千蔭本によりて補へり。げにさては、扇のにはあらでと、なくて叶はぬ語勢なり。◎くらげ　補和名抄に海月、一名水母、久良介（クラゲ）、貌似レ月在二海中一故以名レ之とあり。◎隆家の言にしてん　補清少の秀句の面白きにより、隆家の我が言ひたる秀句として、披露したしと戯れたる由なり。◎ひとことなおとしそ　補春本には一毎と書き、旁註本は一言とせり。愚按、一言の方に従ふ。我がいひたる秀句を、人に望まれつる事など、自賛がましければ、かたはらいたきものの中に入れつべく、此處に書き出つべきにあらねど、一言も書き落す勿れと、人のいへば何如すべきぞと也。

九六（せんぞく料）

雨のうちはへふるころ、けふもふるに、御使にて式部のせうのぶつね（信経）まゐりたり。例のしとねさし出だしたるを、常よりも遠くおしやりてゐたれば、「あれは（清少の詞）誰が料ぞ」といへば、わらひて、「かゝる（信経が詞也）雨にのぼり侍らば、足形（アシガタ）つきていとふびんにきたなげになり侍りなん」といへば、「など（清少の秀句をいへる詞也）、せんぞくれうにこそはならめ」といふを、「これ（信経が詞）

經に委し。◎思ひくんじにたり、(補)くんじは屈しなり。后宮より第一に思はれずは、滿足せずやと問ひ詰められて、淸少の、否極樂往生の域に到るべくは、下品下生にても滿足すべしと、朗詠の句によりて御答へ申したれば、后宮笑ひ給ひての詞也。屈(クン)すは今俗に困却すとか、閉口すなどいふに同し。此の段、常々淸少が一乘の法の如しなど、人々の(方便品の十方佛土中唯有一乘法の語によりて)評する由をいひて、さて后宮への御答にも、朗詠の句の雖二下品一應レ足の詞を以てしたる、脫曲にして趣味もあり。げに季吟翁のいへる如く、名譽の答といふべし。◎人に從ひてこそ　(春)並々の人にこそ、第一に思はれんとも申さめ。其人によりて、下品にても滿足と也。◎第一の人に云々、(春)猶心は高くこそ持つべけれと也。(補)后宮の御意氣亦見つべし。

九五　(くらげの骨)

中納言殿まゐらせ給ひて、御扇奉らせ給ふに、「隆家こそいみじきほねをえて侍れ。それを貼らせて參らせんとするを、おぼろけの紙ははるまじければ、もとめ侍るなり」と申し給ふ。(后宮の御詞也)「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、(隆家の詞)すべていみじう侍り。更にまだ見ぬほねのさまなりとなん人々申す。誠にかばかりのは見侍らざりつ」と言(コト)高く申し給へば、(清少の詞也)さては扇のにはあらでくらげのなり」ときこゆれば、(隆家の詞)これは隆家が言にしてん」と笑ひ給ふ。かやうの事こそ、かたはらいたきもののうち

なり」と人々わらふ事のすぢなめり。筆かみ給はりたれば、「九品蓮臺(クホンレンダイ)の中には下品(ゲボン)といふとも」とかきてまゐらせたれば、「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。いひそめつる事は、さてこそあらめ」とのたまはすれば、「人にしたがひてこそ」と申すに、それがわろきぞかし。第一の人に、又一におもはれんとこそ思はめ」とおほせらるゝもいとをかし。

◎御かた〳〵　〔春〕后宮の御妹のかた〳〵、伊周公等の君達なるべし。◎思ふべしや　〔春〕后宮より投げ給へりし物に、書き給へる詞也。〔補〕清少を愛し思はむやとの御戯なり。春註清少我を思はんやとあるは、違へり。◎第一ならずはいかゞ　〔補〕清少を寵愛の第一者とせずは、不足に思ふべしやと也。◎二三にては死ぬともあらじ　〔補〕是れ清少の常にいふ所なるべく、清女の氣象の一端も見えたり。凡て人に思はるゝとならば、第一にてありたし。第二位第三位に置かれむは、死すとも甘んずべきに非ずと也。◎一乘の法なりと　〔春〕是れ方便品の文の心也。一乘の法とは法華經の事なり。方便品ニ云ク十方佛土ノ中、唯有ニ一乘ノ法ハ無レ二亦無レ三、除ニ佛ノ方便說ハ但說ニ無上道ヲ」　◎人々笑ふことの筋なめり　〔春〕彼の清女の、第一に思はれん、二三にてはあらじといふにつけて、人々なぞらへ言ひし事の筋を、今后宮の第一ならずは如何と仰せらるゝ也。◎九品蓮臺の中には　〔春〕期詠の詞なり、后宮の御惠にかゝらば、たとひ下品にても滿足と也。極樂寺建立願文ニ慶保胤「十方佛土之中ニハ以ニ西方ヲ爲ス望ト、九品蓮臺之間雖ニ下品ニ應レ足ル、極樂に生るゝに、其の人によりて上品上生に生れ、或は上品中生、上品下生、或は中品上生など、すべて九品の淨土ある事、觀無量壽

◎けぎよう 〔春〕氣淸う也。聊かも歌よむべきけしきもなく、潔白にとりあはざる也。〔補〕けぎようのけ゚は接頭語なり。今の俗サッパリといふにあたる。◎つゝむ事 〔春〕愼む心也 〔補〕愼み憚る意の詞なり。父元輔のために憚る事なくば、百千首の歌も、今より續々涌出せんと也。氣䑛萬丈といふべし。

加藤盤齋翁の抄本には、此の次に左の一章あり。

職におはします頃、八月十四日の月あかき夜、右近ノ內侍に琵琶ひかせて、はし近くおはします。是れかれ物いひ笑ひなどするに、庇の柱によりかゝりて、物もいはでさぶらへば、などかう音もせぬ。物いへさう〴〵しきにと、おほせらるれば、たゞ秋の月の心だ見侍るなりと申せば、さもいひつべしとおほせらる。

とありて、次の文につゞけたり。春曙の註にも、イ本にとて、右の文の事だいひ、然れども語重なりてよろしからねば、今不レ用也とかけり。千蔭云、古寫本別に一段とす。語重なるに非ずと。

九四 （九品蓮臺の中には）

御かた〴〵君達うへ人など、御まへに人多くさぶらへば、ひさしの柱によりかゝり（清少）て、女房と物語してゐたるに、物をなげ給はせたる、あけて見れば「思ふべしやいなや。第一ならずはいかゞ」と問はせ給へり。御前にて物語などするついでにも、（清少日比いひし詞也）すべて人には一におもはれずは、更に何にかせん。只いみじうにくまれあしうせられてあらん。二三（ニサン）にては死ぬともあらじ。一にてをあらん」などいへば、「一乗（ジヨウ）の法（ノリ）

たふ事を戯れてのたまふ也。◎かけつらむ　〔春〕いひつらむと言ふに同じ詞なり。大和物語に「見きとないひそ」とある歌を、源氏物語には「見きとなかけそ」と書けり。同じ詞なれば也。〔補〕此註よろし、いかで郭公のことを、かうまで(下蔵の方戀しとて)いひおとしつらむと也。◎え侍ふまじき　〔春〕其座には侍らじと思ふ也。◎歌よむといはれ侍りし末々　〔春〕淸少は深養父が曾孫。元輔か女也。〔補〕深養父の歌は古今集にも入りたり。元輔はた後撰集の選者にさゝれて、梨壺の五歌仙といはれし中の一人なり。◎其の折の歌は〔補〕何某の會、何の所にてと、晴の席にてよめる歌は、これにこそと也。◎さはいへど　〔補〕俗語、何というてもに同じ。さすがに歌仙元輔か女なればと也。◎さいそに　〔補〕よからぬ歌を、人よりも最初に出だして、愁ひに笑はれんはと也。◎まめやかに　〔補〕今俗、眞面目《マジメ》に(シンケンニ)といふ詞に同じ。かりそめならずの意。◎庚申　〔春〕庚申の夜寢れば、三尸《サンシ》とて惡しき蟲、人身中に入て、痨瘵の病をなす也。其故に、今宵寢ざる事、古今醫統にもありと云々。〔補〕當時支那の俗をうけて、年の始の庚申の夜は、如何なる事ありとも大かた寢ぬる者なく、終夜を守れり。年中幾度にもなれば、禁厭の咒文を誦へて寢に就くなり。其の咒文春曙抄にも載せたり。すなはち拾芥云、庚申ノ夜ノ誦、彭侯子彭常子命兒子悉入幽冥之中去離我身。袋雙紙云、庚申せで寢る誦文「しや虫はいねや去《サリ》ねや我が床《トコ》をねたれどねぬぞねゝとねたるぞ」◎內のおほい殿　〔補〕內大臣。伊周のこと。正曆五年八月廿八日任內大臣(公卿補任)◎心まうけ　〔春〕伊周公庚申の御用意なり。〔補〕夜中おきゐる徒然を慰めんとて、碁・雙六の挑みをなすもあり。果物など用意する事なども、當時の物語に見えたり。◎けしきだち　〔春〕女房たち歌よまんと、けしき立つ也。◎ゆるがし出だす　〔補〕聲ふるはせて、歌誦し出すをいふ。◎こと事　〔補〕別の事　◎さること云々　〔補〕然るべき御許をうけ給はりてと也。

ある比、庚申せさせ給うて、内のおほい殿いみじう心まうけせさせ給へり。夜うちふくるほどに題出だして、女房に歌よませ給へば、皆けしきだちゆるがし出だすに、宮の御前に近くさぶらひて、物けいしなど、こと事をのみいふを、おとゞ御らんじて「などか歌はよまで離れゐたる。題とれ」との給ふを、さる事承りて、うたよむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず。」ことやうなる事、まことにさる事やは侍る。などかはゆるさせ給ふ。いとあるまじき事なり。よしこと時はしらず、こよひはよめ」などせめさせ給へど、けぎようきゝもいれでさぶらふに、こと人どもよみ出だして、よしあしなどさだめらるゝほどに、いさゝかなる御文をかきてたまはせたり。あけて見れば、

　もとすけが後といはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしき事ぞたぐひなきや。いみじく笑へば、何事ぞなにごとぞとおとゞもの給ふ。

　その人の後といはれぬ身なりせばこよひのうたはまづぞよまゝし

つゝむ事さぶらはずば、千歌なりとも是れよりぞ出でまうでこましとけいしつ。

◎うけばりたりや　〔箋〕孟津抄に、諸。はゞかる事もなきをいふ也云々。清少のあまり憚りもなく、蕨なし

もじのかずも春本もつ字なし抄本一本による人より抄本にかくあり春本人にとあり

よ」とわらはせ給うて、紙のちりたるに、

（后宮）したわらびこそこひしかりけれ

とかゝせ給ひて、もと（上句）いへと仰せらるゝもをかし。

（清少）ほとゝぎすたづねて聞きし聲よりも

とかきてまゐらせたれば「いみじ（后宮の御詞也）ううけばりたりや。かうまでだに、いかで郭公のことをかけつらん」とわらはせたまふも恥づかしながら、「何か（清少の詞）。この歌すべてよみ侍らじとなん思ひ侍るものを。ものゝをりなど人のよみ侍るにも、よめなどおほせらるれば、えさぶらふまじきこゝちなんし侍る。いかでかは、もじのかずもしらず、春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅のをりは菊などをよむやう侍らん。されど歌よむといはれ侍りしすゑずゑは、少し人よりまさりて、其のをりの歌はこれこそありけれ。さはいへどそれが子なればなどいはれたらんこそ、かひあるこゝちし侍らめ。露とりわきたるかたもなくて、さすがに歌がましく、我れはとおもへるさまに、さいそによみ出で侍らんなん。なき人（元輔）のためいとほしく侍る」などまめやかに啓すれば、わらは（后宮）せ給ひて「さらばたゞ心にまかす。われはよめともいはじ」とのたまはすれば「い（清少）と心やすく成り侍りぬ。今は歌の事思ひかけ侍らじ」などいひて

後に見校べたる前田侯爵家の異本も猶古本の通りなれば下の註いよ／＼無用の長文となれるが如し

「たゞおろしにおろす。職の御曹司は、蔀をぞ御格子にまゐりわたしまどひしほどに云々。とあり。難解の句なりしに、千蔭校本のみならず、考異にも右の一くだりを刪りたり。さてはむづかしきことなく聞ゆれど、右の三本同じやうにある文句の、さすがに削り棄て難く思はれ、無用の辯なれど、例の癖にて一わたり解き試みん。昔いかめしき造りの殿舎は、格子の外に又蔀を覆ひたるなり。蔀は板戸を格子に添へて廂に釣り下げたる物にて、今の世の雨戸の用をなすものなり。然るに一般の住居にては、之を簡便にして格子の裏面に直(ヒタ)と板を張り付けたるを用ふる慣ひとなりて、之を蔀とも格子とも、いひたきまゝに稱へたるより、遂に打混じて、其のけぢめ別き難くなりしなり。偖職の御曹司は、常の御殿などとは異なりて、古風に格子と蔀とを二重に參りわたしたるからに「職の御曹司は」と、ことわりたるにて是れが爲に一段と混雜して、歌の返しも忘れにたるならむ。

㊁神の事申しに (春)雷の御見舞に參りし也。◎人はたさして得たらむ人こそ (補)他人はまた、清少を指しておこしたる文なれば、其を得たる主こそ、返事はすべけれとて、捨ておきたりと也。◎すぐせ (補)宿世也。當時の俗語、因緣の意にて、惣じてけふは歌に緣なき日なるかなと、屈しはてゝ、此上は賀茂へ行きたりといふこと人に知られじと思ふと也。◎ものしげ (補)怨めしげの心也。◎すさまじ (補)此の詞の解、前にもあり。元は心に進まざる意より出でて不用らしき事にも、不興なる事にもいへり。

二日(フツカ)ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相のきみ「いかにぞ。手づからをりたるといひし下わらびは」との給ふをきかせ給うて、(后宮の御詞)「おもひ出づることのさま

おそろしきに云々春本には「おろしにおろすしきのみさうじは部なぞ御格子に」とあれど千蔭古本によりて改刪せしによる

のたまはせしかどさて古本にかくあるに従ふ

どいふほどに、かきくらし雨ふりて、神もおどろ〱しう鳴りたれば、物もおぼえず、たゞおそろしきに御格子まゐりわたしまどひしほどに、歌のかへりことも忘れぬ。いと久しく鳴りて少しやむほどにくらくなりぬ。たゞ今なほこの御返事奉らんとて、とりかゝるほどに、人々上達部など、神の事申しにまゐり給ひつれば、西面(ニシオモテ)に出でて、ものなどきこゆるほどにまぎれぬ。人はた、さしてえたらん人こそしらめとてやみぬ」大かた此の事にすぐせなき日なめりと、くんじて、今はいかでさなんいきたりしとだに人にきかせじ。など笑ふを、(后宮の御心)いまもなどそれいきたりし人どものいはざらん。されどもさせじとおもふにこそあらめと、物しげにおぼしめしたるもいとをかし。「(清少の詞)されどいまはすさまじくなりにて侍るなり」と申す。「(后宮御詞)すさまじかるべき事かは」などのたまはせしかどさてやみにき。

さて参りたれば　(春)后宮の御前に清少のかへり参りし也。◎うへ人などの聞かんにと也。◎ぎしき事さめつらむ　(補)岩崎氏云、儀式の字を活かしいへるにて、意は儀式ばりて、折角の興もさめつらむと也云々。千蔭本に従へば、あまり儀式ばり評定せしがわろしとの意と聞ゆ。◎宰相の君　(春)后宮の女房なり。奥に北野の三位の女とあり。輔正卿の女にや。是れも賀茂へ行きたりし人なれば也。◎御格子まゐりわたし　(補)間毎(マゴト)の格子を端(ハシ)の間より下(オロ)しゆく也。さて此の所春曙本を始め、抄本旁註本もともに、

なかしきこと春本ことの字なし抄本活本によりて補へり

事さめ千蔭本事の字なくさだめつらむとあり

んとあり。春註には噫と嘆じたる詞也。などある共に非なり。あうは奥の字の音にて、是れより先へといはん程の詞なり。此の草子の中にも「あう寄り給へ」といふ詞あり、奥の方へ寄れとの心なり。◎いざ給へ 圏いざ來給へと也。◎えぼうしにては 春侍臣の參内は、衣冠か、儀式の折は束帶なるべし。圏此の註の如し。烏帽子着て參内し得るは、大臣以上の人にて、別に勅許を得たる者ならでは能はぬ制なり。◎いづら 圏いづくといふに同じ。偖よみたる歌に何處にあるぞとなり。

さてまゐりたれば、ありさまなど問はせ給ふ。うらみつる人々ゑじ心うがりながら、藤侍従の一條のおほぢ走りつるほど語るにぞ。みなわらひぬる。さて「いづら歌は」（后宮の問給ふ也）ととはせ給ふ。かうかうと啓すれば、「くちをしの事や。（后宮の御詞）うへ人などのきかんに、いかでかをかしきことなくてあらん。其のきゝつらん所にて、ふとこそよまゝしか。あまりぎしき事さめつらんぞあやしきや。こゝにてもよめ。いふかひなし」などのたまはすれば、げにと思ふにいとわびしきを、いひあはせなどするほどに、藤侍従の、ありつる卯の花につけて卯の花のうすやうに、

（侍従歌）ほとゝぎすなくねたづねに君ゆくときかばこゝろをそへもしてまし

かへしまつらんなど局へ硯とりにやれば、「たゞこれしてとくいへ」（后宮の御詞）とて、御硯のふたに紙などいれてたまはせたれば、「宰相のきみかき給へ」（清少の詞）といふを、「なほそこに」（宰相ことば也）な

清少の詞「とりにやり給へ」などいふに、まめやかにふれば（まことに雨いたくふる也）、笠なきをのこども、たゞひきに引きいれつ。一條（侍從の家）よりかさをもてきたるをさゝせて、うち見かへりうち見かへり、此のたびはゆる〳〵と物うげにて、卯の花ばかりを、とりておはするもをかし。

◎人もあはなん 㮺此卯花車を、人に見せたき心なり ◎ちかう來ぬれば 㮺職の御曹司近くへなり。◎さりともいとかうて 㮺今日の有樣を人に見知られずしてはやまじと也。◎一條殿 㮺拾芥云、一條院。一條南大宮ノ東二町爲二法住寺大臣爲光家一この爲光を恒德公と云、◎侍從殿 㮺勘物云公信。恒德公六男長德元年九月十九日ニ侍從。◎さぶらひにまひろげて云々 補さぶらひは一條家の侍所なり。まひろげてとは抄に明けしつらひ玉ふ也といひ、黑川翁も間を擴くするにて、室内をとり片つけ、清少を請じ入れんとする由にいはれしかど、いかがあらむ。下の詞には唯今參るとさへあるをや。直按するに、此の草子の奥に「まひろげ姿といふことあり。又宇津保物語藏開の上に、冠もうちそばめてさし入れ、差貫・直衣などを引き下げ、まひろげて出來たり」などある詞どもを考合するに、白衣（小袖）大口袴のまゝにて上衣（直衣狩衣の類）をも着ず、打ちとけたる姿をいへるならむ。下の詞に差貫たてまつりとあるに見ても知るべし。◎土御門 ◎宮城の外垣、東西の兩側に在り。東を上東、西を上西門と云ふ。此處は上東門を指す。築墻（ツイヂ）（土塀）の中を切通しにしたる出入口なり。委しくは拙著宮殿圖解に考證しおけり。◎うつゝの人の云々 㮺侍從の詞、物くるほしきと也。補うつゝは現の字、俗に正氣といはんが如し。◎こと御門のやうにあらで 補他の御門には屋根あるに、此の土御門に限り、屋根もなく作りしよと也。◎こなたざまは云々 㮺此處へ追來しは、追つかんと思ふばかりにて、人目も思はず走り來るにと也。◎あういかん 補抄本あらいか

しばし〱　春本しばしばとあれ抄本によるに　春本いそかしくてとあれと活本いそかしてとある方よろし

に見ゆる、いとくちをし。ちかうきぬれば、さりともいとかうてやまんやは。此の車のさまをだに人に語らせてこそやめとて、一條殿（公信の家也）のもとにとゞめて、「侍從殿や（清少の使の詞）おはします。郭公のこゑきゝて今なんかへり侍る」といはせたるつかひ（清少の使が侍從どの・返事な云也）「たゞいままゐる。あがきみ〱となんのたまへる。さぶらひにまひろげて、差貫たてまつりつ」といふに、まつべきにもあらずとて、走らせて土御門（ツチミカド）ざまへやらするに、いつ（侍從の事也）のまにかさうぞきつらん。おびは道のまゝにゆひて、しばし〱とおひくるともに、さぶらひ（侍士）雜色三人ばかり、ものはかで走るめる。「とくやれ」と、いとゞいそがして、土御門にきつきぬるにぞ、あへぎ（侍從）まどひておはして、まづ此の車のさまをいみじく笑ひ給ふ。「うつゝ（侍從の詞）の人の乘りたるとなんさらに見えぬ。猶おりて見よ」などわらひ給へば、ともなりつる（侍從のの供の人々）人どもも興じわらふ。「歌（侍從）はいかにか。それきかん」とのたまへば、「いまおまへ（清少のこたへ也）に御覽せさせてこそは」などいふほどに、雨まことにふりぬ。「な（侍從の詞）どかこと御門（ミカド）のやうにあらで、此の土御門しも、うへもなく造りそめけんと、けふこそいとにくけれ」などいひて、「いかで歸（侍從の詞）らんずらん。こなたざまは、たゞおくれじと思ひつるに、人目もしらず走られつるを、あういかんこそいとすさまじけれ」とのたまへば、「いざたまへかし（清少の詞）、内へ」といふ。「それ（侍從の詞）もえぼうしにてはいかでか」。

せぬは、田舍に來る客のやうにあらずとの意ならむ「其人ならず」を、春註「都人とも見えぬ心也」といへれど「田舍客のやうならず」と、譯すべく思はる。偖斯く辭令巧みにいひて、此の下蕨は手づから摘みつるよなど、取りはやして進めつる也。下蕨は草の下萌にて、弱小き(ワカ)をいふか。◎いかで女官などのやうに 補女官は宮仕するものゝ内の下臈をいふ。(上臈を女房といふに對して)それらが樣に、臺盤に著き並びて、一列に食するやうにはいかでかあらむと、上臈ぶりて卑しき風を斥けたるなり。◎はひぶし 補仍て明順は更に、下蕨を懸盤より取り下げ、面々の前に配りわたして云ふやう、「げにも常々這臥(ハヒブシ)に慣れ給へる御許達(オモトタチ)なれば、懸盤近く來りて、並び着かんは苦しかるべしと、戯れ交りに云ひたる也。さて這臥とは、春註に身を自由にありならふ心也といへる如く、當時の女房たちは、衣服の幅廣く裳袴の長きに、身の運動心に任せず、何事も人を使ひてせさせ、身を自由にして、己れと働かぬより、這臥といふ渾號(アダナ)をいへる也。明順は皇后の御伯父にて、宮に緣ある女房達には、遠慮もなければ、戯れ交りに客をあへしろふ樣、目に見ゆるが如し。◎とりおろし 補懸盤より也。◎さばれみちにても 春さもあらばあれ。歸る道すがらもよむべしと也 ◎車のすだれ云々 補武藤氏考異には古本に車のすだれかたはらなどに指し餘りておそひ、棟などに長き枝を葺きたるやうにさしたれば」とある由、さらば殊によく聞こゆ。◎卯花重 春表白く裏青き夏の衣也 ◎こしにかけたる 補春本こゝにとある、わろし。抄本活本には、こしとあり。輿なり ◎あじろ 車箱を張りたる網代のこと。◎こゝまだし 春こゝにまだ指し足らず〳〵と也 補まだしは未だし也。

人もあはなんと思ふに、更にあやしき法師、あやしのいふがひなき者のみたまさか

頗る當時の有識。政治上重要の官に在りし人なりき。それが別墅（ナリコトロ）賀茂の奥にありしなるべし。◎事そぎ〔補〕わざとゐなか家の如く、簡素に造りなし、野趣なるが却つて風流にも見えつらむ。珍らしければ、清少等の訪問せし也。◎馬のかた〔補〕今の衝立障子に、墨畫の馬の象（カタ）をかきたる也。◎あじろ〔書〕檜の薄板を斜に組みたるして、造りたる板の屛風なり。杉板を用ひたるもあり。河海云、昔は山莊などの古めかしき調度には、定まれる事なり。漆骨片面を張りて、細組にてとち合せたるものなり。◎みくりの簾だれ〔補〕和名抄に三稜草（美久利）とあり今名ヤガラ。形狀は莎草に似て長く、莖三稜にして削れる如し。高さ五六尺水邊に生す。此の莖を抽きて、編みたる簾也。◎稻といふもの云々〔春〕清少への馳走に、去年の稻を取出し、こかせて見する也。源氏須磨の巻に、三月ばかり馬に稻を飼ひし事あり。古は秋の稻を其まゝ置きしと見ゆ。◎くるべき〔湖〕濱臣云、和名抄織械部に、反轉。久流閇枳（クルヘキ）と云々。狩谷氏は三才圖會所載、蟠車。今俗呼二万比ノ波一者といへり。其の圖を見るに、掛けたる糸を手繰れば、くる〳〵廻る故にクルメキと名づけたるか。さらばクルベキといふモノとありし、中の二字落ちだるならむ。但し千蔭本の、クルベクモノとあるに從へば、廻りくるめく物の意にて同じ物なれど、見しまゝをいへりと聞ゆ。◎ひかせて〔補〕糸を繰り引かせて見せたる也。◎唐繪にある樣なる〔補〕尋常の懸盤と異なりたるをいふ。風變りの膳なり。懸盤は食物をすうる臺なり。◎家あるじ〔補〕明順のこと、◎いとわろく鄙びたり云々〔補〕以下明順の詞なり。春註に、田舍ものめきたる心也。臆して食はざるを、いさむる詞なり。とあれどいかゞあらむ。直按、此處に參らする品は、いとわろく田舍びたる食物なり。（サレドといふ詞を補ひて心得べし）斯かる田家に來る人々は、わるうすると、猶も出だせなど、責めても食ふなり。然るに御前達の樣に、見入れも

下女の下の字抄本によ
る活本には
げす女とあ
り

くるべきも
の千蔭本
くるべくも
のと有り

こし春本に
こゝとあり
抄本活本に
よりて改む

わかき下女どものきたなげならぬ、其のわたりの家のむすめなどひきゐてきて、五六人してこかせ、また見もしらぬくるべきもの、ふたりしてひかせて、うたうたはせなどするを、めづらしくて笑ふに、郭公の歌よまんなどしつる忘れぬべし。からゑにあるやうなる懸盤などして物くはせたるを、見いるゝ人なければ、家あるじ「いとわろく鄙びたり。かゝる所にきぬる人は、ようせずはなほもなどせめいだしてこそまゐるべけれ。むげにかくては其の人ならず」などいひて、とりはやし「此の下わらびは手づからつみつる」などいへば、「いかで女官などのやうに、つきなみてはあらん」などいへば、とりおろして「れいのはひぶしにならはせ給へるおまへだちなれば」とて、とりおろしまかなひさわぐほどに、「雨ふりぬべし」といへば、いそぎて車にのるに、「さてこの歌はこゝにてこそよまめ」といへば、「さはれ路にても」などいひて、卯の花のいみじくさきたるを折りつゝ、車のすだれ、そばなどに、長き枝をふきさしたれば、たゞ卯の花がさねをこしにかけたるやうにぞ見えける。ともなるをのこどももいみじう笑ひつゝ、網代をさへつきうがちつゝ、こゝまだし／＼とさしあつむなり。

◎明順　闕春註にある如く、高階成忠三男、左中辨東宮學士たり。皇后定子の御方には母方の伯父なり。

言ひにくき名ぞとなり。◎車のことといひて　(補)皇后宮職の官人に、車の用意を命じたる事也。◎北の陣　(補)内裏の朔平門をいふ。さて職の御曹司は内裏の郭外なれば、此の門を出でて行くにはあらず。禁中の車を此の門より召出でて、職の局へさしよせたる也。◎さみだれは告なきものぞ　(補)禁門乗車の事にはあらす。清少等の局に、車さし寄せて乗る事を、五月雨の期節中は告なしと云ひたる也。◎むまば　(春)河海云、左近馬場は一條西洞院、右近馬場は一條大宮也。(補)此處は右近馬場なるべし。◎手つがひにてまゆみいるなり　(春)花鳥餘情曰、手結は左近の眞手結也。五月五日にあたれり。又云、てつがひにて馬弓の時、二人づゝ番ひて射る事歟。(補)五日左近衞。六日右近衞の競馬、騎射は内裏の馬場に於て、主上御覽じ玉ふ也。其の當日、大内の馬場に參らぬ前に、左右近衞の馬場にて、試みの練習をなす。三日四日に荒手番、五日六日眞手番ある也。◎右近の中少將皆つき給へり　(春)花鳥曰乙殿屋とて左右近の馬場にあり。五月の騎射の時中少將著座す云々　◎ゆかしからぬことぞ　(補)見たくもなきとなり、

かういふ所に明順の朝臣のいへあり。そこもやがて見んといひて、車よせておりぬ。ゐなかだち事そぎて、馬のかたかきたる障子(サウジ)、あじろびやうぶ、みくりのすだれなど、ことさらに昔の事をうつしいでたり。屋のさまもはかなだちて、はしちかくあさはかなれどをかしきに、げにぞかしがましと思ふばかりに、なきあひたるほとゝぎすの聲を、くちをしう御前にきこしめさず。さばかりしたひつる人々にもなどおもふ。「所(明順詞)につけてはかゝる事をなん見るべき」とて、稻といふもの多くとりいでて、

かういふ所にのの下春本には一字あり抄本一本によりて削る

くちをしうの五字抄本になし

中少將春本少字なし一本によりて補ふ

りて、「いま一つしておなじくは」などいへば、「いな」と仰せらるれば、きゝもいれず、なさけなきさまにて行くに、むまばといふ所にて、人おほくさわぐ「何事するぞ」と問へば、「てつがひにてまゆみいるなり。しばし御覽じておはしませ」とて車とゞめたり。右近の中少將みなつき給へりといへど、さる人も見えず。六位などのたちさまよへば、「ゆかしからぬことぞ。はやくすぎよ」とて、ゆきもてゆけば、道もまつりのころおもひ出でられてをかし。

◎五月の御さうじ　（春）年三とて、正五九月には精進などする也。河海云、長齋經云、若有二善男女等修二年三之齋戒一、忽脫二諸難等一、獲二殊勝福利一、又曰、天帝以二正月五月九月一巡二向南州一註二記衆生作業一云々。◎塗籠　（補）寢殿の中央の一部を、三方壁にて塗り廻し、一方に出入口を開きて、物納めても置き、又は寢所ともせしなり。それが前の二間なる所は、廂のうち二間（柱と柱との間を一間とす）を打通して、一室としたる所なり。委しくは宮殿圖解の中に詳記しおけり。○しつらひ　（補）室內を裝飾すること也。此處は平素信仰する佛像の畫幅を掛け、燈臺香爐等を据ゑ置きたるをいふにて、佛堂の內陣の樣にしつらひたれば、例の樣ならずとはいへる也。◎われも〳〵と出でたつ　（補）淸少の郭公尋れ聞かばやと主唱せるに、傍輩たちの、我れも〳〵と出て立たんと願ひし也。◎なにがしとかや云々　（補）抄に云、賀茂の奧に鵲川といふ所あるにや。古歌に、鵲の河風たちぬ七夕の紅葉のとばり波やかくらむ」とあり。直按ずるに、其の河に鵲橋といふもありしならむ。下の詞に、七夕のわたる橋にはあらで、にくき名のつきたるとあり。にくきは

〔磐〕禁中に奉仕する間の事、御局などより、身の程年のころも同じ人どち、物語などするにと也。㊂このもしう云々 〔磐〕我が好むまゝの裝ひしたるが、車の簾の下より押し出されたるた、道行く人々にも逢ひたるに、事さらびわざとがましく用意したりとも見えず、氣裝(ケバヤ)なるさまならず、さりとて見苦しくもあらぬに、さるべく、物の心知りたる人にも、えあはで過ぎたるはくちをしとなり。程よき姿を心ある人に見せたき由なり。◎わびては云々 〔春〕物好(モノズキ)なる下衆など[illegible]ても、見せまほしきと也。さるべき人の見ざりしが、口をしさに、わびていふ詞なり。〔磐〕せめてはよき人に、語り聞かすべき、下衆にてもがな、行きあへかしと願ふ意なり。

……る心なり。㊂いみじうする人 〔春〕寵愛する女なり。◎あそび 〔春〕音樂。㊁宮仕所より云々

九三（郭公尋ねて）

五月の御さうじのほど、職におはしますに、塗籠(スリゴノ)の前、二間(フタマ)なる所を、ことにしつらひしたれば、れいざまならぬ(例のやうならでめづらしと也)もをかし。ついたちより雨がちにてくもりくらす。つれづれなるを、郭公の聲尋ねありかばやといふをきゝて、われもわれもと出でたつ。賀茂の奥に何がしとかや、たなばたの渡る橋にはあらで、にくき名ぞきこえし。そのわたりになん日ごとになくと人のいへば、それは日ぐらしなゝなりといらふる人もあり。そこへとて、五日(イツカ)のあした、みやづかさに車の事いひて、北の陣より、さみだれはとがめなきものぞとて、さしよせて四人(ヨタリ)ばかりぞのりてゆく。うらやましが

なにがし抄本には何さきとあり

五節、春本せちゑ、抄本御せちゑとあれど、千蔭古本によりて五節と訂したるに従ふ。さるは直下に節會さるべき折云々とありて上と重複すれは也

たること也、外すにはあらず。

九二（くちをしきもの）

くちをしきもの　五節御佛名に雪ふらで、雨のかきくらしふりたる。せちゑなどさるべきをりの、御物いみにあたりたる。いとなみいつしかとおもひたる事の、さはること出できて俄にとまりたる。いみじうする人の、子うまで年ごろぐしたる。あそびをもし見すべき事もあるに、必ずきなんと思ひてよびにやりつる人の、さはる事有りてなどいひてこぬ、くちをし。男も女もみやづかへ所より、おなじやうなる人もろともに、寺へまうで、物へもゆくに、このもしうこぼれ出でて、よういはげしからず、あまり見ぐるしとも見つべくはあらぬに、さるべき人の、馬にても車にても、行きあひ、見ずなりぬるいとくちをし。わびてはすきずきしからんげすなどにても、人に語りつべからんもがなとおもふも、けしからぬなめりしかし。

◎五節佛名　〔磐〕前に註せり。◎せちゑ　〔春〕正月の三節會、十一月豐明の節會などなり。〔磐〕節日に群臣を召し集め、酒饌を賜はるを會と稱する也。◎御物忌にあたりたる　〔磐〕物忌のことも前にあり。春抄に、御物忌には四方拜などの外は、主上出御なければ也とて、禁秘抄の御說を引證せり。御儀式どもも、何の榮なきが殘念に思はるゝ也。◎いとなみいつしか云々　〔春〕かねて經營して、いつか其時にならむと、待ち設く

つき方に、たゞいさゝかわすれて寝いりたるに、鳥のいと近くかうとなくに、うち見あげたれば、晝（ヒル）になりたる、いとあさまし。てうばみにどうとられたる。むげに知らず見ずきかぬ事を、人のさしむかひて、あらがはすべくもなくいひたる。ものうちこぼしたるもあさまし。賭弓にわななくわなゝくひさしうありてはつしたる矢の、もてはなれてこと方へ行きたる。

◎あさましき　〔補〕俄なる事に驚き呆るゝなり　◎さしぐし　〔補〕櫛にはあらで簪なる事前に委し。此の頃の女子、晴の時に用ひし髪の飾り釵子のことなり。春註に、白氏文集樂府云、石ノ上ニ磨ニ玉簪一、玉簪欲レ成中央折、とあれと、之に據りたるにあらず。◎さへて　〔春〕さはりて也。〔補〕支の字、さへてともいふ也。◎おほのか　〔補〕おほどかに同じ。美隆云、ひろくゆたかなる意に聞こゆ。◎所せう云々　〔補〕あたり狹くゝなり。大きなる物の意。輕忽には轉倒すべくもあらずと思ひたるにと也◎あやなし　〔補〕言海に理タヽズ譯ワカラズとあるよろし。◎てうばみ　〔補〕重食。雙六の打ちやうの名也。上に註せり◎どう　〔補〕筒。二個の塞を入れて振り出す器なり。雙六の勝負にまけて、對手に幾度もつゞきて筒を取られ、己れ振り出だす事えせぬをいふ。◎あらがはす　〔補〕それは然にあらずと、眞僞を辯論させずと也。◎賭弓（ノリユミ）　〔春〕河海抄云、淸和天皇の貞觀二年正月十八日始レ之、天子弓場殿に幸して、弓を御覽ずる也。仲春の月弓を見る事、禮記より出でたり。四府（左右近衞左右兵衞）の舍人射レ之、事果てゝ饗を賜ふ也　〔補〕賭弓には左右を番（ツガ）ひて勝負せしめ、勝ちたる射手には、賭物の錢布等を賜ひしなり。◎はつしたる　〔補〕發しの音語也。つ文字濁るべからず。射放ち

夜一よ春本になし抄本による

◎かたはらいたき　(通)傍痛きの意　其の座に在りにくき程に思ふことにて、近世語に笑止ナとも、氣ノ毒ナとも譯すべきことなり。春抄に、恥かしくをかしく、氣味あしき心也とあるは、聊たがへり。◎うちとけごと　(通)他聞を憚るみだらなる言なり。◎制せで聞く、(春)客あるに、「ないひそ」ともいはでなり。客の前にては叱られぬ也。◎きゝゐたるも　(春)其の主の聞きゐたるも知らでと也　◎旅だちたる所云々　(春)旅宿又は我が近所にて、下人の己が同志、男女ざれかはす也。◎にくげなるちご　(通)見たるさまの可憐ならざる稚兒。ちごは乳兒なり　◎かなしと思ふまゝに　(通)かなしは今の語可愛(カアイ)く思ふこと、愛兒を「かなしご」などいへり。◎うつくしみ　(通)慈(イツク)しむといふ語の轉にて、愛すること。母なる者、己が心に可愛く思ふまゝに、其の兒の甘えたる聲音(コワネ)を學びて、いひつる言を傳へいふ也。◎よしとも覺えぬ歌　(通)よくもあらぬ己が歌の、ほめられたることを、他人に語り聞かする也。◎心一つをやりて　(通)己れが心だけは得意風なるをいふ　◎いとゝう云々　(春)最早くなり　(通)久しき前より、娘との緣切れたる聟なり。

九一（あさましきもの）

あさましきもの。さしぐしみがくほどに、物にさへて折りたる。車のうちかへされたる。さるおほのかなる物は、ところせく、久しくなどやあらんとこそおもひしか。只夢のこゝちして、淺ましうあやなし。人のためにはづかしきこと、つゝみもなくちごもおとなもいひたる。かならず來なんとおもふ人を夜一よ待ちあかして、あか

◎さぬひきあぐる ㊎衾(フスマ)をひきあげよる也。◎こはがり給はめ ㊓猶心強(コハ)くてあれと、女を懲らしめたしなめていへるなり。上に心こはければ、餘りになりて云々とあるに照應したり。

猶の字春本なし宸翰本による

九十（かたはらいたきもの）

かたはらいたきもの。まらうどなどにあひて物いふに、奥の方にうちとけごと人のいふを、制せできくこゝち。おもふ人のいたく醉ひておなじ言(ゴト)したる。きゝゐたるをも知らで、人のうへいひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、なほかたはらいたし。旅だちたる所、近き所にて、げすどものざれかはしたる。にくげなるちごを、おのれが(母の也)こゝちにかなしとおもふまゝに、うつくしみあそばし、これが聲のまねにて、いひける事などかたりたる。ざえある人の前にて、ざえなき人の、物おぼえがほに、人の名などいひたる。ことによしともおぼえぬ我がうたを、人に語りきかせて、人のほめし事などいふもかたはらいたし。ひとのおきて物がたりなどするかたはらに、あさましううちとけて寢たる人。まだねもひきとゝのへぬ琴(コト)を、心一つやりて、さやうのかた知りつる人のまへにてひく。いととう、すまぬむこの、さるべき所にてしうとに逢ひたる。

ゐたらむの脱字なるべし

まゝにねたくて、おきてぞいぬべかりけるなど思ひふしたるに、奥にも外(ト)にも物うちなりなどしておそろしければ、やをらまろびよりて、きぬひきあぐる(をとこのふすまなど引あげよる也)に、そらねしたるこそいとねたけれ、「なほこそこはがり給はめ」(男の詞)などうちいひたるよ。

◎げにあやまちてけりとは云々 〔春〕使の我があやまりたるとはいはで、清少の、そこへもて行けといひ付け給ひしと、口かたうあらがふさま也 ◎長櫃もたる 〔春〕萩など掘り植ゑんとてなるべし。爲仲朝臣、陸奥の任果てゝ上洛の時、宮城野の萩を、長櫃十二合に入れて入京の事、長明無名抄にあり ◎さるべき所の下部 〔通〕上長官などより、消息もちて、國司の家に來る下部の、我が主の威をかりて、不遜なる振舞するをいふ。春註はたがへり。◎追ひて行けど云々 〔春〕文を取り返さまほしくて、追て行けど、簾の外まではえ出でねば、簾のもとに立とまりて、飛びも出でまほしくて、見ゐたるさま也。◎すゞろなる事腹立ち 〔補〕夫婦いさかひしたる也。◎同じ所にも 〔春〕女のねぬなり。◎みじくり 〔春〕身じろき出づる也 ◎わりなく心こはければ 〔補〕俗にいふ無法に情強(コハ)くして從はぬ也。心ことなればとある本は誤なり。◎さばよかんなり 〔補〕さらばよし、氣儘にせよと也。◎かいくゝみて 〔春〕衾などに、身をまとひたる也。〔通〕かいは接頭語、くゝむは含むなり。包まること。◎あやにくがりて 〔補〕俗にいふ意地わろくに同じ。◎おきゐらむ 〔春〕下々の人など寢たるに、女一人起きゐたらむも、流石にあやしければ、其まゝ伏したるさま也。ゐらむは、居たらむなり。◎おきてぞいぬべかりける 〔通〕女の、己れ一人起きていぬべきか。など思ひつゝ伏したる也。◎やをらまろびより 〔春〕寒く物恐ろしさに念じわびて、やがてそろりと男の方へころびよりて也

前田本には、こそをとぞとあり

女どちは春本になし宸翰本による

受領などの此の下に傍線の數字抄本による

心こはければ春本心ことなればとあれど今活本に從ひて改めつ

おきゐらむ

つ　㊀とゝ、縫ひたらむ人を　㊁此の下、春本「しらむと」の四字あるは衍なり。今削りつ。千蔭本其の下の詞、「仰せられしかばこそ」とありて、能く聞こゆ。

見すまじき人に、ほかへやりたる文とりたがへて、もてゆきたるねたし。げにあやまちてけりとはいはで、口がたうあらがひたる、人目をだに思はずは走りも打ちつべし。　おもしろき萩すゝきなどをうゑて見るほどに、長櫃(ナガヒツ)もたる者、鋤(スキ)などひきさげて、たゞ掘りにほりていぬるこそわびしうねたかりけれ。よろしき人などのあるをりはさもせぬものを、女どちはいみじう制すれど、「たゞ少し」などいひていぬる、いふがひなくねたし。　受領などの家に、さるべき所の下部などの來て、なめげに物いひ、さりとて我れをばいかゞと、思ひたるけはひにいひ出でたるいとねたげなり。見すまじき人の文をひきとりて、庭におりて見立てるいとわびしうねたく、追ひてゆけど、すのもとにとまりて見るこそ、飛びも出でぬべきこゝちすれ。

すゞろなる事はらだちて、おなじ所にもねず。みじくり出づるを、しひて引きよすれど、わりなく心こはければ、あまりになりて、人[男也]も「さはよかゞなり」とゑ[怨]じて、かいくゝみてふしぬる後、いと寒きをりなどに、只ひとへぎぬばかりにて、あやにくがりて、大かたみな人もねたるに、さすがにおきゐらんもあやしくて、夜のふくる

多し抄及び千本によりて補訂す

前田本にもたはふれとあるを後に見出でたり

給ひしかほ、見やりてゐたりしこそをかしかりしか。これは、よさりのぼらせ給はんとて、とくぬひたらん人をおもふと、おほせられしかばこそ。

◎南の院 □拾芥に二條ノ南町ノ西とあり。道隆公の第なり。◎ふれあそび □直按、たはふれ遊びの脱か、上にさう〴〵しければとあると、たはとあると、はは文字重なりたるより、見落して誤りたるならむと思ひしに、美隆ぬしも既にしか云へり。◎時かはさず 〔春〕不ㇾ時替、時を移さずなり。◎ひらぬき □春註平縫にやとあれといかゞ。濱臣云、ひらぎぬ(平絹)の假名を、轉倒して寫し誤りしならむ。雅亮裝束抄五節所の條にも、平絹の汗衫あり ◎ゆたけ □春註に、弓長の方なり。左のかたをいふ也とあり。抄には、「古歌、天か下はくゝむ神のみそなればゆたけにぞ裁つみつの廣前」藏玉に、ゆたけ弓長なり。弓長は七尺余なり。みつの廣前はぬはぬ衣なり。仙人の衣は縫はぬもの也。とあり。美隆云、此の天が下の歌のも、行長(ユキタケ)のひろき事なり。弓長の說わろし。さて思ふに、此の草子(春本)十二夏の薄物、片つ方のゆだけ着たる人こそにくけれ云々。左右のゆたけなるはよし。云々の詞を以て考合するに、此の頃男も女も、衣の片つ方を、行長(ユキタケ)廣くして著る事のはやりしにや。さらば此處も、其行長の廣き方の御身をといふこと也。◎御せあはせん 〔春〕衣の背を合せんとする也。◎あやなどならば云々 〔春〕綾は紋ありて、うら表も見分易きものなれば、縫ひたがへたる人のあやまりにて、縫ひ直すべき事と也。◎ぬひたがへの人のけに □此のけには、故にといふ程の詞なり。濁りて讀むべからず。◎何をしるにてか □何を縫ひたがへの證としてか、縫ひ直すべきの意。◎さいひてあらむや □然樣にいつ迄も、いつ爭ひてのみあるべきならずとて也。◎新中納言なといふ人の云々、此の條春本には脫字ありて通じ難し。抄本異本等によりて、本文の如く補ひ

◎はたきもの　補夏蔭云、悔しき意なり。◎もじ一つ二つ　補文字とは、當時詞のことないへり。前にも註せり。春註に、てにをは也とあるはわろし。◎とみ　補頓の音なり。急遽のこと　◎はやう　補既に、また前になどいはむ程の詞なり。

南の院におはします比、西の對(タイ)に殿(渡殿)のおはしますかたに、宮(定子)もおはしませば、寝殿に集まりゐて、さうぐ\しければ、ふれあそびをし、渡殿にあつまりゐなどしてあるに、「これ(后宮よりのおほせ也)只今とみのもの也。誰れもたれもあつまりて、時かはさず縫ひて參らせよ」とて、ひらぬきの御ぞを給はせたれば、南面(ミナミオモテ)に集まりゐて、御ぞかたみ(片身)づゝ、誰れかとくぬひ出づるといどみつゝ、近くも向はず、ぬふさまもいと物ぐるほし。命婦のめのと、いととくぬひはてゝうちおきつる、ゆだけのかたの御身をぬひつるが、そむきざまなるを見つけず。とぢめもしあへず、まどひおきてたちぬるに、御せあはせんとすれば、はやうたがひにけり。笑ひのゝしりて「これ縫ひ直せ」といふを、「たれが(命婦のめのと詞也)あしうぬひたりと知りてか直さん。綾などならばこそ、裏を見ざらんぬひたがへの人のけに直さめ。無紋の御ぞなり。何をしるしにてか。なほす人たれかあらん。たゞまだぬひ給はざらん人になほさせよ」とて、きゝもいれねば、さいひてあらんやとて、源少納言、新中納言などいふ人の、物うげに縫ひ給ひ、なほし

ひらぬきは平きぬの轉倒せしか

いふ人の云云春本脱字

人のもとに
春本に此詞
なし抄本異
本によりて
補ふ

將をも、后の御弟好親といふ者の事とせしは、證もなき忘言なり。◎たまはする扇ども〔[illegible]〕直按、昔は餞別に扇を贈る例にや。帥の隆家筑紫へ下向の餞に、扇を遣して、枇杷の皇太后「涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風な忘れそ」新古今にあり。源氏夕顔の卷にも、空蟬が伊豫へ下るに、源氏ノ君より扇を遣されし事あり。「あふぎ」に、又逢ふといふ詞の祝意をとれるか。◎井手ノ中將〔[illegible]〕素本は井中將とあり。千蔭本にはゐ中の館とあり。總じて千蔭の古本によりて、此の條を校訂せんには、一所ならず、甚く異なれば、全文を揭げて對照の便に供すべし。

御めのとの大輔ノ命婦、日向へ下るに賜はする扇どもの中に、片つ方は日いとうらゝかにさしたる、ゐ中の館などおほくして、今片つ方は、京のさるべき所にて、雨いみじうふりたるに、あかねさす云々、御手にて、かゝせ給へるは、いみじうあはれ也。さる君をおきまつりて、遠くこそえゆくましけれ。」

右のまゝに從へば、文意明らかに聞えたり。田舍の館と、京のさるべき所とを、扇の兩面に畫かせ給へる也。◎ことばに〔[illegible]〕こと(殊)に、御手づからとありし誤寫ならむ。文詞のやうに、といふ舊註はいかゞ。

八九　(ねたきもの)

ねたきもの。人のもとにこれよりやる(歌の本也)も、人のいひたる返しも、かきてやりつる後、もじひとつふたつおもひなほしたる。とみの物ぬふに、ぬひはてつと思ひて、針をひきぬきたれば、はやうしりをむすばざりけり。また、かへさまに縫ひたるもいとねたし。

命婦　春本抄本けふとあり千陰本古本によりて命婦と訂せり　井手の中將以下千陰本いたく變れり註を見よ　ことばにのははは衍にて殊にか但し古本千陰本には此の四字なし

の中を無理に分け參りて、宮に啓したるなり。保孝云、道もなきとあるよろし。こゝちなきといふ詞をいはでも、白詩を知らぬとはきこゆべし。◎我れは知りたりや　補わりなく參りて、宮に啓したる女房にむかひて、汝はなかば面をかくしけむといふ言の意を知りたりやと、宮の笑ひて仰せられしかは、さて立ち返りて、宮の仰を又清女に傳へたりと也。我れ已れは、もと自稱の詞ながら、對稱にもいへる事、昔よりのならひ也。此の段、抄は主客を違へて解かんとせしからに、凡て牽強に陷りたり。

八八　（餞別の御歌）

御めのとの大輔（タイフ）ノ命婦、日向へくだるに、たまはする扇どものなかに、片つ方には日いと花やかにさしいでて、たび人のあるところ、井手の中將のたち（館）などいふさま、いとをかしうかきて、いま片つかたには、京のかた雨いみじうふりたるを、ながめたる人などかきたるに、

（后宮の御うた也）あかねさす日にむかひても思ひいでよみやこは晴れぬながめすらんと

ことばに御手づからかゝせ給ひしあはれなりき。さるきみをおきたてまつりて、とほくこそえいくまじけれ。

◎御めのとの大輔ノ命婦　春后宮の御乳母なるべし。道隆公隱れ給ひ、伊周公左遷などの比、心短きめのとにて、見捨まゐらするにや。補抄の頭註に、大輔のめのとを、后の御弟周家の妻とし、又下の井手の中

みち春本こゝちとあり

めでたし。ちかくゐ給へる人にさしよりて、「（清少のいふ詞）なかばかくしたりけんも、えかうはあらざりけんかし。それはたゞ人にこそありけめ」といふをきゝて、みちもなきを、わりなくわけ參りて啓すれば、わらはせ給ひて「我れはしりたりや」となん仰せらるゝと、つたふる（清少に傳ふる也）もをかし

此の段、中宮の御用意の大かたならぬをいふ。前に樂器の事をいへる序に、御遊にうつりて也。◎とのあきたる　〔補〕外（ト）のあきたるなるべし。卽ち御格子をおろさぬこと也　ⓒ御琴をたゝざまに　〔春〕皇后の琵琶引ておはせしが、火影あらはなれば、ひきやみて、唯にもたせ給ふ也。〔補〕唯にはあらず。琵琶を竪樣（タテサマ）にし給ひて御面を隱し給ひたる也。たてざまを、たゝざまといふは、楯並てをたゝなめてといふと同格也。ⓒいふもよのつねなる　〔補〕口に申すは平凡なりと也。御衣の紅の色の、世の常ならぬをいふ。ⓒうち又はりたる　〔補〕春本うちきとあれど、屋代本うち又はりとあり。活本うちもはりたるもとあり。打ちて光（ツヤ）を出たせると、張りたると重ね給へる事なれば改めつ。◎なかばかくしたりけむも　〔春〕琵琶行云、千呼万喚始出來、猶抱ニ琵琶一半遮レ面云々　〔補〕佳人の容姿も是れには及ばじ。彼れは娼家の女なれば、いかでか我が宮の、あてに氣高くおはしますにはとの意なり。◎みちもなきを　〔補〕春本こゝちもなきをとありて、傍に、彼女房は、琵琶行をきゝしらざる也と註したれど、抄本を始め、諸家の校本皆みちとあるに從ふ。按ふに春本のこゝちは、元「ミち」とありし字を、三字に見たがへしより、誤りたるならむ。輕卒なる女房の、琵琶行の故事をいふとは知らぬながら、清女の宮をほめ奉りし事を、早く聞え上げむとて、通るべき道もなき衆人稠座

花及勘物云、鹽竈ハ和琴云々。但拾芥名物部には箏の名也。和琴にも此名あるか。可レ尋レ之 ◎二貫 (勘)勘物云、和琴云々、◎すゐらうこすゐらう ◎水龍。拾芥名物笛部云、大水龍。江記云、天暦御宇寶物。小水龍同。◎うだのほうし ◎拾芥和琴部云、宇多法師。寛平法皇貴重ノ餘有ニ此名一。河海云、宇多法師ハ和琴名物也。以レ檜作レ之。一條院御時、内裏燒亡之時燒失云々。◎くぎうち (勘)拾芥笛部、釘打。◎はふたつ (勘)拾芥笛部、葉二。江談云、號ニ朱雀門ノ鬼ノ笛一、又號ニ青葉一歟。◎宜陽殿の一のたな (勘)よき樂器をほむる詞に、頭中將のいへるなるべし。源氏若菜上云、此御琴は宜陽殿の御物にて、代々に第一の名ありし御琴云々。細流云、宜陽殿。昔は樂器書籍等をおかるゝ所也。河海云、西宮抄云。納殿累代御物在ニ宜陽殿一恒例御物納ニ藏人所一。

御そとも─千蔭校本による

給へるだに─抄本による

八七 （なかば隱したりけむも）

うへの御局のみすの前にて、殿上人日ひとひこと笛ふき、あそびくらしてまかつでわかるゝほど、まだ御格子もまゐらぬに、おほとなぶら(灯臺)をさし出でたれば、とのあきたるがあらはなれば、琵琶の御ことを、たゝざまに持たせ給へり。くれなゐの御そ(后宮の御裝束也)どものいふもよのつねなる、うちまた張りたるもあまた奉りて、いと黑くつやゝかなる御琵琶に、御その袖をうちかけてとらへさせ給へるだにめでたきに、そばより御ひたひのほど白くけざやかにて、わづかに見えさせ給へるは、たとふべき方(カタ)なく

琵琶はげんざう(玄象)、ぼくば(牧馬)、ゐゝへ(井手)、ゐきやう(渭橋)、無名など。又和琴なども、朽目(クチメ)、鹽竈(シホガマ)、二貫(フタヌキ)などぞきこゆる。すゐろう、こすゐろう、うだのほうし(宇多法師)、くぎうち(釘打)、はふたつ(葉二)、なにくれと多くきこえしかど忘れにけり。宜陽殿の一のたなにといふことぐさは、頭中將(齊信卿にや)こそしたまひしか。

此の段も、前段と似たる秀句の物語なれば、ついでに書きつゞけたるなり。◎淑景舍 (補)中宮の御妹、前に出づ。◎ことのゝえさせ給へりし (春)故殿とは、かくれ給へる父君の御事也。中關白のしげい舍へまゐらさせ給也 ◎僧都のきみ (春)勘物云、隆圓、正曆四年權少僧都十五、寬弘八年四月權大僧都。長和四年二月卒卌七、◎いなかへじとおぼいたる (春)其笙を琴にはかへまじきと、しげいしやのおぼしたる物なと也。江談云。否不レ替是笙名也。唐人賣ン之千石ニ買ント云、イナカヘジト云ケレバ、以レ之爲ノ名云々。(補)おぼいは覺しの音便也。◎此御ふえの名を (春)此否不レ替といふ笙の名を隆圓知給はねば、此后宮の御詞の秀句なしらで、御あいさつなきと恨み給ふ也。◎げんじやう (春)古今著聞云、玄象が撥面の繪のやうは、馬上にてたまをうつ物、腰にたまをさして舞たる姿也。(下略)禁秘抄云、或曰玄象呑ニ青鈍之水一、所レ謂號ニ玄象一、又玄上宰相獻ニ延喜帝一、仍號ニ玄上一、但妙音院入道付ニ玄上說一歟。◎ぼくば (春)拾芥云、牧馬與ニ玄上一二雙ノ名物也。◎ゐゝへ (春)井上。拾芥に和琴の名也。淺及翁の勘物に井手とあり。拾芥に在ニ宇治ノ寶藏ニ云々 琵琶也 ◎いけう (春)拾芥云、渭橋。三條式部卿琵琶、一名爲堯 ◎くちめ (春)拾芥和琴部云、朽目或朽部。◎しほがま (春)

爲ニ同藤ー燒失畢、愚按蟬丸のといふ說もあれば、昔より禁中にありし故、定子の御方へも持てわたらせ給へるなるべし　さて後上東門院の名物とはなれるにや：◎かきならし云々　⃝この條、誤脫もやあらむ、解し難し、試みに愚考をいはゞ、名物の琵琶を淸女の見などしてゐたるに、傍の人の「かきならし給ふか」といへば、「ひくにはあらず」とて、緒などを搜りつゝ、「この珍器の名よ何とか申す。」と聞え奉りたればといふ意ならんか。

給へりし」春本しの字なし千蔭本による

八六（いなかへじ）

淑景舍などわたり給ひて（后宮の御かたへ也）、御物語のついでに、「まろがもとにいとをかしげなるさう（笙）の笛こそあれ。こどののえさせ給へりし」との給ふを、僧都のきみの、「それは（僧都の詞也）隆圓にたうべ。おのれがもとに、めでたききん（琴）侍り。それにかへさせたまへ」と申し給ふを、きゝもいれたまはで、猶ことごとをの給ふに、いらへさせ奉らんと、あまたたび聞え給ふに、猶物のたまはねば、宮の御まへの、「いなかへじとおぼいたるものを」とのたまはせけるが、いみじうをかしき事ぞかぎりなき。此の御ふえ（笙の事也）の名を、僧都のきみも、えしり給はざりければ、たゞうらめしとぞおぼしためる。これは職の御ざうしにおはしましゝ時の事なり。うへ（禁中の御事也）の御まへに、いなかへじといふ御笛の候ふなり。御前に候ふ物どもは、御琴も御笛もみなめづらしき名つきてこそあれ。

見などしての一句抄本になし

仕之外不レ可レ入、頭若行事ノ藏人之外、不レ能レ伺ニ戸外一（上下略） ◎かいつくろひ二人云々 〔補〕同じ江次第五節御前ノ試ノ事に、次ニ舞姫參上、藏人ノ頭進向ニ長橋東一、禁ニ陪從等ノ闌入一、免レ入之者、理髮一人童女二人、薰爐酉等也とある是れなり。按ずるに、此の條「かいつくろひ一人童二人」とありしを、錯誤し又落字もしたるならずや。◎わらは舞の夜 〔補〕寅の日御前ノ試の夜なるべし。次に燈臺にむかひたる云々とかけるも、江家次第試の條に、鋪ニ圓座五枚一（相去五尺許一枚ハ師料）毎ニ舞姫ノ座前ニ立ニ燈臺一とあるに當るべし。春抄の傍註に、卯ノ日童御覽の夜の事にやとあるは從ひがたし。其の故は、紫式部日記五節の所に、「御覽の日の童のここちどもは、おろかならざるものを云々。唯かく曇りなきひる中に、扇もはかぐしく持たせず、そこらの公達の立ちまじりたるに、いかに臆すらむとかたはらいたき」とありて、御覽は晝中の儀にて、夜の事にあらねば也。

八五 （無 名）

むめうといふ琵琶の御ことを、うへのもてわたらせ給へるを見などして、かきならしなどすといへば、引くにはあらず緒などをてまさぐりにして、「これが名よ。いかにとかや」などきこえさするに、たゞいとはかなく「なもなし（無名といふ琵琶なれば也）」とのたまはせたるは、猶いとめでたくこそ覺えしか。

◎むめうといふ琵琶 〔補〕無名。拾芥云、上東門院ノ名物也。或說、蟬丸ノ琵琶。上東門院令ニ坐ニ清時亭一之時、

う仕ふるよし上にも見えたり。臨時の雜用に仕はるゝなり。◎殿上人の云々 （抄）以下は、五節の時祿たまひ、大御酒たうべなどして、樂みありく樣を云ふ也。◎ぬぎたれ （補）盛衰記などに、淵醉の肩脱（エンズヰカタヌギ）とて、上衣の肩を脱ぐをいふ。舞ふ人の常する作法なれば、醉ひの亂れに、歌諷ひ亂舞せんとて、かくはするなるべし、◎つかさまれど云々 （補）抄にも未考とあり。按ずるに、平家物語殿上の闇討の條に、五節には白薄樣、こぜんじの紙、卷上げの筆、巴かいたる筆の管なんど、樣々加樣に面白き事をのみこそ、歌ひ舞ひけるに云云などある類の歌なるべく、五節の淵醉にのみ物するにて、後世絶えて傳はらぬ謠物なるべし。◎局どもの前云々 （補）局は五節所とて常寧殿の舞姬侍女等の居る所、其のしつらひ等雅亮裝束抄雲圖抄等に委し。◎一度に笑ひなどしたる云々 （補）舞妓の侍女の、鄙びたるなどは、殿上人に嘲笑せられし事、今昔物語等に見ゆ。此所もそれを恐れたる也。◎行事ノ藏人 （補）行事藏人とは、舞の間出入を禁ずる奉行也。江次第にあり。雲圖抄に、一﨟藏人爲二行事一と見ゆ。◎かいねり （補）表裏とも、練絹にて製りたる下襲なり。色大かた紅なり。◎物より殊に （補）春の傍註に萬物より殊なる也。とあるはいかゞ。物よりとは今の詞に、何よりもといふに同じ。◎ひとれなど云々 （補）行事の爲に茵しきて座を設けたれど、いそがはしく立ち働きて、えものぼりゐぬ由也。◎女房の出でたるさま （補）侍（カシヅキ）の女房の出で立ちを評するなり。◎帳臺の夜 （補）公事根源云、中ノ丑日をば帳臺の試といふ。常寧殿にて主上御覽あり。（中略）殿上人ども脂燭に候ふ。主上御直衣に御指貫にて、御沓を召さるゝ事、此時の外はなし。帳臺におはします程亂舞あり云々。猶江家次第に委し。指圖は雲圖抄に見ゆ。◎行事ノ藏人いときびしく云々 ◎物見る人などの闌入を禁ずるさま也。江次第の帳臺ノ試の條に云藏人頭、行事ノ藏人立二舞殿東戸下一開闔、舞間禁二闌入一理髮ノ童女、陪從ノ下

抄上舞姫に從ふ童女の髪に、紅の薄様紙を、廣さ三分ばかり重ねながら切りて、二寸ばかり下ぐるやう其の作法を委しく記せり。◎さいしき　補春註、彩色付たるにやとあるにより、岩崎氏の考に、此のさいしきは、彩色ながらしきを用言によむべし。榮花物語にも例あり。裝束の字を「さうぞき」など用言に活かしいへると同じ格也。又此草子の奥に、「あまりぎしき事さめつらむ」とあるも、儀式を活き詞にいへる也。といはれつるは、類例もありて、一わたり聞えたれど、千蔭翁の校本に「さいしに付けたる」と見え。又屋代本には「さいぐしに」とあるを考ふれば、「さいし」は釵子。「さいぐし」は刺櫛ならむ　此の二つは、異稱同品にて簪の事なるが、たま／＼主殿の女嬬の、釵子に裂帛附けたるを、童女の物忌附けたるやうなりとて、之を珍らしといへるなるべし　◎そり橋　補舞姫の通路として、清涼殿の東北の階より承香殿の西脇戸へ、斜に架せる假橋なり。但し雅亮抄江次第雲圖抄等みな長橋とありて、本草子の外、そり橋と書けるを見ず。承安五節繪卷には、屋もなく欄干もなき假りそめの板橋に畫かれたり。そり橋の字不審。◎もとゆひ　補これは寶髻のもとをゆふ組糸にて、紫のむら濃なるべし。◎うへの雜仕人のもとなるわらはべ　補禁中に仕ふる下衆女と、上臈女房の許につかはるゝ童女等と也。是れらは、舞姫に供なふ者とは別なり。◎いろふし　補雅言集覽に、晴なる事にいふとて類例あまた揭けたり。按ずるに、一ふし色に出でて見ゆる事にて、面白き事、かひある事也。◎山藍ひかげ　補山藍にてすれる物や。日蔭の糸など、五節の用意に、柳筥に入れありくにや。補青摺の料に用ふる山藍なるべし。◎柳筥　補柳の木を、細く三角にけづりたるを、白糸にて綴りて、四方を張りたる筥なり　調度圖解を見よ。春本・抄本の註はたがへり。◎かうぶりしたる男　補六位藏人の退職して、更に五位の爵得たる者の事なり。「藏人の五位とて、いそがし

戸をの二字千蔭本のたまふを春本をの字なし千蔭本にあるをよしとす

なして、かいつくろひ二人、わらはより外はいるまじと戸をおさへて、おもにくきまでいへば、殿上人など、「猶これひとりばかりは」などのたまふを、「うらやみあり（蔵人が詞也）。いかでか」などかたくいふに、宮の御方の女房二十人ばかりおしこりて、ことごとしういひたる藏人なにともせず。戸をおしあけてさゝめきいれば、あきれて（蔵人がさま也）、「いとこはすぢなき世かな」とて立てるもをかし。それにつきてぞかしづきどもも、皆いるけしき、いとねたげなり。うへ（主上）もおはしまして、いとをかしと御覽じおはしますらんかし。わらはまひの夜はいとをかし。燈臺にむかひたるかほども、いとらうたげにをかしかりき。

此の段も亦なまめかしきものゝつゞき也。殊に五節のなまめかしさ極りなき由ないひあかずして、又立ちかへり、前にいひ漏らしたる事どもつゞけし也。ⓒ細太刀平緒 ㊑公卿の束帶に佩用する劍。白鮫柄、金銀作り、鞘に蒔繪したり。後世の書ながら、新野問答に、螺鈿ノ劍、蒔繪劍、皆太刀にて候。儀刀・木刀の類にて眞劍にあらず。なまがねにて作りたるにて候とあり。儀刀とは唯威儀にのみ備ふるたいふ。細き故に、上品に見ゆべし。平緒は元太刀の緒なり。後には幅廣く製りて、緒と別にして前に乘る。委しくは裝束圖解を見るべし。ⓒさいで ㊑諸抄さいく（細工）とあるは非也。さいでは裂妙（サキタヘ）の約語にて、俗に裁帛（コトレ）といふに同じ。妙は布帛の稱。㊍雲圖抄裏書に辰ノ日節會に、舞姬參上して、於ニ第三ノ間ニ列舞、主殿ノ女孺四人、秉燭照舞云々。此時、主殿の女孺の出立に、さやうの事あるなるべし。◎ものいみ ㊑雅亮裝束

さいで春本抄本さいくとあり活本による

さいしきは千蔭本さいしにとあり屋代さいくしにとあり

ぞある春本なし抄本による

人のもとなる春本なし抄本千本による

八四 （なまめかしきもの追記）

細太刀の平緒つけて、きよげなるをのこのもてわたるも、いとなまめかし。むらさきの紙をつゝみてふんじて、ふさながき藤につけたるもいとをかし。内裏は、五節のほどこそすゞろに只ならで見る人もをかしうおぼゆれ。とのもりづかさなどの、色々のさいでを物忌のやうにて、さいしきつけたるなどもめづらしく見ゆ。清涼殿のそり橋に、もとゆひのむらごいとけざやかにて出でゐたるも、さま〴〵につけてをかしうのみぞある。うへの雜仕、人のもとなるわらはべも、いみじき色ふしと思ひたるいとことわりなり。山藍日かげなど、やないばこに入れて、かうぶりしたる男など、もてありくいとをかしう見ゆ。殿上人の直衣ぬぎたれて、扇や何やとひやうしにして、「つかさまされどしきなみぞたつ」といふうたをうたひて、局どものまへわたるほどは、いみじく、そひたゞたらん人の心さわぎぬべしかし。ましてさと一度にわらひなどしたる、いとおそろし。行事の藏人の搔練がさね、ものより殊にきよらに見ゆ。しとねなどしきたれど、なか〳〵えものぼりゐず。女房の出でたるさまほめそしり、此のごろはこと事はなかめり。帳臺の夜、行事の藏人いときびしうもて

白糸冬來れば、とくゞくもあらず氷結べり」などあるも、淡き意と聞ゆと。彼れ是れ考ふるに、此所は沫緒とは異にて日蔭糸の結び方なる、あはび結びといふに、淡く結べる意を兼ねたる事として、はの假名に從ふべくこそ。美隆云、此歌結句を文字は、モノヲの意としても聞えぬにはあらねど、少し輕く心得べし。千載集に、ぞとして入れられたるにても知るべし。◎などか〳〵と (春)宮司えきかぬ也。又實方の聞かぬにてもあらむにや。(抄)小兵衛の辨に、尋ね問ひ給ふ由也。(補)以上三つの中、前よりの詞つゞき、宮司の心いられを書けるついでなれば、宮司のなどか〳〵と、問へる事とすべき也。◎えもいひつゞけず成りぬる云々 (春)かの返歌をよくいひきかせざりしは、清少の恥をかくすなりしと、卑下の詞也。◎おりのぼる送り云々 (補)舞姫は丑の日參入して常寧殿を休所とす。當夜は此の殿内母屋に於て帳臺の試あり。翌寅の日は御前ノ試、卯の日は童御覽とて、共に清涼殿にて其の儀あれば、度々の上り下りをいふ也。◎すけまさ (頭註)公卿補任菅輔正、右中辨淳茂孫、勘解由長官、任躬朝臣男云々。◎そめどのゝ式部卿の宮 (春)紹運錄に、村上天皇の皇子爲平親王を、染殿式部卿と號すと云々。うへは北の方をいふ。◎はての夜 (春)辰ノ日節會の時にや。但し卯ノ日童御覽の事にや。(補)最終(イヤハテ)の辰ノ日の夜なるべし。江次第によれば此の日豐明節會は、紫宸殿に於て行はる。南庭に臺舞を設け、舞姫本式の舞樂あり。終つて仁壽殿を廻りて、清涼殿の上ノ御局へ歸り參りしなり。◎おひかづき行く (春)すけまさの女の、十二歳なるを負(オヒ)かづき、打つれ行にも、うちしづまりて、おとなしくをかしき人と也。(補)負ひ擔くといふ註可笑。追ひかしづきの落字にて、後に從ひ、かしづき行くならむ。次に舞姫をさきに たてゝとあるにて察すべし。

たる、實方の大かたならぬ此歌には、いかでか卒爾に返歌すべきと、清少もつゝましく聽せしこそ、折節わろけれと也。〔講〕實方は歌の上手と誰れも知りたらむ人と也。◎おぼろけならざらむ 〔講〕保孝云、おぼろげな、よき事に用ふる例あり。よくあらざらむは也。直云、おぼろげならず」を略して、唯おぼろげとばかりもいふ事、土佐日記などにも例證あり。一通りならずよき歌ならざらむはの意也。◎いとめでたかられど 〔講〕此の下春本抄本等、ねたふとこそはとあるを、千蔭古本によりて、校せるには、「ねた」の二字を削りて「ふとこそうち、いへ」と訂せり。是れにて文意いと明らかになりぬ。返歌はたとひよからずとも、卽座にふとこそよむべき法なれと也。○つまはじき 〔講〕人の動作の我が心に叶はぬを、嫌ふ事にいふ詞なり。

◎うす氷あはにむすべる云々 〔春〕彼の實方の、山井は氷るに、いかで解くる紐ぞと、とがめしをうけて、淡に結べるはかなき氷なれば、日影にゆるびとくるぞと、理りたる也。是も紐に氷をそへ、日蔭のかつらを、日の影にそへたり。此歌千載集には、うは氷とあり。尤可ㇾ然也。とまりも身ぞとあり。畢竟同心なるべし 〔講〕千蔭云、万葉四、たまの緒をあわをによりて結べれば、ありての後もあはざらめやも」解け易き結びざまなるべし。濱臣云、今俗「あはぢ結び」といふ泡にいひかけたり。直按、和訓栞に、あはぢ結び、淡路結と書けり。わな二つ並べたる形也　又あはび結び、鰒の形に結ぶ也。日蔭蔓・檜扇などにもいへりとありて、いづれもはの假名也　可ㇾ考。本居宣長の説に、あは、万葉四、又伊勢に、玉の緒をあわをによりてとありて、もと沫緒といふ緒のよりかたありし也。さるを貫之集に、春來れば瀧の白糸いかなれや、結べども猶あはに見ゆらむ。又この清少の歌などは、淡々しき意と聞えたり。万葉には沫緒とかけり。沫・淡・假名異なるを、貫之の頃は、共にかよはしいへるにや云々。千蔭又云く、曾丹集に、あはなりし瀧の

おとうとの四（后宮の五節侍也）のきみの御はら、十二にていとをかしげなり。はての夜も、おひかづきいくもさわがず。やがて仁壽殿（ジジユウデン）よりとほりて、淸涼殿のまへのひがしのすのこより、まひ姬をさきにて、うへの御つぼねへまゐりしほどをかしかりき。

◎小忌の公達はとにゐて　〔補〕五節の休所なる、常寧殿の簾外にゐてとなり。◎其の夜まではなほうるはしく云々　〔春〕此儀式を猶あかずおぼす故に、局などこぼちても、猶夜る迄は、舞妓の樣（サマ）やつさで、うるはしくてあれとて、さもいたくしなさせ給はぬと也。〔補〕儀式をあかず覺す故にはあらじ。按ふに、五節のはての日は、未だ暮れぬ程より、主殿の下部、常寧殿の舞妓の局に來て、敷設を撤し簾帳などをも取り拂ひて、妓の居所をもあらはに、はしたなくてあらする風なりしを、さては不都合なり。猶終（ハツ）る夜までは、局の敷設裝飾をも、正しくしておくべしと、后宮の仰せごとありしなり。かくして舞妓等を例のやうに迷惑せさせずと也。◎小兵衞　〔春〕是后宮の女房也。前に常陸介が事を、右近ノ内侍にまねばせし人也。かしつき十人の内にや。◎實方　〔春〕勘物云、實方、正暦二年九月右中將、元右馬頭、五月九日左中將。◎あし引の云云　〔春〕足引は山の枕詞也。我思ふのむすぼほれたるを、山井の氷にそへたり。下句は彼の赤紐のとけしを氷をひともいふによせてよめり。此歌後拾遺集雜五には、實力の歌也。彼集には雜の歌なれど、此草子にはたゞならずとあれば戀にや。〔補〕やま井は靑摺の山藍によそへたり。とくるは氷のとくるに、女方より打ちとけかゝるならむと、戯れしなり。◎けそう　〔補〕顯證。大勢の見る前にて、あらはなれは恥づかしき也。◎四人ばかりをへだてゝ云々　〔春〕清少は小兵衞とのおはひ、四人ほど隔てたれは、たとひよき返歌を思ひえたりとても、人をさしこえては、返歌いひにくしとなり。◎歌よむと知りたらむ人の　〔春〕歌よみと知り

おとな人春本おきなとあり抄本によりて改む

めでたかられどの下春本抄本これたふとこそれとあり古本にれたの二字なきよろしければ従ひつ

おくり前田本にはなりとありうへの三字春本になし抄本による

といひかく。年（小兵衛）わかき人の、さるけ（異説）そうのほどなれば、いひにくきにやあらん、返しもせず。そのかたはらなるおとな人（老女）たちも、うちすてつゝ、ともかくもいはぬを、宮つかさなどは耳とゞめてきゝけるに、久しくなりにけるかたはらいたさに、ことかたより入りて、「などかうはおはする」（宮司の詞也）などざゝめくなるに、四人（ヨタリ）ばかりをへだてゝゐたれば、よく思ひえたらんにもいひにくし。まして歌（貫方）よむとしりたらん人の（なさしていふ也）、おぼろげならざらんは、いかでかとつゝましきこそはわろけれ。「一（宮司の詞）よむ人はさやはある。いとめでたからねど、ふとこそいへ」と、つまはじきをしてありくも、いとをかしければ、

うすごほりあはにむすべるひもなればかざす日かげにゆるふばかりを（イ本ぞ）

と辨のおもとといふに、つたへさすれば（辨のおもと）、きえいりつゝ、えもいひやらねば、などかなどかと耳をかたぶけてとふに、すこしことゞもりする人の、いみじうつくろひ、めでたしときかせんと思ひたれば、えもいひつゞけずなりぬるこそ、なか／＼はぢかくすこゝちしてよかりしか。おりのぼるおくりなどに、なやましといひいれぬる人をも、の給はせしかば、あるかぎりむれたちて、ことにもにず。あまりこそうるさげなめれ。舞姫は（后宮の九節也）すけまさの右馬の頭のむすめ、染殿の式部卿の宮のうへの御

日もくれぬ程に春本なし抄本によりて補ふ

も、みな青摺を着る例の樣に思はれて、后の隱して物し給へる御用意にも、小忌の公卿の驚き興ずるにも、及ぶまじく聞ゆるをや。能く心を留めて思ひわくべし。©女房にだに云々 〔評〕侍きの女房にすら、前以て知らせずと也 ©えうしたる 〔頭〕春本抄本等やうとあり。春の傍註に、樣子したる也とあるもわろし。千蔭は瑩したるにて、みがゝ事とす。濱臣以下の學者皆同意。直云、瑩は貝にて帛を磨りて、光澤(ツヤ)を出す事なり。假名えうなれば改めつ。©かた木のかた 〔重〕一條禪閤の、宗祇に御傳授の、大嘗會の記に云、小忌といふは神事の服也。白き布を張りて、山藍といふ草にて、摺木を摺る物也云々。〔頭〕岡本保孝云かたぎは、布帛を染むる其のかたを、木に刻しおくをいふ。和名抄調度裁縫類に、模の字カタギとよむ。形木の意なり云々。直云、カタキは今の版木の事也。摺衣の模樣(カタ)は、梅・柳・蕨・菫など春の草木に、蝶・鳥の類なり。本文繪にかきたるとあれば、彼の草木花鳥の象(カタ)を、摺りたるにあらで、わざと繪にかゝせ給へるなり。©わらはは今すこし 〔頭〕上(ト)下一樣に、青摺を着たる中に、童女は、殊に優美に見えたりとなり。

小忌のきんだちは外にゐて、ものいひなどす。「五節の局を、日もくれぬほどに、みなこぼちすかして、いとあやしくてあらする、いとことやうなり。其の夜までは、なほうるはしくこそあらめ」とのたまはせて、さもまどはさず。几帳どものほころびゆひつゝ、こぼれ出でたり。小兵衞といふが、あかひものとけたるを「これをむすばゞや」といへば、實方(サネカタ)の中將よりてつくろふにたゞならず

(實方の歌也) あし引の山ゐの水はこほれるをいかなるひものとくるなるらん

所のこと、諸抄に解なし、今前よりの件を按ふに、宮の取りたて給ふ舞姫の侍女（カシヅキ）、十二人を選び給ふに、先づ我が仕ひ給ふ女房を十人、此の餘の二人は、女院の方より一人、淑景舎の御息所の方より一人、この二人は姉妹なれば、同樣に召し給ふとなり。此の噂を餘所にて評するは、宮の出だし給ふ舞妓なれば、侍女も、皆中宮の女房を出だすがよきに、女院・御息所（古本異本に「女御みやす所」と、あれど元は必ず女院とありけむを古くより寫し誤りたるならむ）の御方より取りまじへ召されん事、いかゞあるべきと、よからぬ事に評する由聞けど、宮は之を何とも覺さず、女院・淑景舎の人姉妹を、召されたりとなるべし。◎辰の日の夜　（補）春本抄本等、大かたの書には皆夜の字なし。千蔭・弘賢の二翁、古本により訂したるには夜の字を記入せり。げに卯ノ日の御覽は晝間にて、辰ノ日の節會は夜に入りての事なる上、辰ノ日の青摺とつゞく詞も心得がたし、此所の文意、夜の字ありて、いよ／＼明確になれり。◎青摺の唐衣云々　花鳥餘情云、舞妓の裝束丑ノ日は赤色の唐衣、寅ノ日は青色の唐衣、辰ノ日の青摺の唐衣、赤紐・日蔭蔓等也、青摺は小忌の事なり云々、（補）此の釋は、源氏など女の卷の註にて、舞妓の裝束をいへるなれば、春曙抄の此所に引かれたるは、中々に人惑はしなり。何とならば、本文の意は舞妓の裝束をいふにあらで、十二人の侍女童女にも、青摺を着せ給へるが、珍らしき由なればなり。其の着せ給へるやう、次にいふ所は、侍女等みな常の裝束したちたる夕暮の程に、后宮の方より、俄に青摺の唐衣・汗衫をもて來て、各々織物の唐衣等の上に、重ね着せ給へるを、小忌の公卿の服裝に似たれば、珍らしかり興じて、小忌の女房と戯れいへる由なり。是れ后宮の御意匠、人の意表に出でたる事を、淸女の誇りて書けるなり。然るに春本も抄本も、辰の日の青摺の唐衣（夜の字を落して）と書きつゞけ、剩さへ花鳥の說を出だしたる、辰ノ日は定まりて、侍女等まで

從ふ但し女院の誤ならむ

おほすにか」春本に「の字なし素本抄本に從ふ

辰の日の夜」千蔭本屋代本による

右の一段今の世の謂ゆる挿話なり

をばわろき事にぞするときくに、いかにおぼすにか。宮の女房を十人出ださせ給ふ。今ふたりは女院（ニヨウヰン）しげいしやの人、やがてはらからなりけり。辰の日の夜、青摺の唐衣（カラキヌ）、汗衫（カザミ）をきせ給へり。女房にだにかねてさしもしらせず、殿上人にはましていみじうかくして、みなさうぞくしたちて、くらうなりたるほどに、もて來てきす。赤紐いみじう結び下げて、いみじくやうしたる白ききぬに、かた木のかた繪にかきたる、おり物のからきぬのうへにきたるは、まことにめづらしき中に、わらははいますこしなまめきたり。下づかへまできて、たちいでゐるに、上達部殿上人おどろき興じて、をみの女ばうとつけたり。

此の段は上に五節のわらはのなまめかしき事なといへる序に中宮の五節出だせ給ひし事なかける也。◎宮の五節出ださせ　(審)后宮定子の御方より也。常には公卿・受領より出だす事なれども、又かやうの御方よりも、取りもち給ふ事にや。乙女ノ巻にも、源氏の五節出し給ひし事あり。◎かしづき十二人　(審)乙女ノ巻にもかしづきなどゝあり。抄にかいしやくの人ないふべし云々。江次第十、五節の所に、傅（カシヅキ）といへる是也。◎ことゝころには　[illegible]餘所にてはの意。以下「わろき事にぞする」までは、餘所の評なり。猶後にいふな見よ。◎御息所　[illegible]此所は東宮の妃な申す也。◎女院　(審)東三條院詮子也。一條院の母后、法興院攝政兼家公の御女云々、定子の伯母也。◎しげいさ　(審)三條院女御、中關白道隆公の御女云々。定子の御妹也。[illegible]淑景舍とはそのおはします曹司の名なり、東宮の御息所として、此の舍に住み給へばかく申す。さて此の

女御の二字古本異本に

小忌は役名なり。大忌といふもあり。それを勤むる人は、青摺を着る故に、上文にも青摺着たる女房といへり。青摺の事を、小忌衣といふは、後世の事にて誤れる名なり。直按ずるに、もとは小忌も大忌も、新嘗祭に奉仕するに付いて、齋戒する者の稱なり。其の中、卜定とて占ひにあたりて、直接神事に仕へ奉る公卿を小忌といひ、其の外間接の諸司を大忌といふ。大忌は大方に齋戒する者、小忌は嚴重に齋戒する者をいふにて、小忌の著る祭服なれば、小忌ノ衣といふ也 小忌衣を著る故に、小忌の公達といふとあるは、本末を顚倒せり。◎臨時の祭の舞人 (春)賀茂八幡などの臨時の祭に舞人あり。前に註す。◎五節のわらは (和)五節の舞姫といふを略して唯五節ともいふ也。五節のことは上(宮つかへの段)に精註せり。「わらは」を侍きの童女なる由、諸書に註せるは疑はし 侍きの童女とては、前の火取を持ち茵を持ちて、隨行する二人を定員として外になし。されば之をも侍きの童女とすれば、前のひとりの童の再出なり。いかでさる拙き事はあらむ。按ずるに此のわらはは舞姫のことなるべし。次の文、中宮の出だし給へる姫は十二にていとをかしげ也とあり。源氏少女の巻に、按察大納言の女と惟光の女とを、子々（コゞ）しううつくしげなると記し、外のを例の舞姫よりは皆少しおとなびとある所の、細流抄に、十二三なり。今年は年もたけたる也と註せるに見ても、舞姫の事を童女（ワラハ）ともいへるを察すべし。上に舞人の語あるに、又舞姫とかきては、詞の重なるにより、わらはと書きたるならずや。

八三 (五　節)

宮の五節出ださせ給ふに、かしづき十二人。こととところには女神御息所（ニヨウゴミヤスドコロ）の人出ださ

ると見えて、男子のかゝるは日蔭の蔓の如しとて、菖蒲草の細きを六筋、冠の巾子に廻して結び付け、心葉縒組等を添へ用ふる由、小野宮年中行事の裏書に記せれど、女官の鬘はいか様にせしものか未詳、おもふに釵子に添へて、寶髻に結びて飾りしなるべし。◎赤紐の色にはあらぬを 〔釋〕赤紐は、五節などの時紗をたゝみて、あはび結びにして、泥繪など書きて、右の肩に二筋つくる事あり。菖蒲の蔓は、其赤紐の色ならで、青きをいふなり。〔補〕抄本素本には、菖蒲の蔓の赤紐の云々と、何をつゞくれど解し難し。按ふに、色にはあらぬをの下、字句の脱せしならむ。黑川翁は、赤紐の色にはあらぬひれとつゞけて、をの字衍歟といはれつれど、いかゞあらん。◎ひれくんたい 〔釋〕領巾裙帶也云々〔補〕舊記に肩巾ともかきて、ひれと訓めり 領に襲ひ肩にかゝる巾ゆゑ、領巾とも肩巾とも書ける也。晴れの時女房の裝ふ具なり。太古は神に饌を供へ、また君にも仕う奉る時、襷と共に物せし實用の品なりけむを、此の頃は唯形式になりて、裝飾を兼ねたるならむ。錦・紗・羅などを細く帖みて、長きまゝを垂れ掛けたるなり 名義は古事記傳に、振手の約語といはれつれど、ひらめく狀より、ひれとは名づけけむ。裙帶は、後世裳の引腰といふ物と同じかるべし。是れらの委しき事は、委細裝束圖解に記せるを見たまへ。◎立ち並み給へるに奉る 〔補〕例の藥玉等を、立ち列みたる親王以下上達部に班ち渡す事を、奉るとはかける也。◎ひとりのわらは 〔釋〕五節の舞姫まゐる時、薰爐をもつ童女也。江次第十云、舞姫等次第ニ參入。先童女一人持二火取一、童女一人持レ茵 〔補〕薰爐は舞姫の衣などに、薰香する用に、もたする火入の香爐の事なり。◎小忌の君達 〔釋〕是れ豐明の節會に、小忌衣着したる君達也。河海云、小忌、靑摺、山藍摺也。花鳥云、十一月中ノ卯ノ日、新嘗會辰ノ日の豐明節會には、山あゐにて摺れる小忌といふ物を着する也。一代一度の大嘗會にもかくの如し。〔補〕濱臣云、

なうと有りしを、書きひがめたるなるべし。怒る氣色なくて　たゞ噴ひ付きたらむ。」といへるは中々にひがごとなり。春註をよしとす。其の故は、後の書ながら、加藤閑齋の隨筆「禰古万百話」にも、慶長元和の頃までは、江戸にも猫甚少かりしといへり。其の頃は、必ず猫に、碇綱といふものを付けて養(カヒ)たる由」とあり。是れ古風の名殘なるべし。又猫に札付くる事。美隆云、夫木抄雜九、御集花山院御製「敷島のやまとにはあらぬから猫を、君が爲にぞ求め出でたる」此歌は三條ノ大皇太后宮より、猫やあるとありしかば、人の許なりしが、をかしげなりしを取りて奉りしに、扇の折れを札に作りて、首につなぎて遊ばされし御歌と云々　◎あやめの藏人　［春］五月五日の節に、内侍女藏人續命縷(クスタマ)を群臣に賜ふと、花鳥餘情に在り。是れを菖蒲ノ藏人といふにや。［補］上に註したる如く、藥玉といふは、もと菖蒲・艾などを絲にて綴ぢ合せ丸く作りて、其の中に藥を入れたれば、藥玉とは名づけしなり、延喜左近衛府式に、凡五月五日藥玉料、菖蒲・艾(惣盛ニ一輿ニ)雜花十捧(盛レ瓫居レ臺)三日平日申ニ内侍司ニ列ニ設南殿前一と見え、恒例行事略に、五月五日、糸にて赤白の杜鵑・花井艾・菖蒲を作り、五色の絲をかけたる物なり。又絲にてあみたる橘の實あり。内に藥を入れらるといふ。昔は菖蒲・艾など、藥物を花にて飾り調へたる物ゆゑ、藥玉といふ　など書けるにて知るべく。專ら絲にて飾り絲所より獻ずる樣になりしは、やゝ後の事ならむ。又荊楚歳時記に、端午以下菖蒲生ニ山澗中ニ一寸九節ノ者上或縷或屑、泛レ酒以辟ニ瘟氣一などある如き功能あるものなれば、藥と共に群臣に賜はりたるにて、この藥玉を班賜する女官を、菖蒲藏人とも稱したる也。◎菖蒲のかつら　［補］延喜太政官式に、凡五月五日云々、是日内外群臣皆着ニ菖蒲鬘一とあり。公事根源にも、天平十九年五月より、詔ありて百官諸人悉く菖蒲の鬘をかくべし。かけざらむ者は、宮中に入るべからずと定めら

る。紋は窠に霰(アラレ)をつくる也。よのつねには表ノ袴を着ず云々、雅亮装束抄には、表ノ袴と下ノ袴と重ねてはくやうを委しく示し、類聚雑要抄には、表袴の長四尺五寸下袴長八尺と記せり。◎ほころびがちなる汗衫 〔補〕綻びがちは破れたる事にはあらず。汗衫の両脇の縫ひふたがであるをいふなり。さてこの條「汗衫ばかり」とあるにて、表の袴もはかず、下の小袖に赤き袴はきたるが、汗衫の脇の綻びたる間より見ゆるを、なまめかしき姿とは評したる也。◎かうらん 〔補〕上に度々出づ。勾欄が本にて、高欄ともかく。勾ならば假名こう、高ならばかう也。通例多くは高欄とかけば今強ひて改めず。欄干のこと。◎うすやうのさうし 〔補〕薄様は紙の名、鳥の子とて、薄くすきたる玉子色の紙。これにて綴ぢたる冊子も、上品に見ゆるをいふ。下の青き薄様も、此の紙を青く染めたるなり。◎ひげこ 〔補〕鬚籠。細くけづりたる竹にて組める籠。この籠を紺青金銀泥などにて物の形畫きなどしたるを、五葉ノ松の枝に結び付けたる也。籠の中には、果物など入れて、貴人に進らするなり。◎みへ重ねの扇 ◎河海抄云、檜扇の両方の上三重づつを、薄様にて包み、色々の絲にて綴ぢて、末をあはび結びにしたるなり。五重も同じ風情なり。◎わりご 〔補〕和名抄、樏。俗所謂破子とあり。檜ノ木の薄きを曲げて作り、中に隔ての板を挾めり。仍て破子といふ也。◎しろき組 〔補〕糸を組みたる紐をいふ。◎朽木形 〔春〕几帳の綺なり。〔補〕几帳にもあれど此所には壁代の模様なり。◎紐 〔補〕巾三寸ほどの絹に、蝶鳥抔かけり。委しくは調度圖解を見よ。◎檜皮屋 〔補〕檜の皮にて葺きたる屋。今も京都の御所、また神社などに遺れり。◎いかりのを 〔春〕猫の綱に碇をつけて、物にかけて猫を引きとゞめん爲にしたる也 其の緒を猫の食ひざれたるさま也。〔補〕濱臣説に碇の緒何とも心得がたし。いかり

あざやかにての下抄本には「ひもの風に吹なびかされつややかなるもいとをかし」とあり此の方よろしげ也

る、夏のきちやうのしたうちかけて、白きあや、ふたあゐ引きかさねて、手ならひしたる。うすやうのさうし、むらごの糸してをかしくとぢたる。柳のもえ出でたるに、青きうすやうにかきたる文つけたる。ひげこのをかしう染めたる、五えふの枝につけたる。みへがさね〔三重〕の扇。五重はあまり厚くなりて、もとなどにくげなり。よくしたるひわりご〔檜破子〕。しろき組〔クミ〕のほそき。あたらしくもなくていたくふりてもなき檜皮屋に、さうぶ〔菖蒲〕うるはしくふきわたしたる。あをやかなるみすの下より、朽木形のあざやかに、いとつやゝかにてかゝりたる。紐のふきなびかされたるもをかし。夏のもかうのあざやかなる、簾〔ス〕の外のこうらんのわたりに、いとをかしげなる猫の、赤き首綱に、白きふだつきて、いかりのをくひつきて、ひきありくもなまめいたり。五月〔サツキ〕のせちのあやめの藏人、さうぶのかづら赤紐の色にはあらぬを、ひれくたいなどして、くすだまを、みこたち上達部などのたちなみ給へるに、奉るも、いみじうなまめかし。とりて腰にひきつけて、舞踏し拜し給ふもいとをかし。ひとりのわらは小忌〔チミ〕の君だちもいとなまめかし。六位の青色〔六位藏人也〕のとのゐすがた。臨時の祭の舞人〔マユウド〕。五〔ゴ〕節〔セチ〕のわらはなまめかし。

○なまめかしきもの ㊀優美なる心也 ○うへのはかま ㊀女官飾抄云、童女に晴の時浮紋の表〔ウヘ〕ノ袴なき

内膳司より、中宮の膳司の方へ、移さるゝ作法をいふなり。◎一の人 〔補〕職原抄に、執柄家必蒙二一座之宣旨一、故稱二一ノ人又一所一とあり。◎春日詣 〔春〕藤原の祖神なれば必ず一ノ人の參詣あり。〔補〕藤氏の公卿美美しく出立ち、悉く隨行すれば也。㊀六位のとのゐすがた 〔補〕六位藏人の衣冠の裝をいふ。上ノ衣(袍)下襲に、指貫をはくにて。ここの紫といふは、指貫の色なり。特許を蒙りて着するを、禁色をゆるとはいふ也。委しくは拙著禁秘抄講義にいへるを見よ。㊁今上一の宮 〔春〕一條院の第一の皇子敦康親王の御事にや。御母后宮定子なれば、御叔父に内大臣伊周中納言隆家卿など上達部あり。〔抄〕敦康親王のいみじき御ありさまを、少納言内ずみの間に、見し事を記されたり云々。〔補〕是等の註ども頗る杜撰なり。敦康親王の御生誕は長保二年にて、伊周公隆家卿左遷の後、歸洛はせしかど禁中の出仕も難く、失意の地位にありし間なりき。いかで殿上人など召仕ひ、思ふ事なくはおはすべき。敦康親王のいみじき御有樣などいふも、事實にたがへり。其の事情は大鏡・榮花物語等を見て知るべし。されば此の條は、唯大らかに當今(タウキン)の幼帝、又は皇長子など抱き給ふ御叔父の上達部は、思ふ事おはせず得意ならむといへるなるべし。

八二（なまめかしきもの）

なまめかしきもの　ほそやかにきよげなる公達の直衣すがた。をかしげなる童女(ワラハメ)の、うへのはかまなどわざとにはあらで、ほころびがちなる汗衫ばかりきて、藥玉などながくつけて、かうらんのもとに扇さしかくしてゐたる。若き人のをかしげな

の師　(春)帝の御師範也。御侍讀とて候する也，◎願文　◎御祈禱・追善等にかく文なり。本朝文粹・菅家文草などに願文あまたあり。◎法師のざえある　(補)是れより法師等のめでたき事をいふ。ざえは學才。◎持經者　(補)僧中にて、常に專ら法華經を受持して讀む僧をいふ。平安朝時代には、經といへば打ちまかせて法華經の事なり。◎いづら云々　(補)いづらは、何處にぞといふに同じ。前にも翁丸いづらとありき。源氏榮花などにも例多し。皆問ひかくる詞なり。爰も御讀經の燈火は何處ぞ。早く持て來よ。遲し々々といへる詞なり。燈火を唯油とのみいふは、大殿油(オホトナブラ)の例にて知るべし。◎しのびやかに　(抄)小音に誦すると也。◎御うぶや　(補)皇后の御產屋なり　御祝儀の美々しさをいふ。◎宮始のさほう　(補)始めて中宮などに立ち給ふ時の儀式なり　◎ししこま犬　(補)春本抄本とも作法しくこまいぬと續けたるは非なり。夏陸云、異本しゝこまいぬとあり。按に雅亮裝束抄に、后立(キサキダチ)の調度たてしつらふ條に、御帳の前に獅子・狛犬など立つる事あり。卽ち此所にいふも、同じ時のしつらひなり、異本にしゝとあるぞよき云々。直云、獅子と狛犬となり。一角あるを狛犬とす。御帳臺の前左右に据うるは、元帷帳の風に吹き亂されざらむ爲に、鎭子の用をなすものなるが、一つには威儀を整ふる具ともして、帝后の御帳臺に限り、たゞ人には禁ぜらるゝなり。◎大床子　(補)高さ一尺三寸長さ四尺五寸弘さ二尺二寸の臺にて、之を二つさし合せ、其の上に疊をしきて御膳の時の御座とす。雅亮裝束抄に委し。◎內膳御へつひわたし　(春)百寮訓要云、內膳司天子の供御を奉行する所なり。たとへば膳部所など申す所同事なり。昔は內膳の御飯ならでは、主上はきこしめさぬ事なり。(補)へつひは竈なり。戸之火(ヘツヒ)の義といふ。凡禁中の諸臣は、大膳職にて調ずる物を食するに、后に立ち給へば、天子の供御と同じく、別に調進せらるゝ爲に、竈を新にし給ふなり。こゝもそれらの具を、

されどそれも春本抄本等になし宸翰本によりて補ふ

たがなかにて、時などさだまりたる御讀經などに、なほいとめでたきなり。くらうなりて「いづら、御どきやうあぶらおそし」などいひて、よみやみたるほど、しのびやかにつゞけゐたるよ。后(キサキ)のひるの行啓。御うぶや　宮はじめのさほう、しし、こまいぬ、大床子(ダイシヤウジ)などもてまゐりて、御帳の前にしつらひすゑ、内膳御へつひわたしたてまつりなどしたる、姫君など聞えしたゞ人とこそつゆ見えさせ給はね。一の人の御ありき。春日まうで。えびぞめのおりもの。すべて紫なるは、なにもなにもめでたくこそあれ。花もいともかみも。むらさきの花のなかには、かきつばたぞ、すこしにくき。(花の形を云也)されどそれも色はめでたし　六位のとのゐすがたのをかしきも、むらさきのゆゑなめり　ひろき庭に雪のふりしきたる。今上(キンジヤウ)一の宮まだわらはにておはしますが、御をぢの上達部(カンダチメ)などの、わかやかにきよげなるに、いだかれさせ給ひて、殿上人などめしつかひ、御馬ひかせて御覽じあそばせ給へる、思ふ事おはせじとおぼゆ。

〔評〕是れより又博士法師たちの、學才秀でたるは、めでたき由をいへるなり。◎博士　〔講〕博達の士の謂にて音便にハカセと稱す。もと官名なり。大學寮に明經博士・文章博士など稱して數員あり。經籍史文の學を敎ふ。◎下臈なれども　〔講〕官位ひくき也。文章博士は從五位下、明經博士は正六位下の相當なり。◎御書

うらやまし
く抄本によ
りて補ふ

はり　〔解〕春本には其の御給とあり。抄本には臨時の御給りとありて、臨時の除目などなりと註せり。曾て藏人たりし功勞を申して叙爵し、地方官などにも新任せられん事を、願ふ意なり。美隆云、後世に至りて、いよ／＼藏人の叙爵をいそぐ事、九條大相國伊通公の、二條院に進らせられたる大槐秘抄に云、おほよそ世の始の藏人は、御即位のさきに臨時に叙爵する事候はず。御即位の叙位に定りてする事に候。然るを今度始めて、御即位以前にかうぶり賜はりて候也。凡そ藏人の臨時に叙爵仕る事は、有り難かるべき事也。世會の諸大夫の、なほ年少にて藏人に補して候ふなどが、臨時の叙爵はし候ふを、近代は一日あまり成りぬれば、皆叙爵せんと思ひあひて候也　藏人の受領に任ぜし事は、六年侍中の勞に候。然るを近代一日を經て、巡爵に預り候の條本意にたがひ候にたり。（中略）今はいとあさましき人、多く藏人に補し候ひにたり。此の四五十年がさきまでは、成るべき者ならねば多く候ひき。なるまじき者の成りたるは候はざりき。云々　㊁今年の春より云々　〔解〕六位藏人の任限滿ちん年の春より也。㊂ほしりくらべ　〔解〕藏人おりたらば、早く他官を得んと、人々競望する由也。

はかせのざえあるはいとめでたしといふもおろかなり。顏もいとにくげに、げらうなれども、世にやんごとなき者におもはれ、かしこき御前にちかづきまゐり、さるべき事など問はせ給ふ御書（オンフミ）の師にてさぶらふは、うらやましくめでたくこそおぼゆれ。願文も、さるべきもの丶（詩けなど也）序などつくり出だしてほめらるゝもいとめでたし。法師のざえある、すべていふべきにあらず。持經者（ジキヤウシヤ）のひとりしてよむよりも、あま

羊の乳を煮て製せしもの。和名抄にあり。甘栗は平栗の實を甘く煮たるものといふ。江次第によれば、折櫃二合に蘇甘栗を盛りて高坏に据ゑ、藏人青色の袍を着て、對(タイ)の庇に於て進むべき歟といへり　西宮記によれば、蘇は壺四つに、平栗子は籠十六に盛る由見えたり。◎御むすめの女御后　〔補〕大臣家の御女にて、今は女御や后となり給へるが、未だ姫君の時。◎御文の御使　〔補〕大臣家の姫君に、入内すべき由叡旨の御消息をもちて、藏人の參るなり。◎しとねさし出づる袖口云々　〔補〕抄に茵をもて來る女房達の袖口也とあり勅使なるがゆゑに、敬ひて茵を參らするにて、さし出づるは簾の中よりさし出すなり。◎あけくれ見し云々　〔補〕大臣家の女房たちの、晴なる衣裳して待遇する樣は、旦夕見なれし人と異なりて、美々しきをいふなり。◎下がさねのしりひきちらし云々　〔補〕上にしば／＼出でたり。◎ゑふなるは　〔春〕藏人にて衞門兵衞など兼ねたるなり。〔補〕武官を兼ぬれば服裝も一層物々しく見ゆれば云ふ。◎いみじう畏まり云々　〔春〕日ごろ地下にてありし間、一所にも居ず、畏まりたる人々にも、藏人になりては、同じやうにつれありくとなり。◎家の子の君達　〔補〕大臣家の子息たちをいふ也。昨日までは同席をすらせざりしを、今日藏人となり、剩さへ勅使として來たれば、輕く會釋してありとなり　◎われ仕うまつり　〔補〕主上の團扇取らせ給へば、藏人忽ち其のうちは賜はりて、あふぎ奉るとなり。◎三とせ四年　〔補〕六位藏人の任期は、六年なれど、大凡にいへる也。◎物の色よろしうて　〔補〕よろしうとは、眞に宜しき事にあらず。大方なる意なり。衣裳のあしう染色の通例なる、並々の姿してあらむはかひなしと也。まじろふとは人に交はる事、卽ち禁中に勤めてある程をいふ。◎かうぶり得て云々　〔春〕六位ノ藏人巡爵とて、五位に叙して藏人をさりて、地下におるゝ事也。◎いのちよりはまさりて　〔春〕地下になりては、御前へ參る事もなくなれば也。◎臨時の御賜

そのに作る抄本かくあるに従ふ

御たまはりなどゝ申して、まどひけるこそくちをしけれ。昔の藏人は、ことしの春より[藏人おりん事をなげくも]こそなきたちけれ。今の世にははしりくらべをなんする[今はむかしのやうにはなきなど]

◎めでたきもの (釜)愛甚き意にいふが本にて、大かたの場合、今俗の「結構ナ」といふ詞にあたる。◎からにしき (釜)唐錦、蜀錦などなり ◎かざり太刀 (釜)延喜式彈正云、凡畫餝太刀五位以上聽レ之、桃華蘂葉云、餝劔、三節會內宴御禊行幸等王卿用レ之云々 (釜)カザタチとも略稱す、文官の正裝に佩用する品にて、金銀螺鈿等を裝飾したる太刀なり。打ち見るに美々しければ、結構なるものとはいへるなり。◎つくり佛のもく (釜)栴檀沈香等の木目なり。◎六位の藏人 (釜)藏人ならぬ六位の者は、昇殿をだにも許されねど、藏人は至尊に近つき奉り、又攝關大臣にも重々待遇せらるゝ事ある故、めでたき者ぞとて、是れより以下藏人のめでたき由をかけり。◎あや織物など云々 (釜)延喜彈正式に凡綾者聽レ用二五位已上ノ朝服一、六位已下不レ得二服用一とありて六位已下淺官の著禁制の品なれども、藏人は着用する事の特許あればいふなり。◎あを色姿 (釜)至尊の御袍は、麹塵と稱し、青色とも申すを、首席の六位藏人は、天皇の御し古した賜はる由にて著するなり。◎さふしき (釜)藏人所雜色也 禁秘抄云、本員八人、代々皆轉二藏人一仍公卿子孫又可レ然諸大夫多補レ之 職原抄云、良家子補レ之云々 ◎殿原の四位五位 (釜)藏人にならぬ間は、是等の官位の人の下座に居て、物の數とも見えざりしが、藏人になればめでたきと也。◎せんじ (釜)宣旨とは、天子の御せを藏人頭承りて、其旨を直に宣下するを、內侍宣とはいふ也。(釜)內侍宣の註変に要なし。唯六位藏人の宣旨もて參るを稱美する也。◎甘栗の使 (釜)大臣の大饗に、蘇甘栗の使とてあるに、六位藏人參る事なり。大臣大饗とは、大臣に任ぜられたる人、大納言以下辨少納言官外記史などまで、饗應せらるゝ事也。(釜)蘇は牛

御文の三字春本になし抄本によりて補ふ　いかにの三字し抄本に従ひて補ひつ家の子春本子の字なし是れも抄本また活本による」つれたちありくこれ亦抄本に

臨時の春本

君達(サンダチ)なれども、えしもき給はぬあや織物を、心にまかせてきたる。あをいろすがたなどいとめでたきなり　所(蔵人所衆也)のしう、ざふしきなど、たゞの人の子どもなどにて、殿原の四位五位六位も、つかさあるが下にうちゐて、何と見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましくめでたきや。宣旨などもてまゐり、大饗(ダイキャウ)の甘栗(アマグリ)の使などに參りたるを、もてなしきやうよう(饗應)し給ふさま、いづこなりしあまくだり人ならんとこそおぼゆれ。御むすめの(摂家大臣家の事也)、女御・后におはします、まだひめ君など聞ゆるに、御文の御使にてまゐりたるに、御文とりいるゝよりうちはじめ、しとねさし出づる袖ぐちなど、あけくれ見しものともおぼえず。下がさねのしり(裾也)ひきちらして、ゑふ(衛府)なるは、いますこしをかしう見ゆ。みづから(摂家などの)盃さしなどし給ふを、我が心にも(六位蔵人などにも也)いかにおぼゆらん。いみじうかしこまり、べち(別)にゐし家の子の君だちをも、けしきばかりこそかしこまりたれ。同じやうにうちつれたちありくよ。うへの近くつかはせ給ふさまなど見るは、ねたくさへこそおぼゆれ。御文かゝせ給へば、御すゞりの墨すり、御うちはなどまゐり給へば、われつかふまつるに、みとせ四年ばかりの程を、なりあしく、物の色よろしう(大かたなる心)てまじろはんは、いふかひなきものなり。かうぶりえておりんこと近くならんだに、いのちよりはまさりて惜しかるべき事を、臨時の

ふ註は、臆測も甚しからずや。按ふに、ほうしは法師にて、蓋を引き下げて歸り來たる下衆の風を形容して、何々の法師のやうにてとありけむ、此の上の數文字を書き落したるならんと覺ゆ。◎かう心にいれて、思ひける事を云々　〔春〕清少の、かほど用意したる事を、たがへ給ひて隱し果給はゞ、來世の罪やうべきと也。彼雪山のなくなりしは、后宮の取りすてさせ給ひしとかたりあらはし給ふ詞也。◎おきな出きて　〔春〕彼雪とり捨る時、木守が詫びたるよしを、侍共の申上たる事をかたらせ給ふ也。◎おほせ言ぞ、〔春〕后宮の御意にて、取捨つるぞと也。◎かのより來たらん人に　〔補〕清少の方よりくる人をさしていふ也。◎さらば屋うちこぼたせん　〔春〕此事を清少に告たらばこのついぢに廂したる家をこぼたせんぞ也　◎左近のつかさの南のついぢのとに　〔春〕左近の陣の南の築墻（ツイヂ）の外へ雪を捨てたるなり　◎ようせずは　〔補〕俗語のワルクスルトといふに同じ。但し抄本及び異本に、えうせずばとあり。此の方に從へば、よう失せずはの意となる。いづれにても聞ゆ。◎うへにもきこしめして　〔春〕一條院も此の清少の雪山をつよくいひし事を、きこしめしけると后宮のかたらせ給ふ也　◎おほくの人なめりと見つるを　〔春〕年比は大躰の人と思召けるを、此雪の日數をいひあてたるに、奇特におぼしめすと也。◎あいなし　◎愛なしにて、〔補〕今俗の詞にこれはいかぬといふによく當れり。既に上にもあるを合せ考へて悟るべし。

八一（めでたきもの）

めでたきもの。からにしき。かざりだち。つくり佛のもく。いろあひよく花ぶさながくさきたる藤の、松にかゝりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき

によりて補ふ

ようせずは　抄本。えうせずはとありいづれにても

まめやかに　の下春本うくの二字あり衍なるべし今抄本に従ふ

侍し　の下春本。かの字あり活本によりて削りつ

春曙本巻四終

多くなんありつるといふなりしかば、げに二十日まで もまちつけて、ようせずばことしの初雪にもふりそひなまし。うへにもきこしめして、いとおもひよりがたくあらがひたりと、殿上人などにも仰せられけり。さてもその歌をかたれ。今はかくいひあらはしつれば、おなじごと勝ちたり。かたれ」など、御まへ（后宮也）にものたまはせ、人々ものたまへど、「なにせんにか、（清少の詞也）さばかりのことをうけ給はりながら、けいし侍らん」など、まめやかに心うがれは、うへも（一條院も后宮へおはって也）わたらせたまひて、「まことに年ごろはおほくの人なめりと見つるを、これにぞあやしくおもひし」などおほせらるゝに、いとゞつらく、（清少の心也）うちもなきぬべきこゝちぞする。いであはれいみじき世の中ぞかし。のちにふりつみたりし雪を、うれしとおもひしを、それはあいなしとて、かき捨よなどおほせごと侍りしと申せば、げに（勅言也）かたせじとおぼしけるならんと、うへもわらはせおはします。

◎ぼうしのやうにて　㊍帽子にや。物のふたをいたゞきてかへりたるさまなるべし。㊎抄には綿帽子の様なりとあり。直按するに春註の、烏帽子の事とするは、當時の烏帽子の製を知らざるよりの妄言（ミダリゴト）なり。抄の綿帽子といへるは猶もあたらず。上に「ふたせてやりつる物（折櫃）を引き下げ」とあり。此處に亦「蓋（フタ）の限り引き下げて」とありて、頭にいたゞきたりとは見えざるに、帽子のやうに頭上にかぶりなどい

「てけり」春本になし抄本

ほどにてのこりしと也。〔通〕藁を編みて、圓く平たく作れる敷物なり。◎なりびつ 〔春〕折櫃也。なりうづ物とも云也 （）もたせてやりつる物 〔春〕彼なりびつなど引さげてかへりたる也。◎くんずれば 〔磐〕理屈にいひつめし心なるべし。〔通〕この註非なり。鬱屈して、力なげなる樣ないふ由上にもいへり。◎いとかしこしとなん云々 〔春〕十四日まで侍りしは、賢く申あてたると思ふと、まけず口に申す也。〔通〕これも非なり。かしこきに、恐ろしき事、畏敬する事、賢き事にもいふはさる事ながら、又別に俗語の丁度ヨイといふ意につかひ、物の適ひたるにもいへる事、當時の草子に多く見ゆ。こゝもそれ也。◎けいせさせ給へ 〔磐〕清少直には后宮に申さで、御取次の方へいひやる詞也。

さて二十日（后宮へ清少のまゐる也）にまゐりたるにも、まづ此の事を御前にてもいふ。皆きえつとて、ふたのかぎりひきさげて、もてきたりつる、ほうしのやうにて、すなはちまうできたりつるが、あさましかりし事、ものゝふたに小山うつくしう作りて、白き紙に歌いみじくかきて參らせんとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。おまへなる人々もわらふに、「かう心にいれて（后宮の御詞也）おもひける事を、たがへたれば、罪うらん。まことには、四日の夕さり（十四日の事也）、さぶらひどもやりて、とりすてさせしぞ。かへりごとに、いひあてたりしこそをかしかりしか。そのおきないできて、いみじう手をすりていひけれど、おほせ言（ゴト）ぞ。かのよりきたらん人にかうきかすな。さらば屋うちこぼたせんといひて、左近のつかさの南のついぢの外（ト）に、皆とりすててけり。いとたかくて、

かひなくなりぬ春本なりぬの三字なし今抄本による

などいひくゝめて取りたれば、いととく、もたせてやりつる物をひきさげて、はやう（下女の詞也）失せはべりにけり」といふに、いとあさまし。をかしうよみ出でて、人にも語りつたへさせんと、うめきずんじつる歌も、いとあさましくかひなくなりぬ。いかにし（清少詞）つるならん。きのふさばかりありけんものを、よのほどに消えぬらん事」といひくんずれば、「こもりが（取にゆきし下女の答也）申しつるは、きのふいとくらうなるまで侍りき。祿を給はらんと思ひつるものを、賜はらずなりぬる事と、手をうちて申し侍りつる」といひさわぐに、内より仰せごとありて、「さて雪はけふまでありつや」とのたまはせたれば、いとねたくくちをしけれど、「年のうち、ついたちまでだにあらじと、人々啓し給ひしに、きのふの夕ぐれまで侍りしを、いとかしこしとなんおもひ給ふる。けふまではあまりの事になん。夜のほどに、人のにくがりて、取りすて侍るにやとなん、おしはかり侍る」。とけいせさせ給へときこえさせつ。

◎里にても 〔 〕清少禁中を退出し、わが里亭に下りて後もなり。◎あくるすなはち 〔 〕明くれば即時に也。◎人のおきてゆくにやがて 〔春〕十四日の朝也。人のおき出たるにいひつけて下女をおこさする也。〔 〕否世間の人の早く起きて道を行く音に、清女の目さめて、やがて起き居て、侍女して下女をおこさする也。◎にくみはらたゝれては侍女に下女のにくまれ腹たたれて也。◎わらうたばかり 〔春〕圓座也。彼雪、えんざ

五日まつ　春本五六尺とあれと抄本千蔭校本に従ふ

二日の二字抄本によりて補ふ必す一日ふつかとあるべき文勢也

る丶者の事なり。良家の子息なれば、木守などの制止を聞かざる故かくいふ也。◎そのほどもこれがうしろめだきに　㊢清少禁中に七日まで侍ふほども、此雪の山の事心もとなかりしと也　◎おほやけ人　㊢禁中の奉公人也。◎すまし　㊓樋清(ヒスマシ)の略稱、樋殿(廁)の掃除など仕ふる下女なり。◎なさめ　㊓長女。下衆女等の取りしまりする長なり。◎七日の御節供のおろし　㊢正月七日七種の御粥をたてまつる事也。こゝは后宮の御膳のすべりを、なさめすましなどにもたせて木守が方へやる也。

里にてもあくるすなはち、これを大事にして見せにやる。十日のほどには、五日まつばかりありといへば、うれしくおもふに、十三日の夜、雨いみじくふれば、これにぞ消えぬらんと、いみじうくちをし。今ひとひ二日もまちつけでと、よるもおきゐてなげけば、きく人も、物狂ほしと笑ふ。人のおきてゆくに、やがておきいでて、げすおこさするに、さらにおきねば、にくみはらだゝれて、おきいでたるをやりて見すれば、「わらうだばかりになりて侍り。こもりいとかしこう、わらはべもよせでまもりて、あすあさてまでもさぶらひぬべし。祿給はらんと申す」といへば、いみ（清少の心也）じくうれしく、いつしかあすにならば、いととう歌よみて、物に入れてまゐらせんと思ふも、いと心もとなうわびしう、まだくらきに、（十五日のあさ也）おほきなるをりびつなどもたせて、「是れに白からん所、ひたものいれてもてこ。きたなげならんはかきすてて」

には「げすなどにこひてにくまろゝをくだ物云々」とあり千本には古本によりこひての三字を刪れり

果物やなにやと、いと多くとらせたれば、うちゑみて「いとやすきこと。たしかにまもり侍らん。わらはべなどぞ、のぼり侍らん」といへば、それ（清少のことは也）をせいしてきかざらんものは、ことのよしを申せ」などいひきかせて、いらせ給ひぬれば（后宮の入内也）、七日までさぶらひて出でぬ。其のほども、これがうしろめたきまゝに、おほやけ人（ヒト）、すましをさめなどして、たえずいましめにやり、七日の御節供（セク）のおろしなどをやりたれば、をがみつる事など、かへりては笑ひあへり。

◎雪の山は誠にこしのにや　(春)前にしら山の觀音、これ消やさせ給ふな。といひし首尾なり。彼本歌に、「消果る時しなければ越路なる白山の名に雪にぞありける」とよみしごとく、越路の雪やらむ消る氣もなしと也　㊂七日をただにすぐさじと　(春)清少とあらそふ人々のいふ也　㊂人もげにゆかしかりつる物などなど　(春)清少のみならず、人々も此雪山のはてゆかしかりし物なと也。◎御物のぐはこび　(春)入内の道具也。◎こもり　(春)木守とかくなり。御庭の木など守る人なるべし。㊂ついぢ　(書)築垗（ツイヒヂ）の義　土塀をいふ。これにささやかなる廂、さしかけたる番小屋なるべし。◎めでたきろく給はせん　(春)后宮の俸祿あらむと也。たばかりていへるにや。次に私にもとは清少の也。(補)此の註大に誤れり。祿とは絹布の類を賜ふこと。又私にもとは清少の謝禮せんと也。◎だいばん所　(書)臺盤所なり。㊂げすなどにこひて　(補)春本げすなどに乞ひて云々とある、解しがたし。千蔭校本「こひて」の三字なきいとよし　臺盤所の人の下衆に與ふる果物と也。◎らはべ　(補)これは殿上童（デンジヤウワラハ）といひて、攝關等の男兒の、十歳前後ほどなるを、禁中の雜事に召仕は

なのゝ歌　(春)山とよむは山にひゞく心也。山下とよみゆく水のと古今によみし詞也　山中ひゞきて斧の音かとて尋みれば、此祝杖をつく音ぞと也。(○)齋院には是れより　(春)中宮の御返事に、彼の使に下されずして、特別に此方より御使ありし也。(○)すはうなるは梅なめり　(春)赤く見ゆるは梅の衣也となり。桃華の御説に、梅ハ表裏蘇芳。十二月より正月に至る云々、

雪の山はまことにこしのにやあらんと見えて、きえげもなし。くろくなりて、見るかひもなきさまぞしたる。かちぬることゝちして、いかで十五日まちつけさせんとねんずれど、七日をだにえすぐさじと猶いへば、いかでこれ見はてんと、みな人思ふ程に、俄に三日うちへいらせ給ふ（后の御内也）べし。いみじうくちをしく、此の山のはてをしらずなりなん事と、まめやかに思ふほどに、人も「げにゆかしかりつるものを」などいふ。御まへにもおほせらる。おなじく（清少の心也）はいひあてゝ御らんぜさせんと、おもへるかひなければ、御物の具はこび、いみじうさわがしきにあはせて、こもりといふものゝ、ついぢのほどに廂さしてゐたるを、えんのもと近くよびよせて、「此の雪の山（清少の大事にいふ詞也）いみじくまもりて、わらはべなどにふみちらさせこぼたせで、十五日までさぶらはせ、よくよくまもりて、其の日にあたらば、めでたき祿給はせんとす。私にもいみじきよろこびいはん」などかたらひて、常にだいばん所のひと、げすなどにこひて、くるゝ

〔補〕綠色のことならむ。◎とのゐさぬ　〔補〕春抄の傍註に、直衣とあるは非なり。下衆の分は直垂のことをいふ。
◎さぶらひのをさ　〔春〕侍の長也。◎わなゝき出たり　〔春〕是奉らんなど、ふるひ〳〵いふさま也。寒げなる
さまなるべし。◎齋院より　〔春〕選子内親王也。村上天皇皇女。紹運錄云、號二大齋院一歷二五代一也。〔補〕賀茂神宮
に奉仕し給ふなり。この齋院の萬にいたり深く、心きゝて風雅にもおはせし事は、紫式部の日記・榮花物語・
大鏡などにも見えたり。さる御方より、年の始の雪に、ふりはへて御消息ありたるなれば、淸女が例の心に
は、ふとめでたく覺えん理りなり。◎もやにあたりたる　〔補〕四方を廂の間といひ、中央の室を母屋といふ。后
宮の御寢ある帳臺の、前の御格子なり。◎ごばんなどかきよせて云々　〔補〕碁盤をかきよせ、其のうへに上り
て、やう〳〵にして御格子をあげたるなり。春本等に、御格子おこなはんとあれど、格子を行ふといふこ
と古書に曾て見えたる事なし。其の上活本千本及び夏蔭の一本にて校ぜしにも、なの字なきをや。そもそ
も格子は鴨柄より釣り下げてあるを、かき上げて、廂の釣り金にかけおくものなる事、上にもしば〳〵い
へるが如し。さて格子を上下するは、殿司（トノモリヅカサ）の役なるを、齋宮よりの御文を、いち早く后宮に覽（ミ）せ參ら
せんのはやり心にて、淸女のかく碁盤に上りなどして、物したる事と心得べし。◎ひとりねんじて　〔春〕淸
女ひとりしては上げ難きをこらへ念じて上る也。〔補〕格子は、柱と柱と、一間にわたりてあれば、左右の隅
を一人つゞ二人してかき上ぐべきに、こゝは取りいそぎ、淸女一人して、上げたるなり。さればこそ片重（カタオモ）
りして、ぎし〳〵と音のしたるに、后宮の御目を覺し參らせたる也。◎げにいととかりけり　〔春〕淸少はい
かでかいそき侍らざらんといふゆゑに、まことに早きあけやうぞやとの給ふにや　◎うづち二つをうづゑ
の　〔春〕卯槌卯杖皆上に註す。◎たゞなるやうあらむやは　〔春〕只是ればかりにてはあらじと也　◎山とよむ

御格子なこばんは春本万本ともおこなはんとあれど今活本異本に從ひつ侑註にいふを見よ

見えたり。春本たるとあるを活本によりて改む

ぬ。まだおほとのごもりたれば、母屋にあたりたるみかうしを、こばんなどかきよせて、ひとりねんじてあぐるいとおもし。片つかたなればひしめくに、おどろかせ（后宮御目覺し也）給ひて、「などさはする」とのたまはすれば、齋院より御文の候はんには（清少へ也のこた也）、いかでかいそぎあげ侍らざらん」と申すに、げにいととかりけりとて（后宮の詞也）、おきさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌（ウヅチ）二つを、うづゑのさまにかしらつゝみなどして、山たちばな、ひかげ、山すげなどうつくしげにかざりて、御文はなし。たゞなるやうあらんやはとて御らんずれば、うづちのかしらつゝみたる、ちひさきかみに、

（齋院御歌）山とよむをのゝひゞきをたづぬればいはひのつゑのおとにぞありける

御返しかゝせ給ふほどもいとめでたし。齋院にはこれよりきこえさせ給ふ。御返しも猶心ことにかきけがし（書なほしなど〻給ふなるべし）、おほく御ようい見えたり。御つかひに、しろきおり物のひとへ、すはうなるは梅なめりかし。雪のふりしきたるに、かづきてまゐるもをかしう見ゆ。此のたびは御返事を、しらずなりにしこそくちをしかりしか。（后宮の御返歌を見ざりしと也）

是れより齋院より御使ありし物語也　◎うへにてつぼねへいとう　（春）后宮の御方にて清少の、局へ早朝におりしに也　（溯）上文、ついたちの日、雪おほくふりたるといふなうけて、その夜はうへぶし卽ち上局にとのゐして、曉方にわが下局へおりたる由なり。◎ゆのはの如き　（春）柚の葉のやうにうすき方なるべし

事もありしなるべし。されば此處は、趣味に富める風流なる方にいへるにてぞあるべき。さて春本にあざれたり。とあるは、古本どもの、あざれたる御簾の前と、つゞけたる方に從ふべし。⊜御簾の前　〔補〕女房たちのゐる前をいふ。當時女房たち、男にあふに皆御簾を隔てゝ、物語をもすれば、かゝる異名も出來たるなり。さて上よりのくだりを解かば、かゝる深き趣致ある女房たちの御前にては、愁なる返歌は仕りけがさじと也。句を打ち返して心得べし。⊜いみじくよくとぞ思ひつらん　〔春〕至りてよゝ返歌せん。さなくは一向すまじきと忠隆が思ひつらんと也　⊜いと心うき事の侍しかば　〔春〕彼のかたはの尼に衣とらせ給ふが心うさに、恨みて參らざりしと也。⊜あしもひかれず　〔春〕足もえひかぬほど物とらせ給ふといふに、尼が足ひく事をいふ也。〔補〕この註は上に「尼なるかたゐの」とあるを、「かたは」と誤れる本に泥みて、彼の尼を足萎（アシナエ）と思へるよりの臆說なり。彼の尼に物賜ふが恨めしさに、常陸ノ介の、御所に參るべき足の進まざる由を、足も引かれずとはいへる也。⊜わたつ海の　◎わたつ海は漁人（アマ）の枕詞、あまは、あま人の略語、海にて漁りする男女に通じていへるを、尼にかけたる也。⊜かくなんといひやり　〔春〕かやう〳〵にて目も見いれず、常陸介をいなせたると也　◎など人そへてこゝには云々　〔春〕其ひたちの介に人そへて右近がもとへもおこせ給はかれしとの心也　⊜あいなし　〔補〕もとは愛なしの意にて、よからず思ふ事より轉じて、理（ワリ）なき事にも成れるなり。此の條も俗語に「これはよくない」といふに同じからむ。

うへにてつぼねへいととうおるれば、（齊院の御使也）さぶらひのをさなるもの、ゆのはのごとくなるとのゐぎぬの袖のうへに、あをき紙（文也）の松につけたるをおきて、わなゝき出でたり。「そはいづこのぞ」ととへば、「齋院より」といふに、（清少の心也）ふとめでたくおぼえて、とりて參り

ひけんこそ、いとかなしけれ」。とあるを又わらふ。さてゆきの山はつれなくて年もかへりぬ。ついたちの日、又雪おほくふりたるを、うれしくもふりつみたるかなと思ふに、「これ(后宮の御事也)はあいなし。はじめのをばおきて、今のをばかきすてよ」と仰せらる。

ⓒしら山のくはんおん 〔春〕加賀の白山はいつも雪消ぬ所なれば念じたるにや。古今「消果る時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける」ⓒ式部のぞうたゞたか 〔春〕前の翁丸なうちたる藏人忠隆同人なるべし。寛弘元年正月式部丞に任する由勘物にあり。ⓒ御前のつぼにも 〔浦〕清涼殿前の庭にや。坪とは中庭の平地をいふ。ⓒ春宮 〔春〕三條院。冷泉院第二皇子。寛和二年七月十六日春宮に立せ給へり ◎弘徽殿 〔春〕義子也。榮花物語系圖云。義子一條院弘徽殿女御。閑院太政大臣公季公女 ◎京極殿 〔春〕道長公なるべし。拾芥云。京極殿、土御門南京極西、南北二町其南一町被ㇾ入二道長家一 ◎こゝにのみ云々 〔春〕此后宮の御方にのみと思ひしに、さやうにあまた所にもふれわたりしよとの心を、雪のふるにそへたる歌也 〔浦〕ふりたるは觸れたる事にあらず。舊りたる意なり。我が方にのみ雪山作りて、珍らしと思ひ居たるに、所々に作らせ給へりといへば、珍らしからず、舊り(フ)脈(イヤ)はしくなりけるよとの意を、雪のふりたるにかけていへるなり。◎あされたる云々 〔雅〕あされは、源氏物語、帚木・初音等に見ゆる用例をすぐりて、雅言集覽に引けるを見るに、いづれも戯る(タハ)ゝこと。それより轉じては、面白く興味ある事、趣味卽ち風流なる事にもいへりと見えたり。鈴木朖の雅語譯解あざれの條に、ザレル。シャレル。又ざれの條に、あざるのあを省きたることば也。シャレテ」とある如く、あざれは戯(ナ)れの方にも、趣致ある方にも通用し、又あを省きて、されといふ

あされたる。春抄たりとあれど古本あされたる御簾の前とあるに従ふ

に、けふの雪山つくらせ給はぬ所なんなき。御前のつぼにもつくらせ給へり　春宮、「弘徽殿にもつくらせ給へり。京極殿にもつくらせ給へり」などいへば、

こゝにのみめづらしとみる雪の山ところ〳〵にふりにけるかな

とかたはらなる人していはすれば、たび〳〵かたぶきて、返しはえつかうまつりけがさじ。あされたるみすのまへにて、人々にをかたり侍らん」とてたちにき。歌はいみじくこのむときゝしに、あやし。御前にきこしめして「いみじくよくとぞおもひつらん」とぞのたまはする。つごもりがたに少しちひさくなるやうなれど、なほいとたかくてあるに、ひるつかた縁に人々出でゐなどしたるに、ひたちの介出できたり。「などいと久しく見えざりつる」といへば、「なにか。いと心うき事の侍りしかば」といふに、「いかに何事ぞ」と問ふに、「猶かくおもひ侍りしなり」とて、ながやかによみいづ。

うらやましあしもひかれずわたつうみのいかなるあまにものたまふらん

となん思ひ侍りし」といふを、にくみわらひて、人のめも見いれねば、雪の山にのぼりかゝづらひありきて、いぬるのちに、右近の内侍にかくなんといひやりたれば、「などか人そへてこゝには給はせざりし。かれがはしたなくて、雪の山までかゝづら

りゐる心也。〔補〕袍きたる人は、宮づかさたちなり。◎かり衣にて〔拾〕うへの衣きたるにより、その人々には、狩衣などかづけなどし給ふと云義也。とあるは心ゆかず。今例の僻案を云ひ試みんに、先づうへの衣（キヌ）は束帯の袍なり。其の袍きたる人々も、今雪山の事にかゝづらふとて、狩衣に着かへたるは、所ノ衆其の他の退出せし後も、雪山の片邊に狩衣のまゝにて居りとの義なるべし。◎これいつまでか〔補〕此の雪の山いつ迄消えずあらむと、問はせ給へば、十日あまりはと、候ふ限りの男女答へ奉りたるを、「ある限り申せば」とかけるなり。◎この頃のほどを〔春〕いづれも十日餘のあとさきを答へ申す也。◎げにえしもさは〔補〕ある限りの男女皆、下旬迄もあらじといひたるを、清女の、げに正月中旬まではあらじものを、さらば上旬までとも申すべかりしに、む月十五日とは、我ながらあまり遠き程を答へ申したりと、後悔の心なり。つごもりは月籠りの義にて、もとは月の下旬、ついたちは月立の義にて、上旬をおほらかにいへる詞なりしを、下旬の極は晦日、上旬の始は朔日なれば、打ちまかせて晦日をつごもり、朔日をついたちとはいへるなり。されど此の所は、もとの義にとりて、下旬上旬と見るべし。◎下には思へど云々〔補〕下とは心底をいふ。内々は心中に後悔すれど、さもあらばあれ（俗語にヱ、まゝよ）さまでなくとも、一度いひ出しゝ事なれば、あとへはひかじと思ひ定めて、堅く爭ひつとなり。

二十日のほどに雨などふれどきゆべくもなし。たけぞすこしおとりもてゆく。しらやまのくわんおん、これきやさせ給ふなと祈るも物ぐるほし。さてその山つくりたる日、式部のぞうたゞたか、御使にてまゐりたれば、しとねさし出だし、物などいふ

人々の下春本に。の字なし古本によりて補ふ

「えしもさは」。古本活本にやはとある中々に非也。なくとも。春本にもの字なし抄本による

かたへさらでかゝりぎぬにてぞある「これいつまでありなん」（后宮の人々に問也）と、人々にのたまはするに、十餘日（トヲカアマリ）はありなんと、たゞ此のごろのほどを、あるかぎり申せば、いかにと（清少に后宮の問給）とはせ（ふ也）給へば、「むつ月の十五日までさぶらひなん」と申すを、御前（后宮也）にもえさはあらじとおぼすめり。女房などはすべて、「年の内、つごもりまでもあらじ」とのみ申すに、あまり（清少の心也）とほくも申してけるかな。げにえしもさはあらざらん。ついたちなどぞ申すべかりけると、下にはおもへど、さばれさまでなくとも、いひそめてん事はとて、かたうあらがひつ。

これより雪山作らせ給ふ由をいふなり。◎仰せことにて云々 〔春〕后宮の命にて作らせ給ふなるぞ。私事にて申すにはあらずとの意なり。◎殿もりつかさ 〔春〕主殿寮といふ役所。人とは寮の下司をいふ ◎御きよめ 〔春〕拾遺「とのもりのとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝清めすな」〔春〕御庭の朝掃除也。◎宮つかさなど 〔春〕皇后宮職の大夫、亮、大進、少進、屬など皆宮つかさといふ也 ◎所のしう 〔春〕藏人所ノ衆とて廿人あり 六位の侍可ㇾ然輩補ㇾ之と職原抄にあり。◎ことくはへ 〔春〕言加へ也 傍より助言などして、特別見事に作らしめたる也。◎おなじからずとゞめん 〔春〕雪山作りたる人とは同じからず。祿などとゞめてつかはすまじきと也。◎こしにさして皆まかでぬ 〔春〕卷絹なれば腰にさす也。源氏物語にこしざしとある是なり。◎うへのきぬなどきたるは云々 〔春〕祿給りて人々退出して後、袍たる人の、かつ殘り居たるは、狩衣に着かへて侍ふなるべし。かたへさらでとは、源氏物語に、かたへはのこりてとあるたぐひ也。少し殘

おほせごとにてと春本との字なし。抄本異本によりて補ふ

染、知音などいはんが如し。◎かたゐ 補流布本「かたは」とあるはよろしからず、狩谷望之云、かたゐは傍居の義、路傍に坐して物を行人に乞ふ者なればしかいふ也。和名抄に乞索兒、加多井とあり云々、◎あて 補うはて（上人）の約まりたる詞といふ説あり。上品なる事にいふ ◎其の後いと久しく 春常陸のすけの、かたゐの尼に物かづけさせ給ふを見て、ふすべ心にて久しくまゐらざるなるべし。をこがましき事をいはんとて也。

さてしはすの十餘日のほどに、雪いとたかうふりたるを、女房どもなどして、ものの蓋にいれつゝ、いと多くおくを、同じくは庭にまことの山をつくらせ侍らんとて、さぶらひ召して、「おほせごとにて」といへば、あつまりてつくるに、殿もりづかさの人にて、御きよめに參りたるなども、皆よりていと高くつくりなす。宮づかさなど參りあつまりて、ことくはへことにつくれば、所のしう三四人まゐりたる、とのもづかさの人も二十人ばかりになりにけり。里なるさぶらひめしにつかはしなどす、けふ此の山つくる人には祿給はすべし。雪山にまゐらざらん人には、おなじからずとゞめんなどいへば、聞き付けたるはまどひまゐるもあり。里とほきはえつげやらず。作りはてつれば、みやづかさめして、きぬ二ゆひとらせて、緣になげ出でたるを、一つ宛とりによりて、をがみつゝ腰にさして皆まかでぬ。うへのきぬなどきたるは、

義なり。そも〳〵この尼を、いかなる者とかする。若き時は遊女くゞつの類ひにや、事に馴れ人に臆せず、利口興言するさまいとあさまし。清女の例のすさびに戯弄しかけたるを、尼もさるもの、口疾く云ひかはして、さしもの清女に口あかすべくもなく、應答うちしたるいとをかし。さればこそ後に若き人々も出て來て夫やある 歌ふや、舞ふやなどと戯れたれ。尋常の尼にてはなきに心を留むべし。(一)男やある 〔考〕男ヲトコと訓むべし 元は若き男子をいふ稱なるを、當時のならひ、一般の男子を廣くいひてはヲノコと稱し、夫をヲトコといへり。和名抄に夫、乎宇度、一云乎度古とあり。又男子の和名を乎能古とかけるに注意すべし (二)をかしきことそへごと 〔考〕かたはらいたき事、又聞はすがたりに、語りそへなどするとなり。(三)などかくかたはらいたき事は云々 〔考〕何とてかやうのうたをうたはせしぞと也 后宮の仰せごとなり。〔考〕この末とくやりてよと仰せらるれば云々には、万抄本によりて改めしなり。春曙本には仰せ事あればとりてそれ給はらするぞとあり。(三)かたに打ち掛けて舞ふものか、〔考〕このかは感動の詞なり。下にサテサテなどいふ詞を添へて心得べし、彼の尼の、あそび女くゞつなどの、酒宴の席にて、被け物たまはりて、肩にうちかけ舞蹈するやうにせしを、清女も驚き呆れて發せし聲なり。(三)見えしらがひて 〔考〕源氏物語總角、竹川などに、見えしらがひ、今昔物語十九に、歐シラガフ。同廿八に追ヒシラガフ。などある詞を通じて考ふるに、見えちらす、食ひちらす、追ひちらすとも譯せば當るやうなり。故意に人の目にちらつく樣に見せあるく也 (三)小兵衞といふ人 〔考〕后宮の御かたの若き女房也。(一)あれいかで見侍らん 〔考〕かれをいかで見候はんと也 (一)御とくいなゝりさらによもかたらひとらじ 〔考〕其尼は、后宮の御得意成けり 此方に見せさせ給ふとも、此方へはかたらひとり侍らじと、内侍のざれていへる詞也 〔考〕得意は、今の劇に馴

ゐの尼の來たりて、雪山にかゝづらひし事とを絢(ナ)へ交ぜにかきたるなり、◎不斷の御讀經　〔補〕源氏物語夕霧の卷に、松の響木深くなどして、不斷の經よむ、時(ジ)かはりて鉦うちならすに、立つ聲も居代はるも、一つにあひていと尊く聞ゆ。とあり。湖月抄の師說に、十二時を番々かはりて行ひて、立つ人と又番にかはりてゐる僧とのさまなり」と見ゆ。されば始め幾日と日を定めて其の間一時每の交替にて、斷えず讀經する事と聞ゆ。春註不斷にといへる、常にいふ事と聞えてまぎらはし。◎猶その佛供の　〔春〕はじめより物をこひたるが、法師などのしばしまてといへど、猶佛供のおろしを給はらんといふ也　◎いかでまだきには　〔補〕佛供を取りおろして施すには、また早きにとなり。◎かりばかま　〔補〕中古は狩獵遠行などに着用せし狩衣の下に着る袴を、狩袴となづけしを、貴人は絹綾の類にて製し、之を指貫(サシヌキ)と稱し、大かた常に着用せし也。指貫と下衆のはく狩袴との別は、八幅の綾織物にて縫ひたるを指貫とし、六幅に縫ひて、白地の布に限るものを狩袴とはいへり。されはこゝにも、藺のやうに細きとはいへる也。◎さるさま　〔補〕春本さるのさまとあり。猿のやうに也と註せるは笑ふべし。抄本千蔭本の文字なきよろし。尼法師らしき、左樣なるさまにてとの意なり。◎佛の御弟子に云々　〔春〕彼老尼の乞食のみづからいふ也。比丘•比丘尼•優婆塞•優婆夷を四部の弟子といふ也。◎御坊　〔補〕僧侶の敬稱也。◎うちくんじたる。〔春〕屈の字也。〔補〕鬱屈して元氣なきさまをいふなり。◎それが候はねばこそとり申侍れ　〔春〕こと食物(クヒモノ)なき故、佛供をたべとは機嫌をとり申上たれと也。〔補〕機嫌をとり申といへるは非なり。宇治拾遺物語、利仁將軍芋粥の饗の條に、「そのかみは、大饗はてゝ、とりばみといふ者を、拂ひて入れずして、大饗のおろし米とて、給仕したる恪勤の者共の食ひけるなり云々」とある、とりばみは物を請ひ取りて喰ふ者。乞食のことにて、とり申すは乞ひ取る

おほせらるれは抄本によれる

かたゐ春本にはかたはとあり異本千本に従ひつ

（后宮のきこしめして也）きかせ給ひて「いみじうなどかくかたはらいたき事はせさせつる。えこそきかで、み〻をふたぎてありつれ　そのきぬひとつとらせて、とくやりてよ」とおほせらるれば、とりて、「これ給はらするぞ。きぬすゝけたり。白くてきよ」とて投げとらせたれば、ふしをがみて、肩にうちかけてまふものか。誠ににくゝてみな入りにし後にはならひたるにや　つねに見えしらがひてありく。やがて常陸ノ介とつけたり。きぬもしろめず、おなじすゝけにてあれば、いづちやりにけんなどにくむに、右近の内侍のまゐりたるに、かゝるものなんかたらひつけて置きためる。かうしてつねにくることゝ、有りしやうなど、小兵衛（后の官女）といふ人して、まねばせてきかせ給へば、（右近内侍がことばぞ）あれいかで見侍らん。かならず見せさせ給へ。御とくいなゝり。更によもかたらひとらじ」など笑ふ。其の後、又あまなるかたゐの、いとあてやかなるが出できたるを、またよび出でてものなどとふに、これはいとはづかしげにおもひてあはれなれば、きぬ一つ給はせたるを、ふしをがむはされどよし。さてうちなきよろこびて出でぬるを、はや此の常陸ノ介いきあひて見てけり。其の後いと久しく見えねど、誰れかは思ひ出でん。

【評】この一段は、職の御曹司に住み給ひし頃、雪ふりたるた、庭上に雪山作らせて御賞翫ありし事と、かた

あるよろしきぬきて千本による

さるさまにて春本さるのとあるわろし今抄本等にの文字なきに従ふ

よるは異本にまろはとあり

いらふるを、何のいふにかあらんとたち出でて見れば、老いたる女のほうし（法師）の、いみじくすゝけたるきぬきて、狩袴の、筒とかやのやうにほそくみじかきを、おびより下五寸ばかりなる、ころもとかやいふべからん。おなじやうにすゝけたるをきて、さるさまにていふなりけり「（清少の詞也）あれはなに事いふぞ」といへば、（乞食の答ふるさま也）こゑひきつくろひて、「佛の御弟子（ミデシ）にさふらへば、ほとけの御おろしたべと申すを、此の御坊（ゴバウ）たちの惜しみ給ふ」といふ。はなやかにみやびかなり。かゝる者は、うちくんじたるこそあはれなれ。うたてもはなやかなるかなとて、（清少の詞）こと物はくはで、佛の御おろしをのみくふか。いとたふとき事かなといふけしきを見て、（尼が詞）などかこと物もたべざらん。それがさぶらはねばこそ、とり申し侍れといへば、くだものひろきもちひなどを、ものにとりいれてとらせたるに、むげに中よくなりて、よろづの事をかたる。わかき人々いできて、男（ヲトコ）やある。いづこにかすむなど口々にとふに、をかしき事、そへごとなどすれば、「うたはうたふや。舞などするか」と問ひもはてぬに、「（尼がうたふ也）よるはたれとねん。ひたちのすけとねん。ねたるはだもよし。これがすゑいとおほかり。又「をとこ山の峯のもみぢ葉さぞ名はたつ〳〵」とかしらをまろがしふる。いみじくにくければ、わらひにくみて、「いね〳〵」といふもをかし。これに何とらせんといふを、

法師、抄本には法師どもとあり佛具、抄本に御佛具と

の事也　〔補〕此の註ども二つながら宜しからず、先づ始の方は、后宮より折りかへしての御文に、「清女よ其の方も愛でたく思ふ樣子に見ゆるなり。然るに誰れが讒訴して、汝の面目なきやうの事を啓したるぞ。さやうの事なし」と仰せられたるなり。「いかでか。けいし（啓）」とありしを「いかで。かけは。」と讀みたがへたるよりの誤なり。なほ又古本に「いみじく思ふべかめるなかたゞ」とあるにてよく聞えたり。岩崎氏も、「いみじく思ふべかめる仲忠が面伏なる事なば云々」とありつるを、寫しひがめたるなるべしといへるは古本に暗合せり。さてここの仲忠とは、清女の親しき人の事にあてゝ、のたまひしにや。そも〳〵此の一段は、清女の里下りの後、后宮に讒訴せし者のありしを、清女のほのきゝて、自然參り難くなりけるを、例の賢明なる后宮の、寛き御心厚き御惠に、宇津保の歌の詞などにて仰せごとありて、唯今宵のうちに萬の感情を捨てゝ參れ。參らずは惡むぞと、わざと戲れて、御文にかゝしめて下されたる事と思はる。よく〳〵心得おきて見るべし。◎よろしからんにてだに　〔評〕大かたににくませ給はんとあるにてだに、ゆゝしくいまはしきに、ましていみじくにくませ給はんとある詞をきゝてはと也。

八十（雪の山）

職のみざうしにおはしますころ、西のひさしに、不斷（フダン）の御讀經（ミドキヤウ）あるに、佛などかけ奉り、法師のゐたるこそさらなることなれ。二日ばかりありてえんのもとに、あやしき（乞食也）もの丶こゑにて、「猶その佛供（ブツク）のおろし侍りなん」といへば、（法師の詞）「いかでまだきには」と

事を、ふり付けるなどいふ俗語もたま〳〵古言の遺れるにて、こゝは何故左様に宮中を厭ふぞと解すべし。◎かしこまり (春)春抄の傍註に、里住して宮仕を怠る恐れを申也とあるは、少したがへり。御文賜はせて召されたるを、恐れ多き事の由、御返事に申したるなり。◎わたくしには (春)后宮さへ思召出す朝朗(アサボラケ)を、清少が私には、いかでめで侍らざらんと也。(補)美隆云、春抄わたくしといふ意を、心得たがへられたり。こは表向の御返事には、唯畏り奉る由をのみ、うるはしうかきて、さて又私ざまにては、別にかく書きて奉りしといふ也。中なるをとめ云々などいへる、少し戯れたる詞なれば、おほやけざまにては、なめげなるやうにもあればと、心しらひしてかける也。直云、皇后の御意を傳へし、御傍の女房への私信には也。◎中なるをとめ (補)是れは宇津保物語吹上に、源涼の「朝ぼらけほのかに見ればあかぬ哉なかなる少女いかでとめなむ」とうたひし詞によりてかける由、濱臣も美隆も心付きていへるが如し。此のあたり大體の意は、后宮よりの御文に「曾て左衛門の陣に行きし朝ぼらけの事を思へば、今も清女のいたく愛づべき事と思ふに、何とて之を嫌ひて、參らぬならむ」と仰せ下されたれば、御返事を御許なる女房に申し遣はすには、「其の時の事を思へば、いかで愛でたしと思ひ侍らざらむ。宮の御前にも、何はありとも、飽かぬかな(中なるをとめ)とは思し召すらむと存じ奉る」と申し上げたりとなり。諸註誤解して、初學の人惑ひぬべければ、くど〳〵しくも釋き試みつ。中なるをとめとは、「飽かぬ」といふ隱語につかひたるなり。いかでとめなむといふ意にいへるにはあらず 混ふべからず。◎たがおもてぶせなる (春)參り難き程の面目なき事を誰何にかけてはいひしぞと也。◎いみじくおもふべかめるなり (春)清少の里居を誠によろしからず思召と也 かの清少の畏りの由を申せしに答へ給ふ詞也。にくゝ思召にはあらで清少を召よせんとて

おもふべかめるなりたが千蔭翁の古本によりて訂正したるにはおもふべかめるなかたゞがとあり註にいへるを見よ

けいしたる春本にはかけはしたるとあれど抄本古本によりて改めつ

ごとのはしに、「さゑもんのぢんへいきしあさぼらけなん、つねにおぼしいでらるゝ。いかでさつれなくうちふりてありしならん。いみじくめでたからんとこそ思ひたりしか」など仰せられたる御返事に、かしこまりのよし申して、わたくしには、「いかでかめでたしと思ひ侍らざらん。御前にも、さりとも中なるをとめとはおぼしめし御らんじけんとなん、おもひ給へし」と聞えさせたれば、たち返り「（后宮よりの御詞也）いみじくおもふべかめるなり。たがおもてぶせなる事をば、いかでか、けいしたるぞ。たゞ今宵（コヨヒ）のうちに、よろづの事をすてゝ参れ。さらずはいみじくにくませ給はんとなん、仰せごとある」とあれば、よろしからんにてだにゆゝし。ましていみじくとあるもじには、命（イノチ）もさながらすててなんとてまゐりにき。

◎さてその左衛門の陣に　（金）前の有がたき物といふ奥に、「有明のいみじう霧渡りたる庭などにおりてありくを、（中略）左衛門の陣にまかりて見んとてゆけば」とあり。その所を今いひ出て、其後清少の里へいでし事をいふなるべし　（補）此の説の如く、彼所につゞく文なるを、錯りて此所に入りしならむ。◎さゑものぢん　（補）左衛門とかきて「サヱモ」と稱ふる例なり。こを讀みくせ又名目ともいふ。◎うちふりて　（補）春抄の傍註に、ふり捨て里住はするぞと也。とあれど、岩崎氏は、此のうちふりは、後選集冬部に「もみぢ葉はなしき錦と見えしかど時雨と共にふりてこそ來れ」とあるふりに同じといへり。降（フ）に舊（フル）しなかけたるなり。按ふに、元は舊（フリ）する意より出でたる詞なれど、轉じては厭（イト）ふ事をふるといひ、怒りて人に物言はぬ

まゆぬくも　春本もの字なし異本によりて補ふ

くだにつゆけきにこそひの森を思ひやらなむ」こゝも兄弟の方にとりてよめり云々。是れらの說にて盡さたれど、善學士のかける高陽院行幸歌合序には、上東門院と賴通關白とを、明かにいもせの御中らひとかけり。美隆又云、くづれするとある本よろし。長能集「ぬれ〳〵も明けばまづ見ん宮城野のもと原の萩はしをれしぬらむ」とあると同格なり。なほ此の格多し。◎かうぶりえて　補六位の藏人の任期終りて、其の勞に五位の叙爵を得るをいふ。◎にくゝて云々　補迭に仲あしき儘ならでやみたりと也。

七八（物のあはれしらせ顏なるもの）

ものゝあはれ知らせがほなるもの。はなたるまもなくかみてものいふこゑ。まゆぬくも。

◎物のあはれ云々　補悲しげなる顏するをいふ。◎はなたるまもなくかみて　補鼻うちかみて物いへば、泣きごゑに聞ゆるによりていふ也。眉毛ぬく時も、痛き顏すればこゝに出だせる也。眉毛ぬくは何の爲ぞといふに、昔は眉ぬきて、更に油烟墨もて眉を畫きたるなり。後の書ながら建内記永享三年十二月の條に、予女九才有二祝着事一、齒久呂美（ハグロメ）三筆、付二初之一、眉毛ヌク事、母是チヌク、次三獻とあり。近世は此の眉毛ぬきし儘にて、更に眉畫（カ）かむともせざるは、ぶさたなる事なりと、石原正明もいへり。

七九（なかなるをとめ）

さてその左衞門の陣にいきてのち、里に出でてしばしあるに、とく參れなどおほせ

我もしらぬさまして、そゞろなる所へ中將なつれありきしと也　◎そゞろなる云々　〔細〕上にもいへる如、、不覺などかく、案外の意。こゝにては思ひもつかぬことないふ。◎まめやかにさいなむにいとからし　〔孟〕中將の直質に我なせめうらみ給ひて迷惑と也。◎人のもとにさる物つゝみて　〔孟〕只に心もなくて、和布なやる物かはと也　只にはさやうの物な、人にやる事はなき事なれば、取たがへんやうもなき物なとの心也。◎かづきするあまの　〔孟〕海士のすなどりするなかづきと云也　歌の心は、かの和布なつかはせしは、我が在所なそこと、ゆめ〳〵いふなとの、目くばせならんと也。〔補〕かづくは水な被く義なり　漁りする事にはあらず。泳くことにいふ。◎あふさかへして　〔孟〕彼の歌かきし紙な、清少の方へあふさかへしてにげたる也。◎びんなき事侍りとも　〔孟〕たとひ便なくうらめしと、おぼす事有ともと也　〔補〕うらめしとまでは過ぎたり。俗にいふ不都合のことありともの意。〔抄〕に少々の屆かぬと思召す事ありとも、久々の因みな空しうしたまふなとなり。」とあるよろし。◎いまはかぎりありてたえなんとおもはん時　〔孟〕今は限りとかぎる心有て、中絶えんと思ひ給はゞ歌よみ給へと也　◎くづれするいもせの歌　〔孟〕彼則光が文に、よそにてもさぞなどは見給へといふなうけて、妹背の中もやう〳〵くづれたれば、吉野川とも其人とも、そなたに見給ふまじきと也。古今「流れては妹春の山の中に落つるよしのゝ川のよしや世の中」妹の山背の山とてあるな彼せうといもうとなど人々のいひたるにとりあはせてよめる也。〔補〕濱臣云、川に「彼(カ)は」と云ふなよせたり。古歌に例多し。足代弘訓云、いもせは夫婦に限らず、兄弟なもいふ。美隆云、かのせうといもうとの意にて、こゝのいもせの山は、兄弟にとれり。男女の兄弟ないもせといふ事は、古言にて、この比も猶さいへり。狹衣などにも、源氏ノ宮と狹衣中將とな妹せといへり　榮花玉のうてなの卷に、四條大納言「いもせ山よそに聞

すで給はで 抄本わすれ給はでとあり何れにても

くづれずる。春本くづれよるとあれど千蔭本活本するとある方よろし

なりにき 春本になし抄本によりて補へり

事はすて給はで、よそにてもさぞなどは見給へ」といひたり。常にいふことは、「おのれをおぼさん人は歌などよみてえさすまじき。すべてあたかたきとなんおもふべき。いまは限りありて、絶えなんと思はん時さる事はいへ」といひしかば、此の返しに

くづれするいもせの山の中なればさらによしのゝ川とだに見じ

といひやりたりしも、まことに見ずやなりにけん。返事もせずなりにき。さてかうぶりえて、とほたあふみのすけなどいひしかば、にくゝしてこそやみにしか。

◎心もとなく遠からぬ程を云々 (補)心もとなくは、下の叩くらんへかゝる副詞なり。何故かく、不安に思ふやうに叩くぞとなり。遠からぬ程とは、春註に、奥淺き門をといへるが如し。門と家との間の遠からぬをいふ ◎瀧口なり (春)則光藏人なれば、瀧口を使におこせし也。(補)瀧口は藏人所に屬する、禁中守衛の士なり。もと清涼殿の東北の御溝水(ミカハミヅ)の流れ集りて、瀧をなす口に侍衛するにより、瀧口の侍(サムラヒ)と稱するを、略して唯瀧口ともいふ也。上(春本卷一)にもいへり◎左衛門の文とて (春)則光の文也。◎みどきやう (春)河海云。本朝月令二月云々。季ノ御讀經とは、春秋内裏にて、大般若を講讀せらるゝなり。◎けちぐわん (補)佛に立願して、法事など營みたる最終の日をいふ。◎物いみ (補)前に委し ◎すちなし (補)術なしの音語なり。せんすべのなきをいふ。筋なしとある註は非也。◎めを一寸ばかり云々 (金)前に則光、和布を食たるとかたりし故、今も和布をやりて、目くはするといふ心也 必ず我在所を語り給ひそとめくばせするとなり。奥の歌にて其心見えたり ◎一夜せめてとはれて (春)頭中將にあまりに淸少の在所を問はれて、

申せ／＼と抄本にあるよろし

夜いたくふけて、門おどろおどろしくたゝけば、何のかく心もとなく遠からぬほどを、たゝくらんときゝて、問はすれば、瀧口なりけり。左衛門の文とて、ふみをもてきたり みなねたるに火ちかくとりよせて見れば、（文一口也）あすみどきやうの結願にて、宰相中將の、御物いみにこもり給へるに、いもうとのあり所申せ／＼とせめらるゝに、ずちなし。さらにえかくし申すまじき。そことや聞かせ奉るべき。いかに、仰せにしたがはんとぞいひたる 返事もかゝで、め（和布）を一寸ばかり紙につゝみてやりつ。さて後にきて「（則光詞）一夜せめてとはれて、すゞろなる所にゐてありき奉りて、まめやかにさいなむにいとからし。さてともかくも御かへりのなくて、そゞろなるめのはしを、つみて給へりしかば、とりたがへたるにや」といふに、あやしのたがへ物や。人のもとに、さる物つゝみておくる人やはある。いさゝかも心得ざりけりと見るが、にくければ、物もいはで、硯のあるかみのはしに、

かづきするあまのすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけむ

とかきていだしたれば、（のりみつが詞也）歌よませ給ひつるか。さらに見侍らじとて、あふぎ返してにげていぬ。かうかたみに、うしろみかたらひなどする中（ウチ）に、何事ともなくて、すこし中あしくなりたるところ、文おこせたり。「びんなき事侍りとも、ちぎりきこえし

らねど人々はとかく名を立つるとなり。ⓒ心に引きいりたる云々　〔磐〕清少の心に、こめ忍びたるあやまちなければと也。ⓒさいはん人もにくからず　〔春〕さやうに名たてがましく、いひなす人もにくからぬと也。心にあやまりあらばこそおそれにくまめ。實なき事は何ともおぼえぬ心也　ⓒ何かはなしなどもかゞやきかへさん　〔春〕常に親しく來る人を、いかで恥ぢがほに清少はこゝになしなどいひて、たゞには返すべきぞと也。かゞやくとは夕顔の巻に、恥ぢかゞやかんよりはとある詞なり。恥づるこゝろなるべし。〔補〕源氏總角の巻にも、大姫君の御前の人々の、かゞやきかくれぬるほど云々とあり。かゞやくとは、赤面して恥づる事なり。もしは此の條も、かゞやきかくれんとありしを、誤寫したるならずや　ⓒむつましくなどあらぬも云々　〔通〕平生さまで親しくせぬ人までも、尋ねて來るとなり。春抄の懸想人といふまではあらじ。ⓒ宰相中將の　〔補〕此の下抄本に「參りたまひて」の六字あり　宮中に參りあひての意か。但しなくても聞こゆ。ⓒある事あらがふ　〔通〕ある事を、なしといひあらそふことなり。あやにくに強ひ給ふとは、俗に意地わるく、無理に問ひ給ふとなり。ⓒつれなくしらずがほにて　〔春〕かの頭中將の問給ふかたはらに、源中將經房のおはして、つれなくしらぬ人に成てゐ給へりしと也。經房と濟政は里亭をしり給へれば也　ⓒかの君に見だに合せば　〔春〕經房に目を見合せたらば心知るどちにてをかしからむと也　ⓒ臺盤　〔通〕殿上の食卓をいふ。春註非なり。ⓒ中間　〔通〕つきなき時、俗に中途半端。ⓒわらひなましかばふようぞかし　〔春〕しらずとあらがひながら笑ひたらば、たゞのぶにさとられて、清少の在所をかくすてだて不用にあらんと也　ⓒさらになきこえ給ひそなどいとゞいひて　〔春〕此詞にてかねても、則光に我在所を齊信にいひきかせそと、いひおきし事しられたり。

くひにくひ抄本によりて補ふ

あまり心に引きいりたるおぼえはたなければ、さいはん人もにくからず。又よるも晝もくる人をば、何かはなしなどもかゞやきかへさん。まことにむつましくなどもあらぬも、さこそはくめれ。あまりうるさくもげにあれば、此の度いでたる所をば、いづくともなべてには知らせず。經房、濟政の君などばかりぞしり給へる。左衞門のせう則光がきて、物がたりなどするついでに、きのふも宰相中將殿の「いもうとのありどころ、さりともしらぬやうあらじ」と、いみじう問ひ給ひしに、さらにしらぬよし申しゝに、あやにくに强ひ給ひし事などいひて「ある事あらがふはいとわびしうこそありけれ。ほと／＼ゑみぬべかりしに、左中將のいとつれなくしらずがほにてゐ給へりしを、かの君に見だにあはせば、ゑみぬべかりしにわびて、臺盤の上にあやしきめのありしを、たゞとりにとりて、くひにくひまぎらはししかば、中間にあやしのくひ物やと、人も見けんかし。されどかしこうそれにてなん申さずなりにし。笑ひなましかば不用ぞかし　まことにしらぬなめりとおぼしたりしも、をかしうこそ」などかたれば、さらになきこえ給ひそ。などいとゞいひて、ひごろ久しくなりぬ。

◎さとにまかでたるに　㊟清少の里亭へ退出してなり　◎殿上人などのくるも云々　㊟清少に懸想の人な

宮にも仰せらるゝぞと清少にいふ也。〔補〕この註誤れり。后宮は仲忠の貧家に生れ、幼時熊の棲めりし杉の空洞（ウツボ）に在りし變狀を、賤（アヤ）しと貶し給へる也。◎何かは　〔補〕仲忠を何とて左樣に賤しみ給ふぞとて次に凉の劣れる由をいふ也。◎琴なども天人おるばかり云々　〔補〕これは凉の事にて、凉をわろき人とはいへる也。然るに諸抄註皆仲忠の事と誤解せり。總じて春註は一向（ヒタスラ）仲忠の事と心得て、凉が事を忘れたり。宇津保物語を見れば、源ノ凉はもと嵯峨院の皇子にて素性貴（スヂタカ）く、容儀才藝仲忠に劣らず優秀なりしが、朱雀帝の御前にて琴の秘曲を奏せしに、「雲の上よりひゞき地の下よりとよみ、風雲動きて月星さわぎ、……凉（琴ノ師）彌行（イヤユキ）が大曲の音の出づる限り仕う奉る。天人下（オ）りて舞ふ」とある、此の條にあたる詞なり。◎帝の御女やは云々　〔補〕朱雀帝今宵の祿として、左大臣正賴の女あてこそを凉の妻に、又一の內親王を仲忠に賜ふ。雨人下（オ）りて拜する由吹上の下の卷に見えたり。されば凉は帝の御女を得ずなりしかば、其の事をいへる也。要するに后宮は仲忠を劣れりとし、清少は仲忠の方人して凉を誹りたる也。◎心を得て　〔補〕得意に成りて。(つ)かはらの松はありつや　〔春〕西の京荒れて、垣やぶれ苔生ひし事を、語るにつけて、唐の驪山宮の長安の都の西にて荒れし事、文集の樂府にあるを、思ひよそへて問へる詞なり。白氏文集ノ四、樂府云、驪山高、高々驪山上有レ宮、朱樓紫殿三四重、遲々兮春日ハ玉ノ甃暖兮溫泉溢、嫋々兮秋風ニハ山蟬鳴兮宮樹紅、翠華不レ來歲月久、牆有レ衣瓦有レ松、吾君在レ位已五載、何不ニ幸ニ乎其中ニ、西去ニ都門ニ幾多地、(下略)

七七（里にまかでたる後）

さとにまかでたるに、殿上人などのくるも、やすからずぞ人々いひなすなる。いと

其の外郭南面正中の門な、朱雀門と號し、其の門前な南へ、九條のはて羅城門まで、横幅廿八丈の大路な通じ、其の東方な左京、西方な右京と名づけらる。西の京は卽ち右京なり。然るに當時高貴の殿第等、多く左京に在りて、右京の方は一體に榮えず、荒廢せし樣は、他の記錄にも見えたり。◎うんじにし 〔新〕慍の字なり。恨み憤る心也。〔評〕此の語、解釋さま〴〵あり　契沖師は、[illegible]と同言なり。クとウと横韻通す。といはれつれど、今は從ふ者なし。谷川士清の、倦スの音便といはれたる、大かたは此の說に從へり。然るに、美隆云、慍の說よろしかるべし　慍の字の意には叶はぬ所もあれど、すべて中昔の音語は、字の意にあひがたきこと常ある事なり　例へば、事のかなはぬ事な、不用といふが如し。又按ふに、蘊ジか、さるは屈シなクシといひ、又それなクンジといふと同じ。と云々、蘊の說、田中大秀竹取物語の解にあり。直按ずるに慍の字にて、少し憤る意もあるか。慍にてよく聞ゆべし。◎とより見ん人には 〔蓋〕外より見ては、此頭中將の花やかなる形にてかたらひ給へに、內の人ゆかしからんと也。◎すずし [illegible]春抄にすうしとありて誦じと傍註し、萬抄には「すごし」とあれと共に非なり　千蔭・夏蔭共に古本によりて、すゞしと訂せり。すゞしは、仲忠に對する人名なり。宇津保物語な見れば、吹上ノ卷下に、九月朔日、院、吹上ノ濱に御幸あり。宴じ給ひて、吹上のあるじに、源氏の姓な給ひ、涼(スヾシ)と命名して、殿上ゆるし給ひし事あり。されば此處は、源ノ涼と仲忠との、優劣な評じ給ふにてすゞしなる事著きなや　◎なかただがことなど 〔評〕うつほ物語に、仲忠の大將とて、わかこ君といひし人の子にて、うつぼの俊蔭がむすめの腹に生れし人、なさなくて母に孝有て、さま〴〵の奇特あり。琴なよくひきて、帝の一內親王な北方に給ふべき宣旨下りし事などあり。◎わらはおひ 〔拾〕童生也。仲忠はわらはの生立より、奇特有し物ぞと、深切に后

る非也委しく註にいへり
なかたゞの下抄本などがとあり
かた人と心を得ては抄本にはかた人共所を得てとあり

御前にも劣りまさりたる事など仰せられける、「（人々清少にいふ詞）まづこれはいかにとことわれ。仲忠がわらはおひのあやしさを、せちに仰せらるゝぞ」などいへば、「（清少の詞）何かは。きんなども天人おるばかりひきて、いとわろき人なり。みかどの御むすめやはえたる」といへば、仲忠が方人（カタウド）と心をえて「（人々の詞）さればよ」などいふに、（后宮の御ことば）此の事よりは、ひるたゞのぶが参りたりつるを見ましかば、いかにめでまどはましとこそおぼゆれ」と仰せらるゝに、人々「さてまことにつねよりもあらまほしう」などいふ「（清少の詞）まづその事こそ啓せめと思ひてまゐり侍りつるに、物がたりの事にまぎれて」とて、ありつる事を語りきこえさすれば、「（人々の詞）たれも／＼見つれど、いとかく、ぬひたる糸、針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。西の京といふ所の荒れたりつる事、もろともに見る人あらましかばとなんおぼえつる、垣（カキ）なども皆破れて、苔（コケ）おひて」などかたりつれば、宰相の君の「かはらの松はありつや」といらへたりつるを、いみじうめでて、西のかた都門をされること、いくばくの地ぞ」とくちずさびにしつる事など、かしがましきまでいひしこそをかしかりしか。

◎あかしもはてゞ　[抄]よべ我れを待ちあかしもはてゞと、中将の恨み給ふ也。◎西の京　[春]彼の方違に行きたる所なるべし。[新]上古の制、京城の北方一條より二條かけて、宮城を構へらる。之を大内裏と稱す。

て憚りつゝゐふ事もせねばにやの意なるべし。◎色ことなる比　〔春〕輕服などの時節にや　〔湖〕去年四月、中宮の御父關白薨去あり。當時の制、主君父母夫の喪には、十三月の間喪服すれば、此の宮わたりの人々は、身の程に從ひ濃くも薄くも、墨染を服せし頃なりしならむ。◎うすにび　〔春〕薄鈍、うすき墨染色なり。◎あはひも見えぬ衣　〔春〕重なりたる色々もなき心なり。〔湖〕あはひは重ねの色の配合をいふ。◎うちき姿　〔湖〕唐衣裳を略して、唯袿を打掛たるのみなるをいふ。是れ極めて褻のいでたちなり。◎物そこなひに　〔春〕輿さましなりと也。

職の御曹司（頭中将の詞）へなんまゐる。ことづけやある　いつか參る」などのたまふ「さてもよべあかしもはてゞ　さりとも、かねてさいひてしかば、待つらんとて、月のいみじうあかきに、西の京より來るまゝに、局をたゝきしほど、からうしてねおびれて起き出でたりしけしき、いらへのはしたなさ」など語りて笑ひ給ふ。「むげにこそ思ひうんじにしか」などさる者をばおきたる」など、げにさぞありけんと、いとほしくもをかしくもあり。しばしありて出で給ひぬ。と（外）より見ん人はをかしう、內にいかなる人のあらんとおもひぬべし。奥のかたより見出だされたらんうしろこそ、とにさる人やともえおもふまじけれ」。暮れぬれば參りぬ。御まへに人々多くつどひゐて、物語のよきあしき、にくき所などをぞ定めいひしろひ、すゞし、なかたゞが事など、

御曹司の三字春本なし抄本によりて補ふ

さりとも春本されどもとあるにわろし

すゞし春本すうじとあ

は薄紫を表(ウヘ)にして次第に白きを下に重ね著たるをいふ　◎せばきえんにかたつかたは下ながら　〔春〕縁などのせばき所なれば、腰などかけたるやうに、半身は下ざまにて、簾のもとの長押などによりゐ給ふ也。◎ゐにかき物がたりのめでたき　〔春〕おくに、うつほ物語の仲忠の大將の事につけて、此頭中將の事をいひ出づる事あり。それをかゝんとて、先こゝにかやうにいふなるべし。◎簾のうちにまして　〔春〕かやうの折ふしは、只にも人に見せまほしく美麗なるに、まして簾中に若女房の髮うるはしきなどあらば、猶今すこし見所あるべきに、我が居て無興と也。◎さだすぎふるぶるしき　〔春〕央過也。源氏におほき詞也。年齢のなかばに過て、古めかしき事也。〔補〕直按ずるに、さだといふ語、二樣の義あるにや。一つは萬葉卷十一「人間守(ヒトマモ)りあし垣越しにわぎも子を相見しからにことぞさだ多き」とあるさだにて評定する事なり。二つは同卷に「沖つ波へなみの來よるさだの浦の此のさだ過ぎて後戀ひむかも。」鹿持雅澄云、此のさだは「しだ」と同じく、時の古言にて、此の時過ぎてといふに同じ。とて前の歌の「ことぞさだ多き」のさだとは、本より別言なり混ぶ可からず。といへり。別言といふはよし。然れども。後のを時といふに同じといへるはいかが。平安朝時代の物語草子どもに見ゆる詞は、唯時とのみは譯し難し。本居翁、人の齡の盛過ぎたること也と解けるぞ穩なるべき。猶いはゞ女の年若き程は、人の評定(サダ)も多き頃なれば、其の義の轉(ウツ)りたる語ならんか。男子にもいふは、女子より再轉したるにや。◎かみなど我にはあらねばにや　〔春〕上に若き女房の、髮うるはしき事をいひしに對して、我身にはさやうのうるはしきはなきにやと也。〔補〕此の註よしとも思はれず。傍註には、添へ髮也とあり。さらば我れは、添へ髮、卽ち義髮を入れぬゆゑ、癖付亂れ散りて、との意にや。又古本に我がにはあらねばやともあり。按ずるに、我がものともせねばの意、卽ち我が髮とし

にて大要は解し得べけれど、己れ一つの僻案あれば、云ひ試みて識者の教を請はむ、「うへにかたらば」のただ文字、さの字と草書の躰よく似たれば、寫し誤りたるにて、元は「うへにか。さらば云々」とありしにやと覺ゆ。さるは、禁中に於て、清少をうへとは言ふべきやうなければ、此のうへは上局、うへやのうへにて、頭中將の詞に、清少は今夜下局には在らで、上局にか。さらば、我が消息せしまゝに、かく來りし事を傳へよと、下女(シモヲンナ)に仰せられしかど、心もなき者にて、清少には告げやらずして寢たりとなるべし。◎きかせたまはじ 〔春〕清少の承引あるまじきと也 〔補〕抄本には「おきさせ」とある事、頭書に記したるが如し。さて抄の説には、「下女がおしはからひて、夜も深けたれば、申入れたりとも、起き出で給ふまじ。明日申し上げむとて、いねたりと也。」とあり。此れもよろしげなれど、「きかせ」は「きさせ」の誤寫にて、よも下りて來させ給はじの意ならむか。◎まかり出づる 〔春〕殿上より退出するとなるべし。〔補〕此の説の如し。參上の意にもいへど、そは後世の轉なり。退出がけに、局を訪はんとなり。◎見るべき事ありて 〔補〕美隆云、このみるは、看病の看の意に同じく、取りもちて行ふこと也。◎局はひきもやあけ給はむ 〔補〕局にて會はゞ、簾を引きあげて入りもやせんと、心ときめきして也。◎半蔀 〔補〕上に註せり。上の方だけを釣り上げて、下の方を外(ハヅ)さぬまゝにて、出會ひたる也。◎蒲萄染、〔補〕前に註せり。◎藤の折枝ことごとしく織り亂り 〔春〕指貫のうはもんにや。〔補〕春抄に、上紋(ウハモン)にやとあるよろし。こは二重織物(フタヘオリモノ)とて、蒲萄色の地にて綾文ある上に、白く藤の枝を浮織にしたるをいふ。織り亂りは、亂しといふべきを、古格の詞づかひなり。織り散しといふ程のこと。◎うちめ 〔補〕出袿(イダシウチキ)は大かた紅の綾を用ふ。之を砧にて打ちて光澤(ツヤ)を出したると、糊張にしたるとあり。是れは砧にかけたる光澤の事なり ◎しだいに白き云々 ◎内衣に

ゐためるの下「やうにて物のいらへなどしたらむは」の十六字春本になし抄本によりて補ふ

物ぞこなひ　にて。春本て。の字なし抄本によるる

まほし。簾(ス)のうちに、ましてわかやかなる女房などの、髮うるはしく長く、こぼれかゝりなど添ひゐたるやうにて、物のいらへなどしたらんは、いますこし見所ありてをかしかりぬべきに、いとさだすぎふる〴〵しき人の、髮なども我がにはあらねばや、ところ〴〵わなゝきちりぼひて、大かた色ことなる比なれば、あるかなきかなる薄鈍(ウスニビ)ども、あはひも見えぬ衣(キヌ)どもなどあれば、露のはえも見えぬに、おはしまさねば裳もきず、うちき姿にてゐたるこそ、物ぞこなひにてくちをしけれ。

㊀かへる年　〔春〕長德二年なり。前段の翌年なれども、同じ頭中將の物語なれば、かきつゞけたる也。㊁梅壺　〔春〕凝花舍といふ御殿の別名なり。梅を植ゑられし故の名とぞ。㊂鞍馬　〔春〕鞍馬寺の略。京北鞍馬山の中に在り。㊃方のふたがれば　〔春〕天一神などの方にあたりたる夜を云ふ。〔春〕方違(カタタガヘ)のこと上に委しくいへり。㊄たかへになむ、〔春〕鞍馬より清少へふたがれば、今夜は外へ方違へに行きて、明朝ゆかんとなり。〔補〕此の註の通り、今宵に先づ西の京へ、方を違へて、更に清少を訪はん。夜のあけざらん程に、禁中に歸るべしとの消息と心得べし。下文に西の京の荒れたるを語る事あるにて知らる。㊅いたくたゝかせで　〔春〕局の戸を叩かせぬやう、用意して待てと也。㊆みくしげどの　〔春〕御匣殿別當の略。道隆公四女中宮の御妹のこと。拾芥抄に云、御匣殿在二貞觀殿之中一、以二上臈女房一爲二別當一、㊇はおきておりたれば　〔春〕御匣殿に寢過して我局へ下りし也。㊈うへにかたらば云々　〔春〕叩きし人の詞なり。清少の從者のうへといふ也。頭中將の來りしといへり。〔抄〕うへにとは、少納言へ、此由を申せと、頭中將の仰せられしなり。〔補〕此の註ども

よべ｜春本よるとあるを抄本に従ひて改む

ぎかせ給はじ｜抄本におきさせとある方もよろしきにや

えんに｜春本まゝにとあれど抄本傍註本によりて改めつ

必ずいふべきことあり。いたくたゝかせで待て」とのたまへりしかど、局にひとりはなどてあるぞ。こゝにゐよ」とて、みくしげ殿（定子の御いもうと也）めしたれば、まゐりぬ。久しくねおきておりたれば、「よべいみじう人のたゝかせ給ひし。からうじて起きて侍りしかば、「うへにかたらばかくなん」（たゞきし人の詞也）とのたまひしかども、「よもきかせ給はじ」とて、ふし侍りにき。」とかたる。心もとなの事やとてきくほどに、とのもりづかさ來て、「頭の殿のきこえさせ給ふなり。只今まかりいづるを、きこゆべき事なんある」といへば、「見るべきことありて（清少の答）、うへになんのぼり侍る。そこにて」といひて、局は、ひきもやあけたまはんと、心ときめきしてわづらはしければ、梅壺の東おもての半蔀あげて、「こゝに」といへば、めでたくぞ歩み出で給へる。櫻の直衣いみじく花ばなと、うらの色つやなど、えもいはずきよらなるに、えびぞめのいと濃きさしぬきに、藤のをり枝ことごとしく織りみだりて、紅の色うちめなど、かゞやくばかりぞ見ゆる。次第に白き、うす色などあまた重なりたる、せばきえんに、片つかたはしもながら、すこし簀のもとに近く寄りゐ給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、是れにこそはと見えたる。御前の梅は、西は白く東は紅梅にて、すこし落ち方になりたれど、猶をかしきに、うらうらと日のけしきのどかにて、人に見せ

つけ心みるに　(春)彼草庵の句の、上の句をつけ見るに、及がたしと也。ⓒ返しをやすべき　(春)別に返歌をやせんと人々いひしと也。◎わろき事いひては　(春)返歌せぬには、却りて劣るべければ也。ⓒせう〳〵のつかさ　(補)春本少將とあるは非也。活本にせう〳〵とある方よろし。濱臣も少々の意なるべしといへり。今の俗言にいふも同じ。◎ねたくもありけるかなと　(補)此の下「思ひて」の詞を補ひて見るべし　◎つかさ名をばいはで　(註)修理亮とはいはで也　(補)清少の兄人（セウト）と呼ぶと也。ⓒ物語などして　(補)清少と則光と雜談してありしに、まづ何事をおきても參れと、召ありし由也。ⓒうへのわたらせ給ひて　(註)一條帝、后の方へ渡り給うて、しか〳〵と告げ知らせ給へりと也。ⓒ何のいはせけることにか　(補)何の美（イ）しくいはせつる事ぞと、卑下の詞なり。◎袖ぎちやうなど　(春)前に頭中將袖を顏にへだてゝ、清少を見おこせ給はぬ事ありし、几帳はかほかたちをおしへだつる物なれば、袖几帳といふなり　此事の後には、さやうに清少を見ぬやうにもせで、彼そらごとゆゑのにくみも、頭中將の思ひなほりしと也。(補)榮花物語楚ノ王夢の段にも、「若き人々、うちまきをあやにくにすれば、御袖几帳のほども、をかしう見えさせ給ふ。」とあれば、袖にて顏をおほふ事をば、その頃一般にしかいへりと見ゆ。

七六（頭中將の裝ひ）

かへる年の二月（キサラキ）二十五日に、宮、職の御曹司に出でさせ給ひし、御ともにまゐらで、梅壺にのこりゐたりし又の日、頭中將（齊信）のせうそことて、「きのふ（文の詞）の夜鞍馬にまうでたりしに、こよひ方（カタ）のふたがれば、たがへになん行く。まだあけざらんに歸りぬべし。

むといへる、時代かなへれば、必ず此の人ならむ。但しこの時修理權亮なりしか、略していふ事も例あり。職原抄權亮の下に、相當從五位也、然而六位又任レ之とあり。則光未だ六位にてありけむ。此の次の文に、左衞門ノ尉則光かうぶり得て（五位の叙爵の事）遠江介に成りて云々と見ゆ。此の後陸奥守にも到りしなるべし。斯く考へ來たれば、官歷も亦能くかなへり。◎なぞつかさめしとありとも　(春)司召は秋の京官の除目をいへり。江次第などにくはし。除目に官を得し人は、よろこびとて、こなたかなたに拜賀の事あり。今則光よろこび申にまゐりたりといふに付て、司召もきこえぬに何に昇進せしぞと也。(補)此の時は、春の事なれば、縣召といふべきをとも、又縣召を司召ともいへる也とも、さま〴〵の說あれど、此の所は、淸女の、眞に司召ありと信じて、いへるに非ず。今は二月にて、司召ありとも聞かぬに、怪しくも何になり給へりや。と戲れていへるなり。◎心もとなくおもひあかして　(春)早く淸少にいひ聞せたく思ふ故、夜の明くるを待ちしさま也。(補)心もとなくは待遠に思ふこゝろなり。◎たゞに來りしは　(春)始め返事なくて、主殿司のかへり來りしは、なまじひの返事あらむよりは、却りてよかりしと也。◎せうと　(補)兄人（セウト）。則光は、淸少と義兄妹の間柄なりしならむ。此の事人々の知る所にて、官名も實名も呼ばで、淸女の兄人と呼ひならへるなり。◎なのめにだに　(春)返事のすぐれしこと也　(補)斜ならずの意也。この頃の俗語なるべし。◎せうとこそきけ　(春)兄殿きかれよと、たはぶれの給ひし詞也。夕顏の卷に、右近のきみこそ先物見給へとあり。若紫の卷にも、うへこそなどあるにおなじ詞也　◎さやうのかたは　(春)歌連歌は不得意なると也。◎ことくはへよきゝしれとには　(補)ことくはへよは、賞美の言を加へよなり。聞き知れは、此句の妙味を知れとにも非ず。唯世上に吹聽せよと也。◎おぼえ　(補)人に思はるゝ事なり。◎これがもと

ねたくもの　下抄本「あるべかりけるかなとこれになん云々」とあり本文春本によりてたゞとの字を補ふ

扇にかきの　下抄本つけの二字あり

もとつけ試みるに、いふべきやうなし。殊にまた「これが返しをやすべきなどいひあはせ、わろきこといひては、中々ねたかるべしとて、夜中までなんおはせし。これは身のためにも人の爲にも、さていみじきよろこびには侍らずや。つかさめしにせう〳〵の官（ツカサ）えて侍らんは、なにとも思ふまじくなん」。といへば、げに（清少の心也）あまたしてさる事あらんとも知らで、ねたくもありけるかなと、これになんむねつぶれておぼゆる。此のいもうとせうとゝいふ事をば、うへ（帝）まで皆しろしめし、殿上にも、つかさ名をばいはで、せうとゝぞつけたる。物がたりなどしてゐたるほどに、（后宮の御詞）まづと召したれば、參りたるに、此の事おほせられんとてなりけり。「うへのわたらせ給ひて、かたりきこえさせ給ひて、をのこどもみな扇にかきつけてもたる」と、おほせらるゝにこそ、あさましう（清少の心也）何のいはせける事にかとおぼえしか。さてのちにぞ袖几帳などとりのけて、おもひなほり給ふめりし。

㊀のりみつ　〔春〕未勘。奥にかうぶり得て遠江介に任ず。〔讀〕抄にも傍註にも則光とあれど、官歷等を記さず直按ずるに、尊卑分脈十七、橘氏系圖に陸奧守從四位下則光あり。今昔物語卷廿三に、今は昔陸奧前司橘則光と云ふ人あり。兵（ツハモノ）の家ならねども、心極めて太く……身力などぞ極めて强かりける　其の人未だ、若かりける時、前ノ一條院天皇の御代に、衞府の藏人にて有りける。云々。又江談第三雜事に、橘則光搦レ盗事、又被レ命云、橘則光於二齊信大納言宅一自搦レ盗、勇力軼レ人云々。一條天皇の御代といひ、齊信宅にて盗を搦

（頭）一見すると同時にチヽと叫びて感動せし也。◎いみじきぬす人かな（春）清少を只人ならずとほめんとて、ざれていへる詞也　◎これがもとつけてやらん（金）彼下の句に上の句をつけてやらんと也（講）夏蔭云、公任大納言集に、いかなる折にか。草の庵をたれか尋ねんと、のたまひければ、藏人たかただ「九重の花の都をおきながら」とつけたる事見ゆ。此の事當時の評判になりて、公任卿の物語に藏人隆忠の附けしなるべし。

修理亮則光「いみじきよろこび申しに、うへにやとてまゐりたりつる」。といへば、（清少の詞）なぞ。つかさめしありとも聞えぬに、何になり給へるぞ」といへば、「（則光が詞也）いでまことにうれしき事のよべ侍りしを、心もとなく思ひあかしてなん。かばかり（面目）めいぼくある事なかりき」とて、はじめありけることども、中將のかたりつる、おなじ事どもをいひて「このかへりごとに從ひて、さる者ありとだに思はじ」と頭ノ中將のたまひしに、たゞに來たりしはなか〳〵よかりき。もてきたりしたびは、いかならんと胸つぶれて、まことにわろからんは、（兄人）せうとのためもわろかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず。そこらの人のほめかんじて「せうとこそきけ」とのたまひしかば、下心にはいとうれしけれど「（又人々の詞也）さやうのかたには、さらにえさぶらふまじき身になん侍る」と申ししかば「ことくはへよききゝしれとにあらず。たゞ人にかたれとてきかするぞ」との給ひしなん、すこしくちをしきせうとのおぼえに侍りしかど、これが

いで｜抄本にはいなとありいづれにても

ことくはへ｜よ春本によの字なし抄本に従ふ

末の世春本の世の二字を脱す千蔭古本によりて補へるに従ふ

語り傳ふべき事なりとなんさだめし」といみじくかたはらいたきまでいひきかせて、「御名（源中將の詞也）はいまは草のいほりとなんつけたる」とて、いそぎ立ち給ひぬれば、「いとわろき名の末の世まであらんこそくちをしかるべけれ」といふほどに、

◎などてかさ人げなきものは　(補)さやうに人らしくもなき賤しき者が居らうぞ。玉の臺と求め給はゞ出會ひ申さんと也。◎玉のうてなと　(補)臺とのと文字、千蔭翁古本によりて補へるとよろし。玉の臺は何處にと呼びて求め給はゞの意なり。(補)濱臣云、拾遺集夏題しらず讀人しらず「けふみれば玉のうてなもなかりけりあやめの草のいほりのみして」直云、此の歌の詞によりていへるにや。此の歌賀茂保憲女歌集にもあり殆んど同時の人なり。◎よべ　(補)昨夜ありしやうはとて、仔細を語り出づるなり。よべは音便に、ようべとも、よんべともいふより、今俗誤りてゆふべ（夕）と混同す。こころをつくべし。◎人々しきかぎり　(春)物の心をも知りたる人々をいふ也。◎むげに絶はてゝこそ　(補)一向に絶交して後、流石に寂寞を感じて物足らずと也。さうざうしば淋々（サミシク）し也との説、近來一般に行はるれど、古註は寂々（サクサク）の音便なりといへり。此の方從ふべく思はる。◎もしいひ出る事もやと　(春)彼讒人のいひわけを、清少の方より云出すかと待てど、さもなくて、つれなくれたきとなり。前にいみじうにくみ給ふを、とかくもいはず見もいれで過すとあり し首尾也。◎たゞ袖をとらへてとうざいをさせず　(春)清少を、東西に身ゆるぎもさせず、返事とりてきたれと也。(補)身ゆるぎもさせずと釋けるは甘心せず。又旁註本には、こうざいとありて、口才也。理屈をいはせず也。とあるも曲解にや。按ずるに、其のかみの俗語に、他事をいはせぬ事を、東西をさせぬといひつるにや。正しくはせさせずと あるべき所なれど、口語にはかくもいひ つらむ、◎うち見るにあはせて

うてなの下　春本にとの字なし千蔭校本による

見るまじき　素本活本抄本傍註本ともきの字なしよろしさらずば春本さらの二字なし千蔭弘賢校本かくあるよろしければ補ひつ

みなねて、つとめていととく局におりたれば、源中將のこゑにて、「草の庵やある草のいほりやある」とおどろ〳〵しう問へば、「などてか、さ人げなきものはあらん。玉のうてなと、もとめ給はましかば、いできこえてまし」といふ「あなうれし。下にありけるよ。うへまで尋ねんとしつる物を」とて、「よべありしやう、頭ノ中將のとのゐ所にて、すこし人々しきかぎり、六位まで集りて、萬の人のうへ、むかし今とかたりていひしついでに、猶此のものむけにたえはてゝ後こそ、さすがにえあらね。もしいひ出づることもやと待てど、いさゝか何ともおもひたらず。つれなきがいとねたきを、こよひあしともよしとも定めきりてやみなんかしとて、皆いひあはせたりし事を、只今は見るまじきとて、入り給ひぬとて、とのもりづかさ來たりしを、又おひかへして、「たゞ袖をとらへて、とうざいをさせず請ひとりてもて。こさらずは、文をかへしとれ」といましめて、さばかりふる雨のさかりにやりたるに、いととく歸りきたり、「これとてさし出でたるが、ありつる文なれば、「かへしてけるか」とて、うち見るにあはせてをめけば、あやし。いかなる事ぞとて、皆よりて見るに、いみじきぬすびとかな。猶えこそすつまじけれと見さわぎて、「これがもとつけてやらん。源中將つけよ」などいふ。夜ふくるまで附けわづらひてなんやみにし。此の事かならず

とて、さらば元の文を返せと迫りいへるを、あやしと心底に笑ひて、いせの物語とはいへるにて、俗に謂（ウツ）さば「ヘンナハナシヂヤ」などいはんが如くなるべし。書名の伊勢物語にあらざること勿論なり。◎心ときめきしつるさまにも　(春)とみの使をおこせて青きうすやうに清げに書たる文おこせ給ふは、いかなる心ばへぞ。にくみ給へる心も引かへてやさしきさまの事もやと心ときめきせしに、思ひの外に何の事もなきと也。(補)薄様は今の鳥ノ子紙の類なり。心ときめきは、「心ときめきするもの」の條に解けるを見合せて悟るべし。春註に、やさしきさまの事もや云々といへるもさることながら、愚按、頭ノ中將より、いかなる難題もやと心ときめきしつるにとの意とも見ゆべし。◎らんしやうの　(春)蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草菴中。白氏文集十七にあり。今夜の雨に頭ノ中將は御物忌に籠てつれ〲なるに、清少は夜の御殿の錦帳の下に侍る事を思ひ准へて、此上句を書やり給し也。蘭省は尚書省とて政を行ふ所也。廬山は樂天の山居也◎たど〲しきまんな　(春)女は假名をこそかけ。眞名は書きなれねばなり。(補)たど〲しは確と手に入らぬよしの意なり。まんなは、眞名の音便、假名に對して漢字のこと。唯その奥とは中將よりの文の餘白のある所をいふ。◎草のいほりをたれかたづねん　(春)彼句、廬山雨ノ夜草庵ノ中なれば、かやうにいへり。是ほどの事を、誰か尋んとの心をいひて、我は頭ノ中將にくまれければ、いかで問給はんとの心をそへたり。(補)抄に白氏文集十七云、廬草堂夜雨獨宿、寄二牛二李七庚三十二員外一。丹霄携レ手三君子、白髪垂レ頭一病翁、蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中、終身膠漆心應レ在、半路雲泥迹不レ同、唯有無生三昧觀、榮枯一照兩成レ空。此の詩は白樂天廬山の草堂に雨夜獨宿して、都の友に寄せられし詩也。かの友人の都に在りて、朝に仕へ榮達にほこれる有樣を云也。◎返事もいはず　(春)中將の返事もなきなり。

次の間なり　(補)一段下りたるなり。上の長押の註について見るべし。◎へんをぞつく　(春)女房達、篇突してある也。稱名院殿御説、扁つきとは、文字のつくりと扁とを分けて、つくりを隱して、篇をもつて何といふ文字と、いひあつる事なるべし。(補)喜多村節信は、作りの方を出して、偏を附けしむる由にいへれど、いかゞ。愚按、これは詩文の一句のうち、ある一字の偏のみを出し、作りを附けさせ、一句の意を解かしむる遊技なるべし。◎すさまじき心ち　(補)中宮のはや御寢なりたれば、益なく思ひて、氣のすゝまぬよし也。◎何某さぶらふ　(補)外より何の誰と名のりて　清少に使者のあるさま也。◎あやしくいつの間にこそ參りたれ、其のほどに、何事のありて、人の呼ぶぞと也。◎さらば其のありつる文を給りて　(春)只今返事なくは、其文とり返して來よと、頭中將の　の給ひしと也。(補)ありつる　といふ詞は、何處にても、「前の」と譯すべし。◎いせの物がたりなりや　(春)伊勢物語に、長岡の母より業平へ、とみの事とて、御文ありといへり。頓は急々の事なればなり。(補)濱臣云、「えせ物語といふ事なり。頭中將より、懸想心に、えせごとないひおこせたるにはあらぬかと、清少の思ふなり。さて下文に、心ときめきとはいへりと。直云、こは濱臣の、師村田春海の説に本づきていへる也。春海云、いせ物語といふ名は東万呂ぬし、袋草子に有ニ密事一ヲ故、爲（タメニ）下構ニ僻事一之由（ヨシノ）上號ニ伊勢物語一、諺ニ伊勢は僻（ヒガゴト）と云故也とあるによりて、ひがことを伊勢といふ由を考へられ、忠房西行等の歌を引いて、古くひがことをいせといひ習はせる證にあげたるは論なし。唯何をもて、ひがごとをいせといふにか。春海今考ふるに、いとえと音かよへば、いせをえせと取りなし、ひがごとをいせとはいへる也。(以上節略) 清水氏は此の説に據りたるなれど、「懸想心に、えせごとをいひおこせ云々」とあるは、いかゞあらむ甘心しがたし。是は齊信の、消息文を贈りおきて、其の返書のおそき

「いはず」春本「で」とあり今抄本に従ふ

らん。御まへ（后宮）のおはしまさば、御らんぜさすべきを、これがすゑ知りがほに、たどたどしきまんなにかきたらんも、見ぐるしなど思ひまはすほどもなく、せめまどはせば、たゞ其のおくに、すびつの消えたる炭のあるして、「草のいほりを誰れかたづねん」とかきつけて、とらせつれど、返事（カヘリゴト）もいはず。

◎頭中將 (春)勘物云、齊信卿、正暦五年八月廿八日、藏人頭。長德二年四月廿四日、任二參議一卅歲云々。恒德公三男也。[illegible]近衛中將にて、藏人ノ頭に補したるを頭ノ中將といふ。上に註せり。◎そゞろなるそら言な (春)清少の事を、誰にても讒せしなるべし [illegible]そゞろは思ひもよらぬ義、不覺とかきて、そゞろ又すゞろとも訓める是れなり。◎何しに人と思ひけむ [illegible]岡本保考云、人にして人にあらずと、さみしたるなり。◎まことならばこそあらめ [illegible]此の下、眞ならぬ讒者のそら言なれば、といふ意を入れて心得べし。◎黒戸 (春)清涼殿の北にあり。[illegible]清涼殿より弘徽殿へわたる廊の局なり。◎こゑなどするなり (春)清少の聲すれば、頭ノ中將やがて顏に袖をおほひて、清少を見給はぬ也。◎御物忌に籠りて (春)禁中の御物忌に、頭ノ中將もこもりて也。◎さすがにさう〳〵しくこそ (春)頭ノ中將のいへりし詞也。清少をにくみながらもさすがに清少とかたらはればさびしきに、物いひやらんと齊信のの給ふと、ある人清少に告し也。◎よにあらじ [illegible]中將われを惡みたまへば、よもさやうなる事あらじと也。よには今俗のよもやといふに同じ。世にとかくはわろし。◎日ひとひ下にくらし (春)その日一日、清少の局に居暮して、夜に入て后宮の御かたへまゐりたれば、はや后宮は御寢ありしと也、◎なげしのしも (春)長押の下は、敷居一つ隔てて、

いひやらまし　春本いひにとあれと弘賢校本による

日一日　春本唯「日」とのみありて上の日の字なし抄本によりて補ふ

こゝもとに　春本もとの二字なし抄本に従ふ

御文　春本御の字なし抄本に従ふ

まんなに　春本にはなし抄本によるに

つれ〴〵なるに、「御物忌にこもりて、さすがにさう〴〵しくこそあれ。物やいひやらましとなんの給ふ」と人々かたれど、「（清少の詞也）よにあらじ」などいらへてあるに、日一日下（シモ）にくらして參りたれば、よるのおとゞに入らせ給ひにけり。長押（ナゲシ）のしもに火近くとりよせて、さしつどひて、へんをぞつく。「（女房達）あなうれしやとくおはせ」など見つけていへど、すさまじき心ちして、何しにのぼりつらんとおぼえて、炭櫃（スビツ）のもとにゐたれば、又（女房達）そこに集りゐて物などいふに、「何がしさぶらふ」といとはなやかにいふ。あやしく、「いつのまに、何事のあるぞ」と問はすれば、殿守づかさなり。「たゞこゝもとに、人づてならで申すべき事なん」といへば、さし出でてとふに、「是れ頭ノ中將殿のたてまつらせ給ふ、御かへりとく」といふに、（清少の心）いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならんと思へど、たゞ今いそぎ見るべきにあらねば、「（清少の詞）いね　今きこえん」とて、ふところにひきいれていりぬ。なほ人の物いふ、きゝなどするに、（主殿司）すなはちたちかへりて、「さらば其のありつる御文を、給はりてことなんおほせられつる。とく〳〵」といふに、あやしく、「（清少の詞）いせの物がたりなりや」とて見れば、青き薄やうに、まんなにいときよげにかき給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省の花の時錦帳のもと」とかきて、「末はいかに〳〵」とあるを、いかゞはすべか

り、后宮の御かたへ、取りわたして見せまゐらせ給也。(補)地獄の閻魔の廳にて、亡者の鬼に苛責せらるゝさまな、ゑがけるなり。◎うへや　(春)禁中にての清少の局にや。(補)然らじ。清女の局は、下(シモ)とも下屋(シモヤ)ともこの草子所々にいへり。下に對して上といふは、天皇皇后の御殿の事なり。こゝは御殿の奥などに、かりそめに隱れゐたるなるべし。◎道方　(春)六條左大臣重信六男、正三位中納言。◎濟政(ナリマサ)　(春)道方ノ弟、阿波權ノ守。◎ゆきなり　(春)行成卿にや　(補)然るべし。此の人の官歷上にあり　◎經房　(春)西宮左大臣高明ノ三男、長保二年八月廿五日任ニ左近中將ニ。◎びはのこゑはやめて　(春)琵琶行云、忽聞ニ水上琵琶聲ニ。主人忘レ歸客不レ發。尋レ聲闇問彈者誰。琵琶聲停欲レ語遲こ此句を誦し給ふ也　◎春本物語する事とあれど、琵琶行の本文、欲。語遲とあれば、物語せんとするとある抄本の方よろし。◎罪はおそろしけれど　(春)地獄の繪は見ずして、此詠吟に感ずればなり。

七五（草の庵）

頭ノ中將のそゞろなるそらごとを聞きて、いみじういひおどし、何しに人とおもひけんなど、殿上にても、いみじくなんの給ふときくに、恥かしけれど、まことならばこそあらめ。おのづから聞きなほし給ひてんなど、笑ひてあるに、黑戸のかたへなど渡るにも、こゑなどするをりは、袖をふたぎてつゆ見おこせず、いみじうにくみ給ふを、とかくもいはず見もいれですぐす。二月(キサラギ)つごもりがた、雨いみじうふりて

上國中國下國とてあり職原抄に委し。(標)大國の司になれば、位も高く收納も多ければ、得意なるべし。

七四　（琵琶の聲はやめて）

御佛名（ゴブツミヤウ）のまたの日、ちごくのゑの御屏風とりわたして、宮に御覽ぜさせ奉り給ふ。いみじうゆゝしき事限りなし。「是れ見よかし」とおほせらるれど、「さらに見侍らじ」とて、ゆゝしさに、うへやに隱れふしぬ。雨いたく降りてつれ〴〵なりとて、殿上人うへの御局に召して、御あそびあり。道方の少納言琵琶いとめでたし。濟政の君箏のこと、行成ふえ。經房の中將笙のふえなどいとおもしろう、ひとわたりあそびて、琵琶ひきやみたる程に、大納言殿（伊周）の、「琵琶の聲はやめて、物語せんとすること遲し」といふことをずんじ給ひしに、隱れふしたりしもおき出でて、「つみはおそろしけれど、猶物のめでたきはえやむまじ」とて笑はる。御聲などのすぐれたるにはあらねど、をりのことさらに作り出でたるやうなりしなり。

◎御佛名のまたの日　(春)十二月の御佛名、三ケ夜過て明日の事なるべし。年中行事歌合註云、佛名は十九日より廿一日まで、三ケ日の間、三世の諸佛の御名を唱へて、六根の罪を懺悔し侍る心也。寶龜五年十二月よりはじまる云々。(岡)公事根源によれば、仁壽殿の本尊觀音の畫像を移して、清涼殿の母舍の御帳臺の中にかけ、廂に地獄の繪の屏風を立つる也。◎ちごくのゑの御屏風とりわたし　(春)御佛名の所（清涼殿）よ

行成の下恐らくは「の君」とありけんを落しゝなるべし
物語せんと　春本「せんと」の三字なし抄本による

源平重代武士補レ之。長二人近來一人、先生是也。連廿人、此内木鳥、左右各一人云々。又仁安三年三月九日、人車記、坊官除目ノ條、籠鳥とあり。是等ことりは、部領にて、連の中の長をいふ。といはれたる、此の說を合せて考へ知るべし。といへり。直按するに、相撲の部領使たも、コトリヅカヒと訓むなれば、木鳥も籠鳥も、借字にて、共にコトリと訓むべし。但し傀儡の部領は、鎌倉時代に見えたる、遊君ノ別當といへる職の類を謂へるにや。是れが何故にこゝちよげなるにか。審ならず。又「くぐつの小鳥」とある方の解は、傍註に、わなくゞつとて、俗にいふ、こぶちの事なり。筌締の二字を、わなくゞつと通じてよむ。くゞつにかゝる鳥は、人のとりもつもの也。といひ、抄には、生ながらくゞつに入れて送りたらむは、賞翫なるべし。といへり。清水氏も、此の方に據りて云ふやう、くゞつは籠なり。萬葉三に、角麿。「しほがれのみつのあま女のくゞつもて玉藻かるらむいざ行きて見む」籠中の鳥なり。といへば、前田氏は又、門人ながら之を非として、和名抄、莎草、具々と見えたるは、今俗にいふくご繩のくご也。之を以て編み作りたるを、くぐつといふなるべし。顯昭が藁もて作りたる、形は袋の如しといへるも、大よそたがはず。されば、小鳥など入るべき籠にあらず。異本ことりは、字の落ちたるなるべし。」などありて、いづれをいづれと定めがたし。余も亦愁に僻案をいはむ、部領をコトリと訓むも、一部の中に專と事執る長をいふにて、コトリも本は、コトリの略語なれば、必ず官職の稱とは限らじ。倡くゞつは前にも云ふ如く、妓女の木偶を舞はして、旅人漂客などを慰むる者なるが、其れらが中に、專と事執る者ありて、傍より歌ひはやしなどするが、木偶の舞ふにつれて、面白げに見え聞ゆるからに、心ちよげなるものとはいへるならむ。◎除目に第一の國得たる　㊟正月あがためしの除目に、大國などの受領に成たる事なるべし。大國

前田侯爵家古寫本を見たるに「ご良うゑにふりはたとりもちたるもの」とありて猶「こゝちよげなるもの」のうちに入れり

王とも武塔天神とも申也云々。(補)美隆云、十二月往來、貴嶺問答に、御靈會ノ馬長、今年殊其抄汰候云々。雖ニ春ノ柳挿ニ章腰一、猶可レ用ニ秋ノ花一。桔梗二枝可ニ造賜一也、穴賢云々。返事に、馬長ノ腰差造花之事、承候畢。先就ニ無下内外上之嚴旨一、爭(イカデ)不レ盡ニ眞實忠節一哉。恐々謹言とあり。造花などさして、花やぎたるのなるべし。◎御靈會のふり幡　(補)傍註に云、御靈會の祭の時、もとは幡をつけ、兩方の人を制したるを、振幡といふとぞ。今は桙をふる事になりけり。直按するに、振幡の下、「とりもてるもの」とありしを、書き落したる也。幡を振りてさしまねく通りに、路上の群集の靡き從ふゆゑ、こゝちよからむと也。

とりもてるもの

くゞつのこととり。除目(ヂモク)に第一の國えたる人。

◯とりもてるもの　(春)此詞、異本にはなくて、くゞつのことゝりをも、前の心ちよげなる物の内に書つらねたり。(補)此は必す前段「こゝちよげなるもの」の中に入るべきなり。さては「とりもてるもの」とある詞も、題の詞にあらで、「御靈會の振幡執り持てる者」と、つゞけて讀むべきを、「こちよげなるもの」いとほしげなきもの」などいふ類ひぞと心得て、古くより題の如く書(カ)き標(シル)し誤りて二段に分けしなるべし。岩崎氏も亦、こゝに心付きたりしはよろこばし。◎くぐつのこととり　(補)抄本、註本、其の外にも、くぐつの小鳥とあり。いづれ宜しからむ、今遽に決め難し。まづ「こととり」とある方について、諸家の考説を尋ねむ。春註には、傀儡、琴取にやといへり。そもそも傀儡とは、元土偶の事なるが、之を舞はする妓女の類ひを、中古以後、打ちまかせて、くぐつといへり。岩崎氏は云く、くぐつの長をいふにや。さいふ故は、京師山田氏(以文の事か)の説に、類照本百官抄に、帶刀者撰ニ重代侍一補レ之、自ニ公家一被レ補レ之也。昔

七三（心ちよげなるもの）

こゝちよげなるもの　うづゑのことぶき（イほっし）　神樂（カグラ）のにんぢやう（人長）。池のはちすの村雨にあひたる　御りやうゑの馬をさ（ず）。又御りやうゑの振幡（フリハタ）とりもてるもの

◯うづゑ　〔春〕卯杖は、正月上の卯日、東宮を始め奉り、左右の兵衛府作物所などより、大内へたてまつる事也。〔補〕延喜式によれば、梅・桃・柏・椿・木瓜・曾波木・比々良木等、十種ばかりの木を、長さ五尺三寸に切り三束ほどに結ひて奉る也。かくして魑魅を逐ふ厭勝とする由なり。◯ことぶき　〔春〕祝言。〔補〕卯杖を人に贈るに、祝辭する也。されば祝ひの杖とも歌によめり。俗異本にほうしとあるは、ほがひの草假名の似たるより、寫し誤りたるなるべし。紫花物語つぼみ花の段に、卯杖ほがひの事見えたり。夏陰云、夫木抄一卯杖ほがひを聞しめして、花山院御製「朝まだき祈る卯杖のしるしあらば千とせの坂もゆかざらめやは」卯杖をもて、安らかに齢のべむかし。など言（コト）ほぎせるにや。◯神樂のにんぢやう　〔春〕人長は、神樂の舞人陪従などの長也。内侍所の御かぐらに、韓神（カラカンソノコマ）其駒などの時、起て舞ふもの也。〔補〕されば他よりも心地よげに見ゆる也。◯池の蓮の云々　〔拾〕暑氣の比、村雨おびたらむ蓮は、いかばかり涼しくも心ちよからむと也。◎御りやうゑの馬おさ　〔春〕六月十四日、祇園の御靈會に、禁中より馬を昔はひかれし也。公事根源云、祇園御靈會、十四日此まつりの日、禁中にはことなる事なし。馬長など催しつかはさるれども、御覽はなし。祇園の社は、貞觀十一年に託宣の事ありて、山城の國にはうつし奉しにや。素戔烏尊の童部にて、牛頭天

ば也。◎とりこ (補)養子をいふ。愛らしき顔したる兒を、取りて養はんこそ本意なれと也。◎しぶ〳〵に思ひたる人 (補)始より聟にならんとも思はざりし人也。

七二（いとほしげなきもの）

いとほしげなきもの。人によみてとらせたる歌のほめらるゝ、されどそれはよし。遠きありきする人の、つぎ〳〵えんたづねて、文えんといはすれば、知りたる人のがり、なほざりにかきてやりたるに、なまいたはりなりとはらだちて、返事もとらせで、むとく（無徳）にいひなしたる。

◎いとほしげなきもの (春)なしからぬ心もあり。愛相なきこゝろもある也 (補)濱臣云、勞の訓也。いたはしの轉語也。さればいとほしげなきものに、今俗にいふ氣のどくでないといふ意也。◎人によみてとらせ (補)人の請ふに代作して與へたるをいふ。◎されどそれはよし (春)人の爲にして、其かひあればよしと也。次に人のためにしても、其かひなき事をいはんとて也。◎遠きありきする人の云々 (補)抄に云、遠國へ下る人なり。つぎつぎに縁尋ねてとは、下る國のつぎ〳〵に、御ゆかりなど侍らば、下る次手に文を届けむと、いひこす義なり。なまいたはりとは、文得し人のおもはくなり。彼の文に、等閑に書きやれるを見て、腹立ち思ひ、上（ノボ）る比は、返事もやらず、愛なくいはれんは、いとほしげなかるべし。◎むとく (補)春の傍註に、無徳とあるよろし。無得の字をかけるはあらず。もと無ニ宿徳一といふ語の略にて、現語の下品、また下作・下等などの意。なほ、むとくなるものの條に委しくいへり。

るは拙し。◎めでて　補感じて。風雅の心を賞して也。◎あまたゝびになれば　春其聲度々きけば、其聲を女房の皆聞知て也。◎まかでまゐり　春上達部の禁中を退出し、又參內せらるゝに、大かたに急ぎたる公用などなきは、后宮へ參上と也。后宮の御威勢をいふなるべし　◎おぼろげに云々　補おぼろげならずといふ意を、當時の俗語に、唯おぼろげといへり。非常にといはんに同じ。

七一（あぢきなきもの）

あぢきなきもの。わざと思ひたちて、みやづかへに出で立ちたる人の、ものうがりて、うるさげに思ひたる、人にもいはれ、むづかしき事もあれば、いかでかまかでなんといふことぐさをして出でて、親をうらめしければ、又參りなんといふよ。とりこの顏にくさげなる。しぶ〳〵に思ひたる人を、しのびて聟にとりて、思ふさまならずとなげく人。

◎あぢきなきもの　補濱臣云、あぢきなきは無益の意にて、こゝの條々は俗言に、要でもない事をせしとくやむ意をこめし詞なり。◎わざとおもひたちて　春親の態々思ひたちて禁中へまゐらせしむすめ也。◎人にもいはれむづかしき事も　春宮仕うるさげ也と人にもいひたてられ、我も實に物うければ也。◎いかでかまかでなんと　春何とぞして里へ退出せんと、つねの言種にいふ也。ことぐさは、口ずさびに常に云也。◎おやをうらめしければ　補親は宮仕へを止めて退出したるを、叱責などするに、是れ亦うらめしけれ

千本によりて改む

うたよむもあり。よるもひるも、殿上人のたゆる折なし。上達部まかでまゐり給ふに、おぼろけにいそぐことなきは、かならずまゐり給ふ。

◯やのさまも云々　◯普通の殿舍よりは屋も高く、人氣遠くて、物すごき樣なれどと也。イ本けうとくとあるも、氣疎くにて、同じ意也。◯もやはおにありとて　◯化生の物ありとて、おそれ隔てて也。南殿の鬼の、貞信公をおびやかし、河原院の融の、京極の御息所をとりいれし類、古今著聞第十七變化の部に猶此たぐひ多し。◯またびさし　◯孫廂のこと。標記、小右記等に、又廂ともかけり。常の廂の外側に、又一側ある廂なれば然いふ。◎殿上人のはみじかければ　◯上達部と殿上人とは、隨身の隱聲（サキノコヱ）も差異あるにや。前にも殿上人の隨身ども、さきを忍びやかにみじかくとあり。◎おほさき小さき　◯前追ふ聲の大小に就いて、大前小前といひつけたるなり。古より上達部と殿上人とは、前おふ聲を差別せしならむ。山田錦所著「山田の落穗」の中に、先をおふ事。公卿のは、オーヤーと唱ふ。之をオヤイサキといふ。殿上人はコーヤーととなふ。之をコヤイサキといふ。と見ゆ。此の書の著者以文翁は、裏松光世卿の直門なれば、正しき傳なるべし。◎われもと〳〵とおひつぎて　◯淸少先立ちて行けば、他の女房たちも、あとより追ひ續ぎて行くとなり。おひ付きにはあらじ。つぎと濁りてよむべし。◎なにがし一こゑの秋　◯古詩を朗詠する也。是河原院にて夏日閑避㆑暑といふ題を、源英明、池冷水無㆓三伏夏㆒松高風有㆓一聲秋㆒といへる句を、何々一聲の秋と、やはらかに書たる文の一躰なるべし。◎月を見給ひけりな　◯こゝにて句を切り、とめでてと讀むべし。なは感動詞にて、花の色は移りにけりな」のなに同じ。諸本「など」とつゞけて讀め

けりな諸本
けるとあり

しばしや。など云々 (春)暫く待ち給へ。何とてさやうに、猶明けぬ夜を見捨てゝ、急ぎ給ふぞとなり。◎とありてなど (春)しばし有てと也。とばかりありて、などいふとおなじ心なるべし。(補)此の條は、男子の禁中を退出するを、女房の局より、呼びて戯れかゝるなり。

七十（一聲の秋）

職の御ざうしにおはします頃、木立などはるかに物ふり、屋のさまも高うけどほけれど、すゞろにをかしうおぼゆ。もはや鬼ありとて、皆隔て出だして、南のひさしに御きちやう立てゝ、またびさしに女房はさぶらふ。このゑのみかどより、左衛門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人のはみじかければ、おほさきこさきと聞きつけてさわぐ。あまたゝびになれば、其の聲どもゝ皆きゝしられて、それぞかれぞといふに、又あらずなどいへば、人して見せなどするに、いひあてたるは、「さればこそ」などいふもをかし。在明のいみじうきりわたりたる庭に、おりてありくをきこしめして、御まへにも起きさせ給へり。うへなる人々の限りは、皆おりなどしてあそぶに、やう／＼あけもてゆく。左衛門の陣にまかりて見んとてゆけば、われもわれもとおひつぎてゆくに、殿上人あまたこゑして、「なにがし一こゑの秋」とずんじてまゐるおとすれば、にげいりて物などいふ。「月を見給ひけりな」と、めでて、

すぐ〳〵しうさしあゆみて出でぬるもあれば、わらふを、「しばしや。など。さ夜を捨てていそぎたまふ。とありて」。などいへど、こゝちなどやあしからん。たふれぬばかり、もし人や追ひてとらふると見ゆるまで、まどひ出づるもあめり。

ⓒりんじのまつりのでうがく　【春】賀茂の臨時祭十一月なり。其祭に舞樂あるを、禁中にて先試樂有り　【補】之を調樂ともいへり。公事根源に、「試樂は調樂ともいへり。まづ音樂を調べこゝろみる心なり」と見ゆ。ⓒとのもりの官人などの長き松　【春】主殿司は炬火庭火などをつかさどる者也。江次第臨時祭の試樂に、主上入御の時、若及₂昏黑₁、主殿官人奉₂炬火於庭中₁」とあり。【補】長き松は續松の長きなり。主殿の下官、松明を持ちて庭上に立てる也。ⓒ日の裝束して云々　【補】日は晝の義。衣冠を殿居裝束といふに對して、束帶を日の裝束といふ。偖（サテ）調樂に參る公達の、束帶したるまゝ、女房の局の前に立留りて物などいふ由なり。ⓒ殿上人の隨身とも　【春】中將少將などの、召具せられし隨身也。イ本供の隨身とあるは、彼君達の隨身也◎さきを忍びやかに云々　【春】ひそかに警蹕する也。調樂始れば、高くはさきをおはで、わが主君の爲ばかりに、閑に聲短くさきおふ也。【補】警蹕は天皇に限りて申す詞也。後世公卿の爲にもいふはいと畏（カシコ）し。臣下の先追ふこと、次の條に示すべし。ⓒ新に生ふる富草の花　【春】富草は稻の事と　梁塵愚案抄₂有【補】古本風俗歌に、荒田。安良太仁於不留止見久佐乃波奈天仁川見禮天見也尸末井良牟奈加川太衣（アラタニすフルトミクサノハナテニツミレテミヤヘマヰラムナカツタエ）とある、是れなるべしと見ゆいへり。謠ひものゝ詞なり。ⓒまめ人　【補】濱臣云、まめ人は忠誠の人の意にて、ほめたる詞なるを、こゝには轉じて、正直すぎたることゝせり。ⓒすぐ〳〵しう　【補】直々し也。俗にいふズン〳〵と。◎

て半身内へ入たる也　◎もかうの下は唯すこしぞある　〔補〕帽額の事は上（春本二）にいへり。濱臣云、もかうは今の水引などの類にて、天井にかけて垂れたるもの也。よりてもかうと几帳との間、少しあきたるをいへりと云々。天井にかけて、といへるは誤にて、簾に添ひて長押より垂れたる也。簾の内には三尺の几帳を立てたるが、几帳の手の上と、帽額の垂れたる下端（ヘシ）との間、一二尺ばかりの簾（ス）の所より、透きて見ゆるをいふ。簾を卷あげとある註非なり。◎顔のもとにいとよくあたり　〔補〕帽額と几帳の上との透きたる所に、恰も好く内外男女の顔の、あたりて相見ゆるをいふ。◎たけのいと高く云々　〔補〕餘りに高き人低き人の顔は、此のすきたる所の上下になりて、相見難からめど、世の常の人ならば、簀ノ子に立てると室内に坐せるとにて、此の透間より顔のあたりたるがをかしと也。春抄の解誤りたるより、他の註釋も亦誤りたり。

まして臨時の祭の調樂（テウカク）などはいみじうをかし。とのもりの官人などの、ながき松をたかくともして、くびはひき入りてゆけば、さきはさしつけつばかりなるに、をかしうあそび笛ふき出で（いだで）て、心ことに思ひたるに、君だちの日のさうぞくして、たちとまり物いひなどするに、殿上人のずゐじんどもの、さきをしのびやかにみじかく、おのが君だちのれうにおひたるも、あそびにまじりて、つねに似ずをかしうきこゆ。夜ふけぬれば、猶あけてかへるをまつに、君だちの聲にて、「あらたにおふるとみ草の花」とうたひたるも、此の度は今すこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらん

古本につきて改む

いと高く、短かゝらん人などやいかゞあらん。猶よのつねのはさのみぞあらん。

◎こゝへとしも思はぬ人　〔通〕清女の局へ來べしとも思はぬ、意外の人も共々立止りぬ。◎いるべきやうもなくて　〔春〕志ありて來たるにあらねば也。〔通〕此の註いかゞあらむ。志ある人も、多數うちつれて來ては、入るべき樣もなしと也。濱臣云、此の一句に、上のしのびてこゝへ心ざし來たる人の事にかへりていふ也。◎すそのつま云々　〔春〕几帳のもとより、女房のきぬのすその、すこし見ゆるさま也。◎なほしのうしろにほころび　〔通〕直衣に綻の出來たるも知らざるさまをいふ也と、濱臣の說あれど、活字本に「綻びず著たる」とあるに注意すべし。按ずるに、當時直衣を常に着たれば、綻びがちになるにや。然るに若き公達などの服裝つくろふ人々は、聊も綻び斷やさず、用意したる事をいへるならむ。◎青色　〔通〕麹塵を本名とす。經青緯黃の織物なれば、青色の御袍と稱して、天皇の御料なり。臣下は著用し能はざる品なれども、藏人は御側近く奉仕すれば、賜はりて著するを規模とす。◎うけばりて　〔春〕河海云、諸。はゞかる事もなきをいふ也。我はと思へる躰也。此双紙の心は、さやうに我はがほにはえたてらず。少しそばめたるさま也。◎へい　〔通〕春註に壁也とあるはいかゞ。塀なるべし。◎いとこう　〔通〕例の紫の色也。◎袖うちあはせて　〔春〕袖かき合せてといふ心也。つゝしめるさよ也　〔通〕直按するに、此の一節は、女房たちの局に忍び來たる公達うへ人の、二人三人來あひたる時のさまをいへるにや。簾の中に、女房の衣裳美しくこぼれ出てたるに、また盛裝したる公達、六位の藏人も、憚り遠慮したるさまに、局口にはえ立たず、塀の方にのみなるが、をかしとなるべし。◎いろ〳〵の衣などこぼし出　〔通〕春註に指貫の脇などより、下着の色々見えたるとあるいかゞ。直衣の襴より、出衣の見ゆる也。裝束圖解出衣の條見るべし。◎すをおし入れて　〔春〕簾を押入

ほころびたえす云々活字本にはほころびすきたるとあり

いとよく春本にくゝとあれど干蔭

は未だ寝入らじと、外の男も推すらんと也。◎さなゝなりと 圍寝入らぬと推せんと也。◎やなら 圍弱らの轉とぞ、強くせぬにいふ。静に密になどの意。俗語ソット。◎かけながら 圍内より物蔭によりて、共さまな聞く也。圍濱臣云、かけながらは、清みてよむべきか。戸の懸金は掛けながら其のまゝにて、唯近くよりてといふ意なるべし。次の文に、叩かれどあけたればと有るを想ふべし。と此の説よろし。

又あまたのこゑにて、詩を誦じ歌などうたふには、たゝかねどまづあけたれば、ここへとしも思はぬ人も立ちとまりぬ。入るべきやうもなくて、たちあかすもをかし。みすのいと青くをかしげなるに、几帳のかたびらいとあざやかに、裾のつますこしうち重なりて見えたるに、なほしのうしろに、ほころびたえずきたる君だち、六位の藏人の青色などきて、うけばりて、やり戸のもとなどに、そばよせてえたてらず。へいの前などに、うしろおして、袖うちあはせて立ちたるこそをかしけれ。また指貫いとこう、直衣のあざやかにて、いろ／＼のきぬどもこぼし出でたる人の、簾をおしいれて、なから入りたるやうなるも、外より見るはいとをかしからんを。いと清げなる硯ひきよせて文かき、もしは鏡こひてびんなどかきなほしたるもすべてをかし。三尺の几帳をたてたるに、帽額のしもは、たゞすこしぞある。とにたてる人、内にゐたる人と、物いふ顏のもとに、いとよくあたりたるこそをかしけれ。たけの

ふと知るこそをかしけれ。いと久しくたゝくに音もせねば、ねいりにけるとや思ふらんと、ねたく、すこしうち身じろくおと、きぬのけはひも、さなゝりとおもふらんかし　あふぎなどつかふもしるし。冬は火桶にやをら立つる火箸のおとも、しのびたれどきこゆるを、いとどたゝきまさり、こゑにてもいふに、かげながらすべりて聞くをりもあり。

思ふらむと　春本との字なし抄本による

◎内のつぼねは云々　〔春〕是れより禁中の局の事をいへるなり。◎細殿　〔補〕廊のかたへを、女房たちの局としたる所なり。委しくは、拙著宮殿圖解を見るべし。◎上の小蔀　〔補〕蔀の事上にもいへる如く、中昔よりは、格子に板をはりて、今の雨戸の用をせしものなるが、之れを中より切りて、上の方を廂に釣り上げおくを、上の小蔀といへる也。されば、あげたればと濁りて讀むべし。上ぐる事なり。◎わらはべ　〔春〕里の親類などの童なるべし。◎こと所のやうに　〔春〕禁中の廊なれば童も心する也　◎ひるなどもたゆまず　〔春〕宮仕の心也。禁中なれば、晝夜愼みて油斷なき也。◎くつの音　〔春〕禁中を行きかふ人の沓の音なり　〔補〕清少の局へ、忍びて來る人の、沓の音の、此局の前にて止りて、ひそかに指にて、戸をたゝく也。◎およ び　〔補〕おは接頭語、たゞ指の事なり。およびとかきて、小指の事とするは非也。◎みじろくおと　〔春〕内に身うごかし、衣の音などするは、ねいらぬとや、ねたくも推しつらん。扇をつかひなどけしきばむさまも、しるくきこゆると也、〔補〕うちみじろくのうちは、添へたる詞也。内にと釋きたるはわろし。傍なる人に憚りて、久しく音もせねば、寝入りけると思ふらむ。それがねたましくて、少し身じろく音聞ゆれば、さて

ふなり。◎かたけれ (春)實にありがたけれといふ心也。◎物語集 (抄)物語は、こまのゝ物語、竹取の物語の類ひ也。集とは、万葉集、古今集などこの類ひ也、◎男も女も法師も云々 (磐)春本にかくあるまゝに說かば、男どち女どち、又法師は法師と語らひ契りて、末まで中よき事と見るべくや。抄本には「男女ないはじ。女どち契深くして語らふ人の、中よき人かたし」とありて、其の註に男女の中の契りは、末遂ぐるあれば、さしおいて云はず。女房たちの、互に相變らず親しき事は、ありがたきと也とあり。◎かいねりうたせたるに ◎源氏末摘花に、かいねりこのめるとあり。河海云、搔練は、兩面ふくさ張にて中重なし。紅色也。(補)搔練の帛を打ちて光澤(ツヤ)の出づる樣にせしに、よき程にうちて、光澤のよく出づる事を、ありがたき事といひたる也。

六九（内のつぼね）

内の局は、細殿(ホソドノ)いみじうをかし かみの小蔀あげたれば、風いみじう吹き入りて夏もいと涼し。冬は雪あられなどの、風にたぐひて入りたるもいとをかし。せばくてわらはべなどののぼりゐたるもあしければ、屏風のうしろなどにかくしするゑたれば、こと所のやうに、聲たかく笑ひなどもせでいとよし。ひるなどもたゆまず心づかひせらる。よるはたましていさゝかうちとくべくもなきがいとをかしきなり。沓(クツ)の音のよひとよ聞ゆるがとまりて、たゞおよび(指)一つしてたゝく(戸を叩也)が、其の人なゝなりと、

うつすに」春本にの字なし抄本の字に從ふ

男も女も法師も」抄本には「男女など法師も」とあり。はいはじ女ばちと」全くてり字三字ものなし

六八（ありがたきもの）

ありがたきもの。舅にほめらるゝ壻。又しうとめにおもはるゝよめのきみ。ものよくぬくるしろがねのけぬき。主（シュウ）そしらぬ人のずさ（従者）。露の癖かたはなくて、かたち心ざまもすぐれて、世にあるほど、いさゝかの疵なき人。おなじ所にすむ人の、かたみに恥ぢかはし、いさゝかの隙（ヒマ）なくようゐしたりと思ふが、つひに見えぬこそかたけれ。物語集などかきうつすに、本にすみつけぬ。よきさうしなどはいみじく心してかけども、必ずこそきたなげになるめれ　男も女も法師も、ちぎりふかくしてかたらふ人の、末まで中よき事かたし。つかひよきずんざ（者）。かいねりうたせたるに、あなめでたと見えておこす。

◎ありがたきもの　〔補〕よに在り難きことにて、珍しき由なり。◎しろがねのけぬき　〔句〕銀は性にぶくて、鐵に及ばねば也　〔補〕和名抄第六に、鑷子、波奈介沼岐（ハナケヌキ）、俗云計沼岐（ケヌキ）、拔₂取毛髮₁也とありて、昔より今もかはらずあるものなり。◎かたは　〔補〕かたわとかきて、車の片輪の事といふ說あれど非也。かたはの假名をよしとす。是れにつきて亦、鳥の片羽なりともいへど、いかゞ。物の正しく具はるをまほといふに對して、片なりに不具なるを、かたほといひ、轉じてかたはともいへるなり。車また鳥などより出でたる詞にあらず。◎かたみに恥ぢかはし　〔抄〕互にたしなみ恥らふ心也　〔補〕用意周到にして、不作法に過ぎざるをい

げなる也。◎をのゝえもくちぬべき　(春)河海云、六帖「斧のえはくちなば又もすげかへんうき世の中にかへらずもがな」晉の王質が石室山にいたりて、一局の碁を見るほどに、斧の柯の朽たりし事也。述異記に委し。(補)長時間にわたることの隱語なり。◎むづかし　(補)此の詞は、本書「むつかしきもの」の條に、猫の耳の中、鼠のいまだ毛もおひぬを、巣の内よりあまたまろばし出でたる云々。とあるにても知るべく、むさくろしく氣味わろき意にいふが本にて、煩はしく厭はしき意にも轉ぜり。こゝも厭はしき事也。◎たがやかにうちながめて　(春)をのゝえも朽ぬべしと詠吟せし也。イ本うちあくびては、長あくびする也。◎みそかにと思ひて　(春)みそか、密也。おのれはひそかにいふと思ふもめども、こなたに聞ゆるなり。◎煩惱苦惱　(補)佛經の語をもてわざといふ也。◎かのいふものは　(春)下人の事なれば、さして心なしともおぼえすと也。◎此ゐたる人こそ云々　(春)かやうの下人を具せし人こそ也。日比此人を、をかしと見聞きし興もさむると也。◎又さはいろにいでてはえいはず　(春)さやうに我らは、煩惱苦惱など、詞にいでてはえいはずと、おとなしやかにいふ也。是もいはぬやうにて、あてゝいふ詞也。◎したにゆく水のと　(春)六帖「心にはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」此うたはならの帝、磐手といふ鷹を愛して、大納言にあつけさせ給へるに、大納言其たかをそらして、え參出でざる事を奏し申されたれば、帝物もの給はで「いはでおもふぞいふにまされる」との給ひしに、後人上句をさま〴〵つけたるよし大和物語にあり。◎あまたあらん中にも　(春)あまた下人あらん中にても、さやうに心なき者にはあらぬ心ばへを、よく見て召連ありくべき事ぞと也。

春本心つきなく抄本づきなし。とあるに從ふ

よき人の以下千蔭校本によりて改訂したる所多し

ゐてありくべき抄本ありかまはしきとあり

春曙本巻三終

六七（懸想人にて來たるは）

けさう人にてきたるは、いふべきにもあらず。たゞうちかたらひ、又さしもあらねど、おのづから來などする人の、簾（ス）のうちにて、あまた人々ゐて、物などいふに、入りて、とみに歸りげもなきを、ともなるをのこわらはなど、「をのゝえもくちぬべきなめり」と、むつかしければ、ながやかにうちながめて（イニあくび）、みそかにとおもひていふらめども、「あなわびし。ぼんなう（煩惱）くなう（苦惱）かな。いまは夜中にはなりぬらん」などいひたる、いみじう心づきなし。かのいふものは、とかくもおぼえず、此のゐたる人こそ、をかしう見きゝつる事もうするやうにおぼゆれ（清少の心也）。又「さは（是も供人の詞也）いろにいでてはえいはずある」と、たかやかにうちいひうめきたるも、したゆく水のいとをかし。たてじとみ、透垣（スイガイ）のもとにて、雨ふりぬべしなどきこえごつもいとにくし。よき人の御供などはさもなし。きんだちなどのほどはよろし。それより下れる際は、さやうにぞある。あまたあらん中にも、こゝろばへ見てぞ、ゐてありくべき。

◎けさう人　㊅懸想人、われに心をかけて來たる人なり。此段は、供なる人の心なきを、つれまじき事をいふに、懸想人の供の心なきは勿論、只かたらふ人などの供の、心なきもわろき事をいふ也。◎すのうちにてあまた人々　㊅清少は簾中にて、女房どち物がたりするに、彼來たる人も入て、頓にも歸るけしきな

春本あけながらなればとあり今屋代校古本による

春本又と夜と二字なし抄本によりて補へり

六六（しのびたる所）

しのびたる所にては、夏こそをかしけれ。いみじうみじかき夜の、いとはかなく明けぬるに、つゆねずなりぬ。やがてよろづの所あけながらあれば、涼しう見わたされたり。猶いますこしいふべき事のあれば、かたみにいらへどもするほどに、たゞゐたるまへより、からすのたかくなきてゆくこそ、いとけそうなる心ちしてをかしけれ。又冬の夜いみじく寒きに、おもふ人とうづもれふしてきくに、鐘の音の、ただ物のそこなるやうに、聞ゆるもをかし。鳥のこゑも、はじめは、はねのうちに口をこめながらなければ、いみじう物ふかくとほきが、つぎ／＼になるまゝに、ちかきこゆるもをかし。

◎忍びたる所にては　〔春〕人に忍びて逢ひたる所なり。是より又、別の事の、鳥の興ある事をいふ筆すさび也。◎又冬の夜いみじう寒きに　〔春〕前に夏の事をいひたれば、こゝは又冬の事をいふ也。〔磐〕春本には唯冬のいみじうとあれど、抄本冬の夜とあるよろし。◎うづもれふし　〔春〕衾にまつはれて也。◎物のそこなるやうに　〔春〕衾のうちにてきゝゆゑ也。◎つぎ／＼になるまゝに　〔春〕次々也。世に一番鳥二番鳥などいふ次第／＼也。

ばらなど侍れば云ふにや云々。此の説よろしげなり。

六五（たとしへなきもの）

たとしへなきもの。夏と冬と。よるとひると。雨ふると日てると。わかきと老いたると。人の笑ふとはらだつと。くろきとしろきと。思ふとにくむと。あゐ(藍)ときはだ(黄蘗)と。雨と霧と。おなじ人ながらも、心ざしうせぬるは、まことにあらぬ人とぞおぼゆるかし。ときは木多かる所に、からすのねて、夜中ばかりにいねさわがしく、おちまどひ木(コ)づたひて、ねおびれたる聲になきたるこそ、ひるの見めにはたがひてをかしけれ。

◎たとしへなき　〔春〕たとへむ方なく、かはりたる心也。〔補〕比較にならぬこと。◎あめと霧　〔春〕異本此下に火と水と。肥たる人とやせたる人と。髪長き人とみじかき人ととあり。◎おなじ人ながらも心ざしうせぬるは　〔春〕白氏文集大行路に、人心好惡苦不ㇾ常、好生二羽毛一惡生ㇾ瘡。又云、妾顔未ㇾ改、君心改。又云、君不ㇾ見左納言右内史、朝承ㇾ恩暮賜ㇾ死。行路難不ㇾ在ㇾ水不ㇾ在ㇾ山、只在二人情反覆間一。といへるさまに似たり。◎いねさわがしく　〔春〕いねわろき事也。イニいねさがなくともあるもおなじ。◎ねおびれたる　〔春〕ねまどひたる也。〔補〕俗に云寝とぼけたる聲に鳴きたるが、晝見たる目にたとしへなき、卽ち比較にならぬとなり。

見め　抄本見るめとあり

出できたる者の心も知らぬに、やんごとなき物もたせて、人のがりやりたるに、おそくかへる。ものいはぬちごの、そりくつがへりて、人にもいだかれずなきたる。くらきにいちごくひたる。人のかほ見しらぬもの見。

㊀おぼつかなき 〔春〕物の分明ならず、心もとなき心也 〔□〕鈴木朖の雅語譯解にも「シツカリトセヌ」「マチドホナ」とあり。俗言の、氣にかゝりて安心せぬことなり。㊁十二年の山ごもりの法師のめおや 〔春〕後撰集十一詞書に、男のほど久しうありてまうできて、御心のいとつらきに、十二年の山籠りしてなん、久しうきこえざりつる云々。比叡山などに、禁足してこもる事也。此草紙の心は、山法師の久しく禁足してあるに、父は行ても相見るべきを、母は登山かなはねば、十二年のほど尤おぼつかなかるべし。〔□〕濱臣云、下文にもはるかなるものとある段に、「十二年の山ごもりのはじめてのぼる日」とあり。類聚國史に、弘安十三年六月壬戌、傳燈大法師位最澄言、夫如來制戒、隨機不同、衆生發心、大小亦別、伏望、天台法華宗、年分度者二人、於比叡山、毎年春三月先帝國忌日、依法華經、制令得度受戒、十二個年不聽出山、四種三昧、令得修練、然則一乘戒定、永傳聖朝、山林精進、建劫塵劫、許之。又云、天長八年夏四月丁丑、天台之宗年分度者、受戒之後、一十二年不聽出山、四種三昧、令得修練之故也、㊂あらはにもぞあるとて 〔春〕知らぬ人々に、燈あかくては、あまり顯證(ケソウ)ならむとて、態と燈ともさで也。㊃今いで來たる 〔春〕此比來たる從者の事也 ㊄やんごとなき物もたせて 〔春〕無止ヤンゴトナキ江次第に書り。こゝは大事におもふ物を、持せて他所へやりし也。㊅人のかほ見しらぬ物見 〔春〕祭の供、伶人なども、見知てこそは、一入おもしろかるべければ也。㊆くらきにいちごくひたる 〔春〕うつくしき色も見えねば也。〔□〕抄に虫なども侍り。或はい

ならず。又旁註には、さゝ山吹として、小さき山吹なりとあれど、是れもいかゞなり。直按ずるに、こゝはから葵の花の色の、山吹の如く、色は美しくこからねど、日のかげにしたがひて傾くが、山吹には、まさりたりといふことなり、此の草子の例の文體に、下にふくめてかきさしたるにもあるべし。◎いはつゝじ〔圏〕白氏文集十二云。山石榴一名山躑躅、一名杜鵑花、杜鵑啼時花撲々〔圏〕後拾遺集に和泉式部「岩つゝじをりもてぞみるせこがきし紅ぞめの色に似たれば」濱臣云、此歌の作者も、此草紙の作者も、同時代の女房なるを、かく引出でていはれつるは如何とも思はるれど、かゝる例もあることにて、此ほどの人たちは、そのをりに人目にふれし歌なれば、同じ時代の歌にても、引歌などにせしことゝ見えたり。狭衣物語に、千載集の公任卿のうるまのしまの人なれやの歌を、ひけるなども思ひあはすべし。夏陰云、同時の人の歌を引用する事、師の説の如し。賀茂保憲女集に、秋の宵の間に、心のゆかぬ所なく、もろこしまで思ひやれば」とかけるは、大貳三位の、もろこしまでもゆくものを」といふ歌を思へる也。保憲女と、大貳とは、和泉と納言との如し。◎さうびはちかくて〔圏〕抄本、薔薇は、人里近くあるものなれば、近くてと云也。◎むづかしけれど〔圏〕枝に針のあること也。◎くろぎのはしのつら〔圏〕黒木の階の面也。麁相なる階のほとりなり。朗詠云。階底薔薇入レ夏開。黒木は皮つきの木也。

六四 （おぼつかなきもの）

おぼつかなきもの。十二年の山ごもりの法師のめおや。知らぬ所に、やみなるに行きたるに、あらはにもぞあるとて、火もともさで、さすがになみゐたる。いま

のすはうに、いと濃きといへるは、色にて見たてしのみなり。然るを、後世ますほのすゝき、まそほのすすきなど云ふ事のありて、長明無名抄にも、委しくいへれど、昔古語を知らぬ人たちなれば、いとおちきなき事共なり。眞蘇芳なりといふも、此の草子よりいふことにて誤り也とて、ますうの薄などいふもの、ある事なき由の辯あれども、言長ければ略す。◎かしらのいと白く云々」〔補〕常久云、抄に薄の穂の白く見ゆるをいふなり。とある如し。おほどれたるとは、薄の穂のそゝけ、みだれひろがりたれるをいへるなり。◎かひろぎたてる 〔補〕春抄に、かいひろごり立てる人の、有樣に似たりとなり。とあれど、誤なり。かひろぎは、和名抄に、舭、船不レ安也 加比路久（カヒロク）とあると同じ詞にて、薄の風に靡きて、安からず動き立てるをいひて、老人のよろめき立てるによそへしなるべし。よそふる心ありて云々は、薄の老いはてたるさま、見どころなけれど、老人などに思ひよそへられて、其の老人をも、あはれと思ふべけれといふ意なり。◎さをしかのわきて 〔春〕後撰貫之「行かへり折てかざゝん朝な〳〵鹿たちならすのべの秋萩」又「さを鹿の立ならすをのゝ秋萩におけるしらつゆ我もけぬべし」◎からあふひ 〔春〕唐葵、催馬樂、淺緑の詠物に、からほひとあるも是也。童蒙抄云、向日葵とて、日の影にかたぶく也云々。〔抄〕千載集に基俊「あふひ草てる日は神の心かなかげさすかたにまづなびくらん 〔補〕常久云、日向葵は、今俗に日車とも、日まはりともいふものにて、七八月ごろ草のたけ七八尺ばかりにものびたち、花は黄色にて、菊に似たり。頂上につきて、大きさ徑六七寸もあるべし云々。◎色は濃かられど咲く山吹には 〔補〕常久云、此の文いかにとも心得がたし。抄には、次の岩つゝじの條につゞけて、岩つゝじの咲きし色をいふとあり。花の色は濃かられどさくといふは、山吹にかゝる詞なり。されど、山吹といふにはあらずと云々。などありて、いづれとも定か

されどの三字諸本なし唯宸本にのみあるよろしければ補ふ

風に春本なし宸本に従ふ

よそふるこころ春本にはこととあれと抄本宸本に従ふ

は、すゝきにこそあれ。穂先の蘇芳にいとこきが、朝ぎりにぬれて、うちなびきたるは、さばかりの物やはある。されど秋のはてぞいと見どころなき。色々にみだれ咲きたりし花の、かたもなく散りたるのち、冬のすゑまで、かしらいと白く、おほどれたるをも知らで、昔思ひ出でがほに風になびきて、かひろぎたてる人にこそ、いみじう似ためれ。よそふるこゝろありて、それをしもこそ、あはれとも思ふべけれ萩はいと色ふかく、えだたをやかにさきたるが、朝露にぬれて、なよ〳〵とひろごりふしたる、さをしかの、わきてたちならすらんも心ことなり。からあふひは、とりわきて見えねど、日のかげに従ひて傾くらんぞ、なべての草木の心とも覚えでをかしき　花の色はこからねど、さゝ山ぶきには。いはつゝじもことなる事なけれど、折りもてぞ見るとよまれたる、さすがにをかし。さうびは、ちかくて、枝のさまなどはむつかしけれどをかし。雨などはれ行きたる水のつら、黒木のはしなどのつらに、みだれさきたる夕ばえ。

◎これに薄(スヽキ)を入れぬ　(評)此の文中に、薄のことを書き入れぬを、見む人怪しむべしと也。是れ薄を特に賞翫して云へるなり。(一)おしなべたるをかしさ　(評)秋の野物中の上乗なるものは、薄なりとの意。◎ほさきのすはうに　(評)穂の色の蘇芳に染めし様なる也。是をますうのすゝきといふ也。(評)濱臣云、こゝに穂先

奴可豆。又蔯、牟可豆支と見えたる物なるべし。織、奴可豆は、豆の下に支の字を脫せるなるべし云々。さて此のぬかつきといへるは酸醬の中の一種にて、常のほゝつきよりは小さくして、實の數多くむすぶほほづきあり。それなるべし。(俗に千生ほゝづきといふものにや)さて夕顏の實の、はしたなく大きにむかへて、小さき實をとり出でて、かやうに小さく、はかなくなりともあれかし。といへるなり。〔補〕ぬかつきを糠舂にて、杵にやといへるは、昔手杵といふは、中くびれて、夕顏の一種の、瓢の實に似たるより、唯丸く大きく、ふつゝかなる形を見にくしとて、せめては、彼の杵の形なる、瓢の實、壺盧に似よとの戯れなるべし。夕顏の實と瓢の實とはやゝ近ければ、彼れを是れに代へよとはいひもしつべし。千生ほゝづきのやうにあれとは餘りなる懸隔ならずや、©みてぐら　〔箋〕旁註に信濃の御射山祭、七月廿七日、芦の穗にて幣をつくる。芦の花のみてぐらといふ。常久云、御射山祭は、薄の穗を以て、假屋などを造れる由にて、芦の穗にて、幣を造る事は、外に聞かず云々とて、大同類聚方を引いて、芦の事を、そのかみ美天久良ともいへるなるべしと、疑ひながら附記したり。げに此の類聚方は、後世の僞書なる事、今は著明になりたれは、證としがたし。©もえしも　薄に劣られど、〔原〕常久云、此の文心得がたし。今按に、劣られどのど文字は、ば文字の誤にて、おとらればなるべし。芦のもえ出でたるも　薄の生ひ出でたるに劣られば、薄の生ひたるより、芦は水のつらにてをかしうこそあらめ。といふ意なるべし。扨芦の花は穗のことなり。直按するに、もじもとある本に從へば(文字とは詞といふに同じ)芦はあし(惡)といふ詞に聞えて、薄といふことには劣らめど、(れなめの誤として)水邊なるがをかしとにや。

これにすゝきをいれぬ、いとあやしと人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさ

とせり。然れども素本春曙本などの文にて思へば、壺すみれと、すみれとは聊の別ある如く聞えたり。一說に、すみれに葉丸きと長きと二種あり。この丸き方、つぼすみれにて、長き方、たゞにすみれと名づくるなりといへり。猶考ふべし。◎おいていけはおし云々　〔補〕前にもいへるごとく、宸本抄本等に、此の一節なきにより、諸校本皆削り去りたれど、例の巳れが癖とて蛇足を添へば、「おいもていけば、おなじことうし」とありしが、脫(オチ)も誤りもしたるにや。壺菫もたゞの菫の花も、老いもて行きて、枯れ際になれば、同じやうに見苦しく、心憂しとの意にあらずや　◎しもつけの花　〔補〕宸本抄本には、夕顏の花の次にあり。常久云、和漢三才圖會に、繡線花、俗云之毛豆介　按繡線菊、高一二尺、葉似二蒲萄葉一而小、五月開二碎花一、狀似二胡蘿蔔一而淡赤色、可レ愛。又有二白花者一、一種樹二有繡線菊一、其樹葉似二粉團花一而枝頂上開レ花狀、似二繡線菊一、故俗呼云二木繡線菊一とある如くにて、今草しもつけ、木しもつけといひて二種あり。其のかみ、しもつけの花といひけむは、此の二種のうち、いづれなりけむ云々とあり。こゝは題に「草の花は」とあれば草花の方なるべし。抄には今の小手鞠といふもの也とあり。◎夕かほ　〔補〕此の下に、宸本抄本には、花のかたち朝顏に似てとあれど、實際を見れば、似たりとも云ひがたし。按ふに、て文字濁りてよむべきにや。夕がほの花は、朝顏に似ずして、而も朝夕といひつゞけられたるが、面白しとなるべし。◎にくき實のありさま　〔補〕實のいと大きにて、愛らしげなきをいふか。素本抄本旁註本等に、にくとあれど、にくき實のと、つゞけて讀める春本の方よろし。◎ぬかつき」常久云、槺春の意にて、杵のことならむといへる說(春抄)もあれど、杵をぬかつきといへる事、外に見えねばいかゞなり。今按ふに、ぬかつきといへるは、本草和名に、酸漿、和名保々都岐(ホヽヅキ)、一名奴加都岐、新撰字鏡に、酸漿、加我豸吾、又奴加豆支。また蘵、

紫羅傘の和名なイチハツ（一八）といふ。かゝれば此の一八を、カマツカといふにやと、珍しき説なり。一八は菖蒲の花に似て、戸塚程ヵ谷邊にては、茅屋の棟に植ゑおく風あり。「かにひの花」常久云、抄に今の世も、岩藤とて、人の愛する草花なりと見え、傍註に、今の世にも岩ふぢといふと見えたれど、いかゞなり。こは春曙抄に、雁緋なりとある如くにて、まことに今の世がんぴといへる花なるべし。但し同抄に世の常のがんぴは、藤にも似ず、春秋にも咲かず云々といへるは、精しく考へざるなり。今按ふに、まづ此の花、今の世春さくを剪春羅（センピ）といひ、秋さくを剪秋羅（センナウ）といひて、もと同類の花にて、其のさまいさゝかのかはりあるのみこそあれ。大かたは同じくて、ともに葉は桔梗などの葉よりは少し大きくて、切れ込みなき葉、莖のこなたに向ひつきて、花は石竹に似たる花咲く、いとをかしき花なるを、もとは春咲くをも、秋さくをも、ともにかにひの花とぞいひけむ。故（カレ）「春と秋と咲く、をかしげ也。」とはいへるなり。さて藤花に似たりとは、たがへる如くなれど、藤花はもと古本に、ふしの花とありけむを、假名たがへて、ふと藤とうつしたがへしより、つぎつぎに誤り來りて、遂には諸本藤の花とはなりぬるなるべし。さてふしの花といふものは、外の古きものには見えねど、貝原氏の大和本草に、頭書に和品とありて、ふし剪春（ガン）羅（ビ）、剪秋羅（センナウ）の別種あり。葉剪秋羅に似たり。葉は缺刻（キレコミ）なし。毎節より小枝出て、花咲く、剪春羅にまされり。赤ふし白ふしあり。葉は同じ。とあるものなり云々。㊂つぼすみれ　[illegible]抄本また群書類聚なる宸翰本その他、甲乙の校本にも、菊の所々うつろひたるとある下に、つぼすみれ、りんだうとのみありて、すみれ同じやうのものぞかし云々、しもつけの花。といふ迄の文字なし。常久云、伴氏の説に、この草、花の形、工匠具の墨斗（スミツボ）に似たれば、墨入の意にて、すみれとも、つぼすみれともいへるなるべし。と異稱同品

考ふべき事なり。濱臣云、鎌柄の意にて、形狀をもて見たてし名なるべし。美隆云、人の名に板持ノ鎌束と云ふあり。續紀廿四の四丁に見ゆ。或人、かまつか芝にまじりて生ずるなり。卯の花の小さきに似たり。すまうとり草の花にも似たり。田舍人よく知れり。直云、是れらの說によれば、かまつかは、一種の草花の名と聞ゆれど、雁來紅卽ち葉雞頭とは、似も付かず思はる。又雁の來る花とあるを、直に雁來紅の事とも定めがたし。彼れは花ならず葉なるをや。とにかくに、かりのくる花といふもの、解決を得ざるうちは、かまつかも亦確に云ひ難し。仍て例の「千種の根ざし」には、別に一案を出だせり云く、常久按ふに、枕草子は、諸本異同ありて、誤字なども多き趣きなれば、かまつかの花のつかは、つぼの誤り、又かりのくる花とあるかりは、中間に、へ文字を脫して、かへりの誤り、のくるは、めぐるの誤にて、もと古本には、かまつぼの花云々。かへりめぐる花とありけむを、はやくより誤り來たりたるなるべし。かまつぼの花は、本草和名に、旋復華、和名、加末都保（カマツボ）、一名加末保、康賴本草類編に、旋復華、和名、加末川保（カマツボ）、五月採花日、千廿日成、六月開レ花似ニ菊花一、一名金沸草、又加末保と見え、伊勢集に、かまつぼぐさ」山田をしそほづばかりももりつれば秋はからむとわがまつぼくさ」と見えたるものにて、今世をぐるまといへる草花なり。そは春苗出でて、二三尺ばかりにものびたち、細長き葉莖の、こなたかなたにつきて、秋、莖の末に、菊に似たる條ばかりなる黃なる花、多くさくものなり。さて旋復花とかけば、かへりめぐる花とぞ、文字にはかきたる。といへるなるべしとなり。諸說のうち、此の案を整へりとすべくなむ。然るに又一說あり。柳亭種彥いはく。按ずるに、雁の來る花といふ前に、闕文あるべし。さらでは文通せず。江戸近在に、一尺八寸村と書きて、カマツカムラとよめる所あり。鎌の柄は、一尺八寸あるものなれば也。よりて思ふに、

ことに、朝のみ咲くものなれば、いつしかと、此の花のみ朝貌の名はおひて、桔梗のあさがほなることは、人しらぬことにはなりぬるなるべし。◎かるかや」古くかるかやとよめる歌は、一種の草花にはあらず。まづ古事記上巻に、訓二茸草一云二加夜一と見え、日本書紀萬葉集などに、草ノ字をかや とよみて、もとカヤといへるは、何にまれ、屋を葺くものをいへる名なり。さてそを苅ることを、かるかやの云々などよめるよりうつり來て、中昔のころより、かるかやといへる一種の草花の名とはなれるなり。さて此のかるかやといへるものは、いかなる草をいへるか。猶よく考ふべし。補本草綱目に、菅茅只生二山上一、似二白茅一而長、入レ秋抽レ莖、開レ花成レ穗、如二荻花一結レ實尖黑、長分許、粘レ衣刺レ人、其根短硬、如二細竹根一無レ節而甘、とある是れか。今いふ苅萱とは別なるべし。◎りんだう」和名抄に、陶隱居本草註云、龍膽、味甚苦、故以レ膽爲レ名也。和名、衣夜美久佐（エヤミグサ）、一云邇加奈。字鏡に、龍膽、太豆乃伊久佐（タツノイクサ）、又云山比古奈。とあり。されど中昔よりして、すべては字音に、りうたん、りんだうとのみいひたり。りんだうは、りうたんの音の轉じたるなり。秋の末、紫色の花さきて、野山に多く、葉は笹に似たれば、俗にさゝりんだうなどもいへり。枝ざしむづかしげなるとは、枝ざしのうるはしからで、かじけたる如く、淸からぬをいへるなり。◎とりたてゝ人めかす 補取りたてゝ、賞翫すべき、草花とすべきにも、あらぬさまなれどといふ意なり。◎かまつかの花 補此の花につきては諸說あり。言長れど揭ぐべし。まづ春抄には「此の草子に、雁の來る花と書く由いへり。世に雁來紅といふものにや。」とあり。伊藤東涯の輶軒小錄に云、作州の人明石生を作ひ嵯峨の邊を行くに、道ばたに淡竹多く咲けるを見て、中國にては、かまつかと云ふといへり。されば、枕草子のもこれならむ。これら都にては、露草、又つきくさなど云ふものなり。また青花といふとあり。

やみのさまこそいとくおかしけれとあり
もえしもイ本もじもとあり

をかしうこそあらめと覺ゆ。

[illegible]この一段に、伊勢人殿村常久の著、千種の根ざしといふ冊子に、一々寫生圖を入れて、精しく明らめたれば、大かた該書の說をとりて摘要しゆくべし。◎なでしこ」常久云、やまとなでしこ、からなでしこ、兩種あること、萬葉などの古き歌には見えず」とて、古今集拾遺集千載集などに見えたる歌をあげ、さて云ふ、今世たゞなでしことといふは、野にもおひ、また苑にもうゑて翫(モテアソ)賞ぶ尋(ヨノツネ)常のなでしこの事なるべし。唐撫子は、今世こゝに石竹といひて、花やゝ小さく、花のまはり切り込み少なし。いづこにも園に植ゑて翫ぶ。この花中昔の頃や、外國より渡り來にけむ。さてから撫子とはいへるにもあらむ。云々。抄にもからとは、今の石竹といふもの也。やまとは、川原などにある桃色ひとへの花さくもの也と註せり。◎きゝやう」又云和名抄に、本草云桔梗、和名阿利乃比布岐(アリノヒフキ)、新撰字鏡に、桔梗、阿佐加保、又岡止々支。されど中昔の頃よりして、すべて字音に、ききやうとのみいひたりと見えて、物語書など、いづれもしかあり。◎あさがほ」又云、素本また活版本、傍註ノ本、春曙抄本などには、腕(ナヘ)てなし。こは後光嚴院宸翰寫異本、また屋代輪池翁所藏ノ寫本、また抄ノ本などにあるを用ゐたり。和名抄に、陶隱居本草註云、牽牛子、和名阿佐加保、とありて、中昔よりこなた、歌にも多くよみて、今世もあさがほといへり。さて萬葉集第八、秋野ノ七種ノ花をよめる歌の中なるあさがほを始め、同集中これかれよめるは、今世いふ牽牛子花にはあらずと云々。末に又曰く、牽牛子花を、朝貌といへるは、中昔の頃よりのことなるべし。此の草、此方にはいづくにも、野生のもの見えねば、萬葉集なる秋野の七種花をよめるは、疑ひなく桔梗なるべくして、この牽牛子花は、中昔のころ、外國より渡りこしか。又此方にて種まきて、生ひそめしものにて、此の花ま

◎歌の題は　◯よのつねの題のみならず、隠題によむべき物と見ゆ。◎みくり　[illegible]三稜草の方か。

六三（草の花は）

草の花は。なでしこ。からのはさら也。やまとのもいとめでたし。をみなへし。ききやう（桔梗）。菊のところ〴〵うつろひたる。かるかや（刈萱）。りんだう（龍膽）は、枝ざしなどもむづかしげなれど、こと花みな霜がれはてたるに、いと花やかなる色あひにて、さし出でたるいとをかし。わざと取りたてゝ、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名ぞうたてげなる。かりのくるはなと、文字にはかきたり。かにひ（イる）の花。色はこからねど、藤の花にいとよく似て、はると秋とさく、をかしげなり。つぼすみれ、すみれおなじやうの物ぞかし。おいていけばおなじなどうし。しもつけのはな。夕がほはあさがほに似て、いひつゞけたるも、をかしかりぬべき花のすがたにて、にくきみの有様こそいとくちをしけれ。などてさはた、おひ出でけん。ぬかつきなどいふものゝやうにだにあれかし。されど猶、夕がほといふ名ばかりはをかし。あしの花、さらに見どころなけれど、見てぐらなどいはれたる、心ばへあらんとおもふにたゞならず。もえしもすゝきには劣らねど、水のつらにて

宸翰本抄本等には枯梗朝顔かるかや菊の所ゝうつろひたるつぼすみれりんだうは枝ざらなど」とつゞきたり

すみれおなじやうのといふ一くだり傍線を引きたるだけは宸筆本抄本諸校本等になし　をかしかりぬべきの下宸筆本には　を葉のすがたぞにくき

さがり苔は別物也　◎はまゆふ　(春)童蒙抄云、濱木綿とは芭蕉に似たる草の、三熊野の濱に生る也。莖の皮のうすくて、おほくかさなると也。人丸も浦のはまゆふもゝへなるとよめり。

六一（集　は）

集は。古萬葉集（コマンエフシフ）。古今（コキン）。後撰（ゴセン）。

◎古万葉集　(春)万葉集の事也。清輔袋双紙云、此集末代之人稱ニ古万葉集一。源順集にも古万葉の中にと云事あり　是有ニ新撰万葉集若ハ菅家万葉集等一之故歟。新撰万葉集は、延喜御時抄ニ出之一云々。五卷也。◎古今　(春)むかしは本々さだまらざるを、定家卿貞應嘉祿の奥書の兩本を、證本に定させ給へり。中にも貞應本を、二條家には用らる　延喜の御時貫之以下四人の撰勿論也　◎後撰　(春)天暦五年十月、梨壺五人撰レ之。此本も朱雀院の塗籠の本。範永の青表紙の本などありしかど、定家卿の貞應二年の本、天福二年の本等を證本と用ふ。袋双紙云、嶋守遠高云、古今後撰拾遺を號ニ三代集一。以往相ニ加万葉集一號ニ三代集一而拾遺出來之後、棄ニ万葉集一用ニ拾遺一云々。

六二（歌の題は）

歌の題は。みやこ（都）　くず（葛）　みくり（水栗）。こま（駒）。あられ（霰）。さゝ。つぼすみれ（壺菫）。ひかげ。こも。たかせ（高瀬か）。をし（鴛）。あさぢ（淺茅）。しば（芝）。あをつゞら。なし（梨）。なつめ（棗）。あ□さがほ。

古名錄、茅の中に入れたれば、ちがやの類なるべし、常の茅の葉よりはなかしとの意なるべし。㊀まろこすげ 〔補〕丸小菅なるべし。古名錄に、おほゐ。また太藺と同じ物とせり。まろすげともいふ由なり。㊁あをつゞら 〔春〕青鞭草 〔補〕葛（カツラ）の一種なるべし。宇津保物語俊蔭の卷に、青つゞらを、大きなる籠にくみて、云々とあれば、さる器具にもするものなるべし。形狀は、古名錄に、深山に多し。葉常春藤（フユヅタ）に似て、大にして、五七尖柔軟にして、面深綠色、背淺し。莖青く、其の葉互生す云々。㊂ならしば 〔春〕楢柴は木なり。別にならしばと云ふ草あるにや。尋ぬべし。〔補〕濱臣云、ならしば、椎しば、いちしばのしばと同じく、柴なり。芝にあらず。此の所に出だせるはいかにぞや。直云、夏蔭校本に、一本此の一句なしとあるよろしと記せり。◎おほきなると小さきと云々 〔春〕杜子美詩、點レ溪荷葉疊ニ青錢一といへる風情にや。イ本蓮は万の草よりも、世にすぐれめでたし。妙法蓮花のたとひにも、花は佛に奉り、みはずゞにつらぬき、念佛して往生極樂の緣とすればよ。又花なき比、みどりなる池の水に、紅に咲たるもいとをかし。されば翠扇紅と、詩にもつくりたるにこそ云々 〔補〕右イ本の文の中にて、「妙法蓮華のたとひにも」云々といふよりは、抄にもしかあり。但しそれには、末の翠扇紅を、翠翁紅に作れり。なほ又濱臣校本には、右の文につゞけて、「からあふひの、日のかげにしたがひて、傾くこそ、草木といふべくもあらぬ心なれ。さしも草。八重もぐら。つきくさ、うつろひやすくなるこそ、うたてあれ。」ともかけるあり。◎やますげ ◎童蒙抄云、麥門冬とかけり。万葉第四「やますげのみならぬ事を我によりいはれし君は誰とかぬらん」。八雲抄云、山すげは實ならずといへり。又みなると云。普通の山すげ實あり云々 ㊁ひかげ 〔補〕花鳥餘情云、日蔭草をば、さがりこけともいふ。和名云、蘿ヒカケ女蘿也云々 〔補〕濱臣云、ひかげは、俗に狐のたすきといふ草なり。

一寶あるなもて也云々、庭などにも生ずる小草なり。葉は互生にして三蕊也。綾の織紋にもするは、この三葉互生の形なうつせるなり。こともの よりはとは、龍膽(リンダウ)の類ひも、紋に織れども、それらの形よりはよしとなり。㊀あやふ草　〔頭〕傍註に、岸の額に生ふる故、あやふき草の心なり。必ずあやふ草の實な、尋ぬるに及ばず。觀ㇾ身岸額離ㇾ根草と、無常な題にて、羅維が作れる草なり。直按ふに、清女此の句によりてかけるなり。後に朗詠集にも入りたる句なり。ひたひとは、岸の上部の、出て張りたる所。◎いつまで草　〔新〕八雲に壁に生ふと也〔頭〕抄に壁に生ふる蘿(ヒカゲ)に似たるもの也とあり　眞頼云、定まりたる草の名にあらず。何にても、壁土の中に、はかなく生ひたるものたいふ。直按するに、壁に生ふる草のはかなきな、いつ迄ぞと戯れていひそめつるなるべし。八雲の御説も、此の草子によりてか、せ給へるなめれば、必ず一種の名とも定めがたし。㊁いしばひなどには云々　〔頭〕石灰などにて塗り固めたる壁には、生ひずあらむと臆測するも、此の草な卑しむやうにて、わろしとの意ならむ。㊀事なし草　〔新〕河海に、忍草の一名の由見ゆ。此枕双紙には、此次に別に忍草な出されたれは、又一種あるにや尋ぬべし。〔頭〕傍註、君まさで程のふるやの廂にはあふことなしの草ぞおひける」此歌な考ふれば、事なし草、忍ぶ草、疑ひもなく一草也。事なし草の名たかし。忍ふ草と名づけたるも、亦あはれ也といふ心也。二色に見るべからず。〔抄〕是れも名によせていふ也。思ふ事ぐさもなく、又あしき事種もなしといふ心にて、名づけたるかとなり。◎しのぶ草　〔新〕和名抄、垣衣とかけり。苔の類なり。宿の軒垣などに生る也。〔頭〕和訓栞に云、軒端の朽ちたるなどに生ひて、常には枯れたる如く見えて、雨降れば能く生ひしげる、久しきに堪へ忍ぶなもて、名な得たるなるべし。㊁つばな　〔新〕茅花、淺茅の花にや。八雲には、ちばなとあり。◎はまち　〔頭〕春本、濱茅と傍註せり。

なるとちひさきと、ひろごりたゞよひてありくいとをかし。とりあげて、物おしつけなどして見るも、よにいみじうをかし。やへむぐら（八重葎）。山すげ。やまゐ（山藍）。ひかげ。はまゆふ。あし（蘆）。くず（葛）の風にふきかへされて、うらのいと白く見ゆるをかし。

◎あふひ 〔春〕二葉草もろ葉草ともいふ也。賀茂の神山などに生て、御形（ミアレ）の日の神事に用ゐる也。世に向日葵などいひて、花をもてあそぶ草とは別也。〔纂〕足代弘訓云、葵に三種あり。一は賀茂祭に用ゐる葵。二は蜀葵にて、花咲く葵。三は向日葵たて、ヒグルマとも、ヒマハリともいへり。三種ともに歌にもよめり。◎祭の折云々 〔纂〕公事根源、賀茂祭の條に、昔夢の告侍りしより、けふ人々葵かつらを髪にかくる也と見ゆ。◎おもだか 〔纂〕漢字に澤瀉とかく。葉面の隆起したるより、面高の義にて名づく。池澤に生じて葉の形くわゐに異ならず。夏莖を出だし、三瓣の白花を開く。花を賞翫するのみ。根も莖も食料とならず。〔春〕面高といふ故、心あがりしたらむと思はれて、甚面白きとなり。◎みくり 〔纂〕三稜草とかく。水澤の地に叢生して、莖高さ三四尺に至る。春生じて夏を盛とす。其の莖細く、光滑にして、三稜なる事椶櫚の莖の如し。此の書の奥に、みくりの簾だれあり。〔纂〕にも編めりと見ゆ。◎ひるむしろ 〔纂〕ひるもともいふもの也とぞ。是れも水草にて莖細く、葉は蛭に似たるより、蛭藻、また葉の水面につらなり浮ぶ狀を、蛭席ともいひたるならむ。和名抄には、蛇床子、比流牟之侶とあり。夏の頃白き花咲くとぞ。◎こけ 〔纂〕和訓栞に云、木毛（コケ）の義なり。◎こだに 〔春〕源氏宿木ノ卷に、こだになど引きとらせて云々。河海に木蟈（コダニ）、蔦の類也云々。〔纂〕眞賴云、葉赤くして小さく丸し。樹にまつはりて幹を枯らすこと、牛馬に着きて、皮中に食ひ入るダニといふ蟲の如くなれば、木だにといふ也。◎かたばみ 〔纂〕和訓栞に、側葉實の義。一葉に並びて、

心あがりしたらむ春本しけむとあるは非也屋代校本異本による

六十（草は）

草は。さうぶ。こも。あふひいとをかし。祭のをり神代よりしてさるかざしとなりけんいみじうめでたし。ものゝさまもいとをかし。おもだかも名のをかしき也。心あがりしたらんとおもふに。みくり。ひるむしろ。こけ。こだに。雪まのあを草。かたばみ。綾の紋にても、ことものよりはをかし。あやふ草は岸のひたひにおふらんも、げにたのもしげなくあはれなり。いつまで草は、おふる所いとはかなくあはれ也。岸のひたひよりも、これはくづれやすげなり。まことの石灰（白壁の事なるべし）などにはえおひずやあらんと思ふぞわろき。事なし草は、思ふことなきにやあらんとおもふもをかし。又あしき事を、うしなふにやと、いづれもをかし。しのぶくさ。いとあはれなり。屋のつま、さし出でたる物のつまなどに、あながちにおひいでたるさまいとをかし。よもぎいとをかし。つばないとをかし。はまぢの葉はましてをかし。まろこすげ。うきくさ。あさぢ。あをつゞら。とくさといふ物は、風にふかれたらん音こそ、いかならんとおもひやられてをかしけれ。なづな。ならしばいとをかし。はすのうき葉のらうたげにて、のどかにすめる池のおもてに、おほき

又土佐といへり。いづれか。直按ずるに、一ふし珍らしき橋の名をあげたる迄ならむ。所在の穿鑿に及ばじ。◎ゆきあひのはし (春)是もかさゝぎの橋と同じ。孫姫式云銀漢鵲之會橋云々、(補)夏蔭云、行きあひの橋は鵲の橋の異名を、かたはらに書きて、鵲の行きあひ橋と有りけむを、誤りて本文に入りて、たゞ行會とのみせしなるべし。◎山すげの橋 (春)イ本山菅の橋、一すぢわたしたる棚橋心せはければ名をきくにをかしき也云々。

五九（里　は）

里は　あふさかの里（八雲近江云々）。ながめのさと。いさめの里。人づまのさと。たのめの里（信濃）。あさ風の里（八雲大和云々）。夕日の里（丹後）。とをちのさと。伏見のさと。ながゐの里。つまとりの里。人にとられたるにやあらん　我がとりたるにやあらん。いづれもをかし。

◎ながめの里 (補)諸抄未詳とす。物思はしゝ打ち守る意の、をかしきを云ふ也。◎いさめの里。(補)濱臣云、古今六帖「東路のいさめのさとは初秋の長夜をひとりあかすわが名ぞ」夏蔭云、美濃か。直按、いは寢にて、いねさめの意なるべし。さらば、後世ねざめの里といふ所ならむか。◎とをちの里 (春)大和の十市里にや一説八雲御抄云、とほちの里は只遠き事也。狹衣に嵯峨をとほちのさとゝよめり (補)夏蔭云、拾遺集雑賀「くればとく行きてかたらん逢ふことのとをちのさとは住うかりけり」此の歌大鏡にも出でゝ大和也。◎ふしみのさと (春)井蛙抄頓阿云。後拾遺「都人くるればかへる」とよめるは山城の國也。「菅原や伏見の里」は大和也。

一筋わたしたる棚橋心せ(まけ)れば」この一句春本になしイ本抄本によりて補へりきくだに春本きゝたるとあれど古本によりて改む

橋は、あさんづの橋。ながらの(長等橋津國)はし。あまびこの(未勘)橋。はまなの(濱名 遠江)はし。ひとつ橋。さのゝ(上野)舟橋。うたじめの橋。とゞろきの(八雲に大和とあり)はし。をがはの橋。かけはし。せた(勢多 近江)のはし。木曾路(信濃)のはし。ほりえの(八雲津國云々)橋。かさゝぎのはし。ゆきあひの橋。をのの(八雲にはをつの浮橋とあり)うきはし。やますげの(八雲に下野云々)橋。一すぢわたしたる棚橋。心せばけれど、名をきくだにをかし。うたゝねの(八雲大和云々)橋。

⊙あさんつの橋 (春)催馬樂に淺水とあり。愚案抄に、飛驛にも越前にも名所に入云々。[illegible]淺水、あさうづなれども、當時謠ひものには、あさんづとやうに、はねて唱へたれば、あさんづとかける也。⊙ひとつはし (春)津國也。難波わたりの一橋とよめり。但非二名所一歟。獨梁和名ヒトツハシ。[illegible]濱臣云、古今六帖、「つの國のなにはの浦のひとつばし君をしあへばあからめもせず」⊙うたじめの橋 (春)嵯峨の歌結の橋にや。可尋之。[illegible]濱臣云、散木集戀部ふみたえ見ぬ戀「ふみみつときくにつけてもうたゝめのはしたなきまでぬるゝ袖かな」此歌いづくとも其所にしるべからねども、此枕草紙によりてよめるにや。うたゝめ、うたじめ、いづれ一つは誤なるべし ⊙とゞろきのはし (春)堀河百首に兼昌「我妹子にあふみなりせばさりとはかふみもみてましとゞろきの橋」此歌によれば近江國なるべし。⊙ながはの橋 (春)小川橋、新撰名所集に陸奥とあり。八雲御抄には筑紫と云々。◎かけはし (春)梯、史記、棧。漢書、棧道今謂二之閣道一 ◎かさゝぎのはし (春)八雲抄天の川也云々。淮南子烏鵲塡レ河成レ橋度二織女一云々。[illegible]濱臣云、古今六帖「中空に君もなりなんかさゝぎのゆきあひの橋にあからめなせそ。」鵲の橋は八雲抄に津の國云々。夫木に周防

の音なし川のおとだにもせぬ」◎ほそたに川　[春]備中、吉備の中山帯にせるとよみし也　[補]此の註に、古今集廿、大歌所の歌に「まがねふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ」とある歌をさす也　◎ぬき川　[春]梁塵愚案抄云。美濃の國に伊豆貫川といふ所あり。伊豆を略していへり。◎さいばら　[春]貫川も澤田川も、催馬樂の律のうたひ物なれば也。梁塵愚案抄云、催馬樂は、昔諸國より御調物を大藏省へ納し時、民の口ずさびにうたひける歌なれば、催馬樂と名付る也。馬を催すとかけるは、御調物を負る馬をかり催す心也。[補]催馬樂は、唐樂の曲名なり。その曲譜に合せて、我が國風の歌をうたへるより、いふ名なり。舊說は、催馬といふ文字に附會したる解にて、取るに足らず。濱臣云、催馬樂貫川「ぬき川の、せゝの、やはらたまくら、やはらかにぬる夜はなくて、おやさくるつま。澤田川「さはだ川、袖つくばかりあさけれど、はれあさけれど、くにの宮人や、たかはしわたす　◎あまの川　[補]詩棫樸に、雲漢、天河也。在二箕斗二星之間一其長竟レ天とあり。普く人の知る所なれど、同じく川の名なればかける也。◎このしたにもある也。[春]河内國交野の南枚方の北にあり。◎七夕づめにやどからんと　[春]古今羇旅云、惟喬のみこのともに狩にまかりける時に、天の川といふところの、河のほとりにおりゐて、酒などのみけるついでに、みこのいひけらく、狩して天の川原にいたるといふ心をよみて、盃はさせといひければよめる。在原業平朝臣「狩りくらし七夕づめに宿からんあまのかはらに我はきにけり。」伊勢物語にもあり。七夕づめとは、七夕妻也と、牡丹花の聞書にあり。

五八　（はしは）

申すは、花山院なるべし　◎那智瀧　〔春〕紀伊國也。◎とゞろきの瀧　〔補〕轟瀧也奥州にあり。

五七（川　は）

川は。あすか川。ふち瀨さだめなく、はかなからむといとあはれなり。おほゐ川（山城）。いづみ川。水無瀨川（山城）。みゝと川（耳敏河　山城）。又なに事を、さしもさかしくきゝけんとをかし。おとなし川（音無川）。おもはずなる名と、をかしきなり。ほそたに川。たまほし川（玉星河　奥州）。ぬき川（貫川）。さはだ川（澤田川　山城也）。さいばらなどのおもひはするなるべし。なのりその川（未勘）。なとり川（奥州也）もいかなる名をとりたるにかと、きかまほし。よしの川（大和也）。あまの川。このしたにもあるなり。七夕づめにやどからんと、業平がよみけんもましてをかし。

〔補〕以上の傍註に、例の皆がら春曙の註なり。次々のくだりも亦然り。◎飛鳥川　〔春〕大和也、古今云。「世の中は何か常なる飛鳥河きのふの淵ぞけふはせとなる」此歌の詞にてかけり。◎いづみ川　〔春〕泉川大和也。童蒙抄云。いづみ川とは、崇神天皇の官軍、更那羅山をさけて、進みて輪韓河に至て、安埴武彦河を挾て、いさみて各相挑。故に時の人、其川を改て挑川といふ。今泉川といふ。◎みゝと川　〔補〕耳敏川、拾芥抄處所部云朱雀門前二條南云々　◎濱臣云、古今六帖に貫之「もゝしきの大宮ちかき耳と川ながれて君をきゝわたるかな」◎おとなし川　〔春〕紀伊國牟婁郡熊野邊ト云、思ひもよらぬ名となり　〔補〕濱臣云、拾遺戀二に元輔「おとなしの川とぞつひに流いづるいはでもの思ふ人のなみだは」六帖「君こふと人しれねばやきの國

おはしまし　素本による

がし殿の人や　【補】来賓の御供の人を呼ぶなり。何某殿の御隨身は、おはすやと也。【補】宸筆本心にくきものの條中、こゝといとよく似たる文あり。左に抄して參考に供す。物へだてゝ聞くに、女房のとは覺えぬ聲の、しのびやかに聞えたるに答へて、うちそよめきたる、人の參るけはひする、又物まゐりなどするに、箸匙などのうちまぜられてなりたる、心にくし。ひさげの柄のたふれふす音も、耳こそとまれ。よき人の家の中門に、びらうげの白く淸げなるに、蘇芳の下すだれのにほひよき程にて、あざやかなるかけて、榻にうちおきたてるこそ。物へ行く道に、門の前わたりて見入れたるこそ、いみじう心にくけれ。四位五位などの下襲の尻はさみて、尺のいと白き、かたはらに打ちおきて、とかく打ちさまよふも、又隨身の裝束淸らかなるが、壺胡籙などもちて、出入などしたるつきぐくし。

五六（たきは）

瀧は。おとなしの瀧。ふるの瀧は法皇の御らんじにおはしましけんこそめでたけれ。那智のたきは、熊野にあるがあはれなる也。とゞろきの瀧は、いかにかしがましくおそろしからん。

◎音無の瀧　【春】山城の北大原にあり　【補】濱臣云、類聚名所に、紀伊國牟婁郷下の音無川と同所とあり。拾遺集よみ人しらず「こひわびぬねをだにきかん聲たてゝいづこなるらんおとなしのたき」◎ふるのたき　【春】布留瀧。大和にあり　◎法皇の御覽じに　【春】宇多法皇か花山法皇にか可尋之　【補】淸女の時代、單に法皇と

か未詳、余も夙くより筵（ムシロ）を敷く事と考へ居たり。土に居る者を、地下人にて賤しき下男といふ說は甘心せず。◎さはきてたるも　〔補〕千蔭云、さわぎ立てるの倒置か、又誤を出たるか。濱臣云、上文よりの文法を考ふれば、是も髪の事なり。さばきて垂るもなるべし。もしはたるの、る文字一つ落ちしか。直云、さばくとは解き分くることなるを、解き散らす意にもいふ也。後世の俳句に、梅が香やとめん柳のさばき髪などあるにて知るべし。◎しもとだちたる物　〔春〕楉（シモト）すは枝、杖などをいふ也。しもとめきたる物也。◎かゝへたる　〔補〕上文、汗の香かゝえたるとありし所にいへる如く、薫物の香のおのづとかなり來て嗅（カヾ）るならずや。抱へ持つといふ解は此所に適（カナ）はじ。◎中門　〔補〕中古公卿の家構へには、大かた表門より入れば正面に中門とてあり。寢殿を廻る廊を、切り通しにしたる也。中門を通れば寢殿の前庭に出づ。廊を上れば渡廊を傳はりて、對ノ舍寢殿へ行かるゝ也。委しき事は拙著宮殿圖解を見よ。◎びらうけの車　〔補〕上に出でたり。公卿以上の人乘用するなり。貴賓も中門口にて下乘すれば、車の牛を外（ハヅ）し轅を榻に置き、從者のしばらく待ち居るさまなり。◎はしすはうの下すだれ　〔補〕端蘇芳下簾。したすだれのはしつかたを、すはうにそめたる也。◎下襲のしりはさみ　〔補〕しりとは裾のこと、石帶の上手（ウハテ）に挾む作法なり。◎さくのいと白き　〔補〕春本さゝのとあれど、古本によれる夏陰の校本、また群書類聚の中なる、後光嚴院宸翰本にもさくとあるに從ひて改めつ。六位の笏に、職（シキ）の築垣（ツイヂ）の角の、檜の木を切りて用ひたる事の、下文に見えたるによりても、新らしき程は、白きなるべし。◎かたはらに打ちおき　〔補〕春本抄本等、皆かたにとあれど、宸翰本に、かたはらとあり。肩におくといふ解、笑ふべし。◎つぼやなぐひ　〔春〕壺胡籙、とてあり。矢をいるゝ物也。〔補〕隨身の負ふ箭を入るゝ筒なり。◎くりや女　〔春〕厨女、みづしをんなをいふなるべし。◎何

門。の。春本この二字なし慶安版の素本抄本等によりて補ふ

清げなるに　古本によりて補ふ　さく宸翰本による春本抄本等さゝとあるは寫し誤なり

かたはら　春本等はらの二字なし宸翰本によりて補ふ

五五（人の家の前わたるに）

人の家の門のまへをわたるに、さぶらひめきたる男(ヲノコ)、土にをるものなどして、をのこゞの十(トヲ)ばかりなるが、髪をかしげなる、ひきはへても、さばきてたるも、又五つ六つばかりなるが、かみはくびのもとにかいくゝみて、つらいと赤うふくらかなる、あやしき弓、しもとだちたる物など、さゝげたるいとうつくし。車とゞめて、いだきいれまほしくこそあれ。またさていくに、たきものゝ香(カ)のいみじくかゝえたるいとをかし。よき家の中門あけて、びらうげの車の白うきよげなるに、はしすはうの下(シタ)すだれの、にほひいときよげにて、榻にたちたるこそめでたけれ。五位六位などの下がさねのしりはさみて、さくのいとしろき、かたはらにうちおきなどして、とかくいきちがふに、又さうぞくし、つぼやなぐひ負ひたるずゐじんの出で入る、いとつきづきし。くりや女のいときよげなるがさし出でて、「なにがしどのゝ人やさぶらふ」などいひたるをかし。

人の家の前をわたるに　[illegible]前段、ちごの肥えたるがよき由をいへる序に、兒童の愛らしきをいへる也。◎さぶらひ　[illegible]諸家に奉公する士なり。恪勤(カクゴン)とも云ふ。◎つちにをるもの　[illegible]岡本保孝存疑云、地上に其子を居らせて、遊ばせんとして、其用意に敷物などを取りまかなふ也と花野いへり云々。花野とは翁の門生

の苛らだちて、寛厚ならぬをいふ。今世の神經質なるといはんが如し。◎よろづよりは牛飼童のなりあしくて　(春)何よりも牛飼わらはのあしきを持こそ惡くあれと也　(補)なりあしくに、例の形ナリ、服裝のあしき也。◎ことものども云々　(春)牛飼童ならぬものも惡しきはよからねど、それはあとよりゆくゆゑ苦しからずと也。◎さきにつとまもられ　(春)車の前にある者なれば也　(補)つとまもられとは、づうと目に見つめられて行けばと也。◎ことなる事なき男　(補)よからぬ姿の男にて、隨身とも何とも、殊に目につかぬ男をいふ。◎くろきはかまのすそごなる　(春)すゝけてくろき袴なるべし。(補)袴のすその、汚れて黒みたるをいふ。◎かりぎぬは何もうちなればみ　(春)狩衣のえり袖なども着馴て、しほたれしを着たるさま也。◎はしる車の方などに　(春)車は走るに供はしづかにゆくが、しかも衣服も古めきたるは、やとひ人のやうにて、我者とは見えぬと也。◎きやれなど時々うちしたれど　(春)使人の衣服破れたる事などは時々ありとも、着馴てなりあしからず罪なく見ゆらんは、さもあるべしと也。(補)千蔭云、或説「人つかふはわろうきやれ」とありと云々。按ふに何れにせよ、春抄の句點非なり。「わろかり」にて句切りて、下を「きやれ」と讀むべし。きやれは著破なり　◎なればみて云々　(補)着馴れゐて、格別非難すべき點なきはなり。◎さるかたなりや　(補)其のまゝに見宥さるとなり　◎つかひ人　(補)資人、使ひ人の義。中古の制、大臣以下中納言五位までに、資人の數を限りて、朝廷より附け賜はる也。此の條は、公卿などの家に資人はありて、召使童のなりきたなげなるは、あるまじく相應せぬとの意なり。◎家にゐたる人云々　(補)其の家のつかひ人たちの心地にも他より行きたる使も、客人も、其の家に愛らしき童のあまた見ゆるは、をかしと思ふとなり。

春本わかき人とちごはとあり千蔭夏蔭の古本によりて下の如く訂したるに従ふ

まもられて春本ての字なし抄本によりて補ふ

五四 (若き人ちごども)

若き人ちごどもなどはこえたるよし。ずりやう(受領)など、おとなだちたる人は、ふときいとよし。あまり瘠せからめきたるは心いられたらんと推し量らる」。よろづよりは、牛飼わらはのなりあしくて、もたるこそあれ ことものどもは、されどしりにたちてこそいけ。さきにつとまもられていくもの、きたなげなるは心うし。車のしりにことなる事なきをのこどもの、つれだちたるいと見ぐるし。ほそらかなるをのこ随身など見えぬべきが、黒き袴のすそごなる、狩衣は何もうちなればみたる、はしる車のかたなどに、のどやかにうち添ひたるこそ、わがものとは見えね。なほ大かたなりあしくて、人つかふはわろかり。きやれなど時々うちしたれど、なればみてつみなきは、さるかたなりや。つかひ人などはありて、わらはべのきたなげなるこそは、あるまじく見ゆれ。家にゐたる人も、そこにある人とて、使(ツカヒ)にても、まらうどなどのいきたるにも、をかしきわらはの、あまた見ゆるはいとをかし。

◎ずりやうなどおとなだちたる人云々 (補)受領すなはち國司は、一地方の長として民を治むる職なれば、老成(オトナ)だち年功を積みて見ゆべく、肥えたる方こそ重々しくは見ゆれと也。◎からめきたる (補)濱臣云、枯めきたる也。夏蔭云乾めく也と。いづれにしても、肥えて澤(ツヤ)めきたるに反せるをいふ。◎心いられ (補)心

わかくてよろしきをのこの、げす女の名をいひなれて、呼びたるこそいとにくけれ。知りながらも何とかや、かたもじはおぼえでいふはをかし　みやづかへ所の局などによりて、よるなどぞ、さおぼめかんは、あしかりぬべけれど、とのもりづかさ、さらぬ所にてはさぶらひ、藏人所にあるものをゐてゆきて、よばせよかし。手づからはこゑもしるきに。はしたものわらはべなどはされどよし

◎わかくてよろしき云々　(補)年若く身分の大ていによろしき男の、下衆女の名を呼びなれていふは聞きにくしと也。下女に常々親しむ樣に聞ゆれば也。◎かたもじは覺えで　(補)美隆云、下文宜方より消息の事なかける條（春本卷八に有）に、「右近のさうくわん光なにとかやいふものして」とかけるを、爰に引き合せて見るに、清少の心高くもてつけたるさま推量らる。◎みやづかへ所の　(補)禁中に限らず大臣家などにても奉公する人の局に、其の下女を呼ぶ時也。◎よるなどぞさおぼめかんは　(春)夜は態によぶべきなれば、片文字は覺えぬやうならんはあしかるべし。然ども、それもみづからよばずとも、禁中にては主殿司、其外の所にては侍か、藏人所の者をしてよばせよかしと也。攝家などにも藏人所あれば也。◎さぶらひ　(補)侍所の略。大臣家に恪勤する者の詰所をいふ。攝關になれば、之を藏人所と呼び替へたる也。◎はしたものわらはべなどは　(春)是らは下すなから、名をいひなれてよぶもよしと也　(補)禁中にては上臈女房を上衆、女官といはるゝ下臈を下衆とし、其の以下本官のなき雜仕女を、半者(ハシタモノ)といへり。

るを、方弘が新藏人なりし時、さる故實作法にも不案内にて、尋問せざりしかば、瀧口も故障を陳ぜずして止みしを、君達の方弘に教へて、瀧口の名謁仕うまつらぬ時は、更に其理由を陳べしむべき旨を、云ひ聞かせたるに、方弘は、我が疎忽にして問はざりし事をばおきて、瀧口の怠慢を憤り、罪科を勘へなどして、却つて瀧口にすら笑はれたるなり。さるは瀧口の方は、方弘のいかにして名謁せぬぞと、問ふを待ちて、障る事ども申すが、定まれる作法なれば、寧ろ問はざる方弘の疎忽にして、瀧口の懈怠にあらざればなり。此のあたり諸抄本どもに明細の解なく、初學の人惑ひぬべければ、長々しくも說き示しつるなり。◎みづし所のおものたな　(春)御厨子所御膳棚後涼殿の西の庇にあり。朝餉朝夕の御膳などを供する所也。四位の殿上人別當たり。民部大輔五位を預とすと拾芥に有り。凡河内躬恒延喜の御厨子所の預なるよし家集に見えたり。◎沓をおきて　(春)方弘か沓を楚忽に御膳棚に置也。◎はらへいひのゝしる　(春)沓におもの棚けがれしとてはき拂ひ、誰わざぞなど、別當預りなどのゝしる也。(補)是れは、唯かき拂ふにはあらじ、穢を祓ふる事にて、清め祓へをせんと騒ぐなり。◎たが沓にか　(春)主殿司など方弘をいたはりて、沓の主をいひかくしてしらずといふ也　(補)例の女官の殿司なり。◎やゝ　(補)春本の傍註に、漸也とかきたるは例の非なり。やゝとは、人を呼びかくる聲。草子物語に多し。◎きたなきもの　(補)履のこと。大鏡忠平の傳中世繼の詞にも、履の事を「きたなき物」といへり。◎いとさわかし　(補)千蔭翁の校本によれば、方弘の履を取り返しに來ても、いよ〳〵女房たちに笑ひ罵らるとなり。

五三　（若くてよろしきをのこ）

直按するに、後の方よろし。大鏡に、誰れも／＼、心をとなへて聞こしめせとあるも、心を整へ用意して、聞けよとなり。當時の口語のまゝなるべし。◎又ありともよくきかぬ人（春）日比さやうの人有ともよくしらざりし人の名のりたる也。◎さゝにく〳〵定むる（春）聞きとがめて、善惡を論定批評すとなり。◎瀧口の弓ならし（春）殿上の名謁果て、瀧口のとのゐ申あるべききざまなり。源氏夕顔の卷に云、かう申すものは瀧口なれば、ゆづるつき〴〵しくうちならしてとあり。（春）弓ならすは鳴弦(メイゲン)と稱して、射術家の秘法とする所なるが、矢をはげず、唯弦のみを引きならすが、邪惡の氣を禳ふ禁厭となる由なり。◎ごほめかし、（春）沓の音也（春）源氏夕顔の卷に、ごほ／＼と鳴る神よりもおどろ〳〵しゝ云々とあり。蜻蛉日記にも、空くらがり松風の音高く、神ごほ〳〵となるとある如く、この字濁りて、ごうめかしといふやうに讀むべし。◎また人々さぶらはねばにや（春）瀧口ども故障有て、候せねば名謁仕らぬよしを奏する也。◎いかにことへばさはる事（春）いかで候せぬと、藏人の問へには、其故障の子細を瀧口のことわり申なるべし。◎まさひろは（春）源方弘、左馬權頭時明男爲二伯父前和泉守致明子一號二源藏人一◎かんがへて（春）滯怠の罪を勘る也。（春）直云、侍中群要名謁の條に、次藏人先咳、次瀧口鳴弦三度、問誰々侍ル一々名謁。三人已上候時ハ問レ之。不レ足二三人一時不レ問。とて、註に不足之時、瀧口不二鳴弦一陳申。とあれば、まづ藏人出でて簀子の東北の隅に、高跪きといふ姿勢して、主上の御座の間の格子の方を向き、瀧口を後にして、一たび咳(シハブ)きする時、瀧口の名謁するが、常の作法なるべし。然るに瀧口三人づゝ當番にて出づるに、其の中の一人故障ありて、不參する時は、名謁せざる事も、亦例の作法と見えたり。此の時藏人一咳しても、鳴弦名謁せざれば、其理由を反問し、瀧口は其の間を待つて、故障不足の由を陳じ申す事、是れはた定まれる法な

とりに來ても云々千蔭校本にはとていとゞさわがるとありよろしげ也

いふものに、沓をおきて、はらへいひのゝしるを、いとほしがりて、たが沓にかあらんえしらず」と殿守づかさ、人々のいひけるを、やゝ「まさひろがきたなき物ぞや」。とりに來てもいとさわがし。

◎殿上のなだいめん (新)花鳥餘情云。名對面は名謁をいふ。殿上の御とのゐしたる侍臣等に、名をよばれて名のる事なり。此次に瀧口のとのゐ申(マウシ)ありとのゐ申といふも名謁と同じき也。(補)この花鳥の文、侍臣等に名をよばれ」とあるは、もと侍臣迭に名を呼ばれて名のる事也とありしを侍臣達にと書損し、更に又侍臣等にと誤りたる也さるからに、解し難き註となれり。侍中群要第四によれば、名謁事、亥二剋云々、雖レ不レ奏レ文、宿侍三箇日以後、隨二上﨟ノ氣色一進止、侍レ次テ稱二姓名一。但自問時、顏出レ自二本座一突レ膝テ問レ之。其詞云タソ次第至テ自稱二姓名一。各名謁畢、經二簀子敷一入レ自二南第二間一、上二孫廂長押ノ上一、過レ東テ北行、於二昆明池障子下一、向レ巽時、瀧口衆列二居於御前一(東庭)次藏人先咳、次瀧口鳴弦三度、問誰々加侍ル、一々名謁云々。とあるにて知るべし。◎御前に人さぶらふ折云々 (補)侍中群要第四、上に引ける文の次に、名對面事、名謁之時、御前人候ハ其人問誰ソト外人不レ問云々とある如く、君前に藏人貫主などの、然るべき人伺候してある時は、其の人の問ふに應じて、他の侍臣は其の姓名を稱し、名謁の儀をなす由なり。◎足音どもして (新)名謁の爲に、人々まうのぼるさまなるべし (補)群要の文に見ゆる、簀子敷を經て、孫廂の長押の上に上り、北へ行く間の事をいふなり。◎上の御局の東面 (補)荻ノ戸の東、弘徽殿の上の御局をいふなり。上に出たしたる清涼殿の圖を參照して心得べし。◎耳をとなへて (新)中宮の上の御局に淸少など參りゐて、名對面を聞くなるべし。(補)濱臣云耳に音をなしてといふ意と、黑川翁の、となへては整へてなり。聞かむと用意するなりと。

條に、藤説孝（ノリタカ）長徳四年七月十四日補とある、此の人ならん。紫式部の夫宣孝の兄なり。◎つぼねのすたれ云々 (春)清少の局へも行成の入給ひしと也。(補)二人の中、この時以後は一層親しくなりしをいふ也。

五二（殿上の名だいめん）

殿上のなだいめんこそなほをかしけれ。御前に人さぶらふをりは、やがて問ふもをかし。足音どもしてくづれ出づるを、うへの御つぼねの、ひんがしおもてに、みゝをとなへてきくに、しる人のなのりには、ふと、胸つぶるらんかし。またありともよく聞かぬ人をも、此のをりにきゝつけたらんは、いかゞおぼゆらん。なのりよしあしきゝにくゝさだむるもをかし。はてぬなりときくほどに、瀧口の弓ならし、くつの音そゝめき出づるに、藏人のいと高くふみごほめかして、うしとらのすみの勾欄に、たかひざまづきとかやいふゐずまひに、御前のかた（上の御かたに也）にむかひて、うしろざまに「たれ〳〵か侍る」と問ふほどこそをかしけれ。細う高うなのり、また人々さぶらはねばにや。なだいめん仕うまつらぬよし奏するも、いかにとゝへば、さはる事（瀧口の答）ども申すに、さきゝてかへるを、方弘（マサヒロ）はきかずとて、君達のをしへければ、いみじう腹だゝしがりて、かんがへて、たきぐちにさへ笑はる」。御厨子所のおものだなと

もろともにゐたる人は、こなたにむきてゐたれば、かほも見えず。たち（行成）いでて「いみじくなごりなくも見つるかな」とのたまへば、のりたか（清少の詞）と思ひ侍れば、あなづりてぞかし。などかは見じとのたまひしに、さつく〴〵とは」といふに、女はねおき（行成の詞也）たるかほなん、いとよき」といへば、ある人の局にゆきて、かいばみして、又もし見えやするとて、きたりつるなり。まだうへのおはしつる折からあるを、えしらざりけるよ」とて、それより後は、つぼねのすだれ、うちかづきなどし給ふめり。

〔春〕是より行成に見つけられし物語なり　◎から衣を髪の上に　〔補〕唐衣は女子の禮服也。君前には必ず之を着せざるべからず。此所も、二所のおはしましたれば、俄の事とて後（ウシロ）に長く垂れたる髪の上に、あわてぎに着たるなり。◎とのゐものも何もうづもれ　〔春〕衾などをさめもやらず。押埋れたるうへに、帝后おはしまして也　◎陣より出で入る　〔補〕衛門の詰所の前を出入する者を云ふ。◎けしきな見せそ　〔春〕こゝにかく二所おはします氣色を、殿上人にしらすなと被仰也。いふ事をきこしめさんとてなるべし。◎たゝせ給ふ　〔春〕帝后立ちかへらせ給ふ也。◎なほめでたき事ども　〔春〕帝后の御ありさまのめでたき事を、清少と式部といひあはせて也。◎几帳の手　几帳の事、調度圖解に圖を出だせり。手とは帳を掛くる棹の端をいふ。◎なほごと　〔補〕直言。「たゞごと」といふに同じ。常の談話の意。◎黑みたるもの　〔春〕行成の袍の事なり。〔補〕上文「うへの衣がちにて」とあるに應ず。誰れも一樣に黑き袍を着てゐれば、行成とは心付かず、他人と思ひたる由なり。◎のりたか　〔補〕傍註に敎隆也とあれど、當時の書にさる人名見えず。職事補任一條院の

姿に衣冠ともいひて、上のきぬ（袍のこと）着て下襲を略し、差貫の袴をはく也。四位の殿上人は黑袍の制なれば、公卿一様に黑き袍にて、服裝のみにては、行成やら誰れやら容易に判別し難かりし由をいへる也。諸註釋誤まれる所多かり。

いらせ給ひて後も　諸本後もの二字なし千蔭校本の補ひたるいとよろし

つとめて日さし出づるまで、式部のおもとゝ廂にねたるに、おくのやり戸をあけさせ給ひて、うへ（一條院）のおまへ、宮（中宮定子）の御前出でさせ給へれば、おきもあへずまどふを、いみじく笑はせ給ふ。唐衣を髮の上にうちきて、とのゐもののもなにも、うづもれながらあるうへにおはしまして、陣より出で入るものなど御覽ず。殿上人のつゆしらで、よりきて物いふなどもあるを、「けしきなみせそ」と笑はせ給ふ。さてたゝせ給ふに、「ふたりながらいざ」とおほせらるれど、「今（清少の詞）かほなどつくろひてこそ」とて參らず。いらせ給ひて後も、なほめでたき事ども、いひあはせてゐたるに、南のやり戸のそばに、几帳の手のさしいでたるにさはりて、すだれのすこしあきたるより、黑み（行成の袍の色也）たるものゝ見ゆれば、のりたか（行成のさま也）がゐたるなめりとおもひて、見もいれで、なほごとどもをいふに、いとよくゑみたる顏のさしいでたるを、「のりたかなめりそは」とて見やりたれば、あらぬかほなり。あさましとわらひさわぎて、几帳ひきなほしかくるれど、頭ノ辨にこそおはしけれ。見えたて（清少の心也）まつらじとしつるものをと、いとくちをし。

殿上人　春本人の字なし　素本傍註本による

にて、殿上人のとのゐすがたもあり。

◎物など啓せさせんとても　〔春〕行成の中宮へ申上る事あるには、もとより申次そめし清少を頼まれしと也。◎下なるをもよびのぼせ　〔春〕清少の中宮の御前にあられば、よびのぼせて申次させさせ給ふと也　〔磐〕下は下局のこと。◎里なるには文かきても　〔春〕清少の里亭にある比は、行成の文にても頼み、みづからもおはして留守居などに申おかるゝ也。◎おそくまゐらばさなん　〔春〕清少此事を啓しに遅くまゐらば、我さやうに申すと、早く啓しに清少のまゐるやうにせよと、留守居などに行成のの給ふ也。◎その人の候ふ　〔春〕我ならでも、其人あればそれして啓したまへと也。◎あるにしたがひさだめず　〔春〕万事あるにしたがひて用て、必と定めぬこそよきに古よりし侍れば、我のみならでも申次がせ給へと也。九條殿遺誡云。随レ有用レ之勿レ求ニ美麗ニ云々。こゝは衣冠馬車の事なれど、此遺誡の心にて、何事もてなしたるこそよきにはすれといへる也。◎うしろみ　〔磐〕後より見て、介錯する事、今俗に世話をするに同じ。◎さてはとかりなしとは　〔春〕後論語に、過則勿レ憚レ改といへるに、いかなる事ぞ。かやうの折こそ思ひ出給はめと也。◎何かは恥づる云々　〔春〕いかで行成に清少は恥ぢて顔をも見せぬぞ、顔をも見せよと也。◎冬のなほしの　〔春〕直衣の色。夏より秋は二あゐ花田色、冬春は白き裾の直衣等也。されば春著用し給ふを、冬の直衣といふ也。◎さにくきにや　〔磐〕夏秋の直衣には裏なく、冬春のは裏を附く、今は三月の末なれば、裏附きたるは厚くて、著にくきにやあらむとなり。◎上の衣がちにて　〔磐〕公卿多くは一様に黒袍にてあるを、上の衣（袍のこと）がちとはいへるなり。之を行成一人の服装と見ては聞えず。公卿一般の事と心得べし。さるは下に行成が黒袍著たりしを、他人と見誤りたる由をいはむとての伏線なり　◎殿上人のとのゐ姿　〔磐〕とのゐ

したがひて 春本ての字なし抄本に従ふ

逢ひ難しの意に解すべき也。◎どきやうし 補當時讀經の法に、聲明といふ術ありて、音律曲節を調へ諷誦する事、歌謠をうたふに同じく、一つの藝術の樣に思ひ居たるなり。されば行成を不風流にて興なしと誹ると也。

物など啓せさせんとても、其の初めいひそめし人をたづね、下(シモ)なるをもよびのぼせ局にもきていひ、里なるには文かきても、みづからもおはして、「おそくまゐらばさなん申したると、まうしにまゐらせよ」などの給ふ。「其の人のさぶらふ」などいひいづれど、さしもうけひかずなどぞおはする。(清少の詞也)あるにしたがひてさだめず、何事ももてなしたるをこそ、よき事にはすれ」。とうしろみ聞こゆれど。「(行成の答也)わがもとの心の本(ホン)性(ジヤウ)」とのみの給ひつゝ「あらたまらざるものは心なり」との給へば、(清少の詞)さて憚りなしとは、いかなる事をいふにか」とあやしがれば、わらひつゝ、「(行成の詞)中よしなど人々にもいはるゝ、かう語らふとならば、何か恥づる。見えなどもせよかし」との給ふを、(清少の詞)いみじくにくげなれば、さあらんは、え思はじとの給ひしによりて、「え見え奉らぬ」。といへば、(行成の詞)げににくゝもぞなる。さらばな見えそ」とて、おのづから見つべきをりも顔をふたぎなどして、まことに見給はぬも、まごゝろにそらごとし給はざりけりとおもふに、三月つごもりごろ、冬のなほしのきにくきにやあらん。うへの衣(キヌ)がち

おのれをしれる人のために死ぬといふ詞を、後にしての給へるなるべし。◎いひあはせつゝ申給ふ（春）此古語男女の事に用ひて、よくかなひたれば、今清少との中の事に、いひあはせての給へりとなり。（磐）行成卿の常にいはるゝ言ぐさとして、能く聞えたれど、古本には「己れを知るものゝ爲に死ぬとなむ、云ひたるといひ合せ給ひつゝ、ようしり給へり」とあり。此の方に就いていはゞ、斯く語らひつゝ、清少の心を卿のよく知り給へりとならむ。◎とほたあふみのはまやなき（春）遠江の濱や無也　奥に遠江介則光といふ人を、清少のかたらひし事あり。されば、今行成卿の、かくはの給へども、此遠江の濱あれば、まさに我にはうけひきがたしとの心にいふ也。（磐）夏陰云、此の説かなひがたし。こは萬葉集七に「あられふりとほたあふみのあと川柳。かれゝどもまたもあふてふあと川柳」とある歌を、誤り傳へていふなるべし。萬葉の歌を誤り傳へしまゝにいひし例は、此の頃いと多かりしなり。直按するに、此の説いはれたり。この歌の詞、かれゝども茹れに離れをいひかけ、生ふる事を、逢ふにとりなしたるなれば、今日は離れてもまた明日逢はんと語らふ也。云ひかはすとあるにても知るべし。そもそも則光遠江介になりしは、今年より三年をへだてゝ、長保二年以後の事なるべく思はるゝ事、奥の文にて知らるれば、爰に遠江介云々といふべき由なし。又則光は清女と兄妹といはれて、親しき間とは見ゆれど、夫婦の語らひしたるとまでは定めがたし。其れらの事は後にいふを見るべし。◎わかき人々は只いひにくみ（春）若き女房達など、清少と行成との中を、それみにくむさま也。（磐）此の説まではあらじ。唯行成のみを、あしういふならん。◎此の君こそうたて見えにくけれ（磐）行成卿には、いよいよ面會しにくしと也　諸本見にくけれとして、行成を醜なりと、若き人々思ふ由に釋けるは當らず、「見え」とある本に從つて、若き人々の、行成に面を見せにくし、

廿二日、中宮參二職曹司一とある頃の事なるべし ⊖頭辨 〔春〕行成卿は、一條院の長德元年八月廿九日補二藏人頭一、同二年四月廿四日任二權左中辨一（職事補任） 〔補〕辨官にて藏人ノ頭に補せられたるを、頭辨といふ事上に註せり。◎大辨見えばうち捨奉りて 〔春〕大辨は、辨内侍が忍びたる男なるべし。今清少のいふ心は、行成のいかにむつましく語らひ給ふとも、大辨が見え來らば、辨内侍は、行成を打捨てゆかん物をとさかしらする也。〔抄〕職事補任云、左大辨藤懷忠。永延二年二月廿七日補之、永祚元年七月十三日任二參議一辨如レ元、又云右大辨藤有國、永祚二年五月十四日補。これらの人なるべし。勘物なし。◎たれかかゝる事を云々 〔春〕内侍と大辨と忍びたる中の事を、誰れか清少に聞かせしとなり。◎それさなせそとかたらふ 〔春〕たとひ大辨見えたりとも、我を見捨てそと、かたらふと戲れての給ふ詞也、◎いみじく見えて云々 〔補〕美隆云、是れより下の文義は、行成卿のさま、わざとをかしき筋などを、もてつけたる事はなくて、只ありにやすらかに物し給ふをいふ也。さて皆人さのみ知りたるにとは、皆人は、行成卿のつくろひなく、唯ありに物し給ふを、さばかりの人ぞと、たゞ大凡に見知りたるをいふ也。さるを、清少納言ばかりは、卿の深き心の趣きを知りたりとなり。北村翁の、夫婦の事に見られたるは非也。⊖猶おくふかき御心ざま 〔春〕行成の淺はかならぬ心を、清少の見知たれば、なべての人ならずと、中宮へも申せしと也。◎又さ知ろしめしたる 〔補〕中宮にも清少と同じく、行成卿の心の至り深きを、知ろしめしたりと也 ⊖女はおのれをよろこぶものゝ 〔春〕これ豫讓が詞にて、史記にあり。智伯といふもの、豫讓をよく見知てめしつかひしに、趙襄子といふ者、智伯をころしければ、豫讓が云、士爲二知レ己者一死。女爲二說レ己者一容。今智伯知レ我、我必爲二智伯一報レ雖而死といひて、趙襄子をねらひて、終に死したる事也。これを清少に我懇志をいはんとて、士は

申し給ふな　古本に「ようしり給へり」に作れり

見えにくけれ　諸本見にくけれとあれど素本活字本異本によりて改む

春本御前にへさあしうけいするとあり今抄本によりて改めつ

らふなり」との給ふ。いみじく見えて、をかしき筋などたてたる事はなくて、たゞありなるやうなるを、みな人さのみ知りたるに、猶奥深き御心ざまを見しりたれば、「おしなべたらず」など御前にもけいし、又さ知ろしめしたるを、つねに（行成の淸少にの給ふ詞）「女はおのれをよろこぶ者のためにかほづくりす。士（シ）はおのれを知れる人の爲にしぬといひたる」と、いひあはせつゝ申し給ふ「とほたあふみのはまやなぎ」などいひかはしてあるに、わかき人々は唯いひにくみ、見ぐるしきことどもなど、つくろはずいふに、（若き女房達の詞）「此の君こそうたて見えにくけれ、こと人のやうにどきやう（讀經）し、うたうたひなどもせず。けすさまじ」などそしる。さらにこれかれに物いひなどもせず、（行成の詞）女は目はたてざまにつき、眉（マユ）はひたひにおひかゝり。鼻はよこざまにありとも、たゞ口つきあいぎやうづき、おとがひのした、くびなどをかしげにて、聲にくからざらん人なん、おもはしかるべき、とはいひながら、猶かほのいとにくげなるは心うし」とのみの給へば、まいておとがひほそく、あいぎやうおくれたらん人は、あいなうかたきにして、御前にさへぞあしざまにけいする。

◎職の御曹司　〔補〕職は中宮職を略し云へる也。もと中宮付の役所にて、宮の御用を取り扱ひたる所なるか、其の内の曹司を、さる方にしつらひて、假に宮の御座所としたるなり。是れは日本紀略に、長德三年六月

恥づかしがらぬ意、または不遠慮なること、不禮なる事にも、おもなしといへる所あり。◎もたりて 【通】春註の、むすめなどに持ちてとあるはいかゞあらむ 高貴の人は、愛敬づきたるとのもりの下女だ、家におきての意なり。装束など美麗にして、家の内の事、取りまかなはせたしとなるべし。◎なのこは 【通】前の下女の際はとあるに對して、男のつかさにはと也。◎しら〳〵し 【通】千蔭校本及び活本には、さう〳〵しとあり。さらば淋しく物足らぬ意か。春本しら〳〵の方に従へば白々にて色ふしのなくしらけて見ゆるをいふ。◎辨など 【春】辨官はなかしくよき官とおもへどもと也。左右大辨中辨少辨すべて七人あり。百寮訓要云、陣の右筆、諸事奉行する器也。執柄三家の人などは、近比いたゝならず 但其例はおほし。名家の人儒家殊に執する官也。◎下襲のしり 【通】後三條天皇の延久二年の符宣に、大臣の裾の長さ七尺、納言六尺、參議五尺、四五位四尺と定められたる事あれば、當時の辨官のは、四尺程なりけむ。當時は長き裾流行して、短きを卑しみたる也 裾の次第に長くなりし事、装束圖解に記しおけり。

五一 （頭ノ辨）

職（シキ）の御曹司の西おもての立蔀のもとにて、頭ノ辨（行成卿也）の、人と物をいとひさしくいひたち給へれば、さし出でて（清少）「それはたれぞ」といへば、「辨の内侍なり」（行成卿の答）とのたまふ。「な（清少の詞）にかはさもかたらひ給ふ。大辨見えば、うちすて奉りていなんものを」といへは、（行成）いみじくわらひて、たれか（行成の詞）かゝる事をさへいひきかせけん。それさなせそ」とかた

しら／＼し　千本さうざうしとあり

◎もてあそびたる　(書)うつくしみ愛しゐたるなり。

五十（とのもりづかさ）

とのもりづかさこそなほをかしきものはあれ。下女(シモヂンナ)の際(キハ)は、さばかりうらやましき者はなし。よき人にせさせまほしきわざなり。若(ワカ)くてかたちよく、なりなどつねによくてあらんは、ましてよからんかし。年老いて物の例などしりて、おもなきさましたるも、いとつきづきしうめやすし。とのもりづかさの顔あいぎやうづきたらんをもたりて、装束時にしたがひて、唐衣など今めかしうて、ありかせばやとこそおぼゆれ。をのこは又随身こそあめれ。いみじく美々(ヒヒ)しくをかしき君達(キンダチ)も、随身なきはいとしらじらし。辨など、をかしくよきつかさと思ひたれども、下襲のしり短くて、ずゐじんなきぞいとわろきや。

◎とのもりづかさ　(春)御殿の掃除さしあぶらなどの役する女官也　(稿)前にも出でたり　後宮職員令に、殿司といふ役所の、女孺のことなり。◎下女のきは、云々　(春)下臈の中に、とのもづかさほどなるはなしと也。◎なり　(稿)形(ナリ)、今の詞にもいふ如く、専ら服装の事をいふ。◎おもなきさましたる　(春)おもてづよくものにうてぬさまするる也。若き者はうひうひしげなるに、年老てさやうならぬ心也　[illegible]この註よろし。今のつかひざまは、大かた面目なき事にいへるやうなれど、昔は然らず。紫式部日記などにも、厚顔にて、

月夜にむな車云々以下千蔭臭蔭等の校本は古本になしとて削りたれど抄本傍註本等の版本にあればもとのまゝにさしおく武藤氏の本も削り去りたり

を、たがぞととふに、ついゐて「何がしどのゝ」といひて行くはいとよし。けしきばみやさしがりて「しらず」ともいひ、きゝもいれでいぬるものは、いみじうぞにくきかし。

月夜にむなぐるまありきたる。きよげなるをとこの、にくげなるめもちたる。ひげぐろにゝくげなる人の、年おいたるが、物がたりする人の兒（チゴ）もてあそびたる。

㊀ほそどの　〔春〕細殿。廊なり。女官の住まふ部屋の廊に、侍等と出で居て、其の前を通行する者を、呼びなどして戯れ弄ぶなり。㊀見やすからず　〔春〕春註目安からずと同心也。見にくき事也。とあるは少したがへり。按ふに容易に見のがさぬ意にて、俗に見とがめてといふことなり　㊀つゝみふくろ　〔春〕これも春註は、つゝみぶくろとつゞけ讀みて、一つのものとしたれど、從ひがたし。ふくろ清みてよむべし。つゝみとは別にて、とのゐ袋といふものの事なり。㊀さしぬきの腰　〔春〕指貫の袴の紐の、つゝみよりもれ出でたる也。㊀けしきばみ　〔春〕氣色だちたる氣色を、あらはすこと、やさしがりは、恥づかしがること也　㊀月夜に云々　〔春〕これより又にげなきものをいふ也　㊀むなぐるま　〔春〕人ものつらぬ車也。月夜には乘車にて月見ありくこそ然るべけれ。空しき車は似ず也　〔春〕入江昌憙か久保之取蛇尾に、むな車といふ事、先達註に人の乘らぬ車也といへり。空車の義と聞ゆ。輔政集に「返二迎車一戀」のせてやる我心さへとゞろきてねたくも返すむな車かな」云々空穗物語藤原君卷に「むな車に魚鹽積みてもて來たり」云々などあるは荷車なり。いづれをもむな車といへりと聞ゆ。◎物かたりする人の兒　〔春〕人の子のわづかに物いふをとなり

ふ也。うへのとは殿上せし事なり。撿非違使の尉の、昇殿にまれなる事なれど、これは藏人なれば昇殿勿論なるべし。又いづれの官にも、長官次官判官主典あれど、只判官といふは、撿非違使の尉の事なり。又撿非違使の佐尉志は必衞門なり。職原抄に委し。◎うちわたりのほそどのなどに　(春)禁中の廊也。源氏に、弘徽殿のほそどのといへるたぐひなるべし。さやうの所に局したる女房のもとへ、彼人におぢらるゝ、判官、ゆげひのすけなどの、しのびいり居たるが、にげなき事をいふ也　◎きら〳〵しからんもとおしはからるるなどよ　(春)たとひきら〳〵しき袴にても、藏人の衞門などのは、あなづらはしくて、薰物したる几帳には、にげなからんに、ましてかくおもたげにあら〳〵しきは、いやしさとの心をふくめたる詞也。◎さかしらに上のきぬわきあけ　(磐)さかしらには、いみじげにといはん程のこと也。武官の上の衣は闕腋(ケツテキ)の袍なり。之をわきあけの上のきぬといふ。◎ねずみの尾のやう云々　(磐)闕腋は、背後(ウシロ)の裾(スソ)いと長ければ、清少が例の口さがなさ、鼠の尾のやうにとはいへる也。之を大かたに縮ね折りて、几帳にかけたるをいふ。◎五位の藏人も　(磐)春説は従ひがたし。夏陰云、上文に云へる如く、六位ノ藏人の判官を兼ねたる人のみならず、五位ノ藏人の、延尉ノ佐なるも、亦同じといふことゝなり。

四九　(ほそどの)

ほそどのに人とあまたゐて、ありくものども見やすからず呼びよせて、ものなどいふに、きよげなるをのこ小舍人(コトネリ)わらはなどの、よきつゝみふくろに、きぬどもつゝみて、さしぬきの腰などうち見えたる、袋にいりたる弓矢楯鉾太刀などもてありく

刀自得選のたぐひ也、内侍更衣などにむかへていふ　此の草子の文を考ふるに、其のかみに、女子の袴、紅(クレナヰ)に限らざりけんを、此の頃より、上下一般に紅色流行しけるにや。(一)ゆげひのすけの　〔春〕左右の衛門佐を云也。花鳥餘情云、靫負と書て、ゆげひとよめり。靫(ユギ)は矢をいるゝ矢壺(シコ)をいふ。左右衛門は、弓箭を幸するつかさなるにより、ゆげひといへり　抄に古に、彈正左右衛門、各々その司る所を守りしに、淳和天皇の比より撿非違使の廳を置たまひしより、諸官此廳に接せらるゝ故に、宮城諸門閉開、禁中外構夜の焼火などを役とする也。之を靫負ノ亮といふ。とあり。ユゲヒは靫負(ユギオヒ)の約語。ⓒやかう　〔春〕夜行とは、衛門府は内裏の衛門を守る故、夜の巡行をつとむる也。ⓒ狩衣すがた　狩衣姿は女房の住む局へ通ふ時の忍び姿をいふ。元来巡邏警衛の官なれば、闕腋の正装、弓箭をも帯して物すべきに、さはなくて、いかめしかるべき武官の、やつしたる忍びすがたは、輕々しとなり。異本いやしげ也を、あやしげ也とある、殊によろしげ也　(一)人におそらるゝ上のきぬ云々　されぱとて、人の恐るゝ正装にて、女房の細殿あたりに、立ちさまよふも、人見つけなば、輕侮すべしとなり。春註にも衛門佐は相當從五位なれば、其袍赤色にて、目驚く色なれば、おどろ〳〵しくといふ也。源氏澪標の卷に云、良清もおなじ佐にて、人よりことに物思ひなきけしきにて、おどろ〳〵しき赤ききぬ姿いと淸げ也　とあるも靫負佐の事なり。うへのきぬは、袍卽ち闕腋のこと。ⓒけんざのものや云々　これは、衛門ノ佐などの、正裝のまゝ女房の局などへ忍び來るを、淸女などの見つくる時は、戯れいふ詞にて、此の邊に嫌疑ある罪人など居るにや。それを搜索のために、斯くたゝずみ給ふか。など告めいふと也　(一)六位藏人うへの判官　〔春〕六位藏人とは、靫負の尉などの六位藏人を兼たる也。うへの判官とは、役の藏人の衛門尉の、撿非違使のぜうになりたるをい

しみたる抄本によれり春本そらだき物したるとあるよりまされば也

おどろしく、たちさまよふも、人見つけばあなづらはし。けんぎの者やあると、たはむれにもとがむ。六位の藏人、うへのはうぐわん(判官)とうちいひて、世になくきらきらしき者におぼえ、里人げすなどには、此の世の人とだに思ひたらず。目をだに見あはせで、おぢわなゝく人の、うちわたりの細殿などに、しのびて入りふしたるこそ、いとつきなけれ。そらだき物にしみたるきちやうに、うちかけたる袴のおもたげにいやしう、きらきらしからんもと、おしはからるゝなどよ。さかしらにうへのきぬわきあけにて、ねずみのをのやうにて、わがねかけたらん程ぞ、似げなき夜行の人々なる。此のつかさのほどは、ねんじてとゞめてよかし。五位の藏人も。

(一)しどかみたるかみ (評)源氏行幸巻に、わりなうしどかみとあるな、細流にちゞみたる也云々、(二)月のいとあかきにやかたなき車 (評)月明なる夜は心してよき車こそ似合べけれとの心也 (評)やかたは、屋形の義、和名抄車蓋、車箱の事。このやかたなき車は、荷車なり。人の乗る車、屋形なきはなし。(三)又さるくるまに (評)さやうの屋形もなき車に、よき色なる牛をかけたる也。(評)和名抄、黄牛、阿女宇之とあり。黄牛とかくゆゑは、飴色即ち淡黄褐に似たる毛色の牛なれば也。(四)はらたかく (評)老女の懐姙したるさま也 (五)椎つみたる (評)春抄の傍註には、椎の實くひたる也とあれど、清臣の説に、物をつまむことを、字鏡などにつみとあれば、椎をつまみてくらふさまともいふべけれど、こゝはたゞ、落椎をひろふをいふなるべし、あげまきなどは、椎ひろふさまの、似つかはしけれど也。とあるよろし (六)下﨟のくれなゐの袴 (評)

けしにや。又下文に、風の段あれば、そこに入べき詞にやいかゞ。もし書寫の誤りか、諸本知し此此處にかけり。(三)汗の香すこしかゝへたる　(春)汗の香なうつし止めたる心也　(黒)かゝへは抱へにて、香の保たれてある由、黒川翁の說もあれど、聊か思按ないひ試んに、下文人の家の前わたるの條に「又さて行くに薫物の香のいみじうかゝえたる」などあるを思ひ合するに、香の嗅がるゝないふ俗語か、人に思はるゝ事をおぼえといひ、見らるゝ事を、見えといふも、思はれ、見られなり。同じ語法にて、嗅かるゝ事を、かゝえともいふにはあらじか。もし然らば假名えなり。

四八（にげなきもの）

似げなきもの。髮あしき人の、白き綾のきぬきたる。しゞかみたる髮にあふひつけたる。あしき手をあかき紙にかきたる。げすの家に雪の降りたる。又月のさし入りたるもいとくちをし。月のいとあかきに、やかたなき車にあひたる。又さる車に、あめ牛かけたる。老いたるものゝはらたかくてあえぎありく。又わかき男もちたるだにいと見ぐるしきに、こと人のもとにゆくとてねたみたる。老いたる男のねまどひたる。又さやうに髯がちなる男の、椎つみたる。齒もなき女の梅くひてすがりたる。げすの紅のはかまはきたる。此の比はそれのみこそあめれ。ゆげひのすけのやかう、狩衣すがたも、いといやしげなり。又人におぢらるゝうへのきぬはたおどろ

もちたるだ］に春本「だに」の二字なし屋代本夏蔭本による

佛事の作法をいふ事と見えたり (一)ほとめき [補]存海云、ほとめきは音のあることにて、なりはためくといふ、はためくに同じ語なるべし。ほとのとを、にごるはわろし。◎はへこそにくき物 [春]蠅也詩小雅にも讒人にたとへにくめり。憎蒼蠅賦などおもふべし。[補]この賦は、歐陽永叔の作にて、八大家文にあり。◎愛敬なく云々 [補]さる愛敬なく憎きものは人々しう云々とありし、さるの二字脫せしならむ。俗言のアンナニクイ物は、人なみに書き出づべきに非ずと也、◎人の名につきたるは [補]蠅麿など名のる者は、其の人さへ疎ましと也。古來虫麿猿麿伊多智などと、寄名を呼びしもあれば、蠅と名のりしもありしならむ。なほ寄名の例、瀧澤馬琴の玄洞放言に委し往見すべし。◎夏むし [春]八雲御抄云、夏虫は惣名也、火に入るをもいふ。後撰に夏虫の聲より外になどもよめり。又螢を夏虫といふも常の事也。童蒙抄云、夏夜火にとびいる虫を云。本文靑蛾撲燭といへり。[補]濱臣云、猶こゝは靑蛾なるべし。

四七 （ひるね）

七月(フヅキ)ばかりに、風のいたうふき、雨などのさわがしき日、おほかたいと涼しければ、扇もうちわすれたるに、あせの香少しかゝへたるきぬのうすき、引きかづきてひるねしたるこそをかしけれ。

◎七月ばかりに [春]是より例の淸少の筆すさびなり [磐]こゝに虫のつゞきに風の事をいひ出しは、樂天詩句に、秋風嫋々秋虫鳴とあるより思へるにや。又蟻は本草に能知$_{二}$雨候$_{一}$とあれば、かく蟻のことよりつゞ

非として鐘の響に云へるやう、顯註に和布海苔などにつきたる小貝をは、われからと云ふといはれたるこそ、據ありてはきこゆれ。齋宮女御集に云々。返し「忘るらむ藻にすむ虫の名をとはゞかひもあるぞとあまは告げまし」等部是れにつきて按ふに、此のわれからといふ虫のあるにはあらず。われからとは、破殻(ワレカラ)の義にて、顯昭などのいはれたる如く、海に栖む虫の、貝の破れたる殻(カラ)どもの、藻に附けるを云ふ也。色葉和難抄、玉勝間、後撰新抄に至りては、既に其の虫を見たりとさへ云へる、いとをさなくかたはらいたき說也と、直云、貝といふ說然るべし。古名錄引く所の大和本草に云、われから、藻につきし殼の一片なる小蝶なり。分粒(ワレカラ)の意なるべし。ふたなき故なり。又云われから、海中の藻にすむ小貝なり。色淡黑、大きさ三四分に過ぎず。其殼われ易し云々とて、藻に附着したる圖を出せり。清女は古來の歌に「藻に住む蟲」とよめれば、蟲の中に出したるならむ。㊀簑蟲 大和本草云、口より糸を出し、木の葉をつゞりて巢とし、木の枝に附いて下り垂る云々。源平盛衰記九に、草木(クサキ)の葉をむすび集めて著たりければ、おどろを戴ける簑虫に似たり。などあれば、其の形狀より名つきたりと見ゆ。さて此の蟲鬼の子なりといふ傳說、この草子より古き、管見に入らず。後の歌學書などには、皆この草子を本にしていへる也。㊁こんずる 圏來んとするの約語。㊂ぬかづき虫 圏叩頭虫、和名に、虫の細微者、觸レ之輙叩レ頭云々。河海云、額突は稽首也云々。此虫かしらをつきて禮拜するやうなれば、名づくる也。㊃さる心に道心おこして 圏かゝはかなき虫の菩提心をおこして、常不輕などつきありくよと、例の清少の筆すさびなり。常不經をつく事、源氏總角卷。元亨釋書。時尾の勝如上人の傳にあり、圏常不輕とは河海抄、法華經不輕品の文を引き、額つくといふ心なりとあり。案ふに、常不輕は、不輕品に說ける趣旨によりて、諸所に禮拜して、幾度も額つく、

「愛敬なく」の上に「さるの」二字落ちたるか　「いとうまし」春本「必かたし」とあり抄本に従ふ　「夏虫いとをかしく」の下春本「らうの上とびありく」とあるは誤脱なり抄本千本によりて補訂す

に入れつべけれ。愛敬(アイギヤウ)なくにくきものは、人々しうかきいつべき物のやうにあらねど、よろづの物にゐ、顔などにぬれたる足してゐたるなどよ。人の名につきたるはいとうとまし。夏蟲いとをかしく、らうたげなり。火近うとりよせて物語など見るに、さうしの上などにとびありくいとをかし。蟻はにくけれど、かろびいみじうて、水のうへなどを、たゞあゆみありくこそをかしけれ。

◎すゞむし　〔補〕藤井高尚云、リン〳〵と鳴くは松虫　チンチロリンと鳴くは鈴虫なり。さるを今の人は松虫を鈴虫といひ、鈴虫を松虫と心得るもあり。松虫の名におへるは、リン〳〵となく聲の、遠くては松風の聲のすめるに通ひて、聞ゆる故にぞあるらむ。（松の落葉の文節略）◎はたおり、きりぎりす　〔補〕この二つは同じ虫なりと、春曙の註また村田春海、高田與清もいへり。（松屋筆記に）されど是は文學者の考案なり。專門家の說を聞けば、畔田翠山の古名錄に、「はたおり、きり〴〵す、こほろぎは、其蟲三種にして一類なり。古は其の別ち正しかりしに、今は相混ぜり。」とて其の形狀鳴聲のことまで精しく記せり。實に其の別なくば、清女の斯く二つをならべ出だす事あらじと思はる。◎ひをむし　〔參〕細流、蜉蝣也とあり　爾雅云、蜉蝣渠略也、似二蛣蜣一身狹而長有レ角黃黑色生二糞土中一甲下有レ翅能飛朝生夕死云々。愚案ひをむしは、かげろふと同物にや。〔補〕濱臣云、和名抄、蟜、朝生暮死虫也、ヒヨヲ虫也　◎われから　〔補〕あまのかる藻にすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をば恨みじ。」古今集に典侍直子の歌、伊勢物語にもありて人のしる歌なり。入江昌喜の隨筆「くぼのすさみ」又本居翁の遠鏡等には、われからを魚とせり。橘守部之を

ために、氷なくはへおく事也 江次第廿、新任大臣大饗云、羞二肴物一暑月削氷甘瓜等云々、同五、列見の音書云、粉熱又加二削氷一、列見延引及二暑月一時如レ之云々 ⓒあまづら 〔語〕甘葛、千歳蘽汁、今の世の糖（アメ）砂糖いやうに食物に和して用る物也。順和名云、千歳汁、本草云、味甘平無レ毒、續二筋骨一長二肌肉一、一名蘽蕪、和名阿末豆良。本朝式云、甘葛煎也。ⓒあたらしきかなまり 〔語〕延喜式主計云、土師鋺形五十口、順和名にも、鋺の字なかなまりとよめり。宇治拾遺物語に、水飯た集のかなまりにもる事あり 碗の類也 ⓒうつくしきちごの云々 〔語〕うつくし、上にも註せる如く今美麗の事にいへど、古は慈愛（イツクシミ）の義にて、愛らしきこと也。覆盆子も、赤く小さき果（ミ）なれば、共に可愛らしく上品なる由ならむ。

四六（むしは）

蟲は、すゞむし。松むし はたおり きり〴〵す。蝶。ひをむし。われから。螢。簑虫 いとあはれなり。鬼のうみければ、おやに似て、これもおそろしきこゝちぞあらんとて、おやのあしききぬひきゝせて、今秋風ふかんをりにぞ來んずる。まてよ」といひて、にげていにけるもしらず。風のおときゝしりて、八月（ハツキ）ばかりになれば、ちゝよ〳〵と、はかなげになく、いみじくあはれなり。ひぐらし。ぬかづき蟲 又あはれ也。さる心に道心（ダウシン）おこして、つきありくらん。又おもひかけずくらき所などに、ほとめきたる聞きつけたるこそをかしけれ。蠅こそにくきものゝうち

どして、殊に尊敬ありき。○知足院 〔春〕翁芥に、千葉介建立云々、とのみにて所在未詳。〔春〕紫野の内なるべし。○いつしかしたり顔に 〔春〕五月になれば忽ち得意顔になくと也。○はたがくれ 〔春〕端隠半（ナカバ）かくれたる也。○らう〳〵じう 〔春〕労々にて労巧なる也 ○いみじう心あくかれ 〔春〕あまりに感にたへての心也〔春〕あくがれは心の浮かるゝ事也 ○よるなくもの 〔春〕前に鶯の夜なかぬを難じたるにつけていふ也。郭公にも限らず、水鶏秋虫などの類、すべていふなるべし。

四五（あてなるもの）

あてなるもの。薄色にしらがさねのかざみ。かりのこ。けづりひのあまづらにいりて、新しきかなまりに入りたる。水晶のずゝ（数珠）。藤の花。梅のはなに雪のふりたる。いみじううつくしきちごの、いちご（覆盆子）くひたる。

○あてなる物 〔春〕上品にして優美に見ゆる物をいふ ○うす色にしらがさね 〔春〕薄色に薄き紅など也。白重の汗衫は童女の袙夏の衣服也。〔春〕薄紫に白きを重ねたるならむ。薄き濃きといふは、紅と紫とに限ることながら、服飾漫語にも「薄色とうちまかせていひたるは薄紫の事也。とあり 又紫は上品なるものにいへること、此の草子所々に見ゆ。◎かりのこ 〔春〕河海云、鴨子。西宮記細流云、かものこ也 〔春〕濱臣云、古事記仁徳上にあり。万葉二鳥埴立飼之雁之兒云々とあるは鳧のこと也。後の物語ふみに、かりのことあるは鳧の兒也 冠辭考のあまとぶやの條に委し ◎けづりひ 〔春〕削氷、夏月の暑さに、くひ物損ぜしめぬ

ていふもおろかなり。よるなくもの、すべていづれもいづれもめでたし。ちごどものみぞさしもなき。

○さばかりあてに　(補)さほどに上品なる、なつかしきに比しては、禁中になかぬのみ不滿足なりとなり。あては上人(ウハテ)にて、上等なること。程よりはとは、何々の分に比べてはの意。○こゝのへのうちになかぬぞ　(春)是清少の中宮に侍し比など自然なかざりしなるべし。必内裏になかぬにはあらず。朗詠ニ宮鶯囀ニ曉天一といふ題にて西樓月落花間曲、中殿灯殘竹裏聲と菅三品作給へり。又拾遺集に醍醐の帝の御前の五葉に鶯のなきけるを「松のうへに鳴鶯の聲をこそ初ねの日とはいふべかりけれ」とよみし事もあるなりや。◎さるは竹もちかく　(春)禁秘抄云。中殿東庭竹臺二云々彼中殿灯殘竹裏聲といへる是也。中殿は清涼殿なり　◎こうばいもいとよく　(春)禁秘抄云。天德四年十二月十八日栽ニ紅梅於中殿艮角一とあり。其外仁壽殿梅壺などにも紅梅うゑられし事侍り。◎まかでて　(春)里亭などに退出して　◎いぎたなき　(補)寢穢しにて眠を貪る由なり　◎今いがゞせん　(春)天性さやうに生れ付きたればせん方なしと也　◎むしくひ　(補)夏蔭云、蟲くひといふ鳥は別にあり。古人はおほらかにて、一つに心得たるなり。◎春なくゆゑこそあらめ　(春)夏秋までもなく物を、春の鳥と定たれば、春なくべき故あるやらんとなり。◎年たちかへると　(春)拾遺集「あらたまのとしたちかへるあしたよりまたるゝ物は鶯のこゑ」素性　◎人をも人げなう　(春)鶯は世にもてはやさるゝ鳥なればこそ、久しく鳴く、夜なかずなど云難をつけて、そしりもすれといはんとてのことばなり。◎うりんゐん　(春)紫野に今うぢゐといふ所其舊跡也。河海云、雲林院に淳和の離宮也。仁明天皇に處分し奉給ふ。次に常康親王傳領、本堂は彼親王の室也。其後御願寺として、天曆に寶性僧都別當に補せらるな

鳴く。よる鳴かぬもいぎたなきこゝちすれども、いまはいかゞせん。夏秋の末まで老いごゑになきて、蟲くひなど、ようもあらぬ者は、名をつけかへていふぞくちをしくすごきこゝちする。それも雀などやうに、常にある鳥ならば、さもおぼゆまじ。春なくゆゑこそはあらめ、年たちかへるなど、をかしきことに歌にもふみにもつくるなるは、なほ春のうちならましかば、いかにをかしからまし。人をも人げなう、世のおぼえ、あなづらはしうなりそめにたるをばそしりやはする。鳶烏などのうへは、見いれきゝいれなどする人よになしかし。されぱいみじかるべきものとなりたればとおもふに、心ゆかぬこゝちするなり」。まつりのかへさ見るとて、うりんゐん知足(チソク)院(ヰン)などのまへに、車をたてたれば、ほとゝぎすもしのばぬにやあらん、なくに、いとようまねび似せて、木だかき木どもの中に、もろごゑになきたるこそ、さすがにをかしけれ。郭公はなほさらにいふべきかたなし。いつしかしたり顏(ガホ)にもきこえ、歌に、卯の花、はなたちばななどにやどりをして、はたがくれも、ねたげなるこゝろばへなり。五月雨のみじか夜にねざめをして、いかで人よりさきに聞かんとまたれて、夜ふかくうちいでたるこゑの、らう／＼じうあいぎやうづきたる、いみじうこゝろあくがれせんかたなし。みなづきになりぬれば、おともせずなりぬる、すべ

侍るべし　◎谷へだてたるほど　〔補〕峯をへだてゝ、夜は雌雄ふす鳥なり。さればひとりぬる心にもよめるなるべし。○なく聲雲ゐまで　〔補〕相鶴經ニ云々聲聞レ天故頭赤、食ニ於水一故啄長云々　〔補〕毛詩にも鶴鳴ニ九皐一聲聞ニ于天一などあるによりてかけるにや。○いかるがのをとり　〔補〕斑鳩ノ雄也。和名抄ニ鶍、貌似レ鵤而白啄　◎たくみどり　〔補〕巧鳥也。〔補〕和名抄、巧婦。好剖ニ葦皮一食ニ中蟲一故亦名ニ蘆虎一とあり。今俗葦（ヨシ）はら雀といふは是れにて、葦剖（ヨシワリ）を訛りたるなり。○まなこゐ　〔補〕眼居の意、俗の詞に目ツキといはんが如し。◎ゆるぎの森に　〔補〕萬木ノ森近江也。「高島やゆるぎの森の鷺すらもひとりは寢じとあらそふものを」六帖。◎はこどり　〔補〕知れざる鳥なり。或説に、はやこく〳〵と鳴く故、早來（ハコ）鳥とかくといへり。◎はねの上の霜　〔補〕六帖「はねの上の霜うちはらふ友をなみ鷲（ヲシ）の獨寢するがわびしき」○友などはすらむこそ　〔補〕拾遺集「夕されば佐保の河邊の川霧に友まどはせる千鳥なくなり」友則　○はねの霜うちはらふ　〔補〕後撰集「冬の池の鴨のうは毛におく霜のきえて物おもふ比にもあるかな」◎みやこ鳥　〔補〕海近き川にすむ鳥にて啄と足と赤く羽色白きなりとも、又江鷗（カモメ）の一名なりともいふ。

梅の木夏陰
校本による

鶯はふみなどにもめでたきものに作り、聲よりはじめて、さまかたちも、さばかりあてにうつくしきほどよりは、九重の内になかぬぞいとわろき。人のさなんあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十（ト）とせばかりさぶらひてきゝしに、まことに更におともせざりき。さるは竹もちかく、紅梅もいとよくかよひぬべきたよりなりかし。まかでてきけば、あやしき家の見どころもなき梅の木などには、花やかにぞ

とりはねじ。とあらそふらんこそをかしけれ。はこどり。水とりはをしいとあはれなり。かたみにゐかはりて、はねの上の霜を、はらふらんなどいとをかし。みやこどり。川ちどりは、友まどはすらんこそ。雁(カリ)の聲は、遠くきこえたるあはれなり。鴨は、はねの霜うちはらふらんとおもふにをかし。

◎こと所の物なれど　〔春〕文選鸚鵡ニ云、惟西域之靈鳥、挺ニ自然之奇姿一、體ニ金精之妙質一、含ニ火徳之明暉一、性辨惠能言兮、云々此賦の心は、あふむは西域の鳥にて、形うつくしくちゑありて、能く物をもいへば、山や澤べの官人に仰せて、此鳥をとらしめて、籠にこめつれば、聲悲しみ形もかじけて、聞く人も涙をおとす事を作れり。此賦の心にて、いと哀なりといへるにや。〔補〕あはれといふ詞は、悲哀の義のみにあらず、すべて心に深く感ずる意をあらはす詞なり。此處は此の鳥の巧に物をいふをほめて、感心なりとの義なり。◎みこどり　〔補〕巫鳥。山林にすむ。雀に似たり。眼の圏に菊座の如き輪あり。一名志止止(シトト)といふ。諸器物の孔(アナ)の縁(フチ)に塡むる金具を、志止止目といふも此の故なり。◎ひは　〔補〕鶸。雀より小く背く黄色にて囀りよし。冬多く來たる。◎ひたき　〔補〕鶲。小鳥にて種類ありといふ。ヒタキは直黄の意にて名づけしに非ずや。◎山鳥は友をこひて云々　〔春〕これは「山鳥のをろのはつ尾に鏡かけとなふべみこそ汝によそりけめ」とある歌の義を、清少の述べたるにや。昔隣國より聲面白き山鳥を奉りしに、帝飼ひ給へども鳴かざりしを、ある女御、此鳥友を離れてなかぬなめりと思ひて鏡を籠に立てそへたれば、悦べる氣色にて鳴くことを得たり。此事俊頼の無名抄の說なるを、八雲御抄に記させ給へり。是に異說あれども、此義この草子にかなひ

しく楢にあれば、葉を守る神のいまして、かゝは久しき由にいへるなり。㊂兵衛のかみ佐をいう ㊃八雲御抄に兵衛佐を柏木と云々。大和物語に良少將兵衛の佐なりける時、「柏木の森の下草とよみし事あり。童蒙抄にも兵衛を柏木といふ云々。㊃美隆云、此の草子によれば、柏木は兵衛佐尉などに限るやうに聞ゆれど、源氏に右衛門督をもしかいへれば、すべて衛府の異名也。㊄直按するに禁秘抄内裏焼亡の條に、近邊有レ火之時、陣中ノ將佐、柏夾(カシハバサミ)帶ニ野劍一云々、別當靫負(ユギヘノスケ)佐等用ニ大長ノ弓箭一、大將此時柏夾也と見ゆ、柏夾とは冠の纓を折りたゝみて、白木の挾木(ハサミキ)にて挾みおくをいふ。此の外武官は卷纓に緌(オイカケ)する事常なるが、後世は柏夾とに差別を立つれど、古代はすべて柏夾と稱しつらむと思はるゝ由あり。斯く武官は特に柏夾するにより、柏木と異名せしにはあらずや。㊁すがたなけれど ㊂榎楫に枝もなくさせる姿もなき也。

活本異本の又春本と甚しく異なり しばらく春本のまゝに従ふ

四四（鳥 は）

鳥は。こと〻ころの物なれど、鸚鵡(アフム)いとあはれ也。人の言ふらんことをまねぶらんよ。郭公。くひな(水雞)。しぎ(鴫)。みこどり。ひわ。ひたき(火焼)。山どりは友をこひてなくに、鏡を見せたれば、慰むらんいとあはれなり 谷へだてたるほどなど、いとこころぐるし。鶴はこちたきさまなれども、なくこゑ雲ゐまできこゆらん、いとめでたし。かしらあかきすゞめ。いかるがのをとり。たくみどり。鷺はいと見るめもみぐるしく、まなこゐなども、うたてよろづになつかしからねど、ゆるぎの森にひ

ありけるにか。拾遺にに題しらずの歌にて、下の句「枝にも葉にも雪のふれゝば」とあり ◎いふ事にても云々 〔春〕世に傳る事にても、時節の景につけてもと也 ◎しはすの晦日にしも時めきて 〔春〕十二月の魂祭りに、盆に荷葉なしくやうに、楪なくひ物にしくなるべし。報恩經云、十二月晦日午時來。正月一日卯時歸。この外にも聖靈の來る日あり。彼經に委し 〔補〕徒然草四季の評の末段、しはす晦日(ツゴモリ)の夜のつゞきに「なき人の來る夜とて、魂まつるわざは、此の頃都にはなきを、東の方には、猶する事にてありしこそあはれなりしか。」とあれば、鎌倉時代の末、既に都には、十二月の魂祭り廢れにけむ。◎よはひのぶるはがため 〔春〕花鳥云、齒固は齒はよはひ也。則よはひともよめり。齒固はよはひをかたむる心也。河海云、內膳自二青瑣門一供二御齒固ノ具一盛レ瓷、大根一坏瓜串刺二坏押鮎一坏、猪宍以レ雉代レ之、鹿宍以レ鴨代レ之、以上七坏云々。いまも元日の餠がゞみにゆづり葉をかざり侍り 〔補〕以上の品々の下に、楪葉を敷物にして供する也なほ雅言集覽にも江次第の自二御廚子所一供二御齒固具一又供二御藥酒等一以二高坏六本一獻レ之有二餠鏡一の文を引いて、然あれば、餠のみいはふを齒固といふやうに思へるは誤なるべしと附記したり。◎もみぢせん世や 〔春〕六帖「旅人に宿かすがのゝゆづり葉のもみぢせん世や君を忘れむ」〔補〕ゆづり葉は常靑くて、紅葉する事なきを、もし紅葉する世もあらば、君を忘るゝ事もあらむ、といふ歌の意なれば、淸少のたのもしとかける也。◎かしは木 〔補〕柏の字を通用すれど、本字は槲なり。本居宣長云、かしはは炊葉(カシハ)の義にて、飮を炊く甑(コシキ)の下敷に用ひしものなれば也 ◎葉もりの神 〔春〕後撰「柏木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟りなさるな」此歌大和物語にもあり 〔補〕後撰には初句「楢の葉」と見ゆ 大和物語に柏木とある也。さて柏の葉楢の葉などに、葉守の神のます由をいへるは、是等の樹は、冬になりても葉の落ちず、久

椎柴に人の心をなすよしもがな」堀河次郎百首に㊀實の歌也　猶古歌尋ぬべし　〔頭〕春曙抄再版の本には此の歌のみを殘し、堀河以下の字を削り、新に「寄書のとかへる山の椎柴の葉がへはすとも君はかへせじ」の歌を加へたり。此は讀人知らずの歌なれど、拾遺集雜戀に出でたるなれば、時代相應せり。前の歌は時代かなはず。㊁二位三位のうへのきぬ　〔頭〕二位三位の袍は紫也。白樫にて染るにや。延喜式第十四雜染色式にさまざまあり可ㇾ考。〔頭〕當時は既に、四位以上黑色になりたれば、樫の葉にて染めたるなり。㊁いつとなく雪のふりおきたるに云々　〔頭〕冬ばかりにあらず、常にうす雪などの降るに似たると也。〔頭〕白樫の葉、雪のふれるやうに見ゆる事あるにや。按ふにこは下の「足引の山道もしらず」といふ人麿の歌の意に、附會していへる、古き傳說なるべし。猶次にいふを見よ。㊀出雲の國におはしける云々　〔頭〕ㇾ之ニ御供にて人丸がとあり。此草子第一の秘訣也。拾遺ニ人丸「足引の山路もしらず白樫の枝にも葉にも雪のふれゝば」とあり。此段可ㇾ受ニ師傳一〔頭〕昔は秘傳としたりけん。解しがたき事なれど諸本かくあれば、一概に誤脫とも他の文の錯亂とも定め難し。されば今體案を云ひ試むべし。まづ素盞嗚尊の雪中云々の事、又白樫を云々といふ事も、紀記等の書には見えず。但し出雲風土記大原郡　佐世ノ鄕の條に、古老傳云として、須佐能袁命佐世の木の葉をかざして、踊り給ふ時、挿（サ）させる佐世の葉の落ちし所なる故、佐世ノ鄕といふ由を記せり。佐世は、一名佐之夫（サシブ）ともいひて、今の南天燭の事なり。此の佐之夫を略しては、佐之ともいひけんからに、いつしか樫（ハ如ㇾ之）と云ひ訛りての傳說にても行はれたりしか。又人麿の歌といふも、万葉集第十に「足引（アシビキ）ノ山道不ㇾ知白杜我枝母等乎々爾雪落者（ヤマヂモシラズシラカシカエダモトヲヽニユキノフレヽバ）」とありて、左註に「人麿之歌集出」と見ゆれど、素尊に關かる事はなきを、是れ亦尊の雪中出雲に下りたまひし道すがらを、思ひやり奉りて詠める由の、語り傳へも

皆なきに従ふ
二位三位春本三位二位とあり夏蔭本により改めたり

しきて諸本きの字を脱せり古本による

兵衛のかみ　春本かみの二字を脱せり抄本異本によりて補ふ

にもいとけどほくて、二位三位のうへの衣染むるをりばかりぞ、葉をだに人の見るめる。めでたきこと、をかしき事にとりいづべくもあらねど、いつとなく雪のふりたるに見まがへられて、すさのをのみことの、いづもの國におはしける御事をおもひて、人丸がよみたる歌などを見る、いみじうあはれなりや。いふ事にても、をりにつけても、ひとふしあはれともをかしとも聞きおきつる物は、草も木も鳥むしもおろかにこそおぼえね。ゆづりはのいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青う清げなるに、おもひかけず似るべくもあらず。莖のあかうきら／＼しう見えたるこそ、あやしけれどもをかしけれ。なべての月ごろは、露も見えぬ物の、しはすのつごもりにしもときめきて、なき人のくひ物にも敷くにやとあはれなるに、又よはひのぶるはがための具にもしきてつかひためるは、いかなるにか「もみぢせん世や」といひたるもたのもし。かしは木、いとをかし。はもりの神のますらんもいとかしこし。兵衛のかみすけ（尉）ぞうなどをいふらんもをかし。すがたなけれど、すろの木、からめきて、わろき家のものとは見えず。

◎やまなしの木　㊟河海「世の中なうしといひてもいづくにか身をばかくさん山なしの花」㊟此の歌の詞などに興がりてかけるや。◎それしも葉かへせぬ　㊟紅の木なしも、との心なり「いつとなく葉かへぬ山の

椎の木の下
春本はの字
あり抄本な
始め諸校本

れて 〔春〕六帖「いづみなるしのだの森の楠の木の千枝にわかれて物なこそ思へ」◎人近からぬ 〔春〕深山にある木なれば也。㊁みつはよつはの 〔補〕催馬樂歌に「此殿はむべもとみけりさき草のみつばよつばに殿づくりせり」とある詞によれり。往古の殿舍は、寢殿と對の舍と、分れて構ふるに譬へていへるか。◎さつきに雨のこゑ 〔補〕濱臣云、これは古くかくいふ俗說のありしなるべし。本歌あるべき詞にあらず。」淸水光房云、まつのきとありしな、さつきと誤れるならむ。」美隆云、夫木集廿九、攝政家百首、五月雨、定家「三輪山のさつきの空のひまなきに檜原のこゑぞ雨なそふなる」直云、かく諸家の說あれど猶明ならず。但夫木の歌は、此の草子なもとにてよめりと見ゆ。㊁かへの木 〔補〕和名抄に栢、加倍とあり 古名錄に側栢今名コノテカシハ云々 ㊁葉すゑの赤みて 〔補〕傍註云、栢の葉の上に微赤毛の有る也云々。㊁おなじかたに 〔補〕傍註云、本草綱目ニ萬物皆向レ陽、而栢獨西ヲ指ス、陰木也云々。かゝれば同じ方に指すと書ける也。㊁あすはひの木 〔春〕明日檜木にや。世俗にあすならうといふ木なり。檜の木に似て材木につかふ物也。㊁みたけ 〔春〕吉野の金峯山也。千日精進しに參る也。㊁たれにたのめたるにか 〔春〕たのめは約束する事也。あすとは誰に賴めしと也。〔補〕あすはひな口語にいへば、アスアヒ（明日逢）と聞ゆればならん。たのめは、賴ませの約言なり。◎あぢきなきかねごと 〔補〕詮なき豫言ぞと也 ◎ねずもちの木 〔春〕梗、和名 〔補〕古名錄ひめつばきの事とす。本草啓蒙に、柿葉に似て兩對す、厚くして光あり、冬凋まず。其の實な結ぶに、鼠糞の形の如く色黑し。とあり。

あふちの木。 やまなしの木。 椎の木。 ときは木はいづれもあるを、それしも葉がへせぬためしにいはれたるもをかし。 しらかしなどいふもの、ましてみやま木の中

に木のみ賞翫ある品々を記したるなり　㊀かつら　〔春〕桂、賀茂祭に葵草に添る物也　㊀狩谷氏云、楓樹の一種にて、之をカツラといふは、鬘にするよりの名ならむ。㊀ごえふ　〔春〕五葉松なり　㊀かき　〔頭〕柿は柳の誤ならむ。㊀そばの木　〔頭〕山中に多し、大木は希なり、葉は四時凋まず、形状柳の葉に似て薄し。新葉紅色を帯ぶ　初花の頃白き小花むらがり開く。其のさま蕎麦の花に似たれば、ソバの木と名けしか。花はさけども紅葉を賞翫して、此の條に掲げしなるべし。㊀はしたなき心ちすれど　㊀木立ははしたなき物ながら、若葉の紅葉の珍らしさと也　〔頭〕はしたなしは、物の甚く半端なるをいふにて、良くもなくあしくもあらぬ、俗にドチラツカズといふことなり。樹の状は良くもあしくもあらねど、他の樹の青葉なる中に、これのみ紅葉なるが珍らしとなり。㊀まゆみ　〔春〕檀、いふにも及ばずと也　〔頭〕冬の初に紅葉し、又紫にも染めて美し。東国にて錦木といふとぞ。㊀やどり木　〔春〕宿木、寄生也。三光院御説、寄の一字をもやどり木といふ也。こと木に宿りたるを云也。花鳥には、木の寄薮といふ物也、桑寄生の類云々。◎さかき　〔春〕河海云榊とは眞賢木、眞坂樹日本紀にかけり。天照太神天の岩戸をとぢ給ひし時、八百万の神達、天香久山の坂樹をねこじ取て祈り給ひしより、神の縁木とす、榊は本字にあらず。本朝の作字云々龍眼木と云々。◎臨時のまつり　〔春〕賀茂の臨時の祭は十一月、八幡の臨時の祭は二月也。㊀御神楽の折など　〔春〕内侍所の御神楽に、人長、榊をとりてかなづる事あり。採物の歌にも勿論さかきあり　〔頭〕榊は太古より、神前の木と定まりて生ひ始めけんが面白しとなり　いひはじめとある春本は、下文に誰れかは数を知りて、いひはじめけむとあるより、彼れ是れまぎれしならむ　㊀くすの木云々　〔頭〕楠ノ木は、奇怪しき木の義と聞こゆるからに、おどろ〱しき思ひやり疎ましといへる也　おどろ〱しは、驚異する意の詞なり。◎千枝にわか

おひはじめ　春本いひはじめとあれど抄本によりて改む

かへの木　春本かへでとあるは非なり　葉ずゑ　諸本こずゑとあれど千蔭弘賢二翁の校本に從ふ

まゆみ。さらにもいはず。そのものともなけれど、やどり木といふ名いとあはれなり。さかき。臨時のまつり。御神樂のをりなどいとをかし。世に木どもこそあれ。神の御前の物とおひはじめけんもとりわきをかし。くすの木は、こだち多かる所にも殊にまじらひたてらず。おどろ／＼しきおもひやりなどうとましきを、千枝にわかれて、こひする人のためしにいはれたるぞ、誰かはかずをしりていひはじめけんとおもふにをかし。ひの木。人近からぬ物なれど、みつばよつばのとのづくりもをかし。さつきに雨のこゑまねぶらんもをかし。かへの木。さゝやかなるにも、萠え出でたる葉ずゑのあかみて、同じかたにさしひろごりたる葉のさま、花もいと物はかなげにて、むしなどの枯れたるやうにてをかし。あすはひの木。此の世ちかくも見えきこえず。みだけにまうでてかへる人など、しかもてありくめる。えだざしなどの、いと手ふれにくげに、あら／＼しけれど、何の心ありて、あすはひの木とつけけん　あぢきなきかねごとなりや　たれにたのめたるにかあらんとおもふに、しらまほしうをかし。ねずもちの木。人なみ／＼なるべきさまにもあらねど、葉のいみじうこまかに、ちひさきがをかしきなり。

◎花の木ならぬは　鈔是れ則當段の題なり。前は花のうるはしきをいひ、こゝは花の見事ならぬ、ひとへ

春抄「木は」とのみあり抄本に從ふ

て、紫式部につかはしける、上東門院小少將「なべてよのうきになかるゝあやめ草けふまでかゝる根こそたえせね」かへし紫式部「何ごとゝあやめはわかで今日も猶たもとにあまるねこそたえせね」かゝるたぐひをやいふべき。◎櫻をよろしう思ふ　(磐)こゝのよろしうは、大ていに思ふ由也。◎そばへたる　(春)されたる心也、◎むらさきのかみにあふち　(春)其花其葉の色に應じたる色のかみにつゝみて。◎白き紙をおちて　(磐)根を捻りて也。春註菖蒲の根の樣にせし也とあるは、聞えず。◎文の中にいれなどしたる云々、(磐)此のくだりは、春抄の本文に誤脫あり。隨つて註解をも誤りたり。千蔭翁の校正によれば、菖蒲の入りたる文見るも、優美なることちす。偖その返事かゝんと、中よきどち見せかはしなどする由にて、いと平易に解せらるべし　◎人のむすめ云々　(春)人のむすめのもとへにても、やごとなき御かたなどにも、文やり給ふ人も、端午にはことになまめかしく見ゆると也。◎郭公の名のりしたる　(磐)この鳥の名も、啼く音より付きたりといふ。濱臣云、續後拾遺夏、元方「たちかへりたがとへばかもほとゝぎす己が名をのみなのるならむ」ほとゝぎすの名のるとは、此の歌や始めなるらむ。

四三（花の木ならぬは）

花の木ならぬは。かつら。ごえふ。かき（イ御）。たちばな。そばの木。はしたなきこゝちすれども、花の木ども散りはてゝ、おしなべたる緑になりたる中に、時もわかず濃きもみぢのつやめきて、おもひかけぬ青葉の中よりさし出でたるめづらし。

十三）を錦の袋に入れ、菖蒲蓬等の花を添へて飾とし、五色の糸八尺乃至一丈を貫きたるものなり、五月五日彩糸を臂にかくれば、鬼禍瘟疫を避くといふ、支那の俗に従へるなり、◎御帳たてたる母屋　（補）御帳たてまつる母屋とある本は心得がたし。凡そ清涼殿を初め、高家の寝殿までも、御帳臺は母屋の中に据うる事、常の作法なり。委しくは宮殿圖解にいへり。こゝも中宮御殿の、御帳臺たてたる母屋の柱をいふ也◎あやしきすゝしのきぬ　（補）諸本綾とすゞしのきぬとあり。當時の語法にあらず。按ふに抄本千蔭本の、あやしきすゝしのきぬとあるや宜しからむ。精好ならぬ帛（キヌ）に菊の根を包みたる也。綾と生絹（スヾシ）と二重に包みたるにはあらじ。◎御節供　（補）けふの節日を祝する御饗膳を參らすなり。◎さうぶのさしぐし　（補）このくしは、今の簪の事なり。菖蒲の葉にて作れるなり。さしぐしの考説別にいへり。◎物いみつけ　（補）物忌の簡（フダ）男は柳の木を長さ三寸ほど五分ほどに削りて、冠の纓の上にさす事、禁秘抄に見え、女は紅の薄様（ウスヤウ）紙を、廣さ三分長さ二寸ばかりにして、右の耳の前のあたりの髮を分けて、糸にて結ふ由、雅亮裝束抄に、其の作法、委しく見えたるか、けふは菖蒲の葉を、彼の薄様の紙簡に代用するならむ。菖蒲の物忌つけとかくべきを、上にさうぶのさしぐしさしとあるからに、略したる也。◎むらごの組して　（補）これは物忌とは異にて、菖蒲蓬などを袂に垂れ下ぐる事也。むらごは、白き糸に、所々濃き紫をうちませたる組紐なり。◎かざみ　（補）汗衫とかく童女の服。狩衣に似てうしろ長し。委しくは例の裝束圖解に。◎いみじきわざしたり　（春）藥玉をもちてよろこび思ふ心也　◎つねにたもとをまもり　（春）我袖のくすだまを愛し見るさま也
（補）五色の糸を右の肩に懸けて、斜に左の袂に藥玉を垂れ、なほ餘れる糸を腰に廻して締むる作法なり。濱臣云、新古今、つぼねならびに住侍ける頃、五月六日、もろともにあかして、あしたにながきねをつゝみ

思ひての三字春本なし抄本に従ふ

紙をねぢて　諸本みな根にしてあれど千蔭校本のみねぢてとありいとよろし

文の中に入れなどしたる　の下春本人もとあり千本によりて削る

見せかはし　春本には見せあはせとあるを先輩の校本大かたかはしに作れは改めたり

御文きこえ給ふ　の下傍註本人の字なしよろしければ従ひつ

いみじきわざしたりと思ひてつねにたもとをまもり、人に見くらべ、えもいはず興ありと思ひたるを、そばへたる小舍人童などに、ひきとられてなくもをかし。紫の紙にあふちの花、靑きかみにさうぶの葉、ほそうまきてひきゆひ、又白き紙をねぢてひきゆひたるもをかし、いとながきねを文のなかにいれなどしたるを、見るこゝちどもいとえんなり。返りごとかゝんといひあはせ、かたらふどちは、見せかはしなどするもをかし。人のむすめ、やんごとなき所々に、御文きこえ給ふも、けふは心ことにぞなまめかしうをかしき。夕ぐれのほどに、郭公の名のりしたるもすべてをかしういみじ。

◎せちは　〔補〕人日（正月元日）上巳（三三）端午（五五）七夕（七七）重陽（九九）の五節日をいふ。◎五月にしくはなし　〔春〕花鳥餘情云、五月五日の節、天皇あやめのかつらをかけ給て、武德殿に行幸あり。內辨外辨等せちゑのごとし。宮內省菖蒲を獻す。內侍女藏人續命縷を群臣に給ふ。三獻をはりて六府騎射の事あり。◎さうぶよもきなどかをりあひ　〔補〕菖蒲と蓬とをもて、殿舍の軒にふきわたすゆゑ也。©いひしらぬ　〔春〕敎ならぬ心なり　©ことたりはさはしたりし、〔補〕他の節日にさやうの菖蒲などふく事はありやとなり。◎ぬひどの　〔春〕五月五日のくすだまは、糸所より奉る事、延喜式御記等に見えたり。糸所はすなはち縫殿の別所なれば、此双紙には、ぬひどのよりまゐらするといへるにや。江次第二鑑頭云、絲所在二采女町北一縫殿別所也、五月五日獻二藥玉一是也、©くすだま　〔補〕藥玉は麝香沈香等の薫藥を小丸とし、十二個（閏年は

御帳たてたる春本抄本等たてまつるとあれど千蔭本によりて下文の如く改む　あやしきすゞし春本あやとすじとあれど抄た千蔭本による

四二（せちは）

せちは。五月（サツキ）にしくはなし。さうぶよもぎなどの薫りあひたるも、いみじうをかし。九重の内をはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、いかでわがもとにしげく葺かんとふきわたしたる、猶いとめづらしく、いつかことをりはさはしたりし。空のけしきのくもりわたりたるに、きさいの宮などには、ぬひどのより、御くすだまとて、いろ〳〵の糸をくみさげて参らせたれば、みちやうたてたるもやの柱の左右につけたり。九月九日（ナガツキコヽノカ）の菊を、あやしきすゞしのきぬにつゝみてまゐらせたる、おなじはしらにゆひつけて、月ごろある薬玉とりかへてすつめる。又くすだまは、菊のをりまであるべきにやあらん。されどそれはみな糸を引きとりて、物ゆひなどしてしばしもなし。

御節供（セク）まゐり、わかき人々はさうぶのさしぐしさし、ものいみつけなどして、さまざまからぎぬ、かざみ、ながき根、をかしきをりえだども、むらごのくみしてむすびつけなどしたる、めづらしういふべき事ならねどいとをかし。さて春ごとにさくとて、櫻をよろしうおもふ人やはある。辻ありくわらはべの、ほど〳〵につけては、

日記初度初瀬詣の條に見えたり　㊀水なしのいけ　（補）濱臣云耳なしの池にや、然らば大和也　万十六「みゝなしの池しうらめし云々　此耳なしの池を後にみづなしと誂りたるにや　㊀むげになくかはきてあらばこそ　（案）一向に水なくはこそ、水なしの池とも名づくべけれとの心也。㊀猿澤　（補）奈良の興福寺の南、今もあり。㊀うねめの身をなげ　（案）拾遺集云、猿澤の池に釆女の身なげたるを見て人丸「わきもこがねくたれ髪をさる澤の池の玉もと見るぞ悲しき。」拾遺抄云、人丸が、ならの帝の猿澤の池に行幸し給ひて、釆女の身なげたるを哀みて、人に歌よませ給けるに、御供にてよめる也。此釆女の事、大和物語にもあり。帝の寵愛おとろへしを恨申て身をなげたる也。（補）釆女は郡領の女姉妹の容姿美しき者の採られて、天皇々后の御饌に侍する職。名義は頂(ウナジ)に領巾(ヒレ)掛けて奉仕する故に、頂掛(ウナゲ)女(メ)の約語也とぞ。◎ねくたれがみ（補）寢腐れ髮なり。◎おまへの池　（補）千蔭云、住吉の神前の池をいへるか。攝津國におまへの濱、お前の沖あり。吉田兩岡云、お前の濱、お前の沖、ともに住吉郡の住吉にあらず。同國兎原郡住吉にて、古くよみ來れる住のえとは別也。和名抄に、兎原郡住吉とある所にて、そこにも住吉の神社あり。◎かゞみの池　さやまのいけ　こひぬまの池　（案）此三所八雲にも、かやうに書つゞけて、國所見え侍らず。（補）濱臣云さやまの池は、武藏國なれども、又河内國にもあり。古今六帖に「武藏なるさやまが池のみくりこそ云々」又續日本紀云、天平四年十二月丙戌、築二河内國丹比郡狹山下池一云々。◎みくりといふうた　（案）古歌可レ勘、みくりとは、水草也。おくにしるす　（補）濱臣云、古今六帖に、「武藏なるさ山が池のみくりこそひけばたえすれわれやたえする」とあり。㊀たまもはなかりそ　（案）謠ひものゝ詞也。河海云、風俗上野歌、「をしたかべ、鴨さへきゐる原の池のや、玉藻は眞根苅りそ。生(オ)ひもすがれや、まれかりそや。

照るべき年 春本きの二字なし抄本によりて補ふ

四一（池　は）

池は。かつまたの池。いはれのいけ。にへのゝ池。はつせにまゐりしに、水鳥の隙（ヒマ）なくたちさわぎしが、いとをかしく見えしなり。水なしのいけこそ、あやしう、などて付けけるならんとてとひしかば、五月（サツキ）など、すべて雨いたくふらんとする年は、此の池に水といふものなくなんある。又日のいみじく照るべき年は、春のはじめに水なんおほく出づるといひしなり。むげになく、かわきてあらばこそさもつけめ。出づるをりもあるなるを、一すぢにつけけるかなといらへまほしかりし。猿澤（大和也）の池。うねめの身をなげげるをきこしめして、行幸（ミユキ）などありけんこそ、いみじうめでたけれ「ねくたれがみを」と人丸がよみけんほど、いふもおろかなり。御まへの池。又何の心につけけるならんとをかし。かゞみのいけ。さやまの池。みくりといふ歌のをかしくおぼゆるにやあらん。こひぬまの池。はら（八雲攝津也）のいけ。たまもはなかりそといひけんもをかし。ますだ（八雲大和云々）の池。

◎かつまたの池　（春）勝間田池、或は勝股。八雲には下總とあり。範兼卿の說歌枕等同前。清輔は美作といへり。顯昭法師は大和と云々　（補）濱臣云、万十六「かつまたの池は我しるはちすなし然いふ君がひげなきがごと」◎いはれのいけ　（春）盤余池、八雲に大和云々　◎にへのゝいけ　（補）山城相樂郡贄野、濱臣云、更科

ての意、珍らしからぬ由なり。但し抄本に、近うもてなさずとあるは、解しやすし。◎はかなき文つけなどだにせず （補）昔は消息文の贈答、皆時節の花の枝に結びつけたり。花なき時は、造り花の枝にさへ付けたりと也。さればこゝも、彼の文ゆひ付くる料にだに用ひずとの意なるべし。◎ふみにも作る （補）このふみは詩のこと。あるやうは樣子。子細あらんと也。◎せめて見れば （補）春抄の註に、しひて也とあるにても聞こゆ。せめてとは、迫る、押しつむる意なれば、强ひてすることに成る也。◎にほひ （春）少し赤き也 ◎心もとなく （春）あるかなきかにうすき心也。◎楊貴妃みかどの御使にあひて （春）これは長恨歌にある事をいへり。楊貴妃すでに馬嵬のちりと成りて、玄宗皇帝歎きに堪へ給はで、臨卭の道士を使として、其魂魄を求め給ふに、蓬萊に至りて貴妃に尋ねあひて、帝の消息を傳へしに、貴妃泪をこぼせし事を、玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶雨と白樂天のつくりし事也 （補）長恨歌に春帶レ雨とあれば、春ノ雨とよみ、又ハルサメと傍訓（フリガナ）せしはよからず。◎ことごとしき名つきたる鳥 （春）鳳凰也。格物論云、鳳瑞應鳥、太平之世則見ニ其形一、鷄頭蛇頸、燕頷龜背、魚尾五彩色、高六尺許非ニ梧桐一不レ栖、非ニ竹實一不レ食云々。◎まして琴につくりて （春）毛詩云椅桐梓漆、爰伐琴瑟。文選十八嵆叔夜琴賦云、惟椅桐之所レ生兮、託ニ峻嶽之崇岡一、至人攄レ思制爲ニ雅琴一、下略、（補）白氏文集桐花詩にも、截爲ニ天子琴一の句あり ◎あふち （春）せんだんの木の事也 （補）棟のこと、◎かれぐ （補）抄にまばらに咲く有樣を見たてし心なりと有り。◎五月五日にあふも、（春）拾芥云、證類本草云五月五日俗人取ニ楝葉一佩レ之避ニ惡氣一、今も田舍には端午にせんだんを軒にかざす事あり。（補）楝をアフチとも訓めど、楝の方本字なり。

を修し、了りて御居所紫野なる寺院に遷り給ふなり、其の儀衛行列を見んとて、紫野邊へ來て見れどの意、かへさは還るさの略語 ◎おどろなる頂標 〔□〕おどろは、生垣の楠などの、入りちがひ亂れがはしきをいふ也。おどろの髮などいふにて知るべし、荊棘のことにいふは、後世の轉なり。◎あやしの家 〔□〕賤しき農家をいふ。奇怪なることに非ず。◎あをいろのうへにしろきひとへ 〔春〕おどろの垣の青きに、卯花の白きをたとへし也。あを色とは麹塵也。〔□〕白きひとへ、重ねかづきたるとよむべし。春抄ひとへかさねと續けてよめるはよろしからず。是れは表白裏青の、卯の花がされに似たるをいふなり ◎あをくちばなどに 〔春〕青朽葉、おもて青丹の黑みあり。うらは青と、桃花蘂葉にあり ◎かよひたる 〔春〕似通ひたるなり。◎橘のこくあをきを 〔春〕葉の濃青也 ◎みのこがねの玉かとみえて 〔春〕橘は花に實をぐしてある物なり。朗詠盧橘詩。（具平親王御作也）枝繫二金鈴一春雨後、花薰二紫麝一凱風程」この詩にてかけり。雨のふりたるつとめてなどといへるも、春雨後の心なり。〔□〕美隆云この實は、去年の實の、あからみたるが、其のまゝにてあるをいふなるべし すべて此の實は、今も木ながらいつまでもあるもの也 源氏胡蝶の卷に、宮の畫なる御くだものゝ中に、橘のあるを云々と見えたるも、四月の事也、また賴政集に、年老いたる人の、五月十日比に、盧橘の有りけるを、隣なる人のもとへ遣すとて、折櫃のたて紙に、かきてつかはしける「橘は花の咲くまでありけるに老いぬる身こそとまるまじけれ」◎ほとゝぎすのよすが〔春〕より所といふ心也。〔拾〕萬葉に「橘の花ちる里のほとゝぎすかた戀しつゝ鳴く日しぞ多き」同十一に人丸「たちばなの林をうゑん子規つねに冬まで住みにたるかね」この心なり ◎よにすさまじく 〔□〕よにのよに、强めたる辭なり。世とかくは借字。すさまじは、用なきこと、不興などいふに同じ ◎目に近く 〔□〕誰が目にも近くし

かれ〳〵春本かればなとあれど万抄は従ふ

てさま〴〵なるねの出でくるなど、をかしとはよのつねにいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ」。木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとをかし。かれ〴〵にさまことにさきて、かならず五月五日(サツキイツカ)にあふもをかし。

◎梅　〔補〕梅の假名、春本抄本等、皆むめとあるを、學者假名ちがひなりとして、うめに改むるは、中々にひが事なる由、高田與清、樂章類語抄附言に辨あり。さること丶聞こゆれば、爰に引くべし。云はく「梅を牟女、馬を无万、諸を牟倍など書くは、延喜天暦の御世の假名法にて、なだらかに書かんものは、必ずこの御世の格によるべし、貫之ぬし道風朝臣などの自筆の傳はれるも、この頃の格にたがふ事なし。梅を宇女、馬を宇万とかく例は、延喜天暦にはたえてなかりしなり。古今・拾遺などの物の名に、梅を憂目、馬を生れなどいふ詞に、いひかけたれど、歌のいひかけは、音を通はして用ゐるならひなれば、證とはしがたし。……さるを當時の墨本のあまた傳はれりとも思ひたらず、何の考もなくして、古今・後選・土佐日記などやうの書を、紀・記・万葉の格に書改むるは、中々にかたちがひになん」云々。直云、此の時代の假名は、發音のまゝをうつせるより然るなり。和名抄牛馬の部に、馬の訓(ヨミ)を无万と書けるにても知るべし。◎卯の花はしな劣りて　〔春〕梅櫻などに品位劣りたる也。◎郭公の陰にかくるらむ　〔春〕新古今人丸のうた「なくこゑをえやは忍ばぬほとゝぎす初卯花のかげにかくれて」〔補〕新古今は後の書にて、人丸の作といふも疑はしけれど、昔より人口に膾炙せし歌なれば、清少も此の詞によりたるならむ。◎祭のかへさ　〔補〕賀茂祭の行列を見物しての、歸路の程にとなり。〔補〕祭は例の賀茂祭なり。昔は毎年四月中の酉の日に行はる。當日齋王とて賀茂の神に奉仕し給ふ皇女、又は女王の、先づ下ノ社に詣し、次に上ノ社に參りて、祭儀

橘の葉の春本に葉のゝ二字なし抄本によりて補ふ

目に近くの四字抄本にはちかくもてなさすに作る

春に千本による

うたてあれども抄本うたてこちたけれどもに作る

かきねなどに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の上に白きひとへ、かさねかづきたる、青朽葉などに、かよひていとをかし。四月のつごもり、五月ついたちなどの比ほひ、橘の葉のこくあをきに、花のいとしろく咲きたるに、雨のふりたるつとめてなどは、よになく心あるさまにをかし。花の中より、みの黄金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたる櫻にもおとらず。郭公のよすがとさへ思へばにや、猶更にいふべきにもあらず。梨の花、よにすさまじくあやしき物にして、目に近く、はかなき文つけなどだにせず。あいぎやうおくれたる人のかほなど見ては、たとひにいふも、げに其の色よりしてあいなく見ゆるを、もろこしにかぎりなきものにて、ふみにも作るなるを、猶さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ心もとなくつきためれ。楊貴妃みかどの御使にあひて、なきけるかほににせて、梨花一枝春に雨をおびたりなどいひたるは、おぼろげならじとおもふに、なほいみじうめでたき事は、たぐひあらじとおぼえたり」。桐の花むらさきに咲きたるは、なほをかしきを、葉のひろごりざまうたてあれども、またこと木どもと、ひとしういふべきにあらず。もろこしにことごとしき名つきたる鳥の、これにしもすむらん、心ことなり。まして琴に作り

反對したさに、我れは却つて朝寢すると、此男にあたりていふ也。◎およびて 〔春〕男の持たる扇にて、彼廣ごりたるあふぎを、及びごしにかきよする也。◎うとくおぼしたる事云々 〔補〕及びごしに近うよれば、女の引き入りなどするを、我れをば、さも疎く思ふ事よと怨じたる也。◎霧のたえま見えぬほどにと 〔春〕前に朝がほのつゆおちぬさきに、文かゝんとありし首尾也。さやうに急ぎし文も、此女とかやうにたはふれて、たゆみぬるは、げに此男の心うしろめたしと也。◎出ぬる人も云々 〔春〕是は前に、人は出にけるなるべしとありし人の事也。此女の、こよひあひかたらひし男也。その男のもとよりも、いつのほどにか書おこせつらんと見えて、後朝の文を萩につけてあれど、此男のかくてあればえさし出でぬと也。◎香のかのしめたる 〔補〕文かきたる紙に、香をたきしめたるをいふ也 ◎我きつる所も云々 〔春〕此をとこの、只今出でてかへり來たる女のかたも、此所のやうにあらんと、おもひやらるゝもおもしろからんと、清少のおしはかりたる詞也。

春曙本此の段より巻の三とす
弘賢校本こきもうすきもとありよろしげなり

四十（木の花は）

木の花は、梅。濃くも薄くもこうばい、櫻の花びらおほきに葉色こきが、枝（エダ）ほそくてさきたる。藤の花しなひながく、色よくさきたるいとめでたし。卯の花はしなおとりてなにとなけれど、さく頃のをかしう、郭公（ホトヽギス）の陰（カゲ）にかくるらんと思ふにいとをかし。まつりのかへさに、むらさき野のわたりちかきあやしの家ども、おどろなる

いとをかし。あまりはしたなきほどになれば、たち出でて、我がきつる所もかくやと思ひやらるゝもをかしかりぬべし。

㊀あさがほの露おちぬさきに文かゝんとて　〔評〕此男も忍び所より歸るさなるに、早く後朝の文かゝんとおもふさま也。餘情面白き詞なるべし　㊁なふの下落など　〔評〕新勅撰「櫻麻のをふの下落露しあらば明してゆかん親にしるとも」。此歌万葉には露しあれば明していゆけ母はしるとも。と下句あり。然ども此草紙にてはあかしてゆかんといへる心よくかなふべきにや。朝顏の露を見て、思ひよりし口すさみなるべし。〔評〕眞淵云、さくらあさと訓みたれど、六帖にさくらをとあるをよしとす。をふと重ねん詞なればなり。さくらといふ所より出づる麻なれば、しかいふか　且櫻といふ所は、尾張近江下總などに昔も今もあり。契沖云、をふは苧生也。たゞ苧をまける所なり。名所にあらず。㊁我が方へ行く　〔評〕男の家路にゆく也　㊁かうしの上りたれば　〔評〕女の局の格子也　㊁露を哀と思ふにや　〔評〕我が露を憐みてをふの下草と口すさびなどせし心より、彼おきていぬらん人も、露を哀と思ふにやとおしはかる也　㊁見たれば　〔評〕見てあれば納めていへる詞也　㊁枕かみ　〔評〕女の枕のほとりに也。㊁ほほに紫の紙　〔評〕朴の木の骨に紫の地紙　㊁たとう紙は、〔評〕帖みて懷中する紙也　㊁花か紅か　〔評〕花とは赤花の略、茜色にて薄し。紅は紅草にて色濃きなり。㊀ちりぼひたる　〔評〕疊紙のおち散て有し也。是迄男の見しありさま也　㊀人のけはひ云々　〔評〕又別の人の來たる樣子なればと也。㊁きぬの中より　〔評〕ひき被りたる衾の中より也。㊁なげし　〔評〕長押。緣側より奥一段高き所。㊁つゆよりさきなる人の　〔評〕此男の忍び所より早くかへるを、とがめたる詞なり。露よりさきにおき出し人の、もどかしさに、我はかく朝寢久しくすることなり。〔評〕餘りに早く起きて歸る人の

春曙本卷二
終

をかしき事の五字實翰本にはわざとゝりたてゝとあり此の方よろしげ也

など口ずさびて、我が方へゆくに、かうしのあがりたれば、みすのそばをいさゝかあけて見るに、起きて往(イ)ぬらん人もをかし　露をあはれと思ふにやとしばし見たれば、まくらがみのかたに、朴(ホホ)にむらさきのかみはりたる扇、ひろごりながらあり。みちのくに紙のたゝうがみのほそやかなるが、花かくれなゐか。すこしにほひうつりたるも、几帳(キチヤウ)のもとにちりぼひたり。人のけはひあれば、きぬの中より見るに、（男のさゝ也）うちゑみてなげしにおしかゝりゐたれば、はぢなどする人にはあらねど、うちとくべき心ばへにもあらぬに、ねたうも見えぬるかなと思ふ。（男の詞也）こよなきなごりの御あさいかな」とて、簾のうちに、なからばかり入りたれば、（女の答へ也）露よりさきなる人のもどかしさに」といらふ。をかしき事と取りたてゝかくべきにあらねど、かくいひかはすけしきどもにくからず。枕がみなる扇を、我がもちたるして、およびてかきよするが、あまり近うよりくるにやと心ときめきせられて、いま少しひきぞいらるゝ。とりて見などして、「うとくおぼしたること」などうちかすめ、恨みなどするに、あかうなりて、人のこゑ〴〵し、「日もさし出でぬべし。霧のたえま見えぬほどに」といそぎつる文も、たゆみぬるこそうしろめたけれ。出でぬる人も、いつのほどにかと見えて、萩の露ながらあるにつけてあれどえさし出でず。香の紙のいみじうしめたるにほひ

あるかなきかのかうぞめの狩衣、白きすゞし紅のとほすにこそあらめ　つやつやかなるうちぎぬの、霧にいたくしめりたるをぬぎたれて、びんのすこしふくだみたれば、ゑぼしのおしいれられたるけしきも、しどけなく見ゆ。

◎七月ばかり　〔春〕七月のころの殘暑也。是より別の筆すさび也　◎いとつやゝかなるいたの　〔春〕板縁の清きをいふ也　〔補〕古は床の板敷なる上に、居んとも寐んともする所に、疊をしきたるものなり。且疊といふも、今の薄縁（ウスヘリ）の席（ムシロ）をいへるなり。○おくのかたにおしやりたるぞあぢきなき　〔春〕几帳は女の形かくす爲なれば、はしにたつべき物を、おくには、あぢきなくまさなきわざと也。〔磐〕是れ有明の空などながめて、几帳を奥におしやりたるを、咎めていへるなり。あぢきなしとは俗語面白カラヌ、ツマラヌに同じ。○おくのうしろめたからんよ　〔春〕奥の氣遣ひなる事はあらじと也　◎人はいでにける　〔春〕男は歸りしと也　○うすいろの　〔春〕おもては紫のうす色に、うらはこき紅のすこしうはじらけしたる心也。此出立（イデタチ）か。又はこき紅の綾などといへる文章也。此文法おくにも所々あり。○袴のこし　〔磐〕袴の紐をいふ。◎まだとけながらなめり　〔磐〕彼忍びたる男の歸りても、まだ紐などひきしめつくろはぬほどなるべしとなり。うちとけふしたるまゝなるべしと也　◎髪のうちたゝなはりて　〔磐〕添ひ伏したる此の女の髪の、たゝまれて見ゆるをいふ。◎又いづこよりにかあらん　〔春〕又他の男の、外より歸りきたるさま也。殿上人などの、とのゐ所より忍びゆきての、其歸さなるべし　○紅のとほすに　〔磐〕白き生絹に紅の透き通る也。

あさがほの露おちぬさきに、文かゝんとて、道のほども心もとなく「をふの下草」

て其の註にもいはれたれば今は知らぬ人あらじ

あり。此歌新勅撰(戀)に入りたれど、作者は天暦三年六月十日に卒したれば、此の頃は人口に膾炙せしなるべし。云々。古來難解としたることも、是れにて能く聞ゆ。前人未發の說なり。白露のおくゝ程を待つ間に、花の凋む朝顔の殘り惜しさを思へば、中々に花を見ずてあるべしとなり。なまじひになごり惜しさの、却りてまされる由をよめる歌なり。

三九（七月ばかり）

七月ばかり。いみじくあつければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月のころはねおきて見いだすもいとをかし。やみも亦をかし。有明はた、いふもおろかなり。いとつやゝかなるいたのはしちかう、あざやかなるたゝみひとひら、かりそめにうち敷きて、三尺の几帳(キチヤウ)、奥のかたにおしやりたるぞあぢきなき。はしにこそたつべけれ。おくのうしろめたからんよ。人はいでにけるなるべし。薄色のうらいとこくて、うへはすこしかへりたるならずは、濃き綾のつやゝかなるが、いたくは萎えぬを、かしらごめにひききてぞねためる。香染のひとへ、紅のこまやかなる、すゞしの袴のこしいとながく、きぬのしたよりひかれたるも、まだとけながらなめり。そばのかたに、髮のうちたゝなはりてゆらゝかなるほど、長さおしはかられたるに、又いづこよりにかあらん、あさぼらけのいみじうきりみちたるに、ふたあゐのさしぬき、

武藤氏のちに（四十四年）枕草子通釋を著し

なする、淸少の事をとかくいふ也。◎やゝまかりぬるもよし 〔補〕やゝは、人を呼びかくる聲也。漸也といふ註はわろし。春曙抄に云、此心は淸少の朝座のみ聞て出るを、法華經の方便品に、釋迦如來開三顯一の御法をとき給はんとする時、五千人の增上慢の輩、法座を起て退くに、如來默然として制止給はで、舍利弗に、如是增上慢人退亦佳矣との給ひしことになぞらへて、よしちかのいへる也と。淸少は之を悟りて、義懷の才智をめでたしと感じたる也。◎五千人の中にはいらせ 〔春〕彼まかりぬるもよしと、の給へるによりていへる詞也。此あつさには、よしちかも、退出し給はんぞとの心なり。彼方便品の法座を立ちし五千人の事也。◎何かめでたからんいとにくし 〔春〕始中終たちさらぬとて、何のよき人ならんと也。〔補〕戯れてわざと罵りたる也。◎其はつかあまりに云々 〔春〕是寬和二年六月廿餘日に、花山院出家せさせ給ひし御供に、義懷卿も法師に成給ひし事也 袋双紙云、花山院御時、中納言義懷は外戚、惟成辨は近習の臣にて、各天下の權を執る。しかるに院ひそかに内裏を出て、花山にみゆきして出家し給ふ。兩人聞出て追て參上す。院は已に比丘となり給ふ。惟成もとゞりをきる。又義懷に語て云、外戚と有て權を執ておはしけるに、更に外人となりて世間の衆にまじはる事、見苦しかるべし。早く出家し給へ。義懷これを存する由を稱して、同く出家す。人の敎訓によりてしたれば、いかゞと世人思ひけるに、始終尊くて過ぐと云々、此事榮花物語大鏡等に在り。◎おくをまつまの 〔補〕春本おいをとありて、註に義懷の出家は、卅歲ばかりにて、老に遠ければ也。引歌あらんか。未勘といへり。千蔭は所藏の古本にありとて、おくと訂正したれども引歌の事に及ばず。然るに近頃武藤元信翁の考異（明治卅八、東洋學藝雜誌）に、古本に據りておくに改め、かつ附記して云く、源宗于の歌に「しら露のおくをまつまの朝顔は、見ずぞなか〳〵あるべかりける」と

千蔭校本によ る人こといふに千蔭弘賢校本この六字なし

おくな　春本おいたとあり千蔭校古本による

を、きゝもいれずいらへもせで、せばがり出づれば、權中納言「やゝまかりぬるもよし」とて、うちわらひ給へるぞめでたき。それもみゝにもとまらず。あつきにまどひ出でて、人して、「五千人の中には、いらせ給はぬやうもあらじ」ときこえかけてかへり出でにき。そのはじめよりやがてはつる日まで、たてるくるまのありけるが、人よりくとも見えず。すべてたゞあさましう、繪などのやうにてすごしければ、ありがたくめでたくこゝろにくゝ「いかなる人ならん。いかでしらん」と問ひけるを聞き給ひて、藤大納言（爲光）などは「なにかめでたからん。いとにくし。ゆゝしきものにこそあなれ」との給ひけるこそをかしけれ。さてその二十日（ハツカ）あまりに、中納言（義懷）の法師になり給ひにしこそあはれなりしか。櫻などのちりぬるもなほよのつねなりや。おくをまつまのとだに、いふべくもあらぬ御ありさまにこそ見え給ひしか。

◎朝座　通八講に朝夕二座つゝ、四日行はるゝ事上にいへり。その朝の説經也。◎清範　春勘物云清範法相宗、播摩國人、號二清水律師一、長徳四年爲律師云々。興福寺の法宗相にて、空晴僧都の法孫寺朝巳講の上足、説法無双にて文珠の化身と東齋隨筆にあり。◎しさすまじき事　通仕遂げずして、さて止むまじき要事ないふ。◎しきなみ　通及波（シキナミ）なり。波のおひ及（シ）くが如く、後より追ひ來るないふ。敷並とある註は非。◎まへなる車ともに　春清少出なんとて、我通り出べき道の車に案内いふ也。◎人ごといふ　通他人の評

たるまでならん ◎さてよびかへされつるさきには 〔玉〕後使のかへりしな、女車よりよびかへされざりし已前には、何と返事せしぞとの給ふ也。始め使の只歸りしな、一度返事聞てかへりしと見給ふゆゑに、かくの給ふ也。◎ともかくも侍らざりつれば 〔拾〕あまり返事を案じ煩ひて、久しく成しゆゑ、使の只かへりしよしな申也。◎下すだれ 〔細〕車の前後の簾の裏に掛くる長き帛にて、餘りを簾外に垂れおきし也。◎けふはじめたる 〔湖〕今日始めて掛けたる新調の品と見えて。◎こき〔細〕濃紅なるべし。◎ひとへがされ 〔細〕源氏空蟬の卷花鳥の註に、「五月五日より單重を着る也、單二つを捻り重ねたる物也」とあり。二枚のつま袖口を縫合せず、糊をひいて捻りおくまでなり。往古夏の間、女子の盛裝に用ふ。五衣の代り也。◎二藍の織物 〔細〕唐衣の地なり ◎しりにすりたる裳 〔細〕車の後に青摺の裳を出したるなり。◎かたほならん事よりは 〔玉〕此女車の返事のなほき木をまげたる批判也、なまじひにかたくなしき曲節あらんよりは、只事にて、げにときこえたるが、かへりてよしとの心也。

朝座の講師淸範、高座のうへも光りみちたるこゝちして、いみじくぞあるや。あつさのわびしきにそへて、しさすまじき事の、けふすぐすまじきをうちおきて、たゞすこしきゝてかへりなんとしつるを、しきなみにつどひたる車のおくにゐたれば、いづべきかたもなし。あしたの講はてなば、いかで出でなんとて、まへなる車どもにせうそこすれば、近くたゝんうれしさにや、はや〳〵とひきいであけて出だすを見たまひて、いとかしがましきまで人ごといふに、老い上達部さへわらひにくむ

上達部なとの詞也

春本つとゐとある非なり千本による

見たまひて｜春本見給ふ

人のとあれど千蔭校本に従ひて改めつ

かたほならんことよりは、げにと聞えて、なか／＼いとよしとぞおぼゆる

ⓒけそうの人 〔春〕顯證人也。こゝにては外（ト）ざまの心也。上達部のみならず。外ざまの聽衆まで、彼女車を見やりしと双紙の地也。〔補〕顯證は物のあらはに見ゆるをいふ詞なり。こゝは、車にもえ乘らぬ身分の聽衆をいふ ⓒかへり事きゝたるにや 〔春〕實に返事聞てかへるにはあらず、彼返事を待ちつかれて使の唯かへるを、淸少のよそより見る心より出し詞也。ⓒ歌などの文字いひあやまちて 〔補〕文字は言葉といふに全じき由。上にもいへり。◎久しかりつるほどに 〔春〕さばかり久く待せながら、歌の文字あやまるべきにもあらじと也。◎權中納言のの給へば、〔補〕最初權中納言の申し付けなれば、其の人の許に參りて復命したる也。「見たまへば」とあるは聞こえず。◎あまり有心過てしそこなふな 〔春〕あまり心ありがほし過て、興をさますなとの心也。使の返事をとくいはで、心いられせさすれば、の給ふ也 ⓒこれも唯同じことに 〔補〕否有心過ぎて、仕損ずるより、この返事は、しそこなひたると同じと也。興さめたる返事なる由を、いふ也。春の傍註ひがごとなればとらず。◎藤大納言 〔春〕勘物云、爲光七月廿日右大將四十五云々。按ずるに爲光公は、九條右大臣師輔公の九男、貞元二年四月廿四日任二權大納言一、正曆二年九月太政大臣、號二恒德公一。◎人よりけに 〔補〕けにといふ詞に、二つの意あり。故にといふ義と今一つは勝りてといふ義となり。こゝは、後の方にて、越（コエ）にのこゝろ也。濁りてよむべからず。◎なほき木をなん 〔春〕すなほにいふべき事を、曲節なしたるをあざけり給ふ詞也。彼なほ木にまがれる枝もある物をと讀し、詞をかり用ゐていへり。〔補〕此の註は、後撰集雜二、高津内親王「直き木にまがれる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなさ」とある歌をいふなれど、さまでの典據には及ばじ たゞ氣色ばみて、却つて直き木を曲げたるに似たりと、誹り

し春本にはなかしうありしとあり今千蔭本による

のたまへば諸本見たまへばとあるを千蔭例の古本によりてかく訂したり武藤氏の考異にも亦しかあり前田家の古寫本にものたまへばと有

見しりたりやなどの下千蔭弘賢校本に「あやしがりていざ歌よみて此のたびはやらむなど」の數字あり

何かはまた春本何かは

あゆみくるほどに、扇をさし出でてよびかへせば、歌などのもじをいひあやまちてばかりこそよびかへさめ。久しかりつるほどに、あるべき事かは。なほすべきにもあらじものをとぞおぼえたる。近く參りつくも心もとなく「いかに/\」とたれもとひ給へどもいはず。權中納言(義懐也)ののたまへばそこによりてけしきばみ申す。三位中將「とくいへ。あまり有心(ウシン)過ぎてしそこなふな」との給ふに、これも(使の詞也)たゞおなじ事になん侍る」。といふはきこゆ。藤大納言(爲光)は人よりも、けにのぞきて「いかゞいひつる」との給ふめれば、三位の中將(道隆)「いとなほき木をなんおしをりためる」ときこえ給ふに、うちわらひ(爲光)給へば、みな何となくさとわらふこゑきこえやすらん。中納言(義懐卿の使に)「さてよびかへされつるさきには、いかゞいひつる。これやなほしたること」と問(問給ふ也)ひ給へば、ひさしう(使の詞也)たちて侍りつれども、ともかくも侍らざりつれば、さはまゐりなんとて、かへり侍るを、よびて」とぞ申す「たれが車ならん。見しりたりや」などの給ふほどに、講師のぼりぬれば、みなゐしづまりて、そなたをのみ見る程に、此の車はかいけつやうにうせぬ。下すだれなど、たゞけふはじめたりと見えて、こきひとへがさねに、二藍のおり物、すはうのうすもののうはぎなどにて、しりにすりたる裳やがてひろげながら、うちかけなどしたるは、なに人ならん。何かはまた、

たかしかけ

かんと、おとな上達部まで皆そなたざまに見やり給へり。

(二)よしちかの中納言 〔春〕藤原義懷卿は、一條攝政伊尹公の男、母は代明親王の女、惠子女王也。花山院の寛和二年に權中納言從二位也。公卿補任に (一)上達部の御名などかくべきにもあらぬを 〔□〕上達部の名のりをいふは、上の「にくきもの」の條にもかける如く、不禮なれどと也。(一)誰れなりけむと少し程ふれば、〔□〕この下脱字あるべし。聞こえ難きを、強ひて解き試みば、上達部の名をかくは、不禮なれども、程經れば、誰なりしか忘るゝによりて、御名をかきおけりとの意なるべし。(一)いづれともなき中の 〔□〕いづれを取り立てゝ、美むべきやうもなく、皆々花々とある中の帷子を、義懷卿は、人目たゝぬやうに、袴の下に著込め給へれば、唯直衣ばかりにて、下に重ねし帷子を着給はぬやうにてと也。(一)見ぬ人なかりけんを、〔□〕このをば、よに通ふ強めの感動辭なり。(三)ひまもなかりければ 〔春〕聽衆の車ども隙なくたち並びたれば、後遲く來たる車、池あるかたにたちたると也。(一)人のせうそこつきゞゝしく 〔春〕人のいひやる消息を、よくいひ傳ふべき者あらば、一人やとはせ給へと也。後後にきたる女車に物いひ給はんとて也。(三)いかなる人にかあらむ 〔春〕何者やらん實方の選びとりて、ひきゐておはせし也。◎やり給はん言はきこえず 〔春〕其いひやり給ふ事は清少のかたへきこえぬと也。◎いみじくよういして 〔春〕彼消息いひ傳ふる人の用意してゆくさまなり。(三)かつは笑ひ給ふ 〔春〕使のさまを笑ひ給ふ也 (三)あとの方に 〔春〕車の後の方によりて也。(二)久しくたてれば 〔春〕使者の返事をまちて、車のもとに久しく立てば也 ◎歌などよむにやあらん云々、〔春〕返事の遲きは、歌よみておこすならん。又其返歌用意せよと實方への給ふ也。

げにけそうの人々まで見やりしもをかしかりしを、かへりごときゝたるにや、少し

ようい春本抄本ともよそひあれど夏蔭校本弘賢校古本によりて改む

びすゞしけなる中に　春外の上達部は淺葱の帷子をすかし、白き袴など涼しげなる中にも、道隆公の出立蘇芳の下袴などにて、あつかはしげなれどめでたしと也。◎ほそぬりぼねなど　春細漆骨也。扇のほねはさまざまなれど、地紙はいづれもあかき也。◎かけばん　補懸盤、貴人の食物をのする臺なり。委しくは調度圖解にしるせり。

よしちか(義懐)の中納言の御ありさま、常よりもまさりて、きよげにおはするさまぞ限りなきや。上達部(カンダチメ)の御名などはかくべきにもあらぬを、たれなりけんと、すこしほどふれば。」いろあひはなぐ〵といみじく、匂(ニホ)ひあざやかに、いづれともなき中のかたびらを、是れはまことに、たゞなほしひとつをきたるやうにて、つねに車のかたを見おこせつゝ、物などいひおこせ給ふ。をかしと見ぬ人なかりけんを。後にきたる車の、ひまもなかりければ、池にひきよせてたてたるを見給ひて、實方のきみに、(よしちかの詞也)人のせうそこつきぐ〵しくいひつべからんものひとり」とめせば、いかなる人にかあらんえりてゐておはしたるに、「いかゞいひやるべき」と、ちかくゐ給へるばかりいひあはせて、やり給はんことはきこえず。いみじくよういして車のもとにあゆみよるを、かつは笑ひ給ふ。あとのかたによりていふめり。久しくたてれば、(よしちかの)歌など(實方に、給ふ詞也)よむにやあらん。兵衛佐返(ヒヤウヱノスケカヘ)しおもひまうけよ」などわらひて、いつしか返りごとき

後に前田本を見たるに「ちやうめい侍從」とかけり長明を音讀にしたる也

すこし日たけたるほどに、三位中將とは關白殿をぞきこえし。かうのうすものふたあゐのなほし、おなじさしぬき、こき蘇芳の御はかまに、はりたる白きひとへのいとあざやかなるをき給ひて、あゆみ入り給へる、さばかりかろびすゞしげなる中に、あつかはしげなるべけれど、いみじうめでたしとぞ見え給ふ。ほそぬりぼねなど、骨はかはれど、たゞ赤きかみを、同じなみにうちつかひもち給へるは、なでしこのいみじう咲きたるにぞいとよくにたる。まだ講師ものぼらぬほどに、懸盤どもして、何にかはあらん、物まゐるべし。

されたか 〔春〕藤原實方、小一條左大臣師尹公の孫、侍從定時の男、〔補〕濟時の甥也。◎ながあきら 〔補〕抄も傍註も、長明として系圖未考とあり。〔補〕榮花物語月の宴の巻に「濟時の男君を長命君といひて云々、見はてぬ夢の巻に「長命君とて侍從にて云々とあり。長明を音讀にして、長命ともかきたるか。◎家の子 〔補〕一家に養はるゝ者をいふ。◎いますこし出で入り 〔補〕他人よりは少し周旋しゐたりとなり。

◎三位中將とは關白殿を 〔春〕中關白道隆公也。大入道兼家公の男、母は攝津守藤原仲政女、圓融院の永觀二年正月七日に從三位中將如元、一條院の永祿二年五月八日に關白し給ふ。〔補〕その頃三位中將殿と申しゝは唯今の關白殿の事を申したるぞとなり ◎かうのうすもの 〔補〕春の傍註に香の羅とある如く、香染とて黑茶色なる帷子を、二藍の直衣の下に重ね着たる也。按同じ薄織物の指貫なれば、下の袴の蘇芳濃きと白き單と、透きとほりあざやかに見ゆる也。◎はりたる 〔補〕糊張りにして光澤（ツヤ）を出したる也。◎さばかりかろ

後考異を見れはこれも事實上より考へ且古本に據りて佐理に改めたり

法は、牛を外して轅を榻に掛け置くなり。然るに數多の車の、一々に榻を据うるひまもなければ、他人の車の轅の上に、又わが車の轅を重ぬるなり。◎三つばかり 〔補〕三列あたりまでは聞ゆるをいふ。◎六月十餘日 〔釋〕みなづきとをかあまりとよむべし。是寛和二年の六月なるべし。此次に義懷の出家の事あり。◎左右のおとどを 〔釋〕此時の左大臣は源雅信公。右大臣は藤原の兼家公などにや ◎あさぎ 〔補〕淺黄と淺葱と二色あり。こゝは淺葱の方にて、薄藍色の帷子を、直衣の下に重ね着たる也。◎しろきはかま 〔補〕薄鈍の指貫の下に、白き大口の袴をはきたるが、透きて見ゆる也、昔は下袴と上の袴と、二襲着たる也。壯年の人は紅、老年は白と定まりしは、後の事なり。◎安親の宰相 〔釋〕藤原安親卿、山蔭の中納言の孫、從四位上攝津守仲正の三男、永延元年十一月十一日參議に任する由公卿補任に見ゆ。長德二年三月六日卒六十七歳 〔補〕千蔭は古本によりてやすちかをすけまさ(佐理)と改訂せり。按ふに安親參議に任せられし永延元年は、翌年にして、當年いまだ宰相にあらず。佐理は此の時既に參議にてあれば、事實上佐理と改訂する事、論なきに似たれど、安親、佐理、眞字にかきても假名にかきても、全く似付かず、まぎれむやうなきを、一概に誤寫とのみは斷ずべからずや。清女の此の文かきたるは、當年より後の事なれば、忘れもし思ひたがへもなどかなからむ。此の月の廿三日藏人頭になり、翌年十一月宰相になりたる安親なれば、かゝる八講の席にも、立ちまじるべき人柄なり。之を宰相とかきたるは、後にいひなれたるまゝを、ふと書き誤りたるも知るべからず。清少の始めより佐理とかきたるならば、後人のいかでか、事實上相違せる安親と誤寫すべき。古本といふもの、却つてさかしらに、事實に就いて佐理と改めたるにはあらじか。◎わかやぎたちて 〔釋〕安親卿寛和二年の比は五十七歳なれば、老人ながら、裝束は若やぎて參り給ひしと也。◎

るながえのうへに、叉さしかさねて、みつばかりまでは、すこし物もきこゆべし。六月十餘日にて、あつき事よにしらぬほどなり。池のはちすを見やるのみぞ、すこし涼しきこゝちする。左右の大臣たちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。ふたあゐの直衣さしぬき、あさぎのかたびらをぞすかし給へる。すこしおとなび給へるは、あをにびのさしぬき、白きはかまもすゞしけなり。安親の宰相なども、わかやぎたちて、すべてたふときことのかぎりにもあらず、をかしき物見なり。廂のみすたかく卷きあげて。なげしのうへに上達部おくにむかひて、なが〳〵とゐ給へり。其の下には殿上人若き公達かりさうぞく、なほしなどもいとをかしくて、ゐもさだまらず。こゝかしこにたちさまよひ、あそびたるもいとをかし。實方の兵衛の佐、ながあきらの侍從など、家の子にていますこしいでいりたり。まだわらはなる公達などいとをかしうておはす。

◎小一條大將　(春)師忠公也。前に小一條右大臣といひしとおなし人也。(補)師忠は師尹の誤りか。但し師尹は、既に安和二年薨と、尊卑分脉に見ゆれば、此處は其の子濟時なるべし。濟時當年右近衞大將たりし事、公卿補任にあり。◎露とゝもに　(春)曉露とゝもに起出て參たれば、參詣の車まことに隙なく立並びしと也。◎ながえの上に云々　(補)ながえは轅なり。車の前に長く雙びたる長柄の義。既にいへり。當時車を立つる作

㈠ぼだいといふ寺　〔評〕未考、一說菩提樹院にや。拾芥云、神樂岡の東、上東門院の御願と云々。但不審、
遺上東門院御願にて創立の寺といへば、此の草子よりは後なり。因りて不審とかけるならむ。按ずるに、
こは紫野の雲林院の別名か。同院は昔より毎年五月菩提講のある例にて、菩提講寺ともいふ由なればなり。
㈡結緣八講　〔評〕結緣は佛緣を結ぶ義、人身に佛緣を結ばん爲に、八講の法事を修するをいふ。㈢人のもと
より　〔評〕春本の傍註、清少の夫とかけり。この註棄てがたし。清少に夫も女子もありし事、別にいへるを
見よ。◎はちすの花びら　〔評〕春の傍註に散花とあるは、昔法會に、堂童子花筥を配る儀あり。筥中に紙を
蓮花の葩の形に切りて入れあるを、行道しつゝ散らす作法あり。其の紙を散花といへる也　㈣もとめても
云々　〔評〕此歌清少の家集にあり。千載集にも入りたり。宇治大納言物語にも出たり。心は語と求めてかゝ
る菩提の地にこそあらまほしけれ、是をおきて濁世にはかへるまじきと也。蓮の露に菩提院を比して、上
菩提の心をよめり。㈤さうちら　〔評〕常住ならん。むづかしき謂はれあるやうにいふ說もあれど、然らじ。
常住は、佛經の語にて、徒然草にも、常住ならむことを思ひて、變化の理をしらねば也　などある是れ也。
俗家をさして、常住の家といへるなるべし。

三八　（小白河殿の結緣八講）

小白河といふ所は、小一條の大將殿の御家ぞかし。そこにて上達部結緣の八講し給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人のあつまりゆきてきく。おそからん車は、よるべきやうもなしといへば、露とともにいそぎおきて、げにぞひまなかりけ

ば。〔補〕このば。は文字輕き意味の助辭なり。賤しき者も、聽聞するものを、まして貴女たちの、參らぬはなしと也　〔○〕さればとて始めつかたは云々　〔補〕春抄の傍註に、此の双紙の出來し始」とあるはいみじきひかごと也。說經の行はれ初めし頃には、貴女の徒歩きして、聽聞する事もなかりき。たま／＼には壺裝束し、容儀品格をつくろひ、歩行するもありしかど、それは寺社などへ參詣せしまでにて、近頃の如く、誰が家にても、說經とて人の集まる所へ、憚らず參り合ふ流行はなかりきとの意なり。◎つぼさうぞく　〔春〕河海云。俊成卿のむすめの說云、市女笠にうすぎぬ着たる女を、つぼさうぞくといふ云々。孟津抄云、つぼさうぞくとは、きぬをつぼをるこゝろなり　〔補〕上衣の兩褄を折かへし着て、腰帶したるさま也　◎なまめき　〔補〕上品なる風をしてなり。◎それも物詣など　〔補〕壺裝束にて遠方の佛參などせしなり。今の樣に、近き所の說經きくに、さやうなる略裝にて行く者はなかりきとなり。

三七　（菩提寺の結緣八講）

ぼだいといふ寺に、けちえん八講せしが、きゝにまうでたるに、人のもとより「とくかへり給へ。いとさう／＼し（さびしき也）。」といひたれば、はちすのはなびらに、

もとめてもかゝるはちすの露をおきてうき世にまたはかへるものかは

とかきてやりつ、誠にいと尊くあはれなれば、やがてとまりぬべくぞおぼゆる。ざうぢうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。

熱心に說き出でたるにより、聽衆皆競ひて、高座近く進まんと、立ち騷ぎたるなり、抄本に、たふれさわぎとあるも、同じ趣なり。◎ぬかつく程にも云々 補說經の一段も終はらず、辭儀なして、退出すべき程ならでと也。◎よき程にて 補此の詞、當時のつかひ樣は、眞に良き事にあらず。大かたの事をいふ也。譬へば今俗に、よい加減の時刻などいはんが如し。◎見しりたるをばをかしと思ひ 春是より彼三四人のありさまにつけて、說經に參りての興をいふ也。參詣の人々の、見知り見知らぬを、見やり思ひたるも逸興と也。◎目をつけて 補清女の他より來たる人につきて思ひやる也。

そこに說經しつ。こゝに八かうしけりなど、人いひつたふるに、其の人は有りつや。いかゞは。などこさだまりていはれたるあまりなり。などかはむげにさしのぞかではあらん。あやしき女だにいみじく聞くめるものをは。さればとて、はじめつかたは、かちありきする人はなかりき。たまさかには、つぼさうぞくなどばかりして、なまめきけさうじてこそありしか。それも物まうでをぞせし。說經などはことに多くもきかざりき。此のごろ其のをりさし出でたる人の、いのちながくて見ましかば、いかばかりそしりひはうせまし。

そこにこゝに春本にはなし異本抄本によりて補ふ

◎其人はありつやなど 春聽聞など終にせぬ人をそしりたる詞也。其人は參詣せしにや。何ぞ參詣せんなど定りていはるゝ程なるも、あまりの事と也。彼藏人五位がやうに、聽聞なれたるも如何也。又一向にまゐらぬも惡しとの心也。◎いはれたる 補この下も又はを略せるなり。他にも例多し。◎きくめるものを

にてとあり
千本により
て訂正す

れば、もとゐたりつる人も、すこしうち身じろきくつろぎて、高座のもと近き柱のもとなどにすゑたれば、さすがにずゞおしもみなどして、ふしをがみゐたるを、講師もはえ〴〵しうおもふなるべし。いかでかたりつたふばかりと、說き出でたる、聽聞すとたちさわぎ、ぬかづくほどにもなくて、よきほどにて立ちいづとて、車どもの方など見おこせて、われどちいふ事も、何事ならんと覺ゆ。見しりたる人をばをかしとおもひ、見しらぬは誰れならん。それにや。かれにや。とめをつけて、おもひやらるゝこそをかしけれ。

◎さはあらで (春)此藏人五位が樣にはあらでと也。この次に、車のさきおはせてきたる人々の事、いはんとていへり。◎講師ゐて (補)說經の座に居てなり。◎せみの羽よりも (春)うすく淸らなるさま也。又蟬の羽衣と首夏の歌などにあまたよめり。うらのなきすゞしの惣名と桃華蘂葉に有り。◎すゞし、(補)練らぬ絹なり ◎あざやかに (補)春本「さやうにては」と記し、岡本氏存疑に、は文字輕し。いかゞはせんはなどの如し。とあれど春本の誤寫をいかにせん。◎さばかり (春)それほどといふ詞也。侍士どもも三四人ばかりめしつれてとの心也。◎みじろき (補)身退き也。席を讓りたる也。◎さすがにずゞおしもみなど (春)此三四人の人々は、說經聽聞ばかりにはあらで、物のついでなどに立よりたるさまながら、さすがに道場の禮儀をなしたるさま也。◎いかで語りつたふばかり (春)世にも云ひ傳へらるゝ樣にと、心とゞめて說經する也。◎はえ〴〵しう (春)榮々。歷々と見ゆる人の入來たればかひ有て思ふ心なり。◎聽聞すとて云々 (補)講師の

なれど、說經を聽くは功德の爲にて、障りにならずと見せんとにや、物忌のしるしを烏帽子に付けながら來たりと也。◎車たつることなどを　補說經をきゝに來たる女子などは、車を前庭に引き入れて、乘りながら聽聞したるなり。春抄の傍註に、外より參る人の車に、目を付くる也とあり。直按ずるに、千蔭校本に從へば、外より來る車の、立ちやうなどをさへ見入れ、注意して指圖する事と聞ゆ。◎ことにつきたる　補濱臣は、言に盡きたるとして、話のつきて見まはしなるにやと云へる、牽强も甚し。猶目を付くることにて、語の脫(オチ)たるならむ。◎さうぞくしたる數珠　補ずゝの玉を、悉く水晶にしたるを、本裝束といひ、一部分に水晶を加へたるを、半裝束といふ由也。大鏡に紫檀のずゞの、水晶の裝束したるとあり。裝束とかけど實は裝飾の借字なり。◎手まさぐりにし　補この下、活本には「すがりをものいふひやうしにし」の一句あり。「すがり」とは、數珠の總に貫ける玉をいふ、後撰集雜四に、ある法師の家にまかりて、ずゞのすがりを落しおけるを、あしたに送るとて、よみ人しらず「うたゝねのとこにとまれる白玉は君がおきつる露にやあるらむ」とあるにて知るべし。◎何がしにて其の人のせし八講　補何某は道場。其の人は講師をさす　說經のやう、盛儀のさまを品評すること也。扨八講は、法華經八軸を、四日間朝夕八座に講說するにより、八講といふ。誰れにても、知識僧を請じて開講する事、作善功德になればなり。◎經供養、補何經にまれ、書寫して、其れが爲に佛事を修する儀をいふ。

さはあらで、講師(カウシ)ゐてしばしあるほどに、さきすこしおはする車、とゞめておるゝ人、蟬の羽よりもかろげなる直衣指貫、すゞしのひとへなどきたるも、狩衣すがたにても、あざやかに若うほそやかなる、三四人(ミタリヨタリ)ばかり、侍(サフラヒ)のもの又さばかりしてい

經供養(キャウクヤウ)などいひくらべ居たるほどに、此の說經の事も聞きいれず。なにかは、常にきくことなれば、みゝなれてめづらしうおぼえぬにこそはあらめ。

(二)藏人おりたる人　〔春〕六位藏人四ヶ年のゝち、巡爵にあづかりて地下になりたる人也。六位も藏人は殿上する也。五位に成ても、藏人なさりては地下になる事也。◎御ぜん　〔春〕供奉の時、馬にて前驅する事なり　〔評〕ごぜんは、御前驅の略語。◎その年ばかり　〔補〕こゝにて句を切るべし。行幸の御前駈など勤むる事、昔は現職の年ばかりぞと也。況して藏人非役になりては、禁中に出入する事かなはざれば、影も見えざりしを云々との意なり。◎藏人の五位　〔春〕藏人よりかうぶりえたるを、藏人の五位とて、規摸とするなり。職原抄云、六位藏人四人、重代諸大夫中不二放埒一有二器量一之輩補レ之、地下諸大夫多以レ是爲二先途一、雖二五位以後一以二藏人五位一爲二規摸一之故也云々。〔補〕六位の藏人四年の任期はてゝ、五位の爵を賜り退職する也。之を藏人の五位と稱す。◎なごりつれ〴〵にて　〔補〕勤務をてつだふ餘暇は無聊にて徒然なればとなり。◎かたびらいとあざやかに　〔補〕下に着たる帷、きはことに、直衣に透きて見ゆる也。夏は出衣の代りに、直衣に重ねて着る也。後世の大帷(汗取)と混同すべからず。◎薄二藍　〔春〕花鳥云、夏の直衣のいろ也　〔補〕薄紫に似たる色なり　◎青鈍　〔春〕弄花抄云、花田に靑けのまじれる也。◎えぼしに物いみつけ　〔春〕河海云昔は忍草に物忌を書て、みすにも冠にもさしける也。事なし草と云につけて也。又云、柳の枝を三寸ばかりに簡に作りて、御冠の纓に付らる云々。是は禁中の事也。此藏人の五位は烏帽子に付けし也。◎指貫ふみちらし　〔補〕當時の風俗、指貫はくに足を出ださず、袋の口を括りたる樣に、踏みて步きし也。其の證裝束圖解に詳記せり。◎けふさるべき日なれど云々　〔春〕今日物忌の日にあたれば、愼みて外出をも遠慮すべき

り。[補]説經は尊し。我れは佛道信仰の心多かればとてなり。◎さしもあらで見ゆれ　[審]さしもなき事と見ゆると也。我つみふかき心には、さやうに最初にゆかでもあれかしと、見ゆるとの心也。此次の藏人おりたる人の事をいはんとて也。[補]說經師の評より聽聞者の事にも及び行くなり。

藏人おりたる人、むかしは御ぜんなどいふ事もせず、そのとしばかり。うちわたりにはましてかげも見えざりける、いまはさしもあらざめり。藏人の五位とて、それをしもいそがしうつかへど、なほなごりつれづれにて、心一つはいとまあるこゝちぞすべかめれば、さやうの所にいそぎゆくを、ひとたびふたゝび聞きそめつれば、つねにまうでまほしくなりて、夏などのいとあつきにも、かたびらいとあざやかに、薄二藍青鈍(ウスフタアヰアヲニビ)のさしぬきなどふみちらしてゐためり。えぼしに物忌つけたるは、けふさるべき日なれど、くどくの方には、さはらずと見えむとにや。いそぎ來て、その事するひぢりと物語して、車たつることなどをさへ見いれ、ことにつきたるけしきなり。久しくあはざりける人などの、まうであひたる、めづらしがりて、ちかくゐより、ものがたりし、うなづき、をかしき事などかたり出でて、扇(アフギ)ひろうひろげて、口にあてゝ笑ひ、さうぞくしたるすゞかいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のよしあしほめそしり、何がしにて其の人のせし八講(ハカウ)、

車立つるの下千蔭夏蔭の校本には「ことなどを」の五字ありよろしければ補ひつけ

説經師(セツキヤウシ)は顔よき、つとまもらえたるこそ、其の說く事のたふとさもおぼゆれ。外目しつればふとわするゝに、にくげなるは罪や得らんとおぼゆ。このことばはとゞむべし。すこし年などのよろしきほどこそ、かやうの罪は、えがたのこともかき出でけめ。いまは罪いとおそろし。又たふときこと道心(ダウシン)多かりとて、說經すといふ所に、さいそ(最初)にいきぬる人こそ、猶此のつみの心ちには、さしもあらで見ゆれ。

◎說經師　(春)法談などする僧なり。(補)僧の中に持經者修驗者などの專門あり。說經師も亦その類なり。◎まもらえ　(補)目守(マモ)られ」にて見つめらるゝこと。◎外目　(春)よそ目するとおなじ。顏にくげなる僧は顏な見ぬから、說く事をも忘るゝゆゑ、顏にくげなる僧は罪えんと思ふと也　(補)外目ほかめとよむべし。大鏡に「近く居よりてほかめせずとあり。さて僧は罪えんと思ふといふ註は非也。夏陰云、罪や得らむは淸少などが、心にしみて聞かんとも思はねば、聽衆が罪や得らむ也云々。此の說よろし。◎この詞は止むべし。(補)この一句は取り消しにせんとなり。其の理由は次の詞に見えたり。◎としなどのよろしき程こそ　(春)若き程こそ、法師の顏よきは、顏守らるゝなどやうの、罪えぬべきかたの詞も書き出けめ。今の年老て後には、罪おそろしきと也。◎罪はえがたのことば　(補)春註は得る方の詞と說けり。抄には、形の如き者也。草子にかきもせめと也。とあり。また活本には、えがたの、えの字なし。いづれよしとも定めがたけれど、姑く春本に從ふ　◎今は罪いと恐ろし　(補)若き程は罪障をも顧みず、斯樣の妄語を書きつらむ。今の老年に成りては、流石に罪障も恐ろしと、昔の記事を、後に我れから評したるなり。◎たふときこと道心多か

むべき由の辨あり。從ふべし。まだらつきたるは、白毛にて所々斑文のあるをいふ也。◎あしげ 補和名抄引爾雅注云、菼騅青色如菼色也、今按菼者蘆初生也。俗云蘆毛是也とあり。伴信友の馬毛歌合註に「昔は青毛を葦毛とも青鷺毛とも呼べり。今水青といふ毛色と聞えたり」とあり。◎うすこうばいの毛 補薄紅梅の毛といふ馬、能く知らず。万葉集の歌に赤駒あり。和名抄に、騂ハ馬ノ赤黄色也とあり。伴氏馬毛歌合注に、今世に紅栗毛、紅鹿毛などいふ類なるべしとも見ゆれば、此の赤黄色なるを、薄紅梅などともいへるか。◎かみ尾などもいと白き 春鬣ふりがみ尾なども白き馬也。身はくろき馬なるべし。◎ゆふがみ 補伴氏馬毛歌合注に云、八雲御抄にゆふがみとは、馬の髮の白きなりと記し給へり。髮の白きが木綿に似たる由なりと、◎かど／＼しげ 補かどは才なり。才覺ありて、物の用に立つべきをいふ。◎ざふしき 春藏人所の雜色にかぎらず。諸家に召具せらるゝもの也 補位階ある者は服色の定めあり。これなきを雜色といへり。◎ずゐじん 春本府の隨身小隨身とてあり。これは羽林などの召具せらるゝ小隨身なるべし。補近衞氏職原抄標注に、本府隨身は攝關大臣等召使はる。小隨身は武官みな仕ふ。御免に及ばずと見ゆ。◎よきなのご 補雜色隨身などより、身分よき男。六位などをさす。◎ことねり 春河海抄云。小舍人は童子の惣名也。花鳥云、中少將の召具する童を小舍人といふ也。◎さわらか 補濱臣云さわらかはさわやかと同語也。らかもやかも助語也 ◎らう／＼しき 補勞々しきにて、勞をつみて巧者に見ゆるをいふ。◎うへのかぎりくろくて 春猫の背の方はみなくろくて也。

らう〳〵 春本りやう〳〵とあり 古本に從ふ

人の門よりわたりたるを、ふと見るほどもなく過ぎて、供の人ばかり走るを、誰れならんと思ふこそをかしけれ。ゆる〳〵とひさしくゆけばいとわろし。牛はひたひいとちひさく、白みたるが、腹の下、足のしも、尾のすそしろき。馬はむらさきのまだらづきたる、あしげ、いみじくくろきが、あし肩のわたりなどに、白きところ薄紅梅の毛にて、かみ尾などもいとしろき、げにゆふがみともいひつべき。牛飼はおほきにて、かみ赤白髪にて、かほのあかみて、かど〳〵しげなる。ざふしき隨身はほそやかなる。よきをのこも、なほわかきほどは、さるかたなるぞよき。いたく肥えたるは、ねぶたからん人とおもはる。ことねりはちひさくて、髮のうるはしきが、すそさわらかに聲をかしうて、かしこまりて物などいひたるぞらう〳〵しき。猫はうへのかぎりくろくて、ことはみなしろからん。

◎檳榔毛はのどやかに 㝫檳榔毛の車は、束帶などの時乘用するなれば。しづかなるがよき也 㒵親王大臣等、重き人の料なれば。◎あじろはしらせたる 㝫網代車。桃花蘂葉云、褻之時召レ之網代（上白）袖如ニ半蔀一立板大八葉廂如レ常下簾蘇常也。花鳥餘情云。凡車は唐廂、檳榔毛車等は、みな檳榔を以てふく。尼眉半蔀、網代等は皆あじろをふけり。㒵網代は檜の薄板を、斜に編みたるもの。魚を捕る網代の製に似たれば名づく。◎馬はむらさき 㒵和名抄、紫騮、黑栗毛也とあれど、狩谷氏の箋注に、紫騮は赤栗毛と訓

いふなりと。◎かくべくはあらぬ筆　(補)かくまで細くはいかで書き得んと、見ゆる程の筆勢にてといふ事なり。◎はぐろめ　(春)齒黑。(補)女子假粧の爲に、鐵漿にて齒を染むるに、黑く光澤あるやうにつけ得たるは心ゆくなるべし。偖わが國の女子の齒染むる事、其の始詳ならず。歷世女裝考に精しき考說あれど長ければ略す。◎ちやうばみ　(春)重食。雙六のあそびなり。(補)古代の雙六は、近世以來の繪雙六と異なり、木製の高さ一尺五寸長さ一尺五寸巾一尺の盤に、十二の筋を入れ、黑白の駒各十五を積む。さて二つの采を筒に入れて、盤上に振り出し、駒を行りて勝負を競ふなり。濱臣云賽の、同じ目の二つそろひて出づるを、重食といふ也。◎ねりあはせぐりたる　(補)練緤といふ絲今もあり。搓合せざる二筋の糸を合せて糊をひきたるもの。◎陰陽師　(春)おんみやうじ、伊勢物語も源氏物語にても讀みくせとする也。(補)陰の字、唇內音にてオムなれば、古代はオンミヤウと正しく讀みたる也。さて陰陽師はもと占卜を專として、物の吉凶を視るを職とせしが、自然と凶災を祓ひ吉福を祈る業をも、する樣になりしなるべし。◎河原に出でて　(補)是れ太古以來の禊祓の遺風なるべし。不祥の事どもを流し放つ意なり。◎すそのはらへ　(春)咒咀の祓にや。(補)濱臣云、人にのろはれたる事の、災難なきやうにと解除する也。(補)濱臣の云へる如く、他人の爲に咒咀せられたるを祓ふ也。◎物申さするに　(春)我が願事を、神佛に申さする也。◎ねぎ　(補)禰宜。名義は願ぎの意ならむ。神に仕へて社に侍する者なり。

三五　（檳榔毛は網代は等々）

檳榔毛は、のどやかにやりたる、急ぎたるはかろ〴〵しく見ゆ。網代は、走らせたる。

やしろには春本にてとあり活本による

したる。よるねおきてのむ水。つれ〴〵なるをりに、いとあまり睦ましくはあらず、踈くもあらぬまらうどのきて、世の中の物がたり、此のごろある事の、をかしきも、にくきも、あやしきも、これにかゝり、かれにかゝり、おほやけ、わたくし、おぼつかなからず、きゝよきほどに語りたる、いと心ゆくこゝちす。社寺(ヤシロテラ)などにまうでて物まうさするに、寺には法師、やしろにはねぎなどやうのものゝ、思ふほどよりもすぎて、とどこほりなく聞きよく申したる。

◎心ゆくもの　(春)世話に氣味よきといふ心なり　(通)心に満足するをいふ也　◎をんなゑ　(補)をとこ繪に對していふとて、眞頼翁云、榮花物語根合の巻に、右大臣頼宗公の姫君、繪よくかき給ふよしをいひて、「をとこゑなど、繪師はづかしうかゝせ給ふ云々、蜻蛉日記に「女繪をかしくかきたりけるがありければ、取りて懐に入れてもて來たり。見れば釣殿とおぼしき勾欄におしかゝりて、中島の松をまもりたる女あり（中略）又やもめ住したる男の、ふみ書きさして、つらづゑつきて物思ふ樣なる所に、云々などありて、男繪は眞の極彩色、泥繪の具を用ゐたるもの、女繪は水繪の具または水墨などの草畫をいふ。眞字を男文字といひ、假名を女文字といふより、繪にもかゝる詞出來しなるべし。◎のりこぼれて　(通)車中より、多くの人の衣裳などの、おし出だされたるをいふ。◎をのこども　(春)車副の男なり　◎みちのくに紙　(春)檀紙。(補)狩谷氏云、檀木の皮を以て造る故にマユミノカミといひ、陸奥國より出づる故に、陸奥(ミチノク)紙とも

補本居翁の說に、ひひなは雛を延べたる音便なれば、「ひいな」と書くべし。といへれと、江家次第には比比奈とあり。猶古く爲憲の三寶繪にも比比奈會とあれは、翁の說誤なり。さて昔の雛遊は、後世の如く三月上巳には限らず、いつにても童女のせしすさび也。◎二藍 補青みある赤色。◎えひぞめ 補蒲萄染、山蒲萄をエビカツラと云ふ。其の實の色、淺紫に似たれば此の名あり。◎さいで 補裂妙(サキタヘ)の音便にて小帛(コギレ)のこと。古代帛の事をタヘといひ、約めては唯テとのみもいへり。昔着たる衣のきれはしの、册子に挾まりてありしを見付けし也。◎こぞのかはぼり 春蝙蝠扇也。河海云、蝙蝠を見て扇を作り初ける也。夏の扇の惣名也。補紙はりたる扇。去年の夏の事を思ひ出つるなるべし。◎月のあかき夜 春月にむかへば、何となく徃事を思ふものとなり。詩歌あまたあり。補白氏文集、贈內侍に、莫下對二月明一思中徃事上の句あり。伊勢物語に、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」とよみしも、過ぎにし方を戀ひてなり。

三四（こゝろゆくもの）

心ゆくもの。よくかいたるをんなゑの、詞をかしうつゞけておほかる。物見のかへさにのりこぼれて、をのこどもいとおほく、牛よくやるものゝ車はしらせたる。白く清げなるみちのく紙に、いとほそう、かくべくはあらぬ筆して文かきたる。川舟のくだりざま。齒黑めのよくつきたる。ちやうばみに、ちやう多くうちたる。うるはしき糸のねりあはせぐりしたる。ものよくいふ陰陽師して、河原に出でてずその祓(ハラヘ)

隠語も出來つらむ。因みに附記す。◎ちごあそびする所の　竊兒の愛らしきを見て、まづ心のさわぐをいふ。◎からの鏡の少しくらき　春唐鏡也。いみじき鏡を、あはれ今少し明なれかしと思ふ心なるべし。竊此の説いかゝあらむ。按ふに、唐の鏡を秘藏するに、いつしかくもりて、光の薄くなりたるを見出したる時驚きたる心をいふなるべし。◎あないせさせ　竊案内なり手引をたのみたる也。◎けさう　春化粧　◎かう　春香たきしめたる也　◎ことに見る人なき所にても　春かやうにつくろひたてたるを、見る人あれば、勿論心ときめくべきに、見る人なくてもと也。◎ふとぞおどろかるゝ　春雨風のおともに、待人のきたるかと、心ときめきおどろかるゝと也。

三三（過ぎにし方こひしきもの）

すぎにしかたこひしきもの。かれたるあふひ。ひひなあそびの調度。二藍えびぞめなどのさいでの、おしへされて、さうしのなかにありけるを見つけたる。またをりからあはれなりし人の文、雨などのふりてつれ〴〵なる日さがし出でたる。こぞのかはほり。月のあかき夜。

◎かれたるあふひ　春賀茂の祭の美々しきさま、物見の優なる事など、おもひ出づるさまにや。竊四月賀茂祭には社内は勿論、一般に京の家々は、簾にも几帳にも、葵かつらをかくるを例とす。されば葵祭の稱ありて、京の人々皆はれの儀とすればなり。◎ひひなあそびの調度　春わらはの時の事、思ひ出づべし、

あないせさせたる抄本にはあないしてとはせたるとあり

服になる也。是等の差別品がら等、委しくは例の圖解にいへり。◎よろづさし入れ　◎ふところ紙などなるべし。

三二（こゝろときめきするもの）

心ときめきするもの。すゞめのこがひ。ちごあそばする所のまへわたりたる。よきたき物たきてひとりふしたる。からの鏡の少しくらき見出でたる。よき男の車とどめて物いひあないせさせたる。かしらあらひけさうじて、かうにしみたるきぬきたる。ことに見る人なき所にても、心のうちはなほをかし。まつ人などある夜、雨のあし風のふきゆるがすも、ふとぞおどろかるゝ。

◎心ときめきするもの　〔春〕心のうごきいさむ心なり。又むねさわぐなどもいふ　〔補〕動悸のする事なり。◎すゞめのこがひ　〔補〕作蒿蹊云、雀の子飼はよく人に馴るゝものにて放飼（ハトチガヒ）にするに易し、或は人の肩に登り、懐にも入り、又庭の木にも遊ぶ。苦しげにも見えず、よきものなれども、あまり馴れて、人の足もとにまとひ、あやまちて踏みころす事もあるが悲しと云ふ人いひきと云々。雀を雛のうちより飼ひならす事と見ゆ。さて又、茲に珍らしき說あり。高屋種彦の柳亭記に、何國の遊里にても、遊女の人に隱れて食事すること、俗につまみぐひといふことの隱語にも、雀の子飼といふ由、元祿頃の書を引きて記せり。人にかくれて食する事の、あらはれん事をおもひて、心ときめきする也と。後世此の草子の、此の條の詞によりてかゝる

どいふ意か。◎かうし 〔補〕篩子。俗に格子ともかけり。往古禁中の殿舍は、柱を六七尺乃至一丈の間隔をおきて繁く立て、柱毎の間に、鴨柄より格子を釣り下げたるもの也。是れ今の雨戸にあたる。此の格子の裏に板を張りたるもありて、之を蔀(シトミ)といへり。上(ア)ぐる時は、廂より曲(マガ)り鐵(カネ)の下(サカ)りたるに掛けて、釣り上げおきたり。◎つまど 〔補〕妻戸とかくは借字にて、端戸の義なり。殿舍の四面に格子を下げ、四隅には、妻戸とてひらきを設け、是れより出入するが當時の風なりき。女房の部屋にても、妻戸ある所ならば、歸る人を此處より送りて出だすなり。なほ格子妻戸等のことは、例の圖解に委しく記せり。◎なにわざすとなけれど 〔春〕名殘をしめる閨中のさまおしはかるべし ◎やがてもろともに出でゆき 〔春〕源氏總角に、宇治の中君の匂宮のきぬぐに。「明ゆくほどのそらに、妻戸おしあけて、もろともにいざなひ出て見たまへば、とあるさまなるべし。◎ひるのほどのおぼつかなからん 〔春〕是も夕顏にけさのほど、ひるまのへだておぼつかなく、といへるさまなり。◎見おくられて 〔春〕女の見送る也。かやうに名殘をしげなるこそ、女も見おくらるれ。前のえぼしのをかためて、名殘なきには、女も見送るべくもなしとの心也。◎なごりも出どころあり 〔補〕春註解し難し。屋代本によれば、思ひ出づる所ありて、いときはやかに起きて歸る意にや。武藤氏は「出所の樣子にありと也。かゝる所にの字を省く例あり云々といはれたれど、猶詞足らざるやうなり」此の句の上に脫文あるに非ずや。◎あけて出でぬる所云々 〔補〕これも別れ難き樣子もなく、取り急ぎて、逃げかへる樣に見ゆるが、にくきならむ。◎指貫のこし 〔補〕腰とは指貫の袴の紐をいふ。腰紐の略語なるべし。◎なほし 〔補〕直衣。平服なり上に註せり。◎上のきぬ 〔補〕袍。朝服の表衣(ウハギ)當時の制、公卿の宮中に參朝するには、必ずこの服ならざる可からず。◎狩衣 〔補〕上に註せり。直衣より一段と略

緒とは、何物ないふぞ。予之を不審に思ひ、年來古き書籍縮卷物等にも意(コヽロ)を注(ツク)れど、未だ見聞する所あらず。仍りて拔(オモ)ふに、當時の烏帽子は、綵(ヘリ)を袋縫にして、其の中に緒をさしとほしおき、常は唯頭(カシラ)をさし入れて被(カム)り、事とある時は、後の緒を締めて、後頭に結びたるにはあらざるか。此の草子にいへる所も、やたら其のまゝにさし入れはせず、強く後の緒を結びたるをに、みたるよしならむ。㊁やたら 〔古〕綏リト、靜カニ、ソロ〳〵トなどいふ俗語にあたる。春抄の註は非なり。㊀しどけなう 〔錄〕古は一年四ヶ度の勘定ありし也。諸國の任たる者より、四ヶ度の勘定帳を、勘解由使へ遣するを、四度解といふ也。其の勘定の未進などあるを、四度解なしといふ也。〔補〕美隆云、右の説とりがたしといへども、やゝ古くよりの説と見えて、古記などの六百年前の記録にも、四度解无とかゝれたり云々、直云、物の打ち解けて、取り締りなき事をいふ。なしは甚しの意也。㊀かたくなしゝ 〔校〕春曙本しの字落ちたり。古本によりて補ふ。且春本は「しどけなう頑く」と句を切りたるわろし。下につゞけて讀むべし。此所の義は、烏帽子を緩くさし入れたりとも誰れか咎めん。又しどけなく頑しく直衣などのゆがみたりとも、誰れか笑ふ者あらんとの意なり。㊀誹りもせんとする 〔校〕春本には、そしりもせんにて句を切り、とする人は云々とつゞけて、註に、如此する人は、との心也といへれど、受けがたし。美隆云、如此を、といへる例ありや、考ふべし。按ふに此の詞は、上の詞につゞきて、「笑ひそしりもせんとする」とよむべきか云々 此の説に從ふべし。◎人はなほ云々 〔補〕凡そ女の許より歸る人は、曉の有樣の興あるものぞとて、下に其の興ある事どもをいへる也。但し「人は」とある上に、一句ありしが落ちたるか。とも思はる。◎わりなく 〔補〕本居氏云、あるまじき事を、強ひてすること、思ふこと也と。鈴木朖氏は、ムショウニ、ムリニ、と譯せり。今俗ムチャニな

なごり云々壺代校本におもひ出所ありて云々と見ゆ

ひてそゝのかし、「あけ過ぎぬ。あな見ぐるし」などいはれて、うちなげくけしきも、げにあかず物うきにしもあらんかしとおぼゆ。さしぬきなども、ゐながらきもやらず。まづさしよりて、よひと夜いひつることののこりを、女の耳にいひいれ、なにわざすとなけれど、おびなどをばゆふやうなりかし。かうしあげ、つまどある所はやがてもろともにいでゆき、ひるのほどのおぼつかなからん事なども、いひいでにすべり出でなんは、見おくられて、なごりもをかしかりぬべし。なごりも出でどころあり。いときはやかに起きて、ひろめきたちて、指貫のこしつよくひきゆひ、なほし、うへのきぬ、かりぎぬも、袖かいまくり、よろづさしいれ、おびつよくゆふにくし。あけていでぬる所たてぬ人いとにくし。

◎曉に歸る人の　(春)朝の名殘はなしまで、たゞ歸る用意のみするをにくめる也。◎まかり申　(補)今の詞に、暇乞といふに同じ　◎烏帽子の緒　(補)烏帽子の烏は黒き義を取りたるにて、音ウなれど、五音の相通してエに轉じたる也。烏を叉焉と書き誤りたるより、エの假名を書けるもあれど非なる由、狩谷望之翁いへり。さて烏帽子の緒といふはいかなるものぞ。直按するに、此の緒を頂頭懸(テウヅカケ)とも名づくる掛ケ緒の事と思ふもあらむが、然にはあらじ。鎌倉時代以後の烏帽子にこそ、掛ケ緒を用ひたれど、そは後世強(コハ)く塗り固めたる烏帽子なれば也。平安朝時代のは、頭巾(ヅキン)などの如く、袋やうのやはらかき品なりしこと伊勢貞丈田沼善一兩氏のごとき、斯道の學者の說もありて、掛ケ緒はなかりし樣に思はれたるを、此の草子に書ける

かたくなし〕く春本しの字なし千本による

女房なも御許君などいふこそよけれと也。是も詞の敎へなり ◎ひきいれごゑして [春]源氏帚木に、いきの下に引いれといふに同じ。詞幽（カスカ）に由めきたるさま也。よき男こそあらめ。さしもなき男のさやうなるはにくきと也 ◎えんだつ [補]艶だつにて、俗に上品ぶるといふに同じ。◎たゞなるだに [補]唯でさへ好ましからぬ人也。◎いかなる者にかあらん [春]彼一人車にのりて物見る男をさしていふなり。何者はしられども、さまで我一人高貴めかすともとの心也。◎かゝよひて [補]我が身を耀かすことなり。春抄にかくよひとして、榮耀がましく、一人物見ることゝ註せしはたがへり。抄にかゞよひとあるに從ふ。さるは万葉十一、「燈之陰爾蚊蛾欲布虚蟬之妹蛾咲狀面影爾所見（トモシビノカゲニカマヨフウツセミノイモガヱマヒシオモカゲニミユ）。」夫木集新古今集などにもありて、かゞよふは、皆かゞやく義にいへり [春]案るに此獨車にのりてといふより以下奥の心づきなき物にもあり。

曉にかへる人の、よべおきしあふぎ、ふところ紙もとむとて、くらければ、さぐりあてゝ〳〵とたゝきもわたし、あやしなどうちいひ、もとめ出でてそよ〳〵とふところにさしいれて、扇引きひろげてふた〳〵とうちつかひて、まかり申ししたる、にくしとはよのつね、いとあいぎやうなし。おなじごと夜ふかく出づる人の、烏帽子の緒つよくゆひたる、さしもかためずともありぬべし。やをらさながらさし入れたりとも、人のとがむべきことかは。いみじうしどけなうかたくなしく、なほし狩衣などゆがみたりとも、たれかは見しりて笑ひそしりもせんとする。人はなほあかつきのさまこそをかしくもあるべけれ。わりなくしぶ〳〵におきがたげなるを、し

かゝよひて春本かくよひとあれど抄本活本に從ふ

つかぬすゞり。女房の物ゆかしうする。たゞなるだにいとしもおもはしからぬ人の、にくげごとしたる。ひとり車にのりて物見る男、いかなる者にかあらん。やんごとなからずとも、わかき男どもの、物ゆかしう思ひたるなど、ひきのせても見よかし。すきかげにたゞ一人かゞよひて、心ひとつにまもりゐたらんよ。

◎宰相 （補）參議の唐名。當時は參議を、唐めかして宰相と稱へしなり。◎たゞなのる名 （註）殿上人宰相などを、たゞ人の共名乘をよぶは憚り也。それをつゝしまずいふはよからぬを、さやうにはいはで、稱號官などをよび、又女房をも、おもと、きみなどいへば、よろこびほむると也。御許オモトおつぼねなどかしづきいふ詞也。君は猶かしづく詞也。◎つゝましげならす （春）憚らぬ心也 ◎かたは （補）かたほといふ詞に同じ。不滿足なる事也。こゝは不都合といふ俗語にあたる。◎きんだち （春）公達、攝家の子息、清華などをいふ ◎御まへよりほかにてはつかさをいふ （春）是前に、只名のる名を、つゝましからずいふは、かたはなるとの詞を釋せる也。殿上人公達などを、天子の御前ならでは、いづれも其官をよぶぞと也。御前にては名乘をよぶべき也。◎きこしめさんにはなどてかは麿がなどはいはん （春）帝の聞召所にては、殿上人公達の我事を、麿かなどはいはぬ事ぞと也。至尊に憚る故也。是らも皆詞なめきやうならぬ教なるべし。（補）まろとは、當時上下男女一般の自稱代名詞なりし也。◎さいはざらんにくし （補）この一句は、立ち返りて、前の「殿上人公達を、御前より外にては、司をいふ」とあるにつゞくにて、他より殿上人公達の官名をいはざるは、きゝにくしとの意なり。◎かくいはんにわろかるべき事かは （春）殿上人公達に官をいひ、

いはんに、「こゝもとに侍る」といふ詞（吾が宿許に居る人の意）を、いはせまほしく聞く事もありとの意ならん。文字は詞といふに同じ。前にもいへり。◎あいぎやうなくと詞しなめきなどいへば　〔春〕たとひ愛相もなき事をも、詞こはからず、品やかにいへば、其いはれし人もさのみ腹だてず。きく人も聞きにくからで、ともにうちわらふと也。〔関〕濱臣云、あいぎやうなくと」のとは、ともを略せる也。此頃よりの俗語也。金葉七「たちながらきたりとあはじ藤衣ぬぎすてられし身ぞと思へば」新古十三「たのめずは人をまつちの山なりとねなましものをいさよひの月」かげろふ日記「嵐のみ吹くめる宿に花すゝきほに出たりとかひやなからむ」此類皆とものもを略せる也　こゝと同じ　◎しなめき　〔春〕しなやかなる心也　〔補〕品あるやうにいふ也　◎てうろう　〔春〕嘲弄。彼詞品めきていへば、いはるゝ人もきく人も、にくまでよしとおぼゆればにや。あまり物ごとに、しなめかしていふほどに、かへりてなぶりあざけるなど、人にいはるゝまでにあるも亦わろきなるべしと也。

殿上人宰相などを、たゞなのる名を、いさゝかつゝましげならずいふは、いとかたはなるを、げによくさいはず、女房のつぼねなる人をさへ、「あのおもと、きみ」などいへば、めづらかにうれしとおもひて、ほむることぞいみじき。殿上人きんだちを、御まへより外にては、つかさ（官名）をいふ。又御前にて物をいふとも、聞こしめさんには、などてかは「麿（マロ）が」などいはん。さいはざらんにくし。かくいはんに、わろかるべき事かは。ことなることなきをとこの、ひきいれごゑしてえんだちたる、すみ

おはするとあり

る」といふ文字を、あらせばやと聞くことこそ多かめれ。あいぎやう（愛敬）なくと、ことばしなめきなどいへば、いはるゝ人も、きく人も笑ふ。かくおぼゆればにや、あまりてうろうするなど、いはるゝまである人も、わろきなるべし。

◎文ことばなめき人 〔春〕無禮、人とかきかはす消息の詞の、無禮なるをいふ也。◎なのめに 〔春〕斜ナノメここにては、ないがしろなる心なるべし。〔磯〕曲りなりにといふ俗語に同じ。世間を大かたに取り扱ふ意の詞なり。◎さるまじき人のもとに 〔春〕さやうに尊敬すまじき人へ、あまり慇懃なる文詞も尤わろけれど、まづ世をないがしろに書なしたるこそ、我が方へ得たるにくきことわり、猶人のもとへ、人のやりたる文の詞にても、なめきはにくゝこそあれと也。よく心をつけて見るべし。◎さしむかひても 〔春〕文詞のみならず、對談にても無禮なるは、かたはらいたしとなり。◎さるはをこにて 〔磯〕さてそれは、いふ人もをこがましく見えて、聞きにくしと也。◎をとこしゆうなどわろく 〔磯〕をとこしゆうは、上なる男主人の事とは別にて、男と主となり。當時の詞に、一般の男子をば、ヲトコといひ、妻より夫の事を、ヲトコといへる事、假名文に徴多かり。爰は、妻として夫のことをなめげにいひ、從者として主の事をわろくいふを、にくみたるなり。惣じて此の條、古き抄どもの說、いづれも明瞭ならず。◎我がつかふ者 〔磯〕これも在來の抄どもの說は甘服せず。我がつかふとは、淸少の使ふ者にて、下仕の女をいふ也。上のかゝり、夫や主やを、なめげにいふはにくし。さりとて、我がつかふ下仕の女の、己が夫などのことを、他の身柄ある人に語るとて「吾が夫が何とおはする。」かくのたまふ。」などいひたるも聞きにくし。吾が夫の事を、他人に

おはする抄本には何と

直按するに、あら〳〵しは荒々にあらで粗々なり。露骨(アラハ)に粗野なるを云ふ。「こそ」は君などいふに同じ。濱臣說に或人あらはにはわの誤にて荒鰐かといへり。とあるは非なり。◎さうなしのぬしなはりうどのたれ　〔春〕すけたゞなうたへるたはれうた也。さうなしのぬしは、無二左右一主にや。荒々しく左右なおもふ遠慮なき人といふ心なるべし。なはりうとのたれとは、尾張人の種也。此すけたゞ尾張の兼時が女のはらなれば也。〔補〕美隆云、昔は人のあだなつくるに、某の主と多くいへりと見ゆ。宇治拾遺に、あけなの主、古事談にありたの主など見えたり。直按するに無左右な、左右な思ふ遠慮なきと說けるはあたらず。この詞は、兎角の評にも及ばぬ、品のなき事、無作法なるないふ也。◎えきゝ候はじ　〔春〕すけたゞは聞知り侍はじと也。◎あなたより　〔春〕主上の中宮の方へ渡御ありてなり。◎この者　〔春〕すけたゞ。

三一　（にくきもののつゞき）

文ことばなめき人こそいとゞにくけれ。世をなのめにかきなしたる詞のにくきこそ。さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも、げにわろき事ぞ。されど、わが得たらんはことわり、人のもとなるさへにくゝこそあれ。大かたさしむかひても、なめきは、などかくいふらんと、かたはらいたし。ましてよき人などを、さ申す者は、さるはをこにていとにくし。をとこ、しゆうなどわろくいふ、いとわろし。我がつかふものなど、「おはする、の給ふ」などいひたるいとにくし。「こゝもとに侍

共の北の對を、中宮のおはします殿と定めたる由也。されば中宮御座所と、淸涼殿との間は、謂はゆる坪とて中庭になり、東西に廊ありて相近ければ、常に主上の渡御ある時もあり、又中宮の、御殿の方へ參上したまふ時もありとなり。◎前栽　〔補〕殿前の庭なる花壇やうのもの　◎ませ　〔補〕籬、ませがきの事。ませは馬塞(マセキ)の略　◎たかとほの大貳　〔春〕高遠、小野宮關白實賴公の御孫、參議齊敏卿の男、太宰大貳正三位也、禁秘抄云、管絃は一條院十一歲、圓融院被ニ傳申一、然而大貳高遠爲ニ御師範一。◎たかさこ　〔春〕催馬樂、律、高砂、たかさごのさいさごの、尾上にたてる白玉椿玉柳云々といふ樂章の節を笛に吹き給へるなり

○わか身にせりつみし云々　〔春〕心に物のかなはぬなどやうの愁へなしとの心也。童蒙抄云「せりつみし昔の人もわがごとや心に物のかなはざりけん」〔補〕濱臣云仲實綺語抄、俊賴口傳にいへる故事也。昔よりいひ傳へけむ、獻芹の本文、こゝにかなはす云々。〔補〕かくあれば更に俊賴口傳の文を略抄して示さん。九重の內に、朝ぎよめする者、俄に風のみす吹き上げたるに、后の芹と見ゆる物めしけるを見て、人しれず物思ひになりけれど、すべきやうなくて、食(メ)したる芹をつみて、御簾の風に吹きあげたりしあたりにおきけれど、しるしもなかりければ、終に病になりて亡(ウ)せなんとしける程に、われないとほしと思はゞ、芹をつみて功德につくれと、息の下にいひおきて亡せはてにけり云々。此の古傳說を、芹つみし昔の人も云々と、歌にはよみしなり。さて淸少のいへる詞は、昔の芹つみて、物思ひせしやうなる事もなく、よろづ滿足せぬこともなしとなり。◎すけたゞはもくのぞう　〔春〕勘物云長保比、此名字の藏人不レ見云々。木工允より六位藏人に成し者也　○あらはにとぞつけたる　〔春〕あら〱しき故あらはなる心にての異名なるべし。イ本あらはこそは、あらはどのなどいふ詞也。こそはかしづく詞也。源氏夕顔に、右近の君こそとあるにおなじ。〔補〕

本抄本等のひろく行はるゝに従ふ｜あらはにはイ本のあらはにこそとあるかたよろし

高う｜夏陰校本によりて補へり

「せりつみし」などおぼゆる事こそなけれ。すけたゞは木工のぞうにて、藏人には成りにたる、いみじうあら／＼しうあれば、殿上人女房は、あらはに（イあらはにこそ）とつけたるを、うたにつくりて、「さうなしのぬし、をはりうどのたねにぞありける」とうたふは、尾張のかねときが、むすめのはらなりけり。これをふえにふかせ給ふを、そひさふらひて、（[illegible]の言也）なほたかう吹かせおはしませ。えきゝさふらはじ」と申せば、いかで（帝の御詞也）か。さりともきゝしりなん」とて、みそかにのみふかせ給ふを、あなたよりわたらせおはしまして、「此のものなかりけり。只今こそふかめ」とおほせられて、高うふかせ給ふ、いみじうをかし。

〔補〕此の一段は「にくきもの」のつゞきにあらず。錯りて此の間に入りしものなれど、今姑く春本の次第のまゝにさしおけり。其の心して讀むべし。◎一條院　〔補〕春本小一條院として　近衞ノ南洞院西と註したるは誤りたり。古本活本ともに、小の字なきに従ふべし。一條院は拾芥抄に、一條南、大宮東二町、謙德公家とあり。日本紀略によれば、長保元年六月十四日亥剋内裏燒亡云々、十六日、今日天皇渡二御一條大宮ノ院一ともある是れなり。◎今内裏　〔春〕いづくにても本内裏の外に、臨時に天子のおはします所を今内裏といふ也。榮花物語に堀河殿に圓融院おはせしをもいま内裏といひし事あり。こゝは一條院の御事也。◎おはします殿は清涼殿にて云々　〔補〕昔はいかなる里内裏にても、主上の常に住ませ給ふ御殿をば、本内裏の例にならひて、假りに清涼殿と申しゝなり。此の條も一條院の寢殿を、常の御座所として、清涼殿と申し、

だちて「やゝはなひたる時、かくまじなはれば、死ぬるなりと申せば、」云々とあるにても察すべし。されば、大かた人は、嚔（ハナヒ）んとては、忍びて愼むべき事にてあるを、家の男主人は、さる愼みをもせざる由也。濱臣云、男主とは、女方よりいふ詞にて、男主人といふこと也。◎まが〳〵しく 補凶事かましきを云ふ。俗に縁喜のわろきこと也。◎めのとの男こそあれ 春乳母の夫こそにくゝはあれとの義也。世俗におて、といふもの也。◎女ごのは云々 補女兒（ヲンナゴ）のめのとの夫はといふべきを、略して女兒のはといへる也。春女兒のあたりへは、おてゝのさのみ參らぬ心なり。◎りやうじて 春領也、偏に我物とするさま也。◎これがとがを 春乳母が夫の振舞奇怪なれども、共とがを誰いひあらはす人もなければと也。

この一段活本慶安版の素本宸翰本等末の方にいれりそもそも此の前後にくきものをいへる中にかゝる筆すさみ物すべきやうなし必ず錯亂してこゝに入りたるならめど今しばらく春

三十（御笛ふかせ給ふ）

一條院をば今內裏とぞいふ。おはします殿は淸涼殿にて、その北なる殿におはします。西ひがしは渡殿にて、わたらせ給ひ、つねにまうのぼらせ給ふ。おまへはつぼなれば、前栽（センザイ）などうゑ、ませゆひていとをかし。二月（キサラギ）十日の日のうら〳〵とのどかに照りわたるに、わたどのゝ西のひさしにて、うへ（一條院也）の御笛ふかせ給ふ、高遠の大貳（ダイニ）御笛の師にて物し給ふを、こと笛ふたつして、たかさごを、をりかへしふかせ給へば、なほいみじうめでたしといふもよのつねなり。御ふえのことゞもなど申し給ふいとめでたし。みすのもとにあつまり出でて、見奉るをりなどは、わが身に

補ふ 考異にも前田本によりて女ごのはとあり春本などするに素本活本するよとあるによりて改む

み、いさゝかも此の御事にたがふものをば譏し、人をばひとゝもおもひたらず。あやしけれど、これがとがを心にまかせていふ人もなければ、所えいみじきおもゝちして、事をおこなひなどするよ。

⊙あからさまに 〔補〕前にも註したるが、なほ雅語譯解に、「ツヒチョット」とある、爰によく叶へり。⊙らうたがりて 〔春〕労。いたはりいとほしむ事也。〔補〕可憐なるにいふ。◎でうどやうちちらし 〔春〕調度 手道具などないふ也。やの字は調度や何やといふ心なるべし。〔補〕もと調度や何やとありけんないつしか書きおとしたるならむ ⊙いざたなし 〔春〕穢ごき事也。従者のおこせども、わざとそられしておきぬな、ねごきと従者のおもふさまにて也。◎今参り 〔春〕新参（シンザン）のものゝ、もとより侍ふ者にさしこえて、物教へだてなる事也。後見などするがにくきと也。⊙わがしる人にて 〔春〕只今相しりかたらふ夫婦の中にて也。⊙はやう見し女 〔春〕昔そひたる女の事ないひ出でて也。⊙ましてさしあたり 〔春〕只今目の前に二道かくる時の事也。◎さしもあらぬやうも有かし 〔春〕さしあたりたる事は、事によりて、さもれたからぬと也。清少の心ばへ、嫉妬な恥たる所あり。心なつくべし。〔補〕わざといひ直したる也。此の筆法所々にあり。◎はなひて誦文する人 〔春〕異本はなびて、てづからずんじいのる人とあり。尤面白きにや誦じ祈るも、文（モン）なとなへてまじなふ心也。拾芥、嚔時頌云、休息万命急々如律令。〔補〕昔は嚔ひてまじなはねば、死ぬる由の俗説ありたるなり。徒然草にも、ある人清水へ参りけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「くさめ〳〵」といひもて行きければ、「あまごせ、何事なかくはのたまふぞ」云々。たび〳〵問はれて、うちはら

べし。師説可ㇾ用と云々。直云、師説とは濱臣の説をいふ也。なほ宸翰本にも「我れにもいはぬ人の、さし出でしてさいまくれ、いひとりて云々」とありて、濱松物語の詞に同じ。こは四段活用にも、下二段活語にも通じていへる詞にや。◎いひくたし。〔補〕云朽(イヒクタ)す也。「下す」にはあらず。俗言クサスに同じ。

てうどや古本にやの字なし

あからさまにきたる子どもわらはべをらうたがりて、をかしき物などとらするに、ならひてつねにきて居入りて、調度やうちちらしぬるにくし。家にても、宮づかへ所にても、あはでありなんとおもふ人の來たるに、そらねをしたるを、わがもとにあるものどもの、おこしによりきては、いぎたなしと思ひがほに、ひきゆるがしたるいとにくし。今參りのさしこえて、ものしりがほにをしへやうなることいひ、うしろみたるいとにくし。わがしる人にてある人の、はやう見し女の事いひ出でてほめなどするも、過ぎて程へたる事なれどなほにくし。ましてさしあたりたらんこそ思ひやらるれ。されどそれは、さしもあらぬやうもありかし。はなひて誦文(ズモン)する人。大かた家の男しゅう其家の家主也ならでは、たかくはなひたるもいとにくし。蚤もいとにくし。きぬのしたに踊りありきて、もたぐるやうにするも。又犬のもろごゑにながながとなきあげたる、まがまがしくにくし。めのとのをとこそあれ。女ごのはされど近くもよらねばよし。をのこどをば唯わがものにして、立ちそひ、りやうじてうしろ

わがしる人にて以下春本錯誤あり古本抄本により千蔭の改めたるに従ふ

女ごの春本女はとのみあるを千蔭本によりて

通はしいふ例あれば、たふす(倒)も、發音の同じきからに「たほす」ともかけるならずや。此の草子は、當時の俗語を、慣用のまゝにいへる事多ければ、このたほめかしも、他に用例を見ぬ詞ながら、必ずそのかみの俗語なるべし。◎ごほめく 〔春〕ごほ／＼となる聲也。源氏紅葉賀に、屛風たゝむ音をごほ／＼と有。〔補〕この草子の奥にも、藏人の沓の音を、「いと高くふみごほめかして」とかけり。擬音語なる事論なし。なほ素本には「たほめかしう、ほとめく」とあり、抄には「こほめかしうほとめく」とあれど、いづれも傳寫の誤あるべし。こゝは春本のまゝにてきこゆ。◎蚊の細ごゑに名のり 〔補〕かといふ名は、なく聲によりてぞ付きけん。春抄の註に、蚊の字、ぶんのこゑなればとあるは、唐土のさたにてこゝに叶はず。されはこゝにも、名のりとはいへり。實に遠くより、かすかになきて來るは、カーとこそきこゆれ。◎我が乘りたる 〔春〕かのきしむ車をかりて、我が乘たる心なるべし。◎さいまくる 〔補〕此の詞いと解しがたし。まづ春抄は、才狂ル也。人をもどき理をまげて、我が才覺をあらはさんとする心なり」といひ、清水濱臣は之を非として云、今按ふに、まくるは淸音にて、上の詞につけていふ俗語にて、上の詞を強くいふ也。俗言に、人をいひまくる、逐ひまくる、などいふまくるの意なるべし。と云々。夏蔭云或人の說に、濱松物語二、さかしら心のきは高く、さいまくれたるやうなる、かへりてはうたてありや。」才狂（サイマグ）るにては、我が才を狂ぐるにて、わろき方とは聞えがたし。註非也。こゝは、所得がほにほこりて、人の詞の先を狂（マゲ）る意なり。俗のはなしの先を折るといふ心なりといへり。夏蔭按ずるに此說なほ穩ならず。丹後守爲忠朝臣家百首、十三夜月俊成「さきまくり今二夜をばみてずして、くまなきものは長月のつき」といへるを見れば、まくるは狂ルの義にあらず。俗言に、おひまくる、いひまくる、などいふまくるにて、強く先走る意の詞なる

の襲は、冠を被る時なく、常に烏帽子被りてありし也、此の條は殿上人の、かゝる忍びあるきの時なれば、略服にて、わざと烏帽子著たるをいふ。◎そよろと (春)烏帽子の物にさはる聲也、◎いよす (補)伊豫の國より産出する簾にて、葦莖のいと細きを編みたるもの也。◎もかうのす (春)帽額の簾也。(補)竹のいと細く削れるを編みたるにて、上品なる簾の上部に、一幅の帛(キレ)を横に付けたるをいふ。貞丈雜記に「帽額は額をおほふと訓む。出入る人の額の上に覆ふ故の名なり」とあるは博識なる翁の說として餘りにをさなし。帽額は本字抹額より出でたる語にて、俗にいふ鉢卷(ハチマキ)のこと也、されば舞樂の舞臺の下四方に引き廻したる帛(キレ)をも亦帽額と稱するにて知るべし。元は四方に掛けたる簾の上部に、抹額のやうに引きたる帛なれば斯く名づけたる也。◎こはし (補)木端。春曙の本文には、「こはき物」とあり。傍にイ本によりて「こはし」と記せり。是れは異本の「こはし」とある方いとよろし。さるは雅亮裝束抄の、母屋廂の調度たつる事の條に、大かたみすをかくる事は、こはしといひて、板を薄く削りて、入れて卷きたるがよき也云々。とあり。こはしは木端なり。帽額のつきたる簾の如きは、筋細くして撓(タワ)やかなれば、木端(コハシ)を入れて卷くが故實なり。其の用意にとて、帽額の簾の垂れたる下には、木端の置かるゝを、其の心もなく、みす引きあぐれば、下の木端の障りて音のするよとなり。春抄の、こはし鑷匙か。といへる又挑牙(コハゼ)などの說は、辨ずるに足らず。◎やをらひきあげて (春)やう〳〵にそろ〳〵と引揭て也。靜に上て出入ればならぬを、いづれも用意なきをにくしと也、◎たはめかし (春)たをめかしとよむべし。たは〳〵する心也。敷井にとゞこほりて打ちたはみなどすると也。(補)たわみはわの假名にて、はにあられば、之をたわむ事といふ註は從ひがたし。按ふに、倒すやうにすることの俗語にや。さるは、生(オフ)す負(オフ)すなどいふ詞を、古くおほすともかきて。ふとほと

あげて出で入りするはさらにならず。又やり戸などあらくあくるもいとにくし。すこしもたぐるやうにてあくるはなりやはする。あしうあくれば、障子（サウジ）などもたほめかしごほめくこそしるけれ。ねふたしとおもひて臥したるに、蚊（カ）のほそごゑに名のりて、顔のもとにとびありく、羽風さへみのほどにあるこそいとにくけれ。きしめく車にのりてありくもの、耳もきかぬにやあらんといとにくし　我がのりたるは、その車のぬしさへにくし。物がたりなどするに、さし出でて我れひとりさいまくるもの　すべてさし出では、わらはもおとなもいとにくし　昔物語などするに、我が知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどするいとにくし。ねずみのはしりありくいとにくし

◎いひしらせぬ　〔考〕春本いひしらぬと有りてせ文字落ちたり。ゑんじは怨じなり。告げしらせぬ人を譏り怨む也　◎しらべいふ　〔通〕もと音律を合はする詞より、轉じて一つことを幾度もするをかくいふ。◎さるまじうあながちなる所に　〔解〕さやうの人、寢さすまじき所なれども、わりなき程なれば、あながちにかくしてねさせたるに、其人は何の用意もなきがにくき也。◎長烏帽子　〔解〕烏帽子の高きをいふか。武家の世に細立烏帽子などいへる類ならむ。抑々上古烏帽子といふは、禮服著る時の、冕冠玉冠などの下に被りし、頭巾やうの物なりしが、延喜の頃より、冠と帽と著用の差別起りて、冠は正服の時に用ひ、烏帽子は平常服に用ふる風習となりて、官位ある人は略服の時のみ帽を被り、參朝の時は必ず冠を被れり。又無位無官

ふは訟ふにてわらはべの国府へ参りてうたへごとする如く、わけもなきことにあらそふは、ゑびしれたる人のさまなるべし。又かうどのは守殿か。国の守をいふか。意は位高き人の似つかしからず、かゝるふるまひをせしと也」とて、わらはべを土民の事としたれど、中々にひがごとなるべし。「こふどのに参りて」まで、童謡の詞なるべけれど、前後の詞を欠きたれば、いかなる意とも知り難き也。按ふに当時小童の、何の心もなく謡ひける俗謡なるべし。㊂まことによき人の　㊎前に式部大夫駿河の前司などいひしがさせしといひしをうけての詞也。

しらせぬ春本せの字なし古本弘賢校本によりて補ふ

ならし春本いはせとあるを寛翰本に従へり

物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、つゆばかりの事もゆかしがり、きかまほしがりて、いひしらせぬをばゑんじそしり、又わづかにきゝわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、こと人にも語りしらべいふもいとにくし。物きかんと思ふほどになくちご。からすのあつまりてとびちがひ鳴きたる、しのびてくる人見しりてほゆる犬はうちもころしつべし。さるまじうあながちなる所にかくしふせたる人のいびきしたる、又みそかにしのびてくる所に、長烏帽子して、さすがに人に見えじとまどひ出づるほどに、物につきさはりて、そよろとならしたるいみじうにくし。いよすなどかけたるをうちかづきて、さら／＼とならしたるもいとにくし。もかうのすは、ましてこはしのうちおかるゝいとしるし。それもやをらひき

源氏にゑがちといふ詞見えず但し帚木に紫君の事な愛散づきゑみかちなるとあり「ゑがち」とかける本もあるにや

ゑに 圖すゞろはそゞろに同じ不覺とも漫とも字にはかきて思ひよらざる事にいへり。◎ゑがち 圖春本「ゑがち」とありて、何事も心得がほに、物いふなるべし。と註せれど、よしとも覺えず。美隆云和訓栞ゑ部に、ゑがちにおはす、源氏に見ゆ。笑かちに御坐也とあり。之によれば、笑みがちの心なるべし。されど源氏いづれの卷か未レ考。◎いつかはわかやかなる人の 圖春若き人などの、さやうのふるまひせずと也。若き人もすまじきにはあられど、まづ老人は物に恥かしげなく、ぶたしなみなるものなればいふ也。◎老いばみ 圖春本この下うたてあることかけり。抄本に老いばみたるとあるに從ふ ◎ゐもさだまらずひゐめきて 圖座するとひとしく居ひゐごりたる也。◎狩衣 圖上古の襖（アナ）といふ服の遺制にて、庶民の常衣なりしが、輕便なる所より、公卿も狩獵や旅行などの略裝に著用し、終には平常も忍びあるきには、わざわざ之に著替などせし風、源氏物語等に見えたり。されば布にて造るが本なるを、貴人の服となりては綾織物を以て、縫ひ造る事流行せしなり。猶裝束圖解に委しきを見るべし。◎下ざまにまき入れ 圖狩衣の前の、帶より下に垂れたる所を、膝の下に敷きて坐する不作法を告めいへる也。◎いひかひなきものゝきはにや 圖春いやしきものゝかやうなるかとおもへどもとの心也 ◎式部大夫 圖春式部丞の叙爵したる也。式部丞は相當六位なるが五位になりたるをいふ也。◎あめき 圖春さけのみてわめく事にや？ 圖補抄本活本ともにあめきとあり。從ふべし。また宸翰本には、酒のみてといふより、下の心づきなしと思ふなり。」までの一節、此の所になくして、心づきなきものゝ條に入れり。且文句にも小異あれど、今略して載せず。◎くちわきをさへひきたれ 圖春吻クチワキ脣同、べそ口するさまなるべし。醉たる人にある事也 ◎わらはべのこうどのに 圖春そのかみの童謠なるべし。こうどのは國府殿にや。國司などをいふべし 圖補濱臣云、うた

かゝることは、いひがひなきものゝきは（分際也）にや、とおもへど、すこしよろしきものゝ、式部大夫（シキブノダイブ）駿河ノ前司などいひしが、させし（さやうにせしと也）なり。又酒のみてあめき、口をさぐり、ひげあるものはそれをなでて、さかづき人にとらするほどのけしき、いみじくにくしとみゆ。又のめなどいふなるべし。身ぶるひをし、かしらふり、くちわきをさへひきたれて、わらはべのこうどのにまゐりてなど、うたふやうにする、それはしも、まことによき人のさし給ひしより、こゝろづきなしとおもふなり。

いそぐ事あるなりにながごとする　(春)急用ある折に長物語する客人也。◎あなづらはしき　(補)輕侮してもよき人ならばと也。◎のちになどいひても　(春)只今は急用あれば、後に緩々かたらんなどもいはんなと也。◎すゞりにかみのいりて　(補)春抄の傍註に髪と紙と兩説ありとしたれど、こは落髪の入りたる也とみるべし。濱臣云、新撰六帖に爲家卿の歌「するすみにまつはれかゝるおちかみのとかくにものゝうるさきもうし」とあるは髪といふ題にてこゝの意をよめる也。◎れいある所にあらで　(春)常に居る所には驗者のゐざる也　(補)外にある尋ねありくは外にあるなの略なり。此の草子にはかゝる例、前後にいと多し。心得おくべし。◎加持　(補)祈禱の事なから、名義は、眞言師の祈りて、佛力を信者に加附して、受持せしむるこゝろなる由、織田氏の佛語解釋にいへり。◎ものゝけにこうじ　(春)困也。日比物のけ調伏し草臥たるにや。座するとひとしくねふる也。ねふりこゑは陀羅尼などよむ聲のねふたげなる也。◎なんでふ事なき人　(春)さしたる學問故實もなき也。(補)何と取り立てゝいふべき事のなき人なり。學問故實まではあらじ。◎すゞ

ゑがち春本えがちとあり古本によるあふりをるもの活本にはあぶるをとありて下のるもの〻三字なし

どは、無用心なればと、春抄もいへり。

二九（にくきもの）

にくきもの。いそぐことあるをりに、長ごとするまらうと。あなづらはしき人ならば、のちになどいひてもおひやりつべけれども、さすかに心はづかしき人いとにくし。硯にかみのいりてすられたる。又墨のなかに石こもりてきし／＼ときしみたる。にはかにわづらふ人のあるに、げんざもとむるに、れいある所にはあらで、ほかにある、たづねありくほどに、まちどほに久しきを、からうしてまちつけて、よろこびながら加持せさするに、此のごろもの〻けにこうじにけるにや、ゐるま〻にすなはちねぶりごゑになりたるいとにくし。なんでふことなき人の、すゞろにゑがちに物いたういひたる。火をけすびつなどに手のうらうちかへし、しはおしのべなどして、あぶりをるもの。いつかはわかやかなる人などのさはしたりし。おいばみたるものこそ、火をけのはたに足をさへもたげて、ものいふま〻におしすりなどもすらめ。さやうのものは、人のもとにきて、ゐんとする所を、まづ扇してちりはらひすて〻、ゐもさだまらずひろめきて、狩衣の前、下ざまにまきいれてもゐるかし

◎たゆまるゝもの　〔春〕懈怠せられ退屈せらるゝ事也。◎さうじの日のおこなひ　〔春〕精進の日の勤行は懈怠すまじき事なれば、かへりて物うくたゆまるゝなるべし　〔補〕六齋日など精進勤行すべきなるを、常の事となれば、却つて怠り勝ちになるをいふにや。◎日とほきいそぎ　〔春〕日數遠くかされたる用事には、退屈せらるゝ心也　〔補〕いそぎとは、物の用意支度をする事なり。行く先久しき用意は、自然と油斷して、怠りがちになるをいふ也。◎寺に久しく云々　〔補〕參籠したるにも、心に油斷を生じて、看經など怠る由ならむ。

二八（人にあなづらるゝもの）

人にあなづらるゝもの。家のきたおもて。あまり心よきと人にしられたる人。としおいたるおきな。又あは〳〵しき女。ついぢのくづれ。

◎家の北おもて　〔春〕南面を晴の所とするゆゑ、北面はさまでつくろはぬ心也。〔補〕更科日記に「姉のなやむ事あるに云々、此の猫を北おもてにのみあらせて呼ばねば云々、わづらふ姉おどろきて、いづら猫は、こちゐてこ、とあるを、などと問へば、夢に猫の側に來て云ふ、只しばしこゝに在るを、此の頃下衆の中にありて、いみじうわびしき事といひてなく、云々、其の後は、この猫を北面に出ださず思ひかしづく」とあるにて知るべく、北面は下女抔の居る所と見ゆ。されば家の内にて北面は人にあなづらるゝなるべし。◎としおいたるおきな　〔補〕この一句橐本イ本になし。濱臣云、おきなはおうな（嫗）の誤りか。◎あは〳〵しき女　〔春〕淡々也。心ふかゝらぬ物はあなづりやすかるべし。◎ついぢ　〔補〕築墻。土塀のくづれたる所な

様を得べき使ぞと使者の思ふ心なり。◎うぶやのさわぎせぬ 〔春〕子の出来ぬ心也 〔盤〕産誕あれば産舎の儀とて、賑はしき祝をすればなり。◎ようせずは 〔春〕不レ善也こゝにては若（モシ）はなどいふ心也、〔盤〕俗にヤルクスルトと云ふ詞にあたる。◎おとなる子ども云々 〔盤〕この一句諸本に解なし。岡本保孝翁の存疑には、父母ともに一所に寝たるを、かたはらいたしと思ふ也と記せり。◎おほかたわらはなる子云々 〔盤〕春本を始め諸本皆「かたはらなる子ども云々」とあれど、唯活字本のみ「大かたわらはへなる子どもの心ちにも云々」とある、よろしければ此れに従ひて、本文を改めたり。按ずるに前の詞は、成人の子供をさしおきて、其の親たちの晝寝したるを、冷まじといひたるが、大かた成人の子ならずとも、兒童の心にも、親たちの晝寝したるは、つきなく冷まじかるべく思ふべしとなり。◎ねおきて云々、〔鉄〕よく寝入りたる時に、湯かされとて起さるゝ事なり。はらだゝしくとは起きたる人の心なり。◎しはすのつごもりの長雨 〔春〕元日までも晴まじきかとつきなく冷しき也。◎一日ばかりのしやうじんの 〔春〕纔に一日の精進を懈怠はつきなき心也。〔盤〕此の註非なり。三七日又は一月と、精進重ねて、今一日ばかりになりて懈怠するに同じと、つごもりの長雨を評せる也。◎八月のしらかされ 〔春〕白重は四月朔日、更衣の衣なるに、八月にはつきなきと也。◎乳あえず 〔盤〕乳汁の出でずなりし乳母は、不用のもの也。あゆといふ詞上に解きたり。

二七 （たゆまるゝもの）

たゆまるゝもの。さうじの日のおこなひ。日とほきいそぎ。寺にひさしくこもりたる。

され、繁昌する所なり。◎うちふるめきたる人 (春)時にあはで、世にふるされたる人也。◎歌よみておこせたる (春)時めかしき所へおこせたる也。◎物の折の扇 (玉)祭物見などに持つべき扇也。◎いひつけたるに (春)あつらへつけたる也 ◎うぶやしなひうまのはなむけ (季)産養。産所の三ヶ夜などに、祝儀のおくり物する事也。源氏物語にあまたあり。うまのはなむけ、馬餞也。旅行の人に物をおくる也。◎祿とらせぬ (講)祿とは多く巻絹(マキギヌ)の類を云ふ。◎くすたま (講)唐代弘賢の古今要覧稿に云、薬玉は其の始漢土より起りて、皇朝にも世事となれり。早くは五綵の糸にて、菖蒲艾などを貫きたるもの也。後には色々の時の花どもして、かざりて作れり。さて五月五日に之をひぢにかくる時は、あしき病をうけず、且壽命を延ぶといふ。されば續命縷の名もあるなるべし。さて内裏には此の薬玉を糸所より奉りて、御帳にかけられ、群臣にも給はる事あり、邪鬼をはらひ、疫をのぞく事にて、民家にも五月五日、婦女子の翫びものに、色色の造り花を糸に付け、紙にて張りなどして弄ぶは、禁中にならひてなす事と見えたり。◎卯槌 (春)細流云、卯杖とおなじ事なり。年中の悪鬼をおふ也。糸所より内裏には奉る也。(講)卯槌卯杖同じ事といふは非なり。卯杖は種々の木を、長さ五尺三寸に切りて、二本或は四本を一束とし、諸衛府また東宮より獻ずる也。委しくは奥に註するを見合せて知るべし。卯槌も、卯杖と同じく、正月上卯の日、精鬼を逐ふ祝ひとして、絲所より奉る物なれば、後世かゝる式作法の廢れしより、二物混同せし也。さて卯槌は禁廷に上るのみならず、初春を祝ひかはさん爲に、人々の家毎に送りあへる事、此の草子の文にて知られたり。卯槌の製は、弘賢翁和漢の書に徴して云ふやう、まづ槌は桃材を以て、長さ三寸ひろさ一寸に削るべし。組は五色を用ひ、長さ五尺ばかりにて、十筋か十五筋垂るべしとて、圖をも出だせり。◎さるべき使ぞと (春)

おほかたわらはなる諸本かたはらなるとあり活字本によりて改む

あるべき春本ありしとあり夏蔭本による

いみじと思ひて、心ありとしりたる人にいひつけたるに、其の日になりて、思はずなる繪などかきてえたる。うぶやしなひ、うまのはなむけなどのつかひに、祿などとらせぬ、はかなきくすだま、卯槌(ウヅチ)などもてありく者などにも、猶かならずとらすべし。思ひがけぬことに得たるをば、いと興ありと思ふべし。これはさるべき使ぞと、心ときめきしてきたるに、ただなるは、まことにすさまじきぞかし。むことりて四五年までうぶやのさわぎせぬところ。おとななる子どもあまた、ようせずは、うまごなどもはひありきぬべき人のおやどちのひるねしたる。おほかたわらはなる子どものこゝちにも、おやのひるねしたるは、よりどころなくすさまじくぞあるべき。ねおきてあぶる湯は、はらだゝしくさへこそおぼゆれ。しはすのつごもりのながあめ。一日ばかりの精進(シヤウジン)の解怠(ケダイ)とやいふべからん　八月(ハツキ)のしらがさね。ちあえず成りぬるめのと。

◎けさう文はいかゞせん　(春)艶書はむかひの人の心なびかずは、返歌せぬも理りなれば、すさまじといはんやうもなしと也。いかゞせんとはせんかたなしとの心也。◎なりなかしう　(金)あはれしるべき雨の夜雪の朝など也。◎さわがしう　(岡)忿劇の意。雅言集覽には物とりこみなるを云とあり。人の出入の騒がしくて繁昌する事、と説けるは非ず。◎ときめかしき　◎時めき榮えたる也。(岡)時を得て、世間よりもてはや

かつきまで　(春)除目の終る曉也　外官の除目は九日より始て議定と江次第にあり。三日おこなはるゝ事なるに、其終りのあかつき迄也　◎さきおふこゑ〳〵　(春)除目は果て、公卿など退出のさま也。さきおふとは、隨身の警蹕して、非常ないましむるこゑ也。◎上達部など出で給ふ　[illegible]除目の式終りて、當事者たる上達部も朝廷な退出する也。◎なるものどもは問ひだにもえとはず　(春)家にあるつかへ人どもは、よからぬ氣色な笑止がりて、いかゞと問もえせざる也。◎なにの前司にこそはと　(春)前司とはさきの國司也。もと受領して、其後他の國なも給はらぬな、前の守といふ其心也。必いらふるとは、下部なとのたはふれて、かやうに任國なえぬ時は必いふなるべし。たとへば今まで紀伊守の任はてゝ、又除目につかさえたれば、河内守に成給ふと答ふべきな、司なもえねば、紀伊の前司にこそはなり給ひたれといふさま也。◎まことにたのみけるものは　[illegible]春抄の傍註には、其の下づかさな賴む者とあれど、濱臣の「父母妻子などないふか。」といへる方よろし。◎さもえ行きはなるまじきは　[illegible]此の家な退去し難き事情の者はと也。◎來年のくに〳〵な　(春)四ケ年の任果て、來年あくべき國々なかぞへたつるさま也。今年こそはあれ。來年は得給はんとたのむ心なり。◎ゆるぎありきたる　[illegible]氣の進まぬまゝに、ゆる〳〵と行動するさま也。

よろしうよみたりとおもふ歌を、人のもとにやりたるに、返しせぬ、けさうぶみはいかゞせん。それだに、をりをかしうなどあるかへりごとせぬは、心おとりす。又さわがしうときめかしきところに、うち古（フル）めきたる人の、おのがつれ〴〵といとまあるまゝに昔おぼえてことなることなき歌よみておこせたる。物のをりのあふぎ。

氣の調伏せらるゝ樣子もなき也。◎ごほう 補護法とは、佛法を守護する義にて、法の爲に使役せらるゝ鬼神をいふ。又天童ともいふは、多く童子の姿をなせば也とぞ。驗者祈念の功力により、この鬼童を呼び來て、病者の代人（之をよりましと云）にうつし付けて、病魔の犯すゆゑよし、物の祟りの謂はれ等を問ひ、其の告ぐる旨に從ひ、更に祈禱して、物の氣を拂ひ、病を癒やすこと、當時の風俗なりけり。なほ大鏡に、叡山にて僧の驗くらべしける所へ、花山院おはしまして、護法つきつる僧を、御屏風のつらに引き付け給ひし事あり。今昔物語十九、小一條左大臣の許に侍る、生良家の男の、大切にし給ふ硯を破りたる事をかける所に、「此の男、護法のつきたる者のやうに振ひて、目もくれ心もさわぎて、目より涙をながして、泣くこと限りなし云々。是れらにて、護法つきたる者のさまを察すべし。◎あつまりてねんじゐたるに 補一門の男女など集まりて諸共に祈念し居たる也 ◎さらにつかずたちぬとて 新更に驗つかずとてよりましを立ちのけといふ也 補驗の見えずして、護法のつかざるをいふ也。此の下、「すゞとりかへして」にて句を切り、「あれと驗なしやとうちいひて」と讀むべし。春抄には、讀法を誤りたり。心をつくべし。あれは吾れ也。吾れと自づから、祈禱の驗なしと云ひつゝ、物に寄り伏しぬとなり。◎ぢもくにつかさえぬ人のいへ 新縣召の除目に、望むところの受領せぬ事也。補つかさは國司の官職をいふ。◎ことしはかならずと聞て 新これより彼受領せぬ人の家の冷じき事をいふ也。此正月の除目には、必任國し給はんと聞傳へて、其家人など下づかさを望むものどもの來て、追從するさまなるべし。◎はやうありし者 補前に此の家に仕はれてありし者の、今は外に在り、又は田舍に住む者也。◎物まうでするともにも 新彼任國し給ふべき人の、物詣にも供して、家人どもの下つかさ望むものの、つゐしようしありく也。◎はつるあ

どもは問ひだにもえとはず。外より來たるものどもなどぞ、「殿は何にかならせ給へる」など問ふ。いらへ（從下問の答也）には「なにのせんじにこそは」などぞかならずいらふる。まことにたのみけるものは、いみじうなげかしと思ひたり。つとめてになりて、ひまなくをりつるものも、やう〳〵ひとりふたりづつすべり出でぬ。ふるき者の、さもえゆきはなるまじきは、來年(ライネン)のくに〴〵を、手ををりてかぞへなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしうすさまじげなり。

◎げんざ 補驗者。祈禱修法をなする僧。前に註す。◎もの、け 補魔鬼または人の生死の靈などの、病人につきて、之を惱ますこと。（前註）◎調ず 春調伏するなり。補上にも註せしが、もと身口意を調和し、諸惡行を制伏滅除する由の語にして、眞言の修法には、專ら怨敵を制伏する義にいふとぞ。◎とこ 補獨鈷とかく。驗者の持する具にて、銅また鐵にて兩端を劍の形に造りしもの也。其の一尖なるを獨鈷、三頭なるを三鈷、五股なるを五鈷といふ。總じて之を金剛杵と稱す。元天竺の武器を象りて造りし物、修法に之を持して、降魔の具となすなり。◎せめごゑ 補春抄にせみごゑイニせめごゑとありて、註に蟬のやうなる聲と註せしは笑ふべし。又責め聲、迫め聲と說けるも然らず。夏陰翁云、異本せめごゑとある方よろし。後撰集秋下、よみ人しらず「風の音の限りと秋やせめつらむ吹き來る毎にこゑのわびしき」拾遺集物名ひぐらし躬恒「松の音は秋の調に聞ゆなり高くせめあげて風ぞひくらし」などいふ如く、聲をせめるといふは、高く強くすることにて、常に調子の上にいふ事なりと、此の說いと珍らし。◎さりげもなく 補物の

◎かへしおこせたる　(春)乳母の、今夜はえかへるまじきとて、迎への使などにかへしたること也。◎とくこ　(春)早く來れと乳母を呼びにやりし也。◎女などむかふるなとこ　(春)乳母をよぶに、こぬさへあるに、ましておもふ女をよびにやりてこずは、男の心いかならんと也。◎むねすこしつぶれて　(春)まつ人の來たりつるかと思ふに、心ときめきする心也　◎あらぬよしなき者　(春)其人ならぬ也。

けんざ(験者)のもの丶け調ずとて、いみじうしたりがほに、とこやずゞなどもたせて、せめごゑにしぼり出だしよみゐたれど、いさゝかさりげもなく、ごほう(護法)もつかねば、あつまりてねんじゐたる男も女も、あやしと思ふに、時のかはるまで讀みこうじ(困)て、「さらにつかずたちね」(験者の詞也)とて、ずゞとりかへして、あれと「げんなしや」とうちいひて、額(ヒタヒ)よりかみざまに頭(カシラ)さぐりあげて、あくびをおのれうちしてよりふしぬる。除目につかさえぬ人の家、ことしはかならずときゝて、はやうありしものどもの、ほかほかなりつる、かたゐなかに住むものどもなど、皆集まりきて、出で入る車のながえもひまなく見え、物まうでする供(トモ)にも、われも〳〵と參りつかふまつり、物くひ酒のみのゝしりあへるに、はつるあかつきまで、門(カド)たゝくおともせず。あやしなど耳たてゝきけば、さきおふ聲々(コヱゴヱ)して、上達部(カンダチメ)などみな出で給ふ。ものきゝに宵よりさむがりわなゝきをりつるげすをのこなど、いとものうげにあゆみくるを、をるもの

なからむとなり。◎京のなもさこそは 〔春〕京よりの文にも、物なくは冷じかるべけれどもと也。◎ゆかしき事なも 〔春〕京のたより戀しき故也。〔湖〕地方に在る人には、京よりの狀に、さまざまの事どもかき集めありて、世上の事態、彼れ是れ皆聞き知らるれば、之な珍しとして、別に物添はでもよろしと也。◎ありつる文 〔春〕此方よりやりし文なり 〔湖〕前の文といふに同じ。◎むすびたるもたて文も 〔湖〕むすびたるとは、結文ないふ。重ねたる紙に文なかき、巻きたるまゝにて、木の枝にむすび付けもし、又たゞ結びたるまゝにておきたるもあり。竪文は、重ねたる紙の巻きたるに、上包(ウハツヽミ)なゝし、其の包みし紙の、上下の餘りな措りて、別に紙捻して結びて、木の枝などにゆひ付くる也。◎上にひきたりつる墨 〔春〕封じ目也。◎おはしまさゞりけり 〔春〕彼やりつるかたの人の、留守なりと使のいふ也。◎物忌とてとりいれず 〔春〕物忌にこもりつゝしみ給ふとて、文なとりいれぬといふ也 ◎さなゝりと 〔春〕さなんなりとよむべし。しかたりといふ心也 むかへにやりし人の、きたりしよとおもひたる心也。◎車やどりに引き入れ 〔春〕迎へにやりし車なとりおく也。〔湖〕常に車な入れおく所な車宿(クルマヤドリ)といふ。◯轅 〔湖〕長柄の義。牛に添ふ車前の木。ほうは俗語ポンといふに同じ。◎うしのかぎりひき出て 〔湖〕車より人は出でこで、牛ばかり引出でていぬるがすさましき也。◯家ゆすりて 〔春〕一家うちうどきての心也。◎こずなりぬる 〔春〕むかしには、女のもとへ聟のかよひしこと也。ゆゑにかくいふ也。◎さるべき人の宮づかへするがりやりて 〔春〕彼聟の、我が方へはかよはで、然るべき宮仕へ人などかたらひつきて、いつかは又こなたへは思ひかへらんと、おもふも本意なく冷じと也。◎あからさま 〔湖〕此の詞二つの義あり。明白なることにいふは、明様(アキラサマ)の意也。今一つは、かりそめの意一時の事にいふ。こゝはかりそめの方なり。〔春〕暫のほど他行せんとて出て行きし也。

太白神遊行圖解



五日 十五日 廿五日
(西)
六日 十六日 廿六日
(西北)
七日 十七日 廿七日
(北)
八日 十八日 廿八日
(東北)
一日 十一日 廿一日
(東)
二日 十二日 廿二日
(東南)
三日 十三日 廿三日
(南)
四日 十四日 廿四日
(西南)
十日 廿日 卅日
(天上ニ在リ)

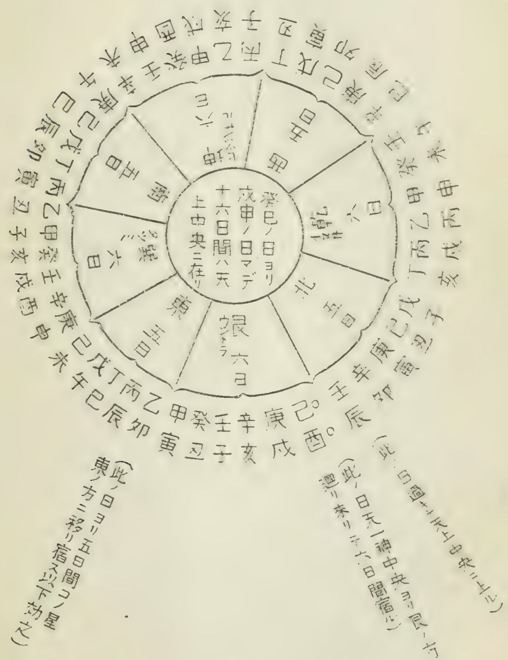
至り、北の方を去りて、癸巳の日には又天上に上り、戊申の日まで十六日間中央にあり。此の間は何人も塞りとなる事なきなり。今解し易からむため、右に圖を揭出せり。

又太白星の事に就いては、和名抄に太白神、和名比止比米久利(ヒトヒメグリ)とあり。金神といふも、大將軍星といふも共に太白神の異名なり、箋註引く所の宿曜經に據れば、此の神星、每月一日十一日廿一日は東方に在り。二日十二日廿二日は東南に、三日十三日廿三日は南方に、四日十四日廿四日は南西に、五日十五日廿五日は正西の方に、六日十六日廿六日は西北に、七日十七日廿七日は北方に、八日十八日廿八日は北東に、九日十九日廿九日は中央に、十日廿日卅日は上天に在り。と見えて、中央と天上とにある日は、諸人何方へ向ふも障なし。其の他は、例へば一日には東方を塞りとし、二日は東南を塞りとして之を忌む。もし此の日此の方角に向ふべき必要ある者は、豫じめ之を避けて、他に移り居るべきなり。之れをもまた方違へといふ。

此の天一神と太白神との遊行する方を忌むを、方忌といふ。是れ淸和天皇の貞觀三年に、始めて長慶宣明曆といふを採り用ひ給へるが、それよりかゝる禁忌を生じたる由、滋野貞融の方忌解にいへり。前例にならひ、左に太白神遊行の圖を示すを見て心得べし。

◎あるじ　(補)主人設(アルジマウケ)の略、饗のこと。方違に行きたるに、珍客として待遇せぬは、すさまじと也。◎せちぶん　(補)節分なり。今は立春の前夜に限るやうに思へど、昔は立夏立秋立冬、皆季節のかはりめをいへり　◎人の國よりおこせたる文の物なき　(補)人の國は他國といふに同じ。京都の外すべてをいふ。(抄)田舍には、何のをかしき事も少きものなれば、せめて土產のしるしなりともなくは、思ひ入もあさく、何の興

天一神遊行圖



夏のすびつの心ちして人もすさめずすさましの世や。」とよみしを、冬の炭櫃ならば猶冷じからんと、童女の難じたる事あるも、此双紙の心歟。◎はかせのうちつゞき云々　〔補〕古代大學寮に、明經、紀傳（後文章）明法、算の四道ありて、おの〳〵博士と稱する教官數人あり、其の男子に成業すれば、父の官を襲ふものありき。然るに女子のみ生みては、其の事かなはねば不用ぞとなり。◎かたゝがへ　〔考〕方違とは、いづくにても、ゆかんと思ふ方の、金神などにあたり、又は臨時に天一神太白神などのふたがれば、其の方へはゆかで、先づことかたへ行きて、其の方をたがへて、さて其心ざしたる所へゆく事也。

〔補〕右の解にてはいまだ盡さゞる所あれば、初學の人のために、なほ精しく説明すべし。先づ天一神と太白神とは別神にて、金神は太白神と同一なり。倍此の神星の遊行も、亦別々なれば、天一神の事より說かむ。和名抄に、天一神、和名奈加加美（ナカカミ）、天女ノ化神也と見え、其遊行に就いて云はゞ此の神星は、癸巳の日より戊申の日まで、十六日間は天上の中央に在り。此の間は、諸人何處へ行かむも障りなし。次に、戊申の翌日己酉の日よりは、神星艮（ウシトラ）（北東）の方に巡りて、甲寅の日まで、六日間同じ方に宿す。されば此の六日間は、酉、戌、亥、子、丑、寅の歲に生れたる人々、艮の方へ行けば凶災を受くとて、其の方を塞りとす。源氏物語帚木の卷に「今宵なか神内裏（ウチ）よりはふたがりて」といへる是れなり。然るに、此の方へ行くべき必要ある者は、先づ豫じめ他所に移りおきて、正しく艮の方に當るを避くる、之を方を違ふといひ、名詞に方違とは云ふなり。また乙卯の日より己未の日まで、五日の間は、この星正東に遊行するにより、例の卯の歲より辰巳午未歲の生れの人は、此の間東方を塞りとす。之を犯して行く時は、大凶なりといふ。つぎつぎも此の定にして、要するに四方に五日づつ、四維に六日づつ、合せて四十四日遊行して、壬辰の日に

にもかへす〴〵すさまじけれ。

◎すさまじきもの　〔春〕時過てつきなきものをいふ　〔講〕すさまじは、不ㇾ進の義、氣のすゝまぬをいふが元にて、興なきこと、又不用なること、心さびしきことにもなれり。◎ひるほゆる犬　〔春〕犬は夜のまもりをこそ用ふべければ也。◎春のあじろ　〔春〕網代は冬のほど、宇治田上河などに氷魚(ヒヲ)をとる物也。〔講〕鹿持雅澄云、冬の節急流の中に、水上(ミナカミ)を廣く下を狹く、網を引いたる形に、左右に透間なく杙を打ちて、其の下にあじろ簀(ス)とて、床を水に漬るほどに作りて、さてその網形なる杙木の内にせかれて流入る浪の、床の簀子に打ちよすれば、水は漏れて入りたる氷魚のみ殘るを、夜々篝火(カヾリビ)を燃して守り居る者の、居ながらに取るとぞ。されば正しくは網代木と云ふべきを、網代とのみ云ひても、其の物とは聞ゆるなり。内膳式に、山城近江國ノ氷魚ノ網代各一所、其氷魚始ニ九月ニ迄ニ十二月三十日ニ貢ㇾ之とありと云々。」かゝれば春の網代は、もはや不用に屬すれば、すさまじき物になるなり。序に云、抄本には「春の網代」の次に、「しはすの扇」といふ一句あり。又黒川春村云、河海抄卷九、槿に、清少納言枕草子、すさまじきもの。おうなのけさう。しはすの月夜云々。かくみゆれども本文に此文なしと。直按するに、しはすの月夜、おうなのけさうを、すさまじき事とするは、猶古くよりいひならひし諺なるべし。徒然草にも、年のくれはてゝ、すさまじきものにして、見る人もなき月の、さむけく、すめる廿日あまりの空こそ、心細きものなれ。とあるも、あながち此の草子よりとりたりとは見えず。なほ世にいひ古したる諺あればなりけむ。◎三四月の紅梅のきぬ　〔春〕表紅うら紫のきぬ也。十一月より二月まで用る由一禪の御說也　三四月は時過し也　◎うぶや　〔講〕産屋、生兒の爲にしつらへたる室。ちこは乳兒の義　◎火おこさぬ火桶すびつ　〔春〕鴨長明無名抄に「火おこさぬ

どそれは、ゆかしきことをもかきあつめ、世にあることを聞けばよし。人のもとにわざと淸げにかきたててやりつる文の、返事見ん。今はきぬらんかし。あやしくおそきとまつほどに、ありつる文のむすびたるも、たてぶみも、いときたなげにもちなしふくだめて、うへにひきたりつる墨さへ消えたりけるを、「おはしまさゞりけり」とも、もしは「御物忌とてとりいれず」などいひてもてかへりたる、いとわびしくすさまじ。また必ずくべき人のもとに車をやりてまつに、入りくる音すれば、さなンなりと人々出でて見るに、車やどりに引き入れて、轅(ナガエ)ほうどうちおろすを、いかなるぞと問へば、「けふはおはしまさず。わたり給はず」とて、牛のかぎりひき出でていぬる。又家ゆすりてとりたるむこの、こず成りぬるいとすさまじ。さるべき人の宮仕するがりやりて、いつしかと思ふもいとほいなし。ちごのめのとの、ただあからさまとていぬるを、もとむれば、とかく遊ばしなぐさめて、「とくこ」といひやりたるに、「こよひはえまゐるまじ」とてかへしおこせたる、すさまじきのみにもあらず、にくさわりなし。女などむかふるをとこましていかならん。まつ人ある所に、夜すこしふけて、しのびやかに門をたたけば、むねすこしつぶれて、人出だしてとはするに、あらぬよしなき者のなのりしてきたるこそ、すさまじといふ中

「たりけるを」の下春本「おこせたりけり」とあるは衍字なり千本によりて改訂す

御物忌の御の字春本になきを抄本によりて補ふ

などいひてもてかへり春本抄本とも「いひての」三字なし濱臣校本によりて補ふ

女などむかふる男ましていかならむの一句宸筆本になし

抄に云、其の起りを尋ぬれば、昔清見原天皇（天武帝）の吉野の瀧の宮にまし／＼ける時、暮方に琴を彈じて御心をすまさせ給ひけるに、向ひの山の岫より、あやしき雲立ちのぼりけるを御覽じければ、其の雲の下に天女の姿あらはれ、御琴の調べに合せてかなでけるを、帝は見給ひしかども御前に侍ふ人は終に知らざりけり。其の神女袖をひるがへすこと五度に及びければ、之によりて五節とは名つけ侍る也。其の時帝御歌よみ侍り。

をとめ子がをとめさびすもから玉を袂にまきてをとめさびすも

本朝月令といふ書に載せ侍り云々。此れは政事要略にのする古來の傳説なれど、近世大塚嘉樹翁は其の著蒼梧隨筆に、諸書を引いて五節の義を辯じ、左傳昭公元年の條なる遲、速、本、末及び中聲の五節の事とし、遲速本末とは始めゆるやかに後は早めにして、序破急といへる拍子を考へて、中聲を以て降るとて、調子の程能きを計らひて、舞ひ納むるを以て、五節と稱する由を記せり。從ふべし。

二六 （すさまじきもの）

春曙抄本此の段より卷二とす

牛しにたる　イ本に從ふ

すさまじきもの、ひるほゆる犬。春のあじろ。三四月（イ卯月ばかりの）の紅梅のきぬ。ちごのなくなりたるうぶや。火おこさぬ火をけ。すびつ。牛しにたるうしかひ。博士のうちつゞきによし（女子）うませたる。かたゝがへに行きたるにあるじせぬ所。ましてせちぶん（節分）はすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめども、され

ども也　◎なさめ　〔春〕長女、八雲抄に下女也。〔補〕下衆女中の長にて、取締をする者なり。◎みかはやうど〔補〕御側人。前に出つ。厠の掃除する下仕へ女也。◎たびしかはら　〔春〕稱名院御説に、たびしかはらは百姓也云々　〔補〕濱臣云、たびしかはらは、源氏蓬生にも見えし詞にて、古今明解なし。按ふに日本靈異記、上卷序中卷十七條訓釋に、礫々ビイシと見ゆ。卽ち礫の古語、ヒミ相通也。かはらは瓦也。礫瓦の賤しきを、蓬生にたとへいふこと、からふみにも見えたり。元輔集に「みがくらん玉の光をたのむかな數にもあらぬたびしかはらを」とあり。よくかなへり。黑川眞賴云。此説よろし。たびしはつぶいしの約言也。たはつの轉言なり。礫は粒石なり。こゝは數ならぬいやしきものまでとの意也　◎とのばらなどは云々　〔春〕殿原には若隱るゝ事も有れば、さしも見ぬこともあらん。されどそれも、宮仕して侍るほどは、大かたみるにてあらんと也。〔補〕この註もさることながらなほ濱臣の説に、これは清少の男の上を評してかけるなりと、いへるやよき。殿原などは、長女(ヲサメ)御側人やうの下衆女には會はざらめど、それも、禁中にある限りは、賤役の者の目にもかゝらんとなり。◎内侍のすけ　〔春〕典侍也。相當從四位、掌同二尙侍一など令に有。禁秘抄に典侍四人也。此職尤重、公卿侍臣ノ女也など有り。◎まつりの使　〔補〕賀茂祭の日皇后の御使役を命ぜられて、參る事もあるなり。◎すりやうの五せちなどいだす　〔春〕受領は國の守也。十一月中ノ丑日、常寧殿にて帝、五節の舞姫を御覽あるに、受領よりも五節を出す事あるを云ふ也。河海云、五節は常の年は公卿より二人、受領より二人四所也。代始には公卿二人、受領三人五所也。〔補〕代始とは御代の始の大嘗祭、常の年とは新嘗祭をいふにて、豐明ノ節會に出でて、舞ふべき處女を徵さるゝ例なり。其の起原名義等のこと、曾て大典講話と題する拙著の中に詳記したれど、爰に解し易かる文を揭げて示すべし。一條兼良公の代始和

たゞ此の草子の奥、大夫はとある條に「夜は門つよくさせなど、事行ひたる、いみじうおひさきなく、心づきなし」とある春註には、行くさきのたのもしからぬ也とあり。是れらにて、よく聞こえたれど、今一きは適切にいはゞ餘裕なき事、現代語の發展の餘地なき事に當るべくや。◎えせ幸　(補)させる事なく、よくもあらぬ仕合をいふ。こゝにては夫をもつ事になる。◎いぶせくあなづらはしく　(春)なまじひの男などもたる人は、むさらしくあなづらはしきと也。宮仕へする心よりいへる詞也　(補)此の註もさることながら、まづいぶせしといふ詞は、萬葉に欝悒の字を訓みて、おぼつかなき意なる事、契沖阿闍梨のいへるが如し。石川雅望は又、たゞウツトウシキ意なるもありといへり。大かた此の二つの意にて解すべし。中にも此の條は、ウツトウシキ意にてよく聞こゆ。元來この一節は、いぶせくあらむ、あなづらはしくあらむと、思ひやられての意也。なまじひ夫に侍き居らむは、ウツトウシク、窮屈にやと思ひやられて、あなづらはしとなり。思ひやられてにて句を切るべし。下につゞくべからず。◎さしまじらはせ　(春)禁中に交らはせ也　(補)他人に交りて勤仕すること也。◎内侍などにても　(春)掌侍也。令には掌侍四人、掌同二典侍一、相當從五位などあり。(補)内侍のぜうといふべきを略せる也。禁中にて重き女官なり。◎げにそもまたさる事ぞかし　(春)實にこれも尤ぞと也。宮仕人は人にも見られて心にくからぬもあれば、あは〱しく敷事に男の思ふも理ぞと也　(補)あは〱しは淡々しの意にて輕々しきことなり。宮仕人は、多くの人とも交はれば、深窓に育ちたる姫君の如くはえあらず。奥ゆかしからずと、男の思ふもさる事ぞとなり。◎上達部　(春)公卿をいふ也。位は三位巳上、官は宰相巳上をいへり。(補)從三位以上を上階と稱す。上階に達する人々の意。禁中名目抄註に見ゆ。◎女房のずんざ　(春)傍輩の女房のつかふ從者なり。◎その里より　(春)女房の里の人

はしく思ひやられて、猶さりぬべからん人のむすめなどは、さしまじらはせ、世の中のありさまも見せならはさまほしう、内侍(ナイシ)などにても、しばしあらせばやとこそおぼゆれ。みやづかへする人をば、あはあはしうわろきことに思ひ居たる男こそいとにくけれ。げにそもまたさる事ぞかし。かけまくもかしこきおまへをはじめ奉り、上達部(カンダチメ)殿上人四位五位六位、女房はさらにもいはず。見ぬ人はすくなくこそはあらめ。女房のずんざども、そのさとよりくる者ども、をさめ、みかはやうど、たびしかはらといふまで、いつかはそれをはおかくれたりし。とのばらなどはいとさしもあらずやあらん。それもあるかぎりはさぞあらん。うへなどいひてかしづきすゑたるに、心にくからずおぼえん、ことわりなれど、内侍のすけなどいひて、をりをりうちへまゐり、まつりのつかひなどに出でたるも、おもただしからずやはある。さてこもりゐたる人はいとよし。ずりやう(受領)の五せちなどいだすをり、さりともいたうひなび、見しらぬ事、人にとひきゝなどはせじと、こゝろにくきものなり。

◎おひさきなくまめやかに　(春)是より中宮の御前の人々、思ふ事なげなるに付て、人のむすめのなまじひの縁につかんよりは、宮づかへさせまほしき事をいふ也。(園)おひさきなしとは、生ひ先無しの意にて、行く先の短きをいふがもとなり。それより轉じては、春抄に行く末のたのしみもなき心也」と註せしか如し。

ばかりこゝろみて殘りな其まゝにてさしおかんはいかゞと御思しめす也。◎さうなくて、〔春〕左右なくて也。〔補〕とかく定めずはやまじと也　◎ことなもぞ見給ひ合す　〔春〕明日までさしのばし給はゞ、女御の異本なも見合せて、內稽古もあらんと帝のおほしめして也。〔補〕ことは、他また外と、譯すべきか。他の本といふ意。美隆云、奥に猫は上のかぎり黑くて、ことは皆白からむといへる、こゝと同じいひざま也。◎おほとなぶら　〔補〕大殿油の義にて、燈臺の事なるが、これに高燈臺、切燈臺、結（ムスビ）燈臺等の種類あり。此處は三尺の菊燈臺といへるものなるべし。◎うへわたらせ給ひてのち　〔春〕村上帝の女御の御かたへ渡御有てのちに也。◎殿に申たてまつり　〔春〕帝のかやうに試み給ふと、師尹公へ人々申たる也。◎御ずきやう　〔補〕寺々の僧に布施して、經な誦せしむること。◎ねんじ　〔補〕祈念すること也。◎すきぐしく　〔春〕物に深く數寄て熱心なる心也。師尹公の御事な批判の御ことば也。〔補〕數寄とかくはあて字。好の字の意なり。◎うへも聞しめして　〔補〕一條帝中宮の御物語な始終聞き給ひて也。◎いかでさおほくよませ　〔春〕何としてさやうに、古今なことぐくよませ給ひけんと、御氣根な御感の詞也　◎むかしはえせものも　〔春〕中宮の御物かたりな承りし女房の申也。むかしはさやうの女御などにかぎらず、下つかたも、物おぼえなどのかたな數寄たりしと也　◎うへの女房のこなたゆるされたる　〔春〕帝の御方の女房達の、中宮の御前へも出入る人なり。

二五　（宮づかへ）

おひさきなくまめやかに、えせさいはひなど見てゐたらん人は、いぶせくあなづら

こと(春)琴は七絃也。◎御物忌 (春)禁秘抄云、御物忌之時惣不レ出二他殿舍中一、諸事於二殿中一有レ之云々。(補)神祭の前、沐浴齋戒して觸穢を忌む事を始め、夢見あしき時、又は星鬼遊行の方向に當り、犯す時は人身に災禍を來たすとて、之を避けんため、家に籠もり居て齋み愼む儀をもいふ。◎その年其の月 (春)古今の詞書なり ◎かうなりと心得させ給ふ (春)帝の古今を試み給ふと心得給ふ也。◎その方 (補)歌の方 ◎おぼめかしからぬ (補)おぼつかならぬ意の詞。◎ごいししてかずおかせ (春)女御の覺えたまはぬ所々もあらば、其數をとらせんとて、碁石にて數とれと女房達に聞えつけさせ給ふ也。◎御前にさふらひけん人さへこそ (春)中宮の御物かたりをきく〳〵、清少のおもへる心をかける也 (補)この註非なり。猶中宮の御詞なり。◎せめて申させ (補)せめては迫て也。押しつめて問ひ給ふ由也。◎さかしうやがて末までなどは (春)女御の躰也。賢げに一首をみな〳〵申させ給ふ事はなかりしかどとなり。上﨟しきさまをいへり。(補)此の註にても聞ゆれど、なほさかしうは、下の「すべてつゆ違ふ事なかりけり」の句へかゝる副詞なるべくや。◎いかでおぼめかしく (補)何とぞ不確實なるひがごと見つけてをやまんとなり。(春)此をの字は助字也。女御のおろ覺なる所を、見付てなりともおかんと帝のおぼしめす也。◎不用なり (補)帝の御詞。諸本「なりけり」とあるは非なり。千蔭本によりて「けり」を削る。不用とは、それに及ばず、又物の叶はぬことにいふ。◎けうさん (春)境算なり。世にけさんといふ物なり (補)この註も非也。夏蔭云、江次第抄四夾算、長三寸、以レ竹作レ之、以レ絲結レ之、或以二紙捻一結レ之兩說也云々。かくあれば、竹の薄きを折りまげて作り、書の見さしたる所に挾みおきて、今の枝折といふものゝ用をなすなり。夾算の圖は高島千春の著、古圖類聚の中に出でたり。◎みとのごもり (春)帝の御寢なる事也。◎なほ此事さうなくて (春)此古今の事を、上卷

と、おほとなぶら近くまゐりて、夜ふくるまでなんよませ給ひける。されどつひにまけきこえさせ給はずなりにけり。うへ(村上帝)わたらせ給ひてのち、「かゝることなん」と人々殿(師尹)に申したてまつりければ、いみじうおぼしさわぎて、御ずきやうなどあまたせさせ給ひて、そなたにむかひてなん、ねんじ(念)くらさせ給ひけるも、すき〴〵しくあはれなることなり。などかたり出でさせたまふ。うへ(一條院)もきこしめして、めでさせ給ひ、(一條の御詞)いかでさ多くよませ給ひけん。我れは三まき四まきだにもえよみはてじ」とおほせらる。「むかしは、えせものも皆すきをかしうこそありけれ。このごろかやうなることやはきこゆる」など、御前にさぶらふ人々うへ(帝の)の女房の、こなたゆるされたるなどまゐりて、くち〴〵いひいでなどしたるほどは、まことにおもふことなくこそおぼゆれ。

◎村上の御時 (春)六十二代天暦の帝の御事也。延喜帝第十四の皇子、御母は皇后宮穩子、昭宣公の御むすめ也。康保四年五月廿五日にかくれさせ給ひて、六月四日に村上の山陵に葬り奉りしゆゑ村上の帝と申也 ◎せんようでんの女御 (春)宣耀殿女御芳子、榮花物語に委しくしるせり。◎小一條左大臣 (春)師尹公の御事也。貞信公の五男、母は源順子、寛平の御むすめ也。◎まだ姫君に (補)入内以前のことをいふ。◎一には (補)濱臣云一には此はイチニハとよむべし。第一にはの意也。春曙抄ひとつとよめる非也 ◎きんの御

「しひ」春本になし千蔭古本によりて補へり

ことを、いかで人にひきまさらんとおぼせ。さて古今の歌二十卷をみなうかべさせ給はんを、御がくもんにはせさせ給へ」となん聞こえさせ給ひけるときこしめしおかせ給ひて、御物忌なりける日、古今をかくしてもてわたらせ給ひて、例ならず御几帳をひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおぼしけるに、御さうしをひろげさせたまひて、「その年其の月なにのをりその人のよみたる歌はいかに」と問ひきこえさせ給ふに、かうなりと心得させ給ふも、をかしきものゝ、ひがおぼえもし、忘れたるなどもあらば、いみじかるべきことと、わりなくおぼし亂れぬべし。其のかたおぼめかしからぬ人二三人ばかりめしいでて、碁石して數おかせ給はんとて、しひきこえさせ給ひけんほど、いかにめでたくをかしかりけん。御前にさぶらひけん人さへこそうらやましけれ。せめて申させ給ひければ、さかしうやがてするゑまでなどはあらねど、すべてつゆたがふ事なかりけり。いかでなほすこしおぼめかしくひがごと見付てをやまんと、ねたきまでおぼしける、十卷にもなりぬ。さらに不用なりとて御さうしにけうさんさして、みとのごもりぬるもいとめでたしかし。いと久しうありておきさせ給へるに、なほこの事さうなくてやまん、いとわろかるべしとて、下の十卷を、あすにもならば、ことをもぞ見給ひあはするとて、こよひさだめん

るかは。まいて五つ六つなどは、唯おぼえぬよしをぞけいすべけれど、さやはけにくゝおほせ事をはえなくもてなすべきといひ、くちをしがるもをかし 知ると申す人なきをば、やがてよみつゞけさせ給ふを、さてこれは皆知りたる事ぞかし。などかくつたなくはあるぞと、いひなげく中にも、古今あまた書きうつしなどする人はみな覺えぬべき事ぞかし。

◎古今のさうし （春）古今和歌集なり。㊀宰相の君 （春）中宮の官女の上﨟と見えたり。おくに富小路の左大臣の御孫とあり。左衛門佐重輔の女也 ㊁それも覺ゆるかはと （補）古今集廿卷千二百首程の中にて、僅に十首ばかりは、覺えたりといふべきかとなり。㊂さやはけにくゝおほせ事をはえなく （春）中宮の仰らるゝ事を、さやうにけにくゝしらぬなど、何の由もなきやうに、もてなすべき事かはといふ也。（補）けにくゝのけは唯添へたる音也 愛相なくの意。㊃中にも古今あまた （春）あるが中にも古今はよくおぼえぬべき事ぞとの儀也。（補）これは中宮の女房に仰せらるゝ樣に説かれたるいかゞあらむ。常に古今集かき寫す者などは皆覺えてあるべき事ぞと、女房たちの心中に歎き思ふ事なり。此處も「歎く中にも」と、續くべき文法ならずや。

中宮の御物語

村上の御時、せんようでんの女御（ニョウゴ）ときこえけるは、小一條の左大臣殿（師尹）の御むすめにおはしましければ、たれかはしりきこえざらん。まだひめぎみにおはしける時、父おとどのをしへ聞こえさせ給ひけるは、一には御手をならひ給へ。次にはきんの御

つものうらの 〔春〕萬葉の歌也。いつもの浦のとは、いつも〳〵といはん序也。是は戀の歌なるを、たのむはやと書かへて、天子などこしなへに頼み奉る心をのべ給へる也 〔補〕はやは感動の助辭なり。此の歌六帖に出づ。濱臣云この歌萬葉になし。萬四ノ五丁に「川上のいつもの花のいつもいつもきませ我がせこときしけめやも。」と云歌あり。此歌を少し轉じたるにや。夏蔭云このいつもは、嚴藻にて國の出雲にあらず。赤人集「川上のいつものうらのいつも〳〵來ませ吾がせこたえずまつはた。」これは萬葉のを誤まれる也。されど猶古歌に汐のみついつもの浦とつづきしありや。猶可レ尋。◎あせあゆ 〔補〕あゆとは、汗や乳また血などの出づるにいふ詞なり。◎わかからん人は云々 〔春〕清少此時三十歳にも過ぎたるにや。長保三四年の比の事を榮花物語にかきし所に、中宮の御妹淑景舍の御事をいふとて「五せちの所々のありさまなどいひかたるに付きても、清少納言など出合ひて、せう〳〵の若き人などにもまさりて、をかしうほこりかなる云々。此時分にも、若き人にもまさりてとあるは、少し年ねびたる事しられ侍り 〔補〕年ふればなどいふ古歌に、吾が老いたればこそ思ひよりたれ。若年の人は、え思ひつくまじと卑下の意にていへるなり。◎あいなく 〔補〕愛無にて、俗語のイヤニといふにあたる。◎つゝまれ 〔補〕愼むと同意の語にて憚かり恥づる由なり。

古今(コキン)のさうしを御まへに(中宮の御前に也)おかせ給せて、歌どものもと(歌の上句也)をおほせられて、これがすゑ(下句也)はいかにとおほせらるゝに、すべてよるひる心にかゝりておぼゆるもあり。げによくおぼえず、申しいでられぬはいかなる事ぞ。宰相(サイシャウ)の君(キミ)ぞ十(トヲ)ばかり、それもおぼゆ

◎なにはつも何も　〔今〕難波津にさくや此花冬ごもり今は春べと咲くや此花」此歌を古今序に、手習ふ人の始めにもしけるとあれば、童もしれる歌なれば、さやうの事にても何にてもかゝれよと、大納言殿のせめたまふ也。◎上臈二つ三つ　〔春〕上臈の女房達の、先づ書きて清少にも是にかけと催せばと也。◎さいふ〳〵も　〔補〕いかにせん。書き難しなど女房達いひながらもと也。◎としふればよはひは　〔春〕此歌古今の詞書に、染殿の后の御前に、花がめに櫻の花をさゝせ給へるを見てよめるとあり。忠仁公の歌也。御むすめの后の御さかりを悦びて、よみ給へる也。今清少も花瓶の櫻の、中宮の御まへにあるに付て、思ひよせたるにて、君をしと書きかへたる、誠に面白く侍る。前の詞に、中宮の御ありさまに侍ふ人々も思ふことなき心ちするといひ、主上の御事を、目はそらにのみにて、只おはしますを見奉ればなどありしも心をつくべし。〔補〕此の註まぎらはし。愚按、君とは中宮をさしたる也。さるは染殿の后の故事に思ひ準へて、彼れは父君なれば、花をし見ればとよませ給へるを、清少は臣下なれば、君をしとかへて、其の才をあらはしたるなり。さればこの心ばへ云々も、中宮の、清少が頓智才覺のゆかしく知りたく思しめして、かく歌かけと仰せられたる也との義なり。此の下、春本は勿論諸本「仰せらる」と句切りて、別に「ついでに」とかけれど、已れはかれて「仰せらるゝ序に」と、續くべき文勢と思ひゐたるに、慶安版の素本千蔭校の古本にもまさしく「仰せらるるついでに」とあり。仍りて本文を改めたり。◎圓融院の御時云々　〔補〕是れ亦中宮の御物語と見るべし。◎すまひ申す　〔補〕すまふは元爭ふ意より推辭することにもなるなり。◎只いまの關白殿の三位中將　〔春〕中宮の御父中關白道隆の御事なるべし。圓融院の永觀二年正月七日叙從三位右中將如元と公卿補任にあり。一條院の正曆元年に關白し給へば只今の關白殿と中宮の御詞也　◎しほのみつい

例は春本は」の字なし千陸古本によりて補へり。猶又千陸所藏の別本には「例のごとよくかく人々」ともある由なり

る」とおほせらるゝも、すゞろにあせあゆる心ちぞしける。若からん人は、さもえかくまじきことのさまにやとぞおぼゆる。例はいとよくかく人も、あいなく皆つつまれて、かきけがしなどしたるもあり。

◎陪膳つかうまつる人の云々　【補】御食事すみて、陪膳の人御臺盤を撤すべく、役送の人を召すなり。◎ほどもなくわたらせ給ひぬ　【春】主上の御膳すみて、又中宮の御かたへ渡御と也。禁秘抄に、立レ箸之後經二本路一還二本所一とあるさま也。◎御硯のすみすれ　【補】この詞を春抄の傍註には、主上の清少に仰せらるゝ也とあれど非也。此の條の御動作、御詞は、すべて中宮のなり。さるは、清少は中宮づきの女房なれば、むねと宮の御事をかけるに心をつくべし。先づ中宮の墨すれと命あれども、彼方より渡御ある主上の御姿の、うるはしさに、目は空にて云々との意なり。なほつぎ／＼いふを見て心得べし。◎おはしますを云々　【補】御膳すみて元の御局へ、返りおはしますを見奉る由なり。◎ほどとほきめもはなちつべし　【春】君の躰を見ては、前に千年もあらまほしとまもり奉りし、中宮にも目をはなつべしと也。【補】この註も從ひがたし。程遠きとは、清女の居たる座より、やゝ遠き簾外の伊周をさすにて、今まで公を美しと見たる目を離れて、主上の御容儀の、こよなきに移し奉るとの意と黑川眞頼翁のいへるよろし。◎しきし　【補】色紙。鳥の子紙を種々の色に染めたるものを云ふ。されば其の中に、白き色紙もあるなり。◎これに只今云々　【補】これも傍註、主上の御詞とありしを、中宮のと改めたり。さるは次に、これはいかにと伊周公に諮(ハカ)りたる答に、「男は言(コト)加ふべきならず」といはれしも、元來中宮の命にて、女性どちの事なれば、殊に「男は口入すべからず」と答へられたるなり。心を留めて見るべし。◎外にゐ給へる　【春】簾外に居たまふ大納言殿に也

ば、ほどとほきめもはなちつべし。白きしきしおしたゝみて、（中宮の御詞也）これに只今おぼえんふること、ひとつふたつづつかけ」とおほせらるゝに、外にゐ給へるに、「これはいかに」と申せば、（大納言の答也）とくかきてまゐらせ給へ。をのこは言加へさぶらふべきにもあらず」とて、御硯とりおろして「とく／＼おもひめぐらさで、難波津もなにも、ふとおぼえんことを」とせめさせ給ふに、などさはおくせしにか、すべておもてさへ赤みてぞおもひみだるゝや。春のうた、花の心など、さいふ／＼も上﨟二つ三つかきて、これにとあるに、

　としふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物おもひもなし。」といふことを「君をしみれば」とかきなしたるを、（中宮）御らんじて、たゞ此の心ばへどものゆかしかりつるぞ」と仰せらるゝついでに、（是より又中宮御詞也）圓融院の御時、御前にてさうしに歌ひとつかけと、殿上人に仰せられけるを、いみじうかきにくゝ、すまひ申す人々ありけるに、（圓融院の御詞也）さらに手のあしさよさ、歌のをりにあはざらんをもしらじ。」とおほせられければ、わびて皆かきける中に、只今の關白殿の、三位ノ中將と聞こえける時、

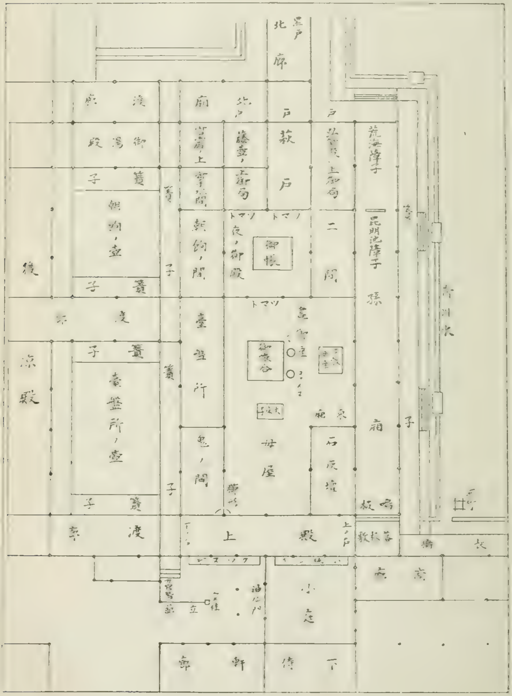
　しほのみついつものうらのいつも／＼君をばふかくおもふはやわが」といふうたのすゑを、「たのむはやわが」とかき給へりけるをなん、いみじくめでさせ給ひけ

之間ニ稱ニ警蹕ニ、其詞於之、とあれば、おしといふが、人を製する警蹕の聲なり。警蹕は、史記梁孝王世家に、出言レ蹕入言レ警、とあり。是れこの本義なり。かゝれば、春本にけはひとあるは非なり。又おしくをおゝくの誤也といふ説も立たず。◎はての御はん 補春抄の傍註に、果の御飯にやとあり。此の註の如く、御膳の盤は第一より第七まで御盤參るに、第七の盤、燒物御汁は最終なれば終の御盤とはいひしなり。委しくは日中行事見るべし。◎おものそうすれば 春藏人の申上る心也。禁秘抄に、藏人奏ニ御膳ニ時、御直衣自ニ帳後ニ着ニ大床子ニと侍る所のさまなるべし。補侍中群要に「供ヘ訖テ取ニ最後御盤ニ之人、奏ニ事由ニ、其詞云、於毛乃末以多利、又説云、於毛乃末以奴、云々 ◎なかの戸 補萩の戸にあり。弘徽殿の上ノ御局と、藤壺のとの間にあれば、中の戸といふ。◎廂より云 補中ノ戸より出でまして弘廂をとほり給ひ、日の御座へ入御と見えたり。されば伊周公は簀子にゐたりしが、弘廂より御供に參りし也。弘賢校本「廂より」の詞にて、御道筋能く知られたり。これなくては、伊周公何處を通御の御供したるにか、明らかならぬをや。◎なげし 補長押の約語。宮殿には、室と室との隔てにあり。柱と柱との間の長き横木をいふ。今の鴨柄閾のごとし。この隔に簾や壁代やを掛くるにて、之を界に簀子は必ず一段低くしたり。長押の下、又長押にのぼるなど書きたるがあるも、是れにて察すべし。◎月も日もかはりゆけとも 春新勅撰賀歌「月も日もかはりゆけどもひさにふるみむろの山のとこ宮所」ひさにふるは、久しく經る也。とこ宮所は。とこしなへにかはらぬ心の祝の詞也。

陪膳つかうまつる人の、をのこどもなどめすほどもなく、わたらせ給ひぬ。「御硯の墨すれ」と中宮の仰せらるるに、目はそらにのみにて、たゞおはしますをのみ見たてまつれ

著には唯大路の解に止めたり。㊂うへのこなたに 〔釈〕皆の中宮の御方におはしませばと也。㊀戸口の前なる板敷 〔釈〕中宮の御座ある上ノ御局の北にあたれる細き縁にて、簀子なれど板敷とかける也。㊂さくらの唐衣 〔釈〕表白く裏紫也と一條禪閤の御説也。〔釈〕唐衣は女子の禮服にて、もと背子（ハイシ）といふ唐服を摸したるもの、其の製、身たけと袖幅とはいと短く、腰に至る程なるを、表著（ウハギ）の上に襲ねて着るなり。◎くつろかにぬぎたれつゝ 〔釈〕くつろぎがましき心也。肩のかゝり優なる樣躰なり 〔釈〕此の草子の奥「宮に始めて參りたる」とある條にも、人々唐衣ぬぎたれたるほど云々と見ゆ。其のかみ女房の上衣きるに、肩のあたりをくつろげ、上衣の襟をうしろに垂るゝ風や行はれたりけん。古き繪卷物などに、さる樣態あまた見ゆ。㊂ふぢやまぶき 〔釈〕みな春の裝束也。藤はおもて紫うら薄紫也。山吹の衣は、おもて朽葉、うら黃なり。かさねにもありと一禪御説也。㊂こはじとみのみすよりおし出たる 〔釈〕女房の袖口、あまた小半蔀あるみすの下より出でし也 〔釈〕當時のならひ、女房たち、事とある時は、簾の際に並み居て、衣の袖口を簾の下よりあらはす樣にせしなり。又半蔀といふは、鴨柄より下長押まで、一枚なるべき蔀を、半より切りて、上の方をつり上げおくをいふ 其を又小く輕便に物せるを小半蔀とて、清涼殿の北の廂に限りて、あるものなり。㊀ひのおまし 〔釈〕晝の御座なり。〔釈〕清涼殿内にあり。㊂おものまゐり 〔釈〕御膳進也、禁秘抄云、凡御膳大床子御膳、朝夕、近代一度ニ供レ之、朝餉ノ御膳朝夕夜供。皆一度ニ供レ之、此御膳等近代主上不レ着、又曰大床子御膳時々必可レ有ニ着御一、其作法藏人奏ニ御膳一時、御直衣白ニ帳後一着ニ大床子ニ懸ノ膝着レ之、東向、陪膳人警候。此草紙のさまは、只日の御座の方へ、御膳進る音するてい也。主上はいまだ着御し給はぬほどなるべし。㊀けいひつなどおし〳〵といふ 〔釈〕侍中群要役供事の條に、供ニ御膳一人、先取ニ蓋盤ニ入ニ立鬼間御障子

清涼殿略圖



北廊
萩戸
藤壺ノ上御局
弘徽殿ノ上御局
荒海障子
昆明池障子
御湯殿
朝餉ノ壺
朝餉ノ間
夜ノ御殿
御帳
二間
孫廂
後涼殿
臺盤所
臺盤所ノ壺
鬼ノ間
石灰壇
殿上
上戸
小庭
下侍
簀子
渡廊

古寫の異本を複製せられたるを見るにも此の詞あり

ゆるゝ げにぞゝとせもあらまほしげなる御ありさまなるや。

◎北のへだてなる御さうじ 〔釋〕荒海の障子といふ是也。禁秘抄に、清涼殿の事委しく記させ給へるに、北に荒海の障子あり。南の方に、手長足長、北西の障子は宇治の網代墨繪也。二間（フタマ）と上の御局との間に、昆明池の障子を立つ云々、古今著聞にも、萩の戸の前なる布障子を、荒海の障子と名付て手長足長など書たり云々 〔補〕昔障子といふは、多くは今の襖（フスマ）唐紙（カラカミ）のこと。又衝立障子の事をもいへり。此處（コヽ）は襖なり。生（イ）きたるものとは、下の手長足長の像をさす。支那古代の想像說に、長臂國長脚國とてあり、常に水中の魚を捕ふる由、山海經といふ書に記せる趣を畫ける也。○うへの御つぼね 〔釋〕后女房などの、まうのぼり給ふ時、かりそめの休息の所也、禁秘鈔に、藤壺の上ノ御局、弘徽殿の上ノ御局などあり。三光院御說云、中宮のまうのぼらせ給ふ折は、清涼殿の御座のかたはらの一間を上ノ御局に給ふ、定れる事也。〔補〕すべて清涼殿の事ども、委しく拙著禁秘抄講義の中に圖を加へて說きおけり。爰には略解を出して參考に供ふ。◎こうらん 〔補〕勾欄。簀子（スノコ）とて緣側の折れたる所の欄干也。高欄とする說は非也。○青き瓶 〔釋〕青磁の花瓶なり。○大納言殿 〔釋〕伊周公、中關白道隆公の御子、中宮定子の御兄、儀同三司これ也。◎櫻の直衣 〔釋〕表白裏紫也。◎固紋（カタモン）の指貫（サシヌキ） 〔補〕固文とは、織物の紋がらをあらはすに、綾の糸を固くしめて織りたるもの。指貫は公卿常服の袴の一種。指貫の袴といふべきを略せる名なり。其の製、裾（スソ）の端（ハシ）に緒を刺し貫きて、すぼめ括（クヽ）りてはくにより、指貫と稱す、○いだして 〔補〕出袿（イダシウチキ）をしての意。此の條は、白き內衣きて、濃き紫地に、同じ色の紋柄を固く織りたる織物の括（クヽ）り袴はきて、其の上に紅の綾織の出（イダ）し袿（ウチキ）を着て、櫻の直衣を表衣（ウハギ）にせし也。總じて男女服裝に關する種目色品は、裝束圖解に精說しおきたれば、それに讓りて、本

かたもんのの五字春本になし抄本によりて補ふ

けいひつ春本にはけはひとあれど抄本旁註本古本等みなけいひつとあるによりて訂しつ廂よりの三字諸本になし屋代弘賢校本によりて補へり後昭和二年前田侯爵家

たれば、つねにめに見ゆるを、にくみなどしてわらふほどに、こうらんのもとに、青き瓶の大きなるをすゑて、櫻のいみじくおもしろき枝の、五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、こうらんのもとまでこぼれ咲きたるに、ひるつかた大納言(伊周)殿櫻の直衣のすこしなよらかなるに、こき紫のかたもんのさしぬき、しろき御衣(ミソ)ども、うへに、こきあやのいとあざやかなるを、いだしてまゐり給へり。うへのこなたにおはしませば、戸ぐちの前なるほそき板敷にゐ給ひて、ものなど奏し給ふ。みすの内に、女房さくらの唐衣ども、くつろかにぬぎたれつつ、ふぢ山吹などいろ〳〵にこのもしく、あまたこはじとみのみすよりおし出でたるほど、日のおましのかたに、おものまゐる足音たかし。けいひつなどおし〳〵といふ聲きこゆ。うら〳〵とのどかなる日のけしきいとをかしきに、はての御はんもたる藏人まゐりて、おものそうすれば、なかの戸よりわたらせ給ふ。御ともに廂より大納言殿まゐらせ給うて、ありつる花のもとにかへりゐ給へり　宮の御まへの御きちやうおしやりて、なげしのもとに出でさせ給へるなど、たゞなにごともなく、(中宮をほめ申詞也)よろづにめでたきを、さぶらふ人もおもふ事なきこゝちするに、「月も日もかはりゆけどもひさにふるみむろの山の」といふふるごとを、ゆるらかにうちよみ出だしてゐ給へる、いとをかしとおぼ

（拾）勸解由小路の南、烏丸の西一町、道眞公の御所、或は參議是善の家也、當時歡喜光寺と號す、北野祭の日、神氏此所に來て、枇杷を取て神に供す云々　〔春〕この（拾）とあるは拾芥抄の事なり。◎れいぜいゐん〔春〕本は冷然院なりしを、火災によりて然の字を改めて冷泉院といへり、拾芥に大炊御門の南、堀川の西、嵯峨の帝の御宇に、此院累代の後院、弘仁亭云々　◎朱雀院　〔春〕源氏にては、すざくゐんとよめり。（拾）三條の北、朱雀の西四町、四條の北西坊城の東云々。◎とうゐん　〔春〕洞院にや　◎小野宮　〔春〕大炊御門の南、烏丸の西、惟高親王の家、定頼これを傳領す。清愼公も傳二領之一云々。◎こうばい　〔春〕紅梅殿なり（拾）五條坊門の北、町の西、北野御子の御所、或は天神の御所云々　〔春〕紅梅殿は、菅公の幼時讀書藏本の所とぞ。◎あがたのゐど　〔春〕縣井戸（拾）一條の北、東洞院西の角、井戸殿ともいへり云々。後撰集に。橘公平のむすめ、こゝにすみてよめる歌「都人きてもをらなん蛙なくあがたのゐどの山吹の花」◎とう三條〔春〕とうさうでうともよむ。拾芥云、東三條ハ四條院誕生の所、或は重明親王の家云々。二條の南、町の西、南北二町、忠仁公の家、貞信公、大入道殿傳領云々、◎こ六條　〔春〕楊梅の北、烏丸の西、又北院ともいへり。小六條院の御領云々。拾芥にあり。◎こ一條　〔春〕近衛の南、洞院の西、師尹公の家、又は山吹殿ともいへり。清和天皇誕生の所、貞信公家とこれも拾芥抄にあり。

二四（清涼殿）

清涼殿のうしとらのすみの、北のへだてなる御障子には、荒海のかた、いきたる物どもの、おそろしげなる手なが足長をぞかゝれたる。うへのみつぼねの戸おしあけ

みさゝきは。うぐひすのみさゞき。かしはばらのみさゞき。あめのみさゞき。

みさゝき　(春)字彙云。帝王所ㇾ葬曰ニ山陵一。帝の御墓也　◎うくひすのみさゝき　(春)延喜式廿一諸陵寮に、遠陵近陵さま〲侍れど、此名見えず。八雲にも、しるさせ給はず。但仁徳天皇を百舌鳥野の陵に葬れり。此百舌鳥にうくひすの訓もあればにや。(抄)大和に鶯の岡といふ所あり。其邊に垂仁天皇の御陵あり。これをいふにや。◎かしはばら　(春)延喜式治部式云。柏原陵、平安宮御宇桓武天皇、在ニ山城國紀伊郡一。◎あめのみさゞき　(春)是も延喜式に見えず。若しあめのみかどの御陵にや。しからば天智天皇の山科の御廟にや。

二三（いへは）

家は。近衞御門。二條一條もよし。そめ殿の宮。せがゐん。すがはらのゐん。れんせい院。朱雀院。とうゐん。小野宮。こうばい。あがたのゐど。とう三條。小六條。こ一でう。

◎近衞御門　(春)陽明門をいふと拾芥に見えたり。神樂の早歌に。このゑのみかどに巾子おといつとあるも、梁塵愚案抄に陽明門と云々　◎二條一條もよし　(春)二條院は二條の北堀河の東、天暦の母后の御領と拾芥にあり。一條院は、一條の南大宮の東二町、謙徳公の家、又法住寺大臣爲光の家云々。◎そめどのみや　(春)正親町の北。忠仁公の家と拾芥にあり。又染殿の后もおはすゆゑに、そめとのゝみやといふにや。◎せかゐん　(春)清和院なり。正親町の南、京極の西、清和の母后の御在所と拾芥にあり。◎すがはらのゐん　(春)

藏人の事也、○いなふら (春)稻淵大和也、(磐)濱臣云續古今戀二源具氏「としなふる涙かいかにあふことは猶いなふちの瀧まさされとや」狹衣一、なかなかなるいなふちの瀧にさり給ふなるべし。など見えたり。

二十（海 は）

海は。水うみ。よさのうみ。(與謝海丹後也) かはくちのうみ。(未勘但攝津の川口にや) いせのうみ。(伊勢也)

◎水うみ (春)近江の湖水。余吾のうみ。越中の布施のうみ等あり。

二一（わたりは）

しかすかの渡り。みつはしのわたり。(八雲に越中云々) こりすまのわたり。

◎しかすかの渡 (春)志賀須香渡三河也 (磐)源順集に「行かよふ舟ちはあれどしかすかのわたりはあともなくぞありける」又金葉集九家經歌の詞書に「屛風のゑにしかすがの渡り行く人立ちわづらふかたかける所」などあれば畫にもかける程の、名所と見ゆ。更科日記に「三河と尾張との界なる、しかすかの渡、げに立ちわづらひぬべくなかし」とあるは、この歌によれる也。◎こりすまのわたり (春)未勘八雲御抄にも國見えず (磐)濱臣云こりすまの渡は、卽ち須摩の邊なるべし。さらは、上文の木のくれ山の顏にて、こゝに出だすべきに非ず。

二二（みさゝぎは）

とあり。長谷の近所にて、觀音の利叫の事など沙汰する所とみえ侍り。(補)夏蔭云景行紀、豐後風土記、海石榴市あり。大和と異也。◎長谷寺に　(春)河海云、長谷十一面觀音之利生道場也。十一面二丈六尺、文武天皇御宇、德道上人造二立之一、淸道仙人是也。神龜四年、聖武天皇、公家被レ建二立堂一宇一云々。◎たふさのいち　(春)未勘、大和物語に、たふさのむまやあり。同所にや追而可レ勘。(頭)大和物語には、たふさの驛といふ所に、海邊になん有けるとあり。これは三河の小總なり。◎あすかの市　(春)飛鳥市八雲御抄に大和云々。

十九（淵は）

淵は。かしこふち（八雲にも國見えす）。いかなるそこの心を見えて、さる名をつきけんといとをかし。ないりそのふち。たれに、いかなる人のをしへしならん。あをいろの淵こそまたをかしけれ。藏人（クラウト）などの身にしつべくて。いなふち。かくれのふち（八雲にもしれす）。のそきのふち（八雲同前）。玉淵（タマフチ）。

◎いかなるそこの心を　(春)いかに深き心を見えて、賢きといふ名はつきけんと也、(補)見えては見せてといふに同じ。◎ないりその淵　(季)未勘、八雲にも出て國は見えず。爲尹千首「つれなくは身をしづめんとかこつよのそなたの月よないりそのふち」◯あをいろの淵　(春)未勘、八雲同前　◯藏人などの身に云々　(春)六位藏人青色の袍きる心にや。靑色とは麹塵の袍也。是天子の御衣のおろしを、藏人は着すると也。職原抄云。六位職事又聽二禁色一、至二極﨟一者、着二麹塵袍一、申二下御服一之儀也、晴時謂二下﨟一着レ之、云々　職事とは

案ずるに、金葉集に、大嘗會主基方備中彌高山あり。又玉葉集に、寛平四年大嘗會悠紀方近江國彌高山あり。これらの山の峰をいへるにや。

十七（原 は）

原は。たかはら。（竹原大和也）みかのはら。（瓶原山城也）あしたのはら。（朝原大和葛下郡）そのはら。（曾原信濃也）はぎはら。（萩原八雲に紀伊云々）あはづのはら。（粟津原近江也）なしはら。うなゐこがはら。あべのはら。（安倍原津の國也）しのはら。（篠原八雲加賀云々。近江ニモ）

◎この傍註も、すべて春曙抄の說なり。以下皆同じ、◎なしはら（春）大和に奈志原あり。又梨原驛もあり。兩所同國也、◎うなゐこがはら（春）未勘、六帖二山上憶良哥「名にしおへばいづれもかなし朝なくなでておふしゝうなゐこがはら」

十八（市 は）

市は。たつのいち。（辰市大和也）つばいちは、やまとにあまたあるなかに、長谷寺（ハセテラ）にまうづる人の、かならずそこにとゞまりければ、觀音の御緣あるにやと、心ことなるなり。をふさの市。しかまの市。（飾摩播磨也）あすかのいち。

◎つばいち（春）椿市也。長谷に近きは、今たばいちといふ所とぞ。其外の所々可尋之。源氏玉かつらの君、長谷にまうで給ふにも、椿市といふ所に四日といふ巳の時ばかりに、いける心ちもせで、いきつき給へり

へて我名もらすな」あめの帝とは、天智天皇と、古今目錄にあり。清輔袋双紙には聖武天皇可レ然云々、〔抄〕天智天皇の、近江の釆女なして、御床なかされ給ひしな、とこの山によせておはします御歌の心ないふ也。◎いぶき山 〔補〕濱臣云六帖「なほざりにいふきの山のさしも草さしも思はぬ事にやはあらぬ」又此草子の奥にいふ、誠や下野に下るといふ人に、「思ひだにかゝらぬ山のさせも草誰れかいふきのさとはつげしぞ」とあるも、下野の地名によせていへり 又美濃にも同名あり。◎あさくら山 〔春〕筑前に朝倉山あり攝津に朝暗山あり。〔補〕濱臣云六帖に「むかしみし人なぞ我はよそにせし朝くら山の雲ゐはるかに」◎臨時の祭の使 〔春〕石清水の臨時祭、三月中午日也 江次第六曰、臨時祭起二天慶四年四月廿七日一平將門亂逆報賽也。又曰舞人自レ上退到二竹臺東一次右衵、進舞二求子一畢舞人自レ下退、大比禮ノ後、使舞人退出。略此まつりの試樂にも、當日にも舞人まひをはりて、大比禮といふ物をうたひ侍る事あるによりて、おほひれ山といふに、りんじのまつりの使など思ひ出るといふなるべし。◎音羽山 〔春〕山城山科にも清水の上にもあり。ひえのやまにもあり。◎きびのなかやま 〔春〕吉備中山備中也、◎あらし山 〔春〕山城也◎いもせ山 〔春〕妹背山。八雲御抄に紀伊國とあり。

十六（峯 は）

峯は。ゆづるはのみね。あみだのみね。いやたかのみね。

◎ゆづるはのみね 〔春〕攝津の國なり。楪の嵩といふにおなじ。◎あみだのみね 〔春〕山城今の豐國神社の上にあり。公任卿歌「今よりにあみたの峰の月かけな千世の坂までたのむべきかな」◎いやたかのみね 〔春〕

らんとあるを古本によりて改めつ

いとをかしき。いはた山（山城の石田小野と同所にや）。おほひれやま（比叡山摂津の國也）もをかし。臨時の祭の使など思ひ出でらるべし。たむけ山（大和）。みわの山（大和）いとをかし。おとは山（山城）。待ちかね山（攝津也）。玉さか山。耳なし山（大和）。するのまつやま（陸奥也）。かつらぎ山（葛城大和也）。みのゝおやま（美濃御山濃州也）。はゝそやま（出雲）。くらゐ山（飛驒）。きびの中山。あらし山。さらしなやま（更級信濃也）。をばすて山（信濃也）。をしほ山（山城）。あさまやま（淺間信濃也）。かたゝめ山（未勘）。かへるやま（歸山越前也）。いもせやま。

（補）この山はと題にあけたるを始め、次の峯、原等の名は、古歌にもよみて名高く、又清少の心に、一ふしをかしと感じたる限りを、あげつらねたる迹なり。傍に國名また未勘など註せるは春曙のなり。◎このくれ山 （春）萬葉集、古能久禮山。家持卿の歌によめり。但其國はしれず。八雲御抄云。木の晴（ヘレ）山。清輔抄。清少納言云々。是は陸奥也是にや。（補）萬葉に、古能久禮山といふ家持卿の歌見えず。濱臣云、萬葉十一長歌許能久禮能四月之立者（コノクレノウツキノタテバ）、同卷長歌、許能久禮（コノクレ）繁（シゲキ）思乎（オモヒヲ）云々。なほ多きを、皆木暗の意なり。地名にあらず。こゝに山の名として出だせるは、清少の誤りか。◎わすれ山 （春）未ㇾ勘八雲御抄に、わすれず山、陸奥にありこれにや。◎ひはのやま （補）濱臣云ひえのやまの寫し誤り歟、◎かたさり山 （春）八雲にもありて國未ㇾ知 誰に所おきけるにかとは、方去といふ名に付て、人に所をさり退きたるやうなれば、たはふれいへる詞也。◎のちせの山 （春）若狹なる後瀨のやま とうたによめり。（補）濱臣云、萬四「かにかくに人はいふともわかさぢののちせの山の後もあはむ君。◎とこの山 （春）鳥籠山近江也、◎わか名もらすなとみかとの （春）古今集墨滅（スミケシ）歌。あめの帝、あふみのうねめに給へるうた「犬上のとこの山なるいさや川いさとこた

よそに見る
ぞ春木見る

は(春)前日成信のの給ひしたはふれの詞をうけて、此度定讚に其枝扇にもたせ給はぬかといふ也、◎えだあふぎ　(補)傍註の頭書に大ぼれを木の枝ある所にて、要(カナメ)の方にして、法師の紐にかくる也。といひ、二俣なる木の枝に、紙を貼りたる扇の圖を出だしたれど、おしあての臆說にて、私意を以て作りたる圖也。嬉遊笑覧二ノ中に、枝扇とは、木ノ葉ある枝を、扇のやうに、手にもつを云ふにや。扇の一種ありとも聞えず」といへるは、能く昔が意を得たり。古き繪卷に、旅人の馬上にて、木ノ葉つきたる小枝もてる圖を見し事ありき。是れは何の爲ぞといふに、山を行くに、笠の下に飛び來る虫を拂ふ爲なり。上世の事にはあれど、允恭天皇紀に、皇后の未だ家におはせし時、苑中に遊び給ひしを、闘雞(ツケ)ノ國ノ造が通りかゝり、馬上ながら一根の蘭を求む。皇后何の爲ぞと問ひ給へば、山を行き蠛(マクナギ)を撥ふなり」と答へし事あり。是は后に戯れたる詞ながら、虫を撥ふにさる物を持つ事、そのかみよりありき。之を中昔には、枝扇と稱せしなるべし。黒川春村翁、板扇の誤にて、檜扇の事ならむといへるも從ひ難し。又貞丈の抄と傳ふるものに、僧の拜賀に入る物也、檜の木を用ふるは奈良法師の一流也云々などいへる、附會も甚しからずや。

十五（山　は）

山は。おぐらやま(小倉山山城嵯峨也)。みかさ山(大和春日にあり)。このくれ山(詳ならず)。わすれ山(イわすれずの山)。いりたちやま(八雲抄にも國不知)。かせやま(鹿背山山城也)。ひはの山(未勘)。かたさり山こそ、誰れに所おきけるにかとをかしけれ。いつはたやま。のちせの山。かさとり山(笠取山山城也)。ひらのやま(近江也)。とこの山は、「わが名もらすな」とみかどのよませ給ひけんいとをかし。いぶき山(伊吹近江也)。あさくらやま。よそに見るぞ

のえだあふぎにせさせばや」とのたまひしを、山しなでらの別當になりて、よろこび申の日、近衛づかさにて、此の君のいで給へるに、高きけいしをさへはきたれば、ゆゝしくたかし。出でぬるのちに、など其のえだあふぎはもたせ給はぬ」といへば、「ものわすれせず」とわらひ給ふ。

いま内裏の　〔春〕勘物云、今内裏一條院、長保元年六月十四日内裏燒亡、十六日行二幸女院御所一也、同二年十月十一日行二幸新造内裡一、この新造を、いまだいりといふなり　〔纂〕此の註誤れり、燒亡により、一時移りおはしましたる假皇居一條大宮院を、今内裏と申しゝ也。北の陣は縫殿ノ陣ともいひて朔平門にあり。此の門、本内裏には、北にあたる裏御門なり。今この假皇居にては、東向の御門を、裏門とせられて、假に朔平門に擬せらるゝ故に、東門を北の陣といふとことわりたる也。◎いくひろ　〔通〕幾尋。ひろとは元、兩手をひろげて量りたるよりいふ、凡そ六尺。◎權中將　〔春〕勘物云、權中將成信也、◎もとよりうちきり云々　〔補〕定證たけ高き僧なりけんからに、楢の木の高〻たてるを切りて、枝扇に持たせたらむは、恰好なるべしとの戲れなり。◎定證僧都　〔春〕勘物云、長保二年三月十七日以二定證一補二興福寺別當一、◎山しなでら　〔春〕興福寺をいふ。藤原不比等の建立也。元亨釋書に委し。◎よろこび申　〔春〕定證興福寺の別當に補せられて、拜賀の事也。〔纂〕前の奏慶に同じ　〔纂〕奏慶を申す也。春本よろこび申すの日とあるは、申の字を、マウシとよむべきに誤りたるならむ。◎近衛づかさにて云々　〔通〕成信朝臣左近衛中將として、奏慶の式に出仕參列せしならん。◎けいし　〔通〕屐子。足駄。◎出でぬる後　〔通〕定證の退出したる後。◎など其のえだあふぎ

むかひてたてるを。拜しぶたう(舞踏)しさわぐよ。

○よろこびそうする　（春）奏慶とて、昇進などの後、拜賀の事なりと年中行事歌合の註にあり。◎うしろをまかせて　（春）裾をひく事なるべし。日本紀神功皇后紀に、引の字をまかせてと訓じたり。裾は下襲の尻也。（補）日本紀仲哀九年四月條に「引(マカス)二灘河水一」とあり。更科日記に、四月田の苗代水まかせたる」とあるもひく事なり。中古以來裾を、長く引きたる事、その寸法等は裝束圖解に記したれば略す。◎しやく　（春）笏。延喜式四十一云、凡五位以上通二用牙笏白木笏一、釋名云笏ハ忽也君有二敎命及所一レ啓則書二其上一備二忽忘一也、笏、コツノ聲アリ。日本子細アリテシヤクといひ習ふ也云々。（補）子細ありてシヤクといふ謂はれは、忽の音、骨と聞ゆるを忌みてなり。其の說裝束圖解に委しく記せり。和名抄には長さ一尺六寸ひろさ三寸厚さ五分の手板なる由あり。◎御前のかたにむかひてたてるを　（春）愚案此をの字衍文歟。（補）をはよにかよふ助辭なり。◎はいしたぶたうし　（春）拜舞踏。よろこび申す時拜舞する事也。拾芥抄云、再拜置レ笏、立テ左右左、居テ左右左、取レ笏小拜、立テ再拜云々、（補）この左右左とは、左より右へと袖さしのべて、舞ふ如き姿勢をなし、喜び謝する意を表する也。石川雅望云、手の舞足の踏むを忘るゝばかり、忝き由を表したる、唐ざまの儀式なり。

十四（枝扇）

いま內裏のひんがしをば、北の陣(チン)とぞいふ。楢の木のはるかに高きがたてるを、常に見て、「いくひろかあらん」などいふに、權中將(成信)の「もとよりうちきりて、定澄(チヤウシヨウ)僧都(ソウヅ)

九日（コヽヌカ）はあかつきがたより、雨すこしふりて、菊（キク）の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしのかも、もてはやされたる、つとめてはやみにたれど、猶くもりて、やゝもすればふりおちぬべく見えたるもをかし。

◎正月一日三月三日　〔春〕前にも元日上巳の事はいひしかど、こゝは又五節供のありさまをつかねていふ也。〔補〕五日端午の節、七日乞巧奠の儀等、拙著公事根源新釋に委し。今略す。◎こちたくそぼち　〔補〕こちたくは言甚（コトイタ）くの意にて、甚しきをいふ。雅語譯解に、仰山などいへるあたれり。そぼちは濡るゝこと。◎おほひたるわたなども　〔春〕菊のきせ綿也。世諺問答云、一條冬良公御説、菊に綿をきする事、いつの比より始ろとも見え侍らず。只菊をもてあそぶのあまり、寒霜をふせがんとのこゝろざしとおぼえ侍る。〔補〕藤井高尙松の落葉に云、菊のきせ綿は、寒霜をふせがん料にはあらず。花の香を綿にうつして、其のうつしの香をもてはやす爲にはありける、云々、此の説少し足らず。中島廣足橿の下枝に、菊のきせ綿の事、舊説どもは非也。隣女晤言に、菊の香をうつしたる綿を以て、老をのごひすつる祝ひごと也といへるをよしとす。紫式部日記に、九日、菊の綿を、兵衞のおもとのもて來て、いとよう老いのごひすて給へ」とのたまはせ云々とある、よき證なり。

十三　（よろこび奏する）

よろこび奏するこそをかしけれ。うしろをまかせて、しやくとりて、御前のかたに

後に武藤氏の通釋を見れば、これと同じやうに訂し解かれたり

させ給ふなり。◎うへの女房　(補)清涼殿の臺盤所に常侍する女房をいふ。臺盤所の事次にあり。◎今ぞたちうごく　(春)始はよべども聞いれず。次にひれふしてなきしが、今ぞ立動くと也。◎ものてうぜさせばや　(補)濱臣云、食物など調ぜさせてとらせんと也。上文物くはせたれど食はずとある文勢の應なるべし。◎臺盤所　(補)清涼殿内の室名。(春)女房達の禁中のとのゐ侍ふ所也。禁秘抄云、臺盤所三間、北間韓櫃方數ニ黄端疊、東侍子、其南女房簡入レ袋辛櫃朱漆也、このかたより彼忠隆がかくいふと也。◎まことにや侍らん　(春)翁丸がまゐりたるといふはまことにやと也。◎かしこまりかうじゆるされ　(補)濱臣云かしこまりは馬ノ内侍の畏り也　かうじは、翁丸の勘事也。◎人などこそ云々　(補)春曙本には「人々にもいはれてなきなどす」とありて、註に、哀なりし事を人にいはれて、清少のなく由に解かれたる、本文と共に、註も誤れり。余が所藏の慶安二年版行の素本には「人々にいはれてなきなどはすれ」とあり。之を千蔭は古本に按へて、上の方を「人などこそ人にいはれて云々」と訂したり。(末は古本も、素本に同じことなり。)かくありてこそよく聞えたれ。その意は、人間こそ、他人に憐みいはれて、泣きなどはすれ。畜類はいかでかさる事あらん。と思ひたるに、實にも、主上の宣給へる如く、犬だにかゝる心あるものなりけり。との意を含めたるなり。

十二（節日）

正月一日(ムツキツイタチ)、三月三日(ヤヨヒミカ)は、いとうらゝかなる、五月五日(サツキイツカ)はくもりくらしたる、七月七日(フンツキナヌカ)はくもり、夕かたははれたるそらに、月いとあかく、星のすがた見えたる、九月(ナガヅキ)

聞きて｜春本にとあれ｜と活本きゝて｜とあるに従ふ

人など云々春本は誤れり註を見よ

かゝる心ある物なりけり」とわらはせ給ふ。うへの女房たちなども聞きて、參り集りて呼ぶにも、今ぞたちうごく　なほ顔などはれためり。ものてうぜさせばやといへば、「つひにいひあらはしつるなどわらはせ給ふに、たゞたかきゝて、臺盤所(ダイハンドコロ)のかたより、まことにや侍らん。かれ見侍らん」といひたれば、あなゆゝし。さるものなし」といはすれば、さりともつひに見つくるをりも侍らん。さのみもえかくさせ給はじ」といふ　さて後かしこまりかうじゆるされて、もとのやうになりにき。なほあはれがられて、ふるひなき出でたりしほどこそ、よにしらずをかしくあはれなりしか。人などこそ人にいはれてなきなどはすれ。

〔◎〕物くはせたれどくはねは　〔春〕日比はなづきてかくはなかりし犬の、今はおそれて物もくはねば、翁丸にはあらぬと治定せし也。〔◎〕御けづりくしまゐり　〔春〕梳櫛、御ぐしたけづる事なり。中宮の御ぐしを清少のけづり侍る也。◎御かゞみもたせて　〔春〕清少に御鏡をもたせて中宮の御覽する也。◎はしらのもと　〔春〕諸本かくありて、諸家に説なし。もし柱のもとと見れば、此の犬、御殿の上にゐたる樣に聞えて頗るいぶかし。按ふに是はもと、はし(階)とありしを、はしらと寫し誤りたるならずや。階ならば、簀子へ登る階段にて、犬は庭上にゐたるなり。◎何の身にか　〔春〕此度は、何にか生をかへつらんと也。◎よべはかくれしのびて　〔春〕昨夜の事也。きのふ翁丸とよびしには、きゝもいれず物もくはざりしは、先一日棒りてかくれ忍びしよとあはれがる也。◎犬などもかゝる心あるものなりけり　〔春〕はじめはおそれ、今はかなしむさまを、感ぜ

御けづりぐしの下春本にとあれど千蔭校本によりて削る
もたせさせ屋代翁校本による

に補するを頭ノ辨といひ、近衛中將にて辨官なるを、頭ノ中將といふなり。辨官は左右に大中少辨とて、六人を定員とす。委しくは職原抄標註を見よ。◎みかはやうど〔春〕いやしき者也。禁秘抄に御厠人と云々、御厠の掃除などを役とする女なり。㊂かゝるいぬやは云々〔磐〕役おきな丸が外に、かやうの犬はこの比見えずと也。◎右近ぞ見したる〔春〕あとに右近内侍とある同じ人なるべし。〔冊〕内侍は官名なり。天皇附の女官にて翁丸をよく見て知れる人ならむ。元來翁丸は表方に飼養せらるゝ犬にて、御内證の后(キサキガタ)方の女房等は能く知らぬなるべし。

くらうなりて、物くはせたれどくはねば、あらぬものにいひなしてやみぬるつとめて、御けづりぐしまゐり、御手水(テウヅ)などまゐりて、御鏡もたせさせて御らんずればさぶらふに、犬のはしらのもとについゐたるを、「あはれきのふ翁まろをいみじう打ちしかな。しにけんこそ悲しけれ。何の身にか此のたびはなりぬらん。いかにわびしきこゝちしけん」とうちいふほどに、此のねたる犬ふるひわなゝきて、涙をたゞおとしにおとすいとあさまし。さはこれおきな丸にこそありけれ。よべはかくれしのびてあるなりけりとあはれにて、をかしきことかぎりなし。御かゞみをもうちおきて、さはおきなまろといふに、ひれふして(犬ノさま也)いみじくなく。御前(オマヘ)にもうちわらはせ給ふ。人々まゐりあつまりて、右近ノ内侍めして、かくなんとおほせらるれば、わらひのゝしるを、うへ(一條帝)にも聞こしめして、わたらせおはしまして、「あさましう犬なども

貴んでいふ詞也。直云、周禮の註に、命婦ハ有ニ爵命一之義也とあり。おもとな、侍者とかけるは、貴人の御許に侍する程の身分なれば也。大鏡師輔の傳に、打ふしの巫女(ミコ)といふ者の身柄ないふとて与いひがひなき程の者にもあらず。おもと程の際(キハ)にてぞありける」とあるにて知るべし。かゝれば、此の條はおとゞにても、おもとにても聞ゆ。◎めのと (春)御猫のもり役なり。○まさなや (補)正無の義にて、よからずの意。行跡言語の正しからざるにいふ。やは助辭なり。◎おきなまろいづら (補)翁丸、犬に付けたる名なり。いづらとは何處にゐるぞとなり。◎あさがれひのまに (春)年中行事歌合註曰、あさがれひと申は、天子の朝の御膳の名、御膳を供する所にて侍り。朝餉間清涼殿の西にあり。猶禁秘抄に委し。◎藏人たゞたか (春)勘物云、源忠隆長保二年正月廿七日藏人陸奥守從四位下滿忠男、◎うちてうじ (補)美隆云、打調也とある古抄の說よろし。凡て中昔常にいひなれたる音語は、あながち其の字義をのみ深くたゞしては、中々にあたらぬ事多し。其の頃つかひたる例を考へて定むべし云々、直云此の說さることなり。さててうずの意は、源氏若菜の卷に、御覽じゆるしつゝ、戒め調へ給はすとある調の字なり。◎いぬしま (抄)犬と句をきるべし。犬を島へ流せと也。(補)まことに嶋へ流すにはあらじ。唯追放するを、罪名にいひなしゝなるべし。春本の犬島とつゞけよみて、備前に在る島の名、遠嶋せしむる心也といへるはあらず。◎さいなむ (補)叱責する事、苦しめ艱まする事にもいへど、言義知りがたし。罪(サイ)ナム也といふ說は非なり。◎瀧口 (春)藏人の下に侍るもの也。禁秘抄云、着ニ布衣一日暮候レ砌、遠所勅使等公役隨レ仰奉仕云々。(補)瀧口の士(サムラヒ)の略稱、清涼殿前東北の隅に御溝水の落ち合ふ所ありて瀧口と呼べり。此所に警衞を勤むる士をいふ。◎頭辨 (春)誰ともしらず 但奥に行成卿をいへる所有り。(補)頭(トウ)は藏人(クラウト)ノ頭(トウ)の略稱、二員あり。太政官の辨官にて、藏人ノ頭

なる犬のわびしげなるが、わなゝきありければ、「あはれ翁まろか。かゝる犬やはこのごろは見ゆる」などいふに、おきなまろとよべど、耳にも聞きいれず。それぞといひあらずといひ、くちぐち申せば、右近ぞ見しりたる。(中宮の御詞)よべ」とて、しもなるを、まづとみ(頼)のことゝて召せばまゐりたり。これは翁麿かと見せさせ給ふに、似て侍れ(右近詞)ども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ。又おきなまろとよべば、よろこびてまうでくるものを、よべどよりこず。あらぬなめり。それはうちころしてすて侍りぬとこそ申しつれ。さる者どもの二人してうたんには、生きなんやと申せば、心うがらせ(中宮)給ふ。

◎うへにさふらふ御ねこは　〔春〕是より又別の事也。うへとは、六十六代一條院なり。此帝、猫を御寵愛と也。花鳥餘情云、小右記云、長保元年九月十九日、内裏猫産レ子。女院左大臣右大臣有ニ産養事一有ニ衝重椀飯納ニ筥之衣等一、猫乳母馬命婦、時人咲レ之奇怪事也。〔園〕かくあれば此の兒猫を愛し給へる也。又うへとは、帝の御事をいふは元よりにて、御居所をさしてもいへり。此所は上御殿に常居る猫といふ意なり。◎かうぶり給はりて　〔春〕叙爵せし也。五位に叙せらるゝ事也。猫を御寵のあまりなるべし。◎命婦のおとゞ　〔春〕彼叙爵せし猫の名なり。女房の五位に叙したるを、命婦といふ也。おとゞは殿の字也。かしづきたる名也。源氏におばおとゞといへる類なり。イ命婦のおもと、侍者(オモト)とかく。民部のおもとと、空蟬の卷に云々　〔補〕美隆云、源氏などに、童もしは若き女房などの、宿老の女房をさして、おとゞ(御殿)といへること、折々に見ゆ。

うち給ふ「春本給ひとあり古本抄本によりて改む

はしますす。御らんじていみじうおどろかせ給ふ。猫は御ふところにいれさせ給ひて、いぬをのこどもめせば、藏人たゞたか參りたるに、「此のおきなまろうちてうじて、いぬしまにつかはせ。たゞいま」とおほせらるれば、あつまりて騙りさわぐ。馬の命婦もさいなみて、「めのとかへてん。いとうしろめたし」とおほせらるれば、かしこまりて御前にも出でず。犬は騙り出でて、瀧口などしておひつかはしつ。あはれいみじくゆるぎありきつるものを、三月三日に、頭辨、柳のかつらをせさせ、もゝの花かざしにさゝせ、櫻こしにさゝせなどしてありかせ給ひしをり、かゝるめ見んとは、思ひかけけんやとあはれがる。（御膳の折は先の御前に有しと也）おもの〻をりは、かならずむかひさふらふに、さう〴〵しくこそあれ」などいひて、三四日になりぬるひるつかた、犬のいみじくなくこゑのすれば、なにぞの犬の、かく久しくなくにかあらんと聞くに、よろづの犬ども走りさわぎ、とぶらひにゆく。みかはやうどなる者はしりきて、「あないみじ。犬を藏人二人してうち給ふ、死ぬべし。ながさせ給ひけるが、かへりまゐりたりとて、てうじ給ふ」といふ。心うのことや。おきなまろなゝなり。たゞたかさねふさなんうつといへば、制しにやるほどに、からうじてなきやみぬ。死にければ、陣の外にひきすてつといへば、あはれがりなどする夕つかた、いみじげに腫れあさましげ

となり、ときめくは俗にドキ〳〵する事にて、先夜の懸想がましき樣にやと思へば、さすがに心氣の動くをいふ。◎じしていぬれば (磐)辭の字也。辭退の心也。只かくばかりいひて、生昌が歸りたる也。◎さなんと (春)生昌がいひし惟仲のほめし事を、さやうになん語り申しと中宮へ清少の申上る也 ◎おのづからしづかに (春)いつにても、清少の局におりゐたらん折にもきていへかし。御前にあるを、ことごとしくよび出ていふべきほどの事かはとなり ◎おのがこゝちにかしこしと (春)生昌が賢き人と思ふ中納言のほめし事を、清少にかたりきかさば、よろこびやせんとて、生昌のかたりきかするとなり。(通)惟仲中納言は、當時才幹優長の世評ありし事榮花物語に見ゆ。◎御けしきもいとをかし (磐)生昌清少に懸想じて追從すると推量の御氣色なりし成べし。(通)此の註非なり。中宮の生昌を憐み給ひ、其の方人して、よき方にいひなし給ふ御氣色を申したる也。

十一（翁麿）

うへにさぶらふ御(オン)ねこは、かうぶり給はりて、命婦(ミヤウブ)のおとゞ(もとイ)とて、いとをかしければ、かしづかせ給ふが、はしに出でたるを、めのと(ねこのめのと也)のむまの命婦(ミヤウブ)「あなまさなや。いり給へ」とよぶにきかで、日のさしあたりたるに、うちねぶりてゐたるを、おどすとて、「おきなまろ(犬の名也)いづら、命婦のおとゞくへ」といふに、まことかとて、しれものはしりかゝりたれば、おびえまどひて、みすのうちに入りぬ。朝餉(アサガレヒ)の間(マ)にうへはお

之を嘲り笑ひたるなるべし。」和、汗衫の事は、揺著裝束圖解にくはし。◎おまへの物　〔春〕御膳の具の事なり。◎ちゆうせいなしき云々　〔春〕姫宮幼くおはしませば、ちひさき折敷、高土器（タカツキ）可レ然といふ事を語ることなり。〔補〕ちゆうせいは中勢にて、物の形の高さをいふ。十訓抄第三、相撲伊成の譚中に、近代の相撲は、勢だに大きになりぬれば、左右なくほても給へり云々、薩戒記應永卅三年十二月廿五日の條に、慈恩院住持僧（中略）共夜夢ニ共勢高キ大男來など あるにて知るべし。中勢折敷と漢語にていへるを笑へるなり。諸註ちうせいを小さきの訛と解けるは甚（イミ）じきひがごとなり。」折敷は足付の折敷。高坏は御盤などの臺。共に今の膳の類。委しくは調度圖解にいへり。濱臣云、この生昌學生より出でし人なれば、物いひ何となくかどありて、かたくなしきを云ふなるべし。◎さてこそ云々　〔春〕是もちうせい折敷といへるをあざけりて、うはおそひきたるわらはべと、大進が詞を其まゝいひてこたへたる也。まゐるとは仕る心也。彼童女どもゝ陪膳仕りよからんとの心也。〔補〕陪膳といふ註わろし。まゐりよからめとは、食ひよからむの意なり。中勢の折敷ならば、童女も食ひよからむとなり。◎きすぐ　〔春〕生昌は建固に正直なる物をと、いたはりて宮の給ふ也。イニきんかうなるは勤考也。まめやかなる心也。〔補〕きすぐは生直（キスグ）なり。眞（マ）正直なること。きんかうは抄本に勤厚の字をあて、ゐんぎんなる心也とあれど。生直にてよくきこゆ。◎ちゆうげん　〔補〕雅言集覽に中間。つきもない折、半途、どちつかずとあり。物の間合（マアヒ）をいふ也。◎大進ものきこえんとあり　〔春〕清少に物いはんと、生昌の申さるゝと、人のいひつぐ也。◎なでふこと　〔補〕何といふ言（コト）かいひてと也。俗にドンナコトといふに同じ。◎ひと夜の事やいはん　〔春〕生昌の忍びよりし事を猶いはんとにやと思へば也。◎こと事もなし。〔補〕別のこともなし。ゆるりと又御局へ參らんとなり。◎心ときめき　〔補〕心悸動のこ

こと事春本事の字なし千蔭挍本によりて補ふ

まはすれば、わざと出でたれば、ひと夜の門のことを、中納言にかたり侍りしかば、いみじう感じ申されて、いかでさるべからんをりに對面して、申しうけ給はらんとなん申されつる」とて、又こと事もなし。ひと夜の事やいはんと心ときめきしつれど、「いましづかに御局にさふらはん」と辭していぬれば、かへりまゐりたるに、「さてなにごとぞ」との給はすれば、申しつることを、さなんとまねび啓して、わざとせうそこし、よび出づべき事にもあらぬを、おのづからしづかに、局などにあらんにもいへかしとて笑へば、「おのがこゝちに、かしこしと思ふ人のほめたるを、うれしとや思ふとて、つげしらするならん」とのたまはする御けしきも、いとをかし。

◎ひめみやの　〔春〕これもおなじ生昌が事ながら、別の事也。姫宮とは、一品女一ノ宮、一條院皇女、御母中宮定子。のちに修子内親王と申す。◎わらはべの裝束せさす云々　〔頭〕姫宮の侍きの童女の、衣服を作らすべく仰せられしにと也。せさすは爲令にて、爲サスに同じ。◎わらはのあこめのうはおそひ　〔春〕衵は童女の汗衫の下にきる物なれは、かざみをあこめのうはおそひといひしなるべし。汗衫は童女のうへにきる物也。水干のかみのやうなる物也。と弄花抄にあり。こゝにかざみといふべきを、衵の上おそひと云て笑はる也。〔頭〕此の條生昌が汗衫といふ名を知らで、上襲といひたりと思ふは精しからず。新撰字鏡に、「襦」丁丸反、衣ノ上副、宇波於曾比ともあれば、「うはおそひ」といふが正しき稱なり。さるを當時おしなべて汗衫といひ習へるより、たまたま生昌の、正しき名を稱ふるも、聞き耳遠く古めかしとて、却つて

かりし事などこそいひつれ。此障子あけ給へとはいはざりし物など也。◎あけんとならば　(春)障子あくるからはまづ〳〵はひ入れかしと也。◎せうそこなするに　(春)せうそこは消息也。こゝにて案内する事也。案内いひて忍びいらんとするを、誰かは忍びいれ、よかるべしといはんと也。(補)藤井高尙の伊勢物語新釋に云、せうそこなどいふとは、懸想詞などいひかくる也。伊勢物語に昔そこにはありときけど、せうそこをだにいふべくもあらぬ女のあたりをありきて、云々とあるも、想ふ心をいひやる事もなり難き意なり。又源氏玉葛ノ卷、すいたる田舍人ども、心かけせうそこする、いと多かりとあるも、懸想して物いひよらむとするをいふ。すべて消息といふ詞、かゝる意にいへることも多き也。◎さることも聞えざりつるを　(春)日ごろは淸少に心ありとも聞えざりしにと也。

姫宮の御かたのわらはべのさうぞく、せさすべきよし仰せらるゝに、（生昌の詞）わらはのあこめのうはおそひは、何色につかうまつるべき」。と申すを、又わらふもことわりなり。（是も生昌の詞）姫宮のおまへのものは、例のやうにては、にくげにさふらはん。ちゆうせいをしき、（清少の詞）ちゆうせいたかつきにてこそよくさふらはめ」と申すを、さてこそは、うはおそひ著たるわらはべも、まゐりよからめ」といふを、（中宮の御詞）なほ例の人のやうに、かくないひわらひそ。いときすぐなるものを、いとほしげに」とせいし給ふもをかし。』（中宮の詞）ちゆうげんなるをりに、大進ものきこえんとありと、人のつぐるを聞しめして、又なでふことといひてわらはれんとならん」とおほせらるゝもいとをかし。（中宮の清少にの給ふ也）ゆきてきけ」とのた

いきたりける|諸本入りにたりけるとあり今濱臣校正の本に從ふ

きたてゝいぬるのちに、わらふこといみじ。あけんとならばたゞまづ入りねかし。せうそこをするに、よかなりとはたれかはいはんと、げにをかしきに、つとめておまへにまゐりてけいすれば、さること(中宮の御詞)もきこえざりつるを、よべのことにめでて、いきたりけるなめり。あはれ、あれをはしたなくいひけんこそいとほしけれ」と笑はせたまふ。

◎ひがしのたいの西のひさしかけて　(春)東の對にて北面の障子の西の方のひさしかけて、たてまはしたるとの心也。其障子に懸金のなかりしなるべし(補)千蔭眞蔭の校本には古本に從ひて「東の對の西の廂北かけてあるに、北の障子には云々とあり。さらば西廂より北廂へかけて、女房たちの寢たるならむ。凡そ東西の對(タイ)の屋(ヤ)のこと、又室内の大むね几帳の事なども、拙著宮殿調度圖解にいへれば略す。◎それもたづねず　(春)大進が家ながら、猶旅寢なれば、懸金の有りなし尋ね氣をつくべき事なるに、ねふたければそれも尋ねしらで也。◎家におはしましたり　(補)古本抄本とも わが家にとあり。(春)中宮の我家に行啓の折なれば、我家内とおもふにくつろぎて、かやうのわざするかと也。◎わが傍なる云々　(補)このわがは、元、わが家におはしたればのわがてふ二字を落して、後に書き入れし時に、誤りて、入りしなるべし。こゝの文勢、傍といふに、わがと斷るべきにもあらぬを思ふべし。◎かゝる見えぬものゝあめるは　(春)かく見なれぬものゝ來れると、わざとにいへる詞也。◎けそうに　(春)顯證に也。あらはなる心也。◎あらずいへあるじつぼねあるじに　(春)別の儀にあらず。我ら清少にいふべき事ありて來しとなり。(補)濱臣云、さだめはかけろふ日記などに多くあり。皆論定の意也。◎門のことをこそ申つれ　(春)前に子公高門の事をいひし事也。門のせば

北かけてあるにの北とにと春本になし古本にありとて千陰夏陰の補へるに従ふ

わが家わがの二字春本になし古本抄本による（わが）これは衍字ならん

野分ノ巻、夜にまた深からむは、とて起きたまふ」とあるにおなじ　○おちつるは　○生昌が啓しつるは何事ぞと也　○あらず　○別の事も侍らずと也　○おりぬ　○清少の下局へなり。

同じ局にすむわかき人々などして、よろづのこともしらず、ねぶたければ皆ねぬ。東のたい（對）の西のひさし、北かけてあるに、北のさうじ（障子）には、かけがねもなかりけるを、それもたづねず。家ぬしなれば、案内をよくしりてあけてけり。あやしうかればみたるものゝこゑにて、（生昌の詞）さふらはんにはいかゞ一とあまたたびいふこゑに、おどろきて見れば、きちやう（几帳）のうしろにたてたる、燈臺のひかりもあらはなり。さうじを五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。さらにかやうのすきずきしきわざ、ゆめにせぬものの、わが家におはしましたりとて、むげに心にまかするなめりと思ふもいとをかし（わが）かたはらなる人をおこして、（清少の詞）かれ見給へ。かゝる見えぬ者のあめるは」といへば、かしらをもたげて見やりていみじうわらふ。（彼女房の詞）あれはたそ。けそうに」といへば、（生昌が詞）あらず。宗あるじ、つぼねあるじと定（サダ）め申すべきことの侍るなり」。といへば、（清少の詞也）門の事をこそ申しつれ。さうじあけ給へとやはきこえつる」といふ。（生昌が詞）なほ其のこと申し侍らん。そこにさふらはんはいかにいかに」といへば、（清少の詞）いと見ぐるしき事、さらにえおはせじ」とてわらふめれば、（生昌が詞）わかき人々おはしけり」とて、ひ（障子）

さま也。一説御車に有し御硯を大進が取て參らする也。(補)直云、伊勢貞丈の著と傳ふる枕草子抄（此の傳信じがたし著者は多田義俊なるべく貞翁は之を寫しとりて持たりしならむ別に考あり）に、中宮行啓記に宮著二御座一之時、御座左右置二御硯一次置二御調度一云々とある文に據つて、筆墨を具したる硯筥の事と解し、斯く定まりたる儀のあるやうにいへど然らず。此の條は、春抄の前說、硯のふたといへる方よろし。さるは今昔物語廿四の伊勢御息所歌よみ給ふ條に、「唐繪にまきたる硯の筥の蓋に、淸げなる薄樣をしきて、まぜ菓子を入れてさし出したり。」など他にも例ありて、硯筥といひても、果物など盛る容器の、硯筥に似たるよりいふ假稱にて、眞の硯筥にはあらず。且まゐるといふ詞も、食する事に多くいへるを思ふべし。春本まゐらせんとあるを、古本にはまゐらせ給へとあり。◎門のかきり高く　(春)于公といふ人、其すむ里の門やぶれたれば、里人これをつくる時に、于公が云、門を高く大きにたてよ。われ民を治むるに陰德あれば、我子孫に必諸侯ありて、四馬高蓋の車をいれんといへり。其詞たがはで、其子于定國以下、世にさかえし事、前漢書に有て、蒙求にも出たる也。源氏少女の卷に、此門ひろげさせ玉へといへるも此古事也。◎ふるき進士　(春)進士の字は禮記の王制に出たり。國國にて學問よくせし者をすぐり出て天子へあぐれば、及第しこゝろみて、燈燭料を玉はりて、都にめし置くを進士といふ也。士を進むるといふ儀也。さて年久しく螢雪をつみたるをふるき進士といふべし。古は日本にも進士あり。(補)ふるき進士とは、昔の學生といはん程の意。當時は大學の文章道の學生を、進士といへる也。◎此の道に云々　(補)文章道をいふ。當道に入りて學ばざれば、今かくとも辨へ難かりしにとなり。◎其の道も云々　(春)彼道に筵道敷きて女房の便なかりし事を、大學の道にかけて戲れし詞なり。◎さわぎつるは　(補)美隆翁云、このは文字は輕く心得べし。

公御弟隆家卿は故ありて左遷せられ、道長公關白となり、世はさながらに共方ざまに移りて、宮には世を憚り給ひて內裏をも退出し給ひしが、同年十二月脩子內親王生まれ給ひ、翌三年六月に職ノ御曹司には入らせ給ひしなり。かくて帝の寵幸舊(モト)の如くおはせし趣、榮花物語に委しく見えたり。偖又今度の移御は、御懷妊のために御產所としてなるべし。紀略長保元年十一月六日の條に、寅刻中宮御ニ產皇子一敦康親王也とあるにて、さる事とは察せらる。◎陣のゐればいりなんや　〔春〕禁中などのやうに、陣屋の宿直人も居れば、只入りなんと思ひてと也。やは助字也。〔春〕陣屋は后宮東宮などの御所に、警固として衞士の上直し居る所にて、平易にいはゞ、門番所の如きもの也　然るに、陣のゐればとあるにて、守衞の士も居ざりしを察すべし。當日中宮の御方を蔑如せし事小右記見えたり。㊀びらうげの車　〔春〕西宮記云檳榔毛。太上皇以下四位以上通用云々。これ姬宮の御車などにて、淸少納言も乘添ひたるべし。〔春〕檳榔の葉の白きを、細くさきたるにて、車蓋を葺きたる車なり。揣者車輿圖解に委しくいへり。㊀筵道　〔春〕今の疊むしろを長くつなぎたる如きものにて、宮女は、長き袴着て地上を步するに便なられば、之を敷きて道とするより此の名あり。㊀地下　〔春〕昇殿を聽されぬ六位の官人をいふ。◎ありつるやうけいすれば　〔春〕車ながら入て、人にも見えじと思ひしに、件のさまにて、殿上人などにも見られし事を、中宮へ淸少の申上る也。◎されどそれはみなめなれて　〔春〕いづくにても、うちとくまじき事にて侍れど　殿上人などは、かやうの御供の女房などは、常に見馴給へは、さのみ立そひ見給ふべきにも侍らじ。よくつくろひたらんにこそ、かへりて目驚かし見らるゝやうもこそ侍らめ。と淸少のことわり申す詞なり。〔春〕したてゝは、容儀などつくろひたつること。にしは、事を强くいふ助辭なり。◎御硯などさしいる　〔春〕硯のふたに御菓子などまゐらする

|いでの二字|千蔭校本による

こそ侍るなれ。ふるきしんじ（進上）などに侍らずば、うけたまはり知るべくもはべらざりけり。たま〳〵此の道にまかりいりにければ、かうだにわきまへられ侍る」といふ。（清少の詞）いでその御みちもかしこからざめり。えんだうしきたれば、みなおちいりてさわぎつるは」といへば、（大進詞）雨のふり侍れば、げにさも侍らん。よし〳〵またおほせかくべき事もぞ侍る まかりたち侍りなん」とていぬ。（中宮のとはせ給ふ詞）「なにごとぞ。なりまさがいみじうおぢつるは」と問はせ給ふ。（清少の詞）あらず。車のいらざりつることいひ侍りつる」と申しておりぬ。

◎大進なりまさ 〔春〕生昌。耄及愚翁の勘物云、長保元年八月九日自二職曹司一行啓。平生昌才レ時中宮前大進云々。前は但馬守後は正四位下幡磨守経二文章生一贈三位彌材（イヤキ）二男中納言惟仲弟。」中宮大夫中宮亮、大進少進など、后の御かたの事をおこなふ官人なり。◎みや 〔春〕皇后宮定子の御事也。中關白道隆公の御むすめ、一條院の皇后、敦康親王一品宮女二宮などの御母、清少納言の主君なり。◎よつ足 〔講〕東向の表門を、四足門といふ制に改造せしなり。四足とは門扉を付くる柱の前後に、また別に袖柱二本づゝ立てたるをいふ。大臣家以上ならでは建つる事なき由、今鏡や海人藻芥等に見えたり。然るを今大進たる生昌の家に、此の門を新造したる故は、一時たりとも中宮の御所たりしに因りてなり。日本紀略に長保元年八月九日の條に、中宮（定子）自二職ノ御曹司一移二御前但馬守平生昌宅一とあり。是より先長徳元年に、宮の御父道隆公は薨去あり、翌二年には御兄伊周

陣の下諸本屋の字あり衍なれば千蔭本によりて削る

参らせ給へ|春本参らせんとあれど千本に従ひつ

十（大進生昌の家）

大進（ダイシン）なりまさが家に、宮の出でさせ給ふに、ひんがしのかどはよつあし（四足之門也）になして、それより御輿（ミコシ）はいらせたまふ。北の門（カド）より女房のくるまども、陣のゐねば入りなんやとおもひて、かしらつきわろき人も、いたくもつくろはず。寄せておるべきものと思ひあなづりたるに、びらうげの車などは、門ちひさければさはりてえいらねば、例の筵道（エンダウ）しきておるゝに、いとにくゝはらだたしけれどいかゞはせん。殿上人地下（デンジヤウビトヂゲ）なるも陣にたちそひ見るもねたし。「御前にまゐりて、ありつるやう啓（ケイ）すれば、（中宮の御詞）「こゝにても人は見るまじくやは。などかは、さしもうちとけつる」とわらはせたまふ。（清少の詞）「されどそれは皆めなれて侍れば、よくしたてゝ侍らんにしこそ、おどろく人も侍らめ。さてもかばかりなる家に、車入らぬ門やはあらん。見えばわらはん」などいふほどにしも、（大進生昌の詞）「これまゐらせ給へ」とて御硯（スヽリ）などさしいる。（清少詞）「いでいとわろくこそおはしけれ。などてか其の門せばくつくりては住み給ひけるぞ」といへば、わらひて、（生昌詞）「家のほど身のほどにあはせて侍るなり」といらふ。（清少詞）「されど門のかぎりをたかくつくりける人もきこゆるは」といへば、あなおそろしとおどろきて、（大進詞）「それはうこう（于公）がことに

して、佛法に精進修行する事より、轉じては、唯食膳に魚味を用ひざる事にいへる也。◎いぬるを 〔春〕寢るをも安からずそしりいふと也。次の詞に、それをも安からずといへるに、かけて見るべし。〔[illegible]〕いぬるをもとは、夜居の僧とて、終夜起きゐて讀經などする法師の、困(コ)うじて眠りなどすれば、忽ちこれを咎めて、やすからずいふを、いとほしと思へるなるべし。◎驗者 〔抄〕修驗道の行人をさす。〔講〕修驗者を略していふ。役(エン)ノ行者小角を法祖として、大和國金峰山葛城山等の奧に入り、苦行して道を修し、祈禱調伏などを專とする僧。◎しるしある聞え 〔補〕修法の効驗ありとの評あれば、世人の祈禱を依賴するについて暇なく、身に勞の多きなり。◎ときめく 〔春〕時運に遇ひて榮ゆるをいふ。◎みたけ 〔春〕河海抄云御嵩は金峯山也。吉野のかれのみたけなり。◎くまの 〔春〕新宮、本宮、那智を熊野三所と申す。いづれも難所の山路也。◎おそろしきめ 〔春〕法顯三藏の渡天の時、山中にて黑獅子によるあひし類、猶雪山童子の千尺夜叉にあひ給へるたぐひをおもふべし。◎ものゝけ 〔補〕鬼(モノ)の氣(ケ)の意なり。妖鬼また死生の靈の人につきて、祟りをなす事ありと信じたるなり。調じは調伏とて、法力を以て厄祟を制伏すること。降伏といふに同じ。こうずは困(コウ)ずの音便語、疲勞の義。◎いとところせく云々 〔春〕法師は、世人にもてさわがれて所せばく、人のおもはくもさま〴〵に、心づかひせられて、くるしげなるとふくめたる詞也 〔補〕濱臣云、いかに思ふらんと、いと所せしと也。句を上下に返して心得べし。直按するに、是れは春抄の如く、法師の世の人に云々と咎めらるるも所せくて、いかに我身を窮屈に思ふ事ならむとの意なるべし。◎これはむかしの事 〔春〕法師のかたちに恥ちて行ひをつゝしみしも上古の事なり。當世やうはなべて法師の作法みだりなれば、一向に安げ也と末世濁惡のさまをいふ也。

おもはん子を法師になしたらんこそは、いと心ぐるしけれ。さるはいとたのもしきわざを、たゞ木のはしなどのやうに、思ひたらんこそいといとほしけれ。さうじ物のあしきをくひ、いぬるをも、若きはものもゆかしからん、女などのある所をも、などか忌みたるやうにさしのぞかずもあらん、それをもやすからずいふ。まして驗者などのかたはいとくるしげ也。みたけ、熊野、かゝらぬ山なくありくほどに、おそろしきめも見、しるしあるきこえ出できぬれば、こゝかしこに呼ばれ、ときめくにつけて安げもなし。いたくわづらふ人にかゝりて、ものゝけてうずるも、いとくるしければ、こうじてうちねふれば、ねふりなどのみしてと咎むるも、いと所せくいかにおぼゆらむ。これは昔のことなり。いまやうはやすげなり。

◎おもはん子を　補前に法師のことばといへるより思ひつきて、愛し思ふ子を法師になす事のいとほしき由をかける也。◎さるはいとたのもしきわざを　春一子出家すれば、九族天に生ずといへり。誠に菩提に入るは、頼もしきわざを、俗人の破戒無慙の心からは、木の端のやうに思ふと也。補源平盛衰記四十、中將入水事に「諸經を按ずるに一子出家すれば七世の父母皆度す云々。太平記十三藤房遁世事にも、同樣のことあれど本經詳ならず。◎木のはし　抄梵網經云、若佛子信心ニ出家、受ニ佛正戒一（中略）一切衆生、眼不レ欲レ見ニ犯戒之人一、畜生無レ異、木頭無レ異。補夏陸云、是れはもと破戒を惡むよりいふ事なるを假りて、凡人の法を輕しめあなどる、常の事なるにいふ也。◎さうじ物　抄精進蔬菜の食事云々、補元は心身を清淨に

所の尊勝寺供養記に、唄師発レ音定者隨レ音徐行スなどあるにて知るべし。◎なばの女 (磐)抄本に、うばい女とあり。素本傍註本には「おほやうに、たいの姉などの」とあり。いづれも、女といふ文字いかゞと思はるれど、諸本皆かくあれば、此のまゝにさしおきつ。

ことくなる千蔭校本には「同じことなれどもきゝ耳ことなるもの」と有り

八（ことくなるもの）

ことくなるもの。法師のことば、をとこ女のことば、げすの詞には、かならずもじあまりしたり。

◎ことくなる (春)異事なり。其の事のかはりたる也。(磐)別々といふ俗語に同じ。◎法師の詞 (春)俗人の詞とはよろづかはるべし。僧は俗に對しては、必無常の法理を演説せるを禮儀とすべし。(磐)此の註わろし。安蔭云、法師は、常の詞も、俗人にかはりて、きすぐにかどくしきをいふ也。源氏などにも、僧都入道などいふ人の詞は、さまことにいひなせり。法理を演説する事にはあらず。◎げすのことばには必もじあまり (春)是も上臈の詞と、こと事なるべし。徒然草に、古は車もたげよ。火かゝげよ。とこそいひしを、もてあげよ、かきあげよ、といふ口なしと侍るも、いやしきさま似たるにや。(磐)げすは下衆なり。下司下種などの字をあてゝ書くは非なり。文字とは、此の頃專ら詞といふ意に用ひたること、此の草子の所々、又源氏物語なる用例を引いて、先輩の既にいはれたるが如し　詞訛りて韻を長く引くをいふ也。

九（おもはん子を）

非なり 細櫃は、なほ唐櫃の細く小さきものをいへるなり また此の書の奥に、下衆の萩の根を堀りて、細櫃に入れてもて行くといふ事あり。又長明無名抄にも、橘爲仲、奥州より宮城野の萩を、細櫃十二合に入れて、都のつとにもて來し事を書ければ、さる物をも入るゝ事ありと見えたり。◎紙などにけしきばかりつゝみ (春)染絹のぬはざるを、紙にかいつゝめる也。祭の用意に、取よせもてあつかふさま也。◎すそご(春)末濃、上の方を白くして、すそを紫にも紺にも濃くそめたる也。◎村濃 (補)むらむらに所々を紺などにて染めたる也。㊀まきぞめ (補)美隆云、とくゆかしきものゝ條に、卷染、むらご、くゝり物など染めたるとあれば、卷染とくゝり染とは別なるべし。直按ずるにこの説の如し。夫木集六源仲正「ふぢなみのよらはれぬれば紫のまき染きたる松かとぞ見る」糸をしげく卷きおきて、染めたる後に其の糸を解けば、幾筋にもよれて染まる所の出で來る、これを卷染といふ也。くゝり染は、後世の鹿の子しぼり也。㊀けいしくつ (補)和名抄第四に、屐履、久都々計乃阿之太、一云屐子とあり。屐子を音便にけいしと云へるなり。濱臣云、けいしとくつと二物なり。故すげさせ裏をさせといへり。直按ずるに、裏をさせは諸本かくあれと、元「裏をささせ」とありし下のさの字を落したるならん。さらずば上の緒すげさせ。とあるに應ぜず。あしだ(足下の義)には緒すげさせ、履には裏をさゝするなり。㊀さうぞきたてつれば (春)裝束したてたるさま也。(補)裝束の字音語を、國語風にさうぞかん、さうぞきと活かしつるなり ◎いつしか (補)早くといふに同じ。◎ちやうざといふ法師 (春)長者なり。東寺の長者などあり。彼の童女のさうぞくして、物々しく練り歩くさま也。(補)物々しく練り歩く樣といふはよろしけれど、長者の説は非なり。伊呂波字類抄に、定者、諸御願供養時用レ之とあり。定者は法會に行道などする時、香爐を捧げて前行する者なり。群書類聚收むる

させはさゝ。せの脱字かなほ註にいふを見よ
ならなんな本は下の春を脱せり本素本千蔭本によりて補ふ願ふ意なればあるをよしとする

どにけしきばかりつゝみて、ゆきちがひもてありくこそをかしけれ。すそご、むらご、まきぞめなど、つねよりもをかしう見ゆ。』わらはべのかしらばかり洗ひつくろひて、なりはみな萎えほころび、うちみだれかゝりたるもあるが、けいしくつなどに緒(ヲ)すげさせ、裏(ウラ)をさせなどもてさわぎ、いつしか其の日にならなんと、いそぎはしりありくもをかし。あやしうをどりてありくものどもの、さうぞきたてつれば、いみじくぢやうざといふ法師などのやうに、ねりさまよふこそをかしけれ。ほど〳〵につけて、おやをばの女、あねなどのともして、つくろひありくもをかし

〔補〕此の段の始、千蔭濱臣校本には「四月祭の比ぞいみじうをかしき。見奉る上達部殿上人も、うへの衣濃き薄きばかりのけぢめにて、下襲どもおなじ樣にすゞしげにをかし」とありて、まづ更衣(コロモガヘ)の興をいへり。但し古本にはなし。◎祭のころ　〔補〕賀茂祭の事なり。賀茂は天皇の土産神(ウブスナ)として、殊に祭儀を重んじ給へれば、當時京にて祭といへば、賀茂祭の事になるなり。毎年四月中の酉の日に祭儀あり。勅使の行裝など美々しき事、諸書に見えたり。◎たど〳〵しき　〔補〕雅語譯解に、たどるは手取るなり。暗き所をさぐり〳〵行く心なりと見ゆ。おぼつかなき事を、心中に尋ね探る意なり。◎何ごこちかはせん　〔春〕面白きにたへで、せんかたなき心也。◎あをくちばふたあゐ　〔春〕青朽葉は表青丹裏青、二藍は赤花と青花にて染るなり。〔抄〕時の色なる裝束を、祭の晴れに用意するさま也。◎ほそびつ　〔春〕河海抄云、細櫃也、源氏野分ノ卷に、ほそびつめくものに、綿ひきかけてといへるは、ぬり桶なり。〔補〕細櫃といふ註はさもあるべし。塗桶といへるは

海抄に、漢代三月上巳ノ日、百官東流ノ水上ニ禊飲、自レ魏以後用ニ三日ニ不レ用ニ上巳ヲ、鄭國ノ俗ニ桃花ノ水上ニ以ニ上巳ニ祓ニ除不祥ヲとあり、我が國にも此の風俗を傳へて、桃花櫻花を賞しつゝ、遊宴など催すもありしかば、特に此の日を書き出でたるならむ。◎まゆにこもりたる 〔春〕柳のやう〳〵芽ぐめる也 蠶(カヒコ)の繭(マユ)にこもりしになぞらへていふ也。◎櫻のなほし 〔春〕櫻直衣。面白裏赤花云々。直衣につれにはなうしといへり。大かた白きしじらのあやを用ゆ。或は平絹云々、裏は平絹也。染色等桃花蘂葉に委し。〔補〕直衣は禮服朝服にあらざる唯の衣の義。公卿の常服也 ◎出衣 〔春〕直衣の下に重ね着て、裾のつまをわざと出だすより此の名あり。委しくは拙著装束圖解の中に記しおけり。まらうどは稀人の義にて、賓客をいひ、せうとは兄人(セウト)にて、中宮の御兄なり。◎鳥蟲のひたひつき 〔通〕美隆云、鳥虫は蝶の事なるべき由、諸平（加納氏）説ありと。ひたひは額のこと。◎うつくしう 〔補〕愛らしき也。元は慈愛の意。美なるをいふは後世の轉なり。

四月の二字千蔭夏蔭の校本による

七（四月祭のころ）

四月(ウヅキ)祭のころいみじうをかし。木々のこの葉の、まだしげうはなうて、わかやかに青みたるに、霞も霧もへだてぬそらのけしきの、なにとなくそゞろにをかしきに、少し曇りたる夕つかた、よるなど、しのびたるほとゝぎすの、遠うそら耳かとおぼゆるまで、たど〳〵しきを聞きつけたらん、何ごこちかはせん。まつり近くなりて、あをくちば、ふたあゐなどのものどもおし卷きつゝ、ほそびつのふたにいれ、紙な

がりて、若き女房たちなどの、其老人のまねなして笑ふ也。◎心をやりて 補今の詞の、熱心にといふに同じ。氣を入れてすること。◎奏し給へ啓し給へ 補天子へ申すを奏といひ、皇后東宮へ申すを啓といふ也。◎得たるはよし 補新官を得たるはよけれど、得ざる人は氣の毒に感ぜらるとなり。

六（三月三日）

三月三日はうら／＼とのどかに照りたる、桃の花のいまさきはじむる、柳などいとをかしきこそさらなれ。それもまだまゆにこもりたるこそをかしけれ。ひろごりたるはにくし。花もちりたるのちは、うたてぞ見ゆる。「おもしろく咲きたる櫻を、ながくをりて、おほきなる花瓶にさしたるこそをかしけれ。櫻のなほしに、いだしうちきして、まらうどにもあれ。御せうとの君たちにもあれ。そこ近くゐて、ものなどうちいひたるいとをかし。そのわたりに、鳥蟲のひたひつきいとうつくしうて、とびありくいとをかし。

◎三月三日 補此の日朝廷には、節會など行はるゝ事なけれど、萬葉集十九に、大伴家持の館に、宴に設けてよめる歌に、「今日のためと思ひてしめし足びきのをのへの櫻かく開きにけり」とあれば、今日しも花を翫ぶ宴など催す風俗の、古くよりありつと見ゆ。猶當日曲水ノ宴とて行はれし由、人のよくいふ所なれど、それは上古にこそあれ。當時は中絶したりしなり。但し此の頃上巳の祓といふ事民間に行はれぬ。河

はしたなれば、然いふ。心もとなくは、心にかゝりて待たるゝ意の詞なり。◎あながまし〳〵 〔春〕あゝかしまし
と也 〔補〕語意のもとは囂しき事なれども、後に、かしがましきを制する意の詞となりたり。せいすは、手を
打振りて、人の笑ふを制するさま也。又おほどかは、春本の傍註に、大やうに穏なるさま也とあるよろし。
◎いかなる心にか 〔春〕祝儀にてたはぶれに打つ事を、腹たつを、いかなる心ならむと也。◎まが〳〵しく
〔春〕のろひ事の恐ろしき事をいふさま也。〔補〕まがは禍事（マガゴト）のまがにて、人に禍事あれかしの様に、呪ひがまし
くいふ事也。◎やんごとなき 〔補〕止み事なしにて、何事にもあれ。棄ておかれず、等閑にしがたき義より、
格段に尊き意になるなり。鈴木朖の雅語譯解に、モダシガタイとある、あたれり。◎かしこまり 〔春〕畏の字
也。禮義正からぬ心也。禁中のうるはしき所も、けふは此粥の木の事に打亂れて、禮義も疎かなると也。
◎除目のほど 〔春〕縣召の除目也正月十一日より十三日まで三ケ日也。年中行事註云、縣召の除目と申事は、
外官をむねと任ぜらるゝ也 外官とは諸國の司なり。田舎をあがたと申す也。外官の人々を召て任官をさ
づけらるれば、かやうに名づけ侍るにや。〔補〕除目の字は、漢書田蚡傳にあり。師古註に 除二去故官一就二新
官一、新官ノ目録也、と見ゆ。◎まうしぶみ 〔春〕諸國の守にても、介掾目などにても、望み申す訴狀也。〔補〕ま
うしは申請の義。地方官に採用されん事を請ふ願書をいふ。◎四位五位わかやかに心ちよげなるは 〔春〕其
身すでに四位五位に至り、若き人などは何國を望むもたのもしげ也となり。次に老人をいはんとて也。職
原抄云、凡國司者相當五位已下也、然而雖二四位已上一或隨二其望一、應二其選一、古今之例也、◎あない 〔補〕案内。
もと文案の内の事柄をいへるより、轉じて内情事實を告ぐる等のことにいふ。◎おのが身のかしこきよ
しを 〔春〕我身の才あり 勞あるよしをいひて、此度の除目にもれぬやうにとたのむさま也。それをなかし

ば望粥(モチユ)なり。岩崎美隆翁云、春抄の如く餅粥ならば、もちひ粥といふべきを、さにはあらぬにや。散木集に、正月十五日に、赤き粥の見ゆるを、人々奇異なりといふを聞きて、などかゝまざらむ。兼盛が集にもある心地こそすれとて、よめる「初春のもち月にもつかゆなればなべてならはどあかき也けり」とあり。重ねて考ふるに、神宮雑例集、年中行事の條、正月十五日二宮御節供事、外宮先御竈木供也云々。次望粥、相ニ加朝夕御饌ニ供也、とあり。是れにて、もちがゆは愚考の如く、望粥の義なる事いよ／＼明か也云々、この説美隆主の創めていひ出でたること也。◎かゆの木 〔春〕正月に此木にて腰をうては、子を生むまじなひとて、今も童のする事なり。狭衣に、かゆづゑとあるも同じ物なり。狭衣第四云、十五日には、若き人々ここかしこに群れゐつゝ、をかしげなるかゆ杖ひきかくしつゝ、送にうかゞひ、又うたれじと用意したるすまひおもはくどもし、おの／＼をかしう見ゆるを、大將殿は見給て、まろを集りてうて、さらば誰れも子は設けむ。まことにしるしある事ならば、いたうともねんじてあらむなどのたまへば、皆笑ひたるに（下略）〔蓮〕かゆの木は、粥をたきたる木を削りて物する由、和訓栞に見え、松杉柳などにて作る由は、日本歳時記などにも出でたり。又粥杖にて人をうつ事は、辨内侍日記寶治三年正月、建長三年正月の條にも見えたれど、殊なる事なければ引かず。濱臣翁云、粥の木は接骨木(ニハコト)の先を四つにわりて用之と。◎家のごたち 〔春〕後達、これも女房達をいふ也。〔補〕後達とかくは誤なり。御とかくべし。本朝文粹第一、菅公の慰ニ小男女ニといふ詩の自註に、俗謂ニ貴女ニ爲レ御、蓋取ニ夫人女御之儀ニ也、とあるにて知るべし。但し此の時代には、傍輩より重くせらるゝ程の女たちも御達といへり。◎女房 〔補〕宮仕へして房（局、部屋）賜はりたる重き女中の事。◎新しう通ふ聟君〔補〕去年新婚の聟君なり。當時の風俗にては、聟たる人、新婦の家に行き通ふなら

とあり千蔭等古本によりて訂したるによる

おのがどち諸本この一語なし宸筆本による

「こゝなる物とり侍らん」などいひ、よりてはしりうちてにぐれば、あるかぎり笑ふ。をとこ君もにくからずあいぎやうづきてゑみたる、ことにおどろかず。かほすこしあかみてゐたるもをかし。又おのがどちかたみにうちて、をとこなどをさへぞうつめる。いかなる心にかあらん、なきはらだち、うちつる人をのろひ、まがまがしくいふもをかし。内わたり（禁中の事也）など、やんごとなきも、けふはみな亂れてかしこまりなし。』除目（ヂモク）のほどなど、うちわたりはいとをかし。雪ふりこほりなどしたるに、まうしぶみもてありく四位五位、わかやかにこゝちよげなるは、いとたのもしげなり。老いてかしら白きなどが、人にとかくあないいひ、女房のつぼねによりて、おのが身のかしこきよしなど、心をやりて說き聞かするを、わかき人々はまねをし笑へど、いかでかしらん。「よきに奏し給へ。啓し給へ」などいひても得たるはよし。えずなりぬるこそいとあはれなれ。

◎もちがゆ　（釋）延喜式主水式云、正月十五日供御七種粥料、（中宮亦同）米一斗五升粟黍子薭子葟子胡麻子小豆各五升鹽四升云々。又中宮職式にも見えたり。事文類聚、荊楚歲事記、公事根源にもあり　（補）春本の傍註に、「小豆のかゆに、餅を和して」とある、小豆がゆの事は、土佐日記にも、十五日けふあづき粥煮ずと見えたれど、餅を和する故に、もゝ粥といふとやうに註せるは、誤れる說なり。十五日（チモノヒ）に供する粥なれ

女の位階を叙せらるゝ事にて侍る也。と年中行事の註にあり。給二女王祿一とは、女王に祿を給ふ事の由、公事根源にあり。イ本いはひしてとは、荊楚歳時記云。七日爲レ人、八日爲レ穀、其日晴則所レ生之物育云々。正月八日の晴天を祝ひて五穀成就を祈る心にや。補夏蔭翁云いはひは、今日加階任官などしたる女房の許に、人の祝ひごとし、里方へも、内より車走らせなどするなるべしと。又岡西惟中の傍註本には「いもひして」とありて、其の註に公事根源八日御齋會、これは大極殿にて八日より十四日まで七日の間、最勝王經を講ぜられて、朝家を祈り申す也とあり。いもひは齋の字の訓なり。されど此所は御齋會の事をいへるにあらず、誤なり。夏蔭の説從ふべし。

うしろ。に千陸校本による

せいすれど｜春本かくれ

五（もちがゆのせく）

十五日（モチノヒ）はもちがゆのせくまゐる。かゆの木ひきかくして、家のごたち女房などのうかゞふを、うたれじと用意して、つねにうしろ。に心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらん。うちあてたるはいみじう興ありとうち笑ひたるもいとはえばえし。ねたしと思ひたることわりなり。こぞより新しうかよふむこの君などの、うちへ參るほどを、こゝろもとなく、ところにつけてわれはとおもひたる女房ののぞき、奥のかたにたゝずまふを、前にゐたる人は心えて笑ふを、「あなかまあなかま」とまねきせ（制）いすれど、きみ見しらずがほにて、おほどかにてゐたまへり。

よろこびして素本イ本いはひしてとあり

弓もて馬なうち驚かしたるなり。◎立蔀 (補)格子に板な張りたる物、目かくし塀の類なり。拙著宮殿調度圖解に委し。◎とのもりづかさ (春)御殿の掃除さし油などの役するなり。(補)此の註の如く、こゝは女の役人なり。後宮職員令宮人の部、殿司の中に女孀六人とある是れなり。◎女官 (春)にようくわん」とよむべし。にようくわんとよむときは、女御更衣以下おしなべていへり。にようくわんとは、名目抄云、女公人の總名也。藏人命婦などより下つがたの官女也。◎いかばかりなる人 (補)いか程貴き身の、かくも禁中な、われは顔に立ち馴らすにかと、清女の未だ宮仕へせざる程の、感想なかける也。◎こゝのへ (補)天子の居所な云ふ 抄に、玉篇云、天子之門有レ九云々象二天有一二九重一◎うちにて見るは (補)抄に、乘り出でし車の内より見る人の詞なり。とあるはいかゞ也。うちは内裏ないふ 禁門内にて見る所は、廣からねば、女官たちの姿もよく見ゆとなり。春本内にもとあるは非也。◎とねりが顔 (金)馬くるまの舍人の、化粧のところまだらなる様(サマ)なり。きぬは顔の地はだなり(補)抄に、きぬもあらはれとは、裝束も亂れたる也といひ、白きものな、白張なりといへるは非なり。白き物は猶白粉(オシロイ)にて、顔につけて粧ひたるなり。又ある註、この舍人な、女官なりとあるもまた非なり。◎引きいられて (補)清女の自然と車の奥にひき入るやうになりての意。

四（八日）

八日。人々よろこびしてはしりさわぎ、車の音もつねよりはことに聞えてをかし。

◎八日人々よろこび (金)八日には女叙位、給二女王祿一ことなどあり、其よろこびしたる心にや。女叙位は

別勘は随筆「からすかご」に載せおけり就いて見られよ

白馬なりとあれど然らず、最初は青馬なりしが、平安朝時代に入りて、支那より十節記といふ書渡來せしに、其の中に、天に白龍あり地に白馬あり、天の用は龍なり地の用は馬なり、白馬を以て馬の本性とすといふ説あるに據り、青馬を白馬に替へられたる也。因りて白馬節會と書く事に成りぬれども、國語には猶舊稱のまゝに「アヲムマノセチヱ」とは呼べり。さて當時の儀式は、左右近衛の舍人白馬廿一疋を牽ゐて渡る也。委しくは拙著公事根源新釋に記しおけり。馬をムマと訓むべきこと後(木の花はの段)にふべし、◎中の御門 (春)待賢門を中の御門と號す。拾芥にあり。中の御門は大内裏の東の御門にて、白馬の陣へ近き故に、此門より車にのりて、見にいくさま也。(補)宮城門東側陽明郁芳待賢門と並びて、中間にある故に、中ノ御門と云ふ也。◎とじきみ (補)閾とかく門扉のあたる横木、卽ち敷居にて、地幅(デフク)ともいふもの也、◎かしらども一所に (春)青馬見る車に、女房あまたのあひのりてゆくに、門のしきみ引いるゝ所にて、車ゆるぎて皆ころびあひたるさま也。◎さしぐし (講)和名抄に刺櫛とあり、是は釵子(サイシ)ともいひて、簪のこと。女子の正裝に用ひしものなり 髮の垢を梳る櫛とは異なる由、狩谷望之翁もいへり 猶別勘あれど言長ければ略す。◎左衞門の陣 (春)建春門をいへり、大やう衞門府は、宮城の諸門を守る官なり。其中に西の諸門は右衞門守りて、宜秋門これ右衞門の陣也 東の諸門は左衞門守りて、建春門左衞門の陣也、陣とは其官人の居る所をいふなり。(講)白馬の行列は、内裏南殿の大庭を渡り、建春門より宮城の陽明門に出づるなれば、淸女は此の陣外に待ちしならむ。◎殿上人 (春)逍遙院御說。四位五位六位までも、昇殿を聽りたる人を殿上人と申す也。◎舍人 (補)宿衞供奉雜役に使はるゝ士也。トネリは殿入の義にて、貴人の殿門にも出で入り召仕はるゝ者なればなり。但し此所は節會の馬そひの舍人なり。馬ども驚かしてとは、近衞の隨身などの、

此の段、舊本は前のつゞきとすれど、抄本別段としたるに從へり。◎正月一日 〔春〕前に正月三月など云ひ出でて、ひとゝせながらをかしと書きしをうけて、元日まして面白き事をいふ也。こゝはむつきついたちとよむべき也。うらゝうらゝはうらうらゝと同じ。春の長閑なる空の氣色をいふ也。〔頭〕ついたちは、月立の義にて、元は月の上旬のことなれども亦、月の第一日の事にもいへり。◎心ことに 〔補〕別段に。常とちがひ。◎七日の若菜 〔春〕七日の若菜のあつ物に、もろこしより用る事なり。事文類聚云、人日採二七種菜一作レ羹、歲時記。」河海抄云、七種は薺（ナヅナ）、蘩蔞（ハコベラ）、芹（セリ）、菁（アヲナ）、御形（ゴギヤウ）、須々代（スゞシロ）、佛座（ホトケノザ）、世諺問答云、正月は少陽の月也。又七日は少陽の數也。仍て朝廷をはじめとして、私の家にいたるまで、宴會を催す也。それにあつものを食すれば、萬病又邪氣を除く術也といふ本文あり。〔頭〕荊楚歲時記に七日俗以二七種菜一爲レ羹服レ之、則令三人無二萬病一とあり。◎例はさしも 〔頭〕例にさるもの、さしも目近かゝぬ所にと、詞を上下入れかへて心得べし。さる物とは若菜をさす 〔春〕めぢかゝらぬ所とは、目に近く見なれぬ也。若菜の羹などいふもの、見なれぬ宮殿わたりにも翫ぶ心也。◎白馬見むとて 〔春〕あをむまとよむべし。年中行事歌合註、二條大閤御註云、正月七日青馬のせちゑといふ事は、馬は陽のけた物也 青きは春の色也。これによりて。正月七日青馬をみれば、年中の邪氣をさり、年災を除くといふ本文侍るにや。河海抄云、光仁天皇寶龜六年正月七日、天皇御二楊梅院安殿一設二宴於五位以上一、已而内廐寮進二青御馬一、兵部省進二五位已上裝馬一、是青馬始也云々 〔補〕萬葉集卷廿に七日侍レ宴大伴家持「水鳥の鴨の羽色の青馬をけふ見る人は限りなしといふ」とあれば、奈良朝時代既に青馬見る儀は行はれつらむ 又其のかみは青毛の馬なりし事も「鴨の羽色」と歌ひたるにても知られたり。然るに千蔭の萬葉略解に、眞淵翁の說として、「極めて白き物は青色あるものなれば、青馬といへども實に

。。にての二字古本抄本によりて補正す

三　（正月ついたち）

正月一日は、まいて空のけしきうら〳〵とめづらしく、かすみこめたるに、世にありとある人は、すがたかたち心ことにつくろひ、君をも我が身をもいはひなどしたるさま、ことにをかし。七日は、雪まのわかな青やかにつみ出でつゝ、例はさしもさるもの、日近からぬ所にもてさわぎ、白馬みんとて、里人は車きよげにしたてゝ見にゆく。中の御門のとじきみひきいるゝ程、かしらども一ところにまろびあひて、さしぐしもおち、用意せねば折れなどして、笑ふもまたをかし。左衛門の陣などに、殿上人あまた立ちなどして、舎人の弓どもとりて、馬どもおどろかしてわらふを、はつかに見いれたれば、立蔀などの見ゆるに、とのもりづかさ女官などの、ゆきちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をかくたちならすらんなど思ひやらるゝに、うちにて見るはいとせばきほどにて、舎人が顔のきぬもあらはれ、しろきものゝゆきつかぬところは、まことに黒き庭に雪のむらぎえたるこゝちしていと見ぐるし。馬のあがりさわぎたるもおそろしくおぼゆれば、ひきいられてよくも見やられず。

なり其は神の御靈もて田に成して、天皇に寄し奉り給ふ故に云へり。それより穀を一度取り收むるを、一年とは云ふなりとあり。是れより後の學者、皆月の名義を、年卽ち稻に緣ある言として、解かんとせり。されば正月をムツキといふも、睦月また元月（モト月の約語）などいへる舊說を非として、ムツキは萠月の約語、稻の芽の萠え初むる義ならむといふ。二月、キサラギは穎更置の義にて、稻苗を更に置き替ふる故にといふ。又三月をヤヨヒといふは、舊說の如く彌生にて、稻のいよ〳〵生育する義とて、是れには異說なし。四月ウツキは、植ゑ月にて、田植の月の義。五月をサツキといふには諸說あり。やゝ新說と思はるゝは、先づ奧州に大田とかきてオホサと訓み、甲斐に小田とかきてコサと訓む地名あり。古へ、タとサとは相通はしていへる例多ければ、田をサとも稱へしにて、五月雨をサミダレといふも、田に水の足る雨なれば、サミタリ雨といひたるを、轉訛してサミダレとはいふなりけり。田に勞づく少女を、サヲトメといふも田少女なり。さればサツキは田月にて、此の頃、田事にいそがしき月なれば、然いふなりとぞ。

六月、ミナツキは實生月の略。七月、フミツキは穗見の轉。穗の見え初むる月とも、又含月にて稻のやゝふくらみめぐむ義なりと。八月、ハツキは張月、發月の意にて、稻穗のはりふくらめるよりいふとぞ。九月、ナガツキは稻苅月の義とも、又穗の長くなるより長月ともいふ。十月、カミナツキは神嘗として奉る準備をなすなればいふにて、十一月、シモツキは稻の葉も莖も、霜に枯れはつる月となり。十二月、シハスは田の業を爲終る由にて名づくといふ。又田の水を、干淺しむる意かともいふ說あり。當否は姑くおきて、十二ヶ月の名義、近世學者の解說概要右の如し

(註)抄に云、此の段に上の四季の評に次いで、月なみの事をいふ也。上の段は、一年中の大綱をいひ、此の段は、十二月の大略をいふ。次の段は、例月の事をいふ也、段々のつゞき、心を付けて見るべし。○正月とは年の始の月の始にて、公事しげき月なり。貴きいやしき祝ひ月とて、ことぶく折なれば、まづあげたる也。○三月とは　三日の宴、花の最中、此の月なり。○四月とは　夏の始、また衣がへある月なり。○五月とは　あやめの宴、さみだれの郭公、夕やみの螢、いみじき事ども也。○七月とは　秋の初、又は七夕祭、此の月なり。○八月とは　月に名高き時なり。○九月とは　菊の宴、又は月もなほいみじき時なり。則ちことなるものの段にも、正月一日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日の、殊にめでたき品をかきたり。されば此の外の四月、八月、十月、十二月の心をわきまへ知るべし。○十月とは　冬の初にて、霜がれの木々いとつれ〴〵多かるべし。○十二月とは　年のなごり、又公事どもしげきなりなれば、取りわきていみじき月なり。十二ケ月の内、二月、六月、霜月をのぞきしは、初の九つの月には、をさをさ及ぶまじきにや。其の味、心をつくべし。すべてとは、言ひつゞくれば、いづれも捨てがたしと、かたおちぬこゝろ也。(以上)

(註)春本は、月の名を「シヤウグヮチ、ニグヮチ」、とやうに音讀し、抄本は「ムツキ、キサラギ、とやうに、和訓の假名をつけて、標註に月の古名を釋けり。然れども從ひがたき說ども多し。凡そ月の名義には古今の學者さま〴〵の考說あり。其の中に、むつきを睦み月、うづきを卯の花月、みな月を水のなき月などいへる、舊說どもは擧ぐるに足らず。較(ヤヽ)筋立ちて聞ゆる解どもを、言の序なれば、揭げて示すべし。先づ年(トシ)といふ名義よりいはんに、年とは稻のことなりとの說あり。本居翁も、古事記傳(十)に、年は田寄(タヨシ)

◎春はあけぼの　〔補〕此の一句、下につゞけてよむべからず　春の景色は、曙なよしとすの意なれば、こゝにて句を切るへし。下の、夏はよる、秋は夕ぐれっなどあるに比べて思ひ見よ。◎空いたう霞みたるに　〔補〕此の一句、春本抄本等大かたの書になし。唯加藤千蔭・前田夏蔭の二翁、古本によりて補へるに從ふ。さるは次の句、やう〳〵白くなりゆく云々といへるは、先づ空のいたう霞みたるが、次第に白くなりゆきつゝ、日出づる程になりて、山際の赤みたる由にて、此の句のある方、文意明かに聞ゆればなり。◎山ぎは　〔補〕清水濱臣翁の校本には山のはとあり。いづれにても聞ゆ。夕日の、山陰に入らむとして、山の端近くなりたるなり。◎冬はつとめて　〔補〕諸本つとめての一語なし。先輩の校本いづれも皆補へるに從ふ。發端、春は曙といへるより、夏はよる。秋は夕暮。とかき來れる筆法を考ふるに、冬は云々と必ず一句あるべき文勢ならずや。つとめてのつとは夙なり。早朝とこと。◎さらでもいと寒さに　〔春〕霜雪の降る頃ならでも、冬は寒きにとなり。◎ぬるくゆるびもてゆけば　〔春〕別に冬の寒さを愛したる心をことわる詞也。冬も晝は寒さのぬるくゆるみゆけば、埋火なども疎略になりたるは、わろしと也。冬の朝の寒さに、爐火もてあそぶこそ、つき〴〵しけれといはん爲の詞也。〔補〕すびつは炭櫃の略語。圍爐。とり置きの出來るもあり。火桶は胴圓の火鉢。沈木(チンボク)また桐の木を刳りぬきて作れるもの。

二（ころは）

ころは正月。三月。四五月。七月。八九月。十月。十二月。すべて、をりにつけつゝ、ひととせながらをかし。

枕草子集註 上卷

關根正直 著

一（春のあけぼの）

春はあけぼの。空いたう霞みたるに、やう／＼白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月のころはさらなり。やみもなほ螢のとびちがひたる、雨などのふるさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山ぎはいと近くなりたるに、烏（カラス）のねどころへゆくとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁（カリ）などのつらねたるが、いとちひさく見ゆるいとをかし。日いりはてゝ、風のおと蟲のねなどいとあはれなり。冬はつとめて。雪のふりたるはいふべきにもあらず。霜などのいとしろく、又さらでもいとさむきに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火をけの火も、白き灰がちになりぬるにわろし。

目次終

下巻目次

枕草子集註

上巻目次

に擧げられ、秘書郎より節度掌記を經て東川節度判官工部郎中まで到れり。詩賦に於ては當時李温（庭筠のこと）の稱ありき。さて文宗の開成は我が仁明天皇の御世にあたり、一條天皇の御時よりは百五十餘年の前なれば、其の著書も舶來してありつらむ。然れども若し之に暗示を得たりといふならば、猶當世に流行せし白氏文集にも、亦據るべき事なきに非ず。卽ち同集卷五、效二陶潛體一詩十六首幷序の下に、

不レ動者厚地　不レ息者高天　無レ窮者日月　長在者山川　松柏與二龜鶴一　其壽皆千年

とある如き、何々なるものといふに頗る類似したらずや。そはともかくも、石原正明年々隨筆に、この草子と雜纂とに就いて言へることあり。曰く、

隨筆の中に、古今からやまとにわたりてめでたきは枕草子。李義山が雜纂に基きたりといふ説あり。時代の程を思ふに、さる事ならむも知り難し。又偶合ならむもいかでか知らん。いとよう似たりといふ人もあれど、そは紫磨金身の譬へに、黄疸やみを引出づるが如し。其の色こそ似たらめ。尊さときたなさといと〳〵こよなし。

此の評にて盡せれば、筆を擱くことせり。

攻撃すれど、人なき陰にて、其の名を指して譏評する如き事をせず。物を羨み他を嫉む如き卑劣の心なきは、名の如く清き女性の筆とは見えたり。もしそれ「何は」「何々なるものは」の題下に、掲げ出でたる短語の中には、千歳不磨の名言あり。是れに就き此の趣向は、唐の李義山の著述なる雜纂に倣ひたるかといふ説あり。伴蒿蹊の譯文童喩に始めて云ひ出でたることにて、其の下巻に、

雜纂といへる書は、もと唐ノ李商隱にはじめたる滑稽に、宋ノ蘇東坡・王君玉等跡を追て著されたるにて、いと興あるもの也。枕ノ草子に何々なるものといふ所々は、此郎女博識の故に、此の唐宋の人々の著すを見られたりや。又自然にかくなれるや知らず。吻合せるを以て各其體をこゝにあぐ。

不二相稱一（枕草子にたとしへなきものの類なり）

病醫人　瘦人ノ相撲　肥大ノ新婦　先生不レ識レ字　老翁入二娼家一………

不レ得レ已（せんかたなきもの）

忍レ病飲レ酒　大暑遇レ會　拂レ意打二兒女一　流レ汗行レ禮………

不レ快レ意（こゝろゆかぬもの）

鈍刀切レ物　破帆ノ便風　樹陰遮レ景　築レ墻隔レ山　花時無レ酒………

殺風景

華間唱道　看レ花淚下　苔上敷レ席　斫二却垂楊一　花下曬レ褌　月下把レ火　妓筵說二俗事一　果園種レ菜　背レ山起レ樓　花架下養二雞鴨一　對レ花啜レ茶　煮レ鶴燒レ琴

以下數條を掲げて對照すれど、さまではとて略しつ。按ずるに商隱は義山と號しき。唐の文宗開成二年進士

もとすけがとに書くべくもあらず。されば元輔の同僚か。清少よりは先輩なりけんと見ゆれば、小馬命婦は清少の女にあらざること勿論にて、棟世が前妻の子にてもあらむか。清少は後妻にて其の女は棟世が晩年に生ませたる子なるべし。

此の草子の記事

此の草子は宮仕へ中に書き始め、多かる紙の數をかき盡くし置きたるを、一度左中將經房に持ち行かれ、久しくありて返りし頃には、皇后宮淑景舍の君相つぎてかくれさせ給ひ、其の身も宮中を退出して元の里亭に還りける程なりけむ。斯くて里居（サトキ）のつれ〴〵なるまゝに、舊稿を繰りひろげ見たる時、過ぎにし方を想ひ出でて、又更に聊かながら筆加へけむ所々もありげに見ゆ。其の記事は、大かた宮仕へ中わが身邊に絡はる事を、卒直に取り飾らず、時節の前後をも序（ツイ）でず走筆したるものにて、其の敏鋭詞才を思はしむる事、既に定評あれは言はず。

猶それよりも此の草子を讀む者は、皇后宮の清少を寵遇し給ふ事の異數なるに驚くべし。元來宮は御性行賢淑に文學の嗜好深く、萬に優れてやさしくおはせし狀（サマ）は、書中に歴々として見えさせ給へり。清少の才と雖も此の宮の賢に遇ひ奉らでは、いかで斯く發輝すべき。されば知己の恩に感激し、宮崩御の後は、已れも一向隱遁して世に出でず成りしならむ。既に無名草子の作者も、「宮のめでたく盛に時めかせ給ひし事ばかりを、身の毛も立つばかり書き出でて、關白殿うせ給ひ內の大臣流され給ひなどせし程の衰へをば、かけても言ひ出でぬ程の、いみじき心ばせなりけむ人」と評せしは當れり。

此の外は見聞感想をそこはかとなく書き付けし中に、例の口さがなきふし少からず。さりとて表面からは

著し。而して清少の返歌に「何事も答へぬ事とならひにし云々」とあれば、此の頃一切舊知の交際を絕ちて、ひたすら隱れゐたりとおぼし。續千載集雜中に、

　　老の後こもり居て侍りけるを、人の尋ねまうで來ければ、

　　　とふ人にありとはえこそいひ出でねわれやはわれとおどろかれつゝ」

今昔の感慨果して如何。なほ玉葉集十八雜の部五に「月を見て」と題して、

　　　月見れば老いぬる身こそ悲しけれ遂には山の端にやかくれむ

此の歌によれば、老年まで永らへゐて、彌陀の來迎を待つ外は、何の望みもなかりけむ。父の清輔は八十三歲の長壽にて卒せし事、歌仙傳に見ゆれば、清少も亦父に肖て、夫に別れし後も、久しく高齡を保ちて身まかりけむと思はる。(晚年誓願寺に詣でて尼になり庵室を結びて念佛の外他事なく往生を遂げぬるよし緣起にあるはこの草子より思ひ付きて作り出でしそら言ぞ)是れ予が見る所の清少の生涯なり。

まことや彼れが一女、新拾遺集に歌一首入りたる人ありき。前記棟世の系圖に、上東門院女房號二小馬命婦一。とあれど、小馬命婦は拾遺以下の勅撰集に、棟世の女として、よみ歌數首入り、また群書類聚第拾輯にそれが歌集を收めたり。其の中に、

　堀川の后のうせさせ給へりし五七日、七月七日にあたりければ、もとすけがいひおこせたる、尼になりたると聞きて、」

と詞書(脫字あるやうなれど)ありて歌をへり。堀川の后は圓融院の皇后にて、兼通太政大臣の御長女、天元二年六月二日崩御あり。元輔卒去の十年前、清少の宮仕へよりも十數年前なり。且は孫女として、祖父の諱を、

の假作物語より、小野小町の衰へなどをかけるついでに、清少の事にも及びしにて實錄ならず。曾ては花やかに勢望ありし彼れが、宮中をまかでて後、杳として消息の知られざるより、後の人さま〴〵に揣摩して、かゝる風說をも生じ、遂には中國四國邊に漂沒せし由をも傳ふるに至りしならむ。

按ふに男性らしき豪氣なる彼の女の果斷は、榮枯の運命を觀念し、未練らしく都には在らじ。誘(サソ)ふ水あらば往(イ)なんとて、いつしか棟世の妻となり、其の任國筑前攝津あたりに伴ひあるき、全然變りし家庭生活にや入りつらむ。而して晚年に、忘じ難き故鄕に還りて住みけむさまは、先輩たちも既に引ける如く、赤染衞門集に、

元輔が昔住みける家の側に、清少納言すみし頃、雪のいみじく降りて、隔ての垣もなくたふれて見わたされしに、

あともなく雪ふる里の荒れたるをいづれ昔の垣根とか見る

又公任卿集にも、

清少納言が月の輪にかへり住むころ、

ありつゝも雲間に住める月の輪を幾夜ながめてゆきかへるらむ

返事も聞えで程へて、うれふ(る脫カ)ことありて、御文も聞えで其のこといかにと聞えければ、

何事も答へぬことゝならひにし人としる〴〵問ふは誰れそも

など、舊知の人は音づれけむ。中にも公任卿の詞に「月の輪にかへり住む」とある書きぶりは、唯宮中より里亭に退出したる事にはあらで、他國より都ほとりの舊亭に還り、忍ひゐたるを聞きつけて言ひやりけむ事

なほ言はゞ此の實方の生母は、土御門左大臣雅信公の女にて、御堂道長公の正室倫子とは、姉妹の間なる事系圖に見ゆ。さればこそ清少納言集のはじめに、

清水に籠りたりしに、大殿(道長關白)のうへ(室倫子)のお(は脱カ)し所からいひおこせ給へりし、

思ひきや山のあなたに君をおきて獨みやこの月を見むとは」

かく中關白家とは不和なりし殿の北の方より、懷かしき音問を受くる程の間柄なりし也。中關白家に事故ありし頃、清少は同僚女房に疎外せられ「左の大い殿(道長)のかたの人しる筋にて」と讒せられたるも、實方は既に卒去の後なれど、かゝる事情のありたればにや。

偖何よりも清少が晩年、零落の狀を傳ふるこそ嘖々たれ「若殿原の彼れが破壞せる宅前を渡りて、「清少納言むげにこそ成りにけれ」と噂しあへるを聞きて、棧敷の簾をかゝげ、鬼形の如き法師顏を出して、「駿馬の骨を買はずやありし」と呼びかけたりといひ、又賴光か郎黨を遣して、清監(兄致信なり上の系圖に見ゆ)を討たしめたる時、清少も同宿せしが、法師に似たるを以て之をも殺さんとせしに、尼たる由を陳べて、忽ち肌もあらはに女體を示したりといふ(古事談卷二)話柄は、誰れ知らぬ者なし。然れども是等は皆彼の女の驕慢不遜なりしを惡む者の、想像を以てさもあるべかしく作爲したるに過ぎじ。又無名草子(群書類聚)に、

はか〴〵しきよすがも無かりけるにや。乳母子(メノトゴ)なりける者に具して、遙なるゐなかにまかりて住みけるに、青菜といふもの乾しに[illegible]に出づとて「昔の直衣姿こそ忘れね」と、ひとりごちけるを見侍りければ、あやしのきぬ着て、つゞりといふものの帽子にして侍りけるこそいと哀れなれ。

是れ亦方面をかへて誠しやかに、恰も實際を見たるやうに記したれど、此の書は鎌倉時代の物にて、源氏大和

りたらむ。則光は學もなく才もなく、其の人がら到底清少に匹敵たるべき者ならず。一度清少の機嫌を損じ、再び舊交を温めんの望みもはたさず、遂に遠江介てふ地方官となりて都を去りしに非ずや。源中將宣方に至りては、碌々として齊信によりて事をなしたるに過ぎざりき。凡そ是等の人々日夕女房の局に立ち寄りて、互に戯弄談笑する如きは、當時にありて尋常の事、何等疑ふべきにあらざりし也。

以上の人々には關係なくて、意外にも別に其の人あり。豈思ひきや。本草子中に一二ヶ所の外、名をだに出ださぬ實方の中將ならむとは。群書類聚の中なる清少納言集に、

宮の粟田殿におはします頃、實方の中將參り給ひて、大かたに物などの給ふにさし寄りて、忘れ給ひにけりな。と云へどいらへもせで、立ちにける卽ち、いひおくり給へる。

忘れずよ又かはらずよかはらやの下たく煙したむせびつゝ

かへし

賤の屋のしたゝく煙つれなくてたえざりけるも何によりそも」

實方朝臣集の詞書にも、「清少納言とて元輔がむすめ、宮に候ふとおほかたに懷かしく語らひて、人には知らせず、絕えぬ中にてあるに、云々」などあるにて明確なり。實方は藤左大臣師尹の孫にて、叔父の小一條大將濟時に養はれ、侍從右兵衛權佐より左近中將に至り、門地卑しからず、詠歌に秀逵の聞えありしが、行成に恨むる事ありて、殿上に於て彼れの冠を打ち落すほどの狼籍ありしにより、左遷せられて、長德元年九月陸奧守になされ、四年任地にて卒せし人なりき。草子中には二ヶ所ばかり其の名見ゆれど、清少とは直接款晤したる事も記さず。わざと知らぬ顏を作れるこそ、却つて其の實を語るものならめ。

右の元輔女を清少の事とせんか、夫とおぼしき理能の卒去は、清少が宮仕へ中の事にて、理能の年齢は詳ならねど、すべて六人の父たるを思へば(系圖に見ゆ)恐らくは四十歳以上五十歳近くなりけむ。之を彼の心變りたる男と見んに、此の時清少は旣に三人の男子の母たり。されども清少が初めて宮仕へせし程の初々しさ、又其の心變りたる男に遣しける歌の詞などを見れば、迚も三人の子の母と思はれず。此の時清少の年齢を假りに廿三四歳とせば、理能との年配少くも廿餘年の隔りならむ。清少の忘られたる時、理能は旣に四十餘歳の初老のいたらに「忍びあへぬは涙なりけり」と、愛惜するに及ばざるべきか。且當時の風、後世の婚姻法と異なりて、生兒は大かた母の自家に在り、妻が生兒を三人まで夫家にのこして離婚する如き事あるべからず。(夫婦離別の時男兒の父につき女兒の母に從ふ制規は武家の法にて貞永式目に定められたるもの也)かた〴〵按ふに右の清輔女は清少にはあらで、其の姉などにてやありけむ。但し清原系圖に清少の外女子を載せざるは、悉く略せるにて、男系を記すが本なれば、女子は高名の清少の外、一人も記載せざるにて察すべし。

さて又清少が宮仕へ中は、之を圍繞せし風流才子のいと多かりし中に、頭ノ中將齊信・頭ノ辨行成・源中將宣方・修理ノ亮則房は特に親しく、日夕互に狎昵したる事草子に見ゆ。さらでも清少の才辯放逸、女子として細謹を缺きたるより、後世の學者、男女七歳同席せずの敎訓を守れる人士よりは、彼の風流搢紳等と、密事ありしやうに思はれたり。されど是れも仔細に檢察すれば、案外淡泊なる交際なりしが如し。但し齊信の風姿、行成の才器などに就いて、清少は極めて賞讃すれども、齊信の懸想せるをば言よくのがれて、彼れをして「頼もしげなのことや」と斷念せしめ、行成は清少と意氣投合したる人と見ゆるが、是れも宮中に出入し面接する程度に過ぎざりけむ。則光の清少と兄妹と呼ばれしは一時の戲れか、或は從兄妹などの、親類關係にや因

┌戒秀山
│　歌人
└女子　歌人號清少納言定子皇后女房也
　　　攝津守藤原棟世妻

かく見えて他の一篇の方には、致信の下に「太宰少監號＝清監＝」と小書し、女子とある下に清少納言云々、攝津守藤原棟世妻と小書せる事前に同じ。之に據れば清少は右の棟世に嫁して一女を生みたるにや。尋じて棟世の家系官歴を尋ぬるに、尊卑分脈卷三によれば、棟世は南家の藤氏にて、正四位下右中辨藏人筑前山城攝津等の國守たりし人、男子一人女子一人あり。女子は上東門院女房、號＝小馬命婦＝とあり。されど是れは、清少の生みたる女にあらざるべし。（後に辨するを見よ）

然るに又元輔の女壻といはるゝ者別に一人あり。北家の藤氏長良中納言の玄孫理能是れなり。同分脈卷一に、

長良……倫寧（トモヤス）貞元二年月日卒
　　　　　　　　歌人
　　└理能（マサタフ）從五位上肥前守
　　　　母主殿頭春道女
　　　　長德元八廿五卒
　　　├爲善　母肥後守
　　　│　　　清原元輔女
　　　├爲季　母同
　　　└爲祐　母同爲善
（この外異母兄妹三人の名あり略す）

元輔は永祚二年（正曆元年と改元）六月卒去の由歌仙三十六人傳に見ゆ。さて淸女いまだ里亭にありし時、通ひ來し男のありける樣なるは、詞花集第八に

心かはりたる男にいひつかはしける」として

忘らるゝ身はことわりと知りながら忍びあへぬは涙なりけり

の一首を載す。何ぞそれ女々しく、後年の意氣には似ざる。蓋し是れ淸少の未だ、なとめきびせし程にて、「宮に始めて參りたる頃、物のつゝましき事數知らず、涙も落ちぬべければ」と、草子に自記し、伊周公になぶられて、いと初々（ウヒヽく）しかりし樣に見ゆるにも、年の若かりし事想ひやらるべし。其の頃何人か賴む男に忘られ、父にも別れしほどにて、宮仕へに出でたちしならむ。

皇后宮淑景舍うち續きかくれ給ひて後、淸少のわが里亭に還りしは、年のほど多くとも三十三四歳にには過ぎざるべし。其の後他姓（ヒト）に嫁きて女子一人を設けたりし事は、勅撰作者部類に淸少納言の女といふが見え、其の歌は新拾遺集十七釋敎の部に、法華經序品を題にて、「白妙の光にまがふ色みてやひもとく花をかれて知るらむ」とあるにても知るべし。然らば此の父なる人は誰れぞ。續群書類聚系圖の部に淸原氏系圖七篇を並べ載す。其の中の一篇に、

天武天皇—舍人親王—小倉王—夏野（右大臣正三位兼右近大將　本ノ名繁野始賜淸原姓）
　—海雄—房則—業恒—深養父（古今作者）—春見
　　—元輔—致信

へと侍る是れ也。然るに榮花物語に、三條院の女御淑景舍（道隆公女定子皇后御妹）の御もとに宮仕へせし由も見えたり。愚按ずるに淑景舍の御事は所々に出でたれども、此御局に宮仕へせし事は見え侍らず。但し此草子にあらはせる人々の官などを勘へ侍れば、一條院の長德年中長保元年二年などの事どもにて、其後の事見えざる也、彼の皇后宮は長保二年十二月十五日に崩れさせ給へり。淑景舍は三條院の東宮におはしましける程に參り給ひて、四年ばかりや宮仕へし給へりけむ。さて長保四年八月廿日にかくれ給へれど、猶皇后宮に二年いきのこり給ひければ、彼の皇后宮崩れ給ひて後、はらからの御方なれば、清少納言も參り給ひたるにや。

一條院の御世の始めに、道隆公關白し給ひ、定子皇后宮に立ち給ひて御威光もめでたかりしに、清少納言も彼の皇后宮に召しまつはされて、上﨟の次にてまじらひ、其の才いみじかりければ、內侍になすべき沙汰などの事、此草子に見えたり。然るに中ノ關白（道隆）かくれさせ給ひて、御兄弟ながら御中よからざりし故に、御堂殿（道長）關白し給ひ、上東門院（道長公の長女）入內ありて中宮に立たせ給ひなどして、後には伊周公隆家卿など遠流の事ありき。皇后宮は女みこ男みこなど生ませ給ひけれど、程なくかくれさせ給ひ、御妹の淑景舍もうちつゞきてうせ給へれば、彼の御方の人は時を失ひて、成り出づべきやうもなくなり行きしに、此の草子にも其の昔を慕ふ思ひを述べて、此の皇后の御威勢ありし程の事を所々に書きあらはし、我が身の世にほめはやされし事ども數多かゝれ侍りしにや。

これにて清少が宮仕へ中の大要は知るべし。猶其の前後の事どもに就いて繹ね見むに、清女の宮仕へしそめしは正暦四五年の間の事とおぼしく、中宮は御年十七八歲、清女は廿三四歲なるべきか。是れより先、父の

次に又「さうし」の字に就いても、草子・雙子・冊子などかける、いづれが正しきといふ議あり。春海翁題號考の末に云く、契沖師いへらく、草子は草案の意か。雙紙は俗の略推してかける字なるべし　或る書宗の中古の先達のかけるものに、冊子とありて、其人名は忘れたり。サクシを相通はしていへる也。是れ正字かといへり。此說一わたりは理りあり。いかにも契沖のいへる如く、冊子ならば漢字にも常に目馴れたる語にて穩なれど、古人のかきし物に、まさしく然書きしものを見ねば、濫りに從ひ難し。又雙紙は略推してかける字なるべしといへるは、漢籍になければ然思ふならめど、斯く音もていふ語の、漢字にはなくて、我が國にて出來し名目の熟字も、裝束調度などの上に多くあれば、是も其類にて、古くより雙紙とかきしにもあらむか。惠心僧都の枕雙紙は、漢文にてかけるものにて、後人の心の儘に字を書き改めしものとも見えぬが、まさしく雙紙といふ字を用ひたり。草子を打ち開きたる形に、紙の二ひら雙びてあるものなれば、雙紙ともいひけむかし。河海抄・花鳥餘情・源語秘訣・徒然草・仁和寺書籍目錄など、皆草子とのみあれば、專ら草子とかきしに據りてあるべし。

撰者の生涯

春曙抄同卷の首に

枕草子は清少納言の筆作なり。少納言は清原元輔の女なれば、其姓を用ひて清少納言といへり。父の元輔は後撰集の撰者にて、梨壺の五人のひとりなり。玄旨法印の說に、清少納言は一條院天皇の皇后の女房と云々。此皇后と申し侍るは、中ノ關白道隆公の御むすめ定子と申し侍りし、此草子の所々に宮の御ま

る物なれば、こと起す便りに頭に添ふる詞を、枕ことばと云へる也。さて「こと〳〵なるもの」などいふ類ひは、うちまかせてそれをもて、唯枕とのみいはん事、ことわり穏ならず。されば「枕にこそし侍らめ」といへるよりの名とせん方おだやかなるべしと云々。(以上春海説)

今一つは伊勢貞丈翁の安齋隨筆に云く、榮花物語若ばえの卷に、御前の方に西の對にて見わたし給ふに、衣のつま重なりて、打ち出だしたるは、色々の錦を枕さうしに作りて打ち置きたらむやう也。重なりたるほど一尺餘りばかり見えたり云々。此の文によりて見れば、枕にせん料に、色々の錦を幾らも重ねて、冊子の如く綴ぢたるを枕さうしといふにや。清少納言の草子も、色々樣々の事を書き重ねたる故にや」と云へれど、肯がひ難し。是は横長に綴ぢたる冊子の、枕の形に似たる製り(ツク)ざまより、さる名をも呼びけめど、清少納言のは、なほ跋文の「枕にこそは」といへる詞に基きけむこと、論なかるべし。

然るに春海翁の、枕といふ詞は身に近く馴らし、口にいひ馴らすからにといへるはさることなれど、予また蛇足を添へんに、元來枕は閨中に置きて、さうなく出だす物ならねば、始めは秘密のことに言ひ、一轉しては秘藏する義にもなれるにあらざるか。惠心僧都の漢文の著書に、枕雙紙といへるがありて、其の跋文に書置二座右一夜置二枕上一とかける由なるが、是れはた身邊を離さず、秘藏する意にて付けたる名ならずや。されば、清少の詞も亦、宮より册子を賜はるならば、いとも秘藏の物にせんと、啓したりと見んは、一層適切にぞ聞ゆべき。また源氏物語桐壺の帝の、長恨歌を枕言にせさせ給ふとあるも、唯に口馴らし給ふ事ならば、口ずさみ給ふとこそ書くべけれ。殊更に枕言とかけるは、猶他人に知られぬやう、只一人秘密に彼の詩を低唱し給ふ由ならずや。又能因の歌枕といふ書も、今ならば歌の秘訣とか秘要とかいはん程の名なるべし。

比校せるに從ひ、聊か他の訂正をも參取したり。又註釋の春抄にて了解せらるゝ限りは之を揭出し、更に諸家の說の精しく正しきを註疏せり。かくして古人の勞功の顯はるべきやうを勉めたるなり。

枕ノ草子題號の說

此の草子は清少納言といへるが本名にて、枕草子とは後人の稱へそめたるならむといふ說あり。げにも順德天皇の禁秘御抄・八雲御抄には、清少納言記と書き給へれど、又大外記業忠の本朝書籍目錄（伏見天皇の永仁頃）徒然草・河海抄（後土御門天皇の文正頃）等に枕草子と見えたれば、强ち後世の稱とも言ひがたし。按ずるに始は清少納言枕草子と必ず名をかけて呼びつらむ。書名に作者の名をかけていふ例は、清輔袋草子・俊賴无名抄・長明無名抄などあるにて思ふべし。清少納言記また唯清少納言とあるは略稱ならずや。

村田春海の題號考に（上略）枕草子と名づけたる意は、春曙抄に二說を擧げたり。其一つは此草子に「ことごとなるもの」「めでたきもの」など枕詞をおき、それ〳〵と書きしまゝに名づけたるかと云へり。又一つは「枕にこそはし侍らめ」とて申しうけられたる物に、書きしまゝに名づけたるかといへり。（本草子最終の文中なる「枕にこそはし侍らめ」と申して皇后宮より賜はりし事をいふ也）今考ふるに、枕といふ詞を古人のつかひたる二つあり。源氏物語に常の長恨歌の心を朝夕枕言にし給ふといひ、又能因法師が歌に用ふべきことを書き集めたる物を、歌枕と名づけしも同じ心にて、枕に身に近く常に馴れ用ふるものなるより、常に口にいひ出づるを枕言といひ、常に歌に用ふべきことなれば、歌枕ともいへる也。漢籍に物を枕籍にすなどいふと同じき也。又事起さんとて上に冠らする詞を、枕詞といへるとは意ことなり。こは枕は人の寢ぬる時、頭にそふ

加賀金澤の人武藤元信翁の著にして、最初東洋學藝雜誌の紙上に發表せしを、明治三十九年更に一小册子に綴りて、同人間に寄贈せり。其の緒言によれば、十三年の間に十九種の異本を得て、反覆對校したる由にて、春曙本の誤脱の字句を摘出し、諸本に校べて改訂せり。刻苦勉勵察するに餘りあり。所々に從來難解とせし文句を抄釋せるにも前人未發の言あるは敬憶すべし。

十一、枕草子通釋　洋本二卷

本書も亦武藤氏の著にして、其の緒言によれば、先づ本文の謬誤を正して、定本を作らざれば、解釋の正鵠を得ん事難しとて、異本を索め、十九種を得て、十三年に渉り考異を編み、其の後五年の間に考へおきし事どもを記し輯めて、此の通釋を完成せる由なり。總體簡略なれども前人未發の考説を載せ、本文の整頓せるは類書に超逸せり。されば此の後出でたる書には、本文も解説もこの通釋に負ふ所多きが、如し。唯惜むらくは、此の書の癖として、春曙抄の本文にて通ずる所をも、他本に異同あれば悉く改めて、他系統の別本どもを、聊か混合したる嫌ひなきにあらざる事なり。

此の外群書類聚に收めたる枕草子、即ち後光嚴院宸翰本と稱する書をも參照せしかど、是は章段の序次を始め、底本としたる春曙抄とはいたく相違して、他系統の別本なれば、ある部分を比校するに止めて、全部に及ばず、又昭和二年に前田侯爵家襲藏の異本、鎌倉中期の書寫と認めらるゝを寫眞版にして複製し、學界に提出せられしが、幸に本文の不審なる點に見合せて、疑を解きたる所少からず。それ亦上欄に追記しおきたり。

要するに本集註は、世上に流布ひろき春曙抄に基つきて、本文は專ら、千蔭翁の古本及び一本に據りて

後に眞顧の門人鈴木弘恭もこの書を借り寫し、聊か補筆する所ありて、増補校訂枕草子春曙抄と題し、活字和本にして出版せり。

七、前田夏蔭翁校正補註本

此の書は翁の師濱臣の本によりて校訂し、春曙の註及び頭註の誤りをも正し、自己の考說を随分に多く書き入れたる自筆本なりき。舊華族女學校（今の女子學習院）の藏本なりしを、予同校に奉職中寫し取りおきたり。然るに惜むべし、同校失火の時圖書館全部燒亡して、原本も亦灰燼となりたれば、恐らくは他に流傳せざるべし。

八、岩崎美隆翁補註本

是れ亦中村秋香翁の藏本を借り來りて寫しとりぬ。奥書に「此一部河内國河内郡花園の里人故岩崎美隆以二眞本一書入畢。文久二壬戌年閏八月おなじ里人荒木美陸」とあり。岩崎氏は村田春門の門人と聞く。例の春曙の說を指摘し、補ひ說ける所甚多く、發明の考按もあり。後學を教ふる所いと大なり。曾て佐々木弘綱翁も、標註枕草子讀本と題する木版五冊の書を著して、其の中に美隆の說を抄記したり。是れより次第に美隆ぬしの考說、世に紹介せられたるが如し。

九、枕草子存疑　寫本一冊

岡本保孝翁の著。自筆初稿本を藏す。春曙抄の誤謬を拔き出だし、抄本旁註本一本を以て訂正し、所々に辭句の解をもいさゝか添へたり。

十、枕草子考異　活字本一冊

の人なりしかば、自然と其の著述も世にもてはやされ、後にも流布したるならむ。茲になかしき事は、後世岡西氏の勞註を、枕草子拾穗抄と標題して、坊間に鬻ぎし癡人あり。拾穗軒は北村氏の別號にて、萬葉拾穗抄などいふ著書もありしかば、狡猾なる書估の、季吟の著書のやうに世間を欺き、利を得んと計りしならむ。又以て季吟法印の著の行はれしを察すべし。

四、加藤千蔭翁校訂素本　刊本七冊

本書奥付に、慶安二暦初夏上旬二條通澤田庄左衛門刊版とあり。是れに千蔭翁自筆に、朱と墨とを以て古本、活字本、異本、屋代弘賢校本を對校したるものにて、中に父枝直翁の筆蹟と見ゆる所もあり。然れども本書は、第三卷までの校合甚だ精しく、其の以下粗なり。

三、同翁校正補註本

本書は千蔭翁一人の筆跡にて、藍と朱とを以て家藏の古本別本を春曙抄に對校したるもの。全部に亘りていと精覈を極めたり。且春曙の註の誤れるを訂し、自説をも書き入れたる所も見ゆ。以上の二書は、翁の玄孫直種より讓り受けたる所なり。之によりて予は益を請くる事甚大なりき。近年武藤氏の考異に、古本とて春曙抄の本文を改訂せし所は、悉皆千蔭の校本に同じく、而も千蔭校本の方一層精しき所あり。其の所々は拙著の中に明示しおけり。

六、清水濱臣翁補註本

黑川眞賴翁所藏の本を借りて寫しぬ。奥書に「文化五戊辰年七月以二清水濱臣藏本一寫レ之華」とあるは、何人の筆なるか。署名花押とてもなければ、其の人を詳にせず。間々黑川春村翁の筆跡も見うけられたり。

再昌院北村季吟法印の著なり。自撰の跋文に、延寶二年七月十七日……幸遇二此時一令三工彫レ梓流二傳于市井一也云々とあれば、此の年の上梓と知らる。前記盤齋の抄の發行に後るゝ事わづかに二ケ月なり。季吟も松永貞德の門人にして、此の書述作の頃は、京師山伏町に住したり。盤齋の抄と殆んど同時に、同じ京都にて出版せしが互に相知らざりしやうなり。盤齋は當年四十七歲（或は五十四とも云）季吟は五十一歲なれば、年齡も亦多くは隔たらず。而も同門たりし由傳ふれど、平素親密の交際なかりしにや。

三、枕草子旁註　　刊本六册

本書は俳師西山宗因の門人一時軒岡西惟中の撰なり。天和元年の自序あれば、春曙抄より八年後れたり。されども抄及び春曙抄をば、全く見ざるものゝ如し。註釋のやうは、本文の左旁に簡單なる註あり。別に章段の次にも大要の評釋添ひたり。本文は春曙抄より遙によろし。善本に據りたる故ならむ。又卷頭に門廊輿車服具の圖を出だしたるは、前二書と異なる所なり。

右三書の中にて註釋は春曙抄やゝ委しく懇切なれども、本文は他の二書に及ばず。善本を得られず、誤脫多き本を底本とせられしかば、其のため註解も徒勞に終りし所多きは遺憾なり。斯く前後に類書の出でたるにも拘らず、唯春曙抄のみ當時後世に弘まり、他の二書は其の名を知る者稀にして、刊本なるだに容易に索め得難き程なるは、著述にも亦榮枯あるものゝ也けり。

季吟は春曙抄を開版せし延寶二年二月、源氏物語湖月抄を書きをへて、毘沙門堂御門主より、江戶將軍（六代家綱）の覽に供せし事、自撰の續玉津島ノ記に見え、後また元祿二年に至り、（五代將軍綱吉の時）幕府の歌學所に徵され、爾來十七年間江戶に居住し、法印に叙せられ、八十八歲まで長壽を保ちし幸運

先哲の校訂及び補註書

一、清少納言枕草子抄　刊本十五冊

本書の例言めくものに、「此草紙差異まち〳〵にして傳寫の誤多し。故に今數多の古本を集めて吟味し、義ヽ中傳來正しき本をもと〻し、其餘の古本及び印本等を以て校合せしめ侍る者也。」とて安貞二年毫及愚翁の奥書及び、寛正二年の奥書ある二本、その外一永正弘治の年號斗有ル本數レ有レ之、名署なき故に出所未レ詳。或又一兩部傳寫の本あり。或ハ又舊古の印本あり。これらの數本に依て校合吟味せしめ、正本とする所也」と記せり。

かくて奥付に延寶二年五月日。油小路下ル立賣下る町田中權兵衛藏版とあれば、京都にて出版せしものと見ゆれど、此の外に序跋の文もなければ、著者を詳にせず。然るに誰れいつの世に言ひ初めけむ、加藤盤齋の著述とし、別に萬歳抄と稱して後の書には引用せり。

盤齋は攝州の人にて、和歌を細川玄旨に、俳諧連歌を松永貞德に學ぶ。叡山に遊びて台教に精しく、八幡の瀧本坊信海に其の弟なり。盤齋恒に定居なく、旅泊を家とし風月を生涯として、延寶二年八月十一日尾州に終る。享年四十有九と日本古今徃生傳に見えたりと云ふ。

二、枕草子春曙抄　刊本十二冊

序に云、「右と同名の書にて伊勢貞丈の著と稱せる一小冊子あり。妄誕無稽人惑はしの僞書なり。安齋翁珍らしき書と思ひ寫しとりて、末に「伊勢平藏貞丈書」と記しおけるを、後人の速斷して翁の著述と披露せしなるべし。

是は別に其の筋の事を記せる拙著あれば、委曲の事はそれに讓り、本書には唯概要を示すに止めつ。參考圖畫はた別著に出だせるは省略せり。實は此の際、原稿の到らざるを修正すべきなるに、老憊氣根薄れ載筆に懶くなりて、毫も刪定する事なく、舊記のまゝを公にせしは、深く慙悔する所にして、誤解謬說少からじ。一に識者の是正を請ふ。さて此の書の賴りて以て益を得たる先哲の校本補註等は、悉く次に記して其の本據を明かになしおきたり。

昭和五年十一月

關根正直

親しく聞きて、いとゆかしく、世に出でん時をいつしかと待ちたりしが、四十三年に至り、通釋と名づけて發行せられぬ。此の書本文の校訂は周到を極む　辭句の註解は案外簡略なれども緊要の點は逸せず。珍らしき考說も見ゆ。爾來この書に據りて一層簡易に、且心利きたる著述も少からず世に出でたれば、拙著の如きは今さら公にすべくもあらずと、一時全く篋底に籠めおきたり。

　然るに近來捷徑便利の新著多く出で來るに隨つて、自然と先哲研鑽の功も埋沒せむとする傾向あり。元來予の本志は、往昔異本古寫本の比校すべきも發見せられず、註釋に參稽すべき書籍の、容易に得難かりし時代として、先哲の勵精刻苦は一方ならざりしを察し、後學の益を受くる恩をも思ひ、又其の創見卓說の、いまだ世に知られざるもあるを惜みて、其の功勞を空しくするに忍びず。いかで其の苦心の痕を後世に傳へむと企てたりしなれば、今にして之を遺憾とし、遂に初志に復りて、拙著の發行を敢てする事となしたり。

　されば春曙抄の註を基として標簽の下に掲げ、又他諸家の考說の精きしを取りて補正し、初學の惑ふべきを辨析し、聊か愚按をも言ひ試みたるは、皆補簽の下に記述しおけり。又宮廷の記事多き此の草子の如きは、有職故實に關する文辭少からず。

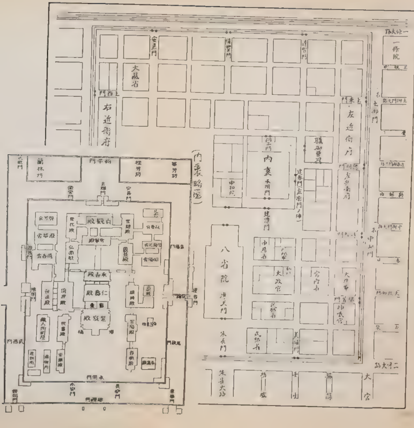
枕草子集註

例言

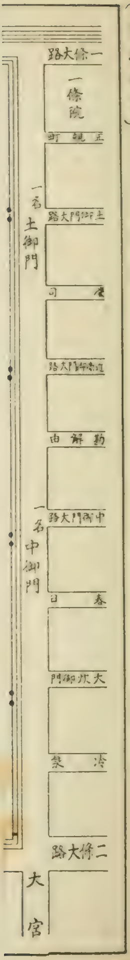
予の若かりし頃、坊間に流布する枕ノ草子の版本は專ら春曙抄のみなりしが、該書は本文に誤脫多かるやう覺えて、解し難き所少からざりき。仍て同一類書を涉歷して、これが校訂と註解とを爲さむと志し、諸先哲の校勘解說版本寫本數部を參照し、其の說の當否を斷定し、聊か鄙考をも加へて、枕草子集註と題したる拙著を、おほかた脫稿したりしは、明治三十二年の事なりき。

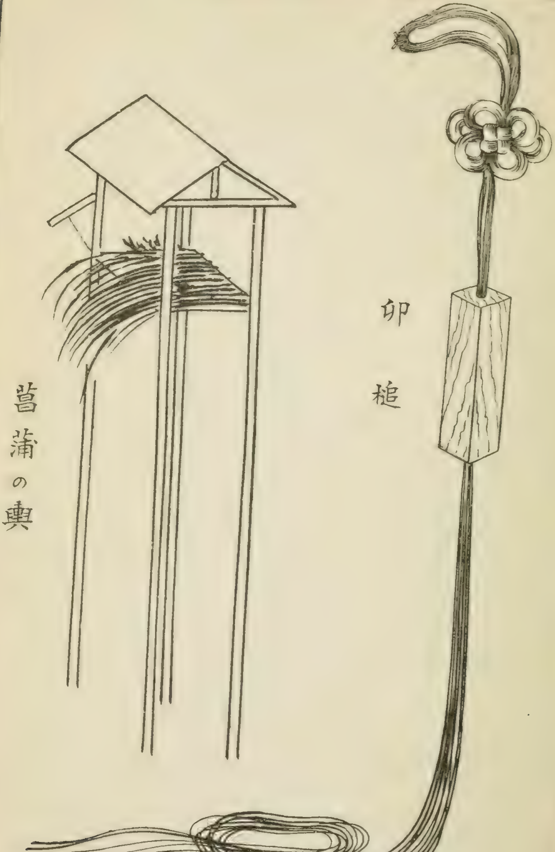
其のをりしも知人松平氏の詳解といふ書成り、愚說をも取り入れられたれば、之に競爭がましきを避け、且は其の頃公務の繁忙を增したるにより、かた〲拙著の發行は急ぎもせず、唯暇ある時々蕪稿を取り出して、等閑に筆削しつゝ數年を經過したりしに、明治三十九年、加賀の人武藤元信翁、東洋學藝雜誌に、枕草子考異を揭載せり。こは翁が多年に亙り數本を對校せし結果なりとて、苦心の程おもはれしに、續いて此の草子の註釋をも公にせんの豫定なる由、翁の交友たりし中村秋香翁より

（宮城略図）



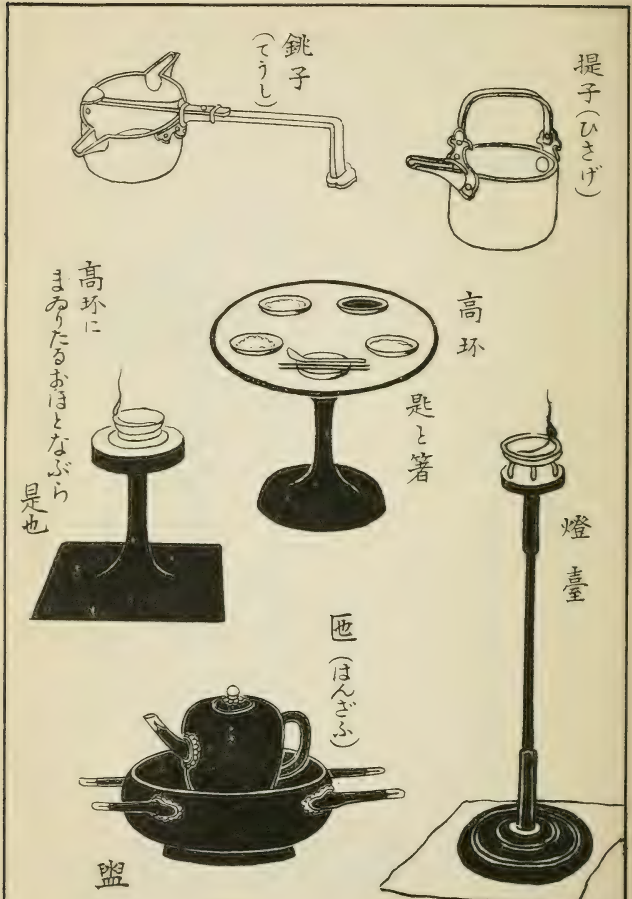
（宮城略圖）


一條大路
一條院
正親町
一名土御門
土御門大路
鷹司
近衛御門大路
勘解由
一名中御門
中御門大路
春日
大炊御門
冷泉
二條大路
大宮

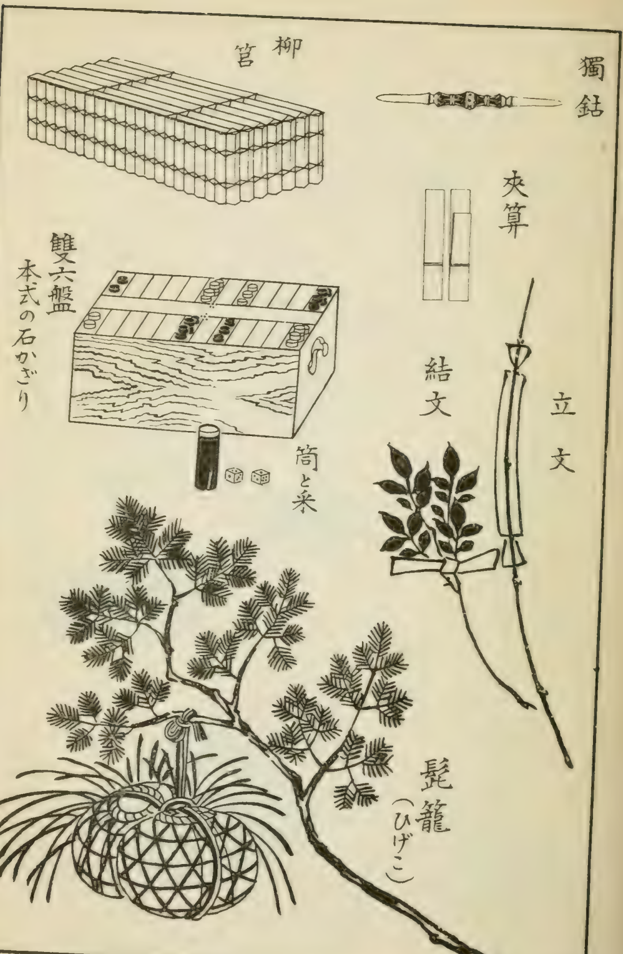


卯槌

菖蒲の輿



提子（ひさげ）
銚子（てうし）
高坏
匙と箸
燈臺
打敷
高坏にまゐりたるおほとなぶら是也
匜（はんざふ）
盥



獨鈷
柳筥
夾算
雙六盤
本式の石かざり
筒と采
立文
結文
髭籠
（ひげこ）



年中行事繪巻より

内宴の舞妓なり

五節の舞亦これに準じて知るべし

蔽髻(ひたひ)に釵子(かんざし)さしたる様

また領巾(ひれ)かけたる風をも見らルよ





年中行事繪巻より

立烏帽子に狩衣きたり
紐ときてゐるてい



随身前駆
細纓の冠においかけ
闕腋の袍負ひたるは壺胡簶なり




直衣姿
指貫のくゝり緒
ながくひきたり


唐衣ぬきたれ
大海の摺裳裙帯
ひきたる體

束帯
(日の装束)



石帯して下襲の裾ひきちらしたり

舞人



冠に挿頭をさし青摺闕腋の袍竹の文黒半臂同緒を垂る

東京

文學博士關根正直著

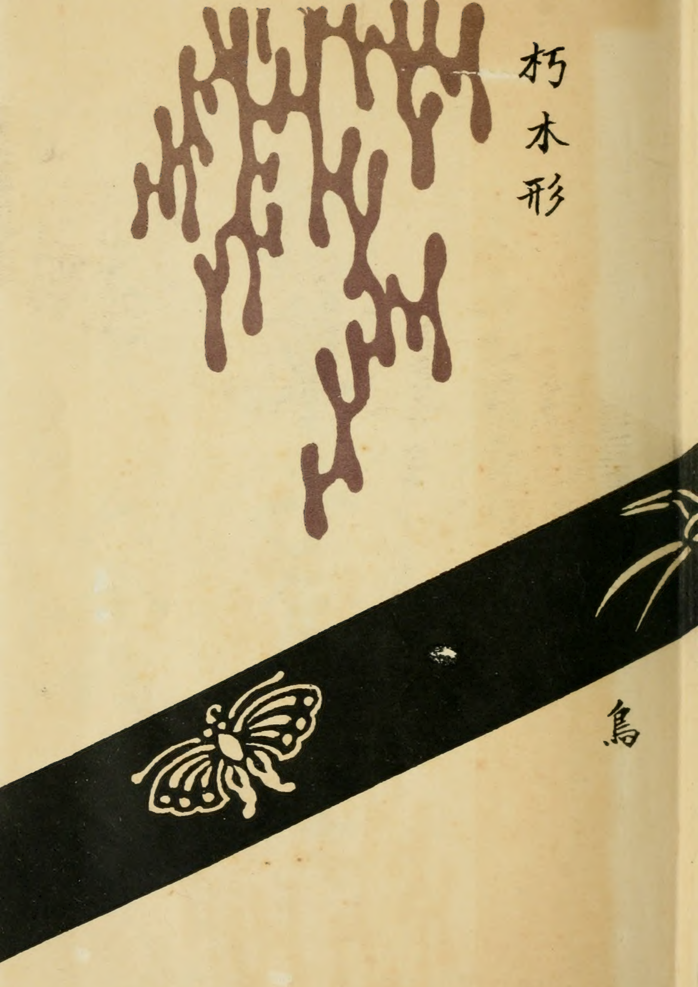
枕草子集註

東京　六合館發行

文學博士關根正直著

枕草子集注

東京 六合館發行



朽木形

鳥